北埋調報266

森町（もりまち）

石倉1遺跡（2）（いしくら　い　せき）

—北海道縦貫自動車道（七飯～長万部）埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成21年度

財団法人　北海道埋蔵文化財センター

もり　まち
森　町

いし　くら　い　せき
石倉1遺跡（2）

—北海道縦貫自動車道（七飯～長万部）埋蔵文化財発掘調査報告書—

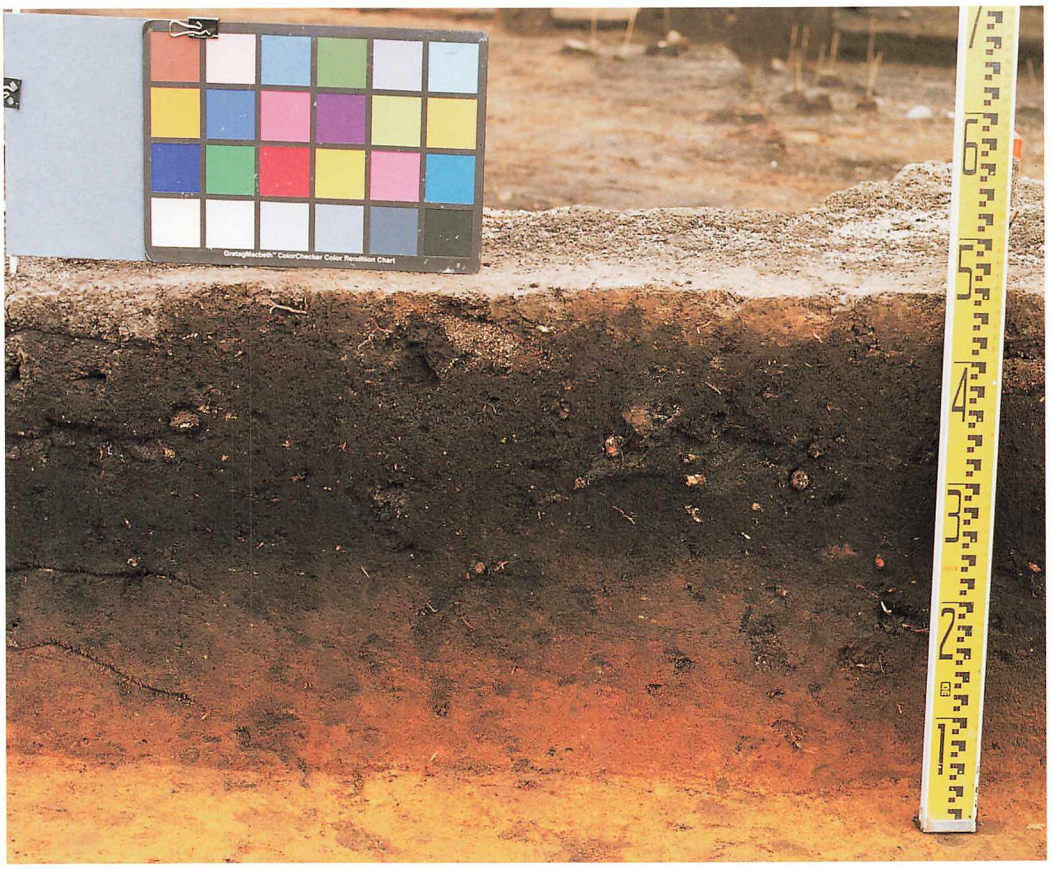
平成21年度

財団法人　北海道埋蔵文化財センター

石倉 1 遺跡付近空中写真

口絵 2

現場近景



基本土層（B47区）

水場遺構出土土器

Ⅳ群a類土器

口絵 4

赤彩切断壺型土器

赤彩土器・土製品

例　　言

1．本書は東日本高速道路株式会社北海道支社函館工事事務所が行う北海道縦貫自動車道（七飯～長万部）建設工事に伴い、財団法人北海道埋蔵文化財センターが平成20年度に実施した森町石倉１遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。調査は平成16年に続き、第４次にあたる。今回の報告書をもって石倉１遺跡の調査は終了した。

2．調査および報告書の作成は第２調査部第１調査課が行った。

3．本書の作成にあたっては遺構を立田　理・福井淳一・大泰司統が、現地での遺物の一次整理を遠藤香澄が、現地での写真撮影は主に中山昭大が行った。二次整理は土器を大泰司が行い、遠藤が引き継いだ。石器は剥片石器を福井、石斧関連石器・礫石器を立田が担当した。素図作成は各遺構担当者が行い、最終的な図面作成は中山が担当した。遺物写真の撮影および写真図版作成は中山が担当し、全体の編集は遠藤が行った。各章・各節の執筆担当は文末に記してある。

4．放射性炭素による年代測定、炭化種実の同定および動物遺存体の同定については株式会社パレオ・ラボに依頼した。

5．出土資料は、調査終了後、森町教育委員会で保管する。

6．調査にあたっては下記の機関および人々のご協力、ご助言をいただいた（順不同、敬称略）
森町教育委員会　高橋　毅・本山志郎、森町立濁川小学校、森・鷲ノ木ストーンサークル研究会　夏坂幸彦・安井　努、七飯町歴史館　山田　央、七飯町教育委員会　石塚　彰・田村敏郎・小野寺佳子　八雲町教育委員会　三浦孝一・柴田信一・佐橋赴未、厚沢部町教育委員会　石井淳平、今金町役場　寺崎康史、今金町教育委員会　宮本雅通、松前町教育委員会　前田正憲・佐藤雄生・平山禾都、松前城資料館　久保　泰、上ノ国町教育委員会　斉藤邦典・塚田直哉、木古内町教育委員会　木元　豊、乙部町教育委員会　藤田　巧、北斗市教育委員会　森　靖裕、厚真町教育委員会　乾　哲也、札幌市埋蔵文化財センター　仙庭伸久・秋山洋司・石井　淳・柏木大延、苫小牧市博物館　赤石慎三、伊達市噴火湾文化研究所　大島直行・青野友哉、室蘭市教育委員会　松田宏介、千歳市教育委員会　高橋　理、函館市立中央図書館　長谷部一弘、市立函館博物館　田原良信・佐藤智雄、函館市教育委員会　阿部千春・福田裕二・野村祐一・吉田　力・時田太一郎、函館市北方民族資料館　小林　貢、特定非営利活動法人函館市埋蔵文化財調査事業団　佐藤一夫・松崎水穂・荻野幸男・坪井睦美、利尻富士町教育委員会　山谷文人、洞爺湖町教育委員会　角田隆志、美幌博物館　八重柏　誠、北海道開拓記念館　山田悟郎・小林幸雄・右代啓視・添田雄二・鈴木　琢、青森県教育庁　斉藤慶吏、青森県埋蔵文化財調査センター　神　康夫・佐藤真弓・浅田智晴、遊佐町教育委員会　大川貴弘、宮古市教育委員会　高橋賢太郎、酒田市立資料館　小野　忍、流山市教育委員会　小川勝和、㈶岩手県文化振興事業団　藤田　祐、秋田県教育庁　五十嵐一治・新開和広、東京大学埋蔵文化財調査室　阿部常樹、㈶静岡県埋蔵文化財調査研究所　蔵本俊明、㈶愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター　川添和暁、国立歴史民俗博物館　西本豊弘、山形県立博物館　佐藤正俊、㈶致道博物館　酒井英一、東京大学常呂実習施設　熊木敏朗、札幌国際大学　長崎潤一、秋田大学工学資源学部附属鉱業博物館　千田恵吾、岡山理科大学　小林博昭、東北芸術工科大学　安齋正人、弘前学院大学　鈴木克彦、日本大学　小元久仁夫、名古屋大学博物館　新美倫子、総合地球環境学研究所　石丸恵理子、文化庁　水之江和同、函館の歴史的風土を守る会　落合治彦、北海道考古学研究所　横山英介、㈱パレオ・ラボ　中村賢太郎、アースサイエンス株式会社　加藤孝幸、札幌市　宇田川洋・大沼忠春・菊池俊彦・野村　崇、函館市　菅野文二、富良野市　山城日登美、滝沢村　名久井文明、千葉市　樋泉岳二、東京都　金子浩昌

記号等の説明

1．遺構については、本文中および図、表中では次の記号を使って確認順に番号を付けた。

IH：住居跡　IP：土坑　SP：小ピット　FC：剥片集中

IS：集石　IF：焼土　HP：住居にともなう柱穴・土坑　HF：住居にともなう焼土

なお、番号は平成14・15・16年度の調査（北埋調報247）から引き次いでいる。本報告では次の番号からとなる。住居跡：IH－5、土坑：IP－20、集石：IS－4

2．掲載した実測図の縮尺は原則として以下のとおりである。変則的なものについては個々にスケールを付けてある。

遺構：1：40、遺物出土状況：1：20、基本土層：1：40

復元土器：1：3、土器拓本：1：3、土製品・石製品：1：2

剥片石器：1：2、礫石器：1：3

3．遺構の規模については以下の要領で示した。なお、一部破壊されているものについては現存長を（　）で示した。

住居跡・土坑

確認面での長軸長／床面・底面での長軸長×確認面での短軸長／床面・底面での短軸長×最大深さ（単位m）

水場遺構・剥片集中・焼土・集石

確認面での長軸長×短軸長（単位m）

4．土層の表記は，基本土層をローマ数字（Ⅰ、Ⅱ）、遺構覆土をアラビア数字（1・2）で示した。

5．土層の観察には『新版標準土色帖』（小川・竹原2004）、『土壌調査ハンドブックス改訂版』（日本ペトロジー学会編2000）を引用した。

6．火山灰は『北海道の火山灰』（北海道火山灰命名委員会1982）に準じ、以下の略号を用いた。

駒ケ岳火山灰d層：Ko－d、駒ケ岳火山灰g層：Ko－g、白頭山－苫小牧火山灰：B－Tm

7．石器・石製品の大きさは以下の要領で示した。なお、破損しているものについては現存の最大値を（　）で示した。

最大長×最大幅×最大厚（単位cm）

8．掲載した石器実測図では、たたき痕は「∨―∨」、すり痕は「｜―｜」で範囲を示した。また、アスファルト付着部分を黒塗り、光沢のある部分をドットのスクリーントーンで示した。ドットのスクリーントーンの濃淡は、光沢の強弱を表現している。

9．文献の引用で、㈶北海道埋蔵文化財センター発行調査報告書については、シリーズ名を略して（北埋調報○○○）と記した。

目　　次

口絵
例言
記号等の説明
目次
挿図目次
表目次
図版目次

Ⅰ　調査の概要 …… **1**
1　調査要項 …… 1
2　調査体制 …… 1
3　調査にいたる経緯 …… 1
4　調査結果の概要 …… 2

Ⅱ　遺跡の位置と環境 …… **7**
1　遺跡の位置 …… 7
2　遺跡周辺の地形と地質 …… 7
3　周辺の遺跡 …… 9

Ⅲ　調査の方法 …… **13**
1　調査区の設定と座標値 …… 13
2　発掘調査の方法 …… 13
3　整理の方法 …… 15
4　基本層序 …… 16
5　遺物の分類 …… 17
（1）土器 …… 17
（2）石器等 …… 23

Ⅳ　遺構と遺構出土の遺物 …… **25**
1　住居跡 …… 25
2　土坑 …… 45
3　小ピット …… 73
4　水場遺構 …… 85
5　剥片集中 …… 100
6　焼土 …… 113
7　集石 …… 115

Ⅴ　包含層出土の遺物……127
1　土器等……127
（1）Ａ地区出土の土器……128
（2）Ｂ地区出土の土器と土製品等……171
2　石器……193
（1）剥片石器・剥片……193
（2）石斧……200
（3）礫石器……200
3　石製品……203

Ⅵ　自然科学的分析……227
1　放射性炭素年代測定……227
2　石倉１遺跡出土の炭化種実……231
3　石倉１遺跡の動物遺体……235

Ⅶ　小括……239
1　石倉１遺跡の水場遺構について……239
2　石倉１遺跡と濁川左岸遺跡における遺跡の形成……239
3　石倉１遺跡出土の剥片石器……241
4　石倉１遺跡出土の礫・礫石器とその石材について……243
5　石倉１遺跡の放射性炭素年代測定について……249
6　石倉１遺跡出土の植物種実について……249
7　石倉１遺跡出土の動物遺存体……250
8　切断壷形土器について……252

引用参考文献
一覧表
写真図版
報告書抄録

挿　図　目　次

Ⅰ　調査の概要

図Ⅰ－1　遺跡周辺の地形と調査区 …… 3

Ⅱ　遺跡の位置と環境

図Ⅱ－1　遺跡の位置 …… 8

図Ⅱ－2　周辺の遺跡（森町教育委員会作成） ……10

Ⅲ　調査の方法

図Ⅲ－1　年度別の調査範囲 ……14

図Ⅲ－2　重機併用調査範囲位置図 ……14

図Ⅲ－3　基本層序柱状図 ……18

図Ⅲ－4　メインセクション図1 ……19

図Ⅲ－5　メインセクション図2 ……20

図Ⅲ－6　メインセクション図3 ……21

図Ⅲ－7　メインセクション図4 ……22

Ⅳ　遺構と遺構出土の遺物

図Ⅳ－1　遺構位置図（1）G～O・72～80区 ……26

図Ⅳ－2　遺構位置図（2） ……28

図Ⅳ－3　IH－5 ……30

図Ⅳ－4　IH－5出土の遺物（1） ……31

図Ⅳ－5　IH－5出土の遺物（2） ……32

図Ⅳ－6　IH－5出土の遺物（3） ……33

図Ⅳ－7　IH－6（1） ……34

図Ⅳ－8　IH－6（2）と出土の遺物（1） ……35

図Ⅳ－9　IH－6出土の遺物（2） ……36

図Ⅳ－10　IH－6出土の遺物（3） ……37

図Ⅳ－11　IH－7 ……39

図Ⅳ－12　IH－7出土の遺物 ……40

図Ⅳ－13　IH－8 ……42

図Ⅳ－14　IH－8出土の遺物 ……43

図Ⅳ－15　IH－9と出土の遺物 ……44

図Ⅳ－16　IH－10と出土の遺物 ……46

図Ⅳ－17　IP－20・21・23と出土の遺物 ……48

図Ⅳ－18　IP－20・21出土の遺物 ……50

図Ⅳ－19　IP－22と出土の遺物 ……51

図Ⅳ－20　IP－24・25・26・29と出土の遺物 ……52

図Ⅳ－21　IP－27・28・30と出土の遺物 ……54

図Ⅳ－22　IP－31・32・33・34と出土の遺物 ……56

図Ⅳ－23　IP－35・36・37・38・39、
SP－10・11・12・96 ……58

図Ⅳ－24　IP－40・41・42・43と出土の遺物 ……60

図Ⅳ－25　IP－44・45・46と出土の遺物 ……62

図Ⅳ－26　IP－47・48・49・50 ……63

図Ⅳ－27　IP－51・52・53・54・63、
SP－84・97と出土の遺物 ……65

図Ⅳ－28　IP－55・56・58と出土の遺物 ……66

図Ⅳ－29　IP－57・59・60と出土の遺物 ……68

図Ⅳ－30　IP－61・62と出土の遺物 ……70

図Ⅳ－31　小ピット（SP）の分布 ……73

図Ⅳ－32　SP－1～6・39・40・72～75 ……74

図Ⅳ－33　SP－7～17・30～33・38・48～65・
67～70・76・77・88 ……75

図Ⅳ－34　SP－18～22・34～36・93～95 ……76

図Ⅳ－35　SP－23～28・41～47・84 ……77

図Ⅳ－36　SP－37・66・71・90～92 ……78

図Ⅳ－37　SPの土層断面（SP－7～13・18～28・
34～37・41・42・44～47・57～59・
62～71・88・91～95）……79

図Ⅳ－38　SP出土の遺物（1） ……83

図Ⅳ－39　SP出土の遺物（2） ……84

図Ⅳ－40　水場遺構（1） ……86

図Ⅳ－41　水場遺構（2） ……87

図Ⅳ－42　水場遺構（3） ……88

図Ⅳ－43　水場遺構出土の遺物（1） ……91

図Ⅳ－44　水場遺構出土の遺物（2） ……92

図Ⅳ－45　水場遺構出土の遺物（3） ……93

図Ⅳ－46　水場遺構出土の遺物（4） ……94

図Ⅳ－47　水場遺構出土の遺物（5） ……95

図Ⅳ－48　水場遺構出土の遺物（6） ……96

図Ⅳ－49　水場遺構出土の遺物（7） ……97

図Ⅳ－50　水場遺構出土の遺物（8） ……98

図Ⅳ－51　水場遺構出土の遺物（9） ……99

図Ⅳ－52　FC－1・2と出土の遺物 ……102

図Ⅳ－53　FC－3・4と出土の遺物 ……105

図Ⅳ－54　FC－5と出土の遺物 ……108

図Ⅳ－55　IS－5～7、FC－2～5の位置 ……112

図Ⅳ－56　IF－1～3と出土の遺物……114

図Ⅳ－57　IS－4と出土の遺物……116

図Ⅳ－58　IS－５・８と出土の遺物……118
図Ⅳ－59　IS－６・７（１）……120
図Ⅳ－60　IS－７（２）……124
図Ⅳ－61　IS－６・７出土の遺物……125

Ⅴ　包含層出土の遺物

図Ⅴ－１－１　Ⅳ群a類土器の分布（A地区）……130
図Ⅴ－１－２　包含層出土のⅢ群a類土器（１）……141
図Ⅴ－１－３　包含層出土のⅢ群ａ類土器（２）……142
図Ⅴ－１－４　包含層出土のⅣ群a類土器（１）……143
図Ⅴ－１－５　包含層出土のⅣ群a類土器（２）……144
図Ⅴ－１－６　包含層出土のⅣ群a類土器（３）……145
図Ⅴ－１－７　包含層出土のⅣ群a類土器（４）……146
図Ⅴ－１－８　包含層出土のⅣ群a類土器（５）……147
図Ⅴ－１－９　包含層出土のⅣ群a類土器（６）……148
図Ⅴ－１－10　包含層出土のⅣ群a類土器（７）……149
図Ⅴ－１－11　包含層出土のⅣ群a類土器（８）……150
図Ⅴ－１－12　包含層出土のⅣ群a類土器（９）……151
図Ⅴ－１－13　包含層出土のⅣ群a類土器（10）……152
図Ⅴ－１－14　包含層出土のⅣ群a類土器（11）……153
図Ⅴ－１－15　包含層出土のⅣ群a類土器（12）……154
図Ⅴ－１－16　包含層出土のⅣ群a類土器（13）……155
図Ⅴ－１－17　包含層出土のⅣ群a類土器（14）……156
図Ⅴ－１－18　包含層出土のⅣ群a類土器（15）……157
図Ⅴ－１－19　包含層出土のⅣ群a類土器（16）……158
図Ⅴ－１－20　包含層出土のⅣ群a類土器（17）……159
図Ⅴ－１－21　包含層出土のⅣ群a類土器（18）……160
図Ⅴ－１－22　包含層出土のⅣ群a類土器（19）……161
図Ⅴ－１－23　包含層出土のⅣ群a類土器（20）……162
図Ⅴ－１－24　包含層出土のⅣ群a類土器（21）……163
図Ⅴ－１－25　包含層出土のⅣ群a類土器（22）……164
図Ⅴ－１－26　包含層出土のⅣ群a類土器（23）……165
図Ⅴ－１－27　包含層出土のⅣ群a類土器（24）……166
図Ⅴ－１－28　包含層出土のⅣ群b類土器（１）……167
図Ⅴ－１－29　包含層出土のⅣ群b類土器（２）……168
図Ⅴ－１－30　包含層出土のⅣ群b類土器（３）……169
図Ⅴ－１－31　包含層出土のⅤ群b類土器……169
図Ⅴ－１－32　包含層出土のⅥ群a類土器……170
図Ⅴ－１－33　Ⅳ群b類・Ⅴ群b類・Ⅵ群a類土器の分布（A地区）……171
図Ⅴ－１－34　水場遺構の土器とⅣ群a類土器の分布（B地区）……177
図Ⅴ－１－35　包含層出土のⅢ群a類土器（１）・Ⅳ群a類土器（１）……178
図Ⅴ－１－36　包含層出土のⅣ群a類土器（２）……179
図Ⅴ－１－37　包含層出土のⅣ群a類土器（３）……180
図Ⅴ－１－38　包含層出土のⅣ群a類土器（４）……181
図Ⅴ－１－39　包含層出土のⅢ群a類土器（２）・Ⅲ群b類土器・Ⅳ群a類土器（５）……182
図Ⅴ－１－40　包含層出土のⅣ群a類土器（６）……183
図Ⅴ－１－41　包含層出土のⅣ群a類土器（７）……184
図Ⅴ－１－42　包含層出土のⅣ群a類土器（８）……185
図Ⅴ－１－43　包含層出土のⅣ群a類土器（９）……186
図Ⅴ－１－44　包含層出土のⅣ群a類土器（10）……187
図Ⅴ－１－45　包含層出土のⅣ群a類土器（11）・ミニチュア土器・赤彩土器・土製品等……188
図Ⅴ－１－46　包含層出土土器の分布（１）……189
図Ⅴ－１－47　包含層出土土器の分布（２）Ⅲ群a類・Ⅲ群b類……190
図Ⅴ－１－48　包含層出土土器の分布（３）Ⅳ群a類・Ⅳ群b類……191
図Ⅴ－１－49　包含層出土土器の分布（４）Ⅴ群b類・Ⅵ群a類……192
図Ⅴ－２－１　包含層出土の石器（１）……204
図Ⅴ－２－２　包含層出土の石器（２）……205
図Ⅴ－２－３　包含層出土の石器（３）……206
図Ⅴ－２－４　包含層出土の石器（４）……207
図Ⅴ－２－５　包含層出土の石器（５）……208
図Ⅴ－２－６　包含層出土の石器（６）……209
図Ⅴ－２－７　包含層出土の石器（７）……210
図Ⅴ－２－８　包含層出土の石器（８）……211
図Ⅴ－２－９　包含層出土の石器（９）……212
図Ⅴ－２－10　包含層出土の石器（10）……213
図Ⅴ－２－11　包含層出土の石器（11）……214
図Ⅴ－２－12　包含層出土の石器（12）……215
図Ⅴ－２－13　包含層出土の石器（13）……216
図Ⅴ－２－14　包含層出土の石器（14）……217
図Ⅴ－２－15　包含層出土の石器等（15）……218

図Ⅴ－２－16　包含層出土石器分布（１）剥片石器・剥片過年度調査分合算……219
図Ⅴ－２－17　包含層出土石器分布（２）石鏃・スクレイパー……220
図Ⅴ－２－18　包含層出土石器分布（３）Rフレイク・石核……221
図Ⅴ－２－19　包含層出土石器分布（４）Uフレイク・剥片……222
図Ⅴ－２－20　包含層出土石器分布（５）石斧・石斧片過年度調査分合算……223
図Ⅴ－２－21　包含層出土石器分布（６）礫石器・礫過年度調査分合算……224
図Ⅴ－２－22　包含層出土石器分布（７）たたき石・扁平打製石器……225
図Ⅴ－２－23　包含層出土石器分布（８）北海道式石冠・石Ⅲ・台石……226

Ⅵ　自然科学的分析

図Ⅵ－１－１　暦年較正結果 ……230

Ⅶ　小括

図Ⅶ－１　石倉１遺跡と濁川左岸遺跡検出遺構分布 …240
図Ⅶ－２　岩石写真 ……245
図Ⅶ－３　包含層全出土礫 ……246
図Ⅶ－４　Ⅳc～e層採取礫……246
図Ⅶ－５　濁川河口採取礫 ……246
図Ⅶ－６　石倉１遺跡放射性炭素年代測定値一覧 …250
図Ⅶ－７　北海道内出土の切断壷形土器 ……253

表　目　次

Ⅰ　調査の概要

表Ⅰ－1　森町内の調査遺跡（埋文センター受託分）…2
表Ⅰ－2　年度別調査面積検出遺構数一覧 ……5
表Ⅰ－3　年度別出土土器一覧 ……6
表Ⅰ－4　平成20年度出土遺物一覧（土器）……6
表Ⅰ－5　年度別出土石器等一覧 ……6

Ⅱ　遺跡の位置と環境

表Ⅱ－1　周辺の遺跡 …… 11

Ⅲ　調査の方法

表Ⅲ－1　基本層序 ……18

Ⅳ　遺構と遺構出土の遺物

小ピット（SP）の土層注記（1）……80
小ピット（SP）の土層注記（2）……81
表Ⅳ－1　FC－2遺物観察表 ……101
表Ⅳ－2　FC－3遺物観察表 ……103
表Ⅳ－3　FC－4遺物観察表 ……104
表Ⅳ－4　FC－5遺物観察表 ……107
表Ⅳ－5　石器接合表 ……110
表Ⅳ－6　IS－5遺物観察表……119
表Ⅳ－7　IS－6遺物観察表……122
表Ⅳ－8　IS－7遺物観察表……122

Ⅴ　包含層出土の遺物

表Ⅴ－1　土器集中出土土器遺物点数 ……127

Ⅵ　自然科学的分析

表Ⅵ－1－1　測定試料及び処理 ……227
表Ⅵ－1－2　放射性炭素年代測定及び
　　暦年較正の結果……228
表Ⅵ－2－1　試料一覧 ……231
表Ⅵ－2－2　石倉1遺跡から出土した炭化種実 …232
表Ⅵ－3－1　石倉1遺跡出土動物遺体の同定結果 …237

Ⅶ　小括

表Ⅶ－1　包含層出土礫石材別重量一覧（廃棄分）…245
表Ⅶ－2　採取礫点数一覧 ……245
表Ⅶ－3　石材別礫石器点数一覧 ……248
表Ⅶ－4　噴火湾沿岸遺跡出土動物遺存体一覧 ……251

一覧表

表1　検出遺構規模一覧 …… 257
表2　遺構出土土器等一覧 ……260
表3　遺構出土石器等一覧 ……261
表4　遺構出土掲載土器等一覧 ……262
表5　遺構出土掲載石器等一覧 …… 268
表6　包含層出土掲載土器一覧（復元土器）
　　Ⅲ群a類　A地区 ……269
表7　包含層出土掲載土器一覧（拓本土器）
　　Ⅲ群a類　A地区 ……269
表8　包含層出土掲載土器一覧（復元土器）
　　Ⅳ群a類　A地区 ……269
表9　包含層出土掲載土器一覧（拓本土器）
　　Ⅳ群a類　A地区 ……274
表10　包含層出土掲載土器一覧
　　Ⅳ群ｂ類　A地区 ……277
表11　包含層出土掲載土器一覧
　　Ⅴ群ｂ類　A地区 ……277
表12　包含層出土掲載土器一覧
　　Ⅵ群a類　A地区 ……277
表13　包含層出土掲載土器一覧（復元土器）
　　Ⅲ群a類　B地区 ……278
表14　包含層出土掲載土器一覧（拓本土器）
　　Ⅲ群a類　B地区 ……278
表15　包含層出土掲載土器一覧（拓本土器）
　　Ⅲ群ｂ類　B地区 ……278
表16　包含層出土掲載土器一覧（復元土器）
　　Ⅳ群a類　B地区 ……278
表17　包含層出土掲載土器一覧（拓本土器）
　　Ⅳ群a類　B地区 ……279
表18　包含層出土掲載土器一覧（拓本土器）
　　ミニチュア・赤彩土器・土製品等……282
表19　包含層出土掲載石器等一覧……283

図　版　目　次

口絵

口絵１　石倉１遺跡付近空中写真
口絵２　現場近景
　　基本土層（B47区）
口絵３　水場遺構出土土器
　　Ⅳ群a類土器
口絵４　赤彩切断壺型土器
　　赤彩土器・土製品

Ⅵ　自然科学的分析

図版Ⅵ－２－１　石倉１遺跡から出土した炭化種実
図版Ⅵ－３－１　石倉１遺跡出土動物遺体

写真図版

図版１　火山灰除去
図版２　25％調査
図版３　25％調査
図版４　IH－５（１）
図版５　IH－５（２）
図版６　IH－６（１）
図版７　IH－６（２）
図版８　IH－７（１）
図版９　IH－７（２），IH－８（１）
図版10　IH－８（２）
図版11　IH－８（３），IH－９（１）
図版12　IH－９（２），IH－10（１）
図版13　IH－10（２）
図版14　IP（１）
図版15　IP（２）
図版16　IP（３）
図版17　IP（４）
図版18　IP（５）
図版19　IP（６）
図版20　IP（７）
図版21　IP（８）
図版22　IP（９）
図版23　IP（10），IF
図版24　SP
図版25　B地区完掘
図版26　水場遺構（１）
図版27　水場遺構（２）
図版28　FC，IS（１）
図版29　IS（２）
図版30　IS（３），遺物出土状況
図版31　遺物出土状況
図版32　完掘状況
図版33　完掘状況
図版34　調査状況等
図版35　定点観測
図版36　遺構遺物（１）　IH－５
図版37　遺構遺物（２）　IH－５，IH－６
図版38　遺構遺物（３）　IH－６，IH－７
図版39　遺構遺物（４）　IH－７～10，IP－22
図版40　遺構遺物（５）　IP
図版41　遺構遺物（６）　IP，SP
図版42　遺構遺物（７）　SP
図版43　遺構遺物（８）　IP，水場遺構
図版44　遺構遺物（９）　水場遺構
図版45　遺構遺物（10）　水場遺構
図版46　遺構遺物（11）　水場遺構
図版47　遺構遺物（12）　水場遺構
図版48　遺構遺物（13）　水場遺構
図版49　遺構遺物（14）　水場遺構
図版50　遺構遺物（15）　FC，IS
図版51　遺構遺物（16）　IS，IF
図版52　包含層土器（１）　A地区
図版53　包含層土器（２）　A地区
図版54　包含層土器（３）　A地区
図版55　包含層土器（４）　A地区
図版56　包含層土器（５）　A地区
図版57　包含層土器（６）　A地区
図版58　包含層土器（７）　A地区
図版59　包含層土器（８）　A地区
図版60　包含層土器（９）　A地区
図版61　包含層土器（10）　A地区
図版62　包含層土器（11）　A地区
図版63　包含層土器（12）　A地区
図版64　包含層土器（13）　A地区

図版65　包含層土器（14）　A地区
図版66　包含層土器（15）　A地区
図版67　包含層土器（16）　A地区
図版68　包含層土器（17）　A地区
図版69　包含層土器（18）　A地区
図版70　包含層土器（19）　A地区
図版71　包含層土器（20）　A地区
図版72　包含層土器（21）　A地区
図版73　包含層土器（22）　A地区
図版74　包含層土器（23）　A地区
図版75　包含層土器（24）　A地区
図版76　包含層土器（25）　A地区
図版77　包含層土器（26）　A地区
図版78　包含層土器（27）　A地区
図版79　包含層土器（28）　A地区
図版80　包含層土器（29）　A地区
図版81　包含層土器（30）　A地区
図版82　包含層土器（31）　A地区
図版83　包含層土器（32）　A地区
図版84　包含層土器（33）　A地区
図版85　包含層土器（34）　A地区
図版86　包含層土器（35）　A地区
図版87　包含層土器（36）　A地区
図版88　包含層土器（37）　B地区
図版89　包含層土器（38）　B地区
図版90　包含層土器（39）　B地区
図版91　包含層土器（40）　B地区
図版92　包含層土器（41）　B地区
図版93　包含層土器（42）　B地区
図版94　包含層土器（43）　B地区
図版95　包含層土器（44）　B地区
図版96　包含層土器（45）　B地区
図版97　包含層土器（46）　B地区
図版98　包含層土器（47）　B地区
図版99　包含層土器（48）　B地区
図版100　包含層土器（49）　B地区
図版101　包含層土器（50）　ミニチュア土器等
図版102　包含層石器（１）
図版103　包含層石器（２）
図版104　包含層石器（３）
図版105　包含層石器（４）
図版106　包含層石器（５）
図版107　包含層石器（６）
図版108　包含層石器（７）
図版109　包含層石器（８）
図版110　包含層石器等（９）

Ⅰ　調査の概要

1　調査要項

事 業 名　北海道縦貫自動車の建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査
委 託 者　東日本高速道路株式会社北海道支社函館工事事務所
遺 跡 名　石倉１遺跡
北海道教育委員会登載番号　B－14－36（旧登載番号B－15－29）
所 在 地　北海道茅部郡森町字石倉町397番地２ほか
調査面積　15,543㎡
調査期間　平成20年度　平成20年４月１日～平成21年３月31日
（発掘調査５月７日～10月24日）
平成21年度　平成21年４月１日～平成22年３月31日（整理作業）

2　調査体制

財団法人北海道埋蔵文化財センター
理　事　長　森重楯一（平成20年５月31日まで）
坂本　均（平成20年６月１日から）
専 務 理 事　佐藤俊和（平成21年５月29日まで）
松本昭一（平成21年６月１日から）
常 務 理 事　畑　宏明

平成20年度
第２調査部長　西田　茂
第１調査課長　遠藤香澄（発掘担当者）
主　　査　中山昭大（発掘担当者）
主　　任　福井淳一（発掘担当者）
主　　任　立田　理（発掘担当者）
主　　任　大泰司統（発掘担当者）

平成21年度
第２調査部長　西田　茂
第１調査課長　遠藤香澄
主　　査　中山昭大
主　　任　福井淳一
主　　任　立田　理

3　調査にいたる経緯

北海道縦貫自動車道（函館～名寄）は、函館を起点として室蘭・苫小牧・札幌市・旭川市を経由し、名寄にいたる総延長488㎞の路線である。七飯町～長万部町間の路線については平成５年11月から事業が進められている。平成21年10月10日には、八雲町八雲IC～落部ICの16㎞が開通、これにより士別市剣淵IC間までが供用されたことになる。現在、森町～七飯町間の建設工事が進められている。

この事業に関する埋蔵文化財包蔵地の取り扱いについては、平成２年４月に日本道路公団北海道支社（現東日本高速道路株式会社北海道支社）から事前協議がなされ、協議を受けた北海道教育委員会では平成２年４月および平成７年11月に所在確認調査を実施、平成５年からはこの路線の北側の長万部町から試掘調査を開始した。平成10年度からは発掘調査の一部を財団法人北海道埋蔵文化財センターが受託、平成11年度には長万部町内の遺跡、平成13年度には八雲町内の遺跡の調査をそれぞれ終了

している。

森町内の遺跡については平成13年度から調査を開始し（本内川右岸遺跡　北埋調報182)、これまで16遺跡、面積70,456㎡について調査を終了、平成20年度の石倉１遺跡の調査をもって完了した（表Ⅰ－１)。

石倉１遺跡は平成３年４月に所在確認調査、平成14年７月24・25日および平成15年８月に試掘調査が行われ。この結果に基づき、平成14年度に1,753㎡、平成15年度に1,900㎡、平成16年度に700㎡の合計4,358㎡について調査を行い（表Ⅰ－２、図Ⅲ－１)、平成19年度に報告書を刊行している（北埋調報247)。第４次にあたる平成20年度調査区は、標高32ｍ～50ｍの斜面部とそれに連続する平坦な段丘面からなり、調査の終了した範囲を挟んで大きく２か所に分かれている（図Ⅰ－１)。平成20年４月21日から工事用機械により火山灰および表土除去作業を実施、５月７日からは作業員70名体制で調査を開始し、10月24日に現地調査を終了した。当初予定の調査面積は16,489㎡であったが、現地形の形状に合わせて調査範囲を再設定したことによる調査範囲の減少（1,042㎡)、および当初予定範囲をこえて遺物が出土したことによる調査範囲追加（96㎡）があり（図Ⅲ－２)、最終的調査面積は15,543㎡となった。平成20年11月から江別センターで整理作業を開始し、報告書作成業務を進めてきた。

４　調査結果の概要

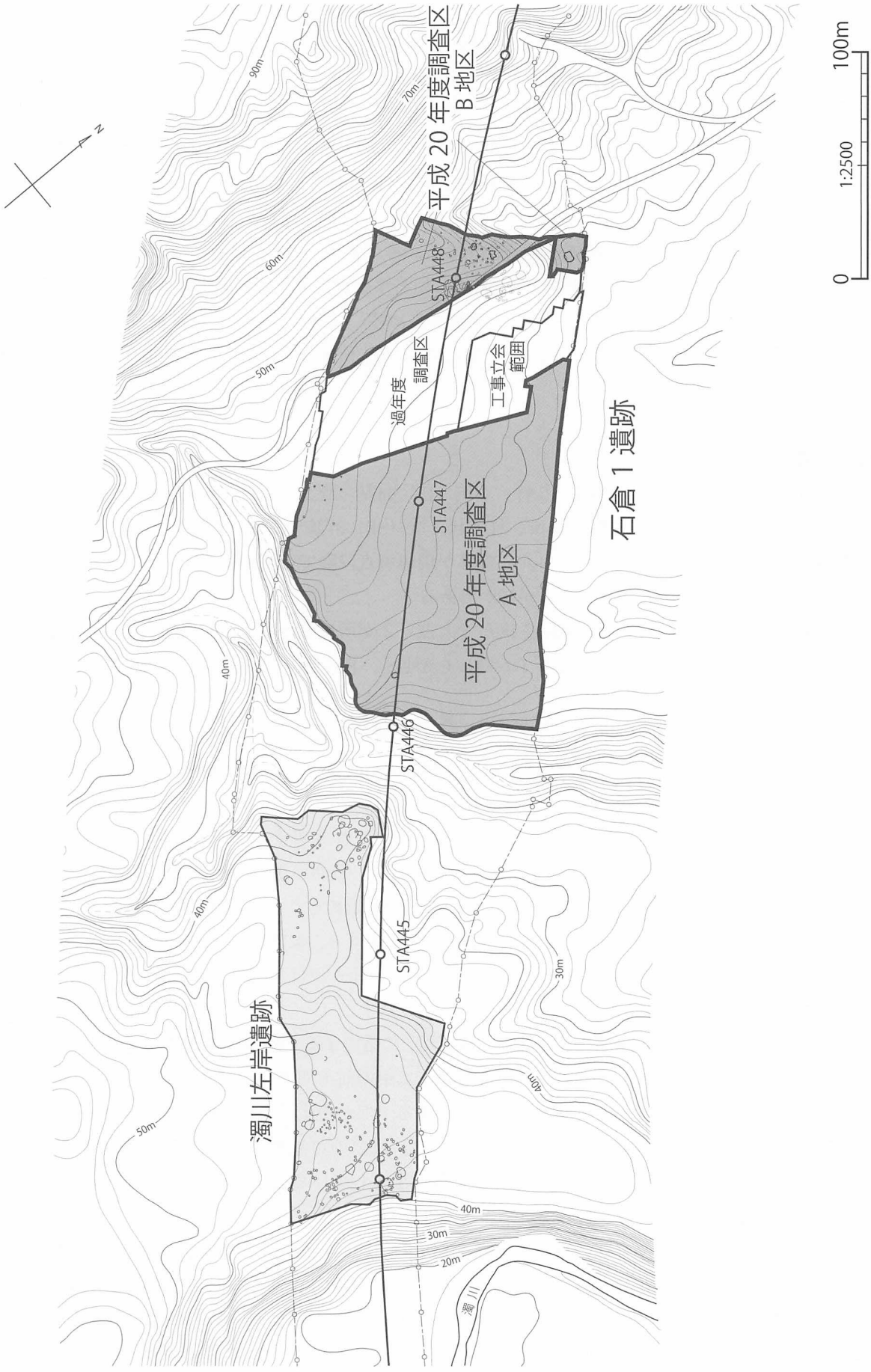
これまでの調査で得られた遺構・遺物の数量は一覧表にまとめてある（表Ⅰ－２・３・５)。先に平成14年度～平成16年度の調査結果の概要を記しておく。

平成14年度～平成16年度の調査結果

検出された遺構は竪穴住居跡４軒，土坑19基と集石１か所で調査区北側の標高40ｍの台地縁辺部分

表Ⅰ－１　森町内の調査遺跡（埋文センター受託分）

遺　跡　名	調査年度	調査面積（㎡）	報告書（北埋調報）	備　　考
本内川右岸	H13年度	2,746	182集	
濁川左岸Ａ地区	H13･14年度	4,930	208集	H13年度1300㎡・H14年度3630㎡
濁川左岸Ｂ地区			190集	
濁川左岸Ｃ～Ｅ地区	H16年度	3,660	246集	
倉知川右岸	H14年度	9,350	196集	
本茅部１	H14･15年度	2,200	191集	
	H15年度	498	199集	
森川３	H14・15年度	2,260	222集	H14年度2200㎡・H15年度60㎡
	H16・17年度	2,780	234集	
森川４	H15年度	1,400	218集	
石倉１	H14～16年度	4,353	247集	H14年度1753㎡・H15年度1900㎡ H16年度700㎡
	H20年度	15,543	266集	**本報告書**
石倉２	H15年度	2,324	197集	
石倉３	H15年度	3,670	205集	
石倉４	H16年度	1,852	219集	
石倉５	H15年度	962	205集	
	H16年度	1,070	219集	
上台１	H15年度	6,200	217集	
上台２	H15・16年度	9,336	216集	
三次郎川左岸	H15・16年度	1,485	219集	H15年度1420㎡・H16年度65㎡
三次郎川右岸	H15・16年度	4,450	233集	H15年度2600㎡・H16年度1850㎡
15遺跡合計		81,069		



図Ⅰ－1　遺跡周辺の地形と調査区

とそれに続く緩斜面に集中している（図Ⅳ－２）。住居跡は概ね楕円形を呈するもので、１軒（IH－４）が中期前半期の可能性があるがほかの３軒は縄文後期初頭～前葉の時期のものである。このうち２軒（IH－１・３）では床面のほぼ中央付近から炉が検出されている。土坑はいずれも中期から後期のものである。このうち人頭大の礫を配した土坑３基（P－１・４・８）は墓の可能性がある。IP－５は廃絶された住居（IH－４）と一部重複する土坑で、フラスコ状土坑を転用した墓であろう。同様に住居（IH－２）の床面から検出されたIP－８は後期前葉の墓と見られる。集石は一連のものである。遺物の分布は遺構集中区に重なる。土器は縄文時代早期（Ⅰ群）～晩期（Ⅴ群）、続縄文時代（Ⅵ群）にいたるものがあり、遺構・包含層合計で58,914点出土している（表Ⅰ－３）。最も多いのは後期前葉のもの（Ⅳ郡a類）で９割以上を占める。早期の住吉町式に相当する貝殻文土器が調査区西端から３点出土している。石器は5,836点出土しこのうち剥片が６割を占める。スクレイパー、石鏃が多く、礫石器では扁平打製石器、すり石、たたき石が半数以上を占める（表Ⅰ－５）。ほかに土製品（耳栓）、石製品（かんらん岩製垂飾）がある。

平成20年度の調査結果

検出された遺構は竪穴住居跡（IH）５軒、土坑（IP）44基、焼土（IF）３か所、集石（IS）５か所、剥片集中（FC）５か所、水場遺構１か所、柱穴状土坑（SP）87基である。剥片集中を除き、遺構は調査区北西側に集中する（図Ⅳ－１・２）。このほか現場調査段階で土器がまとまって出土し、「土器集中」として遺構に準じて取り扱ったものが16か所ある。

今年度調査範囲は調査の終了した範囲を挟んで大きく２か所に分かれている（図Ⅰ－１）。記載にあたっては、必要に応じ南東側（25～68ライン間）をA地区、北西側（62～81ライン間）をB地区と呼称している。

住居跡はIH－10が中期前半期の可能性が高いほかは、縄文時代後期初頭～前葉の時期のものと推定できる。分布は大きく３か所にわかれ、ＩH－９が標高41m前後の調査区南西端の遺物が集中する平坦面（A地区）、IH－10が調査区南東端の急な傾斜部分（A地区）に、IH－５・７・８の３軒が調査区北西側（B地区）の遺構集中区にまとまる。また、IH－６がこれ３軒からやや北東側にやや離れて存在する。後期の住居は掘り込みが浅く平面形が捉えがたいが、石囲い炉や石組あるいは配石の掘りかた（H－５～８）を伴うものである。IH－５では壁際に周溝が認められ、また柱穴には根元に土器片を埋めてある例もみられる。IH－６は出入り口構造を有する住居で、東側壁に一対の配石があり、中央やや北東よりの床面から方形の石囲い炉が検出されている。IH－９は、掘り込みは確認されなかったが地床炉のある住居である。

土坑はIP－48、59、61を除き調査区北西側（B地区）に集中する。概ね長軸が１ｍに収まるもので、平面形は楕円形、円形である。時期の明らかなものでは中期前半期サイベ沢Ⅶ式（20～23）、後期前葉のもの（24～26、34、45、47、52～56、59、61）がある。ほかの土坑もこの期間に収まるものである。長径70㎝内外の小型フラスコ状土坑（20、22、42、51）は墓の可能性がある。IP－22の開口部からは倒立状態で置かれていたとみられる一個体分の土器が出土している。またIP－49～56・63の覆土は埋め戻しであり、このうちIP－49・51は土坑墓の可能性が高い。

IP－23はほかの土坑とはやや離れた地点、標高47ｍの急斜面から検出された長径1.8ｍの大型フラスコ状土坑である。底面のほぼ中央に浅い落ち込みが、壁際の最大径部分に沿って柱穴が10個検出されている。１本が先端を開口部に向けるほかは底面に平行である。壁と壁に横木を渡し交差させることで棚のような構造物の存在が想定できる。貯蔵施設の可能性がある。また、比較的大きい円形の

IP－57は小型住居の可能性もある。

柱穴状土坑（小ピット）は調査区北西部、縄文後期前葉の住居跡や土坑が集中する周辺部（O76・77区）にまとまっている。時期は後期前葉にほぼ限定できる。深さは10cm内外から１ｍ近いものがあるが、包含層が削平された部分もありその形態の特色から推定される組み合わせは判然としない。

集石はA地区から３か所、B地区の遺構集中区から２か所検出されている。A地区から検出されたIS－５は掌に納まるほどの細長い礫の集中、IS－６・７は大型礫で構成され、IS－７は石囲い炉である。B地区から検出されたIS－４は方形の石囲い炉とみなされる。また、IS－８は400点余りの川砂利に似た小礫（径１cm程度）がまとまっていた。

剥片集中は、B地区で頁岩製剥片の集中（FC－１）が検出されている。ほかの４か所はA地区から検出された赤井川原産の黒曜石製剥片を主とする集中（FC－２・３・４・５）である。これらは石器製作に関連する遺構と考えられる。

水場遺構はB地区M・N73・74区周辺の小規模な沢の底部分から土器、石器がまとまって出土したものである。そのあり方から縄文時代中期中葉の時期に水場として利用された後、道具の廃棄場所となり、時代が下って再び後期前葉段階でも廃棄の場となったと理解される。土器にはサイベ沢Ⅶ式新段階と見晴町式並行期の土器および涌元式土器があり、石器には扁平打製石器、台石・石皿、北海道式石冠がある。

遺物は土器が42,589点（遺構：1,624点　包含層：40,965点）、石器等5,854点（遺構：1,076点　包含層4,778点）、土製品11点、石製品11点が出土した（表Ⅰ－３～４）。土器は縄文中期～晩期、続縄文時代のものがあり、後期前葉のものが９割以上を占める。縄文時代中期（Ⅲ群）：円筒土器上層式・サイベ沢Ⅶ式・見晴町式・大安在B式、後期（Ⅳ群）：天祐寺式・涌元式・トリサキ式・大津式・白坂３式・ウサクマイC式・手稲式、晩期（Ⅴ群）：大洞C_1式・大洞C_2式、続縄文時代（Ⅵ群）：恵山式等がある。後期前葉の土器片には赤彩の壷形土器の破片、黒色に研磨された精製土器に赤色顔料が塗られたものがある。また貫通孔のある台状張り出し部を有する底部の破片がある。

定型的石器には石鏃、石槍、石錐、つまみ付きナイフ、箆状石器、スクレイパー、両面調整石器、楔形石器、扁平打製石器、たたき石、すり石、北海道式石冠、台石・石皿などがある。石斧は破片や細片が多い。剥片石器は頁岩に加えメノウを素材としたものが目立つ。石鏃は高い確率で基部にアスファルトが付着している。特徴的遺物としては赤彩切断壷形土器（後期初頭）、鐸形土製品、円盤状土製品、キノコの形状を模した土製品と有孔軽石製品、異形石器がある。（遠藤）

表Ⅰ－２　年度別調査面積検出遺構数一覧

調査年度	調査面積（㎡）	遺構						
		住居跡（ＩＨ）	土坑（ＩＰ）	小ピット（ＳＰ）	水場遺構	フレイク集中（ＦＣ）	焼土（ＩＦ）	集石（ＩＳ）
平成14年度	1,753		2					
平成15年度	1,900		2					
平成16年度	700	4	15					3
平成20年度	15,543	6	44	87	1	5	1	5
計	19,896	10	63	87	1	5	1	8

表Ⅰ－3　年度別出土土器一覧

調査年		Ⅰ群ａ類	Ⅱ群ｂ類	Ⅲ群ａ類	Ⅲ群ｂ類	Ⅳ群ａ類	Ⅳ群ｂ類	Ⅴ群	Ⅵ群	小計	土製品	総計
平成14年度	遺構					2				2		2
	包含層			177		909	1		133	1220		1220
	計			177		911	1		133	1222		1222
平成15年度	遺構					4				4		4
	包含層	3		2433	25	20379	23	1	42	22906		22906
	計	3		2433	25	20383	23	1	42	22910		22910
平成16年度	遺構			16		1501				1517		1517
	包含層		1	1311	118	31835				33265		33265
	計		1	1327	118	33336				34782		34782
平成20年度	遺構			466	1	1157				1624	2	1626
	包含層			1102	142	38527	487	108	599	40965	9	40974
	計			1568	143	39684	487	108	599	42589	11	42600
総計		3	1	5505	286	94314	511	109	774	101503	11	101514

＊平成20年度の土器集中１～15の遺物は包含層に集計してある。

表Ⅰ－4　平成20年度出土遺物一覧（土器）

	Ⅲ群ａ類	Ⅲ群ｂ類	Ⅳ群ａ類	Ⅳ群ｂ類	Ⅴ群ｂ類	Ⅵ群	小計	土製品	総計
遺　構	466	1	1157				1624	2	1626
包含層	1102	142	38527	487	108	599	40965	9	40974
合　計	1568	143	39684	487	108	599	42589	11	42600

土器集中１～15の遺物は包含層に集計してある。

表Ⅰ－5　年度別出土石器等一覧

		石鏃	石槍	石錐	つまみ付ナイフ	ナイフ	篦状石器	スクレイパー	両面調整石器	楔形石器	Rフレイク	Uフレイク	剥片	石核	異形石器	三角石製品	剥片石器小計
平成14年度	遺構																0
	包含層	6			1			6			1		71	10			95
	計	6			1			6			1		71	10			95
平成15年度	遺構		1										5				6
	包含層	30	3	1	7			73		6	19	116	2211	41			2507
	計	30	4	1	7			73		6	19	116	2216	41			2513
平成16年度	遺構	2	1					4			1	1	47				56
	包含層	20	2	3	7			48			6	20	1241	1			1348
	計	22	3	3	7			52			7	21	1288	1			1404
平成20年度	遺構	4	1				2	7		1	7	24	741	17			804
	包含層	80	1	9	10	2	3	96	5	6	175	108	2792	127	1	1	3416
	計	84	2	9	10	2	5	103	5	7	182	132	3533	144	1	1	4220

		石斧	たたき石（片）	すり石（片）	扁平打製石器（片）	北海道式石冠（片）	砥石（片）	加工痕のある礫（片）	石錘	石皿（片）	台石（片）	原石	有孔自然石	石製品（片）	礫（片）（砂利）	礫石器小計	石器総計
平成14年度	遺構		1								28				74	103	103
	包含層	5	20	3						3	4			1	94	125	225
	計	5	21	3						3	32			1	168	228	328
平成15年度	遺構	1													17	17	24
	包含層	25	214	19	103	11	3		2	1	67	46		11	421	898	3430
	計	26	214	19	103	11	3		2	1	67	46		11	438	915	3454
平成16年度	遺構	2		1	10	2				6	1	1			119	140	198
	包含層	11	7	8	52	5	9		1	15	11	5		7	377	497	1856
	計	13	7	9	62	7	9		1	21	12	6		7	496	637	2054
平成20年度	遺構	2	21	2	29	5		4		13	13	1			182	270	1076
	包含層	62	196	6	72	24	9	20		35	42	27	8	3	869	1310	4789
	計	64	217	8	101	29	9	24		48	55	28	8	3	1051	1580	5865

Ⅱ　遺跡の位置と環境

1　遺跡の位置

石倉１遺跡は、森町市街地より北西７～12㎞の字石倉町にある。石倉町は、森町の最も西側に位置し茂無部川を挟んで八雲町字栄浜と接している。石倉町には北から茂無部川、本内川、三次郎川、石倉川、濁川が流れて噴火湾に注いでおり、遺跡は濁川河口から約700m入った濁川右岸、標高30～50ｍの段丘上に位置している。

遺跡の所在する森町は北海道南西部、渡島支庁管内のほぼ中央部に位置し、北海道駒ケ岳の裾野西北部に広がる町である。平成17年、(旧）森町と砂原町とが合併したことにより、総面積368.27㎡となった。東側が駒ケ岳山頂剣ヶ峯から東円山を経て噴火湾に注ぐトドメキ川を結ぶ線で鹿部町と接し、南側は宿野辺川を挟んで北斗市（旧大野町）及び七飯町と、南西側は渡島山地を境界として厚沢部町と、西は茂無部川を挟んで八雲町と接しており、北東側に広がる噴火湾までがその地理的範囲である。

2　遺跡周辺の地形と地質

地域の地質に関する刊行物（土居1960、北海道立地下資源調査所1973）をもとに、遺跡の立地する地形、地質的環境について説明する。このほかの文献を引用した場合にのみ、引用符を付した。岩石などの名称、その他の記載については、年次が新しいものにそろえている。

森町は５つの地形区に分けることができるという。

１）新第三紀層から構成され、解析がすすんだ急峻な壮年期の山地帯。

２）濁川盆地。

３）新第三紀層から構成され、段丘面が発達している丘陵性の山地帯。

４）駒ケ岳とその山麓地域。

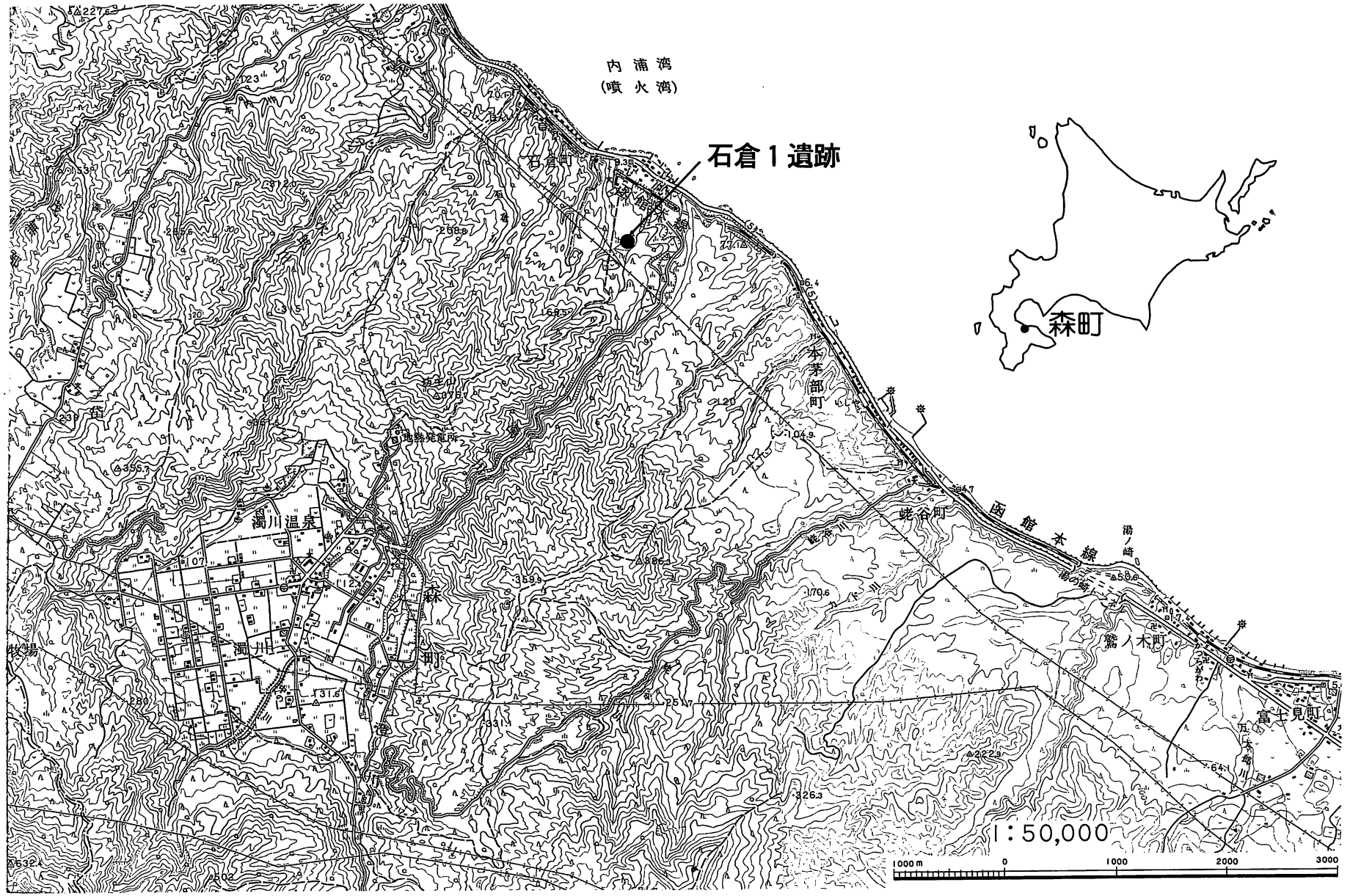
５）海岸および河川の沿岸に発達する沖積地と段丘。

１）、３）に記した新第三紀層とは、およそ2300万年前から175万年前の年代に形成されたものであり、530万年を境として前半を中新世、後半を鮮新世とに区分されている。この地域では、中新世に相当する層として、古い順に国縫層、八雲層、黒松内層が分布している。それぞれの分布と内容を述べると、国縫層は、蛯谷川流域にわずかに分布しており、凝灰質礫岩、凝灰質角礫岩、凝灰角礫岩で構成されている。八雲層は国縫層の上部に位置し、濁川盆地の南東地域から鳥崎川にかけての地域で分布している。この層は、板状層理をしめすいわゆる「硬質頁岩」を特徴としている。黒松内層は町の西半分に広く分布しており、上位から火山角礫岩部層、凝灰角礫岩部層、砂岩部層の３つに分けられている。

１）は森町の西部～南西部、毛無山、狗神岳、森川山など標高200ｍから標高900ｍに達する山地帯で、起伏に富み、解析が著しくすすんでいる地域である。新第三紀の八雲層と黒松内層、特に黒松内層を特徴づける上部の火山角礫岩から構成されている。

２）は町の北西部にある径３～４㎞の概ね五角形を呈する小型のカルデラで、傾斜60～70°のカルデラ壁を有するじょうご型の構造を呈しており、濁川型とされた。この盆地の周囲には断層が発達しており、盆壁は先述した八雲層および黒松内層から構成されている。盆地北半部の地域からは温泉が湧出しており、北東部の盆壁には昇華硫黄の鉱床がみられる。

このカルデラの形成に関わる噴火について名越（1994）は、マグマ水蒸気爆発に始まり、爆発的な噴火へと移行し、軽石流の噴出でピークを迎え、カルデラ内に湖が形成された後、再びマグマ水蒸気


内浦湾
(噴火湾)
石倉１遺跡
石倉町
本茅部町
函館本線
蛇谷町
濁川温泉
濁川
森町
鷲ノ木町
富士見町
森町
1:50,000
1000m
0
1000
2000
3000

図Ⅱ－１　遺跡の位置

爆発が起こったとしている。なおこの一連の噴出は、^{14}C年代で約12,000年前に集中して起こったとされている（柳井ほか1992）。この噴出物は、石倉層と呼ばれ黒松内層を覆い盆地の周囲に分布している。盆地北東部の三岱（さんたい）～東部の蛯谷川にかけては、石倉層の影響で、平坦な台地地形が発達している。

３）は、噴火湾の沿岸や、１）の山地帯と駒ケ岳火山帯とに挟まれた地域において、標高120ｍ以下の段丘面が発達していることで特徴付けられる地域である。基盤は八雲層や黒松内層で構成されており、駒ケ岳火山噴出物に属する降下軽石堆積物で覆われている。

４）は町の東部を占める駒ケ岳火山体である。円錐形に近い成層火山で、軽石に富む火山噴出物で構成されている。駒ケ岳は北海道で最も古い噴火記録をもつ活火山で、現在まで大小の噴火を繰り返しており、日本の活火山のなかで最も活動的な火山（ランクA）の一つとして注目されている。

駒ケ岳の火山活動を概観すると、4～50,000年前に活動が始まり、30,000年前までには安山岩の溶岩と火砕物を噴出して羊蹄山のような円錐形の大きな成層火山を形成していたとされている。2～30,000年前になると駒ケ岳は山体の大崩壊に続き、火砕流を伴う大規模な軽石噴火を起こすようになった。その後、一万年あまり活動を休止し、先の濁川カルデラの噴出物で駒ケ岳の山体も広く覆われた。5～6,000年前になると二度にわたって火砕流を伴う大規模な軽石噴火を起した。その5,000年後の1640（嘉永17）年、大規模な山体崩壊を伴う軽石噴火を起こし、岩屑なだれで津波も発生し、700人あまりが犠牲になっている。その後、駒ケ岳は現在までに1694年、1858年、1929年、2000年と噴火を繰り返している（勝井2007）。

1640年の噴火による噴出物は町全域に確認でき、調査地においては約１ｍ、駒ケ岳１遺跡において約1.5ｍ、森川３遺跡では約1.8ｍの層厚で堆積している。町内の先史遺跡の多くはこの火山灰に厚く覆われており、その発見を難しくしているとともに、反面として良好に保存されているとみられる。

５）は、噴火湾の沿岸に砂礫層が堆積しており、ところによって、砂鉄の漂砂鉱床がみられる。また、各河川の沿岸に沿って、比高２ｍ～３ｍの河岸段丘が発達し、砂礫層をのせているほか、現河川氾濫原堆積物が分布している。

３　周辺の遺跡

森町管内には平成21年現在、51か所の遺跡が登録されている。前報告（北埋調報247）を元に旧砂原町のものも加え一覧表とした（表Ⅱ－１）。遺跡は先に述べた台地、段丘を中心に、河川、海に沿う形で広がっていることがわかる。

町内において平成13年以来、北海道縦貫自動車道建設工事に伴う発掘調査が行なわれ続けている。工事に伴う調査遺跡数は11を数えるが、本報告をもってその８年にわたる調査は終了することとなる。これらの調査のうち、本遺跡の比較的近隣にあたる茂無部川から濁川までの地域で、本遺跡を除く７か所についての内容を北から順に述べる。

本内川右岸遺跡

本内川右岸の標高45ｍ前後の台地に位置している。縄文時代中・後期の遺跡である。検出遺構は中期の土坑が３基である。出土した遺物は、土器が縄文時代中期の円筒土器上層b式、ノダップⅡ式、後期前葉の天祐寺式など、石器は石鏃、ポイント・ナイフ、つまみ付きナイフ、スクレイパー、石斧、たたき石、石錘、砥石、石皿・台石などが出土している。

三次郎川左岸遺跡

噴火湾から200ｍほど内陸、三次郎川左岸の標高35～50ｍの段丘上に位置する。縄文時代後期前葉を主体とする遺跡で、土坑１基、焼土１か所を検出した。縄文時代前期後半の円筒土器下層式、後期前葉の天祐寺式などの土器、続縄文時代の恵山式、後北式土器などが出土している。

図Ⅱ－２　周辺の遺跡（森町教育委員会作成）

表Ⅱ－1　周辺の遺跡

登載番号	遺跡名称	種　別	所　在　地	立　地	標高(m)	時　期　(型式略名)	備　　考
1	松屋崎台場跡	台場跡	砂原4丁目	海岸段丘	30	近世	
2	二ツ山遺跡	貝塚	砂原東3･4丁目	海岸段丘	10	縄文中期～後期	
3	彦澗台場遺跡	台場跡	砂原5丁目	海岸段丘	10	近世	
4	会所町台場跡	台場跡	砂原4丁目	海浜地	5	近世	
5	会所町B台場跡	台場跡	砂原4丁目	海岸段丘	10	近世	
6	四軒町台場跡	台場跡	砂原3丁目	海浜地	2	近世	
7	東蝦夷地南部藩砂原陣屋跡	陣屋跡	砂原3丁目	海岸段丘	10	近世	S48.8 国指定史跡
8	姫川1	遺物包含地	駒ヶ岳132－1～4	河岸段丘	167	縄文中期(円筒上層)	旧姫川A遺跡, 森町1980
9	姫川2	遺物包含地	駒ヶ岳17-6･216･217	河岸段丘	112	縄文中期(円筒上層)	旧姫川B遺跡, 森町1980
10	白　川	遺物包含地	白川49-14	河岸段丘	48～50	縄文晩期、擦文(北大)	貝塚あり, 森町 1980
11	森川貝塚	貝　塚	森川町76～79ほか	海岸段丘	13～15	縄文前期(円筒下層)、続縄文(恵山)、擦文、中近世	旧森川B統合, 森町1980
12	森川1	遺物包含地	森川町69-2ほか	海岸段丘	15～18	縄文前(円筒下層b)･中期(円筒上層,大木系)･後期(余市系)、続縄文(恵山)	旧森川A･C･D統合, 森町 1980, 町教委 1982
13	森川2	遺物包含地	霞台34-1､35-2	台　地	80～100	縄文前(円筒下層d)･中･後期前葉･晩期後葉、擦文、中近世	町教委　2004b
14	本内川右岸	遺物包含地	石倉町610-7･8	台　地	40～60	縄文中(円筒上層b,ノダップⅡ,大安在B)･後期(天祐寺)	道埋文 2003a(182)
15	茂無部川右岸	遺物包含地	石倉町610-2･5	台　地	40～60	縄文中･後期	
16	尾白内貝塚	貝　塚	字尾白内926､929－1ほか	海岸段丘	10～14	縄文晩期(大洞A′)、続縄文(恵山、擦文	森町 1980, 町教委 1981･1993
17	鳥　崎	遺物包含地	鳥崎31－1、富士見町13ほか	海岸段丘	15～30	縄文前(円筒下層)･中期末･後期前葉、晩期、中･近世	町教委 1975,森町1980
18	蛯　谷	遺物包含地	蛯谷町146－1ほか	河岸段丘	30～32	縄文中(円筒上層)･後期	森町 1980
19	赤井川1	遺物包含地	赤井川229	丘　陵	175～195	縄文中期(円筒上層)	
20	赤井川2	遺物包含地	赤井川229	丘　陵	230～235	縄文中期	
21	赤井川3	遺物包含地	赤井川229	丘　陵	210	縄文中期	
22	オニウシ	集 落 跡	上台町326－18	海岸段丘	25～35	縄文早(貝殻条痕文)･中期(円筒上層c)	町教委　1977, 森町1980
23	御幸町	遺物包含地	御幸町132－2、清澄3－1ほか	海岸段丘	8～20	縄文早･中(円筒上層,榎林,ノダップⅡ)･後(十腰内系･大湯系)･晩期、続縄文、擦文、中･近世	町教委　1985･1994
24	清　澄	遺物包含地	清澄27-1､29－2、326-16、326-18	海岸段丘	33～39	縄文中(円筒上層)･後期	森町 1980
25	鷲ノ木1	遺物包含地	鷲ノ木145－1ほか	海岸段丘	15～20	縄文中期(円筒上層)	
26	鷲ノ木2	台 場 跡	鷲ノ木455ほか	海岸段丘	40	近世	榎本武揚1869築
28	鷲ノ木4	遺物包含地	鷲ノ木506～510	河岸台地	45～70	縄文早･中(円筒上層)･後(大津,白坂3,ウサクマイC,手稲)･晩期(中･後葉)、続縄文(恵山,後北)	2004 鷲ノ木6遺跡(上位テラス)を統合, 町教委 2004c, 2006
29	濁川左岸	集 落 跡	石倉町401､446－1､448	河岸段丘	40～50	縄文前(円筒下層)･中(円筒上層,サイベ沢Ⅶ,見晴町,榎林,大安在B,大木9並行)･後期(涌元,トリサキ,大津,白坂3,ウサクマイC)、続縄文(恵山,後北)	道埋文 2003d(190)･2004e(208)･2007a(246)
30	本茅部1	遺物包含地	本茅部町205､272～274､294	海岸段丘	80～85	縄文前(円筒下層)･中(円筒上層,見晴町)･晩期(大洞C2)、中･近世	道埋文 2003e(191)･2004c (199)
31	栗ヶ丘1	遺物包含地	栗ヶ丘38～44	河岸段丘	35～45	縄文早･前･中(円筒下層,円筒上層)･後(天祐寺,涌元,トリサキ,大津,白坂3,ウサクマイC,手稲,ホッケマ)･晩期、続縄文(恵山)	町教委 2004a
32	倉知川右岸	集 落 跡	栗ヶ丘7､11－1･2	丘　陵	75～80	縄文早(貝殻文)･前(円筒下層)･中(円筒上層b･c,サイベ沢Ⅶ,見晴町)･後期(天祐寺,涌元,トリサキ,大津,手稲,堂林)、続縄文(恵山)	道埋文 2004a(196)
33	森川3	集 落 跡	森川町317－1･7	丘　陵	100	縄文前(円筒下層直前,円筒下層)･中((円筒上層a･b,サイベ沢Ⅶ,見晴町,大安在B,ノダップⅡ)･後期(トリサキ,大津,手稲)･晩期、続縄文(恵山)	道埋文 2005e(222)･2006b(234)
34	上台1	遺物包含地	上台33－1､42－1､364	丘　陵	90	縄文前(円筒下層d)･中(円筒上層b,見晴町,ノダップⅡ)･後期(トリサキ,大津白坂3,ウサクマイC手稲,鮭澗)･晩期(聖山Ⅱ)	道埋文 2005b(217)
35	鷲ノ木	環状列石･墳墓･配石遺構･集落跡	鷲ノ木499-2･3ほか	河岸段丘	70	縄文早･前･中･後期(大津,白坂3)･晩期、続縄文(恵山,後北B･C1)	町教委 2008 b,c,d,2009
36	石倉1	遺物包含地	石倉町395～397、403､404、439	段　丘	30～40	縄文早期(貝殻文)中(円筒上層d,見晴町,榎林)･後期(天祐寺,涌元,トリサキ,大津,白坂3,ウサクマイC,手稲)･晩期、続縄文(恵山,後北)	道埋文 2007b(247)
37	森川4	遺物包含地	森川町317－18	河岸段丘	90	縄文前(円筒下層a･d)･中(円筒上層b,サイベ沢Ⅶ,見晴町,ノダップⅡ,煉瓦台)･後(トリサキ,大津,白坂3,ウサクマイC,手稲,鮭澗)･晩期(聖山Ⅱ)	道埋文 2005c(218)
38	上台2	集 落 跡	上台町326－5	河岸段丘～緩斜面	90～100	縄文早(貝殻文)･前(円筒下層d)･中(円筒上層a,サイベ沢Ⅶ,見晴町,榎林)･後(トリサキ,大津,白坂3,ウサクマイC,堂林)･晩期(大洞A－A′)、中･近世	道埋文 2005a(216)
39	石倉2	集 落 跡	石倉町146､623－1･3･4､624－1､306ほか	河岸段丘	60～75	縄文中(榎林,大安在B,ノダップⅡ)･晩期(聖山Ⅱ)	道埋文 2004b(197)
40	石倉3	遺物包含地	石倉町482､483､490	河岸段丘	65～75	縄文後期(天祐寺,トリサキ)	道埋文 2004d(205)
41	石倉4	遺物包含地	石倉町511､520､521	河岸段丘	60	縄文前(円筒下層)･中期(円筒上層,大安在B)	道埋文 2005d(219)
42	森川5	遺物包含地	森川町317-7･8、318-1	丘　陵	110	縄文前(円筒下層d)･中(サイベ沢Ⅴ～Ⅶ)期、晩期、続縄文(恵山)	2004 森川3遺跡から分離, 町教委　2007
43	石倉5	遺物包含地	石倉町512､513､519	河岸段丘	55～60	縄文前(円筒下層d)･後期(トリサキ)、続縄文(恵山)	道埋文 2004d(205)･2005d(219)
44	三次郎川右岸	遺物包含地	石倉町513､516	河岸段丘	40～47	縄文前(円筒下層)･中(円筒上層b,円筒上層c,サイベ沢Ⅶ,見晴町,大安在B,榎林)･後期(トリサキ,大津,ウサクマイC)、続縄文(恵山,後北)、擦文	道埋文 2006a(233)
45	三次郎川左岸	遺物包含地	石倉町610-24	河岸段丘	35～50	縄文前(円筒下層)･後期(天祐寺)、続縄文(恵山,後北C2-D)	道埋文 2005d(219)
46	鷲ノ木7	遺物包含地	鷲の木町397-1ほか	尾　根	60	縄文前(円筒下層d)･中(円筒上層b,円筒上層c,サイベ沢Ⅶ,見晴町,榎林,大安在B,)･後期(涌元,トリサキ,大津,白坂3,手稲,鮭澗,堂林)･晩期、続縄文(恵山)	町教委　2006b
47	鷲ノ木川右岸	遺物包含地	鷲の木町396	台　地	60	縄文	
48	蛯谷2	遺物包含地	蛯谷町281	台　地	80	縄文	
49	駒ヶ岳1	遺物包含地	駒ヶ岳228-10	河岸段丘	185	縄文早期(東釧路Ⅳ)	
50	駒ヶ岳2	遺物包含地	駒ヶ岳470-5	河岸段丘	177	縄文後期	町教委　2008a
51	駒ヶ岳3	遺物包含地	駒ヶ岳231-16･23～25	河岸段丘	188	縄文後期(手稲式)	2007道教委試掘調査

＊遺跡名称の欄では「遺跡」の文字、所在地の欄では「字」の文字を省略した。
＊備考欄の四桁の数字は西暦である。
＊備考欄の森町教育委員会は「町教委」、財団法人北海道埋蔵文化財センターは「道埋文」と省略した。
＊備考欄の括弧内の数字は財団法人北海道埋蔵文化財センター調査報告書のシリーズ番号である。

三次郎川右岸遺跡

三次郎川を挟んで、左岸遺跡の対岸に位置する。縄文時代中期後半を主体とする遺跡で、住居址19軒、配石遺構 5 か所、土坑83基、焼土16か所を検出した。住居跡には埋甕をもつものや掘りこみの浅いものがある。土坑はフラスコ状や大型礫を伴うもの、掘りこみが浅いものなど多様である。焼土は、焼骨片が多量に混じり、続縄文時代のものが多い。縄文時代中期の円筒土器上層b式、ノダップⅡ式、後期前葉の天祐寺式、涌元式、続縄文時代の恵山式、後北式土器などが出土している。

石倉 5 遺跡

標高60ｍの段丘上に位置する。縄文時代前期が主体となる遺跡である。出土遺物は土器が縄文時代前期の円筒土器下層式、縄文時代後期前葉のトリサキ式、続縄文時代の恵山式であり、石器はスクレイパーなどのほか、北海道式石冠、扁平打製石器が出土している。

石倉 3 遺跡

石倉川左岸の標高65～72ｍの段丘上に位置する。縄文時代後期前葉を主体とする遺跡である。土坑を伴う不定形な配石が検出されている。

石倉 2 遺跡

急峻な尾根上から縄文時代中期後半を主体とする竪穴住居群が検出された。住居跡11軒、土坑 9 基、Tピット10基、焼土 2 か所、土器集中 4 か所、フレイク集中 2 か所、礫集中 1 か所を検出した。遺物は縄文時代中期、晩期の遺物が出土している。

濁川左岸遺跡

無名沢を挟んで、石倉 1 遺跡の対岸に位置する。検出遺構は、住居跡25軒、土坑187基、石囲い炉を含む焼土66か所、小土坑517基、配石遺構 1 か所、フレイク・チップ集中 1 か所となっている。出土遺物は、土器が縄文時代前期後半の円筒土器下層式、中期前半のサイベ沢Ⅶ式、後半の大安在B式、後期前葉の天祐寺式、トリサキ式、大津式、白坂 3 式、続縄文時代の恵山式、後北式である。石器は、石鏃、石槍、つまみ付きナイフ、北海道式石冠、扁平打製石器などが出土している。

なお近年の調査状況として、平成18年（2006）年 1 月に国指定史跡となった鷲ノ木遺跡の調査内容を記す。

鷲ノ木遺跡は、平成17（2005）年度から、保存整備に関わる事業が継続して行なわれている。その内容は平成17（2005）年は地形測量、環状列石の分析、遺跡保存処置、出土遺物の整理作業、平成18（2006）年から、遺跡の保存目的による範囲確認調査となっている。

このうち範囲確認調査では、平成18、19年の調査で、縄文時代の配石遺構が 2 基、続縄文時代の焼土が16か所、フレイクチップの集中域が 8 か所確認されている（森町教委2008）。

平成20年度の調査では、竪穴住居跡 1 軒、土坑 5 基、焼土 6 か所が検出されている。住居跡は、出土土器から縄文時代後期初頭から前葉にかけてのものとみられ、環状列石と同一台地上に位置している（森町教委2009）。平成21年の調査では、12か所のトレンチを設定し、包含層の土層堆積状況を確認している（南北海道考古学情報交換会2009）。

また森町教育委員会は平成21年、鷲ノ木遺跡、鷲ノ木 4 遺跡から出土した縄文時代後期の鐸型土製品 6 点を町指定文化財とした。鷲ノ木遺跡を中心とした縄文文化の普及活動が盛り上がりを見せつつある。

（立田）

Ⅲ　調査の方法

1　調査区の設定と座標値

調査区は平成14、15、16年度に行った現地調査の際に設定したものを踏襲した。
設定の際には日本道路公団北海道支社（現：東日本高速道路株式会社北海道支社）の「北海道縦断自動車道本茅部工事平面図（２）1000分の１図」を使用している。

工事予定上り線の中央線上の中心杭であるSTA447とSTA448を通る線を基軸のMラインとし、４m方眼を設置した（図Ⅰ－１）。この方眼は南端交点をアルファベットとアラビア数字の組み合わせで呼称する（例：H43、R73）。

この方眼の平面直角座標は第ＸⅠ系で、以下のとおりである。

日本測地系	STA447（杭番号M50）	X=－205858.2892	Y=19294.5633
	STA448（杭番号M75）	X=－205781.8326	Y=19230.1288
世界測地系	STA447（杭番号M50）	X=－205601.8842	Y=19001.4165
	STA448（杭番号M75）	X=－205525.4284	Y=18936.9835

2　発掘調査の方法

調査範囲は濁川の支流である無名沢左岸の丘陵斜面から河岸段丘上にあり、調査済みの範囲を挟み２か所に分かれている。平坦な段丘面をA地区、斜面部をB地区と呼称する。

表土除去・地形測量

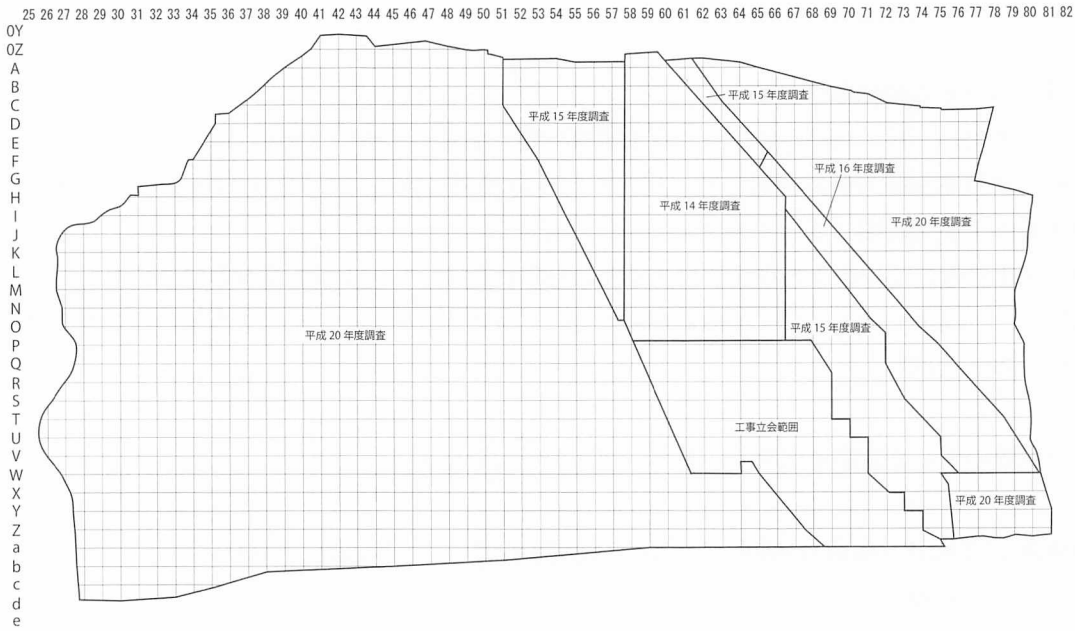
調査に先立ち、表土除去を行った。表土除去では、表土のⅠ層と駒ヶ岳起源降下火山灰（Ko－d）からなるⅡ層を重機により除去した。その後、測量杭の打設、Ⅲ層上面の自然地形測量を行い調査開始前の地形図を作成した。

25％調査・包含層調査

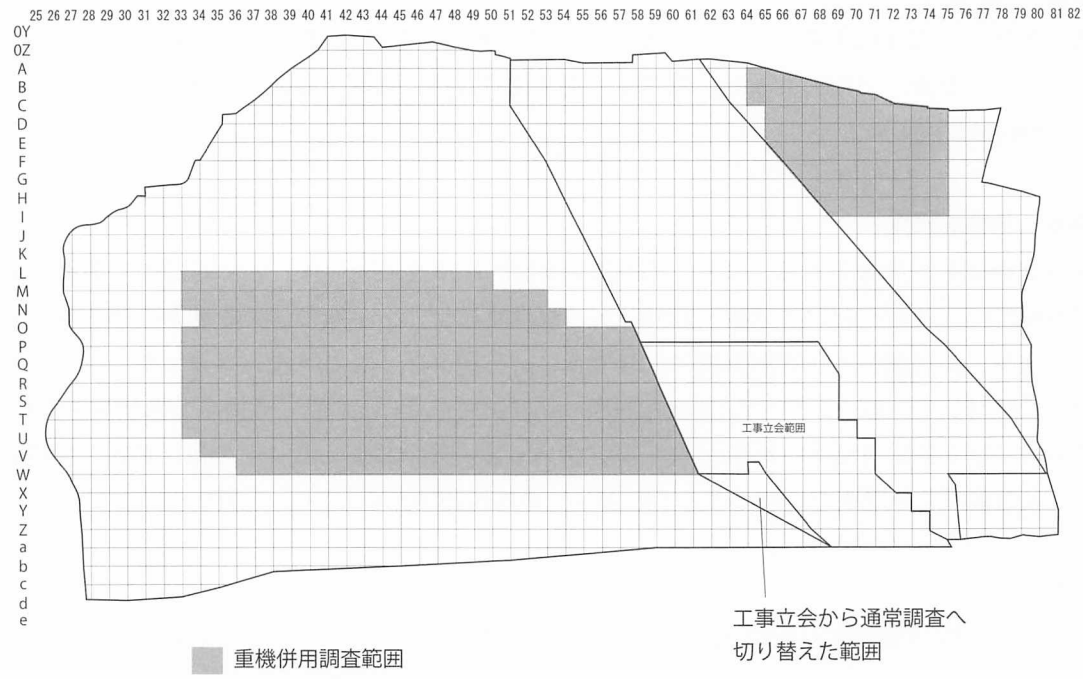
遺物包含層はⅢ～Ⅵ層である。まず、斜面部のB地区を調査範囲全体にわたり適当な間隔をあけて25％調査を行い、各層において遺物・遺構分布の濃淡を確認し、分布の濃い範囲から集中的に調査を行った。なお、25％調査・包含層調査は人力で行い、移植ゴテ、ねじり鎌、スコップ、ジョレンを適宜選択して使用している。つづいてA地区も同様に25％調査を行い、遺物・遺構の分布状況を把握した。その際当初工事立会範囲であったW～a60～68区付近も調査範囲に加えた。その後、遺物・遺構の確認されなかった範囲をⅣ層まで重機によって除去し、遺構確認調査を行った（図Ⅲ－２）。

遺構調査

包含層調査の際に確認された遺構については、土層観察用のベルトを残して掘り下げ、適宜実測図・写真の記録を取った。



図Ⅲ－1　年度別の調査範囲



図Ⅲ－2　重機併用調査範囲位置図

遺物の取り上げ

包含層の遺物は、層位を記録し、調査区ごとに取り上げた。遺構の遺物は出土状況に応じて実測図により、位置・層位・標高を記録して取り上げた。微細遺物の密集部分では遺物を土壌ごと一括して取り上げ、水洗選別した。

調査最終面・地形測量

遺構調査の終了後、Ⅵ層上面の精査を行い、遺物・遺構がないことを確認して調査終了とした。この面において測量を行い、調査最終面の地形図を作成した。（中山）

3　整理の方法

一次整理作業

現地では遺物取り上げ後、水洗、分類し、遺物台帳・遺物カードを作成した。

土器については、二次整理での細分類、接合作業の目安となるよう、おおまかに①縄文のもの、②無文のもの、③沈線文のもの、④折り返し口縁のもの、⑤貼付帯のもの、⑥縄線文のものなど文様の特徴で破片を分け、その特徴を備考欄に記した。その後、台帳整理が終わったものから順次注記作業を行った。対象は土器片、狭義の石器、遺構出土の遺物である。注記は、遺跡名の略称「石１」、発掘区・遺構番号、遺物番号、出土層位の順に記した。住居跡等は略称（IH、IPなど）を冠し、水場遺構は「水１」としてある。また遺構に準じて取り上げた「土器集中」の遺物は土器集中５：「土集５」のように略した。なお、遺物台帳は最終的にパーソナル・コンピューターに入力し管理している。

注記例　遺　構　石１．IH５．18．床
　　包含層　石１．OZ・44．７．Ⅳ

二次整理作業

土器の整理

平成20年11月からの室内作業では、遺物台帳・カードの点検、台帳補正、土器の接合・復元作業、素図原稿の作成、記録類の整理を行った。土器については分類の見直しを行い、接合作業と復元作業を中心に行った。作業にあたっては遺構と包含層間の接合、同一個体の破片を把握することに努めた。また発掘区ごとに、特徴のわかる口縁部破片を抽出し個体数を推定した。

平成21年４月からの作業は、土器の実測、拓影図作成、断面実測、集計表・分布図の作成および図版作成を行った。土器実測図の断面は最も器形の特徴を現している部分を表現するために90度回転した位置で実測したもの、現存部を実測し復元した場合もある。その場合、実測した位置を▼で示してある。破片資料は文様構成・器形のわかる口縁部・胴部の破片を中心に拓影図を作成した。（遠藤）

石器の整理

器種に分類し、形態や製作方法によって細分類を行った。並行して器種とその細分類を代表するものを選択し、実測した。また、一次整理による遺物台帳に、器種、石材、長さ、幅、重量、被熱の有無、使用痕の有無、付着物の有無などの属性を記録した。遺物台帳は、マイクロソフトエクセルに入力し集計等を行った。特徴的なものについては接合を試みたものもある。（福井）

微細遺物の整理

住居跡覆土、住居跡炉跡、住居跡柱穴、石囲炉、剥片集中、包含層の土壌について、炭化物や骨片が含まれるものを採取し、浮遊水洗選別を行った。対象とした遺構・包含層は、IH－6 HF－1、IH－7 HF－1、IH－7 HF－2、IH－8覆土、IH－8 HF－1、IH－8 HP－3、IH－9 HF－1、IS－3、IS－7、IF－1、FC－2～FC－5、OZ49区Ⅳ層骨片包含層である。土嚢にして81袋、2人1組で1日8～14袋のペースで選別し、9日間を要した。その後、土器、フレイク、骨片、炭化材、炭化種子に分類した。分類作業は、作業員2名で11日間かかった。分類した資料の内、骨片、炭化種子について、予備的に同定を行った後、㈱パレオ・ラボに最終的な同定を委託した。炭化材については、一部年代測定資料に用いた。（福井）

記録類・遺物の収納保管

整理作業後の遺物は、報告書掲載のものとそれ以外のものに分けて収納した。

土器の内、報告書掲載のものは図版に対応するよう小分けして収納し、そのほかは分類ごとに遺構別もしくは包含層の場合は発掘区毎の単位で収納した。なお、包含層の土器は口縁部、胴部、底部に分け、文様のわかるものはそれぞれまとめている。

石器の収納は、掲載遺物は図面に対応するように、1点ずつ小袋に入れた後、図ごとに中袋に収納した。未掲載遺物については、1点ずつ小袋に入れた後、器種ごとに中袋に収納した。フレイクについては調査区のアルファベットラインごとに石材別に収納した。

これらの遺物は、遺跡の所在地である森町教育委員会に搬送し、保管される。また、現地調査および整理作業で作成した各種図面、写真フィルム、遺物整理台帳は、道立北海道埋蔵文化財センターで保管される。（遠藤・福井）

4　基本層序

調査範囲は海岸線に沿った北西～南東方向に長い長方形を呈している。その大きさは長辺約220m、短辺約130mであり、二条の沢がある。標高、地形ともにやや変化に富むため、土層も各所で若干異なっている。地形を大まかに二分すると、段丘部（A地区）と丘陵斜面（B地区）に分けることができる。土層の記録にあたってこの特徴を捉えるため、柱状図を3ヵ所（A地区2ヵ所、B地区1ヵ所）で作成し（図Ⅲ－3）、さらに土層断面図を3ヵ所、A地区においてB47～51区、K28～O28区の2ヵ所、B地区のN73～N77～O78～O79間の1ヵ所で作成した（図Ⅲ－4～7）。なお、柱状図中の波線以下にあたる基盤層の堆積は、掘削に関する制約から柱状図とは異なる地点のものを加えたものである。

基本層序の呼称に際しては概ね前報告（北埋調報247）を踏襲したが、Ⅲ層とⅤ層の火山灰を含む土壌、Ⅵ層について異なる様相が見られたため細分を行い、改めて設定した。また、土層の記載には、『土壌調査ハンドブック』（日本ペトロジー学会編2000）を参考にし、土色、土性、粘着性、堅密度、含有物とその含有率について記載した。土色については『新版標準土色帖』（小山・竹原2004）を用いた。

以下基本層序について、前報告の変更点がある場合は根拠を述べ、若干の説明を記した。性質と特徴については、表Ⅲ－1に示した。

Ⅰ層：表土。現代の耕作、植林による堆積。

Ⅱ層：駒ケ岳d降下テフラ（Ko－d）。砕屑物の粒径からⅡa～dの4層に区分した。寛永17（1640）年噴火。

Ⅲ層：クロボク土。降下テフラを挟んでおり、Ⅲa～cの 3 層に区分した。無遺物層である。降下テフラはⅢb層とした。

Ⅲb層：白頭山苫小牧テフラ（B－Tm）。色調と土性により 2 層に区分した部分がある。噴出年代は^{14}C年代測定結果などから、10世紀中葉に絞られつつある（石塚ほか2003、町田・新井2003）。

Ⅳ層：クロボク土。縄文時代～擦文文化期の遺物包含層とされたもの。土質からⅣa、Ⅳbの 2 層に区分した。遺物も概ね対応し、Ⅳa層は縄文時代晩期・続縄文時代、Ⅳb層は縄文時代中期・後期の遺物が出土している。

Ⅴ層：火山灰を含む黒褐色土とされたもの。火山灰層をⅤb層、上位の漸移層をⅤaとし2層に区分した。

Ⅴb層：駒ケ岳g降下テフラ（Ko－g）。調査区全体に不均一に分布する。噴出年代は^{14}C年代で、5,800yrBP前後とされている（中村・平川2004）。

Ⅵ層：濁川軽石流堆積物とその風化再堆積層とされたものである。A地区において水成堆積物を確認したので、土質から以下の 9 層に細分した。Ⅵa層以外は無遺物層である。

Ⅵa層：ローム層。A地区で部分的に認められる。縄文時代早期の遺物包含層。

Ⅵb層：ローム層。濁川軽石流堆積物の風化再堆積層。

Ⅵc～e層：水成堆積物。A地区において認められる。不規則な波状を呈して堆積しており、濁川軽石流堆積物起源とみられる角閃石安山岩、軽石を、Ⅵc、Ⅵd層で明らかに、Ⅵe層ではごくわずかに含んでいる。このことから、層位的先後関係は明確ではないが、濁川軽石流堆積物より上位のものとした。

上位のⅥb層を含めたこの特徴は、「下部は主として安山岩の亜円礫からなる。上部は軽石混じりの砂と中礫の互層からなり、最上部には50㎝の礫まじりロームがある。」という第 1 河岸段丘堆積物（五十嵐ほか1978）と同一のものであるとみられる。これは濁川軽石流堆積物を含むいわゆる石倉層より新しいものとされており、観察結果とも整合している。

Ⅵf～i層：濁川軽石流堆積物。B地区（丘陵斜面部）において確認した。いわゆる石倉層の一部とみられる。角閃石安山岩、軽石の亜角礫を含む粘土を主とする堆積で、噴出年代は約12,000年前とされている（柳井ほか1992）。　（立田）

5　遺物の分類

（1）土器

土器は縄文時代早期に属するものをⅠ群とし、以下前期をⅡ群、中期をⅢ群、後期をⅣ群、晩期をⅤ群とした。続縄文時代のものはⅥ群、擦文時代のものはⅦ群である。また、a・b類に二分したものはa類が前半、b類が後半を意味する。同様にa・b・c類に分類したものはa類が前葉、b類が中葉、c類が後葉である。なお、今回の調査ではⅠ群、Ⅱ群、Ⅶ群は出土していない。

Ⅰ群　縄文時代早期に属する土器群

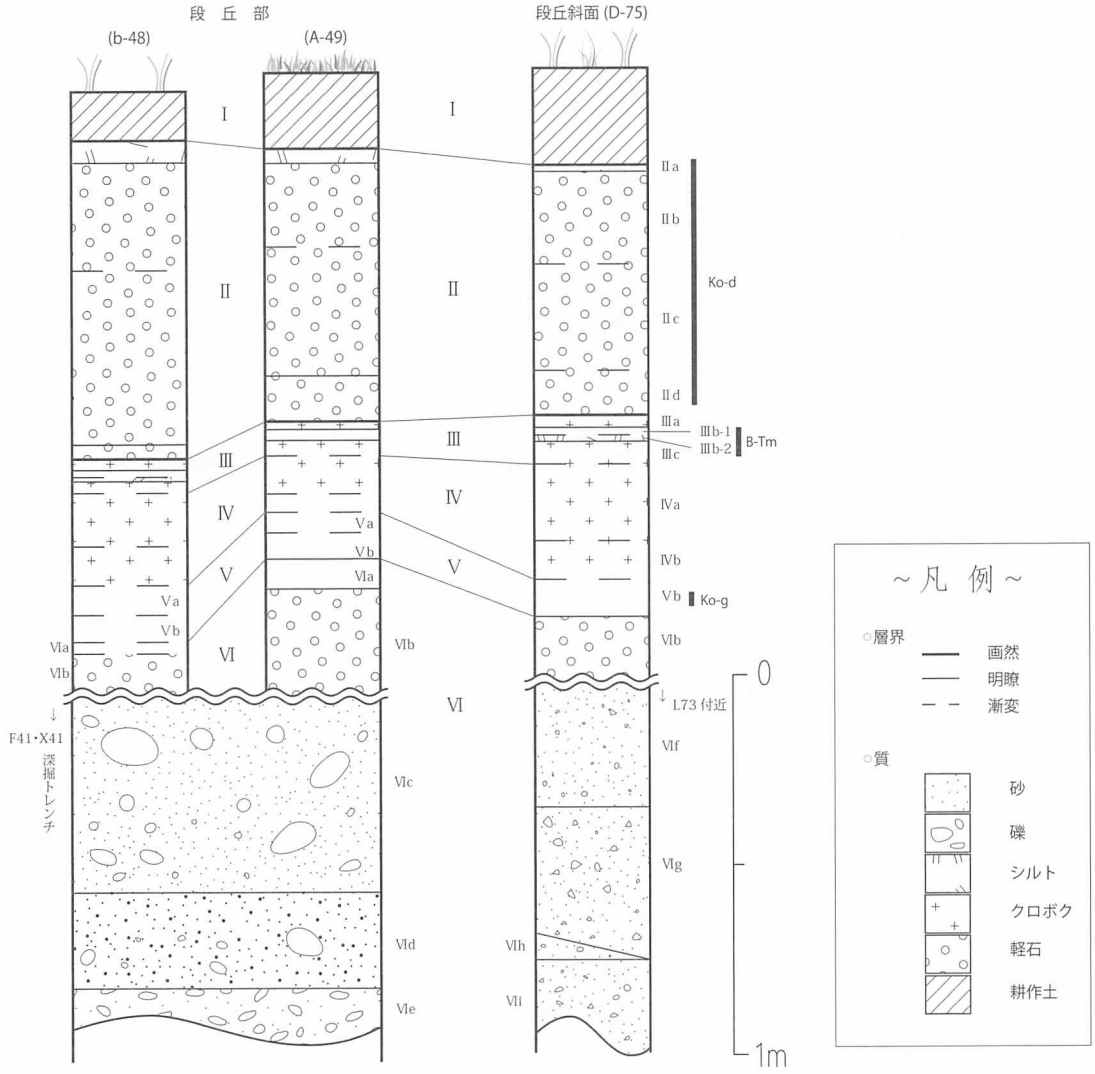
a類　貝殻・沈線文系土器群および条痕文系平底土器群

b類　東釧路式系土器に代表される縄文系平底土器群

Ⅱ群　縄文時代前期に属する土器群

a類　縄文の施された丸底・尖底の土器群

b類　円筒土器下層式に相当するもの



降下火山灰

Ko-d　調査区全体に認められる。層厚 80 ～ 90 ㎝。軽石の粒径から４層に区分可能。独立結晶として含まれる輝石は長柱状のものが多く、結晶面は平滑でほとんど風化していない。長石は不規則な短柱状～塊状。劈開が明瞭なものもある。

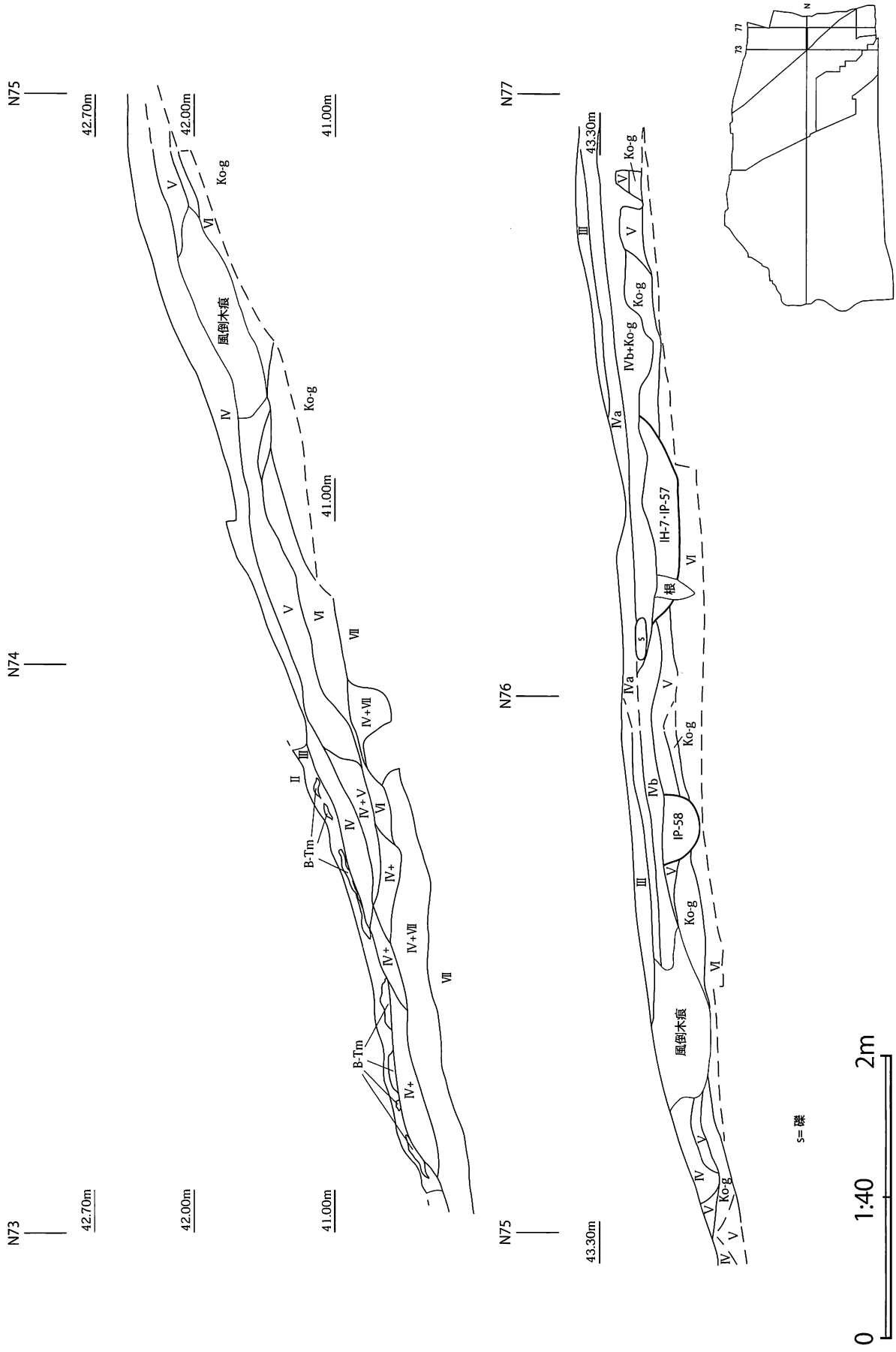
B-Tm　調査区全体に認められる。層厚 3cm。段丘斜面では、Ⅴ層中にレンズ状に入り込む。段丘斜面では不連続、下部ではほぼ連続して認められる。明瞭な部分は色調から２層に分層が可能である。上位（Ⅲｂ-1）がやや白味を帯びる。下位（Ⅲｂ-２）はややシルト質。

Ko-g　調査区全体に認められるが、不均一であり風倒木痕などの落ち込みに厚く堆積する傾向がある。層厚 7 ～ 10cm。段丘部では層の下位に褐色土（Ⅴｃ）が形成されるところがある。扁平型、塊状の火山ガラスを含み、独立結晶として、輝石、長石が認められる。輝石は長柱状で、結晶面は筋状にやや風化している。長石は不規則な塊状、まれに短柱状で、劈開は不明瞭である。

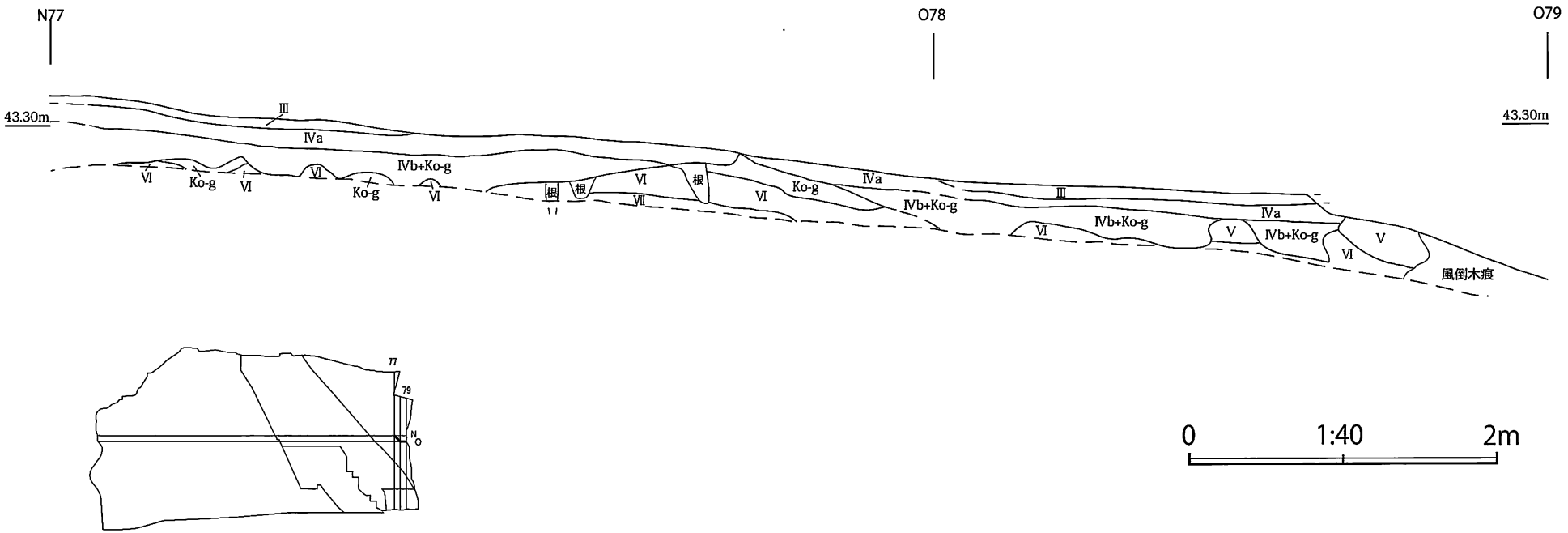
図Ⅲ－３　基本層序柱状図

表Ⅲ－１　基本層序

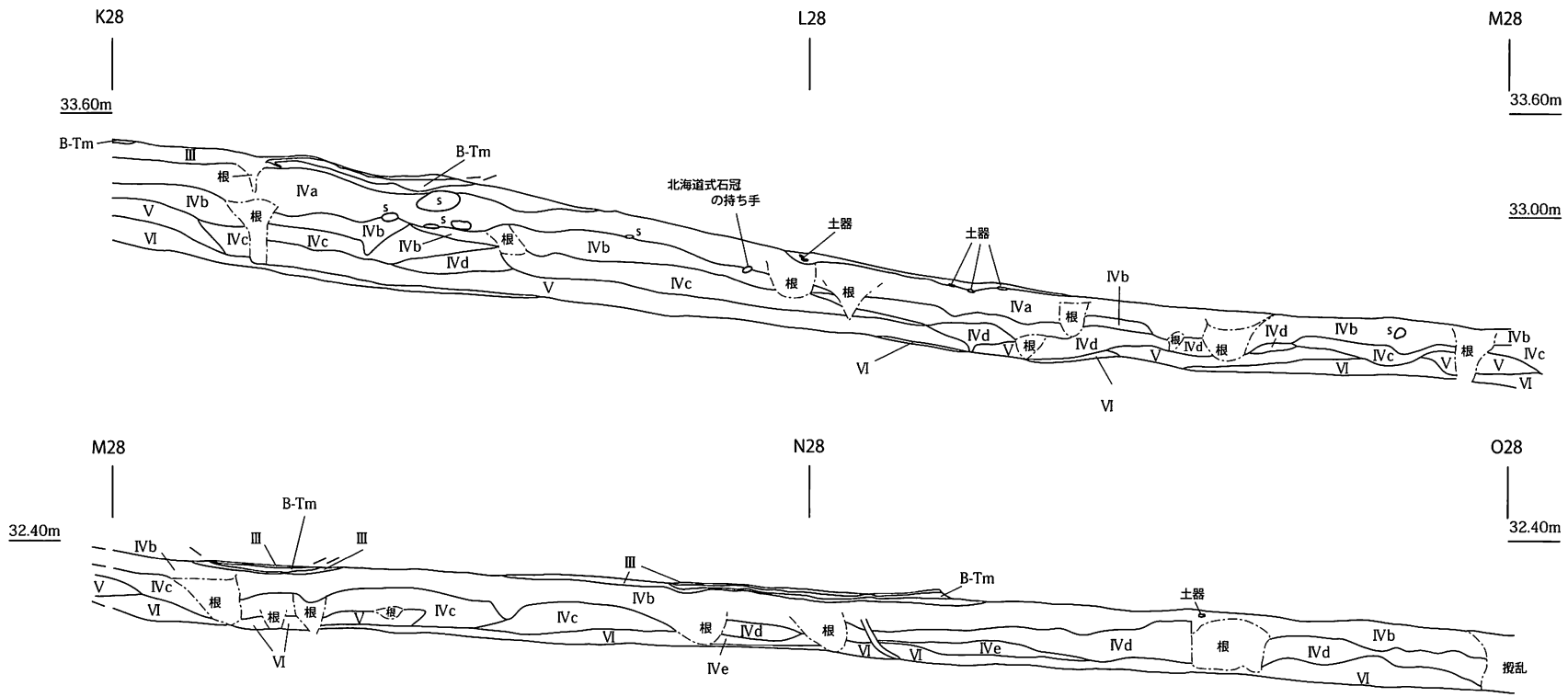
	層	土　色		土　性	粘着性	堅密度	所　　見	層界
	Ⅰ	10YR 3/3	暗褐色	壌土	なし	堅	1 ㎜以下の長石を主とする鉱物粒子を 10% 混じる。層厚 10 ～ 30cm。 上位と下位に分層可能な部分がある、上位＝10YR3/2 下位＝10YR4/3	波状画然
Ko－d	Ⅱa	10YR 6/4	にぶい黄橙色	シルト質壌土	なし	しょう	シルト質の細粒火山灰。長石、輝石の独立結晶あり。軽石はルーペで見えない。層厚 2 ～ 6 ㎝。	平坦明瞭
	Ⅱb	10YR 6/3	にぶい黄橙色	砂土	なし	しょう	概ね 2 ㎜以下の軽石層。長石、輝石の独立結晶含む。下位ほど粒径が粗い。層厚 22 ～ 28 ㎝。	平坦漸変
	Ⅱc	10YR 7/4	にぶい黄橙色	砂土	なし	しょう	概ね 15 ㎜以下の軽石層。2 ㎜以下の長石、輝石の独立結晶を含む。層の中央部が最も粒径が粗い。 層厚 28 ～ 46 ㎝	平坦漸変
	Ⅱd	10YR 7/3	にぶい黄橙色	砂土	なし	しょう	概ね 2 ㎜以下の軽石、長石、輝石の独立結晶からなる。他に比し輝石が多く、 そのためやや色調が暗い。層厚 4 ～ 12 ㎝。	平坦画然
	Ⅲa	10YR 2/1	黒色	埴壌土	中	堅	層の上位に不連続な炭化物層がみられる。層厚 2 ～ 3 ㎝。	不連続漸変
B－Tm	Ⅲb－1	10YR 2/2	黒褐色	埴壌土	弱	堅	Ⅲb - 1、2 層で、層厚 3 ～ 4 ㎝。	不連続漸変
	Ⅲb－2	10YR 3/4	暗褐色	埴壌土	弱	堅	ややシルト質	不連続明瞭
	Ⅲc	10YR 2/1	黒色	埴壌土	中	堅		平坦漸変
	Ⅳa	10YR 1.7/1	黒色	埴壌土	中	堅	層厚 10 ～ 20 ㎝。クラック発達。続縄文～擦文時代の包含層	平坦漸変
	Ⅳb	10YR 2/1	黒色	埴壌土	中	堅	層厚 7 ～ 10cm　上位より光沢のない密な土質。縄文中～後期の包含層	平坦漸変
	Ⅴa	10YR 4/4	褐色	埴壌土	中	堅	段丘上位では確認できない。層厚 5 ～ 8 ㎝。	波状明瞭
Ko－g	Ⅴb	10YR 4/4	褐色	壌土	弱	堅	10YR 5/6　砂壌土（Ko- g）が斑紋状に混じる。層厚 7 ～ 10 ㎝。	波状明瞭
	Ⅵa	10YR 4/6	褐色	埴壌土	弱	堅	弱い腐植。段丘下位で部分的に確認できる。層厚 8 ㎝　縄文早期の包含層	波状明瞭
	Ⅵb	10YR 4/4	褐色	壌土	弱	堅	概ね径 3 ㎝以下の亜角礫、（軽石・角閃石安山岩）を 10% 含む。	平坦漸変
	Ⅵf	10YR 5/6	黄褐色	埴壌土	弱	堅	概ね径 3 ㎝以下の亜角礫、（軽石・角閃石安山岩）を 25 ～ 30% 含む	平坦明瞭
	Ⅵe	10YR 5/6	黄褐色	埴壌土	弱	堅	概ね径 30 ㎝以下の亜円～亜角礫、（軽石・角閃石安山岩）を 30% 含む	平坦明瞭
	Ⅵg	2.5Y 6/1	黄灰色	壌土	中	堅	概ね径 10 ㎝以下の亜角礫、（軽石・角閃石安山岩）を 30% 含む層厚 40 ㎝。	平坦明瞭
	Ⅵd	2.5Y 5/4	黄褐色	砂土	なし	堅	稀に人頭台の礫が混じるが、概ね 2 ㎜以下の細礫、砂粒で構成される。 層位の中位に平行なラミナの発達があるが不連続。淘汰は比較的良い。層厚 25 ㎝。	平坦明瞭
	Ⅵe	10YR 6/2	灰黄褐色	砂土	なし	堅	人頭台以下の亜円、亜角礫で構成される。淘汰は悪い。礫は角閃石安山岩、凝灰質砂岩、 輝石安山岩、頁岩などがある。	平坦明瞭
	Ⅵh	10YR 5/1	褐灰色	壌土	中	堅	径 5 ㎝以下の亜円～亜角礫を 10%含む。主に 1 ㎜程度の亜円砂粒が多い。岩石種はⅥg 層に同じ。 層厚 5 ㎝、グライ化したⅥ h 層。	平坦明瞭
	Ⅵi	2.5Y 7/3	浅黄色	埴壌土	中	堅	粘土中に径 5 ㎝以下の亜円～亜角礫を 10%含む。主に 2 ㎜程度の亜円砂粒が多い。岩質はⅥg 層に同じ。	平坦明瞭

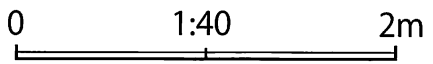


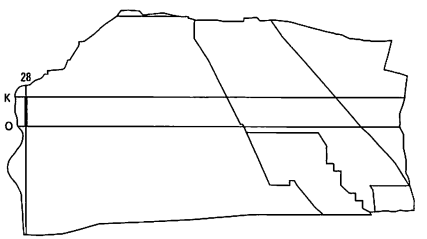
図Ⅲ－４　メインセクション図１



図Ⅲ－5　メインセクション図２

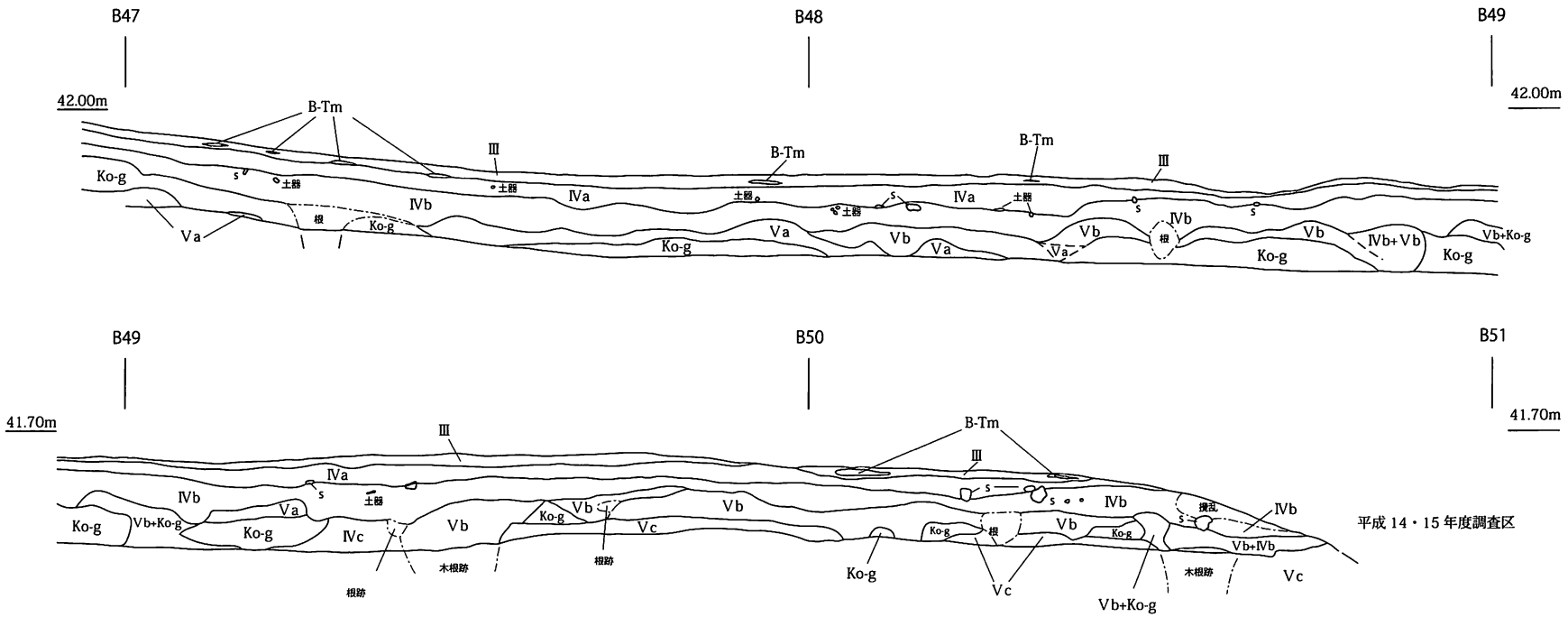




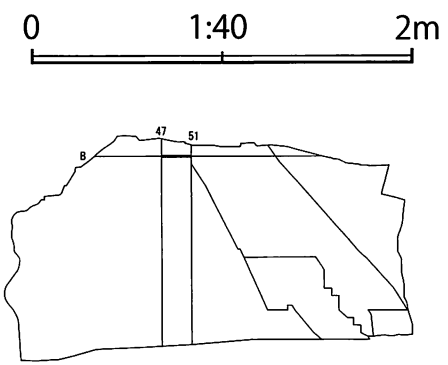


Ｂ－Ｔｍ：7.5YR4/4　褐色　堅　なし
Ⅲ層：7.5YR2/1　黒色 壌土 堅　中
Ⅳa 層：10YR2/1　黒色 壌土 軟～堅
Ⅳｂ層：10YR2/1　黒色 壌土　堅　弱　Ⅳa≫Ⅴ
Ⅳｃ層：10YR2/2　黒褐色 壌土　軟～堅　弱　Ⅳa＞Ⅴ
Ⅳｄ層：「7.5YR3/3 暗褐色」と「7.5YR2/2 黒褐色」が一対一で混じる
　壌土　軟　弱　Ⅳa＋Ⅴ
Ⅳe 層：「7.5YR3/3 暗褐色」>「7.5YR2/2 黒褐色」　軟　なし　Ⅳa＜Ⅴ
Ⅴ層：7.5YR2.5/8 明褐色　シルト質壌土　　Ｋｏ－ｇ主体の漸移層
Ⅵ層：7.5YR4/4 褐色　シルト質壌土　軟～堅　弱
濁川ローム N～O－28 間については下部に粒径 1 cm の軽石（あまり発泡していない）を含む

図Ⅲ－６　メインセクション図３



Ｂ－Ｔｍ：7.5YR4/4 褐色土　堅　なし
Ⅲ層：10YR3/3　暗褐色土 堅　弱い　壌土
Ⅳa 層：10YR2/2　黒褐色土 堅　弱　壌土　粒径５mm程の亜角礫１～５％混じり
Ⅳｂ層：10YR2/1　黒色土 堅　弱　壌土　粒径５mm程の亜角礫１％混じり
Ｋｏ－ｇ：5YR3/6 暗赤褐色土と 7.5YR4/4 褐色土が一対一で混じる　堅　弱
Ｖａ層：7.5YR4/4　褐色土 堅　弱　シルト質壌土　　Ⅳ(漸移)層＜Ｋｏ－ｇ
Ｖｂ層：10YR3/3　暗褐色土 堅～軟　弱　シルト質壌土　　Ⅳ(漸移)層＞Ｋｏ－ｇ
Ｖｃ層：7.5YR4/4　褐色土 堅　中　シルト質～砂壌土



図Ⅲ－７　メインセクション図４

Ⅲ群　縄文時代中期に属する土器群
　a類　円筒土器上層a式、b式、サイベ沢Ⅶ式、見晴町に相当するもの。
　b類　榎林式、大安在B式、ノダップⅡ式、煉瓦台式に相当するもの
Ⅳ群　縄文時代後期に属する土器群
　a類　天祐寺式、涌元式、トリサキ式、大津式、白坂３式に相当するもの
　b類　ウサクマイC式、手稲式、ホッケマ式に相当するもの
　c類　堂林式、三ツ谷式、湯の里３式に相当するもの
Ⅴ群　縄文時代晩期の土器群
　a類　大洞B式、大洞B－C式とこれに並行する在地の土器群
　b類　大洞C_1式、大洞C_2式とこれに並行する在地の土器群
　c類　大洞A式、大洞A´式とこれに並行する在地の土器群
Ⅵ群　続縄文時代の土器群
　a類　恵山式に相当するもの
　b類　後北式に相当するもの

（遠藤）

（２）石器等

石器は、剥片石器、石斧、礫石器、石製品に大別し、さらに器種分類を行った。定型的な石器については、形態、製作方法により細分類を行った。大きさは、㎝を単位として用い、小数点第二位まで測った。長さ、幅は、定型的なものについては、長軸を基準とし、不定型なものについては、剥片剥離軸を基準に長方形を想定し測定した。厚さは最大厚を測った。重量は、ｇを単位として用い、小型のものについては小数点第二位、大型のものについては体重計を用いたため100ｇ単位まで量った。また、礫石器に付した記号は、｜—｜はすり痕、∨—∨は敲打痕を示す。スクリーントーン等については、ドットが使用による光沢が見られたもので、濃い部分はより明瞭な光沢がみられた部分を示している。なお、文中で石器という場合は、剥片、礫以外の石器類を示すこととした。

剥片石器

石鏃　押圧剥離により両面が剥離され、尖頭形を呈す５㎝未満のもの。
石槍（又はナイフ）　押圧剥離によって両面が剥離され、尖頭形を呈す５㎝以上のもの。
石錐　錐状の突出部が作り出されたもの。
つまみ付ナイフ　端部に抉りを入れることで、つまみ部が作り出されたもの。
ナイフ　両面を調整することで側辺に刃部を形成するもので、尖頭形とならないもの。
箆状石器　両面が調整された石器で、一端に直線状ないし弧状の刃部が形成されるもの。
スクレイパー　素材の一面に剥離を加え、刃部とするもの。
　サイドスクレイパー（削器）　剥離が素材の側辺に連続的に加えられたもの。
　抉入石器　抉り状の刃部が細部調整で加えられたもの。
両面調整石器　剥離が素材の両面に施されるが、粗い調整で、尖頭形でないもの。
楔形石器　対向する小剥離が素材の両端部にあるもの。また、いわゆる両極剥離打法により発生する各種の割れの特徴を持つもの。
Rフレイク　散漫な剥離が加えられた不定型のもの。
Uフレイク　使用された結果としての、微細な剥離などが見られる不定型のもの。

フレイク（剥片）　石核、石器から剥離されたもので、二次的な剥離を受けていない、もしくは微細な剥離などが見られないもの。
石核　石器素材となりうる大きさ・形状の剥片を剥離した痕跡が複数あるもの。
異形石器　突起や抉りを入れるなどの調整を加えることで、一定の形態とするもの。

石材等

石材

剥片石器の石材については、頁岩、メノウ、黒曜石、珪化岩、デイサイトなどと特定したが、厳密な岩石学的分類とは一致しない場合もある。

光沢

スクレイパー、つまみ付きナイフ、Rフレイク、Uフレイクに見られたもので、使用に伴って形成されたものとみられる。詳細については坂本（2002、北埋調報171）を参照願いたい。　（福井）

礫石器等の分類について

石斧関連製品、礫石器、石製品の分類作業に当たっては、先行報告（北埋調報247）の分類項目に従い分類し、器種別の分類にとどめ細分は行なっていない。名称は以下のとおりであり、掲載の順序もこれに従っている。
石斧：石斧・石のみ
礫石器：たたき石・すり石・扁平打製石器・北海道式石冠・砥石・加工痕のある礫・石皿・台石・礫・礫片
石製品：軽石製石製品・有孔石製品

これらの石器の石材については、20倍のルーペを用いて、鉱物、組織を観察し、堆積岩、あるいは火成岩、変成岩かを判断した。さらに５万分の１地質図幅説明書、『濁川』、『駒ケ岳』、『八雲』を参照し、現地において周囲の河川で採取した礫を参考にしたうえで名称を決定した。

名称の決定に当たって、堺幾久子の助言を得た。第Ⅶ章において、石器の石材について、その特徴と判断した手順を示しておいた。

石材の表記に当たって以下の略号を用い、一覧表に記してある。
SS砂岩、MS泥岩、Sh頁岩、S. Sh珪質頁岩、STシルト岩、CM礫岩、Chチャート、Qua珪岩、S. W珪化岩、Agメノウ、Rh流紋岩、Daデイサイト、Gra花崗閃緑岩、An安山岩、Hb－An角閃石安山岩、Px－An輝石安山岩、Di閃緑岩、Bs玄武岩、Dol粗粒玄武岩、Ga斑レイ岩、Peカンラン岩、Tu凝灰岩、G－Tu緑色凝灰岩、Pu軽石、Sl粘板岩、Sc片岩、Gr－Sc緑色片岩、Gl－Sc藍閃石片岩、Spr蛇紋岩、Ta滑石、Ap－Ba無斑晶質玄武岩

礫・礫片について

出土した遺物は、全て遺物として取り上げ、保管しているが、礫・礫片について包含層から出土したもののうち、特に有意なものでない限り記録を作成したのみで廃棄している。礫についての詳細は、Ⅶ章に記載した。　（立田）

Ⅳ　遺構と遺構出土の遺物

遺構の概要

検出された遺構は住居跡６軒、土坑44基、小ピット87基、集石５か所、剥片集中５か所、焼土１か所、水場遺構１か所である。このほか遺構に準じて取り上げた土器集中が16か所あるが、これについてはⅤ章包含層出土の遺物で取り扱うこととした。

住居跡は６軒検出された。IH－９・10がA地区、そのほかB地区から検出された。IH－10が中期前半期の可能性が高いほかは後期初頭～前葉に属するもので、石囲い炉を持つ特徴がある。

土坑は中期前半期から後期前葉に属するものである。時期の確実にわかるものではサイベ沢Ⅶ式期のもの（20～23）と後期前葉のもの（25・26、34、45、47、52～56、59，61）がある。小型のフラスコ状土坑は墓の可能性がある。小ピットはB地区の遺構・遺物の集中地区周辺部から検出されている。配置がわかるものはほとんどない。集石はA地区から３か所、B地区から２か所見つかっている。石囲い炉が２基ある（IS－４・７）。剥片集中は石器製作に関連するもので、黒曜石製剥片で構成されるものがある（FC－２～５）。

水場遺構はB地区の小さな沢部分から検出されたもので、縄文時代中期中葉および後期前葉の時期に、水場および道具廃棄場として利用されたもので、土器・石器が多量に出土した。　（遠藤）

１　住居跡

IH－５（図Ⅳ－３～６、表１・４・５、図版４・５・36・37）

位　置　M・N77・78　　**立　地**　標高43.2～42.7ｍ付近の緩斜面

平面形　不整楕円形　　**規　模**　(2.87)／(2.85)×(2.46)／(2.34)×0.24ｍ

確認・調査　Ⅵ層上面で、Ⅳ層起源の黒褐色土の落ち込みとして検出した。土層観察用のベルトを十字に残して黒褐色土を掘り下げたところ、平坦な床面と明瞭に立ち上がる壁を南側で確認した。

覆　土　２・３層はⅣ層主体の黒色土層。いずれもローム粒を含む。特に３層ではロームブロックが散在する。覆土の凹みには、Ⅳb層が自然堆積していた。

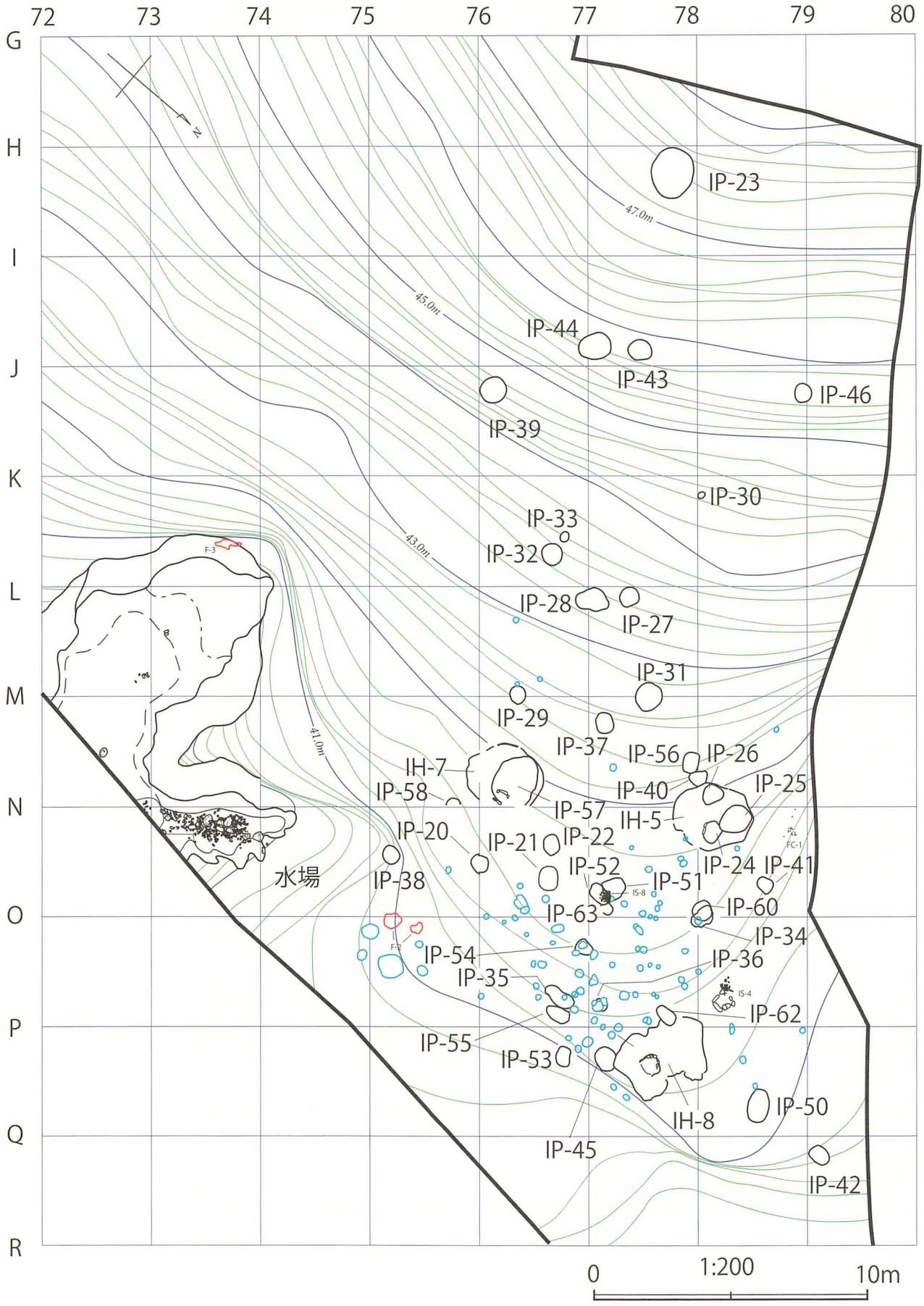
形　態　壁は南側が明瞭で、周溝が確認された。北側および東西側の壁は不明瞭で、床とみられる範囲から住居のプランを推定した。床はほぼ平坦で、地形上やや標高の高い南側からやや低い北側に向かって、緩やかに傾斜している。重複する遺構にIP－24・25・26・40がある。IH－５より、IP－24・25は新しく、IP－26・40は古いとみられる。

付属遺構　**HF－１**：住居中央よりやや東寄りの床で、２点の礫が直列した状況で出土した。IP－24に切られるため、ほかの礫や焼土は残っていないが、石囲い炉が存在したものとみられる。礫のうち１点は台石が転用されている。

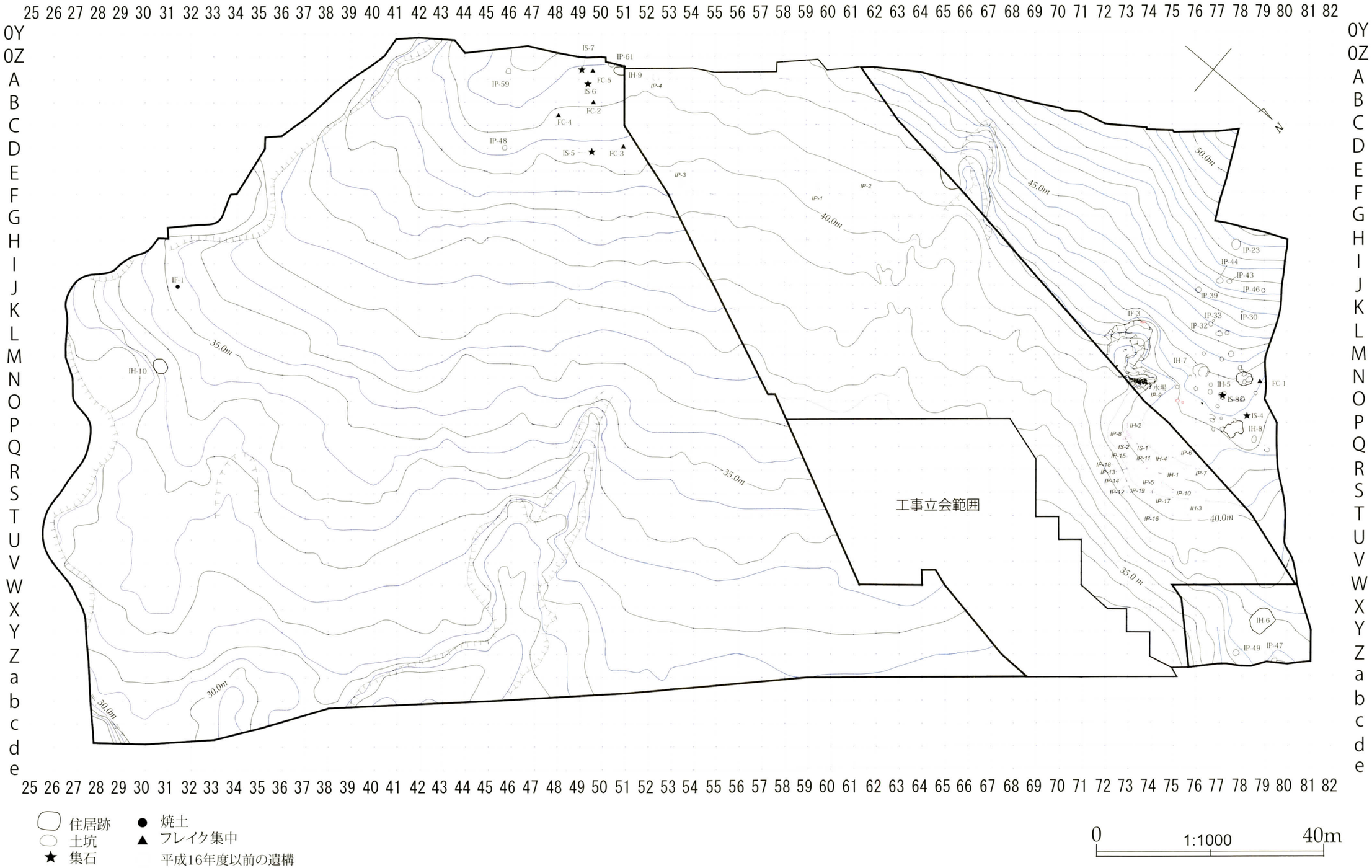
HP－１～８：８基をHPとした。HP－６～８は住居床面推定範囲をはずれるが、IH－５に関連するものとした。HP－２・４・６は床面からの深さが25㎝前後で、特にHP－４はその下部において同一個体の土器片により根固めをしていた。

遺物出土状況　HP－４・６および住居跡覆土から、縄文時代後期前葉の土器片が出土している（№１・２・４～10・12～17）。石器としてスクレイパー（№11）、たたき石、台石片、剥片（№３・11）が覆土から出土している。

時　期　出土遺物から縄文時代後期前葉である。　（福井）



図Ⅳ－１　遺構位置図（１）G～O・72～80区


工事立会範囲
35.0m
40.0m
45.0m
50.0m
30.0m
水場
住居跡
土坑
集石
焼土
フレイク集中
平成16年度以前の遺構
0
1:1000
40m

図Ⅳ－２　遺構位置図（２）

遺　物　土器：１～15はいずれもⅣ群a類である。１は本住居の覆土出土のものと覆土中に掘り込まれた土坑IP－25および周辺の包含層（M78、N77・78，P77区）から出土した破片が接合したものである。底部は欠損するが全体の３の１ほどが残存する。胴部下半で僅かに張り出す深鉢形で、４か所に穏やかな波頂部がある。文様帯は折り返し口縁部と胴部にあり、胴部下半は無文で炭化物が付着している。無文地に棒状施文具で文様が描かれ、口縁文様帯では波頂部の４か所に円形文を配し、その間を細長い方形の文様で埋めている。胴部文様帯は下半を２条一対の沈線文で区画した中に、円形文を中心に上下に弧状文様を配し、渦巻文様と組み合わせている。さらに口縁部文様帯と同様の細長い方形文様がその間に部分的に充填されている。薄手で胎土は緻密で焼成がよい。化粧粘土の剥落が目立つ。２は口縁部と底部を図上で復元したものである。胴部上半でやや膨らむ器形で波状口縁である。口縁部には１に類する方形の文様があるとみられる。胴部は２条一対の沈線で流水文を多段に施し弧線でつなぐ文様であろうか。施文後器面をなで調整している。３は覆土とHP－６および周辺の包含層出土のものが接合した。緩やかな波状を呈する大型深鉢。折り返し口縁部には細長い方形文が配され、胴部は蛇行する沈線文を垂下させている。１～３はトリサキ式から大津式の古い段階にかけてのものである。４～７は口縁部、４は小さな波頂部と持つものとみられ、２条一対の浅い沈線で文様帯を区画した中に、上下で相対する位置に弧状の文様が描かれる。折り返し口縁部には、２に類した文様がかすかに観察できる。５、６はHP－６から出土したもの。５は沈線文が、６は折り返しのある口縁部。７は無文部であるが折り返し口縁の可能性がある。８～13は沈線文、縄文の施された胴部破片。11は０段多条の原体、12は縦行縄文が施されている。14は底部付近のもの。15の拓影は底部の内面である。指頭で調整した際のくぼみが複数観察できる。（遠藤）

剥片石器：図示したものはいずれも覆土出土で、頁岩製品。16～21は、同一母岩で、遺構図№11の地点からまとまった状態で出土したものである。16は、スクレイパーで、左辺に緩やかに外湾する刃部を持つ。剥離は腹面側になされる。18は、Rフレイクで、末端辺腹面に粗い剥離が施される。17・19～21はUフレイクで、微細剥離が見られるもの。22は、頁岩製石核で、打面・作業面を頻繁に移動して、剥片剥離している。大きく円礫面が残ることから、素材は円礫から剥がした大形剥片と推定される。（福井）

礫石器：23はたたき石。歪で小ぶりな無斑晶質玄武岩を用い、端部で敲打するものである。24は台石。概ね円形を呈する扁平礫を素材とする。一側縁と正面中心よりやや上に敲打痕がある。被熱によるとみられる黒変部分が認められる。（立田）

IH－６（図Ⅳ－７～10、表１・４・５、図版６・７・37・38）

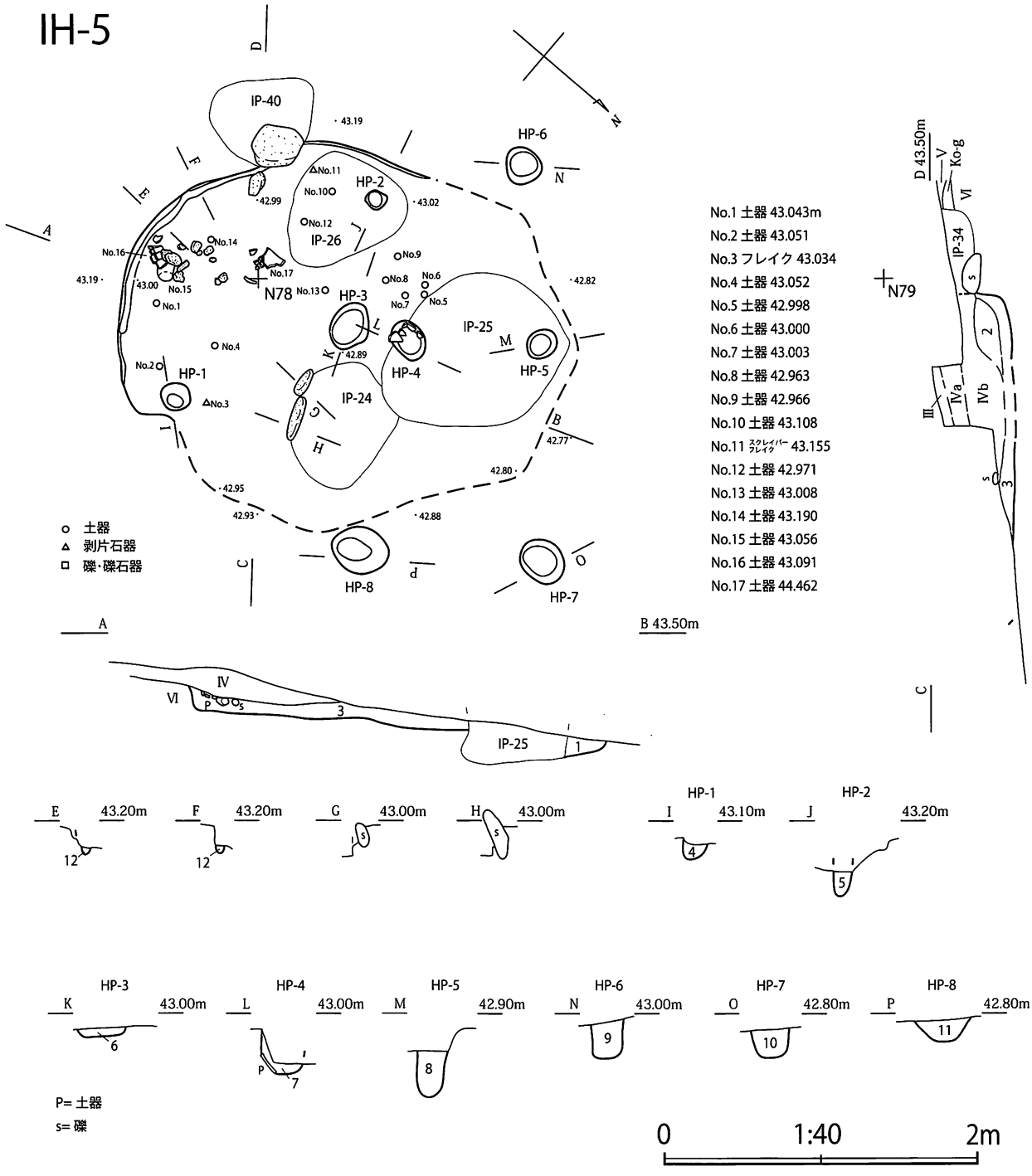
位　置　X・Y78・79　　**立　地**　標高38.5～38.1ｍ付近の緩斜面

平面形　不整楕円形　　**規　模**　4.53/4.23×3.32/3.14×0.12ｍ

確認・調査　X79区を掘り下げていたところ、Ⅵ層上面で、Ⅳ層起源の黒色土の落ち込みとして検出した。土層観察用のベルトを十字に残して黒色土を掘り下げたところ、平坦な床面と明瞭に立ち上がる壁を南側で確認した。

覆　土　１層はⅣ層主体の黒色土層で、ローム粒を含む。床下には、堀方が確認された。堀り方は８～10層のようにロームブロックを多く含む土層に埋められていた。覆土の凹みには、Ⅳb層が自然堆積していた。３・６層は掘り上げ土とみられるが、平面での広がりは確認できなかった。

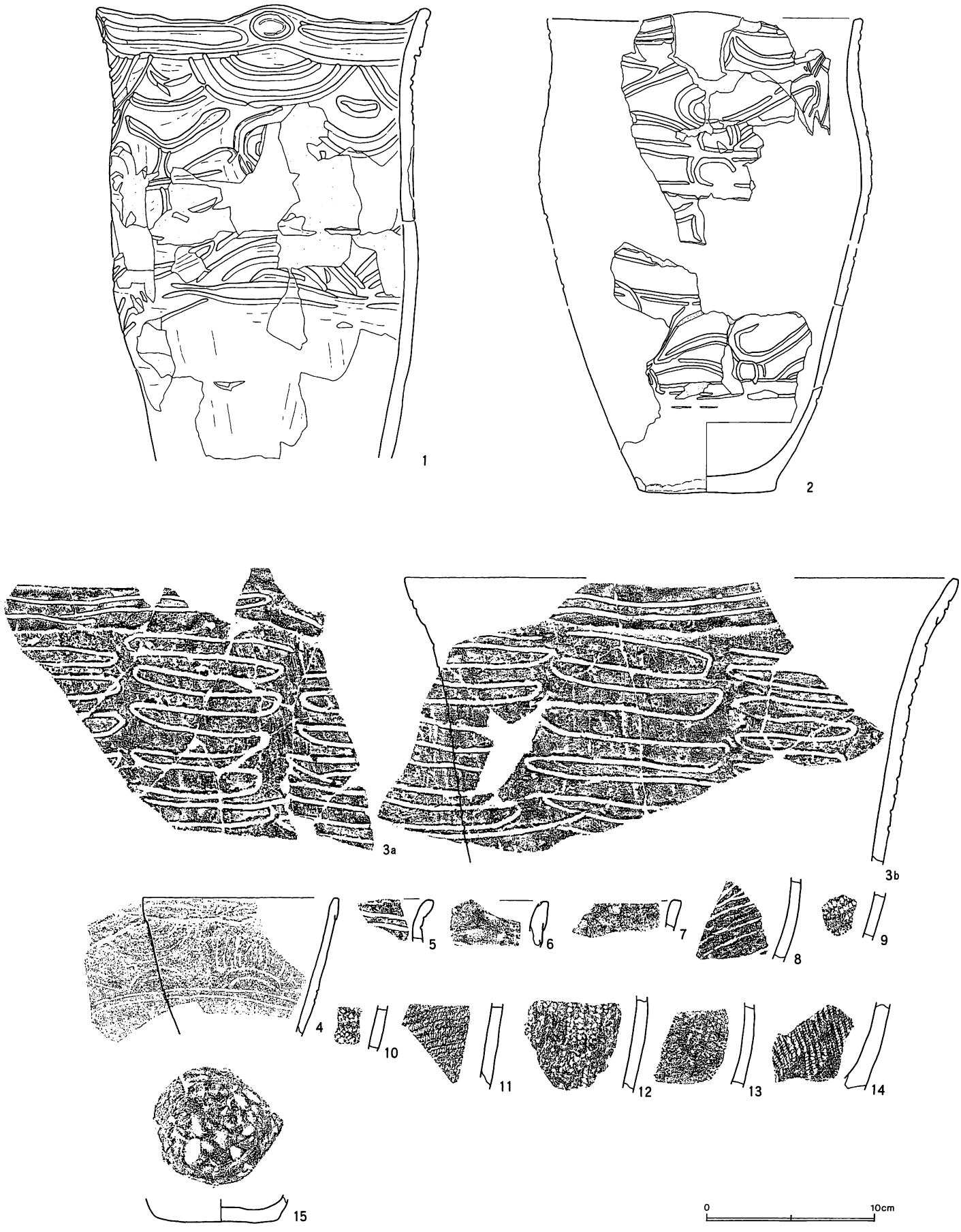
形　態　壁は南側および東西側で確認された。X79区では、風倒木の存在から壁を検出することが出来ず、床とみられる範囲から住居のプランを推定した。床はほぼ平坦。西側の壁上で一対の配石があり、その部分の壁が住居内側に張り出していた。この張り出しは住居掘削時に内側に張り出すように掘り残されたもので、入り口構造とみられる。



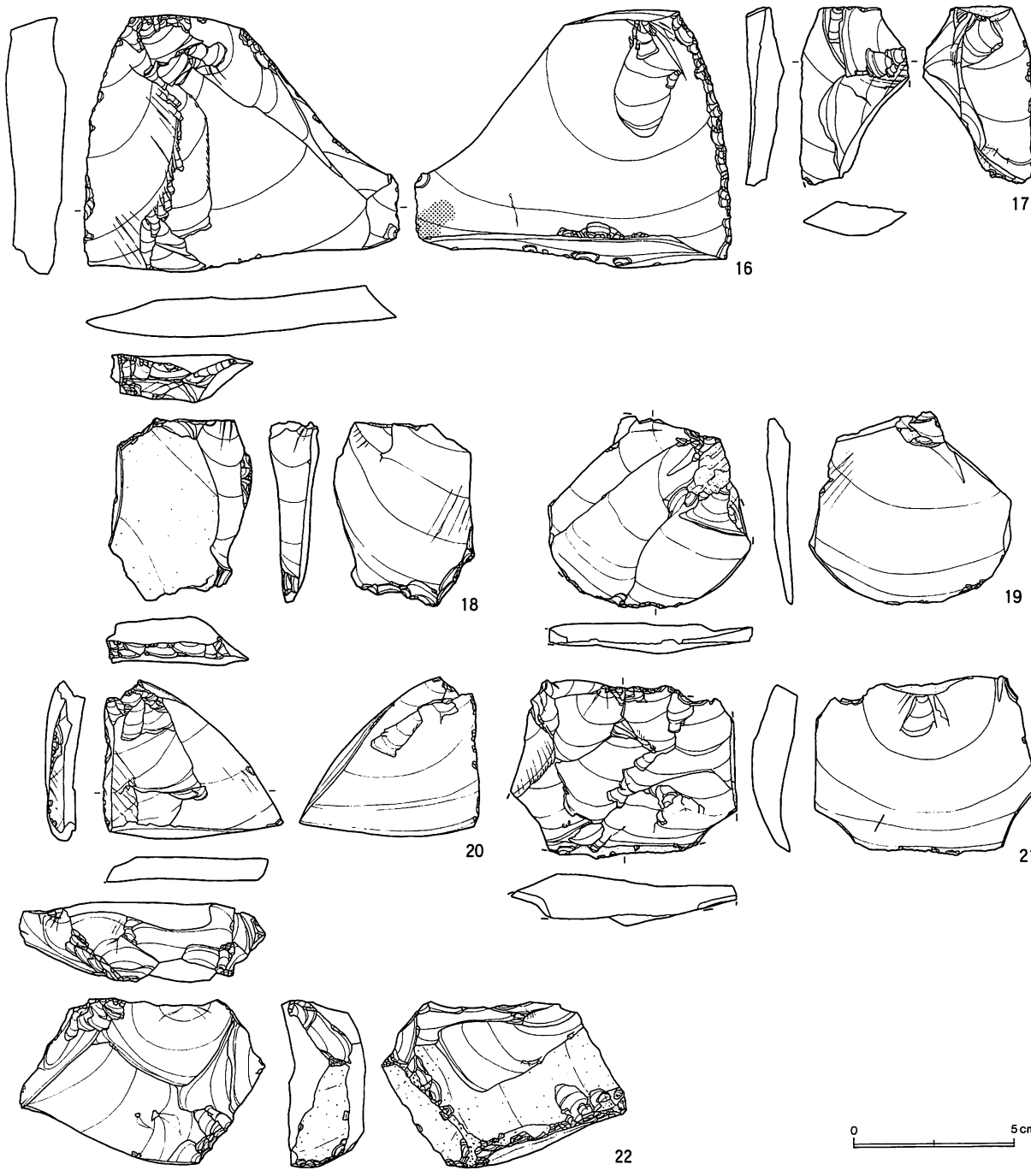
IH-5 土層

1 10YR2/3 黒褐色 ややしまる ローム粒含む Ⅴ層相当
2 10YR2/2 黒褐色 ややしまる ローム粒多く、炭化材片含む
3 10YR2/1 黒色 しまる ローム粒・ロームブロック含む
4 10YR2/2 黒褐色 しまる 粘性弱 ローム粒・ロームブロック含む
5 10YR4/2 灰黄褐色 しまる 粘性弱 ロームブロック多く含む
6 10YR3/2 黒褐色 しまる 粘性弱 ロームブロック多く、ローム粒・炭化材片含む
7 2.5Y3/2 黒褐色 しまる 粘性弱 ロームブロック多く含む
8 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色 しまる 粘性弱 ローム粒・ロームブロック・炭化材片含む
9 10YR2/1 黒色 しまり弱 粘性弱 ローム粒・ロームブロック含む
10 2.5YR3/3 暗オリーブ褐色 しまる 粘性弱 ロームブロック多く含む
11 10YR3/2 黒褐色 しまる 粘性弱 ロームブロック・炭化材片含む
12 10YR2/1 黒色 しまる 粘性弱 ローム粒・炭化材片含む

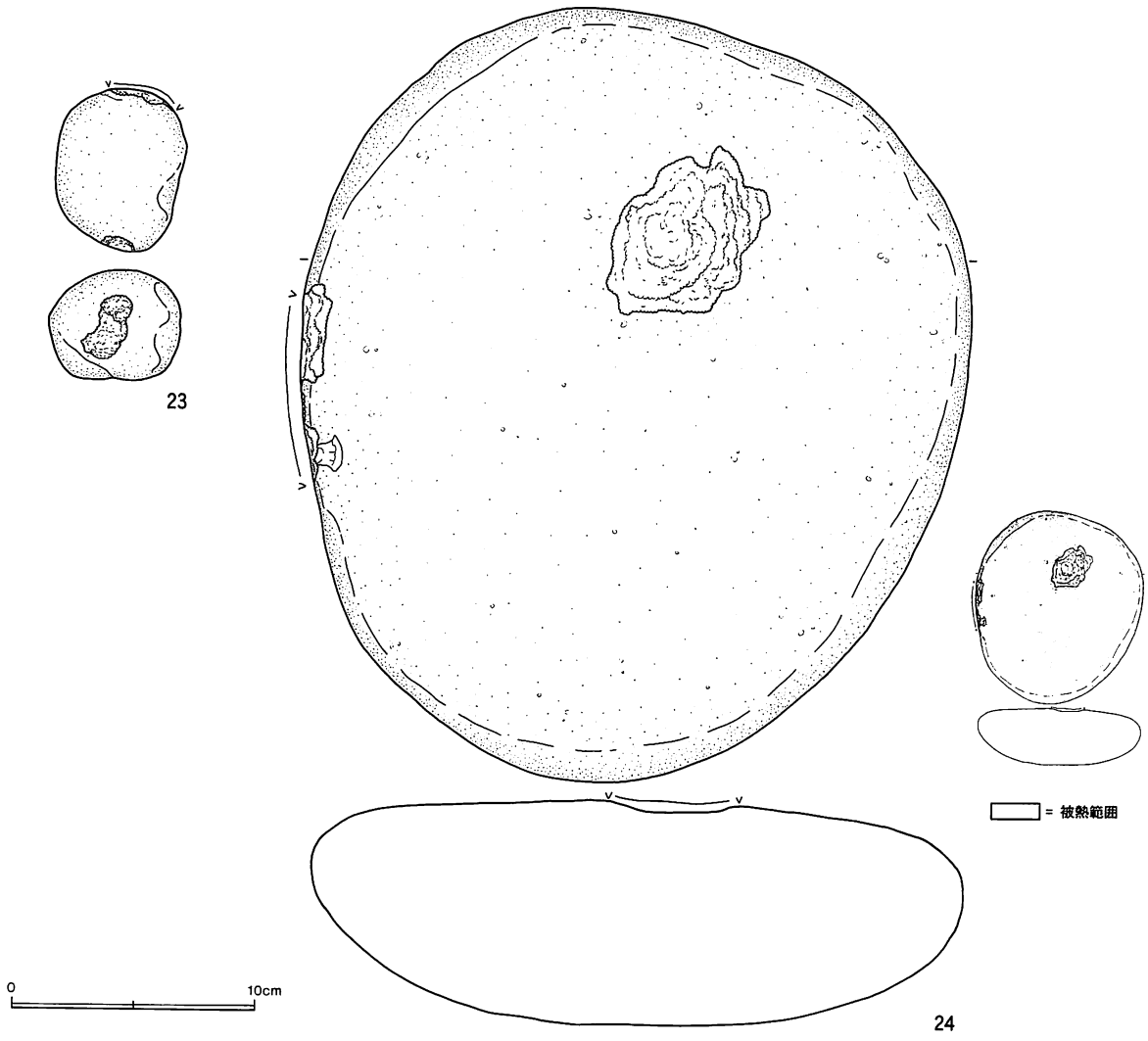
図Ⅳ－3 IH－5



図Ⅳ－４　IH－５出土の遺物（１）



図Ⅳ－５　IH－５出土の遺物（２）



図Ⅳ－6　IH－5出土の遺物（3）

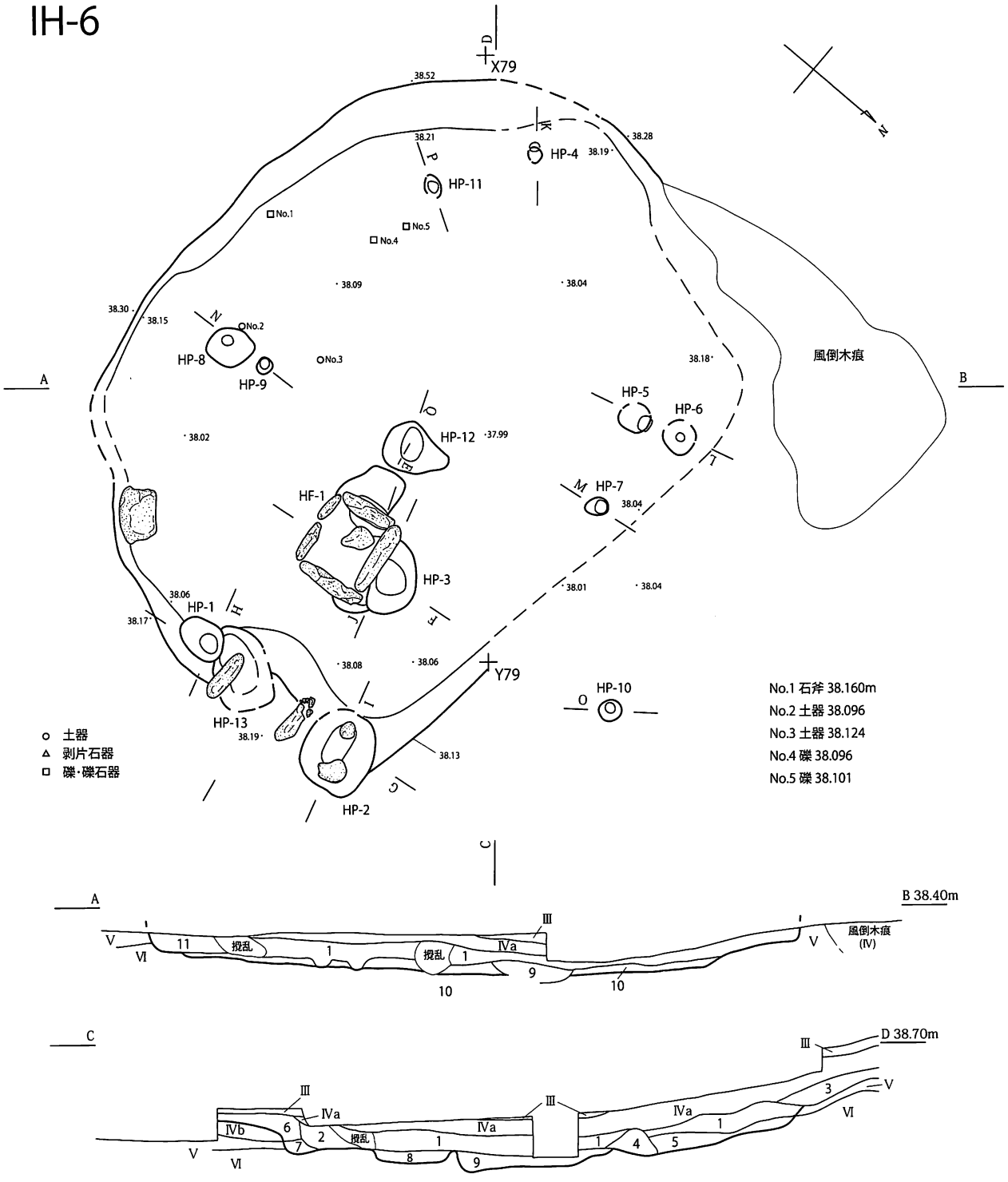
付属遺構　HF－1：住居中央よりやや北東寄りの床で、礫が方形に配された状況で検出した。明瞭な焼成面は確認されなかったが、石囲い内の土層27下部で焼土が確認できた。石囲いの礫は、東西の2点が深い堀方を持って、しっかりと据えられていた。一方、南北の礫は浅い堀方によって据えられていた。礫のうち北側の1点は台石が転用されていた。

HP－1～12：12基をHPとした。HP－10は住居床面推定範囲をはずれるが、IH－6に関連するものとした。HP－1・5・6は床面からの深さが40cm前後であった。

配石：IH－6の西側壁上で、扁平な楕円礫の長辺を上下とした一対の配石が確認された。南側の礫は、堀方としてHP－13を掘り、その上に台石転用礫を据えていた。北側の礫は、石質も悪く、堀方も認められなかったことから、Ⅵ層に含まれた自然礫をそのままの状態で利用したものと考えられる。

遺物出土状況　HP－6および住居跡床面（No.2・3）、覆土から、縄文時代後期前葉の土器片が出土している。石器として石斧（No.1）、たたき石（No.4）が床から、スクレイパー、Uフレイク、台石・石皿片、剥片、礫（No.5）が覆土から出土している。

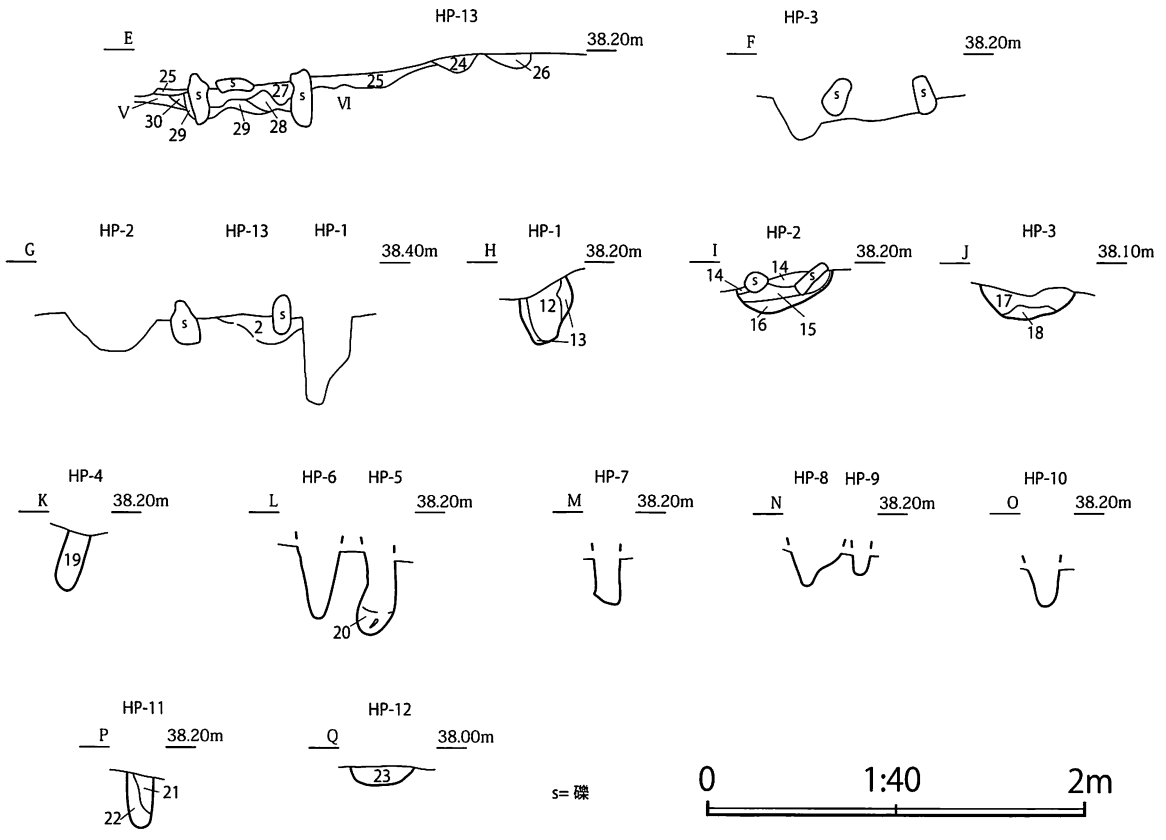
時　期　出土遺物から縄文時代後期前葉である。炉跡HF－1採取炭化材を年代測定したところ、3635±30yrB.P.（PLD－12076）の測定値が得られた。（福井）



IH-6 土層

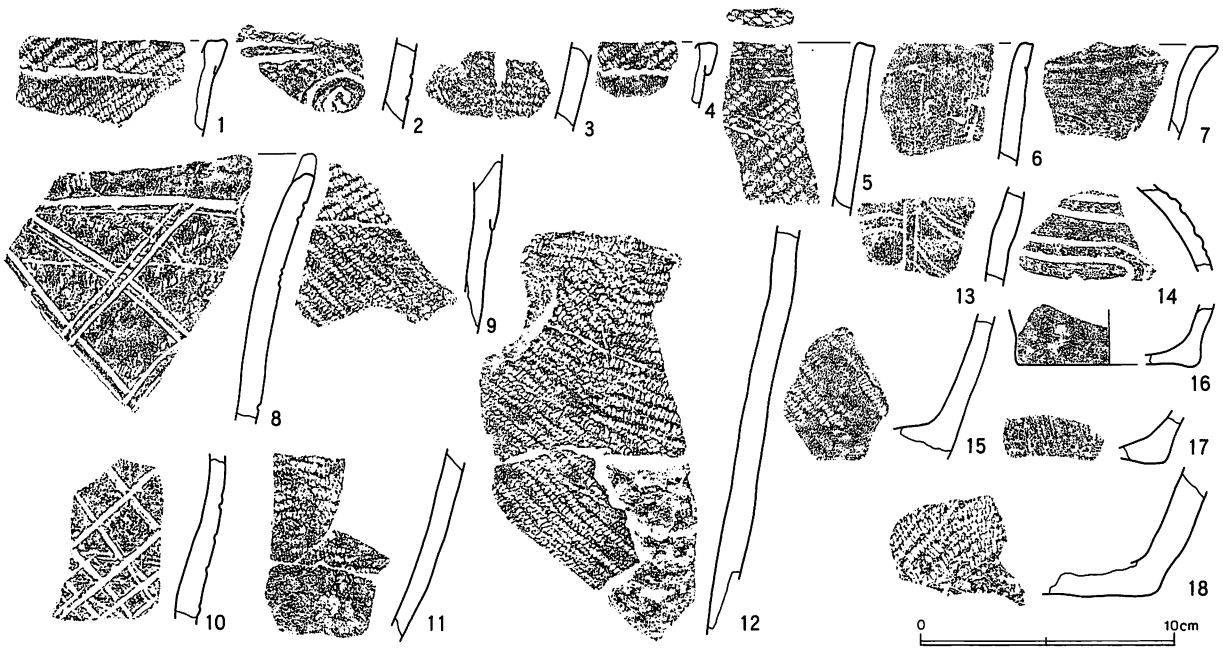
1 10YR1.7/1 黒色 ややしまる 粘性弱 ローム粒少量含む
2 10YR2/3 黒褐色 ややしまる 粘性弱 ローム粒少量含む
3 10YR2/2 黒褐色 ややしまる 粘性弱 ローム粒少量含む
4 10YR2/3 黒褐色 ややしまる 粘性弱 ローム粒・ロームブロック多く含む
5 10YR2/2 黒褐色 ややしまる 粘性弱 ローム粒・ロームブロック多く含む
6 10YR2/2 黒褐色 しまり弱 粘性弱 ローム粒少量含む
7 10YR4/3 にぶい黄褐色 ややしまる 粘性弱 クロボクブロック多く含む
8 10YR2/2 黒褐色 ややしまる 粘性弱 ローム粒少量含む 5層に類似
9 10YR3/3 暗褐色 しまり弱 粘性弱 ローム粒・ロームブロック多く、炭化材片少量含む
10 10YR2/2 黒褐色 ややしまる 粘性弱 ローム粒・ロームブロック多く、炭化材片少量含む 5層に類似
11 10YR4/3 にぶい黄褐色 しまる 粘性弱 クロボクブロック多く含む 7層に類似

図Ⅳ－7 IH－6（1）

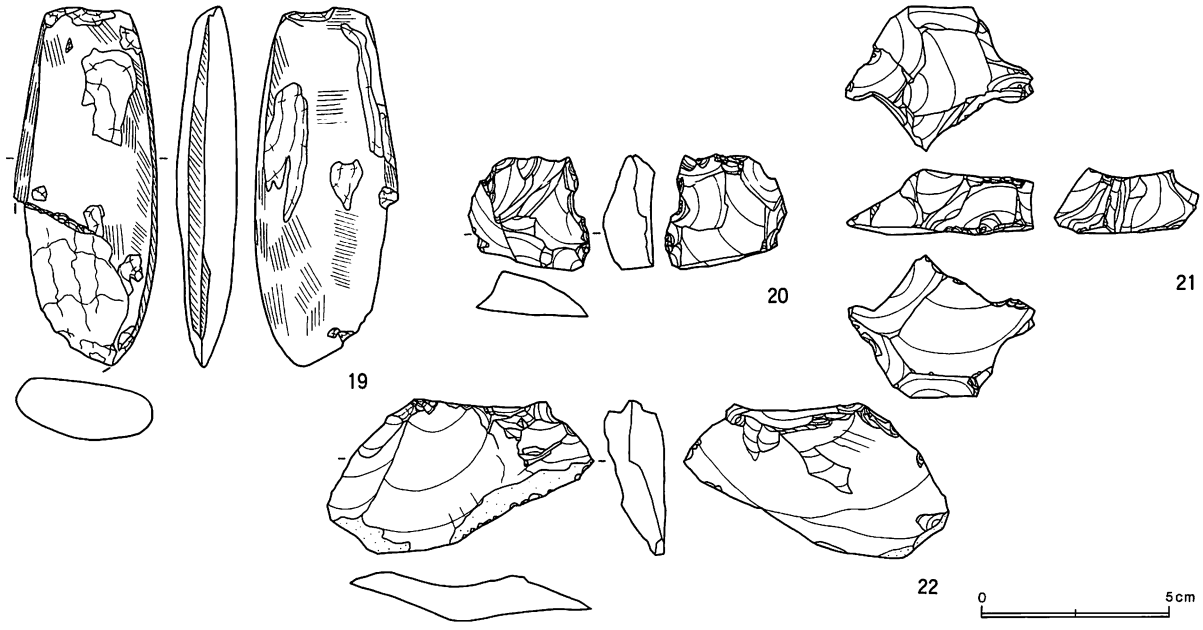


IH-6 土層

12 10YR2/1　黒色　しまる　粘性弱　ロームブロック含む
13 10YR3/2　黒褐色　しまる　粘性弱　ローム粒含む
14 10YR2/2　黒褐色　しまる　粘性弱　ローム粒・炭化材片含む
15 10YR2/1　黒色　しまる　粘性弱　ローム粒含む
16 2.5Y3/2　黒褐色　しまる　粘性弱　ロームブロック含む
17 10YR2/2　黒褐色　しまる　粘性弱　ローム粒含む
18 10YR4/2　灰黄褐色　しまる　粘性弱　ロームブロック多く含む
19 10YR2/1　黒色　しまり弱　粘性弱　ローム粒多く含む
20 10YR3/2　黒褐色　しまり弱　粘性弱　ローム粒多く含む
21 10YR2/2　黒褐色　しまる　粘性弱　ロームブロック多く含む
22 10YR2/2　黒褐色　しまる　粘性弱　ローム粒含む
23 10YR3/3　暗褐色　しまる　粘性弱　ローム粒・炭化材片含む
24 10YR2/2　黒褐色　しまり弱　粘性弱　ローム粒含む
25 10YR2/2　黒褐色　よくしまる　粘性弱　ロームブロック多く含む　床土
26 10YR3/2　黒褐色　よくしまる　粘性弱　ローム粒・炭化材片多く含む
27 10YR2/1　黒色　よくしまる　粘性弱　ローム粒含む　下位に僅かに焼土
28 10YR3/2　黒褐色　よくしまる　粘性弱　ローム粒・炭化材片含む
29 10YR3/3　暗褐色　よくしまる　粘性弱　ローム粒含む
30 10YR3/4　褐色　よくしまる　粘性弱　ローム粒含む



図Ⅳ－８　IH－６（２）と出土の遺物（１）



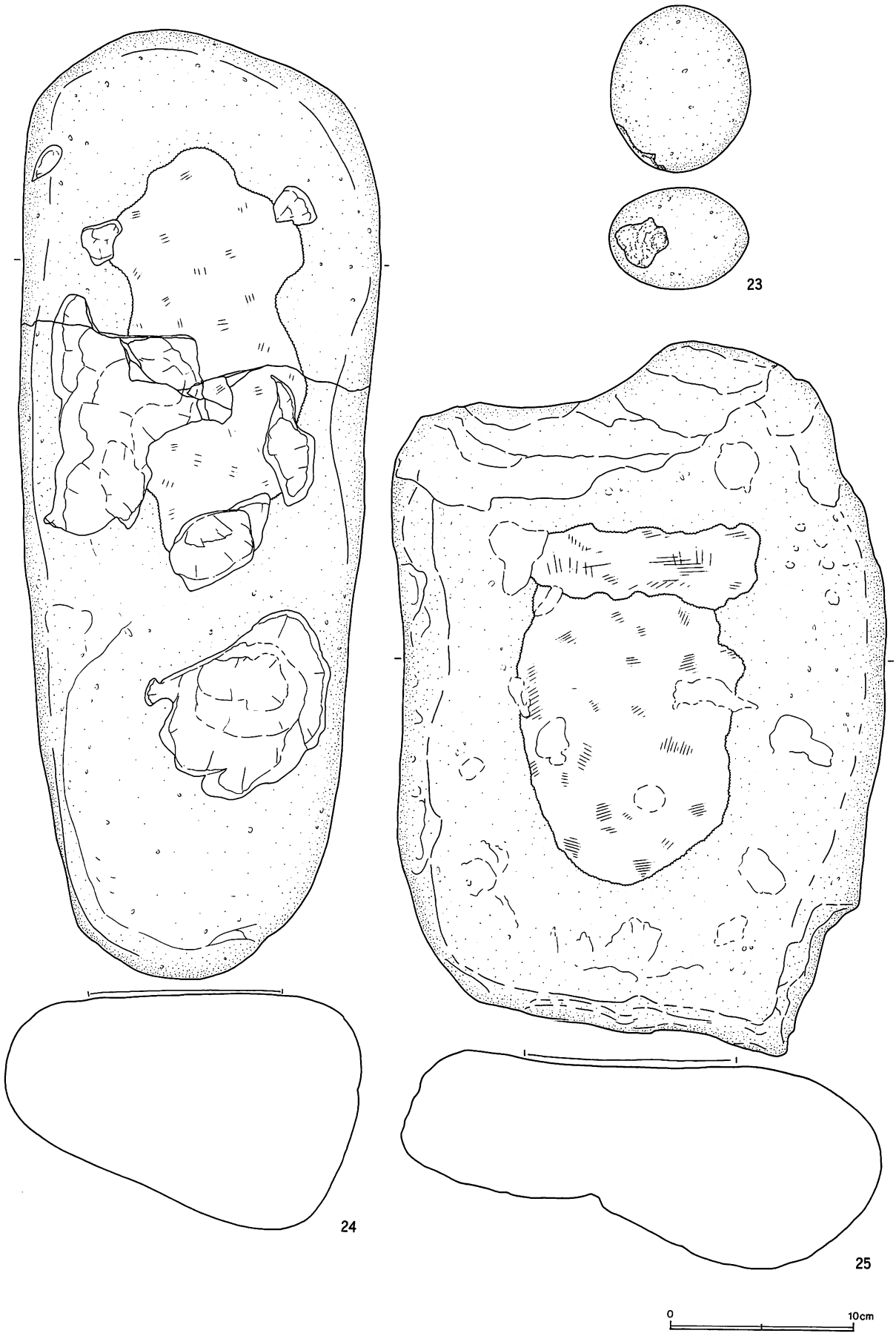
図Ⅳ－9　IH－6出土の遺物（2）

遺　物　土器：1～3が床面、その他は覆土出土のもの。いずれもⅣ群a類である。1は口縁部に扁平な折り返し状の貼付帯をめぐらすもので、施文後に0段多条の縄文を施している。余市式の系統をひく天祐寺式である。2は太い沈線で渦巻き文様が描かれている。3は横走縄文が施されている。

4～7・9は口縁部。4は1と同一個体の可能性がある。5はLR原体による縄文が浅く施されるもので口唇部にも施文がある。6、7は無文のもの。6はケズリ調整が器面に荒く残っている。7はやや肥厚させた波頂部に指頭による押捺で窪みが形成されている。8は胎土に海綿状骨針が混入する。口縁の数か所に小さな突起部を持つとみられる。口縁の狭い範囲が無文で、突起部下に円形文が配されているようである。LR原体による縄文を器面に浅く疎らに施文し、半截竹管状施文具で斜行格子目の文様が描かれているがあらかじめ口縁に平行に細い沈線が1条引かれている。胎土は緻密で内面はよく調整されている。9は扁平な貼付帯があるもの。LR原体による縄文を胴部では縦位に施文後、貼付帯上は横位に回転施文し羽状を構成している。10は斜格子目の沈線文のもの。器面に横位に調整痕が残る。11、12は横走気味の縄文が施されている。13は2条一対の沈線での弧線を配する文様がある。14は壷形土器の肩の部分。太い沈線で半肉彫り的に垂下する蛇行文様が描かれている。焼成はよく、胎土は橙色を呈する。15～18は底部。（遠藤）

石器：19は、床面で出土した磨製石斧。蛇紋岩製で、全面研磨される。刃先からの剥離がある。図の左面は比較的平らで、右面は曲面となっている。20～22は、覆土から出土した。20は、スクレイパーで、抉りを持つ。抉りは、一枚の剥離の凹み（陰瘤痕）を利用している。21・22はUフレイク。21は、不規則に割れる性質の頁岩片の縁に微細剥離が認められる。22は、流紋岩製の横長剥片の末端辺に微細剥離が見られる。（福井）

23は床面から出土したたたき石、拳大の円礫の一部に敲打痕が認められるもの。角閃石安山岩製。24は石皿。炉石として使用されていたもの。棒状の礫の平坦な部分が使用される。全体的に被熱による赤変、剥離がみられる。25は台石である。濁川カルデラ起源の角閃石安山岩の礫を用い、一面のみに使用面があるものである。（立田）



図Ⅳ－10　IH－６出土の遺物（３）

IH－7（図Ⅳ－11・12、表1・4・5、図版8・9・38・39）

位　置　M75・76、N76　　**立　地**　標高42.8～43.0mの緩斜面

平面形　不整楕円形　　**規　模**　2.82／（2.38）×2.52／1.54×0.14m

確認・調査　Ⅳ層を掘り下げていたところ、Ⅴ層上面において不明瞭な黒色土の落ち込みと、その内側に方形に配される5点の礫が検出された。落ち込みはNラインにおいて設定したメインセクションに延びており、壁面を精査すると同様な落ち込みを確認した。このためこれを住居と想定し、石囲いの長軸東西方向に合わせトレンチを設定してⅥ層まで掘り下げた。その結果、重複する遺構を確認し、土坑（IP－57）埋没後のくぼみに石囲い炉を伴う住居が構築されているものと判断した。

覆　土　5層に分層した。覆土が3層と、炉の構築の際の堆積とみられる2層である。覆土はパミスや黄褐色土ブロックを混じる黒ないし黒褐色土である。また炉跡HF－1の部分には、炭化木片や遺物を混じる黒色土が堆積する。

形　態　平面形は南北に長軸のある不整な楕円形。全体として浅い皿状を呈するが、床は凹凸が多く壁の立ち上がりは不明瞭である。

付属遺構

HF－1、2：焼土HF－1は住居中心よりやや北東側に構築される石囲い炉である。炉石間の堆積には焼成し、赤変する堆積は認められないが、検出面において、炭化材片や遺物が多く検出されている。HF－2はそのHF－1の西側に広がるやや不明瞭な焼土である。

HP－1～8：柱穴は壁際もしくは壁にほぼ接して小規模なものが6基検出されている（HP－3～8）。これらは住居の西半分をめぐるように配され、うち3基は住居内にやや傾斜している。その他住居北壁に接して1基（HP－2）、住居落ち込みから0.3m南東に離れてもう1基（HP－1）検出されている。ともに径0.4mほどの円形を呈する浅い土坑である。これらは、住居と異なる軸を持つ対の土坑とも考えられることから、住居と別の遺構であるかもしれない。

遺物出土状況　床面及び床面直上の遺物、また配石に関連するかとみられる礫について出土位置を記録した。焼土付近にやや集まる傾向がある。

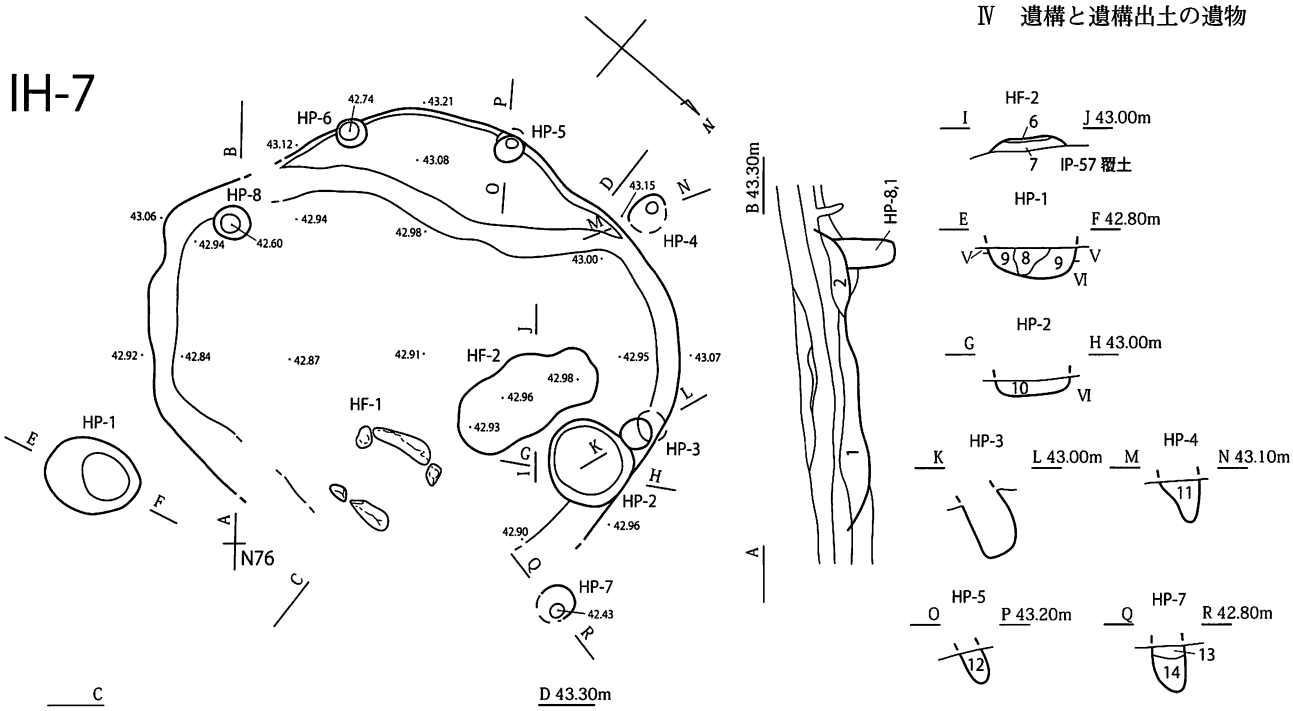
時　期　床面から多く出土している遺物、住居の形状の類似から、縄文時代後期前葉のものとみられる。（立田）

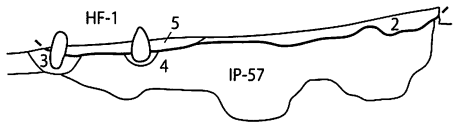
遺　物　土器：1～3、5～8、10が床面、4は床面下、11は焼土中、14は柱穴HP－3から、そのほかは覆土から出土したものである。すべてⅣ群a類である。1は縄文地に2条一対になる沈線で文様が描かれる。胎土は淡黄色で焼成が良い。2は折り返し気味の口縁部で、先端の尖った細い工具による2条一対の沈線で方形の文様を描いている。縦の2条の沈線で文様帯が区画されているのであろう。3、4は比較的太いRL原体による縄文が施文されている。5は細い沈線による文様のもの。6、7、13はLR原体、8～10はRL原体による縄文のもの。9の施文は疎らである。10は底部付近の破片。11は複節縄文のもの。12は小型の土器と見られ、沈線文で渦巻き的文様が描かれている。14は底部が張り出すもので、指頭での成形痕が認められる。底部付近まで先の細い施文具で斜格子目の文様が描かれているのがわずかに観察される。（遠藤）

石器：15は、焼土上面から出土した流紋岩製篦状石器。扁平礫を両極打法で整形し、一辺に長軸に対し斜めの刃部を形成している。刃部縁辺は摩耗する。特に突出した部分は、稜も滑らかになっている。16～19は、床面出土の頁岩製Uフレイク。縁辺に脈絡なく微細剥離が認められる。（福井）

20は覆土から出土した、加工痕ある礫である。花崗閃緑岩の円礫を半割したものを用い、半割面に打ち欠きが施されている。素材礫は石皿もしくはすり石を転用したものとみられ、平坦部分に極めて平滑な使用面がある。（立田）

IH-7





IH-7 土層

1 10YR1.7/1 黒色　粘性あり　しまりなし　パミス少量混じる
2 10YR3/1　黒褐色土　粘性あり　ややしまりあり　黄褐色土ブロック若干混じる
3 10YR2/3　黒褐色土　やや粘性あり　ややしまりあり　暗褐色土若干混じる
4 10YR2/3　黒褐色土　やや粘性あり　ややしまりあり　暗褐色土若干混じる　3層よりややもろい
5 10YR1.7/1 黒色　粘性なし　ややしまりあり　炭化材片、円礫、土器片が若干混じる
0.1cm 以下のパミス多く混じる

IH-7　HF,HP 土層

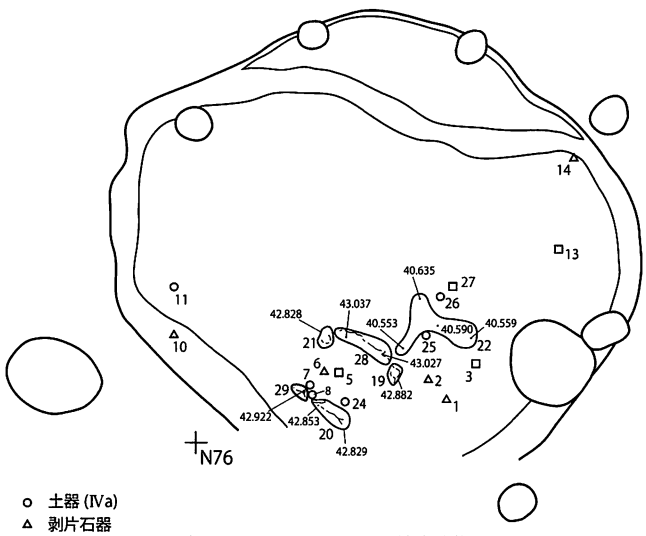
6 10YR2/3 黒褐色土　粘性なし　しまりあり　橙色粒子、炭化物が多く混じる。
7 10YR2/3 黒褐色土　粘性なし　しまりあり　炭化物少量、パミスが若干混じる
8 10YR1.7/1 黒色　粘性なし　しまりなし　層界不明瞭
9 10YR3/1 黒褐色土　粘性なし　しまりなし　パミス少量混じる
10 10YR2/2 黒褐色土　粘性あり　ややしまりあり　2㎝以下のパミス、
炭化物が少量混じる
11 10YR3/3 暗褐色土　粘性なし　ややしまりあり
12 10YR3/4 暗褐色土　粘性なし　ややしまりあり　黄褐色土粒子が若干、
パミス、炭化物が少量混じる
13 10YR2/1 黒色土　やや粘性あり　しまりなし　パミス多く混じる
14 10YR3/4 暗褐色土　やや粘性あり　しまりなし　Ⅶ層が若干混じる

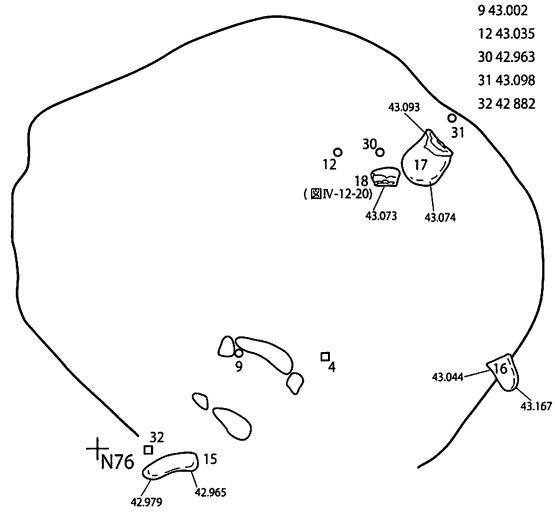
IH-7　HP-8 土層註記

1 10YR2/2 黒褐色土　やや粘性あり　しまりあり　パミスが少量混じる

1 42.881m　床　(図Ⅳ-12-16)
2 42.902　床　(図Ⅳ-12-17)
3 42.932　床
5 42.955　焼土
6 42.948　焼土 (図Ⅳ-12-15)
7 42.935　焼土
8 42.928　焼土
10 42.883　床　(図Ⅳ-12-18)
11 42.847　床
13 42.965　床
14 43.007　床　(図Ⅳ-12-19)
22　床～床直
24 42.854　床
25 42.807　床
26 42.923　床
27 42.931　床

4 42.951m　覆土 1 層
9 43.002　覆土 1 層
12 43.035　覆土 1 層
30 42.963　覆土中
31 43.098　覆土中
32 42 882　覆土中



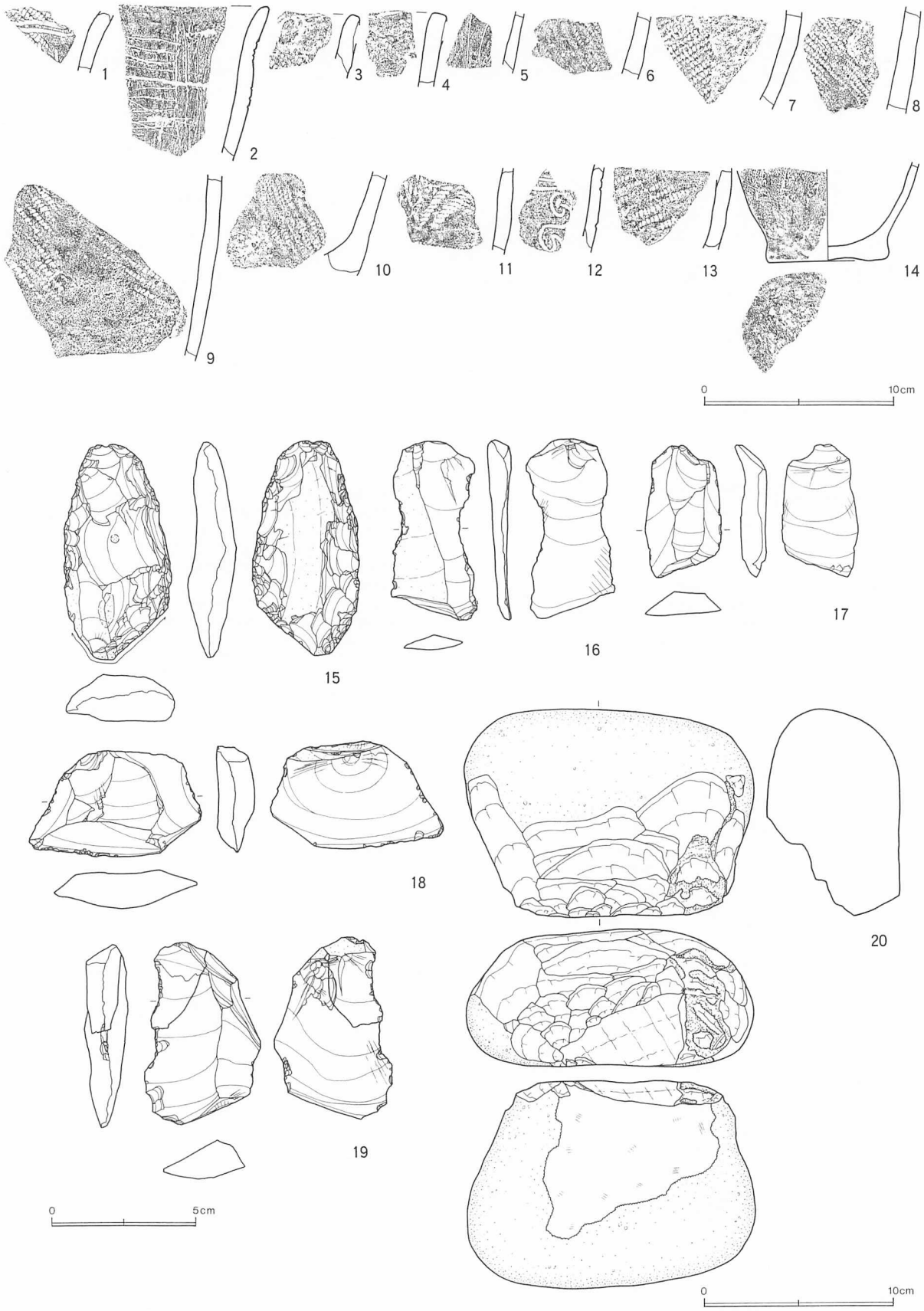


○　土器 (Ⅳa)
△　剥片石器
□　礫・礫石器

床面遺物出土状況 (5~8 は焼土遺物)

覆土遺物出土状況

図Ⅳ－11　IH－7　0　1:40　2m



図Ⅳ－12　IH－７出土の遺物

IH－8（図Ⅳ－13・14、表1・4・5、図版9～11・39）

位　置　O・P77・78　　**立　地**　標高42.1～42.2m付近の緩斜面

平面形　不整形　　**規　模**　(3.32)／(3.24)×2.28/2.18×0.09m

確認・調査　Ⅴ層上面で、Ⅳ層起源の黒褐色土の落ち込みとして検出した。土層観察用のベルトを十字に残して黒色土を掘り下げたところ、床面と不明瞭に立ち上がる壁を確認した。

覆　土　1層はⅣ層主体の黒色土層。ローム粒、炭化材片のほか、焼骨片を多く含む。焼骨片は魚骨が多く含まれ、同定したところサケ属、タイ科、ガンギエイ属、ニシン科、カレイ科、中型鳥類、獣類が確認された。P－78区杭で土層を確認したところ、土層1とは別に、土層3・4をみることが出来た。

形　態　壁は不明瞭であるが、東側および南北側で緩やかな立ち上がりが確認された。西側は床とみられる範囲から住居のプランを推定した。床は硬化するものの、凹凸があり安定していなかった。

重複する遺構にIP－45・63がある。IH－8より、IP－63は新しく、IP－45は古いとみられる。

付属遺構　HF－1：住居中央よりやや東寄りの床で、5点の礫がかぎ型に並んで出土した。ほかの礫や明瞭な焼土は残っていないが、土層に焼土粒や焼骨片が含まれることから、石囲い炉が存在したものとみられる。礫のうち4点は台石・台石片・たたき石（図Ⅳ－14－12・13）が転用されている。

HP－1～7：7基をHPとした。HP－6は床面からの深さが27cmで、唯一柱穴と推定されるもの。

遺物出土状況　HP－2～6および住居跡覆土から、縄文時代後期前葉の土器片が出土している。石器としてたたき石、台石、台石片、Uフレイク、剥片が覆土から出土している。

時　期　出土遺物から縄文時代後期前葉である。炉跡HF－1採取炭化材を年代測定したところ、620±20yrB.P.（PLD－12735）の測定値が得られた。この年代値については、測定試料に問題があったものと推定される。（福井）

遺　物　土器：いずれもⅣ群a類である。1がHP－4、5がHP－2、9は柱穴と推定されるHP－6からそれぞれ出土した。その他は覆土のものである。1～3は縄文が施されているもので、2は小波状口縁になるとみられ、この部分をわずかに肥厚させている。3は口唇上から内面にかけて平滑に調整されている。LR原体による横走縄文のもの。4は無文の小型土器である。5は比較的太い原体による縄文が浅く施文されている。6～8は斜行縄文のもの。8では縄文施文後、指頭で文様を部分的に磨り消している。9は底部付近の破片。10はRL原体による縄文が底部付近まで施文されている。（遠藤）

石器：11は、覆土出土のUフレイク。流紋岩製で、縁辺に微細剥離が認められる。（福井）

12、13は、たたき石で、共に被熱している。12は、やや細長な礫を用い、各所に敲打痕がみられる。安山岩製。　13は、三角柱状の礫を用い、一平坦面に敲打痕がみられるもの。（立田）

IH－9（図Ⅳ－15、表1・4・5、図版11・12・39）

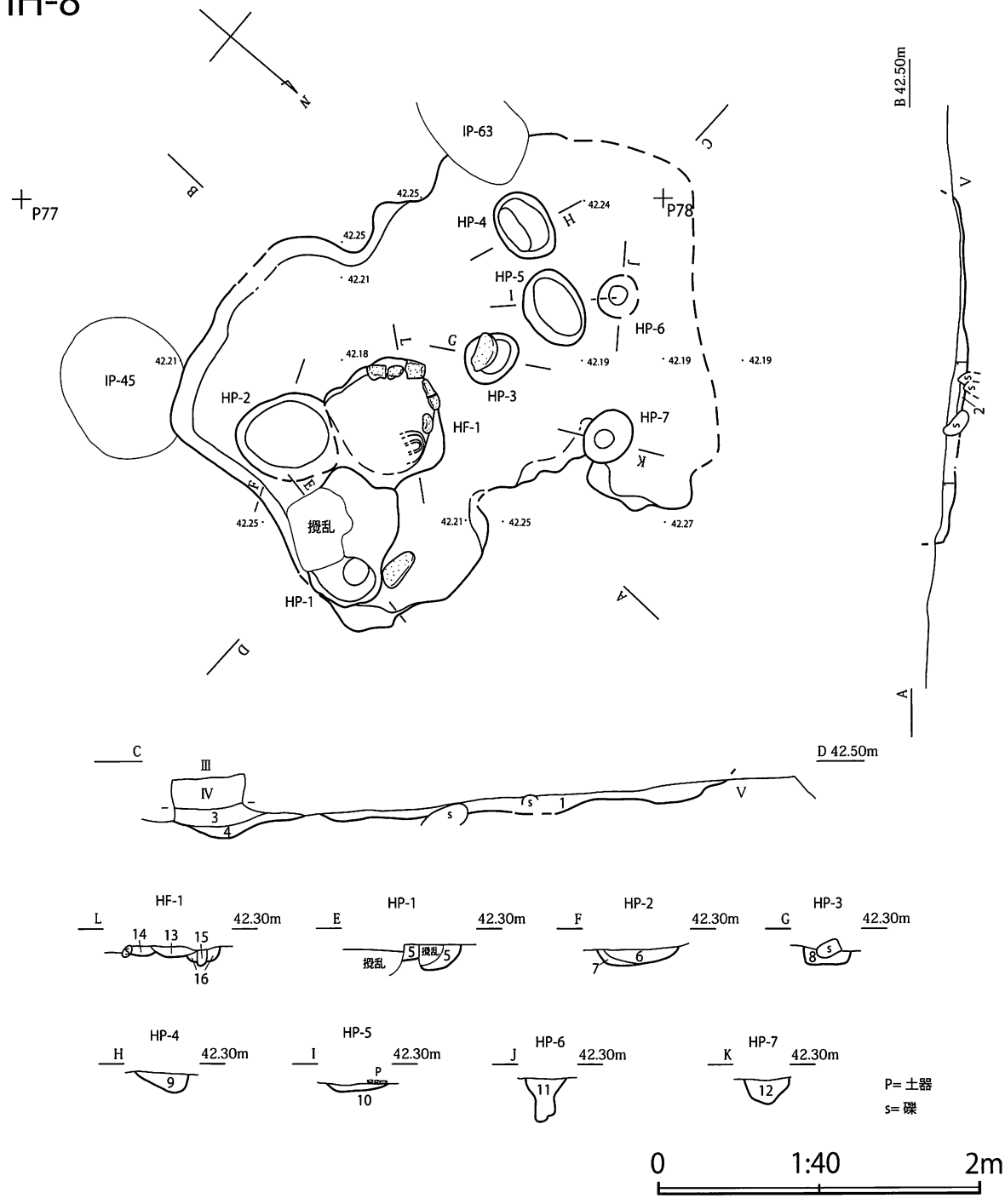
位　置　OZ50　　**立　地**　標高41.0～41.5m付近の緩斜面

平面形　不整楕円形か　　**規　模**　(1.64)／(1.58)×1.46/1.34×0.12m

確認・調査　Ⅵ層上面で、Ⅳ層主体のローム混じりの土が楕円形に堅くしまっている状況を確認した。楕円形の長軸は「南東－北西」を向いており、平面観楕円形の長軸上中央より南東よりにおおよその直径50cmほどの円形をした橙色土の分布があった。

自然の営為ないしは人為による穴をⅣ層主体の土によって人為的に埋め戻した可能性を想定した。そこで、楕円形の長軸より北東半分を半截した。土層観察をして、完掘をした結果、風倒木等の自然作用による攪乱を人為的に埋め戻したものと判断した。橙色土部分は火を焚いた痕跡か、それとも凹みに酸化した鉄分等が水の作用によって溜まったものなのか判然としなかった為、HF－1として記録し

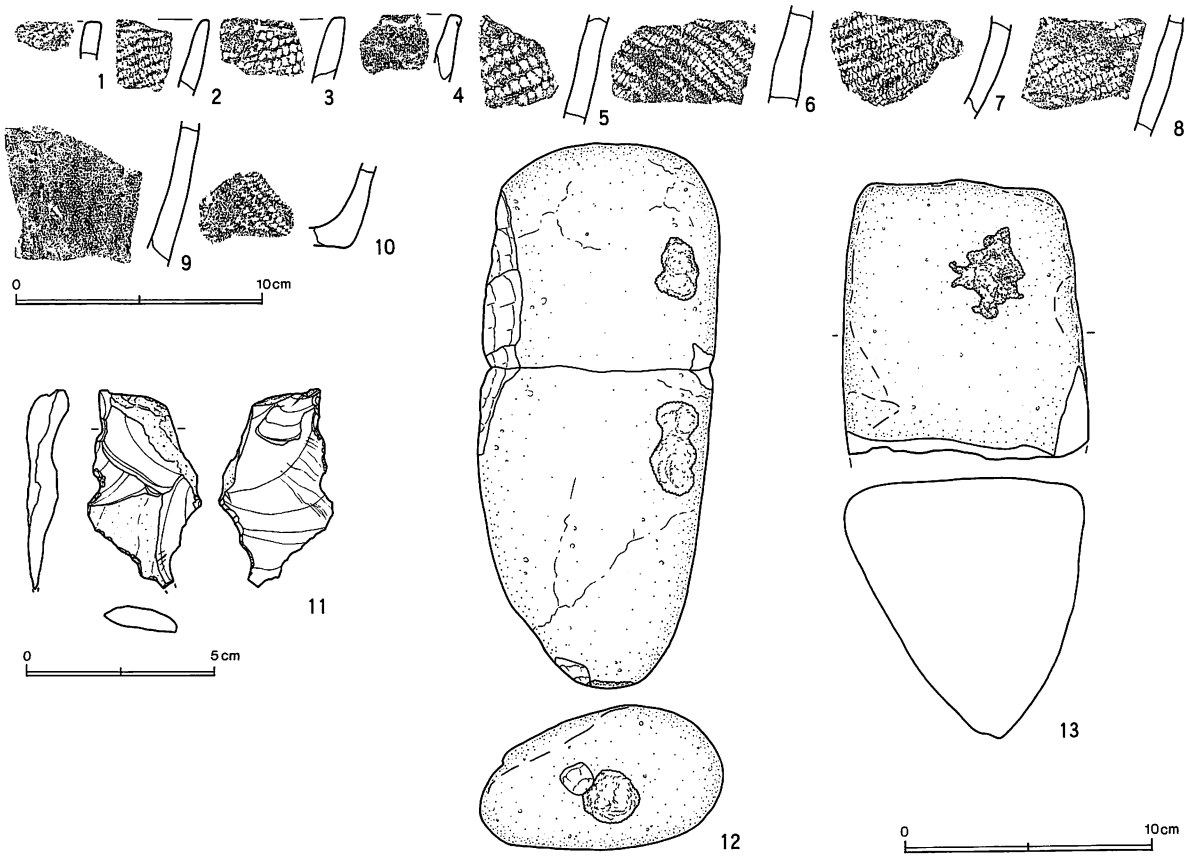
IH-8



IH8 土層

1 10YR2/1 黒色 しまる 粘性弱 ローム粒・炭化材片・骨片多く含む
2 10YR2/1 黒色 しまる 粘性弱 焼土粒少量含む
3 10YR1.7/2 黒色 しまる 粘性弱 ローム粒少量含む
4 10YR2/2 黒色 しまる 粘性弱 ローム粒少量含む
5 10YR2/2 黒褐色 粘性弱 ロームブロック・炭化材片多く含む
6 10YR2/2 黒褐色 しまる 粘性弱 ローム粒含む
7 10YR2/1 黒色 しまる 粘性弱 ローム粒・ロームブロック含む
8 10YR3/2 黒褐色 しまる 粘性弱 ローム粒炭化材片含む
9 2.5Y3/1 黒褐色 しまる 粘性弱 ローム粒含む
10 10YR3/2 黒褐色 しまる 粘性弱 ロームブロック含む
11 10YR2/2 黒褐色 しまる 粘性弱 ローム粒・ロームブロック・炭化材片含む
12 10YR2/2 黒褐色 しまる 粘性弱 ロームブロック多く、炭化材片含む
13 10YR1.7/1 黒色 しまる 粘性弱 ロームブロック・炭化材片・焼骨少量含む
14 10YR3/3 黒褐色 しまる 粘性弱 ロームブロック多く含む
15 10YR2/1 黒色 しまる 粘性弱 ローム粒含む
16 10YR3/3 黒褐色 しまる 粘性弱 ロームブロック多く、炭化材片含む

図Ⅳ－13 IH－8



図Ⅳ－14　IH－８出土の遺物

た。しかし、フローテーションの結果、骨片および炭化物が出土したため、焼土であった可能性がある。

小規模であるが、しまっている部分を遺構として捉えて、地床炉を持つ住居として判断した。掘り込みは確認できず、検出面がそのまま生活面・構築面の可能性が高い。柱穴等は確認できなかった。Ⅵ層でしまった面を検出し、そこが生活面を想定できる状況であったため、土地の削平・整地の可能性がある。IS－７の検出面の標高、IP－61の土層断面図（図Ⅳ－30）におけるⅣc・Ⅳe層が水平に堆積する状況から証明したいと思ったが断定するにいたらなかった。

覆　土　１～３層はHF－１に関連する土層である。中央がよく焼けたものと思われ、掘り込みはない。４層は攪乱を埋めたⅣ層主体の濁川ローム混じりの土である。５層は後に入り込んだ木根跡である。

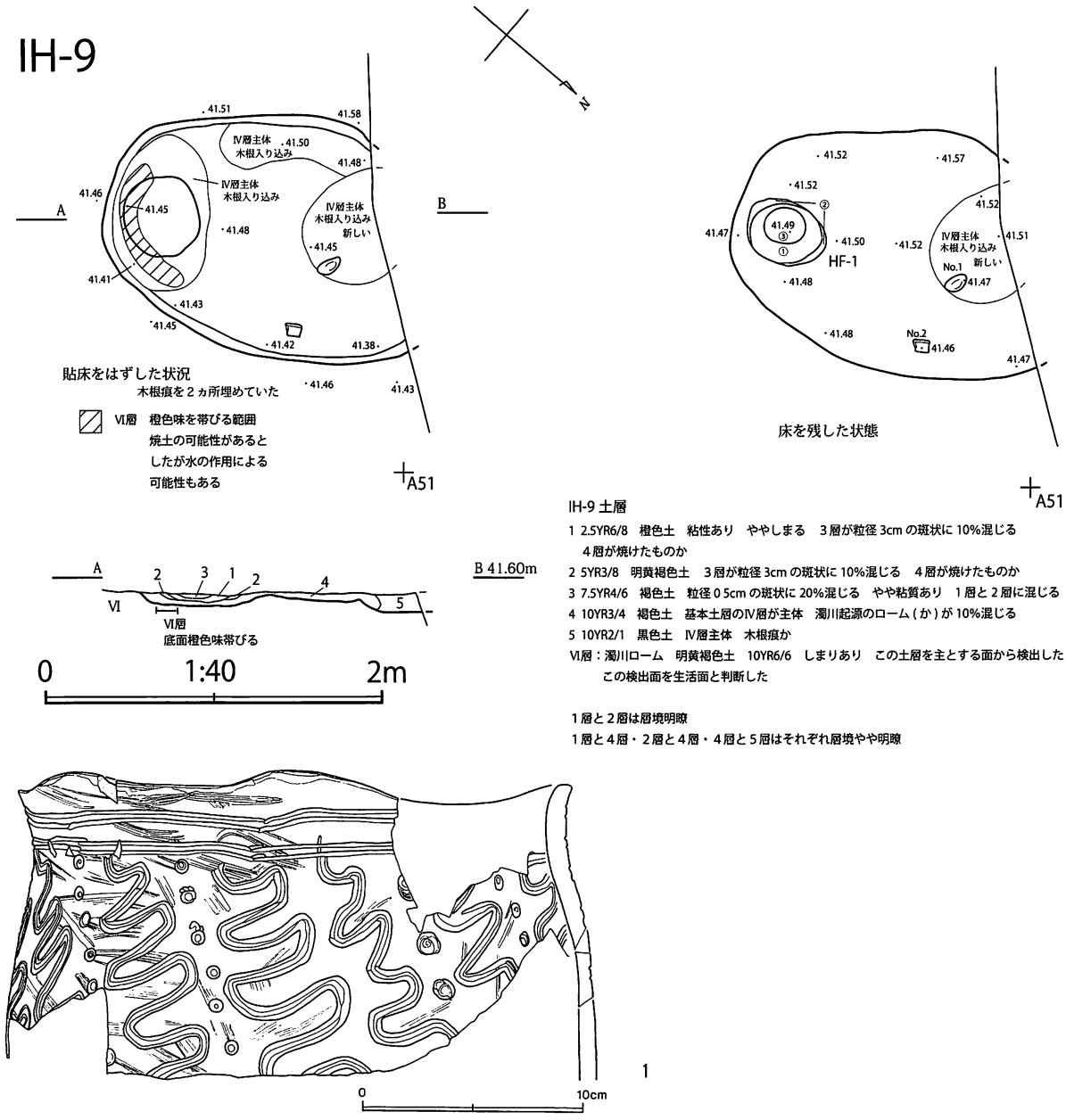
形　態　楕円形の北西端は平成15年の調査によって削平されていた。床はおおよそ平坦で、地形上やや標高の高い南西側からやや低い北東側に向かって、緩やかに傾斜している。

付属遺構　HF－１：検出面において、遺構中央より南東寄りに0.50×0.36×0.05ｍの楕円形をした橙色土の分布があった。中央の褐色土は後の攪乱か。またこの焼土の下にある木根跡に入り込んだ黒色土を掘りきると、Ⅵ層上が橙色に染まっていた。攪乱の凹みに水の作用によって酸化した鉄分等が溜まった可能性がある。ただし、上の橙色土と明らかな連続性はないが、層界が不明瞭なため炉の熱変による可能性がないとは断言できない。

遺物出土状況　覆土４層上位からたたき石が１点出土している。生活面に近い層位からの出土であるが、掘り込みがないため、遺構に伴うかどうか判然としない。又、覆土４層中の、床面より下の土層から、縄文時代後期前葉の土器片が１点出土している。

時　期　検出面における周辺の出土遺物から後期前葉と考える。　（大泰司）

遺　物　土器：１は住居覆土、床面下および近接してあるIP－61覆土、さらに６、７ｍ離れて位置する集



図Ⅳ－15　IH－９と出土の遺物

石IS－６、周辺の包含層（OZ50、A48・49、B48、C50区）等広範囲から出土した破片が接合したものである。６か所に緩やかな波頂部をもつ大型深鉢。頸部でややくびれ胴部上半で張り出す器形である。口縁部から胴部上半の３分の２ほどが残存する。口唇断面は角形、頸部に間隔をあけ２条沈線をめぐらせ文様帯を区画している。胴部文様は半截竹管状施文具での蛇行する沈線文を、斜めに垂下させるもので、沈線間に竹管状工具（中空）での円形刺突文を配している。刺突文の一部には沈線により大きく縁取られるものもある。胎土が緻密で焼成がよい。Ⅳ群a類、涌元式に相当する。（遠藤）

IH－10（図Ⅳ－16、表１・４・５、図版12・13・39）

位　置　M30　　**立　地**　河川によって開析された標高33.0～34.0ｍ付近の比較的急な斜面

平面形　不整楕円形　　**規　模**　2.76/2.18×2.26/1.60×（0.64）ｍ

確認・調査　包含層Ⅳ層を調査中、Ⅳ層起源の黒褐色土の落ち込みを検出した。風倒木等自然の営為か、人為的なものか判然としなかった。そこで楕円形の短軸方向に土層観察用の土手を残して面的に掘り下げた。すると楕円形の平面形が明瞭となった為、遺構の可能性が高いと判断した。土手を残して遺構覆土と想定される部分を掘りさげた。しかし土層から、遺構に丁度風倒木が重なっている可能性があった為、土手に沿ってサブトレンチを設けて壁面部分を確認した。すると土層に明瞭な壁面が確認できたため床面と壁面の一部が風倒木に壊されている住居跡と判断した。サブトレンチに現れた遺構壁面および床面を利用して遺構を検出した。

覆　土　１～３層が本来の覆土である。いずれも堅くしまっており、濁川起源と思われる軽石が混じり込む。遺構の中央に木根が入り込んでおり、遺構は破壊されている。断面に現れた３層周辺のKo－gは遺構壁面を構成するKo－g主体の漸移層からの崩落である。これは木の根の入り込みに伴うものと判断した。掘り込み面は検出面より上位と考える。

形　態　北側の壁が風倒木により攪乱を受けている。床は残存部分から平坦と考える。

付属遺構　攪乱が著しいこともあり、残存部分からは確認出来なかった。

遺物出土状況　覆土１層から頁岩製のスクレイパーが１点、輝石安山岩の礫が１点出土している。いずれも床面より上の高さからの出土である。前者が８㎝上、後者が15㎝上である。

時　期　不明である。遺構出土遺物から判断できなかった。周辺の出土遺物からは、縄文時代中期前半又は後期前葉の可能性がある。量的には後期前葉が多い。しかし、住居形態がある程度時代的変遷をたどることを踏まえて、類似する住居形態として、八雲町落部１遺跡H－２のような中期中葉前半の例を勘案すると、IH－10については中期前半の可能性がより高い。（大泰司）

遺　物　**石器**：１は、覆土出土の頁岩製スクレイパー。左辺に緩やかに外湾する刃部をもつ。末端辺にも調整剥離がなされるが、連続性はない。（福井）

２　土　坑

IP－20（図Ⅳ－17・18、表１・４、図版14・40）

位　置　N75・76　　**立　地**　標高42.6ｍ付近の緩斜面

平面形　円形　　**規　模**　0.72/0.54×（0.63）/0.46×0.35ｍ

特　徴　Ⅵ層上面で黒褐色土の落ち込みとして確認した。覆土はⅣ・Ⅴ層主体の埋め戻しである。坑底は平坦で、壁はややオーバーハングしながら立ち上がる小型フラスコ状土坑。土坑墓の可能性がある。覆土から、縄文時代中期前半の土器が７点出土した。

時　期　遺構の出土遺物から縄文時代中期前半の時期と考えられる。（福井）

遺　物　**土器**：１は覆土から出土したⅢ群a類土器。縦行縄文が施されている。（遠藤）

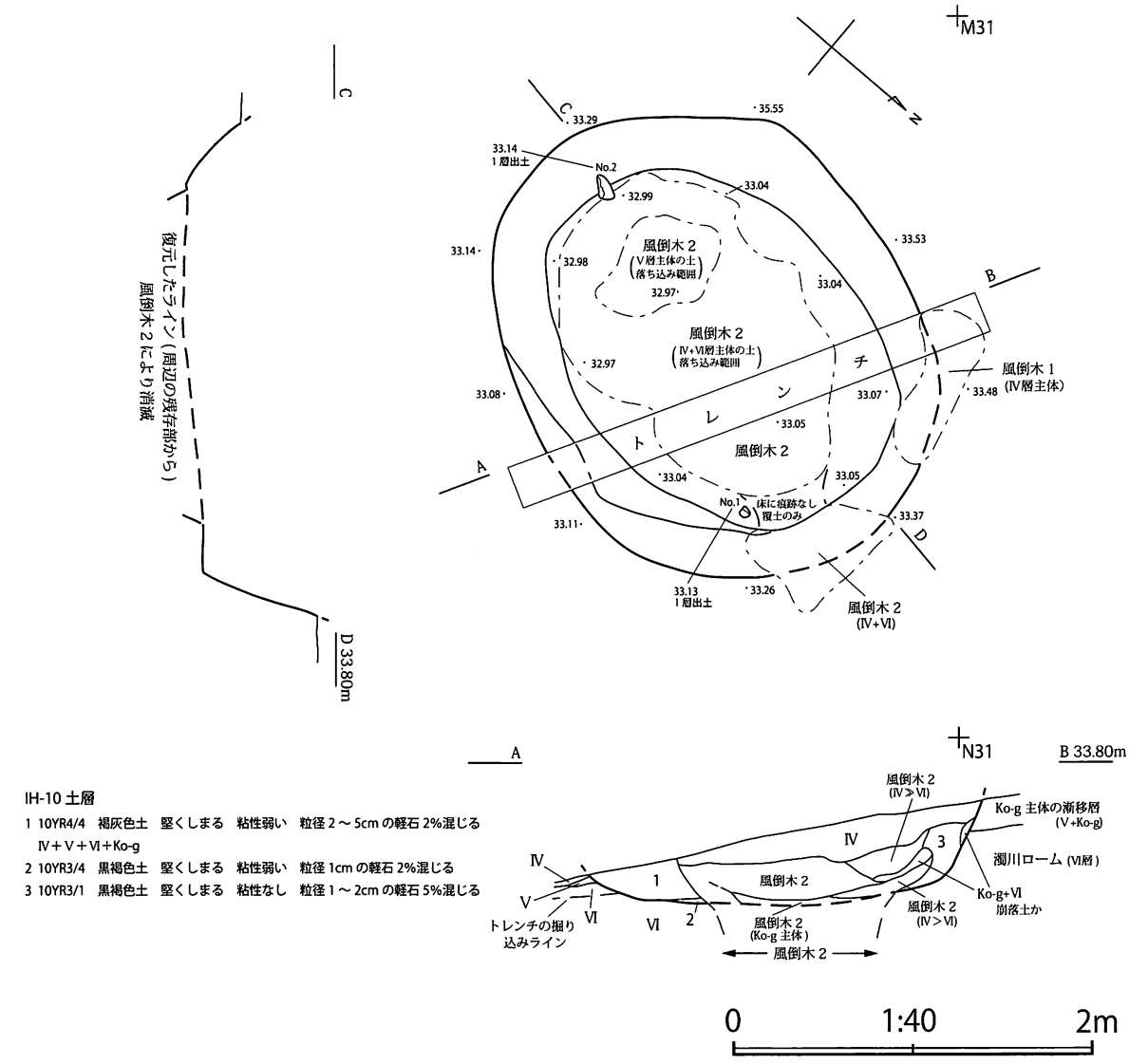
IP－21（図Ⅳ－17・18、表１・４・５、図版14・40）

位　置　N76　　**立　地**　標高42.7ｍ付近の緩斜面

平面形　楕円形　　**規　模**　0.88/0.77×0.70/0.66×0.27ｍ

特　徴　Ⅵ層上面で黒褐色土の落ち込みとして確認した。覆土はⅣ・Ⅴ層主体の埋め戻しである。坑底は平坦で、壁は急に立ち上がる。土坑墓の可能性がある。覆土上位の土層１から縄文時代中期前半

IH-10



IH-10 土層

1 10YR4/4 褐灰色土 堅くしまる 粘性弱い 粒径 2 ～ 5cm の軽石 2%混じる
IV＋V＋VI＋Ko-g
2 10YR3/4 黒褐色土 堅くしまる 粘性弱い 粒径 1cm の軽石 2%混じる
3 10YR3/1 黒褐色土 堅くしまる 粘性なし 粒径 1 ～ 2cm の軽石 5%混じる

図Ⅳ－16 IH－10と出土の遺物

の土器底部付近が横位状態で出土した。また、覆土下位の土層２から、石皿が使用面を下にして出土した。ほかに、覆土から縄文時代中期前半の土器が２点、剥片が２点出土した。

時　期　遺構の出土遺物から縄文時代中期前半の時期と考えられる。　（福井）

遺　物　土器：１の口唇断面は尖り気味で、不規則に波打つ薄手の土器である。口唇直下の狭い部分を無文としRL原体による斜行縄文を施している。内面は良く磨かれており、焼成が良い。２、３はいずれも０段多条のRL原体のものである。２は緩やかな波頂部になるとみられ、口唇には縄による刻みが加えられている。３は底部から胴下半部の３分の１ほどが接合できたもの。胴部が膨らむ器形である。底部付近から底面は化粧粘土が剥げ落ち、最初の段階の素地が現れている。縦行縄文が疎らに施されている。２と同一個体の可能性がある。いずれもサイベ沢Ⅶ式並行のものである。　（遠藤）

石器：４は石皿である。二等辺三角形状を呈する角閃石安山岩を用い、平坦面に使用痕があるものである。使用痕は明瞭で、ややくぼんでいる。　（立田）

IP－22（図Ⅳ－19、表１・４・５、図版14・39・40・43）

位　置　N76　　**立　地**　標高42.8ｍ付近の緩斜面

平面形　円形　　**規　模**　0.70/0.72×0.60/0.66×0.52ｍ

特　徴　Ⅵ層上面で黒褐色土の落ち込みとして確認した。覆土はⅣ・Ⅴ層主体の埋め戻しで、黒色系土と黄褐色系土の互層になっている。坑底は平坦で、壁はややオーバーハングしながら立ち上がる小型フラスコ状土坑。土坑墓の可能性がある。覆土上位から、縄文時代中期前半の土器一個体が崩れて斜めになった状態で出土した。もとは倒立状態であったとみられる。また、覆土下位からは扁平打製石器２点が出土した。ほかに剥片が１点出土している。

時　期　遺構の出土遺物から縄文時代中期前半の時期と考えられる。　（福井）

遺　物　土器：１は口縁から底部の５分の４ほどが残存する。突起部が１か所残存する。口径から推定すると３か所にあるとみられる。胴部が僅かに膨らむやや寸胴の器形である。突起部は２つの山で一対となる。予め作った大きな突起を棒状工具等で刻むことで形成されたものであろう。口唇を肥厚させ無文とし、この部分に沈線文を引いているが部分的に縦に刻まれた短い沈線で途切れる。突起部はさらに肥厚させ、弧状に繋がれている。０段多条のLR原体による斜行縄文は底部付近を除きほぼ全面に施されている。施文後に指頭で器面調整したとみられ、その際のくぼみが所々に観察できる。内面は底部付近まで平滑に調整されている。胎土に砂粒が混じる。２には縄文が施されている。いずれもⅢ群a類。１は見晴町式並行のものである。　（遠藤）

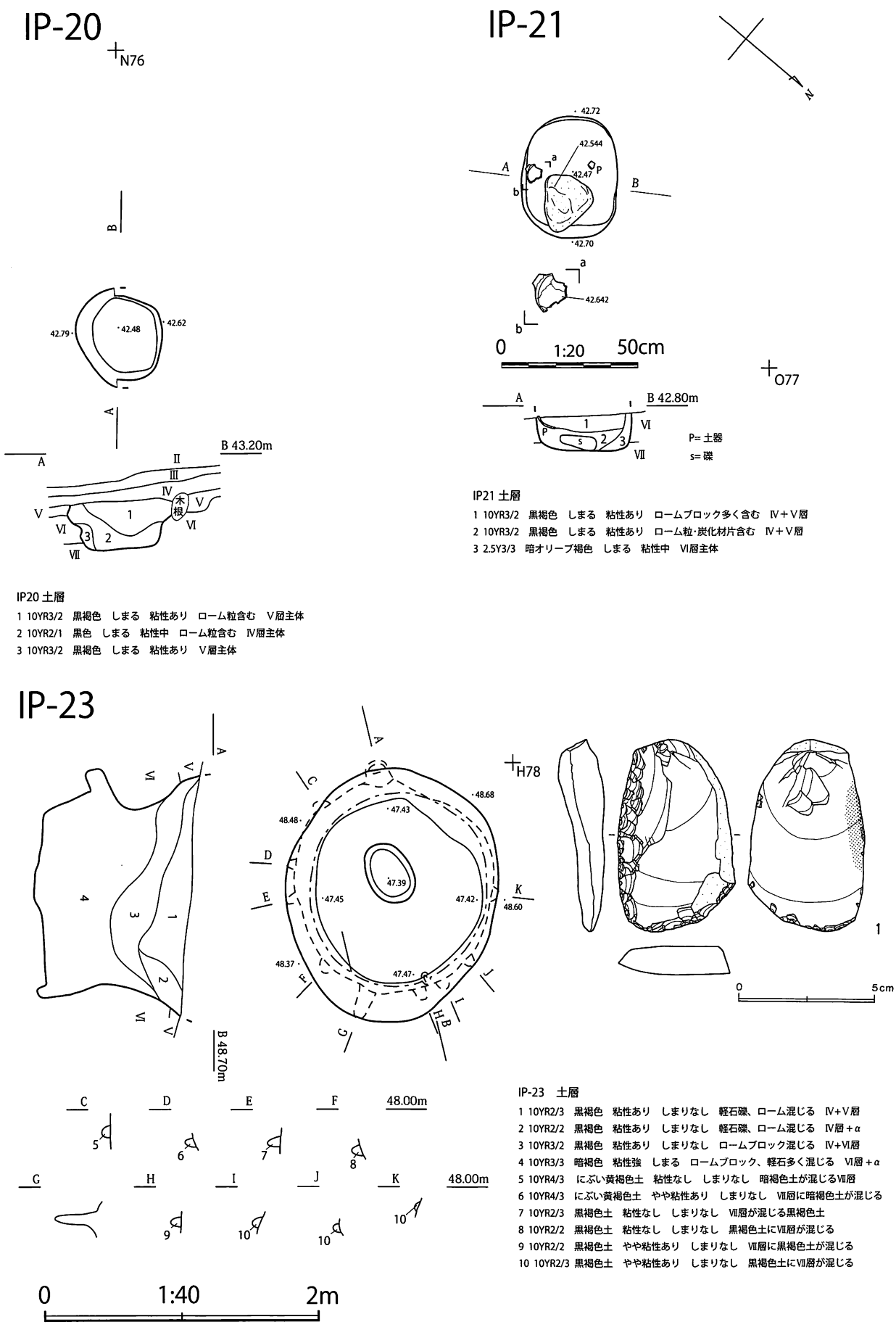
石器：３、４は、覆土２層から出土した扁平打製石器である。３は半割した礫を用い、断面を打ち欠いて擦っている。４は扁平な礫をほぼそのまま用いているもの。一端に数回の打ち欠きが認められる。石質は、３、４ともに安山岩。　（立田）

IP－23（図Ⅳ－17、表１・５、図版15・43）

位　置　H77　　**立　地**　標高47ｍの斜面

平面形　楕円形　　**規　模**　1.84/1.56×1.38/1.28×1.14ｍ

特　徴　Ⅴ層上面を精査していたところ、黒褐色土の落ち込みが検出された。落ち込みの長軸に合わせて東側を半截すると、オーバーハングする壁と平坦な坑底を明瞭に確認したので、フラスコ状土坑であることがわかった。完掘後、写真撮影のために壁面、坑底を精査すると、土坑の最大径部分に沿って、黒褐色土のしみが並んでいることがわかった。しみは10か所確認でき、半截すると柱穴様の尖



IP20 土層

1 10YR3/2 黒褐色 しまる 粘性あり ローム粒含む Ⅴ層主体
2 10YR2/1 黒色 しまる 粘性中 ローム粒含む Ⅳ層主体
3 10YR3/2 黒褐色 しまる 粘性あり Ⅴ層主体

IP21 土層

1 10YR3/2 黒褐色 しまる 粘性あり ロームブロック多く含む Ⅳ＋Ⅴ層
2 10YR3/2 黒褐色 しまる 粘性あり ローム粒･炭化材片含む Ⅳ＋Ⅴ層
3 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色 しまる 粘性中 Ⅵ層主体

IP-23 土層

1 10YR2/3 黒褐色 粘性あり しまりなし 軽石礫、ローム混じる Ⅳ+Ⅴ層
2 10YR2/2 黒褐色 粘性あり しまりなし 軽石礫、ローム混じる Ⅳ層＋α
3 10YR3/2 黒褐色 粘性あり しまりなし ロームブロック混じる Ⅳ+Ⅵ層
4 10YR3/3 暗褐色 粘性強 しまる ロームブロック、軽石多く混じる Ⅵ層＋α
5 10YR4/3 にぶい黄褐色土 粘性なし しまりなし 暗褐色土が混じるⅦ層
6 10YR4/3 にぶい黄褐色土 やや粘性あり しまりなし Ⅶ層に暗褐色土が混じる
7 10YR2/3 黒褐色土 粘性なし しまりなし Ⅶ層が混じる黒褐色土
8 10YR2/2 黒褐色土 粘性なし しまりなし 黒褐色土にⅦ層が混じる
9 10YR2/2 黒褐色土 やや粘性あり しまりなし Ⅶ層に黒褐色土が混じる
10 10YR2/3 黒褐色土 やや粘性あり しまりなし 黒褐色土にⅦ層が混じる

図Ⅳ－17 IP－20・21・23と出土の遺物

る断面を呈するものがほとんどであった。柱穴の向きは、南西に位置する坑口に向かうやや太い１本を除き、坑底と概ね並行に、深さは４～25cmとなっていた。また、坑底の中央部にやや浅い落ち込みも確認した。これらは本遺構に伴うものと判断した。

時　期　遺物の出土状況から、縄文時代後期前葉もしくは中期前半のものとみられる。　（立田）

遺　物　**石器**：１は、覆土最下部から出土した頁岩製スクレイパー。緩く外湾する刃部を左辺に持ち、末端辺で粗い調整となる。左側腹面には鈍い光沢が見られる。刃部角は65°。　（福井）

IP－24（図Ⅳ－20、表１・４、図版15・40）

位　置　N78　　**立　地**　標高43.2ｍ付近の緩斜面

平面形　楕円形　　**規　模**　0.80/0.55×（0.60）/0.52×0.16ｍ

特　徴　IH－５床面で黒褐色土の落ち込みとして確認した。覆土はⅣ・Ⅴ・Ⅵ層主体の埋め戻しである。坑底は不安定で、壁は緩やかに立ち上がる。南壁に接して礫が直列するが、IH－５の石囲い炉が遺存したもので、当土坑が破壊したものとみられる。つまり、IH－５より新しい土坑と考えられる。覆土から、縄文時代後期前葉の土器が２点出土した。

時　期　遺構の切り合い関係と出土遺物から縄文時代後期前葉と考えられる。　（福井）

遺　物　**土器**：１はⅣ群a類土器。無文の胴部片で、縦方向に削りの痕跡が残る。　（遠藤）

IP－25（図Ⅳ－20、表１・４、図版15）

位　置　N78　　**立　地**　標高42.8ｍ付近の緩斜面

平面形　楕円形　　**規　模**　1.21/1.11×0.97/0.84×0.25ｍ

特　徴　IH－５床面で黒褐色土の落ち込みとして確認した。覆土はⅣ・Ⅴ・Ⅵ層主体の埋め戻しである。坑底は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。覆土から、縄文時代後期前葉の土器が19点、剥片が２点出土した。IH－５覆土およびIH－５のHP－４・５を切って構築しており、IH－５より新しい土坑と考えられる。

時　期　遺構の切り合い関係と出土遺物から縄文時代後期前葉と考えられる。　（福井）

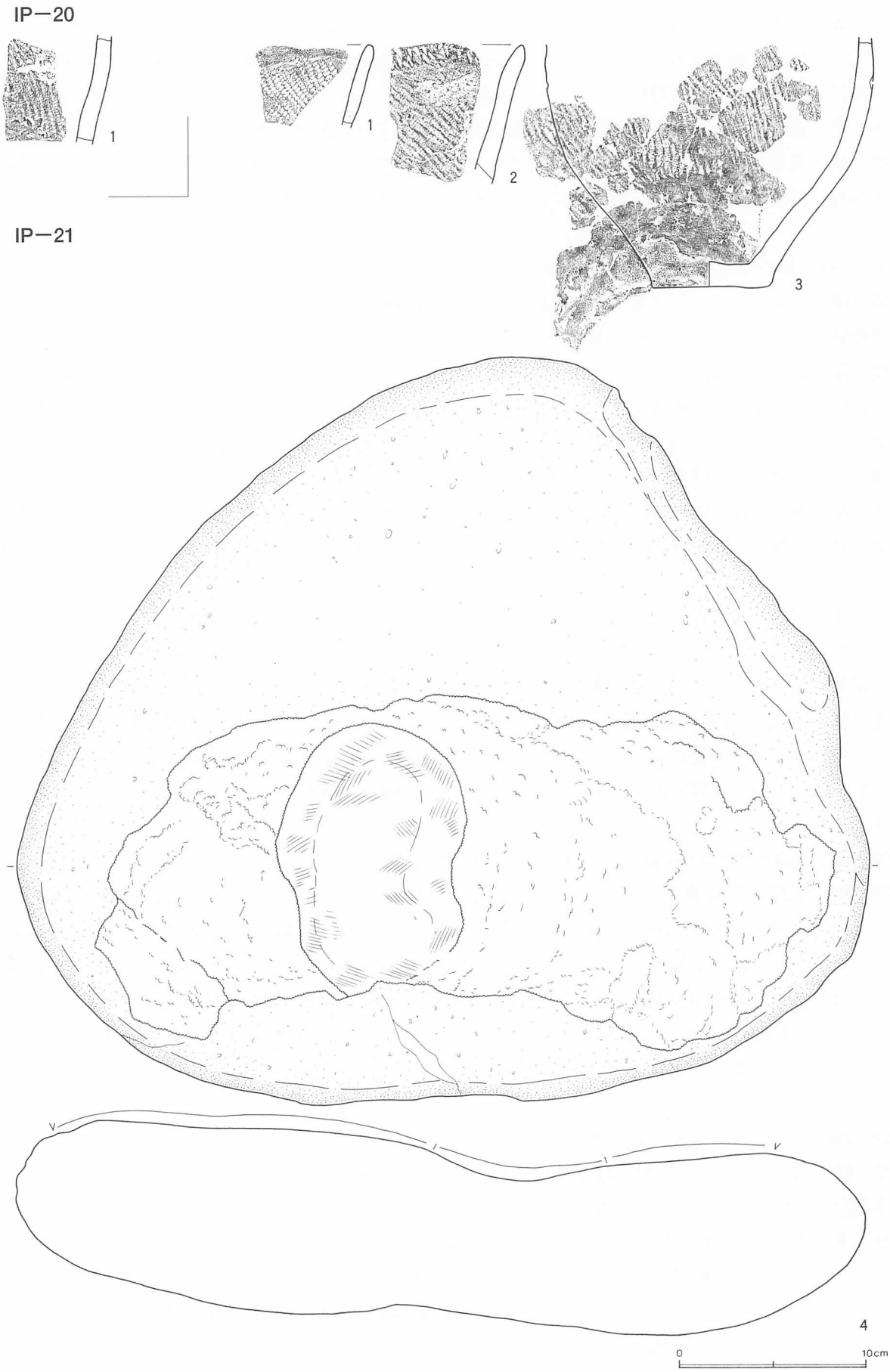
遺　物　**土器**：１は覆土のものと周辺の包含層（N28区）から出土したものが接合した。全体の３分の２ほどが残存する。破片は輪積みの位置でわれており、また底部は円盤状の土台となる部分が同様に輪積み位置で割れて欠損している。小さな山形の突起を複数か所に有するとみられる。０段多条の細いRL原体による縄文が施文され、底部付近では縦行気味となる。口唇は棒状工具により斜めに刻まれている。Ⅲ群a類、サイベ沢Ⅶ式並行のものである。２～５はⅣ群a類土器。２は縄文が施されている。３～５は底部。　（遠藤）

IP－26（図Ⅳ－20、表１・４、図版15）

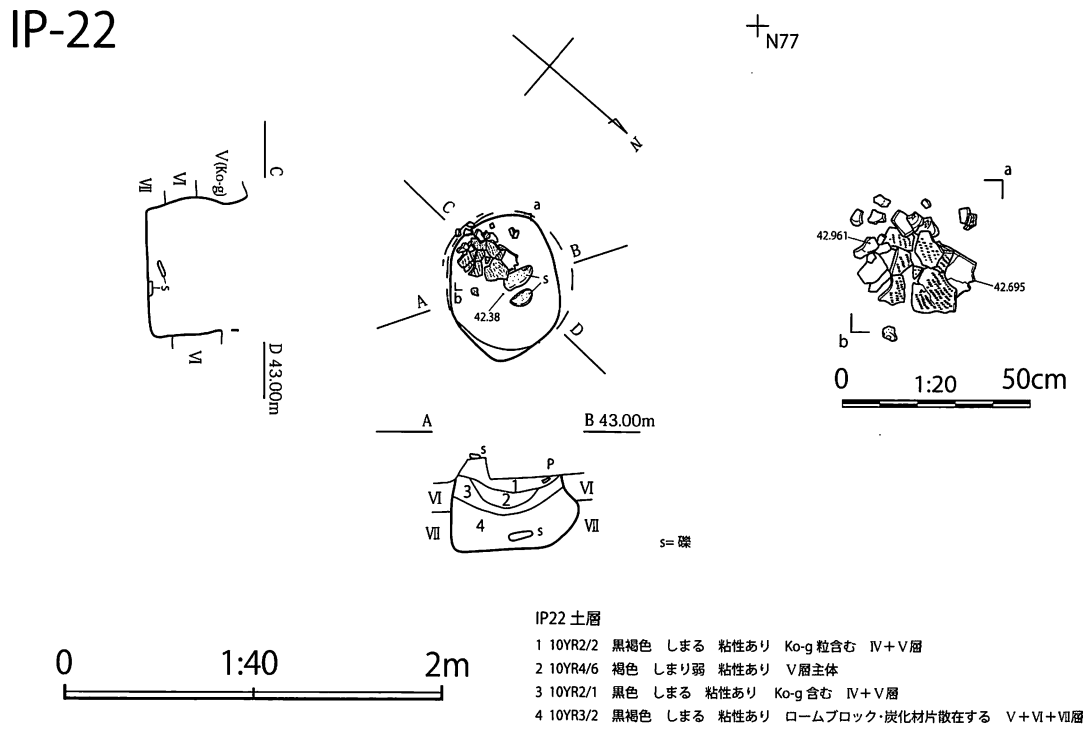
位　置　M78　　**立　地**　標高43.0ｍ付近の緩斜面

平面形　不整楕円形　　**規　模**　（0.81）/0.09×0.66/0.11×0.17ｍ

特　徴　IH－５床面で黒褐色土の落ち込みとして確認した。覆土はⅣ層主体の埋め戻しである。坑底は不安定で、壁は不明瞭に立ち上がる。覆土から、縄文時代後期前葉の土器が１点出土した。IH－５との関係は明確につかめなかったが、土坑検出面の遺物出土状況がIH－５床面より連続していたことから、IH－５より古い土坑と考えられる。

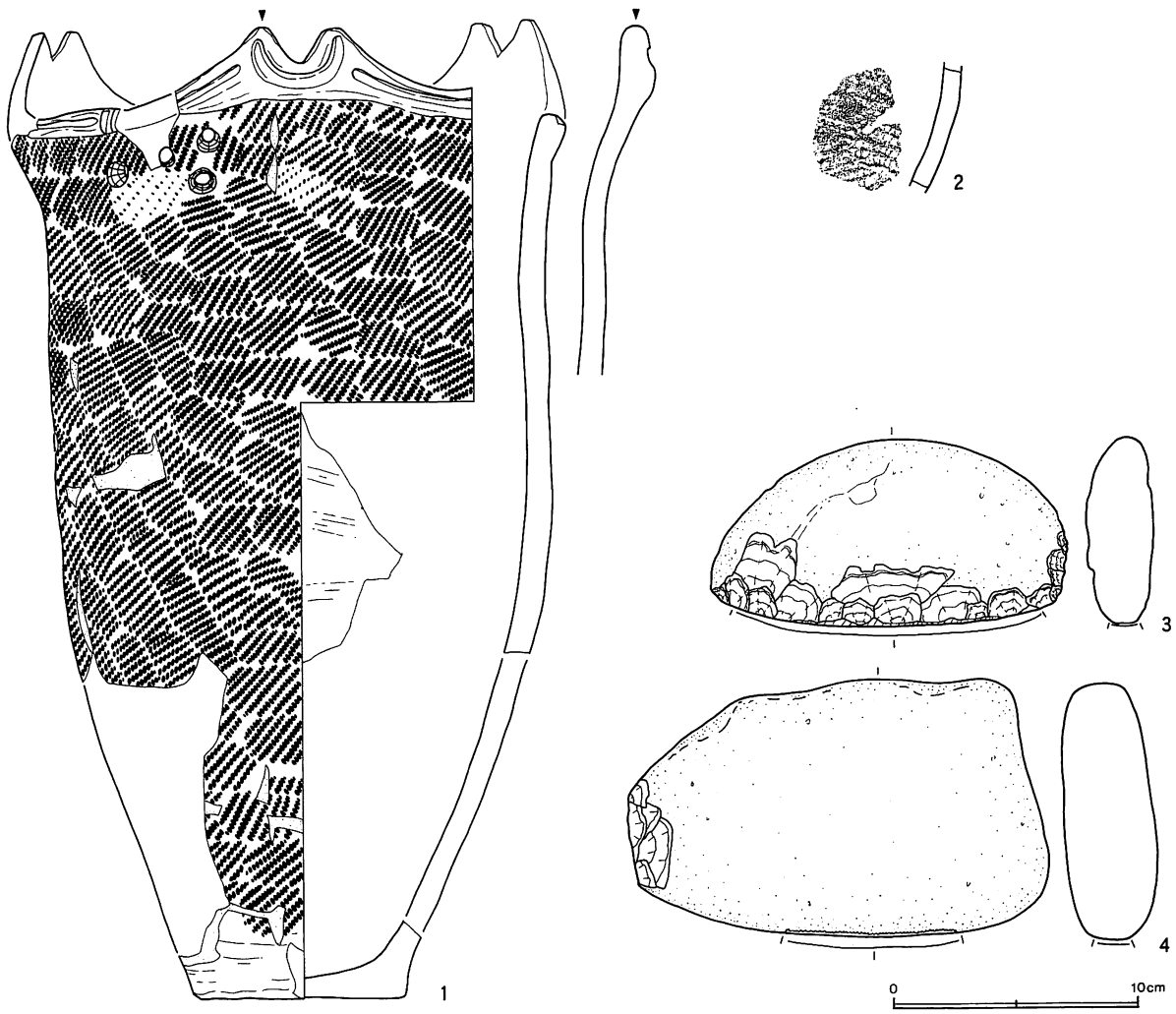


図Ⅳ－18　IP－20・21出土の遺物

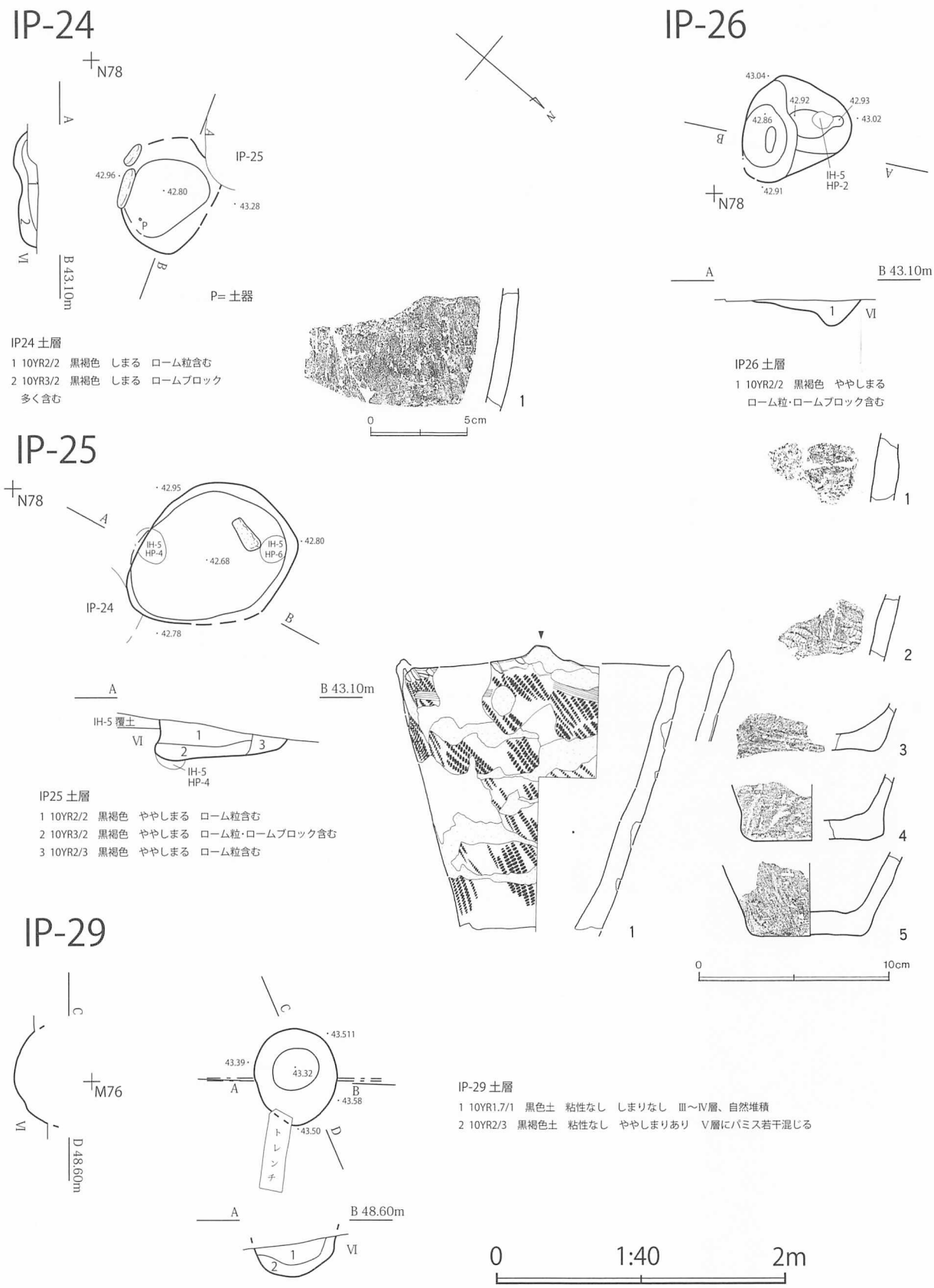


IP22 土層

1 10YR2/2　黒褐色　しまる　粘性あり　Ko-g 粒含む　Ⅳ＋Ⅴ層
2 10YR4/6　褐色　しまり弱　粘性あり　Ⅴ層主体
3 10YR2/1　黒色　しまる　粘性あり　Ko-g 含む　Ⅳ＋Ⅴ層
4 10YR3/2　黒褐色　しまる　粘性あり　ロームブロック・炭化材片散在する　Ⅴ＋Ⅵ＋Ⅶ層



図Ⅳ－19　IP－22と出土の遺物



図Ⅳ－20 IP－24・25・26・29と出土の遺物

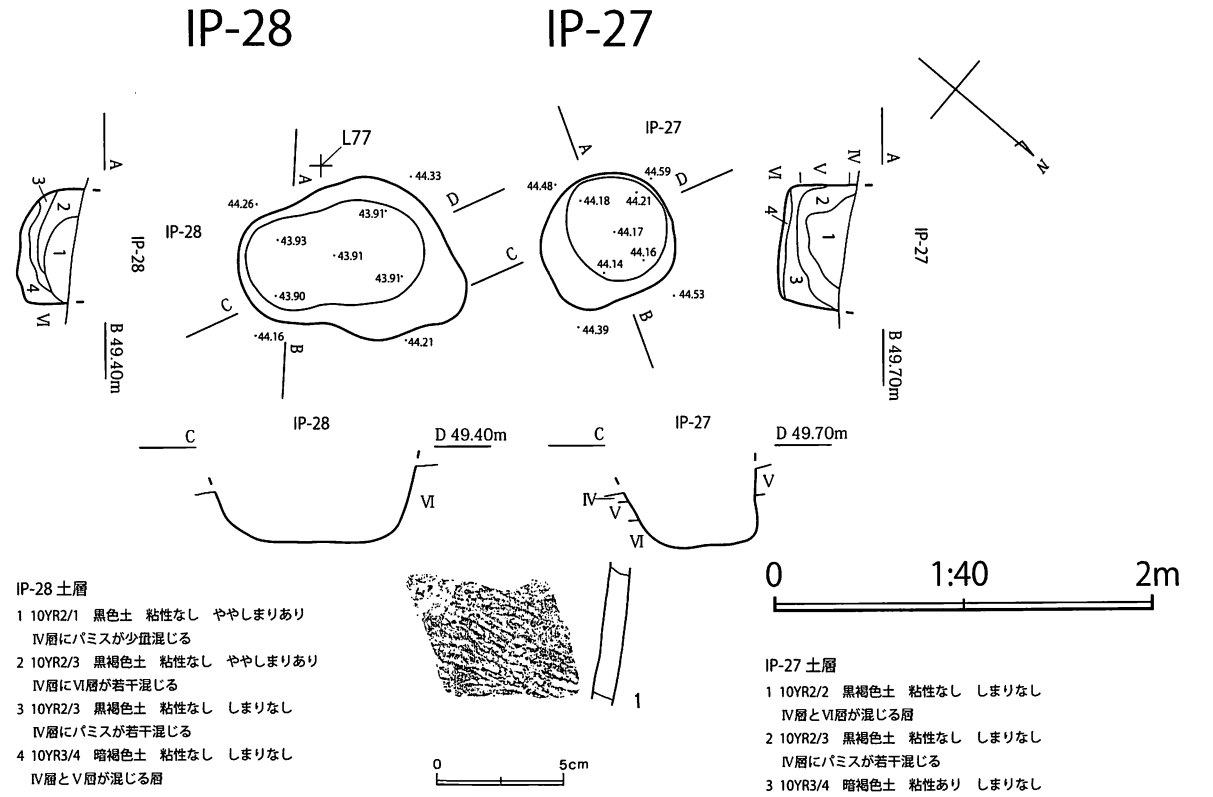
時　期　遺構の切り合い関係と出土遺物から縄文時代後期前葉と考えられる。　(福井)
遺　物　**土器**：1は表面が剥落しているが胎土からⅣ群a類と判断した。　(遠藤)

IP－27（図Ⅳ－21、表1、図版16）
位　置　L77　　**立　地**　標高44m前後の斜面
平面形　円形　　**規　模**　0.72/0.66×0.52/0.56×0.36m
特　徴　Ⅴ層上面で黒褐色土の落ち込みを確認した。半截したところほぼ垂直に立ち上がる壁、平坦な坑底が検出されたため、土坑と判断した。0.6m南東にはIP－28がある。
時　期　遺構周辺の出土遺物から、縄文時代後期前葉もしくは中期前半のものとみられる。　(立田)

IP－28（図Ⅳ－21、表1・4、図版16・40）
位　置　L76・77　　**立　地**　標高44m前後の斜面
平面形　不整楕円形　　**規　模**　1.08/0.86×0.92/0.56×0.36m
特　徴　L76区のⅤ層上面で黒色土の落ち込みを確認した。落ち込みはL77区に延びていたため、Lラインを境に掘り下げた。その結果、明瞭な壁、坑底を確認し、土坑であることがわかった。0.6m北西にはIP－27がある。
時　期　遺構周辺の出土遺物から、縄文時代後期前葉か中期前半のものとみられる。　(立田)
遺　物　**土器**：1はⅣ群a類土器。無節のもので、L原体による横走気味の縄文が施されている。　(遠藤)

IP－29（図Ⅳ－20、表1、図版16）
位　置　L・M76　　**立　地**　標高43m前後の緩斜面
平面形　ほぼ円形　　**規　模**　0.66/0.56×0.28/0.32×0.22m
特　徴　M76区のⅥ層上面を精査したところ、黒色土の落ち込みを確認した。落ち込みはL76区に延びており、L76区がⅤ層上面まで掘り下がった時点で改めて精査を行なった。その結果、概ね円形を呈する平面形を確認したため、Mラインに合わせて南西側を半截した。その結果、椀状の断面を確認し、土坑であることがわかった。
時　期　遺構周辺の出土遺物から、縄文時代後期前葉もしくは中期前半のものとみられる。　(立田)

IP－30（図Ⅳ－20、表1・4、図版17・40）
位　置　K78　　**立　地**　標高45m前後の斜面
平面形　楕円形　　**規　模**　0.22/（0.17）×0.17/（0.14）×0.09m
特　徴　K78区のⅣ層を調査中、Ⅲ群a類土器がややまとまって出土した。周囲を精査したが、落ち込み等の層位の変化は検出されなかった。Ⅳ層を掘り下げた後、Ⅴ層上面において改めて精査したところ、同一個体とみられるⅢ群a類土器を伴う黒褐色土の落ち込みを確認した。これらの土器は埋設されていたものと判断し、出土状況の記録を作成した。
時　期　出土遺物から縄文時代中期前半のものとみられる。　(立田)

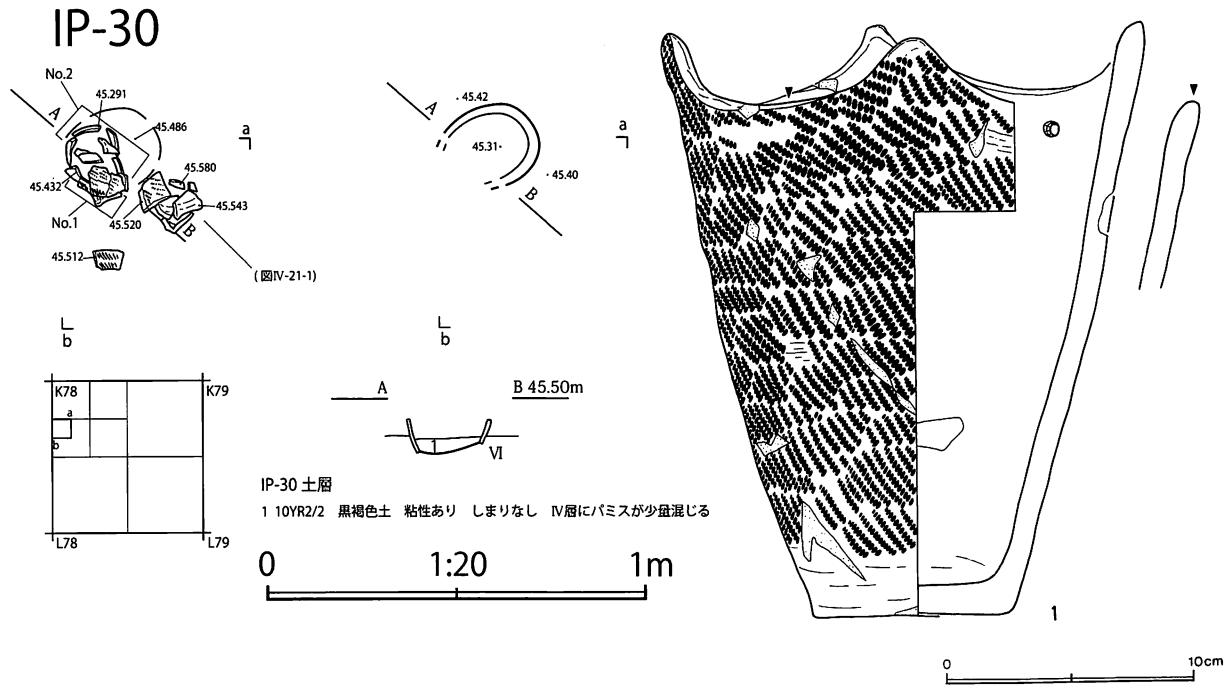


IP-28 土層

1 10YR2/1　黒色土　粘性なし　ややしまりあり
　Ⅳ層にパミスが少量混じる
2 10YR2/3　黒褐色土　粘性なし　ややしまりあり
　Ⅳ層にⅥ層が若干混じる
3 10YR2/3　黒褐色土　粘性なし　しまりなし
　Ⅳ層にパミスが若干混じる
4 10YR3/4　暗褐色土　粘性なし　しまりなし
　Ⅳ層とⅤ層が混じる層

IP-27 土層

1 10YR2/2　黒褐色土　粘性なし　しまりなし
　Ⅳ層とⅥ層が混じる層
2 10YR2/3　黒褐色土　粘性なし　しまりなし
　Ⅳ層にパミスが若干混じる
3 10YR3/4　暗褐色土　粘性あり　しまりなし
　Ⅳ層に黄褐色土ブロックが若干混じる
4 10YR3/4　暗褐色土　粘性あり　しまりなし
　Ⅳ層に類似



IP-30 土層

1 10YR2/2　黒褐色土　粘性あり　しまりなし　Ⅳ層にパミスが少量混じる

図Ⅳ－21　IP－27・28・30と出土の遺物

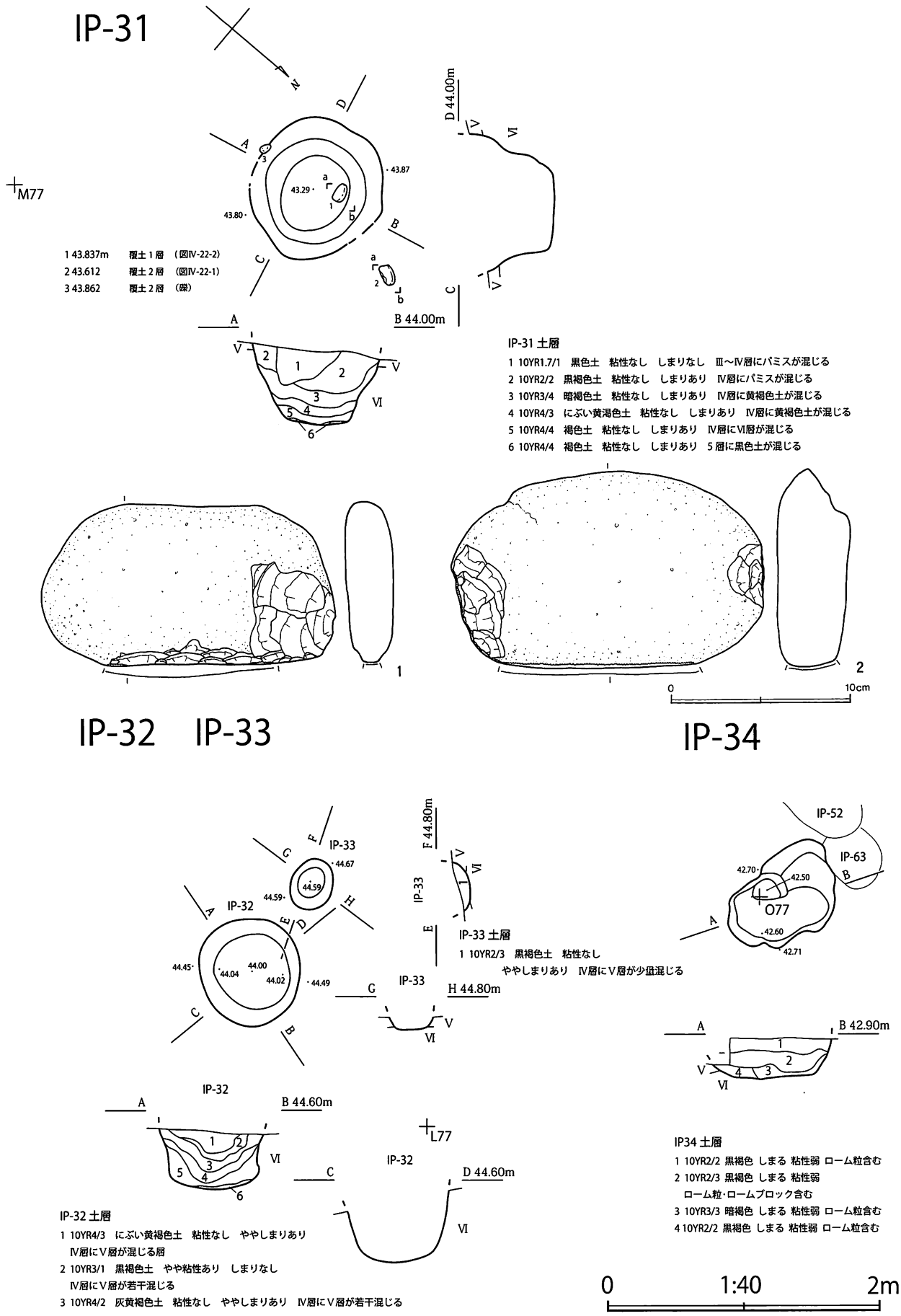
遺　物　土器：１は覆土と周辺の包含層から出土した破片が接合したもの。焼成の良い土器で、欠損部がほとんどない。４か所にわずかに肥厚させた山形の突起部をもつものである。口唇上から内面、底部にいたるまで、平滑に調整されている。器面にはRL原体による斜行縄文が施され、部分的に縦行する。底部付近はナデ調整で無文となっている。胎土に白色の岩片が混入する。Ⅲ群a類、見晴町式に相当するものである。（遠藤）

IP－31（図Ⅳ－22、表１・５、図版17・43）
位　置　L・M77　　**立　地**　標高43.8ｍ前後の斜面
平面形　円形　　**規　模**　1.04/0.96×0.56/0.48×0.56ｍ
特　徴　Ⅴ層上面を精査中、黒褐色土の落ち込みが検出された。落ち込みは明瞭な円形を呈していたため、南北を軸に東側を半截した。その結果、明瞭な壁と坑底を確認し、土坑であることがわかった。
時　期　周囲で検出される遺構から、縄文時代後期前葉もしくは中期前半のものとみられる。
遺　物　石器：１、２は扁平打製石器である。１は覆土２層、２は覆土１層から出土している。両者とも、扁平礫をほとんど加工せずに素材とするものである。石質は１、２ともに安山岩である。（立田）

IP－32（図Ⅳ－22、表１、図版17）
位　置　K76　　**立　地**　標高40.4ｍ前後の緩斜面
平面形　円形　　**規　模**　0.78/0.74×0.56/0.52×0.46ｍ
特　徴　Ⅴ層上面を精査中、黒褐色土の落ち込みが検出された。落ち込みは明瞭な円形を呈していたため、南北を軸にして東側を半截した。その結果、ややフラスコ状を呈する断面形を確認し、土坑であることがわかった。0.2ｍ西にIP－33と接している。
時　期　遺構周辺の出土遺物から、縄文時代後期前葉もしくは中期前半のものとみられる。（立田）

IP－33（図Ⅳ－22、表１、図版17）
位　置　K76　　**立　地**　標高40.4ｍ付近の緩斜面
平面形　楕円形　　**規　模**　0.38/0.30×0.24/0.18×0.08ｍ
特　徴　Ⅵ層上面を精査中、黒褐色土の落ち込みを確認した。落ち込みは明瞭な楕円形を呈していたため、北側を半截した。その結果、緩やかな壁、椀状の坑底を確認して土坑であることがわかった。0.2ｍ東にIP－32と接している。
時　期　遺構周辺の出土遺物から、縄文時代後期前葉もしくは中期前半のものとみられる。（立田）

IP－34（図Ⅳ－22、表１、図版18）
位　置　N・O76・77　　**立　地**　標高42.7ｍ付近の緩斜面
平面形　不整楕円形　　**規　模**　0.82/0.65×0.66/0.29×0.29ｍ
特　徴　Ⅴ層上面で黒褐色土の落ち込みとして確認した。覆土はⅣ層主体の埋め戻しである。坑底は平坦で、壁はやや急に立ち上がる。覆土から、縄文時代後期前葉の土器が１点出土した。
時　期　出土遺物から縄文時代後期前葉と考えられる。（福井）



図Ⅳ－22 IP－31・32・33・34と出土の遺物

IP－35（図Ⅳ－23、表１）
位　置　O76　　**立　地**　標高42.3ｍ付近の緩斜面
平面形　楕円形　　**規　模**　（1.17）/1.05×（0.55）/0.43×0.11ｍ
特　徴　Ⅴ層上面で黒褐色土の落ち込みとして確認した。覆土はⅣ層主体の埋め戻しである。坑底は皿状で、壁は緩やかに立ち上がる。SP－10に切られている。
時　期　周囲の出土遺物から縄文時代中期前半～後期前葉の時期と考えられる。　（福井）

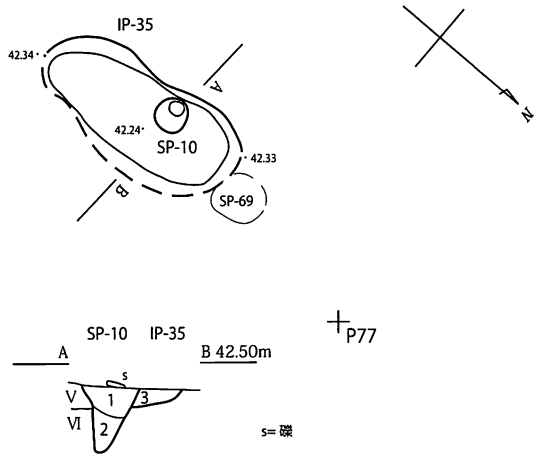
IP－36（図Ⅳ－23、表１）
位　置　O76　　**立　地**　標高42.4ｍ付近の緩斜面
平面形　円形?　　**規　模**　0.55/－×0.49/－×0.14ｍ
特　徴　Ⅵ層上面で黒褐色土の落ち込みとして確認した。覆土はⅣ層主体の埋め戻しである。SP－11・12・96に切られるため形態は明瞭ではない。
時　期　周囲の出土遺物から縄文時代中期前半～後期前葉の時期と考えられる。　（福井）

IP－37（図Ⅳ－23、表１、図版18）
位　置　M77　　**立　地**　標高43.5ｍ付近の緩斜面
平面形　不整円形　　**規　模**　0.78/0.62×（0.48）/（0.40）×0.38ｍ
特　徴　Ⅵ層上面を精査したところ、黒褐色土の落ち込みを確認した。落ち込みは不明瞭であったため、南北方向にトレンチを設定して明瞭なⅥ層を確認できるまで掘り下げた。その結果、急激に立ち上がる壁とほぼ平坦な坑底を確認したため、土坑であると判断した。ただし、本遺構の東には風倒木によるⅥ層の盛り上がりがあり、この影響による自然堆積の可能性もある。
時　期　本遺跡での出土傾向から、縄文時代中期前半、もしくは後期前葉のものである可能性が高い。　（立田）

IP－38（図Ⅳ－23、表１、図版18）
位　置　N75　　**立　地**　標高42ｍ前後の緩斜面
平面形　円形　　**規　模**　0.66/0.60×0.60/0.52×0.22ｍ
特　徴　N75区において、町道による攪乱層を除去し、Ⅵ層上面を精査していたところ、暗褐色土の落ち込みを確認した。落ち込みは明瞭であったため、東西軸にベルトを残して暗褐色土を掘り下げた。その結果、平坦な坑底と壁の一部を確認した。西側にわずかに壁が残るほかは、ほぼ坑底まで町道の造成により破壊されている。
時　期　本遺跡での出土傾向から、縄文時代中期前半、もしくは後期前葉のものである可能性が高い。　（立田）

IP－39（図Ⅳ－23、表１、図版18・19）
位　置　J－76　　**立　地**　標高44.6ｍ前後の斜面
平面形　円形　　**規　模**　0.94/0.90×0.60/0.62×0.54ｍ

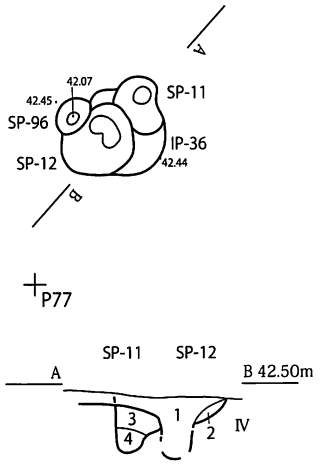
IP-35　SP-10



IP35・SP10 土層

1 10YR3/2　黒褐色　しまる　粘性弱　ロームブロック含む
2 10YR3/2　黒褐色　しまる　粘性弱　ロームブロック・炭化材片含む
3 10YR3/2　黒褐色　しまる　粘性弱　ロームブロック多く含む

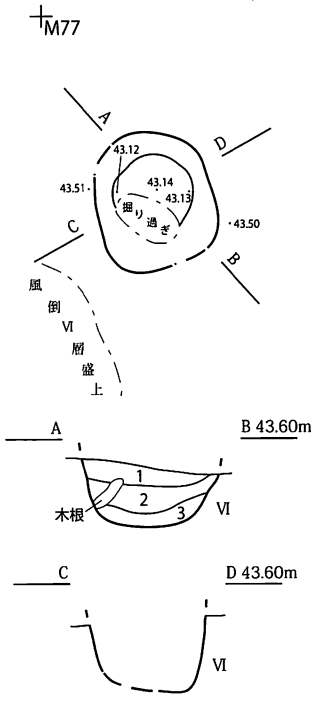
IP-36 SP-11 SP-12 SP-96



IP36・SP11・SP12 土層

1 10YR2/2　黒褐色　しまる　粘性弱
2 10YR3/2　黒褐色　しまる　粘性弱　ロームブロック多く含む
3 10YR5/3　にぶい黄褐色　しまる　粘性弱　クロボクブロック多く含む
4 10YR1.7/1　黒色　しまる　粘性弱　ロームブロック多く含む

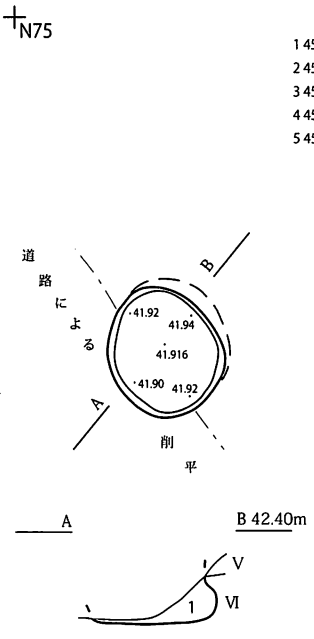
IP-37



IP-37 土層

1 10YR2/3　黒褐色土　粘性なし　しまりあり　Ⅳ層相当自然堆積
2 10YR3/4　暗褐色土　粘性あり　ややしまりあり
　1 層にⅤ層と炭化物が若干混じる
3 10YR3/3　黒褐色土　粘性なし　ややしまりなし　Ⅴ層若干混じる

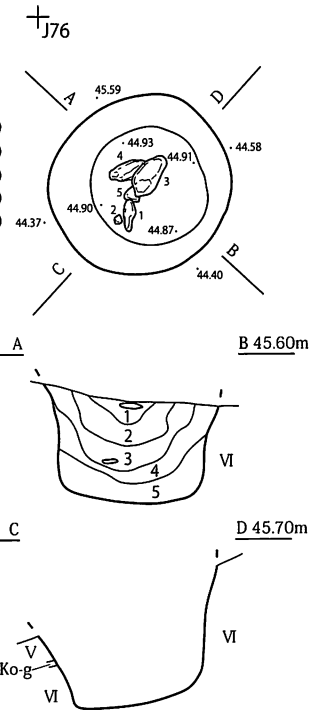
IP-38



IP-38 土層

1 10YR3/3　暗褐色土　粘性なし　しまりあり
　Ⅳ～Ⅴ層にパミスが混じる

IP-39



IP-39 土層

1 10YR2/1　黒色土　粘性なし　ややしまりあり
　Ⅲ層にパミスが混じる
2 10YR4/4　褐色土　粘性なし　ややしまりあり
　Ⅳ～Ⅴ層にパミスが若干混じる
3 10YR2/1　黒色土　粘性なし　しまりなし
　Ⅳ層にパミスが少量混じる
4 10YR2/2　黒褐色土　粘性なし　しまりなし
　Ⅳ層にⅥ層が若干混じる
5 10YR3/3　暗褐色土　粘性なし　ややしまりあり
　Ⅵ層にⅣ層が若干混じる

0　1:40　2m

図Ⅳ－23　IP－35・36・37・38・39、SP－10・11・12・96

特　徴　Ⅵ層上面を精査していたところ、黒色土の落ち込みを確認した。落ち込みは明瞭な円形を呈していたため、東側を半截した。その結果、垂直に近く立ち上がる壁、東側にやや傾斜する坑底を確認したため、土坑であることがわかった。

時　期　遺構周辺の出土遺物から、縄文時代後期前葉もしくは中期前半のものとみられる。　（立田）

IP－40（図Ⅳ－24、表１・４、図版19・40）

位　置　M77・78　　**立　地**　標高43.3ｍ付近の緩斜面

平面形　不整楕円形　　**規　模**　0.65/0.45×0.55/0.47×0.20ｍ

特　徴　Ⅴ層上面で黒色土の落ち込みとして確認した。覆土はⅣ層主体の埋め戻しである。坑底は平坦で、壁はやや急に立ち上がる。覆土から礫が１点出土した。IH－５に切られるため、IH－５より古い土坑と考えられる。

時　期　周囲の出土遺物から縄文時代中期前半～後期前葉の時期と考えられる。　（福井）

遺　物　**土器**：１はⅣ群a類土器。LR原体による縄文を縦位に施文している。胎土に海綿状骨針が混入する。　（遠藤）

IP－41（図Ⅳ－24、表１）

位　置　N78　　**立　地**　標高42.5ｍ付近の緩斜面

平面形　不整楕円形　　**規　模**　0.61/0.49×0.53/0.42×0.14ｍ

特　徴　Ⅵ層上面で黒褐色土の落ち込みとして確認した。覆土はⅣ層主体の埋め戻しである。坑底は平坦で、壁はやや急に立ち上がる。

時　期　周囲の出土遺物から縄文時代中期前半～後期前葉の時期と考えられる。　（福井）

IP－42（図Ⅳ－24、表１・４、図版19・40）

位　置　Q79　　**立　地**　標高41.6ｍ付近の緩斜面

平面形　楕円形　　**規　模**　0.77/0.89×0.59/0.76×0.23ｍ

特　徴　Ⅵ層上面で暗褐色土の落ち込みとして確認した。覆土はⅣ・Ⅴ層主体の埋め戻しである。坑底は平坦で、壁はややオーバーハングしながら立ち上がる小型フラスコ状土坑。土坑墓の可能性がある。覆土から、縄文時代中期前半の土器が１点出土した。

時　期　遺構の出土遺物から縄文時代中期前半と考えられる。　（福井）

遺　物　**土器**：１はⅢ群a類土器。縄文地に２条一対の沈線で交差する文様が描かれている。　（遠藤）

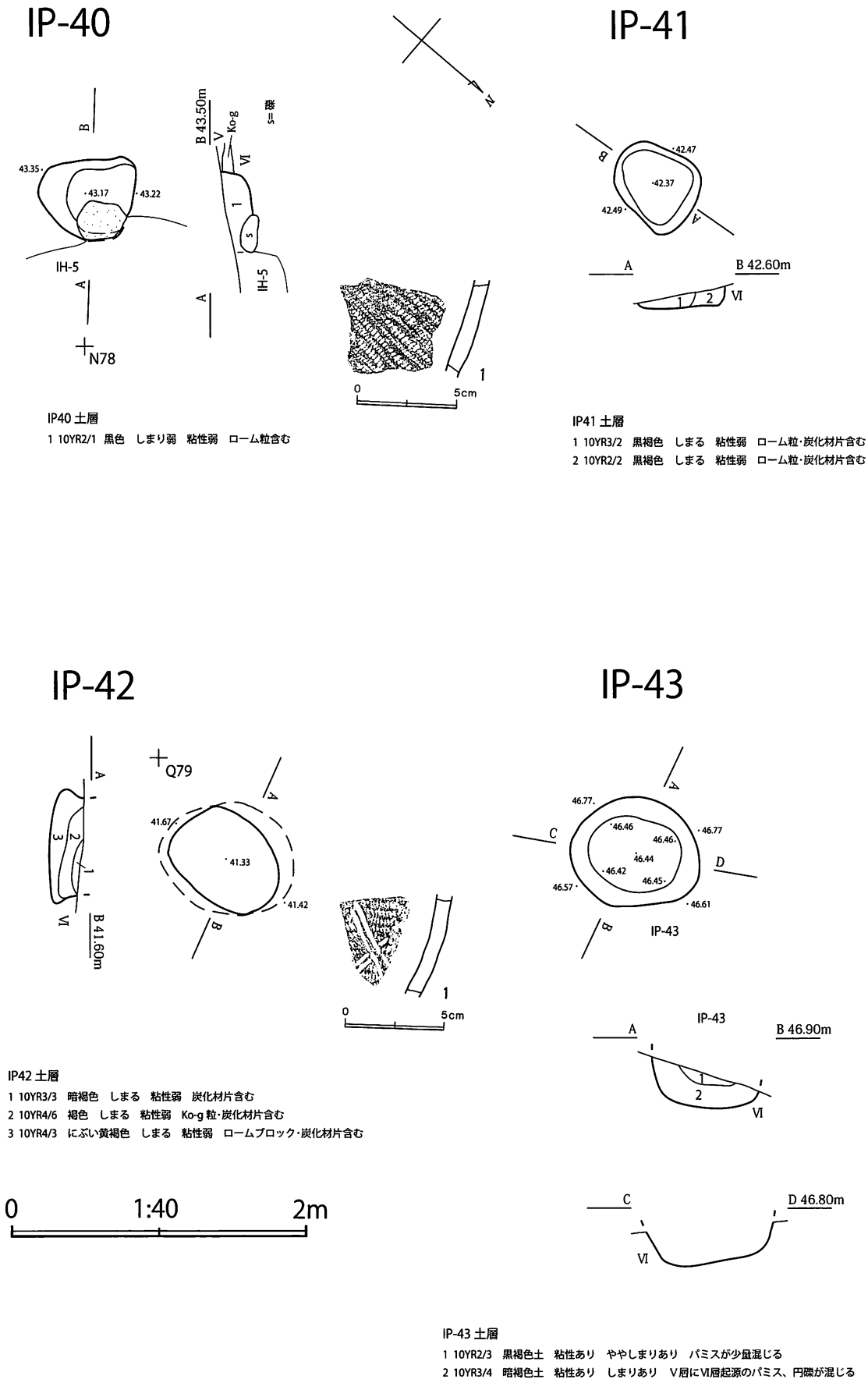
IP－43（図Ⅳ－24、表１、図版19・20）

位　置　K77　　**立　地**　標高44.5ｍ前後の斜面

平面形　楕円形　　**規　模**　0.88/0.72×0.62/0.48×0.26ｍ

特　徴　Ⅵ層上面を精査中、暗褐色土の落ち込みを確認した。落ち込みは明瞭な楕円形を呈していたため、南東側を半截した。その結果急激に立ち上がる壁と坑底が検出された。坑底は南東に向かってやや傾斜している。0.6m南東にIP－44が接している。

時　期　周辺の出土遺物から、縄文時代後期前葉もしくは中期前半のものとみられる。　（立田）



IP40 土層
1 10YR2/1 黒色 しまり弱 粘性弱 ローム粒含む

IP41 土層
1 10YR3/2 黒褐色 しまる 粘性弱 ローム粒・炭化材片含む
2 10YR2/2 黒褐色 しまる 粘性弱 ローム粒・炭化材片含む

IP42 土層
1 10YR3/3 暗褐色 しまる 粘性弱 炭化材片含む
2 10YR4/6 褐色 しまる 粘性弱 Ko-g 粒・炭化材片含む
3 10YR4/3 にぶい黄褐色 しまる 粘性弱 ロームブロック・炭化材片含む

IP-43 土層
1 10YR2/3 黒褐色土 粘性あり ややしまりあり パミスが少量混じる
2 10YR3/4 暗褐色土 粘性あり しまりあり Ⅴ層にⅥ層起源のパミス、円礫が混じる

図Ⅳ－24 IP－40・41・42・43と出土の遺物

IP－44（図Ⅳ－25、表１・５、図版19・20・43）

位　置　K76・77　　**立　地**　標高44.5ｍ前後の斜面

平面形　楕円形　　**規　模**　1.18/0.94×0.90/（0.72）×0.46ｍ

特　徴　Ⅵ層上面を精査していたところ、黒褐色土の落ち込みを確認した。落ち込みの中心を通るようにトレンチを設定し、黒褐色土を掘り下げたところ、急激に立ち上がる壁と、ほぼ平坦な坑底を確認したため、土坑であることがわかった。トレンチ調査時に坑底を10cmほど掘りすぎている。0.6m北西にIP－43が接している。

時　期　遺構周辺の出土遺物から、縄文時代後期前葉もしくは中期前半のものとみられる。

遺　物　**石器**：１は石皿片である。歪な人頭大の礫の一部分を使用しているものである。素材礫は濁川カルデラ起源の角閃石安山岩。（立田）

IP－45（図Ⅳ－25、表１・４、図版20・40）

位　置　P77　　**立　地**　標高42.2ｍ付近の緩斜面

平面形　楕円形　　**規　模**　0.88/0.70×0.75/0.59×0.18ｍ

特　徴　Ⅵ層上面で黒褐色土の落ち込みとして確認した。覆土はⅣ層主体の埋め戻しである。坑底は皿状で、壁はやや急に立ち上がる。覆土から、縄文時代後期前葉の土器が１点出土した。IH－８に切られることから、IH－８より古い土坑である。

時　期　遺構の出土遺物から縄文時代後期前葉と考えられる。（福井）

遺　物　**土器・土製品**：１、２は縄文の施されたⅣ群a類土器の破片。３は破片中央部に穿孔の痕跡があることから円盤状土製品の未成品と判断した。穿孔途中で割れたものであろう。Ⅳ群a類土器の破片を利用している。（遠藤）

IP－46（図Ⅳ－25、表１、図版20）

位　置　J78・79　　**立　地**　標高46.4ｍ前後の斜面

平面形　円形　　**規　模**　0.66/0.62×0.56/0.52×0.20ｍ

特　徴　Ⅵ層上面で黒褐色土の落ち込みを確認した。北東側を半截した結果、坑底を掘りすぎたが、平坦な坑底と急激に立ち上がる壁が検出された。北西端の一部を木根に攪乱されている。

時　期　遺構周辺の出土遺物から、縄文時代後期前葉もしくは中期前半のものとみられる。（立田）

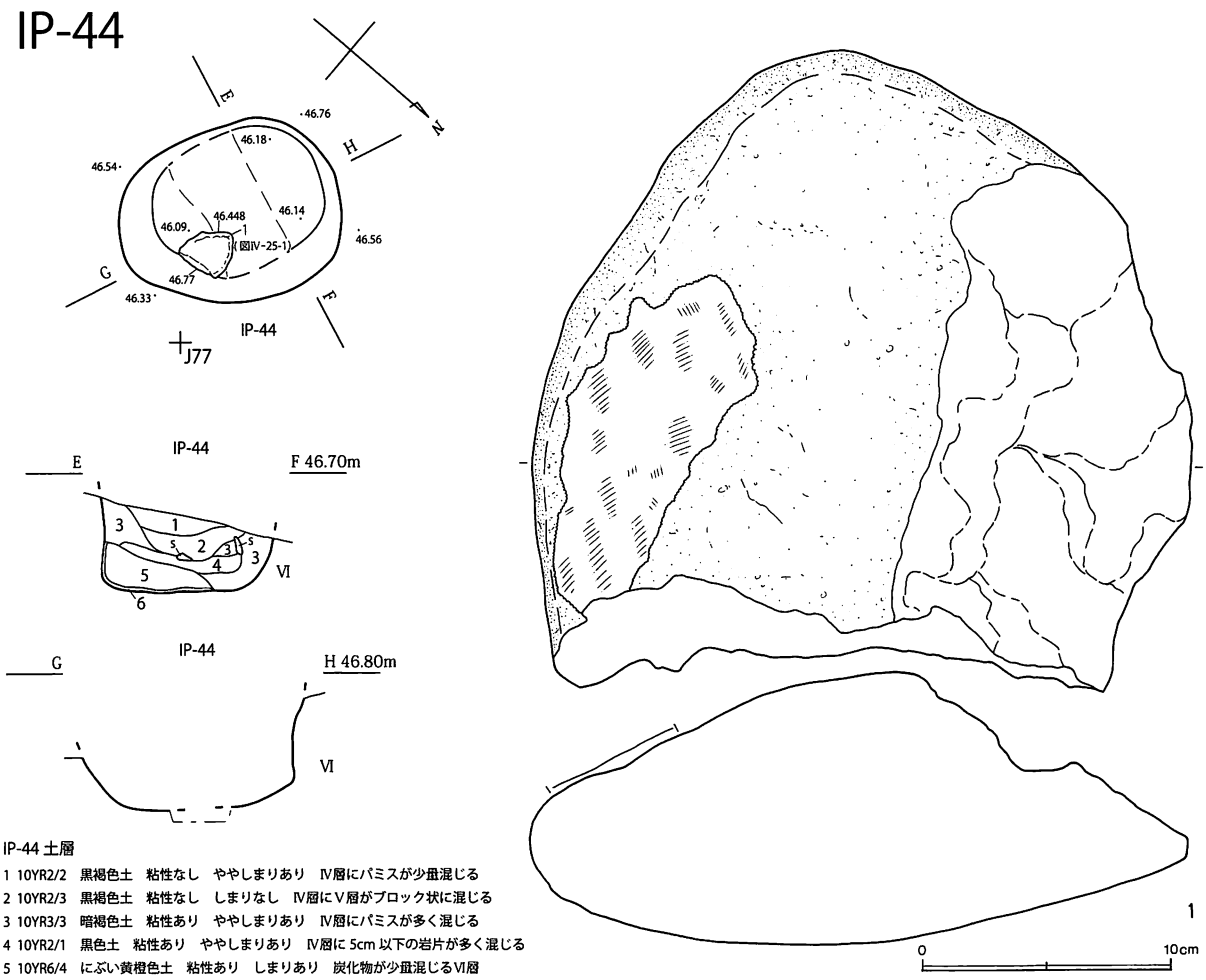
IP－47（図Ⅳ－26、表１、図版20）

位　置　Z79　　**立　地**　標高37.5ｍ付近の緩斜面

平面形　不整円形　　**規　模**　1.01/0.54×0.94/0.47×0.66ｍ

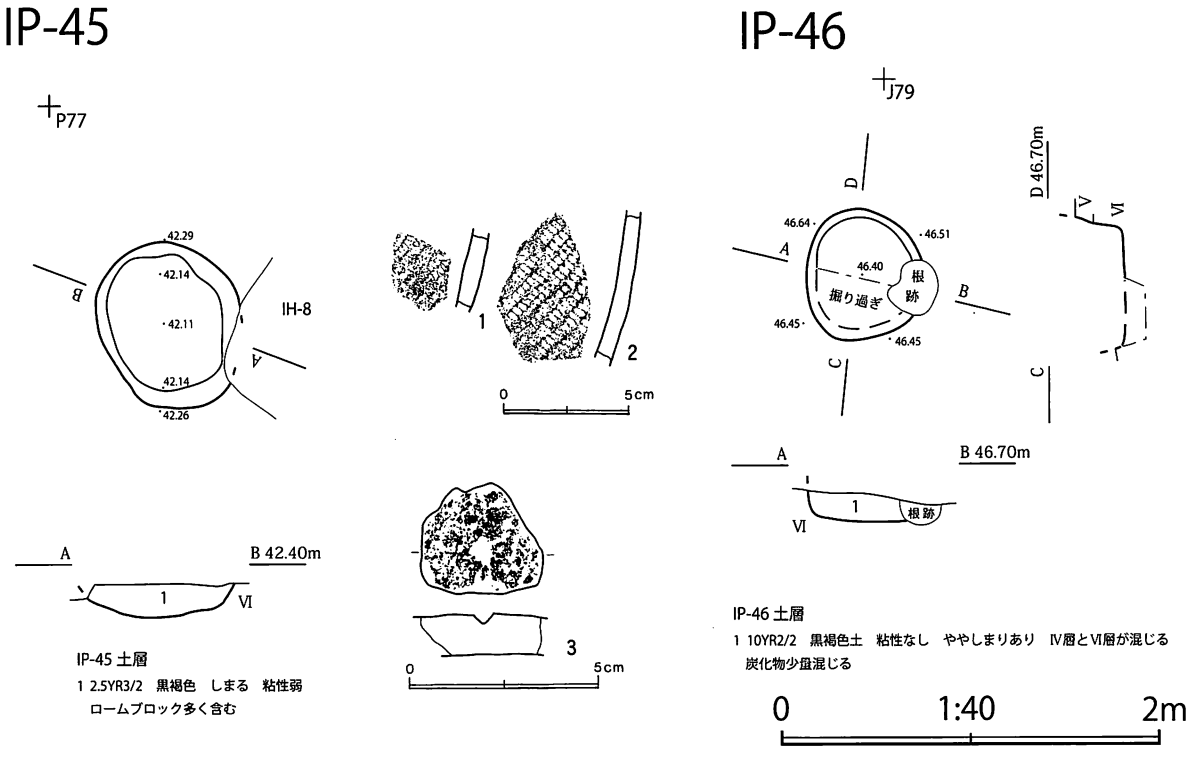
特　徴　Ⅵ層上面で黒色土の落ち込みとして確認した。風倒木痕のⅣ層の落ち込み中から検出したため、壁に当たる土層が柔らかく、その形状も不定であった。覆土はⅣ層とロームブロックが主体で、埋め戻しである。坑底は凹凸があり、壁はやや急に立ち上がる。覆土から、縄文時代後期前葉の土器が数点出土した。切り合い関係から風倒木痕より新しい土坑である。

時　期　遺構の出土遺物から縄文時代後期前葉と考えられる。（福井）



IP-44 土層

1 10YR2/2　黒褐色土　粘性なし　ややしまりあり　Ⅳ層にパミスが少量混じる
2 10YR2/3　黒褐色土　粘性なし　しまりなし　Ⅳ層にⅤ層がブロック状に混じる
3 10YR3/3　暗褐色土　粘性あり　ややしまりあり　Ⅳ層にパミスが多く混じる
4 10YR2/1　黒色土　粘性あり　ややしまりあり　Ⅳ層に 5cm 以下の岩片が多く混じる
5 10YR6/4　にぶい黄橙色土　粘性あり　しまりあり　炭化物が少量混じるⅥ層
6 10YR4/6　褐色土　粘性あり　しまりなし　炭化物少量混じる



IP-45 土層

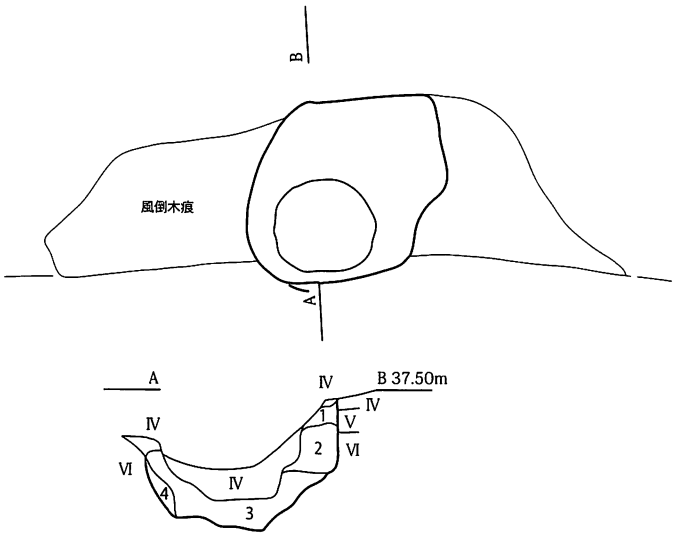
1 2.5YR3/2　黒褐色　しまる　粘性弱
ロームブロック多く含む

IP-46 土層

1 10YR2/2　黒褐色土　粘性なし　ややしまりあり　Ⅳ層とⅥ層が混じる
炭化物少量混じる

図Ⅳ－25　IP－44・45・46と出土の遺物

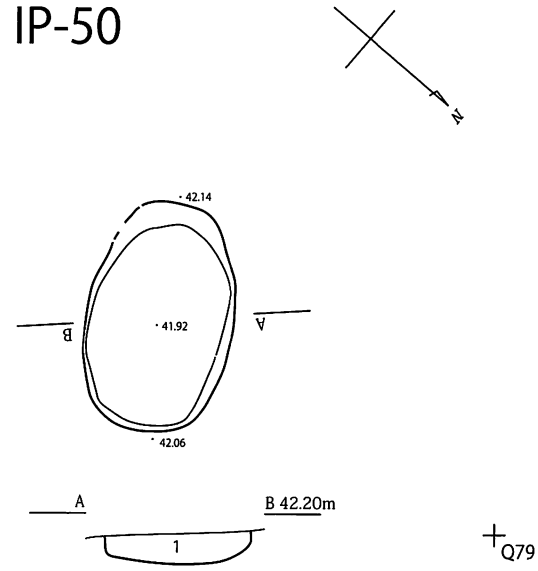
IP-47



IP-47 土層

1 10YR1.7/2　黒色　しまる　粘性弱　ローム粒・炭化材片多く含む
2 10YR2/3　黒褐色　しまる　粘性弱　ロームブロック多く含む
3 10YR3/3　暗褐色　しまる　粘性弱　ロームブロック含む
4 10YR4/6　褐色　しまる　粘性弱　クロボクブロック含む　Ⅵ層の崩落土

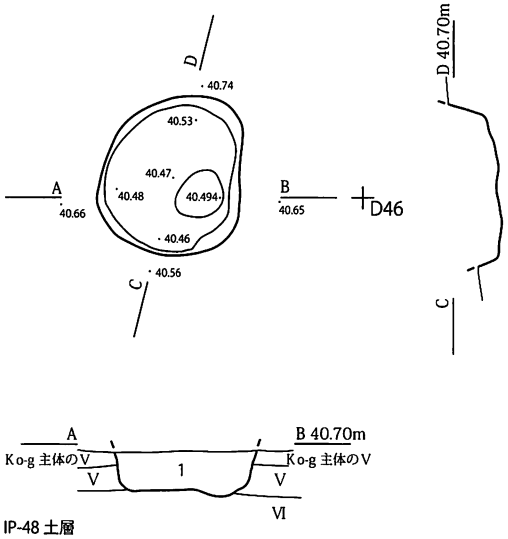
IP-50



IP-50 土層註記

1 2.5Y3/2　黒褐色　よくしまる　粘性弱
ローム粒・炭化材片含む

IP-48

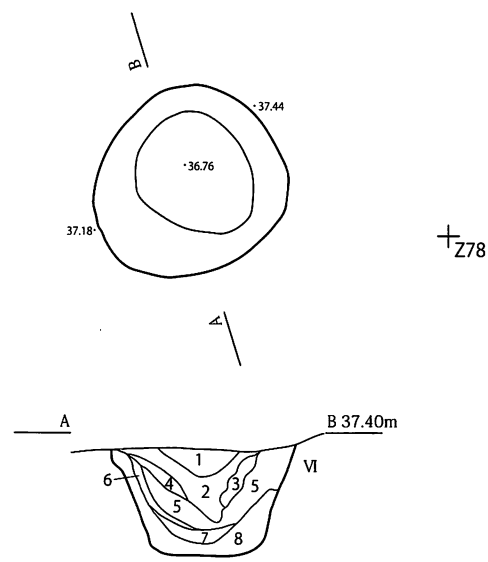


IP-48 土層

1 10YR3/1　黒褐色土　ややしまる　粒径 1cm 未満の軽石 2%と
粒径 2～3cm の明黄褐色土 10YR6/8 が 10%と、粒径 2～3cm の Ko-g 10%混じる

Ko-g 主体のⅤ層 5YR5/8　明赤褐色
Ⅴ層相当 明黄褐色土 10YR6/8
Ⅵ層相当 明黄褐色土 10YR6/8　粒径 2～3cm の軽石が混じる

IP-49



IP-49 土層

1 10YR2/1　黒色　しまり弱　粘性弱
ローム粒僅かに含む　　Ⅳ層主体
2 10YR1.7/1　黒色　しまる　粘性あり
ローム粒僅かに含む
3 10YR2/2　黒褐色　しまり弱　粘性弱　ローム粒含む
4 10YR4/6　褐色　しまり弱　砂質　Ko-g＋Ⅳ層
5 10YR3/3　暗褐色　しまる　粘性弱　Ko-g＋Ⅵ層
6 10YR4/6　褐色　しまり弱　砂質　Ko-g の単層
7 10YR3/1　黒褐色　しまり弱　粘性弱
ロームブロック＋Ⅳ＋Ⅵ層
8 10YR4/4　褐色　しまる　粘性弱　炭化材片含む
Ⅵ層主体

0　1:40　2m

図Ⅳ－26　IP－47・48・49・50

IP－48（図Ⅳ－26、表１、図版20）

位　置　C・D45　　**立　地**　標高40～41ｍ付近の緩斜面

平面形　不整な楕円形　　**規　模**　0.86/0.78×0.76/0.66×（0.24）ｍ

特　徴　Ⅳ層下面Ko－gが面的に確認できた段階で、黒褐色土の落ち込みとして確認した。覆土はⅣ層に濁川起源の軽石および斑状のⅥ層、そして斑状のKo－gが混じる。ややしまるが、埋め戻しかどうかは判然としない。坑底は凹凸があり、特に中央よりやや北側に凹みがある。壁は急に立ち上がる。遺物の出土はない。掘りこみ面は検出面より上と考える。

時　期　不明である。遺構周辺の出土遺物から判断するならば、縄文時代中期前半又は後期前葉の可能性がある。量的には後期前葉、Ⅳ群a類土器の方が多い。（大泰司）

IP－49（図Ⅳ－26、表１、図版21）

位　置　Y・Z77　　**立　地**　標高37.3ｍ付近の緩斜面

平面形　楕円形　　**規　模**　1.06/0.57×0.95/0.67×0.59ｍ

特　徴　Ⅵ層上面で黒色土の落ち込みとして確認した。覆土は上半の土層１～３が黒色系土、下半の土層４～８が黄褐色系土。上半がⅣ層主体、下半がⅤ・Ⅵ層主体の埋め戻しである。坑底は平坦で、壁は外に開きながら急に立ち上がる。土坑墓の可能性がある。

時　期　周囲の出土遺物から縄文時代中期前半～後期前葉の時期と考えられる。（福井）

IP－50（図Ⅳ－26、表１、図版21）

位　置　P78　　**立　地**　標高42.1ｍ付近の緩斜面

平面形　楕円形　　**規　模**　1.21/1.06×0.78/0.70×0.16ｍ

特　徴　Ⅵ層上面で黒褐色土の落ち込みとして確認した。覆土はⅣ層主体の埋め戻しである。坑底は平坦で、壁はやや急に立ち上がる。

時　期　周囲の出土遺物から縄文時代中期前半～後期前葉の時期と考えられる。（福井）

IP－51（図Ⅳ－27、表１、図版21）

位　置　N77　　**立　地**　標高42.8ｍ付近の緩斜面

平面形　楕円形　　**規　模**　（0.84）/（0.77）×0.75/0.66×0.47ｍ

特　徴　Ⅵ層上面で黒褐色土の落ち込みとして確認した。覆土はⅣ・Ⅴ・Ⅵ層主体で、黒色系土と黄褐色系土の互層となっており、埋め戻しである。坑底は平坦で、壁はややオーバーハングしながら立ち上がる小型フラスコ状土坑。土坑墓の可能性がある。IP－52、SP－84に切られる。

時　期　周囲の出土遺物から縄文時代中期前半の時期と考えられる。覆土採取炭化材を年代測定したところ、4340±25yrB.P.（PLD－12080）の測定値が得られた。（福井）

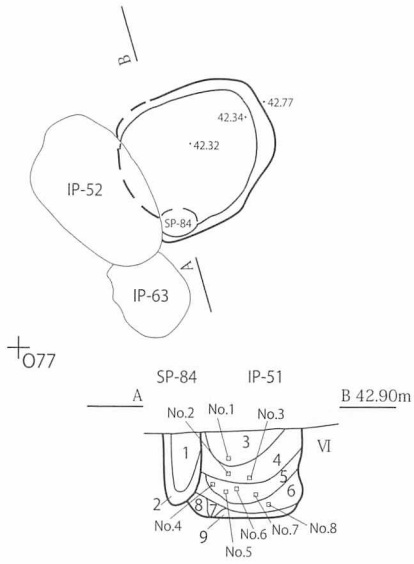
IP－52（図Ⅳ－27、表１・４、図版21・40）

位　置　N77　　**立　地**　標高42.8ｍ付近の緩斜面

平面形　楕円形　　**規　模**　（0.87）/（0.79）×0.51/（0.38）×0.16ｍ

特　徴　Ⅵ層上面で黒褐色土の落ち込みとして確認した。覆土はⅣ層主体の埋め戻しである。坑底は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。覆土から、縄文時代後期前葉の土器が11点、剥片が１点出土した。IP－51・63を切っている。

IP-51　SP-84

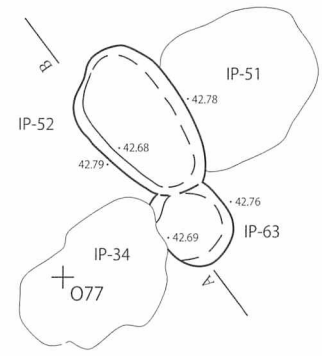


No.1~8 は
プラントオパール採取位置

IP-51・SP-84 土層

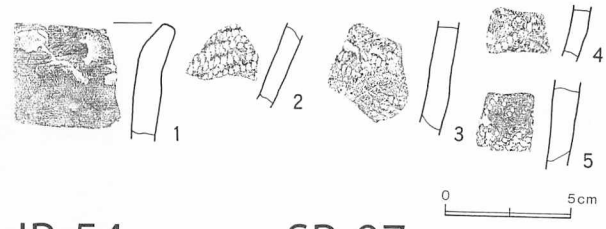
1 10YR2/1　黒色　しまる　粘性弱　ロームブロック・ローム粒含む
2 10YR3/2　黒褐色　しまる　粘性弱　ロームブロック多く含む
3 10YR3/1　黒褐色　しまる　粘性弱　ローム粒・炭化材片含む
4 10YR4/3　にぶい黄褐色　しまる　粘性弱　クロボクブロック含む　Ⅵ層主体
5 10YR3/2　黒褐色　しまる　粘性弱　ローム粒含む
6 10YR6/6　明黄褐色　しまる　粘性弱　Ⅴ＋Ⅵ層
7 10YR4/2　灰黄褐色　しまる　粘性弱　ロームブロック含む
8 10YR4/3　にぶい黄褐色　しまる　粘性弱　ロームブロック多く含む
9 10YR3/2　黒褐色　しまる　粘性弱　ローム粒含む

IP-52　IP-63

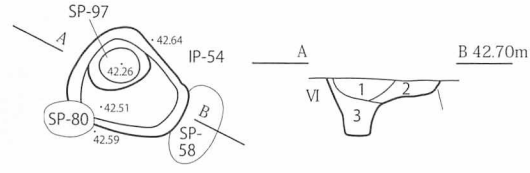


IP-52・63 土層

1 10YR3/2　黒褐色　しまる　粘性弱　ローム粒多く含む
2 10YR3/3　黒褐色　しまる　粘性弱　ロームブロック多く、炭化材片含む

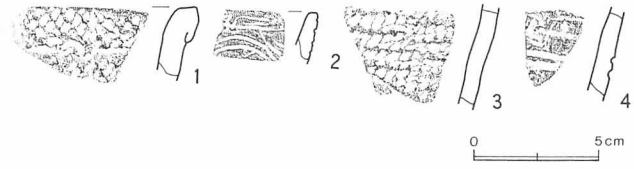


IP-54　SP-97

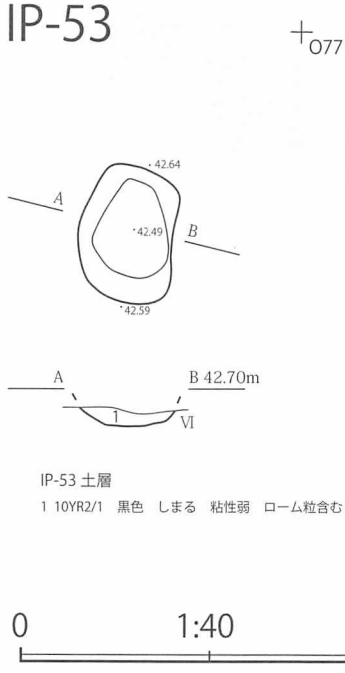


IP-54 土層

1 10YR1.7/1　黒色　しまる　粘性弱　ローム粒含む
2 10YR2/1　黒色　しまる　粘性弱　ローム粒多く、炭化材片含む
3 10YR2/2　黒褐色　しまる　粘性弱　ロームブロック・ローム粒・炭化材片多く含む



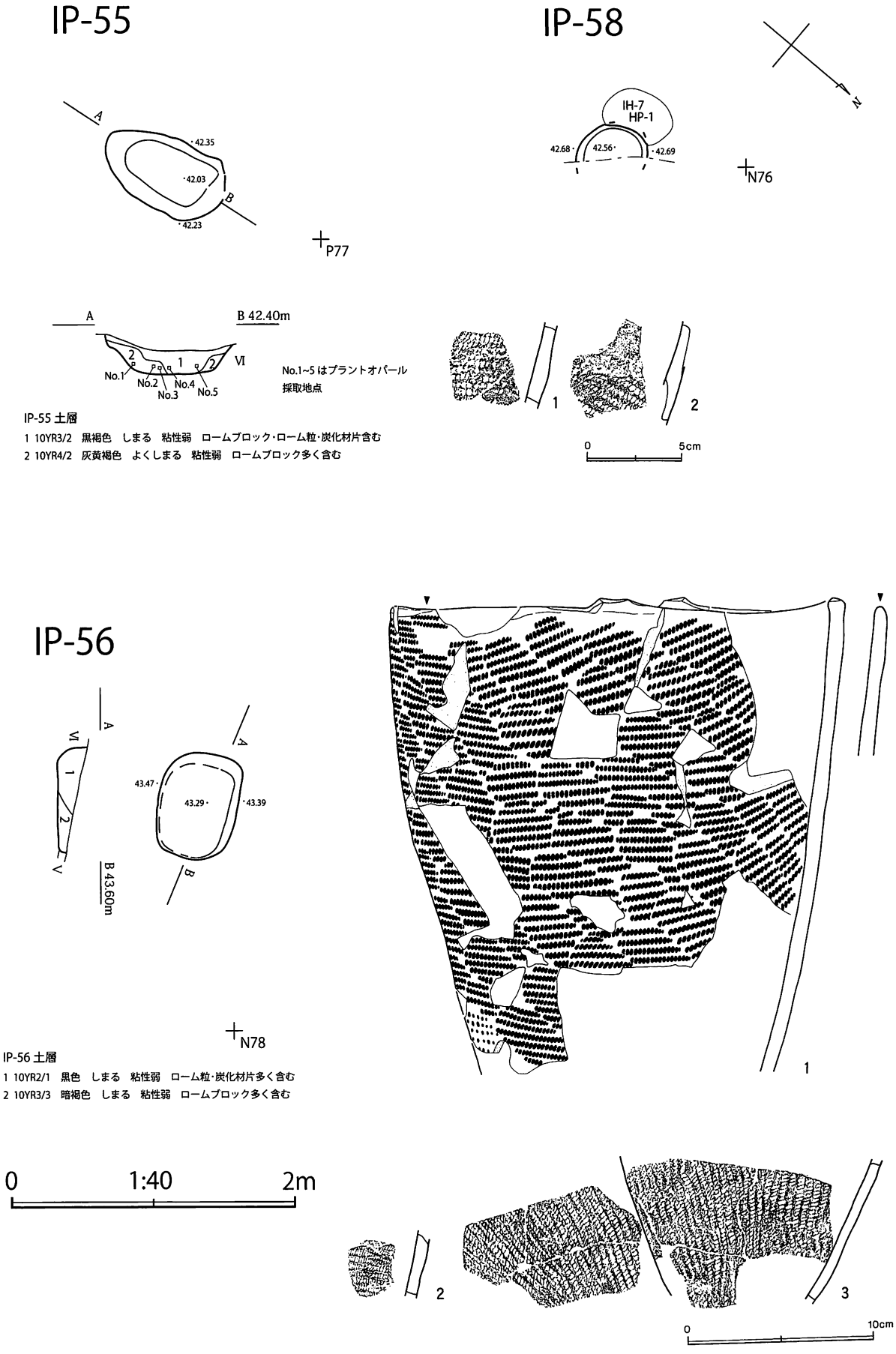
IP-53



IP-53 土層

1 10YR2/1　黒色　しまる　粘性弱　ローム粒含む

図Ⅳ－27　IP－51・52・53・54・63、SP－84・97と出土の遺物



図Ⅳ－28 IP－55・56・58と出土の遺物

時　期　遺構の出土遺物から縄文時代後期前葉と考えられる。（福井）

遺　物　**土器**：いずれもⅣ群a類である。1は焼成がよく、内外面が磨かれている。ややくびれる形状、胎土から大津式の口縁部の可能性がある。2～5はいずれも縄文のもの。（遠藤）

IP－53（図Ⅳ－27、表1、図版21）

位　置　O76　　**立　地**　標高42.6m付近の緩斜面

平面形　不整楕円形　　**規　模**　0.73/0.52×0.51/0.49×0.10m

特　徴　Ⅵ層上面で黒色土の落ち込みとして確認した。覆土はⅣ層主体の埋め戻しである。坑底は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。

時　期　周囲の出土遺物から縄文時代中期前半～後期前葉の時期と考えられる。（福井）

IP－54（図Ⅳ－27、表1・4、図版21・41）

位　置　O76・77　　**立　地**　標高42.6m付近の緩斜面

平面形　不整楕円形　　**規　模**　0.62/0.50×0.55/0.44×0.09m

特　徴　Ⅵ層上面で黒色土の落ち込みとして確認した。覆土はⅣ層主体の埋め戻しである。坑底はⅢ状で、壁は緩やかに立ち上がる。覆土から、縄文時代後期前葉の土器が2点出土した。SP－58・97を切っており、SP－80に切られている。

時　期　遺構の出土遺物から縄文時代後期前葉の時期と考えられる。（福井）

遺　物　**土器**：いずれもⅣ群a類土器。1は薄手の貼付帯のあるもので、RLR原体による斜行縄文が施文されている。胎土に白色の砂粒が目立つ。天祐寺式に相当する。2は小型の土器。口縁の狭い範囲には横長方形の文様が描かれ胴部には弧線文様がある。施文後になで調整されている。3は太いLR原体による横走縄文が、4は沈線文のもの。（遠藤）

IP－55（図Ⅳ－28、表1・4、図版21・41）

位　置　O76　　**立　地**　標高42.3m付近の緩斜面

平面形　不整楕円形　　**規　模**　0.91/0.61×0.51/0.33×0.29m

特　徴　Ⅵ層上面で黒褐色土の落ち込みとして確認した。覆土はⅣ・Ⅴ層主体の埋め戻しである。坑底は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。覆土から、縄文時代後期前葉の土器が1点出土した。

時　期　遺構の出土遺物から縄文時代後期前葉と考えられる。（福井）

遺　物　**土器**：1は横走縄文、2は斜行縄文が施されているⅣ群a類土器。（遠藤）

IP－56（図Ⅳ－28、表1・4、図版22・41）

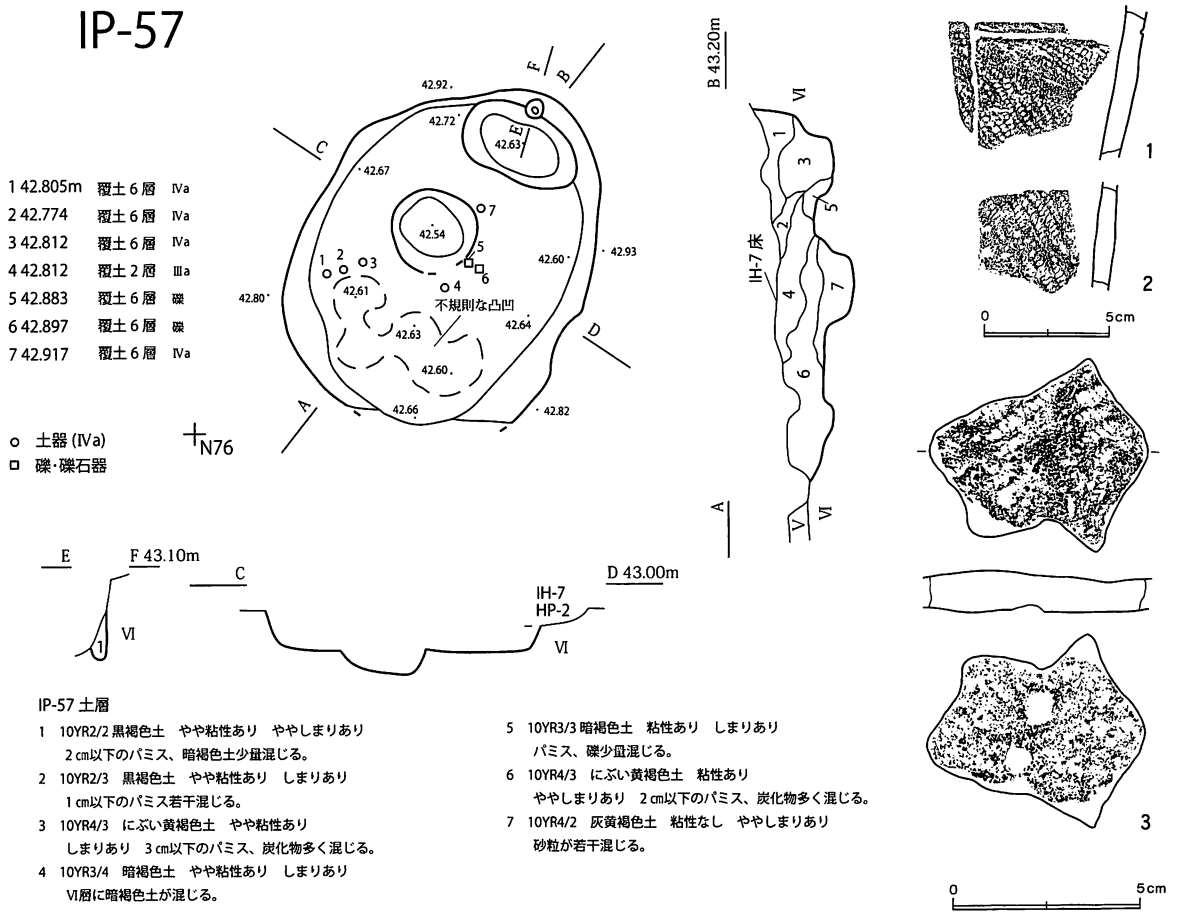
位　置　M77　　**立　地**　標高43.4m付近の緩斜面

平面形　隅丸方形　　**規　模**　0.75/（0.65）×0.57/（0.48）×0.20m

特　徴　Ⅵ層上面で黒色土の落ち込みとして確認した。覆土はⅣ・Ⅴ層主体の埋め戻しである。坑底は平坦で、壁はやや急に立ち上がる。覆土から、縄文時代後期前葉の土器が2点、Uフレイクが1点出土した。

時　期　遺構の出土遺物から縄文時代後期前葉と考えられる。覆土採取炭化材を年代測定したところ、3755±25yrB.P.（PLD－12081）の測定値が得られた。（福井）

遺　物　**土器**：1は覆土と周辺の包含層から出土した破片が接合したもの。底部は欠損するが全体の2



IP-57 土層

1 10YR2/2 黒褐色土 やや粘性あり ややしまりあり
2 cm以下のパミス、暗褐色土少量混じる。

2 10YR2/3 黒褐色土 やや粘性あり しまりあり
1 cm以下のパミス若干混じる。

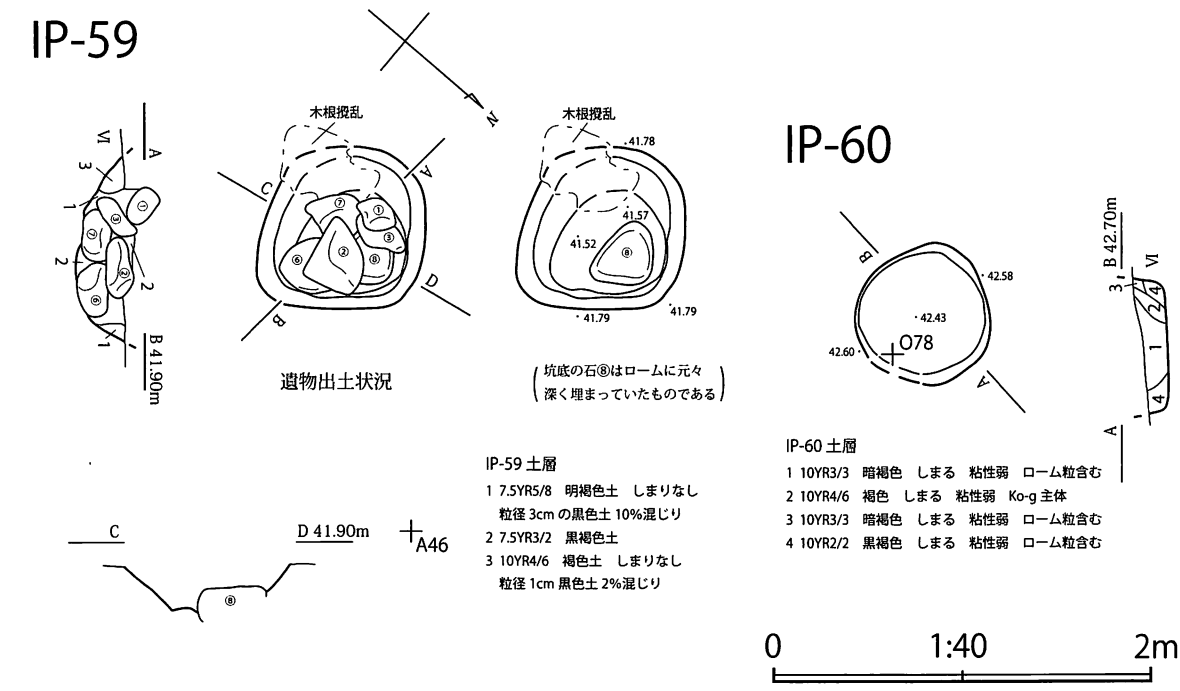
3 10YR4/3 にぶい黄褐色土 やや粘性あり
しまりあり 3 cm以下のパミス、炭化物多く混じる。

4 10YR3/4 暗褐色土 やや粘性あり しまりあり
VI層に暗褐色土が混じる。

5 10YR3/3 暗褐色土 粘性あり しまりあり
パミス、礫少量混じる。

6 10YR4/3 にぶい黄褐色土 粘性あり
ややしまりあり 2 cm以下のパミス、炭化物多く混じる。

7 10YR4/2 灰黄褐色土 粘性なし ややしまりあり
砂粒が若干混じる。



IP-59 土層

1 7.5YR5/8 明褐色土 しまりなし
粒径 3cm の黒色土 10%混じり

2 7.5YR3/2 黒褐色土

3 10YR4/6 褐色土 しまりなし
粒径 1cm 黒色土 2%混じり

IP-60 土層

1 10YR3/3 暗褐色 しまる 粘性弱 ローム粒含む

2 10YR4/6 褐色 しまる 粘性弱 Ko-g 主体

3 10YR3/3 暗褐色 しまる 粘性弱 ローム粒含む

4 10YR2/2 黒褐色 しまる 粘性弱 ローム粒含む

図Ⅳ－29 IP－57・59・60と出土の遺物

の１ほどが残存する。口唇は角形に調整され、口縁の５、６か所に小さい台形状の突起がある。現存するのは３か所であるが、この部分を肥厚させ頂部に指頭を押し付けることにより、くぼみを形成している。器面には太いLR原体により、口縁部付近では斜行、胴部から底部付近では横走する縄文が施されている。２は横走縄文が施されている。３は口縁部と底部を欠く。薄手の焼成の良い土器で、RL原体による縦行縄文が施されている。いずれもⅣ群a類土器。１は大津式の古段階に相当しよう。

（遠藤）

IP－57（図Ⅳ－29、表１・４、図版22・41）

位　置　M76　　**立　地**　標高42.9ｍ前後の緩斜面

平面形　円形　　**規　模**　1.94/1.54×1.74/1.26×0.38ｍ

特　徴　Ⅳ層を掘り下げていたところ、Ⅴ層上面において不明瞭な黒色土の落ち込みと、その内側に方形に配される５点の礫が検出された。落ち込みはNラインにおいて設定したメインセクションに延びており、壁面を精査したところ同様な落ち込みを確認した。このためこの落ち込みを住居と想定し、石囲い炉の長軸東西方向に合わせトレンチを設定してⅥ層まで掘り下げた。その結果、重複する遺構を確認し、本遺構埋没後のくぼみに石囲い炉を伴う住居（IH－７）が構築されているものと判断した。IH－７の調査終了後、覆土を掘り下げ、凹凸の多い坑底と急な壁を検出した。規模の上から土坑としたが、時期や形状などを考慮すると、先端に土坑をもつ小型の住居である可能性もある。

時　期　重複の関係から、縄文時代中期前半のものである可能性がある。（立田）

遺　物　**土器**：１はRL原体による斜行縄文に沈線による文様がある。Ⅲ群a類、サイベ沢Ⅶ式相当のもの。２はⅣ群a類土器。３はⅣ群a類土器の破片を利用した円盤状土製品の未成品である。（遠藤）

IP－58（図Ⅳ－28、表１、図版22）

位　置　M75　　**立　地**　標高42.7ｍ付近の緩斜面

平面形　楕円形　　**規　模**　0.50/（0.24）×0.40/（0.20）×0.12ｍ

特　徴　Nラインに設定したメインセクションを精査したところ、黒褐色土の落ち込みを確認した。M75区においてⅤ層上面を精査した結果、IH－７の付属遺構であるHP－１と重複し、それより古い遺構であることがわかった。HP－１の調査終了後、黒褐色土を掘り下げて完掘し、椀状の土坑であることを確認した。

時　期　周囲の遺物出土状況、切り合い関係から、縄文時代中期前半のものである可能性が高い。（立田）

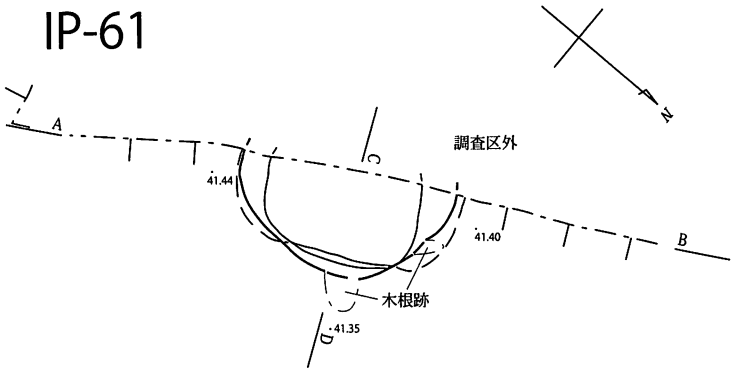
IP－59（図Ⅳ－29、表１、図版22・23）

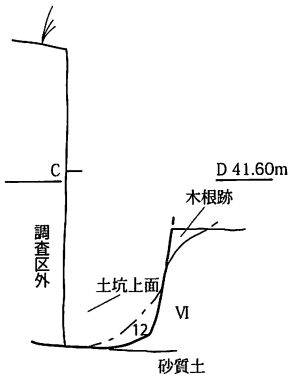
位　置　OZ45・46　　**立　地**　標高41.5～42ｍ付近の緩斜面

平面形　不整な楕円形　　**規　模**　1.00/0.64×0.88/0.54×（0.32）ｍ

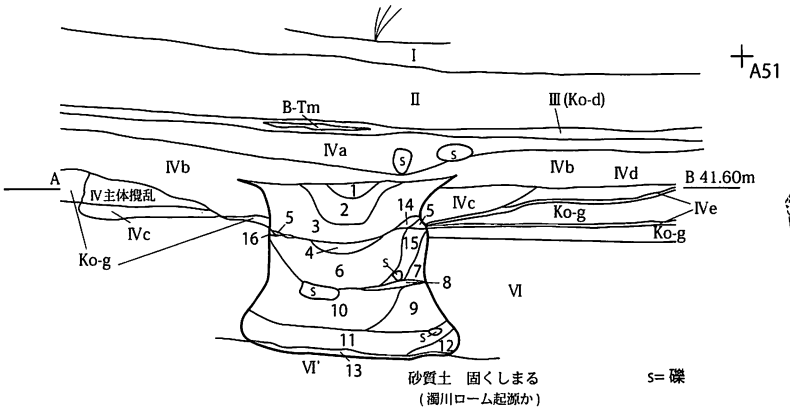
特　徴　Ⅵ層上面において、礫のまとまりを検出した。通常通りに礫を残して包含層を面的に掘り下げたところ、黒褐色土中に複数個の礫がまとまって入り込んでいた。この黒褐色土の落ち込みには、木根跡らしき攪乱がからんでいたが、明瞭な掘り込みを確認した。覆土２層から、５個の礫を検出した。いずれも人頭大よりやや小振りである。坑底から、これらとほぼ同じ大きさの礫を検出したが、埋没しており埋没部分がより大きいらしく引き抜けなかった。遺物番号１・３・６は安山岩、２と７は輝石安山岩であった。７には被熱が確認された。遺物番号４・５については８の上に乗っかるように位置していた、直径３㎝前後の小礫である。４安山岩、５は軽石であった。

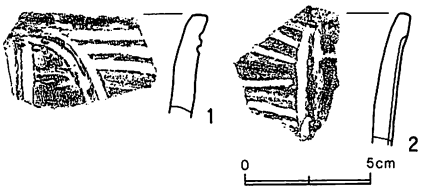
IP-61





砂質土　固くしまる　緑灰色 10GY6/1
Ko-d 灰色土　10YR7/1　B-Tm 橙色土 5YR6/6
Ⅲ層　暗褐色土　10YR7/1
Ⅳa 層　黒色土　10YR1.7/1
Ⅳb 層　黒褐色土　10YR3/1
Ⅳc 層　灰褐色土　5YR6/2　グライ化した濁川起源の土
Ⅳb 層　灰褐色土　5YR5/2　Ⅳb<Ⅳc
Ⅳe 層　黒色土　10YR1.7/1
Ⅵ層　濁川起源のローム層
Ⅵ' 層 緑灰色土　10GY6/1　濁川起源のローム層が
　グライ化したものか　堅くしまる



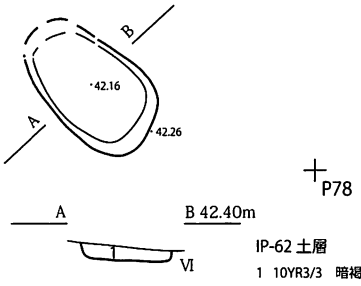


IP-61 土層

1 7.5YR3/1　黒褐色土　ややしまる
2 10YR1.7/1　黒色土　ややしまる　粒径 1m の黒色土Ⅳc15%混じる
3 7.5YR3/1　黒褐色土　堅くしまる
4 10YR5/4　にぶい黄褐色土
5 10YR3/1　黒褐色土　Ⅳc 層と Ko-g が粒径 1～2cm の斑状に 5%混じる
6 10YR3/2　黒褐色土　粒径 0.5～1cm の軽石 1%混じる
　覆土 1 層としてとりあげた土器は主にここ 6 層からとりあげたものである
7 10YR6/2　灰黄褐色土　堅くしまる　グライ化した濁川起源の土か
8 10YR4/2　灰黄褐色土　6 層＋7 層　粒径 1～3cm の軽石 5%混じる
9 10YR1.7/1　黒色土　Ⅳc 層と 10 層が 1：1 の割合で混じる
　粒径 1～2cm の軽石が 5%混じる
10 10YR1.7/1　黒色土　粒径 1cm 以下の軽石が 1%混じる
　覆土 1 層下位としてとりあげた礫は主にここ 10 層の上面からとりあげたものである。
11 7 層と 9 層がラミナ状に 1：1 の割合で混じる
12 10YR6/2　灰黄褐色土　堅くしまる　グライ化した濁川起源の土か
13 10YR1.7/1　黒色土　しまりなし
14 10YR1.7/1　黒色土　粒径 1～3cm の斑状をした Ko-g が 5%混じる
15 10YR1.7/1　黒色土　粒径 1～3cm の斑状をした Ko-g が 5%混じる
　Ko-g は比較的 15 層の下位に密集する
　（14 層と 15 層はほぼ同じだが 5 層によって分断される）
16 10YR1.7/1　黒色土　粒径 1cm の軽石が Ko-g が 5%混じる

3 層と 12 層は堅くしまる

IP-62



IP-62 土層

1 10YR3/3　暗褐色　しまる　粘性弱　ロームブロック・ローム粒含む

0　1:40　2m

図Ⅳ－30　IP－61・62と出土の遺物

覆土１・３はⅥ層主体の土にⅣ層が微量混じる。しまりもなく、壁面の崩落と考える。覆土２層はⅣ層主体の土であり、しまりも明瞭ではなく、埋め戻しとは考えにくい。Ⅵ層に含まれている礫（一部は何かに使用）したものを穴にまとめて廃棄し、それが自然に埋まったものの可能性がある。坑底には凹凸があり、壁面は擂り鉢状に立ち上がる。掘り込み面は検出面より上である。

時　期　不明である。遺構周辺から縄文時代中期前半・後期前葉・後期中葉・続縄文時代の土器が出土している。出土量は後期前葉Ⅳ群a類土器が多く、遺跡内での遺物分布状況（OZ～B・40～51に後期前葉の遺構や遺物がまとまって観察できる）を考え合わせると、縄文時代後期前葉である可能性もある。（大泰司）

IP－60（図Ⅳ－29、表１）

位　置　N・O77・78　　**立　地**　標高42.6m付近の緩斜面

平面形　円形　　**規　模**　0.71/0.63×0.74/0.63×0.17m

特　徴　Ⅵ層上面で暗褐色土の落ち込みとして確認した。覆土はⅣ・Ⅴ層主体の埋め戻しである。坑底は平坦で、壁はやや急に立ち上がる。

時　期　周囲の出土遺物から縄文時代中期前半～後期前葉の時期と考えられる。（福井）

IP－61（図Ⅳ－30、表１・４、図版23・41）

位　置　OZ50　　**立　地**　標高41～41.5m付近の緩斜面

平面形　不整円形　　**規　模**　1.14/1.22×（0.58）/（0.46）×0.94m

特　徴　調査範囲の境界付近のⅥ層を調査中、不整な形状をした黒褐色土の落ち込みを検出した。平面形が不鮮明であったため、Ⅳ層主体の土が木根跡に入り込んだものと想定して、遺物回収のため掘り抜く事とした。出土遺物はこの作業時に出土したもので、Ⅳ層出土とあるのはⅣ層起源の覆土出土ということである。土器については主に覆土６層下位からの出土であり、礫については覆土10層上位からの出土である。この土層については掘っている際は連続性が高いものとして捉えていたが、土層断面で色調を観察した際に分層した。また、部分的にⅥ層起源の８層が薄く入り込んでおり、覆土６層と覆土10層とが明瞭に分断される。現象としては10層上面に遺物が流れ込み、上から８層、６層が流入したものと考える。１点出土している頁岩についてもこの６層ないし10層からの出土である。

Ⅳ層起源の黒色土を掘りさげていくと明瞭な坑底面に対応する部分を検出した。そしてそこから壁面が立ち上がっていくさまをおえた。そこで、土坑と判断した。底面はおおよそ平坦であるが中央が微妙に凹んでいる。Ⅵ層がグライ化した堅くしまる砂質土層（便宜上Ⅵ´層とした）で掘りやめたものと判断する。土坑の検出面で２か所木根で破壊されている。

遺構の南西半分は調査範囲の外側であり調査できなかった。調査範囲境界の壁面で土層断面を記録した。土層断面に現れた断面形態は明瞭にオーバーハングするフラスコ状土坑のそれであった。ただし北東壁についてはまっすぐに立ち上がる。掘り込み面は検出面より上であるが、土層断面より、基本層序のⅣ層中位から下位にかけて（a～eはこの壁に対してのみの分層であり、汎用できるものではない）掘り込まれたものである。

土坑掘り込み前の自然堆積を見ると、グライ化した土層の入り込み、ラミナを思わせる薄い土層の存在が確認されることから、水の営力によって一回埋没した場所（それが広範囲か自然攪乱を埋めたのみかはわからないが）にフラスコ状土坑を掘り込んだものと判断する。

覆土１・２層は土坑壁面を破壊しているⅣ層主体の木根跡に連続する可能性がある。覆土３層は土

坑が最終的に埋没する際に流入した黒色土と考えられる。堅くしまっている原因は不明であるが、木根の圧力によるものか。4層は水に関連する堆積なのか、Ⅵ層が薄く堆積している。そして、これに前後して覆土5層、14層、16層が流入している。5・14・16層については壁面が水の作用で崩れたものと考える。9・10層もⅣ層主体の流入である。11層については現地観察では7層と9層がラミナ状に交互に入るとしたが、これは濁川起源の土から構成されるⅣc層とⅤ層主体の土が水の作用で堆積したものであろう。12層は堅くしまっており、グライ化した濁川起源の砂からなる。坑底面の土に似るが、13層を間にはさむ場所もあるため明確な起源は言及できないが、掘り上げた土の逆流等も考慮する必要がある。13層は最初に流入した黒色土と考える。

IH－9の項目でも述べたが、Ⅳc層とⅣe層の堆積以前、IH－9が構築された段階に一度周辺が削平された可能性がある。人為的な整地か、強い水の作用による自然の作為かは不明である。

遺物としては頁岩フレイクが1点、角閃石安山岩と安山岩の礫が1点ずつ出土した事となっているが、実際はもっと多くの礫が固まっていた。先述の黒褐色土部分からは、縄文時代後期前葉の土器片が12点出土している。このうち1点については、同じ調査区内のIH－9覆土4層中・床面下の土層のものと接合した。流入の可能性が高い土層からの出土遺物と、埋土からの出土遺物が接合したため、その意義付けは判然としたものではない。土器は涌元式と判断する（図Ⅳ－15－1）。残りの11点については、斜行縄文地・無紋地・無紋地に沈線のものなどがあり、沈線のものはトリサキ式か大津式の古手である。またA47区の1破片と接合したものも含まれる。

時　期　遺構内および周辺の出土遺物との対比によって、縄文時代後期前葉、Ⅳ群a類土器の時期の可能性が高いと考える。（大泰司）

遺　物　土器：1、2は同一個体の破片。無文地に半截竹管状施文具による沈線による弧状の文様あるいは縦・横の沈線での文様が構成される。Ⅳ群a類、大津式の古段階であろう。（遠藤）

IP－62（図Ⅳ－30、表1）

位　置　O78　　**立　地**　標高42.2m付近の緩斜面

平面形　楕円形　　**規　模**　(0.82)/(0.65)×0.47/0.41×0.08m

特　徴　Ⅵ層上面で暗褐色土の落ち込みとして確認した。覆土はⅣ層主体である。坑底は平坦で、壁はやや急に立ち上がる。

時　期　周囲の出土遺物から後期前葉の時期と考えられる。（福井）

IP－63（図Ⅳ－27、表1）

位　置　N77　　**立　地**　標高42.8m付近の緩斜面

平面形　楕円形　　**規　模**　(0.46)/0.36×0.36/(0.32)×0.15m

特　徴　Ⅵ層上面で黒褐色土の落ち込みとして確認した。覆土はⅣ層主体の埋め戻しである。坑底は丸く、壁は緩やかに立ち上がる。IP－40・52に切られている。

時　期　周囲の出土遺物から縄文時代中期前半～後期前葉の時期と考えられる。（福井）

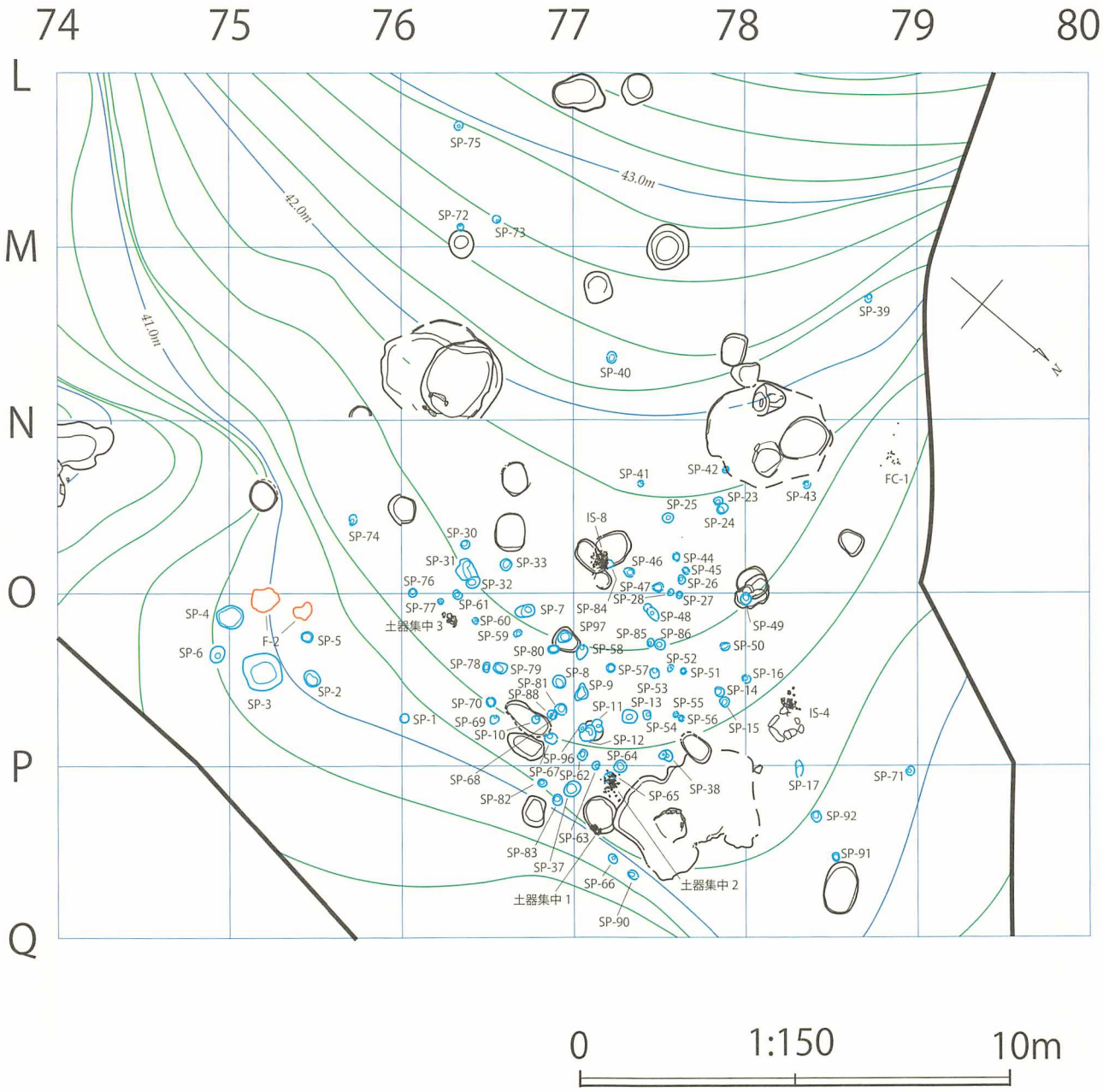
3　小ピット（図Ⅳ－31～39、表１・４・５、図版24・41・42）

小ピットは、調査区北西側の遺構集中区、N～P・76～78区の６グリッドに集中する。特にO76・77区にまとまって分布する。この地点は、住居跡に囲まれた地点であり、後期前葉に構築されたとみられる土坑も集中する。

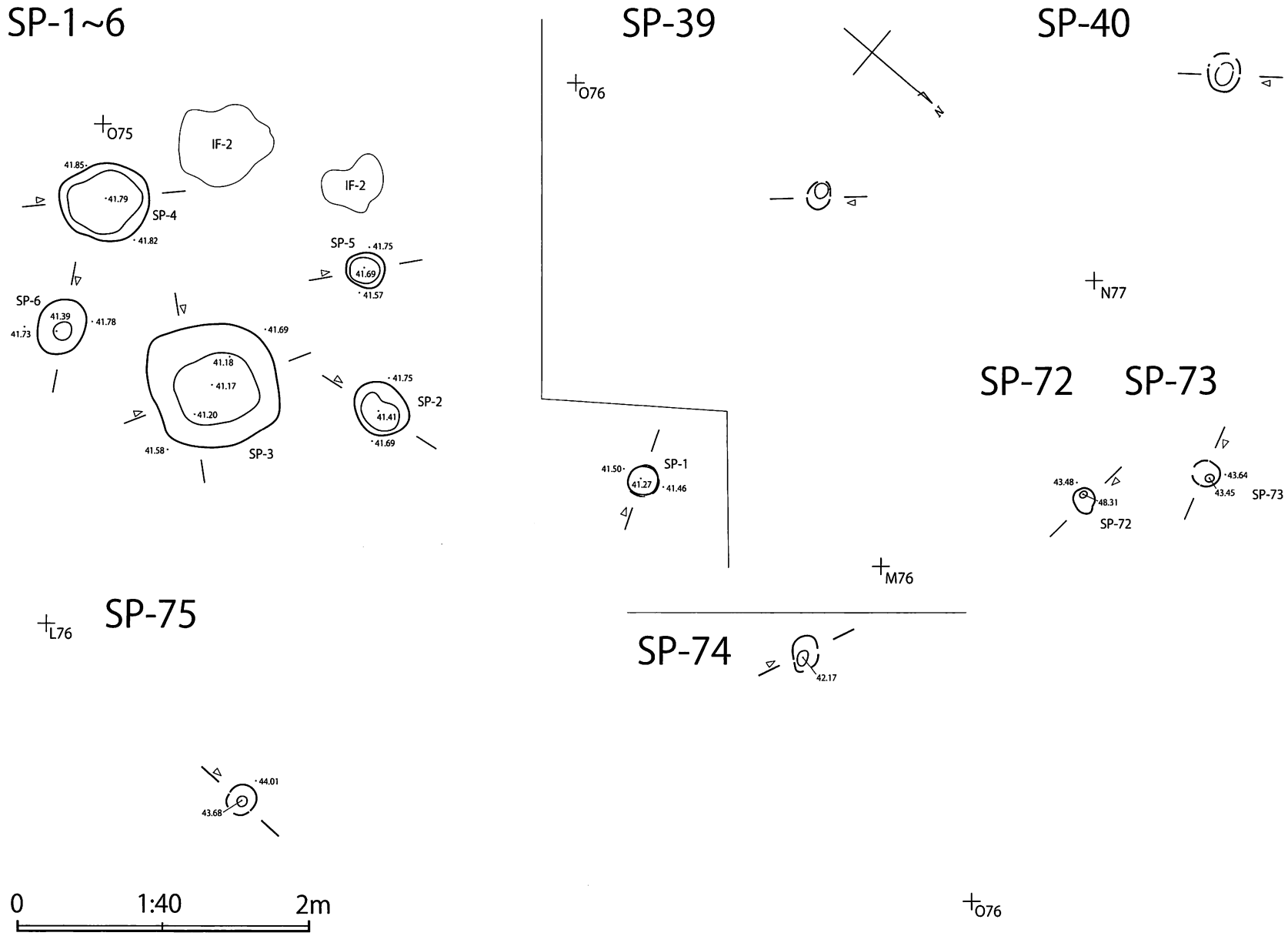
小ピットの時期は、覆土から出土した土器がⅣ群a類に限られることから、ほとんどが縄文時代後期前葉と考えられる。検出面からの深さは、９～71㎝の幅があるが、15～40㎝台にピークがある。
配列等検討したが、この地点の東側が、町道により削平されており、組み合わせはほとんど確認できなかった。それでも、SP－18・35・36・95、19・20・22については、それぞれ規模が類似しており、組み合わさった可能性が考えられる。

なお、覆土の記載のないものは、木根と判断して掘り上げた後、小ピットの可能性が残ったものである。

（福井）

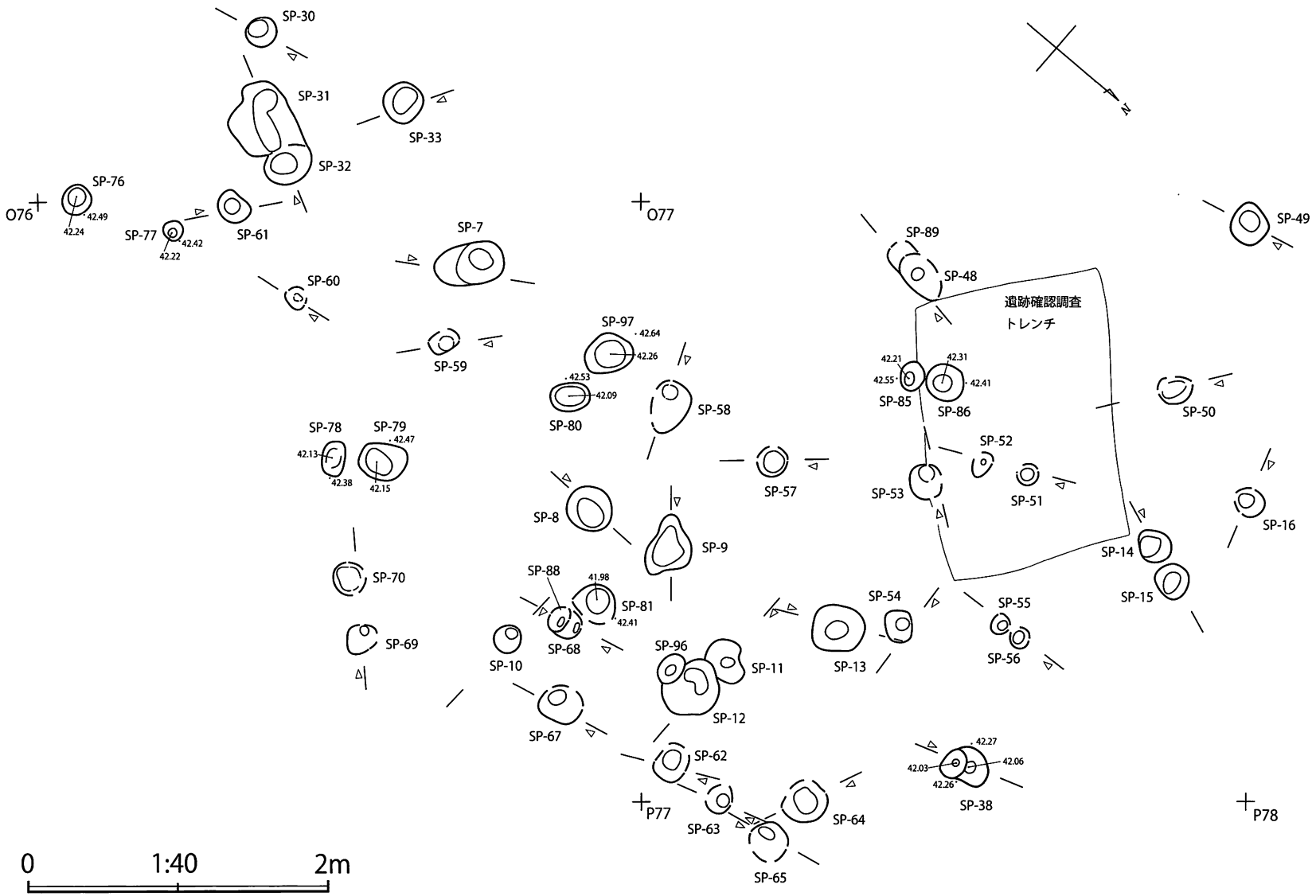


図Ⅳ－31　小ピット（SP）の分布



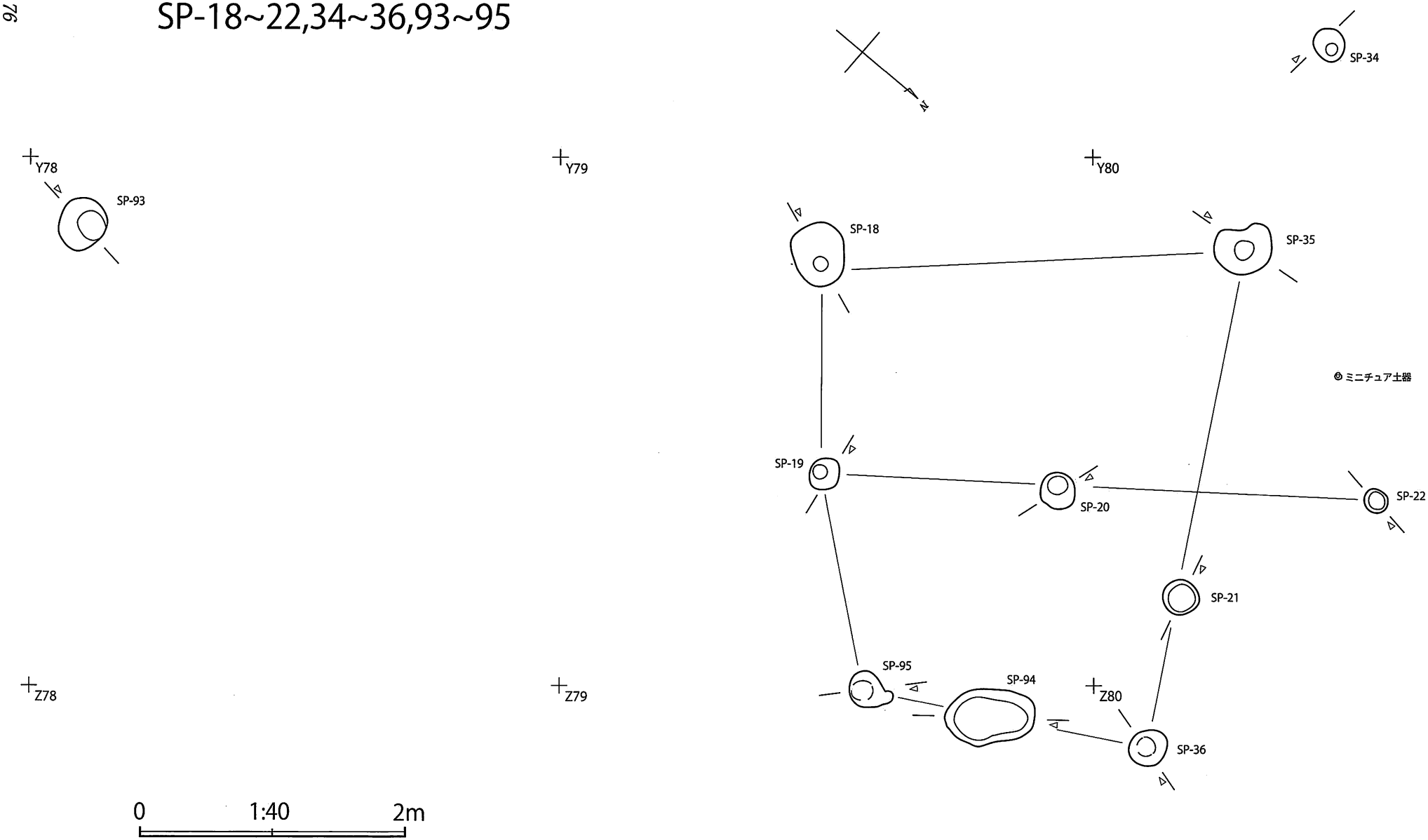
図Ⅳ－32　SP－1～6・39・40・72～75

SP-7~17,30~33,38,48~65,67~70,76~81,85,8688,89,96,97

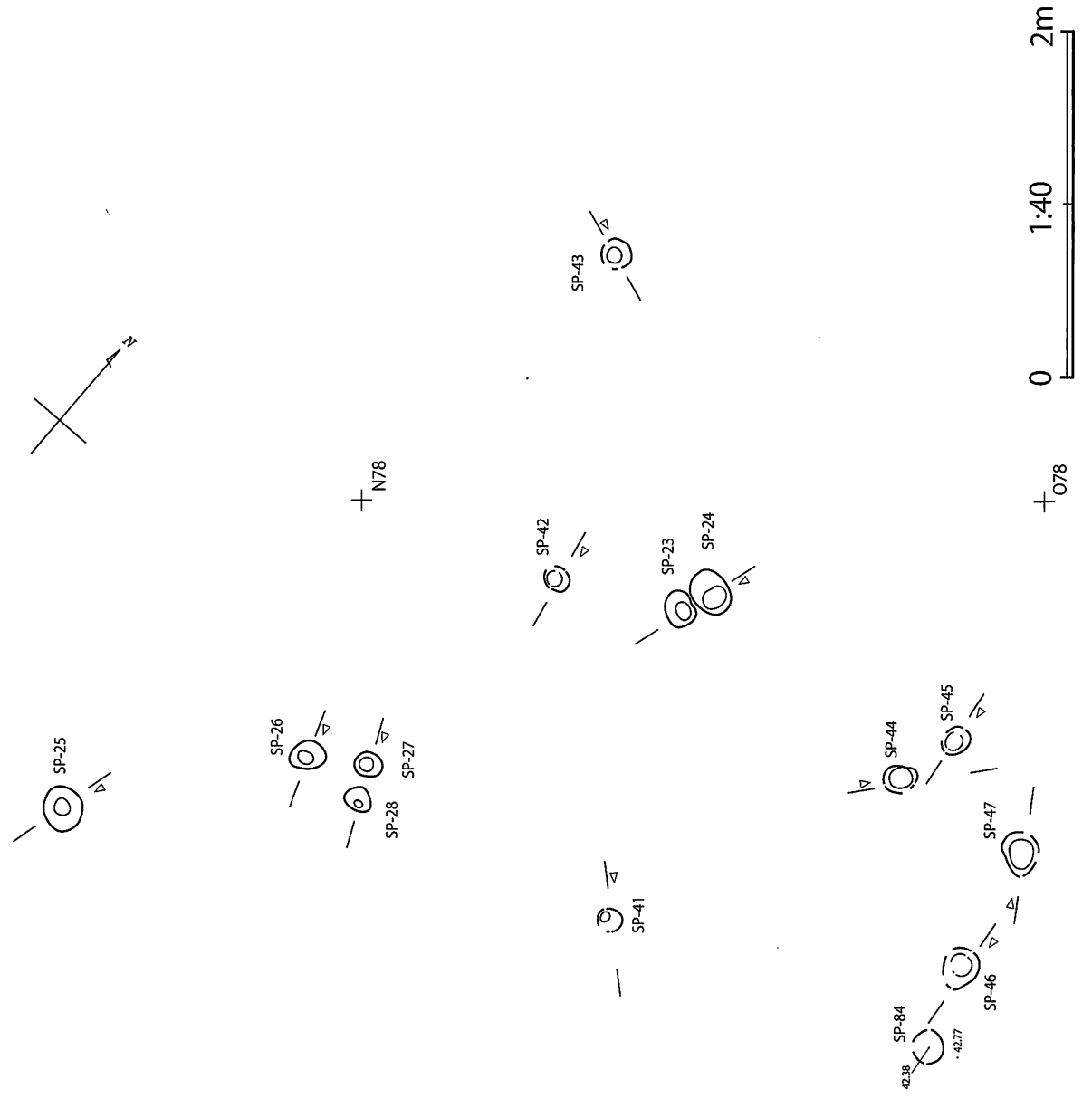


図Ⅳ－33　SP－ 7 ～17・30～33・38・48～65・67～70・76・77・88

SP-18~22,34~36,93~95

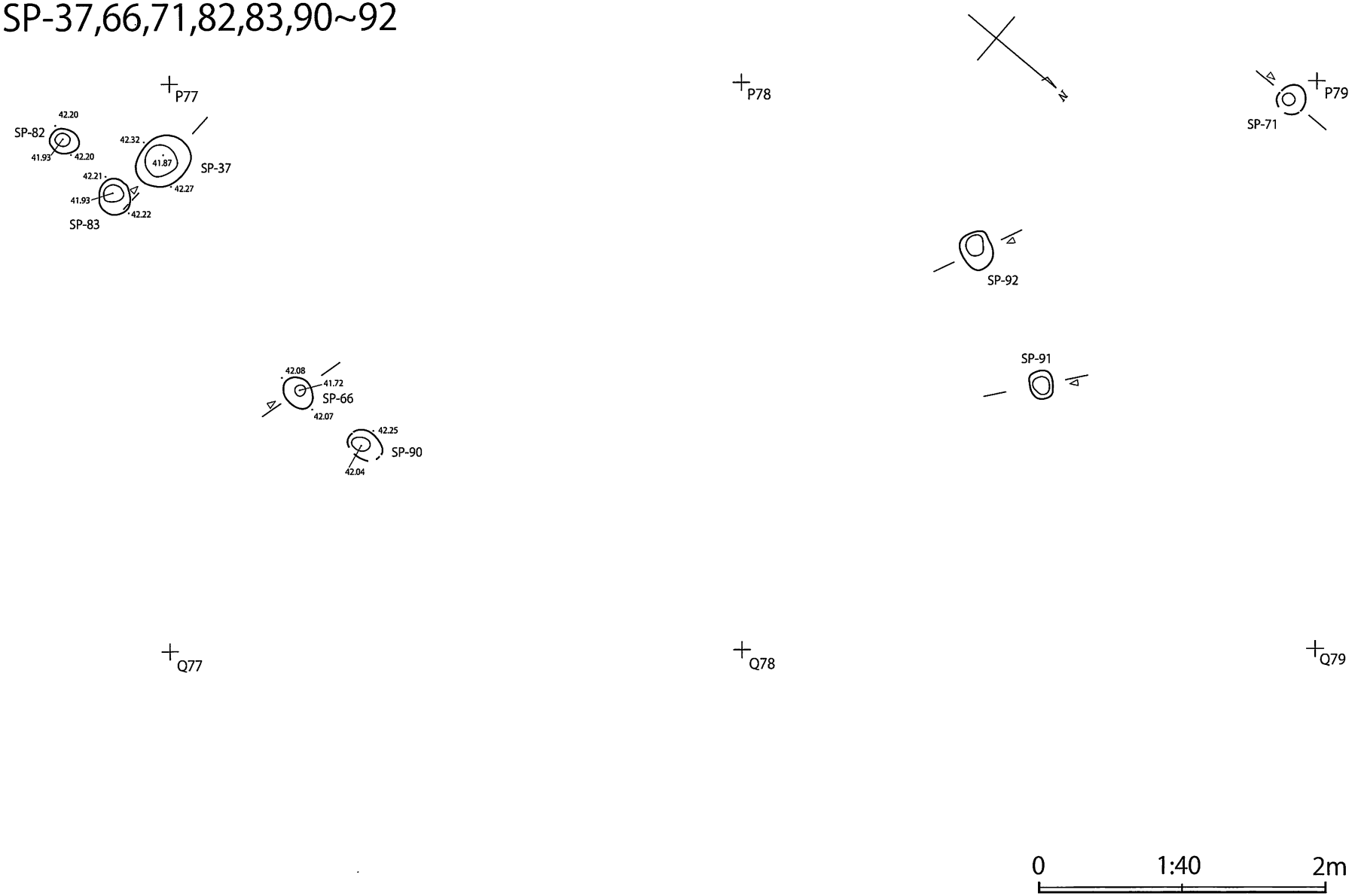


図Ⅳ－34　SP－18～22・34～36・93～95

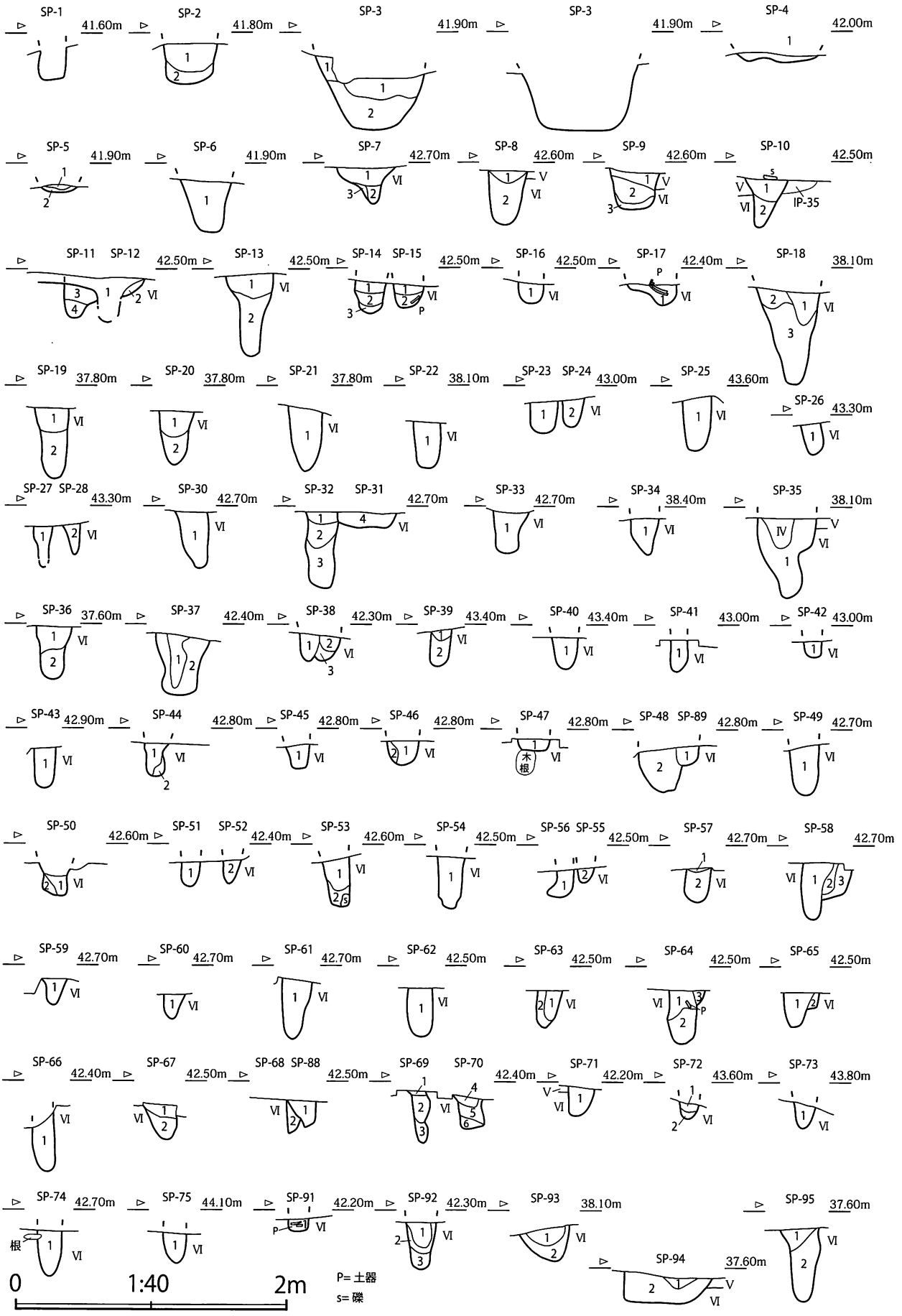


図Ⅳ－35　SP－23～28・41～47・84

SP-37,66,71,82,83,90~92



図Ⅳ—36　SP—37・66・71・82・83・90～92



図Ⅳ－37　SPの土層断面
(SP－ 7 ～13・18～28・34～37・41・42・44～47・57～59・62～71・88・91～95)

SP2 土層
1 10YR4/2 灰黄褐色 粘性あり ややしまりあり パミス少量、炭化物若干混じる。V層相当
2 10YR4/4 褐色 粘性あり ややしまりあり パミス、暗褐色土が少量混じる。

SP3 土層
1 10YR5/3 にぶい黄褐色 粘性あり ややしまりあり パミス、暗褐色土、炭化物ごく少量混じる。
2 10YR5/4 にぶい黄褐色 粘性あり ややしまりあり パミス、暗褐色土、炭化物ごく少量混じる。

SP4 土層
1 10YR1.7/1 黒色 粘性あり しまりあり パミス少量混じる。層界漸変

SP5 土層
1 10YR3/3 にぶい黄褐色 粘性あり ややしまりあり 骨片、炭化物、黒色土若干混じる。
2 10YR3/1 黒褐色 粘性あり ややしまりあり 炭化物多く混じる。

SP6 土層
1 10YR4/3 にぶい黄褐色 粘性あり しまりあり パミス、岩片、焼土ブロック、炭化物を若干混じる。

SP7 土層
1 10YR2/2 黒褐色 しまる 粘性弱 ローム粒含む
2 10YR2/2 黒褐色 しまり弱 粘性弱
3 10YR2/2 黒褐色 しまる 粘性弱 ロームブロック多く含む

SP8 土層
1 10YR2/2 黒褐色 しまり弱 粘性弱 上部にロームブロック多く含む
2 10YR1.7/1 黒色 しまり弱 粘性弱 ロームブロック・ローム粒含む

SP9 土層
1 10YR2/2 黒褐色 しまる 粘性弱 ローム粒含む
2 10YR2/2 黒褐色 しまる 粘性弱 ローム粒・炭化材含む
3 10YR2/2 黒褐色 しまる 粘性弱 ロームブロック含む

SP10 土層
1 10YR3/2 黒褐色 しまる 粘性弱 ロームブロック含む
2 10YR3/2 黒褐色 しまる 粘性弱 ロームブロック・炭化材含む

SP11・12 土層
1 10YR2/2 黒褐色 しまる 粘性弱
2 10YR3/2 黒褐色 しまる 粘性弱 ロームブロック多く含む
3 10YR5/3 にぶい黄褐色 しまる 粘性弱 クロボクブロック多く含む
4 10YR1.7/1 黒色 しまる 粘性弱 ロームブロック多く含む

SP13 土層
1 10YR2/2 黒褐色 しまり弱 粘性弱 上部にロームブロック多く含む
2 10YR2/1 黒色 しまる 粘性弱 ロームブロック含む

SP14・15 土層
1 10YR3/2 黒褐色 しまる 粘性弱 ロームブロック多く含む
2 10YR2/3 黒褐色 しまる 粘性弱 ロームブロック僅かに含む
3 10YR3/2 黒褐色 しまる 粘性弱 クロボクブロック多く含む

SP16 土層
1 10YR3/3 暗褐色 しまる 粘性弱 ロームブロック多く含む

SP17 土層
1 10YR2/2 黒褐色 しまり弱 粘性弱 炭化材多く、ロームブロック僅かに含む

SP18 土層
1 10YR1.7/1 黒色 しまり弱 粘性弱 ローム粒含む
2 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色 しまる 粘性弱 ロームブロック・ローム粒含む
3 10YR2/2 黒褐色 しまり弱 粘性弱 ロームブロック含む

SP19 土層
1 2.5Y3/1 黒褐色 しまる 粘性弱 ローム粒多く含む
2 10YR2/1 黒褐色 しまり弱 粘性弱 ロームブロック含む

SP20 土層
1 10YR2/1 黒色 しまる 粘性弱 ローム粒含む
2 10YR2/1 黒褐色 しまり弱 粘性弱 ロームブロック含む

SP21 土層
1 2.5Y2/1 黒色 しまる 粘性弱 ローム粒多く含む

SP22 土層
1 2.5Y3/2 黒褐色 しまり弱 粘性弱 ローム粒多く含む

SP23・24 土層
1 10YR3/3 暗オリーブ褐色 しまる 粘性弱 ローム粒多く含む
2 10YR2/2 黒褐色 しまる 粘性弱 ロームブロック、ローム粒僅かに含む

SP25 土層
1 10YR1.7/1 黒色 しまる 粘性弱 ロームブロック含む

SP26 土層
1 10YR2/2 黒褐色 しまる 粘性弱 ロームブロック含む

SP27・28 土層
1 10YR2/3 黒褐色 しまる 粘性弱 ローム粒含む
2 10YR2/3 黒褐色 しまり弱 粘性弱 ローム粒含む

SP30 土層
1 10YR3/3 暗褐色 しまる 粘性弱 ローム粒多く含む

SP31・32 土層
1 10YR3/2 黒褐色 しまる 粘性弱 ロームブロック多く含む
2 10YR2/1 黒色 しまり弱 粘性弱 ローム粒含む
3 10YR3/1 黒褐色 しまり弱 粘性弱 ロームブロック含む
4 10YR3/1 黒褐色 しまる 粘性弱 ローム粒含む

SP33 土層
1 10YR2/1 黒色 しまる 粘性弱 ローム粒含む

SP34 土層
1 10YR2/2 黒褐色 しまる 粘性弱 ローム粒含む

SP35 土層
1 10YR3/3 暗褐色 しまる 粘性弱 ローム粒多く含む

SP36 土層
1 10YR2/2 黒褐色 しまる 粘性弱 ローム粒含む
2 10YR1.7/1 黒色 しまる 粘性弱 ローム粒含む

SP37 土層
1 10YR3/1 黒褐色 しまる 粘性弱 ローム粒含む
2 10YR3/2 黒褐色 しまる 粘性弱 ロームブロック多く、炭化材含む

SP38 土層
1 10YR3/4 暗褐色 しまる 粘性弱 ロームブロック多く含む
2 10YR2/2 黒褐色 しまる 粘性弱 ロームブロック含む
3 10YR3/3 暗褐色 しまる 粘性弱 ロームブロック多く含む

SP39 土層
1 10YR3/2 黒褐色 しまる 粘性弱 ローム粒含む
2 10YR2/1 黒色 しまり弱 粘性弱 ロームブロック・ローム粒含む

SP40 土層
1 10YR2/1 黒色 しまる 粘性弱 ロームブロック・ローム粒・炭化材含む 下部にロームブロック多い

SP41 土層
1 10YR2/2 黒褐色 しまる 粘性弱 ローム粒・炭化材含む

SP42 土層
1 10YR3/2 黒褐色 しまる 粘性弱 ロームブロック多く、炭化材含む

SP43 土層
1 10YR3/2 黒褐色 しまり弱 粘性弱 ローム粒多く、ロームブロック含む

SP44 土層
1 10YR2/1 黒色 しまる 粘性弱 ロームブロック多く含む
2 10YR2/2 黒褐色 しまりる 粘性弱 ロームブロック・ローム粒含む

小ピット（SP）の土層注記（1）

SP45 土層
1 10YR2/2　黒褐色　しまる　粘性弱　ローム粒含む

SP46 土層
1 10YR2/2　黒褐色　しまる　粘性弱　ロームブロック・ローム粒含む
2 10YR3/3　暗褐色　しまる　粘性弱　ローム粒含む

SP47 土層
1 10YR3/1　黒褐色　しまる　粘性弱　ローム粒含む

SP48・89 土層
1 10YR2/1　黒色　しまる　粘性弱　ローム粒含む
2 10YR2/2　黒褐色　しまる　粘性弱　ローム粒含む

SP49 土層
1 10YR2/1　黒色　しまる　粘性弱　ロームブロックやや多く、炭化材・ローム粒含む

SP50 土層
1 10YR2/1　黒色　しまる　粘性弱　ロームブロック多く含む
2 10YR4/3　にぶい黄褐色　しまる　粘性弱　ロームブロック含む

SP51・52 土層
1 10YR3/3　暗褐色　しまる　粘性弱　上部にロームブロック多く含む
2 10YR1.7/1　黒色　しまる　粘性弱　ロームブロック含む

SP53 土層
1 10YR2/1　黒色　しまる　粘性弱　ロームブロック多く、ローム粒含む
2 10YR3/1　黒褐色　しまる　粘性弱　ローム粒含む

SP54 土層
1 10YR3/3　暗褐色　しまる　粘性弱　ロームブロック含む

SP55・56 土層
1 10YR2/2　黒褐色　しまる　粘性弱　ロームブロック含む
2 10YR3/3　暗褐色　しまる　粘性弱　ロームブロック含む

SP57 土層
1 10YR1.7/1　黒色　Ⅳ層と同
2 10YR2/1　黒色　しまる　粘性弱　ロームブロックやや多く含む

SP58 土層
1 10YR3/2　暗褐色　しまる　粘性弱　ロームブロックやや多く、炭化材含む
2 10YR4/4　褐色　しまる　粘性弱　ほとんどロームブロック
3 10YR3/2　黒褐色　しまる　粘性弱　ロームブロック含む

SP59 土層
1 10YR3/1　黒褐色　しまる　粘性弱　ロームブロック・ローム粒含む

SP60 土層
1 10YR1.7/1　黒色　しまる　粘性弱　ロームブロック含む

SP61 土層
1 10YR2/1　黒色　しまる　粘性弱　ロームブロック・ローム粒含む

SP62 土層
1 10YR3/2　黒褐色　しまる　粘性弱　ロームブロック含む

SP63 土層
1 10YR2/2　黒褐色　しまる　粘性弱　ロームブロック含む
2 10YR3/2　黒褐色　しまる　粘性弱　ロームブロック多く含む

SP64 土層
1 10YR2/1　黒色　しまる　粘性弱　ロームブロック含む
2 10YR3/2　黒褐色　しまる　粘性弱　ロームブロック含む
3 10YR3/2　黒褐色　しまる　粘性弱　ロームブロック多く含む

SP65 土層
1 10YR3/3　暗褐色　しまる　粘性弱　ロームブロック含む
2 10YR3/1　黒褐色　しまる　粘性弱　ロームブロック多く含む

SP66 土層
1 10YR3/2　黒褐色　しまる　粘性弱　ローム粒・炭化材含む

SP67 土層
1 10YR2/1　黒色　しまる　粘性弱　ローム粒含む
2 10YR3/3　暗褐色　しまる　粘性弱　ロームブロック・ローム粒含む

SP68・88 土層
1 10YR2/1　黒色　しまる　粘性弱　ロームブロック・ローム粒含む
2 10YR2/2　黒褐色　しまる　粘性弱　ロームブロック多く含む

SP69・70 土層
1 10YR2/2　黒褐色　しまる　粘性弱　ローム粒含む
2 10YR3/3　暗褐色　しまる　粘性弱　ロームブロック多く含む
3 10YR4/4　褐色　しまる　粘性弱　ロームブロック多く含む
4 10YR2/2　黒褐色　しまる　粘性弱　ロームブロック含む
5 10YR4/2　灰黄褐色　しまる　粘性弱　ロームブロック多く含む
6 10YR3/1　黒褐色　しまる　粘性弱　ローム粒含む

SP71 土層
1 10YR2/1　黒色　しまる　粘性弱　下半にロームブロックやや多く含む

SP72 土層
1 10YR2/2　黒褐色　やや粘性あり　しまりあり　Ⅳ層相当
2 10YR4/3　にぶい黄褐色　やや粘性あり　しまりあり　Ⅴ層相当

SP73 土層
1 10YR1.7/1　黒色　やや粘性あり　しまりなし　Ⅲ～Ⅳ層相当

SP74 土層
1 10YR3/4　暗褐色　粘性なし　しまりなし　Ⅳ層にパミス混じる

SP75 土層
1 10YR1.7/1　黒色　粘性あり　ややしまりあり　黄褐色土粒をごく少量混じる

SP91 土層
1 10YR3/2　黒褐色　しまる　粘性弱　ロームブロック多く含む

SP92 土層
1 10YR2/2　黒褐色　しまる　粘性弱　ロームブロック・ローム粒含む
2 10YR3/1　黒褐色　しまる　粘性弱　ロームブロック多く含む
3 10YR3/1　黒褐色　しまる　粘性弱　ロームブロック・ローム粒含む

SP93 土層
1 10YR2/1　黒色　しまる　粘性弱　ローム粒含む　上部に直径 2～3 ㎜の小礫含む
2 10YR3/1　黒褐色　しまる　粘性弱　ロームブロック・ローム粒含む

SP94 土層
1 10YR1.7/1　黒色　しまる　粘性弱　Ⅳ層と同じ
2 10YR2/1　黒褐色　しまる　粘性弱　ローム粒含む

SP95 土層
1 10YR1.7/1　黒色　しまる　粘性弱　Ⅳ層と同じ
2 10YR2/2　黒褐色　しまる　粘性弱　ロームブロック含む

小ピット（SP）の土層注記（２）

遺　物　土器：いずれもⅣ群a類である。天祐寺式、涌元式に相当するものがある。

SP－３（３）：縄文のある胴部破片。

SP－７（４・５）：４は無文の口縁。５は太いLR原体による横走縄文のもの。

SP－８（６・７）：６はLR原体による斜行縄文、７は縄の太さの異なるもの撚り合わせている。

SP－９（８）：口縁部は無文で、扁平で幅の狭い貼付帯がある。貼付帯上にLR原体による斜行縄文が施され、施文後ナデ調整されている。胎土に黒雲母が目立ち、橙色を呈する。

SP－12（１）：土器集中２（P77区）と周辺の包含層（N66、O66・67区）出土の破片が接合した。大型壺形土器である。色調は赤橙色で焼成がよく胎土に海綿状骨針が混入する。口縁部は不規則に波打つ。口唇上から内面にかけて磨きがかけられてはいるが、平滑な部分と削りの痕跡が残る部分があり、器面は凹凸が著しい。肩部に沈線文が１条めぐり、胴部には比較的太いLR原体による縄文があり、部分的には横走する。その上から２条１単位の細い沈線で相対する三角形文を描き、沈線で区画文を充填するところもある。口縁部から頸部の無文部には沈線による文様が施されている。口唇直下には太さが途中で変化する２条の沈線とさらに加えた１条が断続的にめぐる。弧線によりそれぞれを繋ぐ意図のようであるが、配置が乱れている。沈線には太さの異なる２種類の施文具が使用されている。涌元式に相当するもの。

SP－13（９）：太いRL原体による縄文を縦位に施文している。

SP－15（10）：RLR原体による縄文を縦位に施文している。

SP－17（２）：無文の底部。

SP－21（11）：口縁部に薄手の貼付帯があり、太いLR原体による縄文が浅く施文されている。胎土に小砂利が混じる。

SP－25（12）：０段多条のRL原体の縄文のもの。薄手で焼成がよい。

SP－27（13・14）：13は口縁部に貼付帯があり、口唇上にも施文がある。14は口縁部の４分の１ほどが残存する。口縁部に２条に貼付帯を施文後、LR原体による縄文を貼付帯上では横位に、器面には縦位に施し、貼付帯間を無文にしている。口縁部に小さな突起部があり、口唇上にも施文がある。

SP－29（19）：LR原体を縦位に施文した縄文のある胴部片。

SP－35（15～17）：15はRL原体による斜行・横行縄文のもの。16は０段多条のRL原体の施文方向を変えることで羽状を構成する文様がある。17も同様の施文である。

SP－36（20・21）：同一個体の破片。折り返して形成された薄手の貼付帯上と口唇上に施文がある。

SP－37（18）：０段多条のRL原体による縄文のもの。

SP－38（22）：複節の縄文が疎らに施文されている。

SP－45（23）：LR原体による縄文が底部付近まで施文されている。部分的に施文方向を違えている。

SP－46（24）：口唇直下の狭い範囲に施文があり、下位は無文である。

SP－47（25）：無文地に沈線による文様がある。

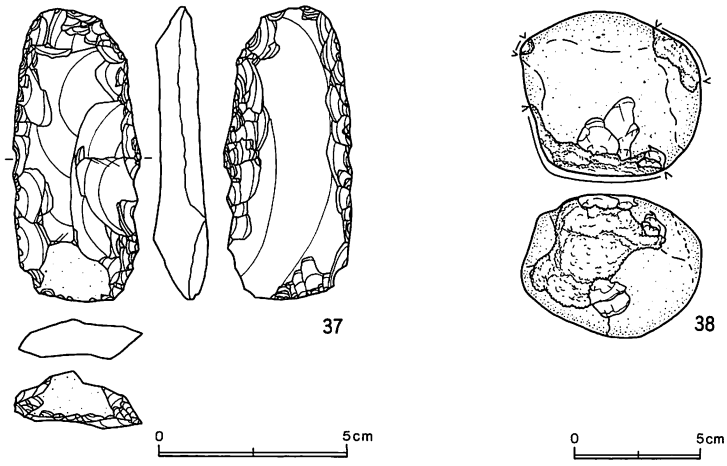
SP－54（27）：細い０段多条の原体による縦行縄文のもの。

SP－57（26・28）：26は無文の破片。ケズリにより、胎土の砂粒が動いているのが観察できる。28は無文地に沈線による文様がある。

SP－61（29・30）：29はLR原体による横走縄文施文後、器面をナデ調整している。30は縦行気味の縄文のもの。

SP－62（31・32）：31は折り返しのある口縁部。32は屈曲のある胴部でその部分にボタン状の貼り付けがある。RL原体による縄文施文後、沈線で文様を描き、部分的に磨り消し無文としている。沈線文は中空の竹管状施文具でなされ、円形文も同一の施文具である。薄手で内面はよく調整されている。

図Ⅳ－38　SP出土の遺物（1）



図Ⅳ－39　SP出土の遺物（２）

32は涌元式に相当する。

SP－64（33・34）：33は太いLR原体による斜行縄文のもの、34は０段多条のRL原体のもの。

SP－69（35）：胴部に扁平な貼付帯がある。貼付帯上は０段多条のLR原体で斜行に、器面にはRL原体を縦に施文することで、羽状を構成する文様になっている。上位に貼付帯が１条あるとみられ無文帯となっている。

SP－70（36）：縄文が施されている胴部破片。（遠藤）

石器：37は、SP－43から出土した篦状石器。頁岩の横長剥片を素材に、打面側と末端辺を両面から粗く剥離を加えて、短冊形に整形している。刃部背面は、風化の弱い礫面で、末端に微細剥離が見られる。刃部腹面は平坦剥離で面を調整している。これ以外には、剥片がSP－８、35から各２点、SP－29から１点出土している。（福井）

38は、SP－69から出土したたたき石である。拳大の歪な無斑晶質玄武岩を用い、やや突出した部分を敲打しているものである。敲打痕は明瞭で、敲打による剥離を伴っている。（立田）

4　水場遺構（図Ⅳ－40～51、表１・４・５、図版25～27、43～48）

位　置　M・N73・74　　**立　地**　標高41.2～40.0ｍ付近の沢　　**規　模**　(3.3)×(1.3) m

確認・調査　町道により削平されていたため、N73区のⅥ層上面で、Ⅳ層の黒色土の落ち込みとして検出した。小沢と認識し、Ⅳ層を掘り下げた。結果、多量の土器が包含したことから、Ⅳ層より下位の堆積物中の遺物について、出土位置の記録を行った。

土　層　上位にⅣ層が堆積しており、その下位層は、グライ化したⅣ層にⅤ層やⅥ層、Ⅶ層由来の土層ブロック、礫、軽石、砂を多く含む状態であった。流水が維持されていれば、沢地形も維持されたであろうが、流水量が減少した場合、含水したⅤ層以下は崩落しやすいため、すぐに埋積したものと考えられる。土層名を付したものは、主に上記のような堆積とみられる。

遺物出土状況　沢地形底面に土器が敷き詰められた状態で出土し、その上位に土器のほか、礫石器や自然礫が含まれていた。礫石器には、扁平打製石器、たたき石が目立ち、北海道式石冠も含まれた。点数では剥片も多いが、水場遺構以外の出土状況からは、少ないものであった。また、大型礫はほとんどが石皿・台石であった。土器は、Ⅲ群a類とⅣ群a類が多い。遺物は、グライ化したⅣ層およびⅣ層からも出土している。扁平打製石器は、この水場遺構と名付けた地点における出土点数が、調査区内で最も集中している。また、たたき石、北海道式石冠など他の礫石器も、同様の傾向であった。

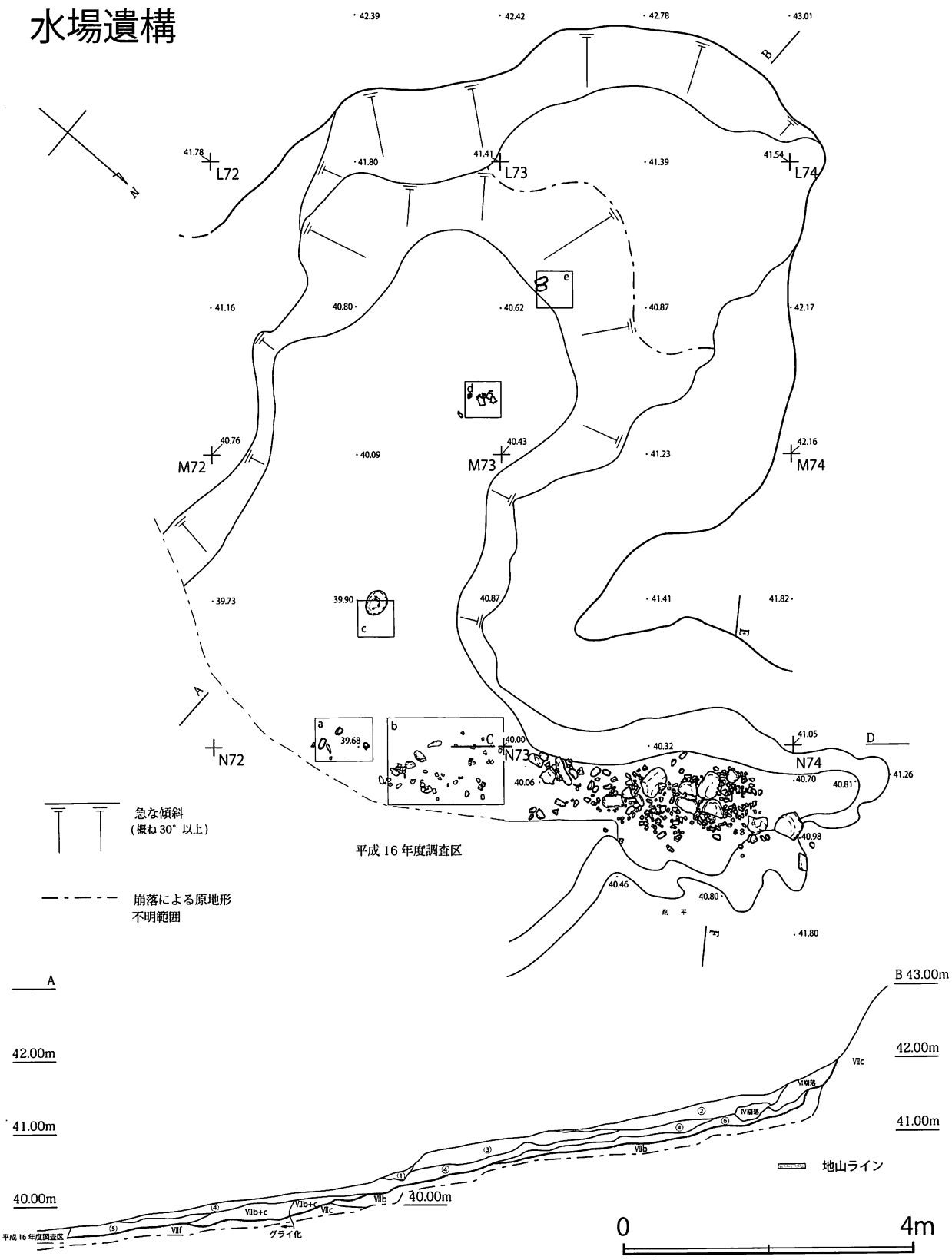
以上から、この地点が、礫石器の遺棄・廃棄に関わる地点であったことが推定されたため、水場遺構と名付けた。また、隣接する遺構集中区の状況を見ると、縄文時代中期中葉にフラスコ状土坑群が構築され、縄文時代後期前葉に竪穴住居跡、土坑、柱穴状小ピットが集中的に構築される。そして後期前葉の段階では、土を撹拌し、過去の遺物を除去した状況が確認された。したがって、中期中葉は水場として利用され、後期前葉では、この沢を廃棄場とした可能性が考えられる。

時　期　出土遺物から時期は、縄文時代中期葉と後期前葉に利用されたと考えられる。　　（福井）

遺　物　土器：１～12，15～36はⅢ群a類土器。サイベ沢Ⅶ式、見晴町式に相当するものがある。縄文のみのものと縄文地に沈線で文様を描くものがある。地の縄文は７、31がRLR原体、34がLRL原体による複節縄文、１、12、16がLR原体、そのほかはRL原体による単節の斜行縄文で、大半を占める。０段の原体は多条のものがいくつかある（４、５、９、15、19、21、24，27)。４か所あるいは３か所に山形突起部や小さな波頂部をもち（１～11・29)、器高が概ね20～40㎝に収まる中型・大型のものと、20㎝に満たない小型のものがある。胎土に径２、３㎜の小砂利や白色岩片が混じるものがある（２、８、９)。内面はいずれも丁寧に磨かれている。１～３、７、10、12がサイベ沢Ⅶ式の新しい段階、４～６、８、９、11、29が見晴町式並行段階のものである。

１は底部を欠損するが全体の３分の２ほどが残る。口唇断面は切出し形で棒状工具により斜めの刻みが加えられている。突起部を肥厚させこの部分に楕円形の貼付文を施している。文様は半截竹管状施文具で胴部上半に直線的文様を描き、突起下で屈曲をつけている。胎土に小砂利、白色岩片の混入が顕著である。２は水場遺構からのものは１点だけで、ほかは包含層から出土した。３か所に突起部を有し、この部分の粘土をつまみ上げ短い棒状の貼り付けとしている。口唇は丸みを帯びた角形。底部の接地面がわずかに張り出す。底部付近は無文となっている。３は口縁から胴部下半と底部は直接には接合していない。残存する突起は２か所であるが、４か所あるものと推定される。粘土塊を貼り付け、棒状工具で刻むことで作出している。４は胴部上半部でわずかに膨らみ、頸部でくびれる器形のもの。突起部は３か所である。口唇を肥厚させ棒状工具で深く沈線文を加え、突起部では渦巻き状になっている。文様は２条一対の沈線文を頸部と胴部上半に巡らせ、突起下と突起間の位置で、上下の沈線から交互に縦に短い線を垂下させている。５は底部を欠損する。２に類する器形である。口縁

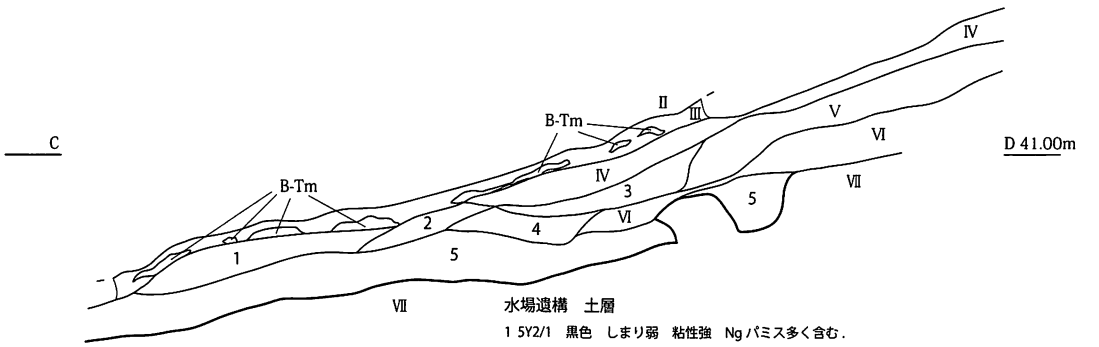
水場遺構



沢　土層

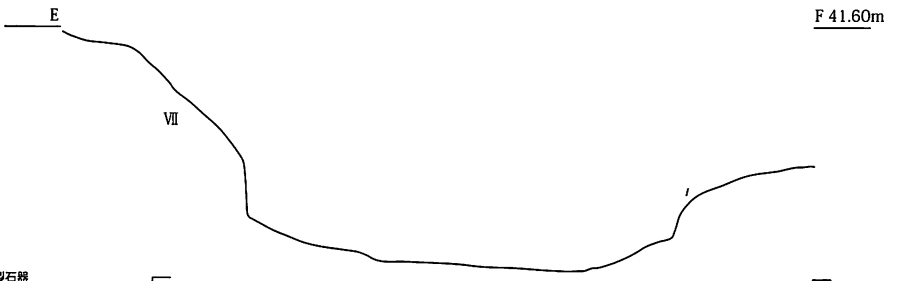
① 2.5Y2/1　黒色土　粘性あり　しまりなし　クロボク土　層界不明瞭　層界付近に砂質土が混じる
② 2.5Y3/1　黒褐色土　粘性あり　しまりなし　礫混じり砂　淘汰はやや良い　中～上位に木質が残る　下位がより粒径が大きくなる　不明瞭なラミナを呈する
③ 2.5Y3/1　黒褐色土　粘性あり　しまりなし　礫混じり砂　2cm以下の亜角礫（軽石、安山岩、粘板岩以下同じ）が多く混じる　ラミナを呈する部分もある
④ 5Y2/2　黒色土　粘性あり　しまりなし　礫混じり粘土　3cm以下の円～亜円礫と黒色粘土で構成される　淘汰悪い
⑤ 2.5Y3/1　黒褐色土　粘性あり　ややしまりあり　粘土混じり礫　3cm以下の亜円～亜角礫に黒色粘土が少量混じる　淘汰悪い
⑥ 10YR3/4　暗褐色土　粘性あり　ややしまりあり　粘土混じり礫　10cm以下の亜円～亜角礫に暗褐色粘土が混じる　淘汰悪い

図Ⅳ－40　水場遺構（1）

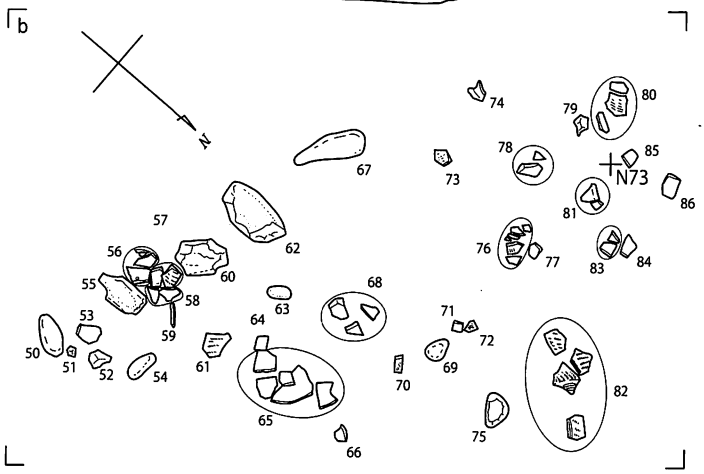


水場遺構　土層

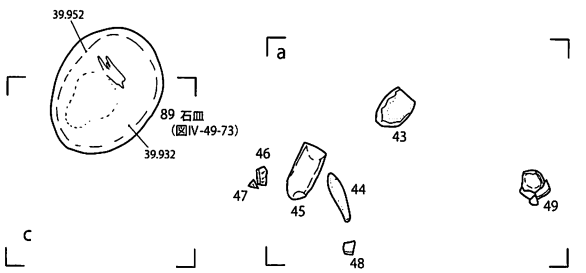
1 5Y2/1　黒色　しまり弱　粘性強　Ngパミス多く含む.
2 10YR1.7/1　黒色　しまり弱　粘性強　Ⅳ層＋Ngパミス.
3 10YR3/1　黒褐色　しまり弱　粘性強　Ⅳ層とⅤ層が斑状に混在.
4 10YR3/2　黒褐色　しまり弱　粘性強　グライ化したⅣ層に粘土(Ⅵ層起源)ブロックを多く含む.
5 2.5Y3/1　黒褐色　しまり弱　粘性強　グライ化したⅣ層に砂礫(Ⅶ層起源)を多く含む.

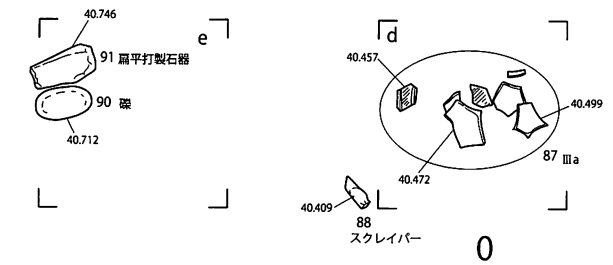


43 39.756m 扁平打製石器
44 39.666 たたき石
45 39.683 (図Ⅳ-49-72)
46 39.653 Ⅳa
47 39.617 フレイク
48 39.657 Ⅳa
49 39.758 Ⅲa
50 39.742 礫
51 39.821 フレイク
52 39.793 フレイク
53 39.795 Ⅳa
54 39.830 礫
55 39.795 扁平打製石器
56 39.794 Ⅲa・Ⅳa
57 39.868 Ⅳa
58 39.834 Ⅲa
59 39.832 Ⅲa
60 39.817 扁平打製石器
61 39.846 Ⅳa
62 39.843 (図Ⅳ-49-65)
63 39.877 礫
64 39.851 Ⅳa
65 39.870 Ⅲa・Ⅳa
66 39.836 Ⅲa
67 39.890 礫
68 39.875 Ⅳa
69 39.901 たたき石
70 39.866 Ⅳa



71 39.926m Ⅳa
72 39.922 Ⅲa
73 39.970 Ⅳa
74 39.966 フレイク
75 39.910 台石片
76 39.976 Ⅳa
77 39.912 Ⅳa
78 39.979 Ⅲa・Ⅳa
79 39.992 スクレイパー
80 40.002 Ⅳa
81 39.999 Ⅳa
82 39.909 Ⅲa・Ⅳa
83 39.988 Ⅲa・Ⅳa
84 39.980 Ⅳa
85 40.057 Ⅳa
86 39.989 Ⅲa





0　1:40　2m

図Ⅳ－41　水場遺構（2）

N73
N74
N
接合
平成 16 年度調査区
削　平
40.06
40.15
40.31
40.45
40.46
40.49
40.70
40.80
40.98
0
1:20
1m

図Ⅳ－42　水場遺構（3）

部を折り返してわずかに肥厚させて、この部分に施文がある。縄文は縦行気味になる部分がある。 6 はほぼ全体が復元できた。胴部がやや膨らみ、底部の接地面が外に張り出す。突起はやや丸みを帯びるもので口唇直下の狭い範囲は無文である。ほぼ同じ大きさの 2 、 5 、 9 と比べて厚手である。 7 は 4 か所に突起部があり、内外面に細い粘土紐の弧状の貼り付けがある。貼付は左右非対称で一方の頂部を棒状工具で深く刻むことで、大小の山をもつ突起部が形成されている。全体は口唇をつまみ上げることにより粘土がはみ出し口唇断面は角形となっている。その上に沈線を 1 条施し、さらに縄により間隔をあけて刻みをつけている。

8 、 9 は山形の突起部に小さな円形の貼付文をつけるものである。口唇断面は切出し形でこの部分にも施文がある。 8 は胴部下半でやや膨らむ器形である。これら 2 つの土器は焼成、胎土、内面調整が共通している。10は口縁から底部までは直接接合されていない。 4 か所に小さな波頂部があるとみられる。底部がわずかにはみ出し直線的に立ち上がる器形である。器面の縄文は疎らで底部の比較的広い範囲が無文である。11は底部が欠損している。 3 か所に丸みを帯びた山形の波頂部をもつ。胴部下半は縦行気味の縄文が施されている。部分的に口唇の作り出しがあり、施文がなされている。12は口縁部がごく一部しか残っていないためその様相は知られない。口唇上に施文がある。

15、16は縄文の施されている底部。15の底部付近は無文でLRL原体に斜行縄文が施されている。

17は縄文地に幅 7 ㎜ほどのヘラ状施文具による平行沈線文がある。口縁部を肥厚させ、この部分にも施文がある。18は竹管状施文具による沈線文のもの。19～21は突起部。19は粘土を貼り付け肥厚させ、棒状工具で縦に刻みを加えている。22は突起部に貼付帯をつけ、横位に深く刻みを入れている。縄文は複節とみられる。21は細い貼付帯、22は口唇にごく短い粘土紐が貼り付けられ、この部分にも施文がある。23～28は器面に縄文の施されたもの。23は口唇部に原体を斜めに連続して押捺している。26は口唇上に施文がある。29は突起部に小さな円形の貼付文が二重に施されている。体部には綾絡文が加えられている。部分的には口唇上にも施文されている。胎土は緻密で焼成がよく内面はよく磨かれている。30は縄文地に沈線で文様のあるもので、口唇をわずかに肥厚させこの部分に溝状の沈線を加えている。胴部上半に、半截竹管状施文具の腹面による直線、弧線を組み合わせる文様が描かれている。31a～cは同一個体。口径13㎝ほどの小型の土器で、大きな漏斗状の突起部（31b）と台形状の低い突起部がある。 2 種二対の突起であろう。口縁部の狭い範囲を沈線で区切り無文とし、口唇には部分的に途切れる溝状の沈線文が施されている。RLR原体による縦行気味の縄文が胴下半部まで施され、半截竹管状工具で弧を描く文様が認められる。底部付近は無文である(31c)。薄手で胎土、焼成は30に類する。32a・bは同一個体。平縁あるいはごく緩やかな波頂部をもつ。口唇上に 1 条沈線を加え、部分的に肥厚させ頂部を深く刻み溝状にしている。33は胴部上半部～口縁部近くの破片。縄文地に竹管状工具による 2 条並列する直線的文様があり、工具の先端で渦巻状の大きな円形文を加えている。胎土に小砂利が混じる。34～36は底部。34は大型深鉢土器の底部，磨滅が著しい。底部付近は無文で、LRL原体による複節の縄文のもの。胎土の小砂利や白色岩片が多く混じる。35は結束のある羽状縄文が施されている。ややくぼむ底面の周囲に網代の端部分のような痕跡が観察できる。これら底部はサイベ沢Ⅶ式のものである。

37はⅢ群b類土器。頸部がわずかにくびれる小型の深鉢形。波状口縁で、口縁部は無文帯を作りだす意図のようであるがわずかに縄文がみえる。やや厚みのある貼付帯を巡らせ円形刺突文を加えている。縄文は貼付帯施文後である。内面はよく磨かれ胎土には海綿状骨針が混入する。

13、14、38～56はⅣ群a類土器。13は破片が大きく 4 つに接合されたもので器形、大きさを推定して復元した。口径35㎝内外、器高は30～40㎝ほどになるとみられる大型深鉢土器。底部から直線的に立ち上がり頸部でくびれて外反する。口縁部の 4 か所に低い台形状の突起部がある。突起部は棒状工具で 3 つに刻まれそ

れぞれの項部に指頭でくぼみをつけている。頚部のくびれ下端に縄線文を２条施し文様帯を区画している。口縁部は無文で、突起部からそれぞれ縄線を２条配している。体部は０段多条のLR原体による横走縄文が施されている。胎土に海綿状骨針が混じる。14は口縁部から底部までの２分の１ほどが残存する。粘土を張り付けて作り出した山形の突起部が２か所あるが、全体では４か所ないしは５か所にあると推定される。器面には０段多条のLR原体による横走縄文が胴部下半まで施されている。下半部の縄文は付加条（拓影図）とみられ、巻いてある縄の圧痕が強く残っている。また、部分的に爪の跡がみられる。

38は薄い貼付帯が３条めぐるもので、最上位のものは剥落している。貼付帯間は無文で貼付帯上にはLR原体による斜行縄文が、体部には縦位に施文した縄文がつけられている。天祐寺式に相当する。39a・bは口縁部に折り返し状の細い貼付帯がめぐるもので、貼付後、０段多条のLR原体による縄文を施し、半截竹管状工具で垂下する蛇行沈線文を何か所かに配している。胎土には小砂利、白色岩片が混入する。内面はよく調整され平滑である。40～45は縄文、無文の口縁部。40は口縁部を比較的幅広く折り返し無文帯を形成している。器面には０段多条のLR原体による縦行縄文が施されている。41は小さな山形の波頂部。横走気味の縄文のもの。42a・bは同一個体。無節の縄文が施されているとみられる。器面の凹凸が著しい。43～45は横走縄文が施されている。44、45は同一個体とみられ、口唇上にも施文がある。46～48は無文。49は無文地に沈線で文様が描かれる波状口縁のもの。折り返し口縁の文様帯に、波頂部を中心に横長の区画文を配するもので、体部は３条一単位の沈線の弧状の文様がある。精製された胎土で焼成がよい。トリサキ式ないし大津式の古段階に相当する。50は壺形土器の破片。同一個体破片は包含層からも出土している（図Ⅴ－１－42－110）。２条一単位の沈線文で横長の区画文を描くもので、底部まで多段に配されるものとみられる。沈線で縁取られた内側をナデ調整することで半肉彫り的な文様になっている。51～56は底部。51、54は底部がやや張り出す。51、54には縦行気味の縄文である。52は無文の部分。53、55、56は斜行縄文が施されている。（遠藤）

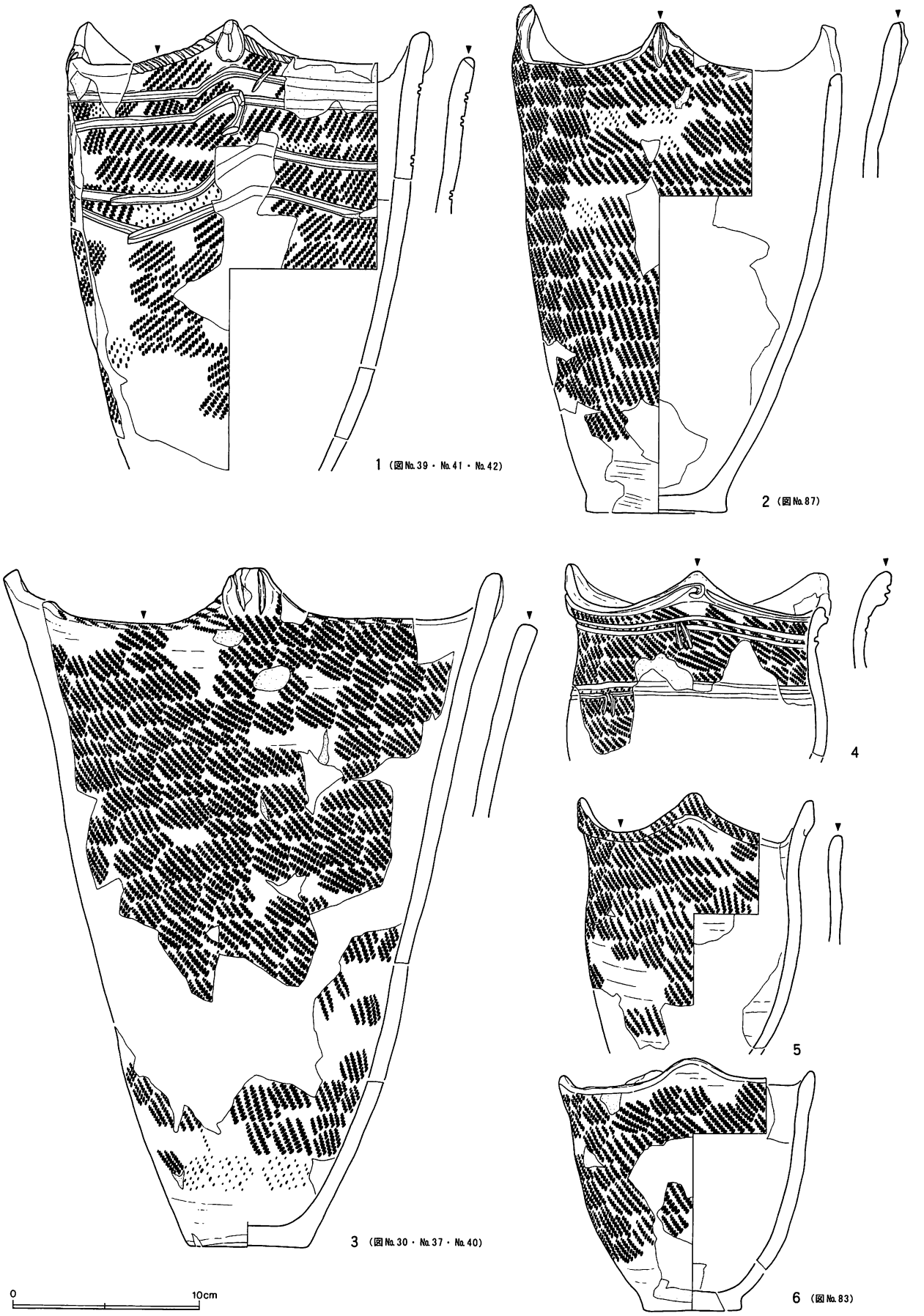
石器：57・58は、頁岩製スクレイパー。57は、横長剥片を素材に、その末端辺の腹面を調整することで外湾した刃部とする。刃部中央両面には鈍い光沢が見られる。特に腹面刃部中央の刃部再生調整がなされていない部分は摩耗し、光沢が強く、刃部に平行した線状痕も観察される。58は、縦長剥片の右辺に鋸歯状刃部をもつもの。調整は腹面を中心とする。背面右側中央には鈍い光沢が見られる。また、左辺末端側には、腹面を急斜度剥離した刃部もある。なお、腹面打瘤には敲打痕が認められる。59は、褐色珪化岩製Rフレイク。右辺に散漫な剥離が認められ、両面に明瞭な光沢が見られる。左辺の調整剥離は厚みを減じるためと考えられる。61は、頁岩製Uフレイク。横長剥片の末端辺に広く微細剥離が観察される。60は、頁岩製石核。頻繁な打面と作業面の移動によってサイコロ状になった残核。62は、緑色泥岩製磨製石斧。体部中央で折損している。刃部は片面に鎬を持ち、角度も急斜度となっている。（福井）

63、64は、たたき石である。63は、扁平な礫を用い、両面の中心よりややずれた位置に弱い敲打痕が認められる。64は、扁平な礫の縁辺の一部に打ち欠きを伴う敲打痕が認められるもの。ともに安山岩製。

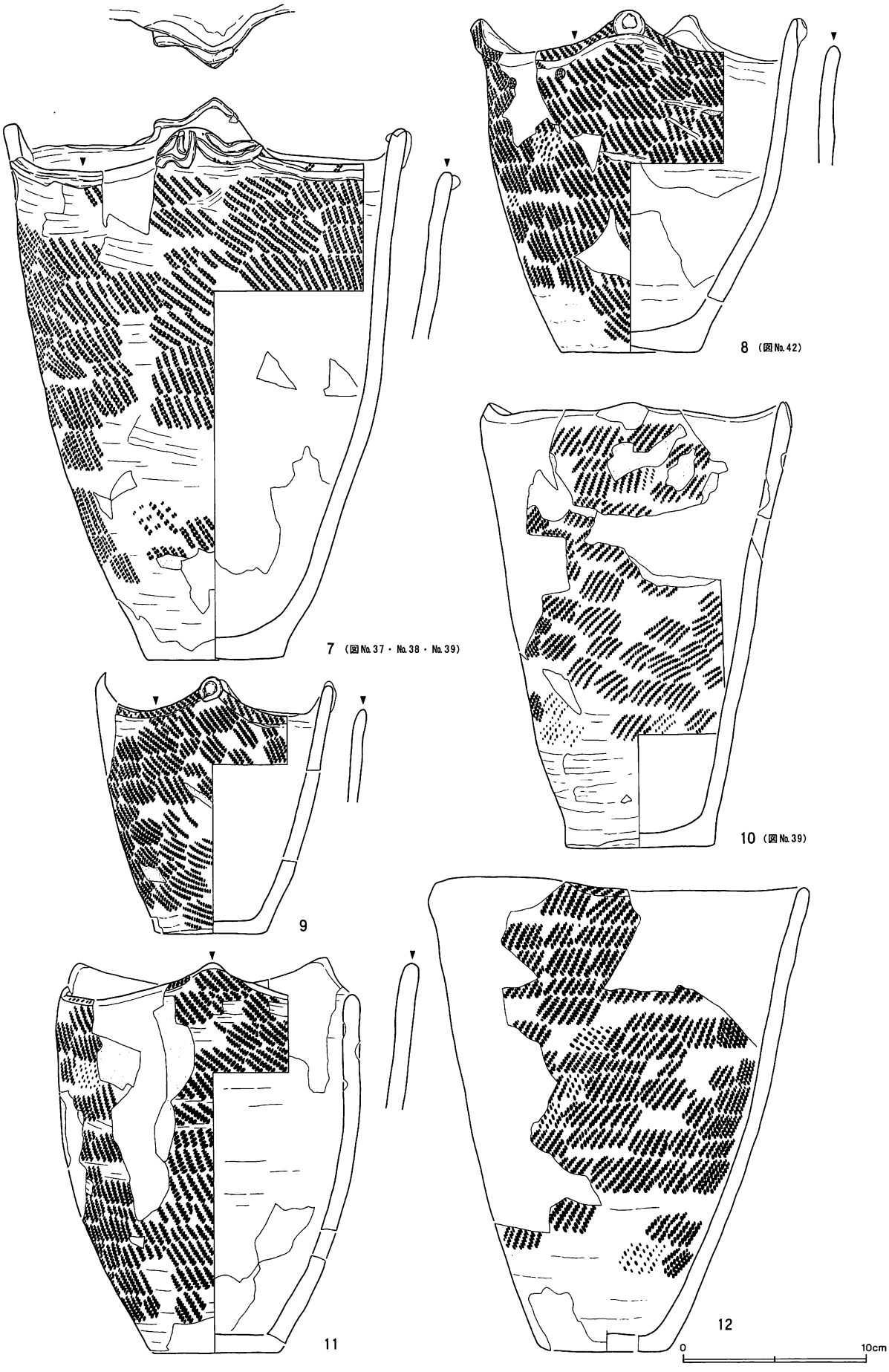
65～68は、扁平打製石器。65は、周縁を打ち欠いて半円状に整形し、長辺を擦った狭義のもの。66、67は、礫があまり加工されないもの。68は、打ち欠きによって得られた剥片状の礫を素材とするもの。無斑晶質玄武岩を用い、縁辺のみ打ち欠かれている。

69～71は、北海道式石冠。69は、正面観が概ね半円状を呈する典型的なもの。70は、項部にも敲打痕がある。71は、ミニチュアとみられる。円礫をそのまま素材とし、敲打により把手が作出され、一面が擦られている。69は角閃石安山岩製、70は輝石安山岩製、71は安山岩製である。

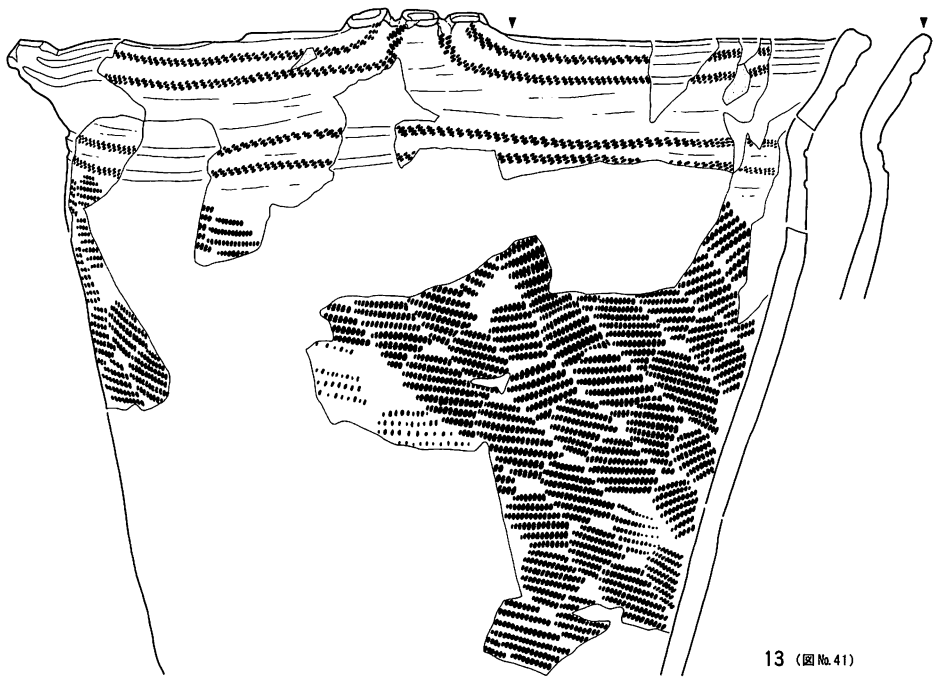
72は、加工痕ある礫。やや細長い礫の両端と一側縁が打ち欠かれているもの。側縁の中央には敲打痕が認められる。かなり細粒な閃緑岩を用いている。

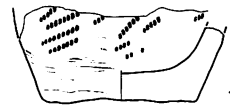


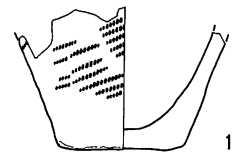
図Ⅳ－43　水場遺構出土の遺物（1）

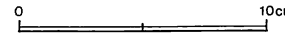


図Ⅳ－44　水場遺構出土の遺物（２）

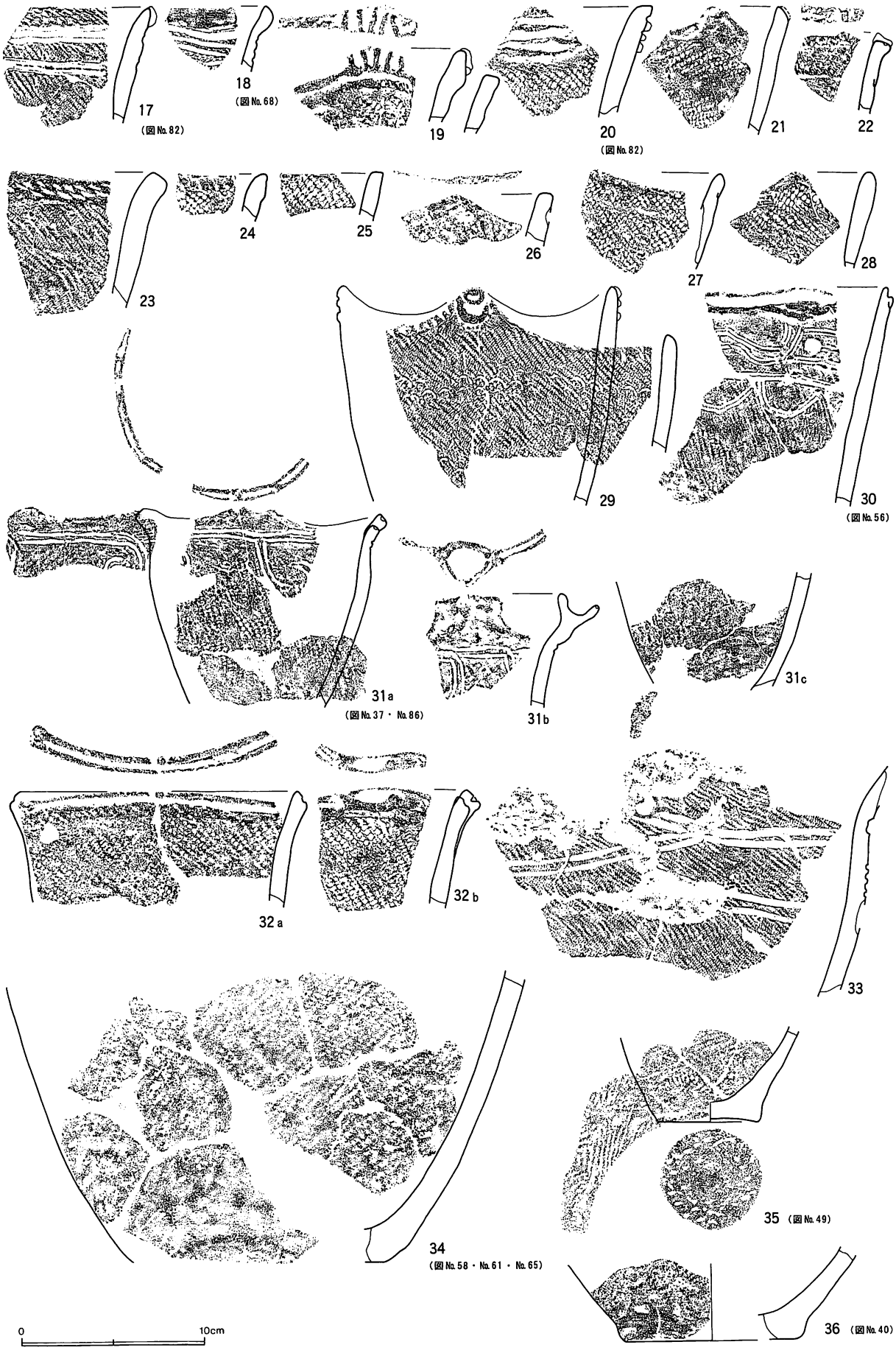




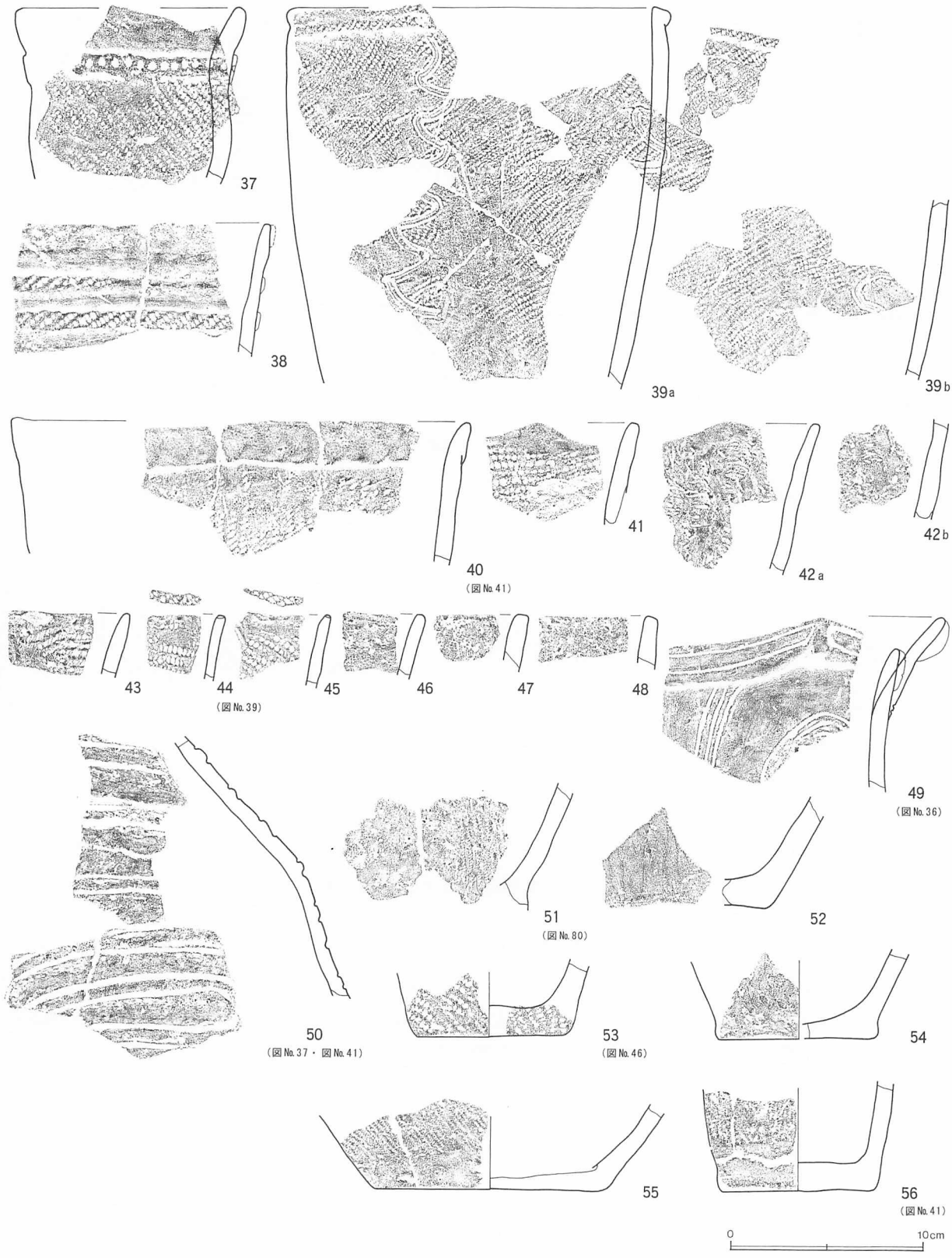




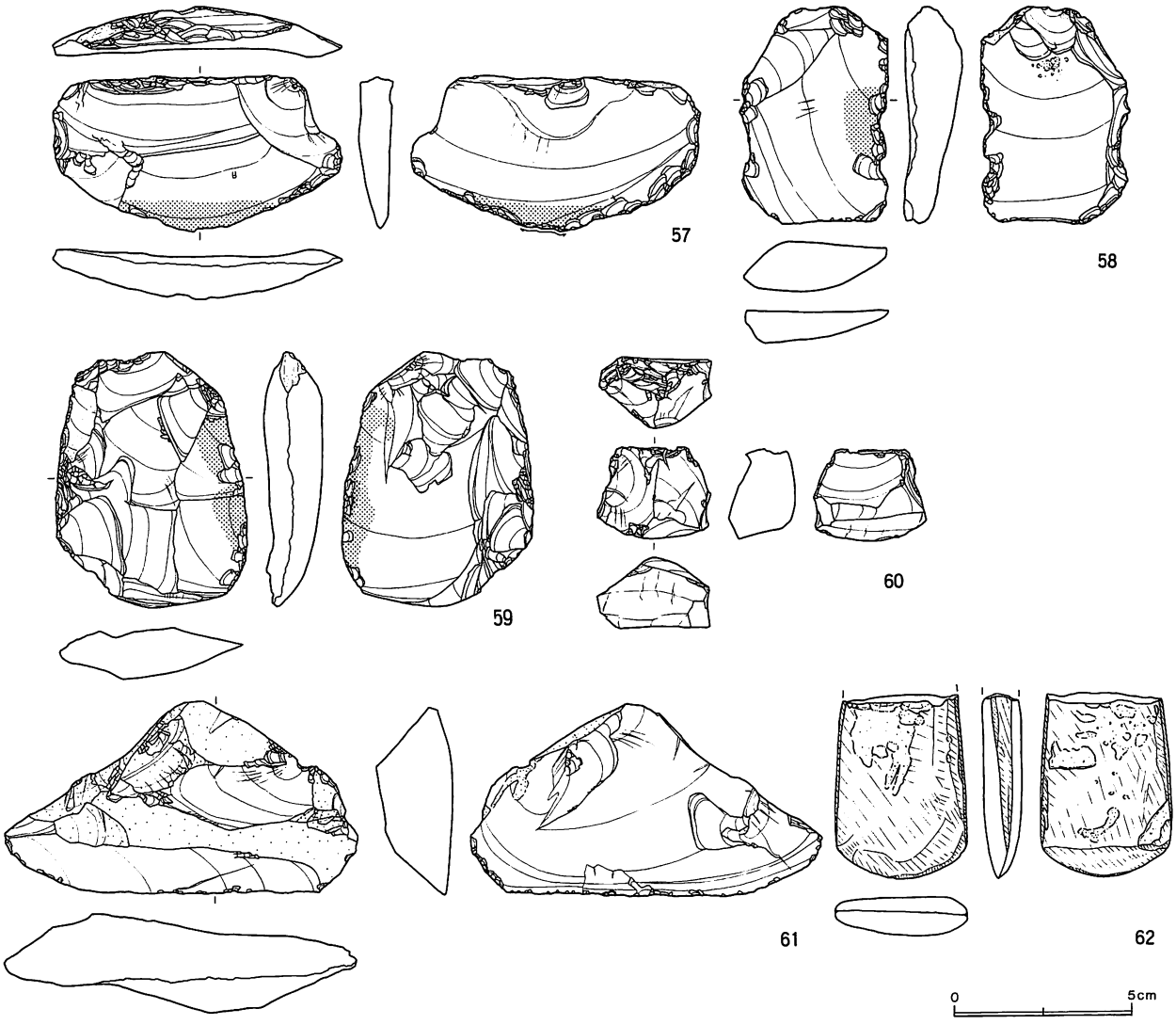
図Ⅳ－45　水場遺構出土の遺物（３）



図Ⅳ－46　水場遺構出土の遺物（4）

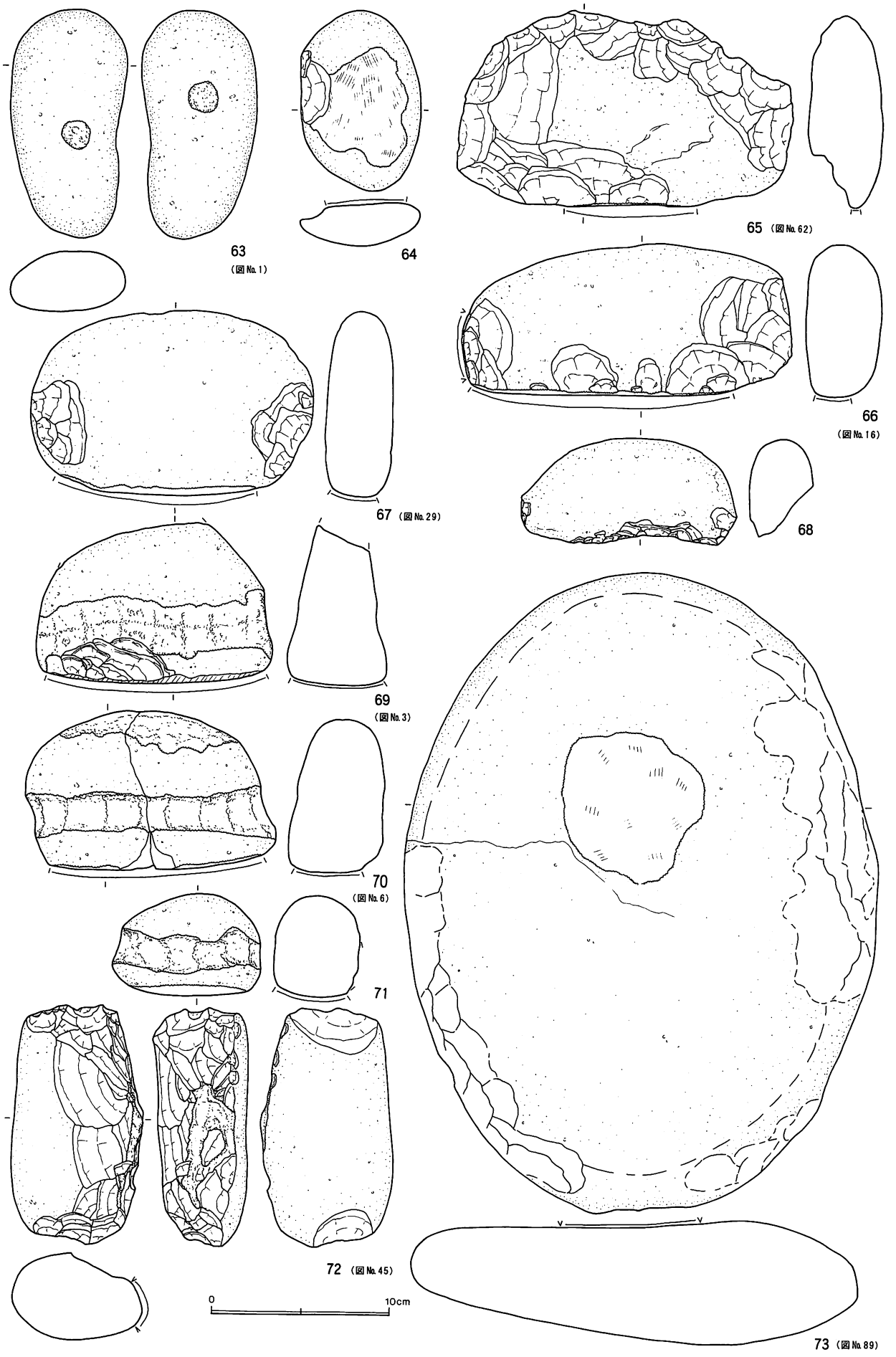


図Ⅳ－47　水場遺構出土の遺物（５）

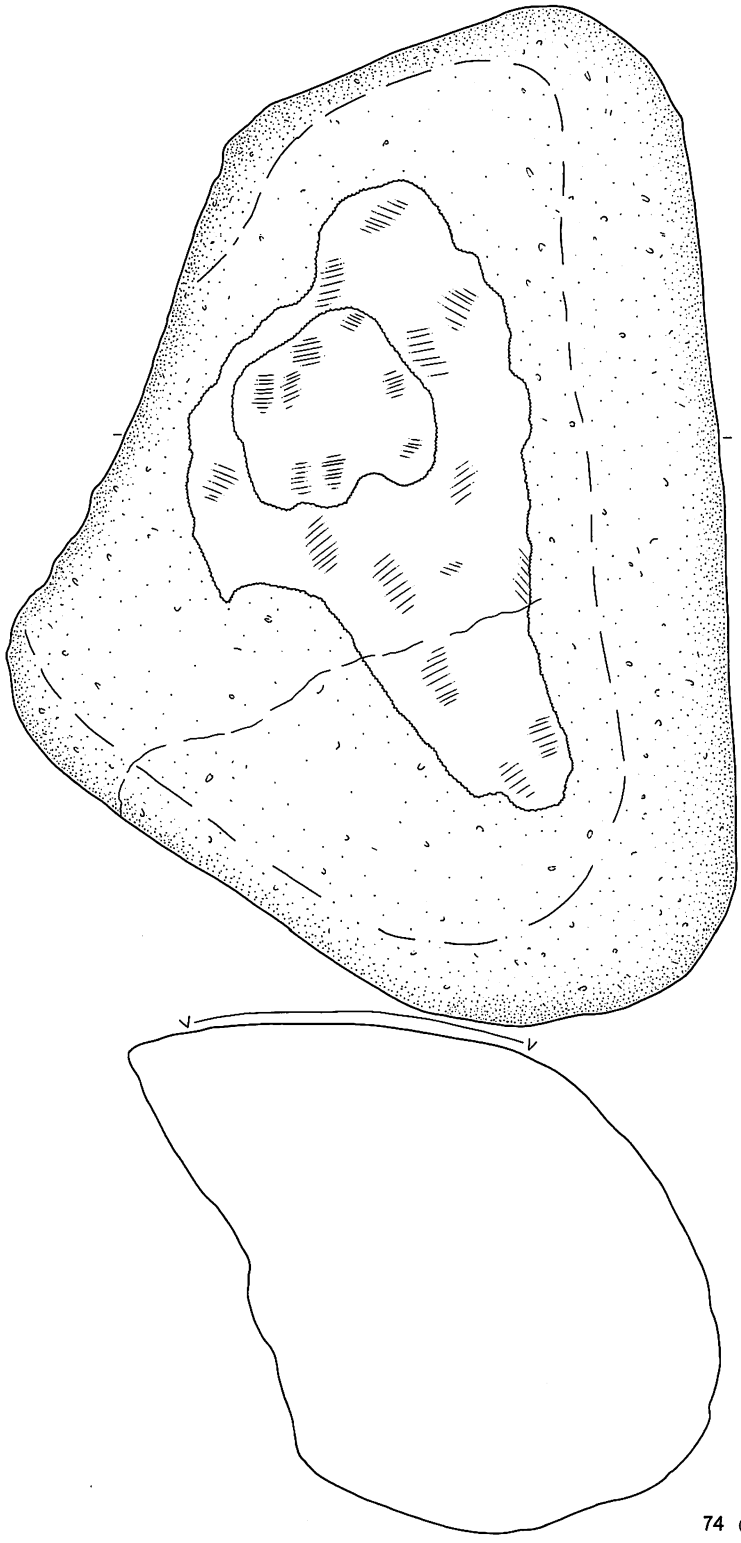


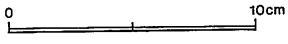
図Ⅳ－48　水場遺構出土の遺物（６）

73～75は、石皿。73は、楕円形の扁平礫の中心より長軸上にややずれた位置に使用面が認められるもの。側縁には被熱によるとみられる剥離がある。輝石安山岩製。74は、素材礫の一平坦面が使用されるもの。輝石安山岩製で、使用面はやや平滑である。75は、二等辺三角形を呈する扁平な礫を用い、一長辺の中央付近に明瞭な使用面のあるもの。角閃石安山岩を用いている。（立田）

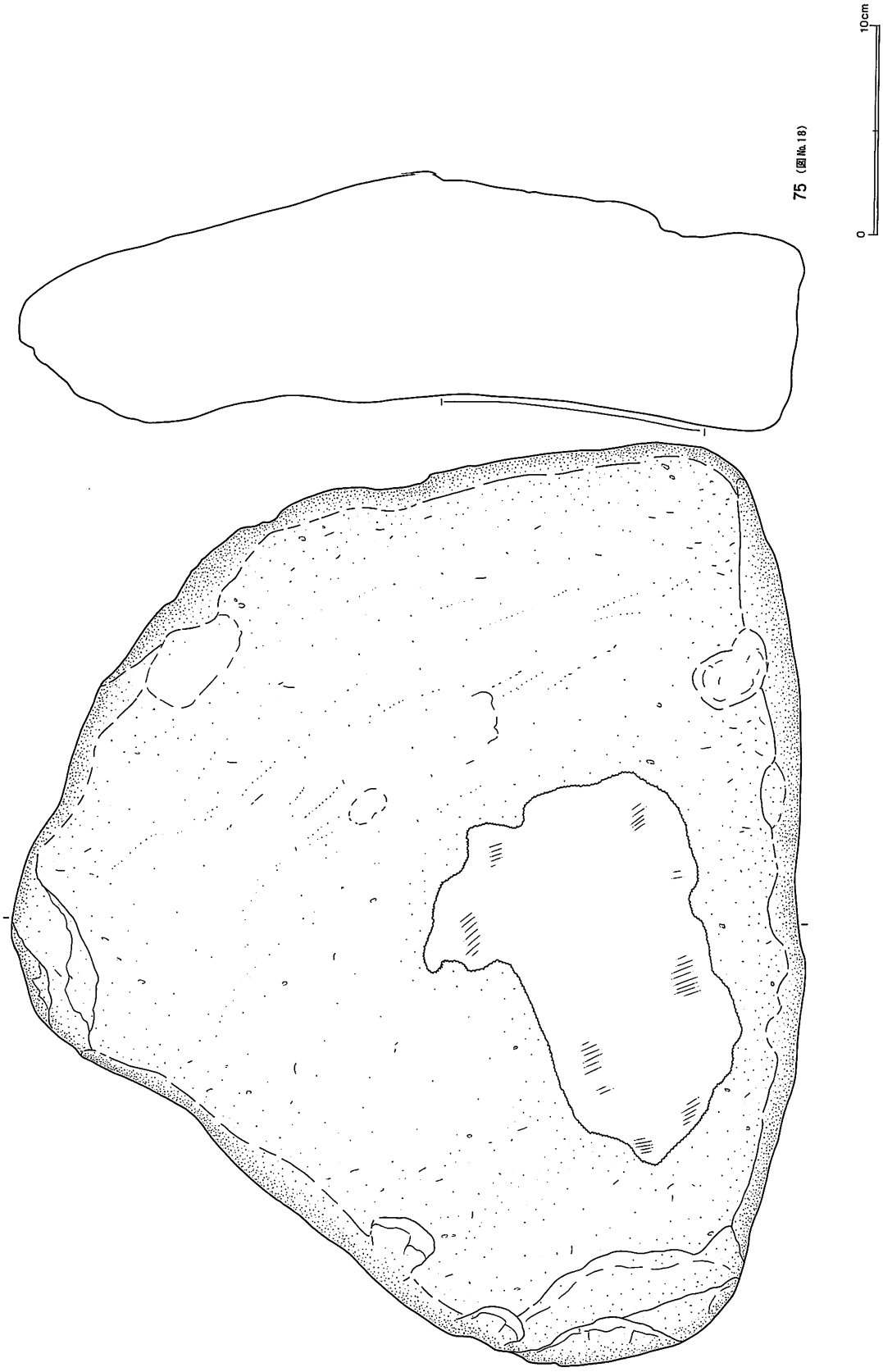


図Ⅳ－49　水場遺構出土の遺物（7）





図Ⅳ－50　水場遺構出土の遺物（8）



図Ⅳ－51　水場遺構出土の遺物（9）

5　剥片集中

FC－1（図Ⅳ－52、表1・5、図版28・50）

位　置　N78　　**立　地**　標高42.5m付近の崖の縁辺部　　**規　模**　1.06×0.41m

特　徴　Ⅳ層掘り下げ時、同一石質の頁岩製剥片が広がっていた。風倒木痕によるⅣ層の落ち込み中から検出されたことから、廃棄されたものと考えられる。隣接して、縄文時代後期前葉とみられる土器片が1点出土している。

時　期　周囲の出土遺物から、縄文時代後期前葉の時期と考えられる。　（福井）

FC－2（図Ⅳ－52、表1・Ⅳ－1）

位　置　A・B49・B50　　**立　地**　標高41.0～41.5m付近の緩斜面

規　模　6.80×4.20mの範囲で3つのまとまりがある

内訳　；　A49：0.50×0.40m　A・B49・50：3.02×2.04m　A・B49・50：3.46×2.84m

特　徴　包含層調査中、Ⅳ層を5㎝の深さで2回掘り下げた段階で、黒曜石のフレイクチップが集中していた。土中から黒曜石をより分けながら掘りさげる事が困難な大きさのものが多かった部分について集中範囲として、土ごと取り上げて洗った。おおよそ3か所にまとまる。「分布範囲」とした場所は、土を洗うほどの量ではなかったものの黒曜石の分布が見られた場所である。遺物出土量はグリッド別に示した。A49区は5㎝の深さで4回掘りさげた段階まで遺物が出土した（1回目の段階でこの調査区内のFC－2関連遺物の8割程度出土）。B49区は5回（2回目の段階でこの調査区内のFC－2関連遺物の3割程度出土）、B50区は6回（2回目の段階でこの調査区内のFC－2関連遺物の7割程度出土）掘りさげた段階まで遺物を含んでいた。Bラインの方が2回目の10㎝段階で出土量が多く、より深い位置まで遺物が潜り込んでいるのは地形的にAラインより下であることが影響していると考える。同一面の所産であり、埋没後の自然営力によるものであろう。

FC－2を構成する遺物は黒曜石の剥片が主体である。石器も含めた石材別の出土量は黒曜石で13,377点（280.13g）である。頁岩は111点（23.29g）、メノウは15点（1.04g）である。総点数が13,505点（304.46g）と当調査区における他の剥片集中の中で最も多い出土量である。石鏃・両極技法を示す石核1点やそれに関連したUフレイク2点の出土といった、一個体の重量が0.5g以上のものを含むにもかかわらず一点あたりの重量平均が0.022gと当調査区における他の剥片集中と比べて2番目に軽いのは、細かい破片が多いためであり、両極技法による石器製作を行っていた場所と考えられる。

大半（土壌の量は168.87kg）についてはフローテーション法で洗浄したため、骨片が2点（同定結果は不明・0.14g）、炭化種子（キハダ完形3点と3破片、トチノキ？破片1点・ブドウ属破片3点・ミズキ完形3点・破片1点・子嚢菌6点・同定不能3点）合計0.22g、オニグルミの殻33点0.24g、炭化材23.51gといった遺存体も検出した。

また、この結果土器が砕片で416点出土した。砕片が多かったが後期前葉と判断した。一部には大津式とわかる破片もあった。古手の沈線文構成のもの（A49bc区）、磨消縄文の段階のもの（A49bc・B49ab区）、また、型式は不明だが木葉圧痕を持つ底部片（A49bc区）等があった。

時　期　フローテーション成果から縄文時代後期前葉大津式の時期またはそれ以降の可能性がある。周辺の包含層出土土器に関して、後期中葉のものが散見される場所でもある。　（大泰司）

遺　物　石器：1は、黒曜石製石鏃。有茎平基。体部中央で幅を広げ、かえし付近が翼状に突出する。かえし部は、器軸に併行するように辺を屈曲させる。2は、黒曜石製石核。角礫を、両極剥離することで、薄手の剥片を剥離していたものとみられる。　（福井）

表Ⅳ－1　FC－2遺物観察表

FC-2フレイクチップ関連遺物出土状況重量別内訳（g）

調査区	採取日と5cm掘り込み回数（例702・1回目→7月2日に5cmの深さで1回掘り込んだ）	頁岩剥片重量	頁岩石器重量	黒曜石剥片重量	黒曜石石器重量	黒曜石UフレイクRフ（両極技法の石核用）重量	黒曜石Rフレイク重量	黒曜石剥片重量石核（後技法の両石核）	メノウ剥片重量	合計
A49bc	701・1回目	19.43	0.65	135.71					0.58	156.37
A49bc	702・2回目	0.06		14.7		10.00	2.81			27.57
A49bc	709・3回目	0.00		3.34						3.34
A49b	718・4回目			1.6						1.60
FC-2/A49bc合計		19.49	0.65	155.35		10	2.81		0.58	188.88
B49a	715・1回目	0.10		6.52	0.56					7.18
B49a	716・2回目	2.38		14.29						16.67
B49ad	717・3回目			0.72				6.64		7.36
B－49b（B－49dの間違い）	718・4回目・両極剥離による剥片の回収			5.56						5.56
B49ab（B49adの間違い）	729・5回目	0.07		25.43						25.50
FC-2/B49ad合計		2.55		52.52	0.56			6.64		62.27
B50a	717・1回目			7.3			0.76			8.06
B50ab	718・2回目	0.19		37.9					0.46	38.55
B50ab	724・3回目	0.25		1.32						1.57
B50ab	725・4回目			0.28						0.28
B50a	729・5回目			4.14						4.14
B－50ad	730・6回目	0.16		0.55						0.71
FC-2/B50abd合計		0.60		51.49			0.76		0.46	53.31
FC-2合計		22.64	0.65	259.36	0.56	10	3.57	7	1.04	304.46

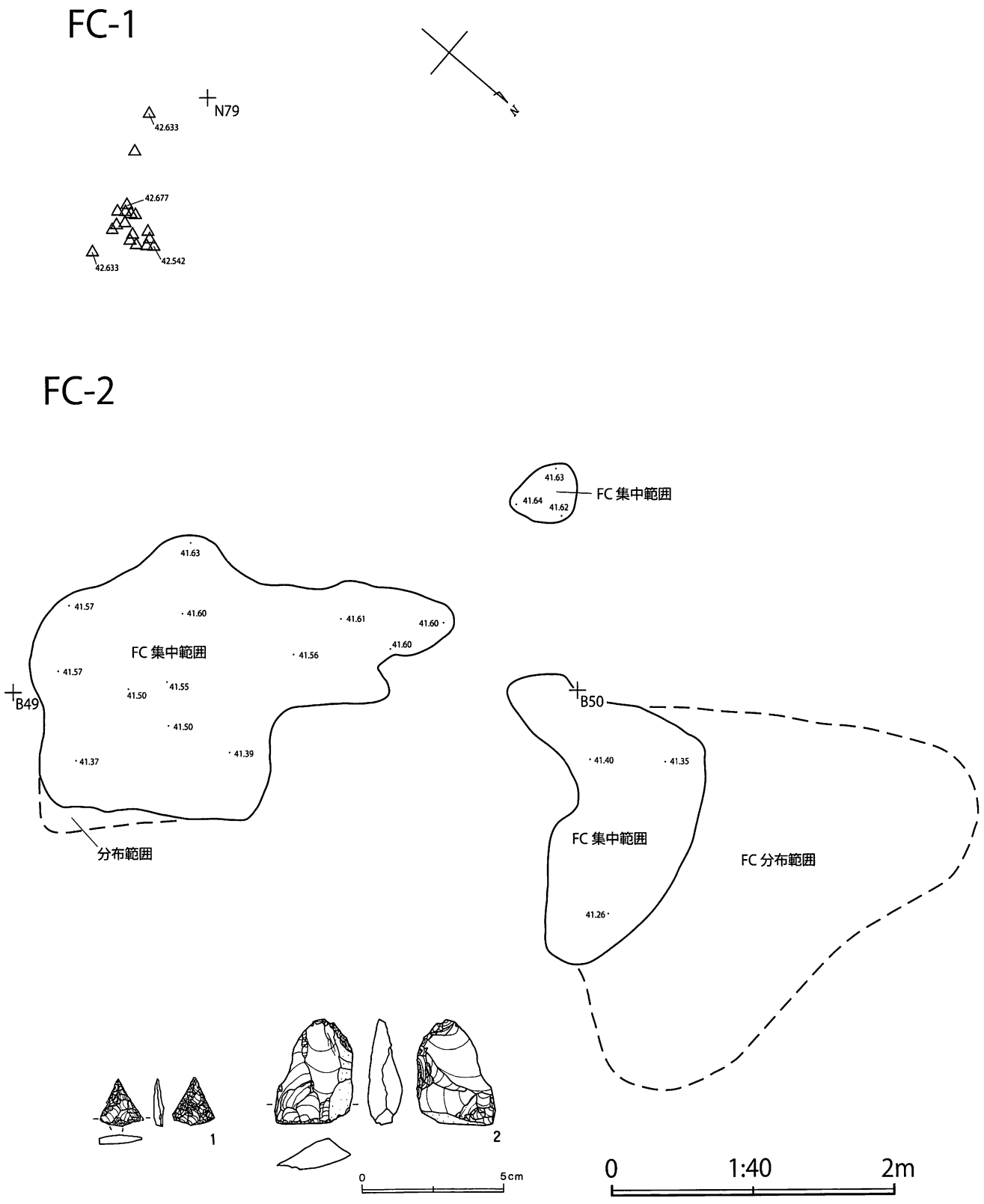
一枚平均0.022g

FC-2フレイクチップ関連遺物出土状況個数別内訳（個数）

調査区	採取日と5cm掘り込み回数（例702・1回目→7月2日に5cmの深さで1回掘り込んだ）	頁岩剥片	頁岩石器	黒曜石剥片	黒曜石石器	黒曜石UフレイクRフ（両極技法の石核用）（後技法の石核）	黒曜石Rフレイク	黒曜石剥片石核（後技法）	メノウ剥片	合計
A49bc	701・1回目	79	1	8682					14	8776
A49bc	702・2回目	3		1141		2	2			1148
A49bc	709・3回目	2		153						155
A49b	718・4回目			60						60
FC-2/A49bc合計		84	1	10036		2	2		14	10139
B49a	715・1回目	2		141	1					144
B49a	716・2回目	8		352						360
B49ad	717・3回目			15				1		16
B－49b（B－49dの間違い）	718・4回目・両極剥離による剥片の回収			5						5
B49ab（B49adの間違い）	729・5回目	2		781						783
FC-2/B49ad合計		12		1294	1			1		1308
B50a	717・1回目			220			1			221
B50ab	718・2回目	11		1646					1	1658
B50ab	724・3回目	2		41						43
B50ab	725・4回目			8						8
B50a	729・5回目			110						110
B－50ad	730・6回目	1		15						16
FC-2/B50abd合計		14		2040			1		1	2056
FC-2合計		110	1	13370	1	2	3	1	15	13503

FC-2遺物（フレイクチップ以外）出土状況重量別内訳

調査区	採取日と5cm掘り込み回数（例702・1回目→7月2日に5cmの深さで1回掘り込んだ）	洗浄サンプル総重量（kg）	洗浄サンプル総体積（体積4回目は0.5未満）（ℓ）	土器（個数）	骨片（g）	骨片（個）	炭化材（軽）（g）	炭化材（重）（g）	炭化材合計（g）	クルミ（g）	炭化種子（g）	炭化種子（右記の個数）	その他
A49bc	701・1回目	129.5	156	317			14.48	1.28	15.76	0.21	0.21	13	
A49bc	702・2回目	12	13	76			1.85		1.85		0.00	3	
A49bc	709・3回目	3.5	4	2	0.14	2	0.66	0.03	0.69		0.00	1	
A49b	718・4回目	0.02	0.5						0.00				
FC-2/A49bc合計		145.02	173.5	395	0.14	2	16.99	1.31	18.30	0.21	0.21	17	
B49a	715・1回目	0.05	0.5				0.01		0.01				
B49a	716・2回目	0.07	0.5				0.03		0.03				
B49ad	717・3回目	0.01	0.5						0.00				
B－49b（B－49dの間違い）	718・4回目・両極剥離による剥片の回収												
B49ab（B49adの間違い）	729・5回目	5	6	9			0.42	0.03	0.45	0.03			高温石英3
FC-2/B49ad合計		5.13	7.5	9			0.46	0.03	0.49	0.03			高温石英3
B50a	717・1回目	3.5	4				0.71		0.71				
B50ab	718・2回目	15	18	12			3.59	0.38	3.97	0.00	0.01	1	
B50ab	724・3回目	0.09	0.5				0.01	0.00	0.01				
B50ab	725・4回目	0.01	0.5				0.00		0.00				
B50a	729・5回目	0.12	0.5				0.03		0.03				
B－50ad	730・6回目												
FC-2/B50abd合計		18.72	23.5	12			4.34	0.38	4.72	0.00	0.01	1	
FC-2合計		168.87	204.5	416	0.14	2	21.79	1.72	23.51	0.24	0.22	18	高温石英3



図Ⅳ－52　FC－１・２と出土の遺物

FC－３（図Ⅳ－53、表１・Ⅳ－２）

位　置　C・D50・51　　**立　地**　標高40.0～40.5ｍ付近の緩斜面　　**規　模**　3.30×3.24ｍ

特　徴　包含層調査中、Ⅳ層を５㎝の深さで１回掘り下げた段階で、黒曜石のフレイクチップが集中していた。土中から黒曜石をより分けながら掘りさげる事が困難な大きさのものが多かった部分について集中範囲として、土ごと取り上げて洗った。「分布範囲」とした場所は、土を洗うほどの量ではなかったものの黒曜石の分布が見られた場所である。遺物出土量はグリッド別に示した。C50区は５㎝の深さで２回掘りさげた段階まで遺物が出土した（１回目の段階でこの調査区内のFC－３関連遺物の９割８分程度出土）。C51区は２回（１回目の段階でこの調査区内のFC－２関連遺物の７割程度出土）、D50区は２回（１回目の段階でこの調査区内のFC－３関連遺物の８割程度出土）掘り下げた段階まで遺物を含んでいた。D51区は１回掘り下げた。同一面の所産であり、埋没後の自然営力が差異をもたらしていると考える。FC－２に比較して微弱な尾根地形上に立地している。

FC－３を構成する遺物は黒曜石の剥片が主体である。石器も含めた石材別の出土量は黒曜石で4926点（93.88ｇ）である。頁岩は91点（1.06ｇ）、メノウは３点（0.02ｇ）である。総点数が5020点（94.96ｇ）と当調査区における他の剥片集中の中で二番目に多い出土量である。石槍破片１点を含むのみで一点あたりの重量平均が0.019ｇと当調査区における他の剥片集中と比べて１番目に軽く、細かい破片が多い。

大半（土壌の量は89.00㎏）についてはフローテーション法で洗浄したため、炭化種子（キハダ完形８点破片２点・子嚢菌完形６点破片２点・不明種実完形１点）合計0.03ｇ、炭化材3.91ｇといった遺存体も検出した。またこの結果、土器は砕片で９点出土した。砕片が主であり、判然としないが、周辺出土土器との胎土・色調を比較して後期前葉と判断した。

時　期　フローテーション成果から縄文時代後期前葉の時期またはそれ以降の可能性がある。　（大泰司）

表Ⅳ－２　FC－３遺物観察表

FC-3フレイクチップ関連遺物出土状況重量別内訳(g)

調査区	採取日と5cm掘り込み回数(例702・1回目→7月2日に5cmの深さで1回掘り込んだ)	頁岩剥片重量	黒曜石剥片重量	黒曜石欠損 石槍破片重量	メノウ剥片重量	合計
C50bc	702・1回目	0.90	35.71			36.61
C50c	709・2回目		0.91			0.91
FC-3/C50bc合計		0.90	36.62			37.52
C51b	710・1回目	0.04	33.02			33.06
C51b	711・2回目		16.43			16.43
FC-2/C51b合計		0.04	49.45			49.49
D50d	630・1回目	0.10	6.13		0.02	6.25
D50d	710・2回目			1.24		1.24
FC-3/D50d合計		0.10	6	1.24	0.02	7.49
D51a	630・1回目	0.02	0.44			0.46
FC-3合計		1.06	92.64	1.24	0.02	94.96

一枚平均0.018g

FC-3フレイクチップ関連遺物出土状況個数別内訳(個数)

調査区	採取日と5cm掘り込み回数(例702・1回目→7月2日に5cmの深さで1回掘り込んだ)	頁岩剥片	黒曜石剥片	黒曜石欠損 石槍	メノウ剥片	合計
C50bc	702・1回目	9	2835			2844
C50c	709・2回目		14			14
FC-3/C50bc合計		9	2849			2858
C51b	710・1回目	75	1675			1750
C51b	711・2回目		48			48
FC-2/C51b合計		75	1723			1798
D50d	630・1回目	6	333		3	342
D50d	710・2回目			1		1
FC-3/D50d合計		6	333	1	3	343
D51a	630・1回目	1	20			21
FC-3合計		91	4925	1	3	5020

FC-3遺物(フレイクチップ以外)出土状況重量別内訳

調査区	採取日と5cm掘り込み回数(例702・1回目→7月2日に5cmの深さで1回掘り込んだ)	洗浄サンプル総重量(kg)	洗浄サンプル総体積(ℓ)	土器(個数)	炭化材(重量)(g)	炭化材(重量)(g)	炭化材合計(g)	炭化種子(g)	炭化種子(右記の個数)
C50bc	702・1回目	17.5	19.5	1	1.77	0.05	1.82	0.01	3
C50c	709・2回目								
	FC-3/C50bc合計	17.5	19.5	1	1.77	0.05	1.82	0.01	3
C51b	710・1回目	19.5	21.5	8	0.93	0.02	0.95	0.02	9
C51b	711・2回目								
	FC-2/C51b合計	19.5	21.5	8	0.93	0.02	0.95	0.02	9.00
D50d	630・1回目	45.5	52.5		0.63	0.22	0.85	0.00	1
D50d	710・2回目								
	FC-3/D50d合計	45.5	52.5		0.63	0.22	0.85	0.00	1.00
D51d(D51aの間違い)	630・1回目	6.5	6.5		0.29		0.29	0.01以下	5
FC-3合計		89.00	100	9	3.62	0.29	3.91	0.03	18

FC－4（図Ⅳ－53、表1・Ⅳ－4、図版28・50）

位　置　B48　　**立　地**　標高40.5～41.0m付近の緩斜面　　**規　模**　1.74×1.40m

特　徴　包含層調査中、Ⅳ層を5cmの深さで1回掘り下げた時点で、黒曜石のフレイクチップが集中していた。土中から黒曜石をより分けながら掘りさげる事が困難な大きさのものが多かった部分について集中範囲として、土ごと取り上げて洗った。遺物出土量は同一グリッド内に収まっていたため全体の量を示す。B48区は5cmの深さで3回掘りさげた段階まで遺物が出土した（2回目の段階でこの調査区内のFC－4関連遺物の8割程度出土）。同一面の所産である。

FC－4を構成する遺物は黒曜石の剥片が主体である。石器も含めた石材別の出土量は黒曜石で1710点（429.77g）である。頁岩は15点（6.37gうち3点は被熱）、メノウは2点（0.01g）である。総点数が1727点（436.15g）、一点あたりの重量平均が0.25gである。調査区内の他の剥片集中と比べて点数の割に合計質量が一番重いのは、石鏃1点に加えて、石核6点を含む為である。

大半（土壌の量は3.52kg）についてはフローテーション法で洗浄したため、炭化材2.58gといった遺存体も検出した。またこの結果土器は砕片で10点出土した。砕片が多いが後期前葉と判断した。

時　期　フローテーション成果から縄文時代後期前葉の時期またはそれ以降の可能性がある。周辺の包含層出土土器に関して、後期中葉のものが散見される場所でもある。（大泰司）

遺　物　**石器**：1は、黒曜石製石鏃。有茎平基。先端部は二等辺三角形を呈する。入念な調整剥離で精緻に作られている。2～4は、黒曜石製石核と剥片の接合資料。いずれも亜角礫を素材としている。2は、両極剥離で各方向から打撃を加えた後、角礫面を打面にして、2枚以上の薄手の剥片を剥離している。その後、石核が分割してしまい、かつその面が平滑でないため、放棄されたと推定される。3は、平坦な角礫面を打面に設定し、作業面を固定して、薄手の剥片を5枚以上剥離している。最終的に剥離した剥片末端が大きくアーチ状になったため、放棄されたと考えられる。4は、当初角礫面を打面に、作業面を固定して、薄手で湾曲した剥片を4枚以上剥離している。その後、打面を作業面としたようであるが、剥離に失敗して、放棄したものとみられる。（福井）

表Ⅳ－3　FC－4遺物観察表

FC-4フレイクチップ関連遺物出土状況重量別内訳(g)

調査区	採取日と5cm掘り込み回数(例702・1回目一7月2日に5cmの深さで1回掘り込んだ)	頁岩剥片重量2回目の5・4・5は被熱	黒曜石剥片重量	黒曜石石核重量	黒曜石石核重量	メノウ剥片重量	合計
B48ab	715・1回目	0.07	64.61				64.68
B48ab	716・2回目	6.30	275.8	0.74	83.41	0.01	366.24
B48ab FC-5NO.10から	717・3回目		5.23				5.23
FC-4/B48ab合計		6.37	345.6	0.74	83.41	0.01	436.15

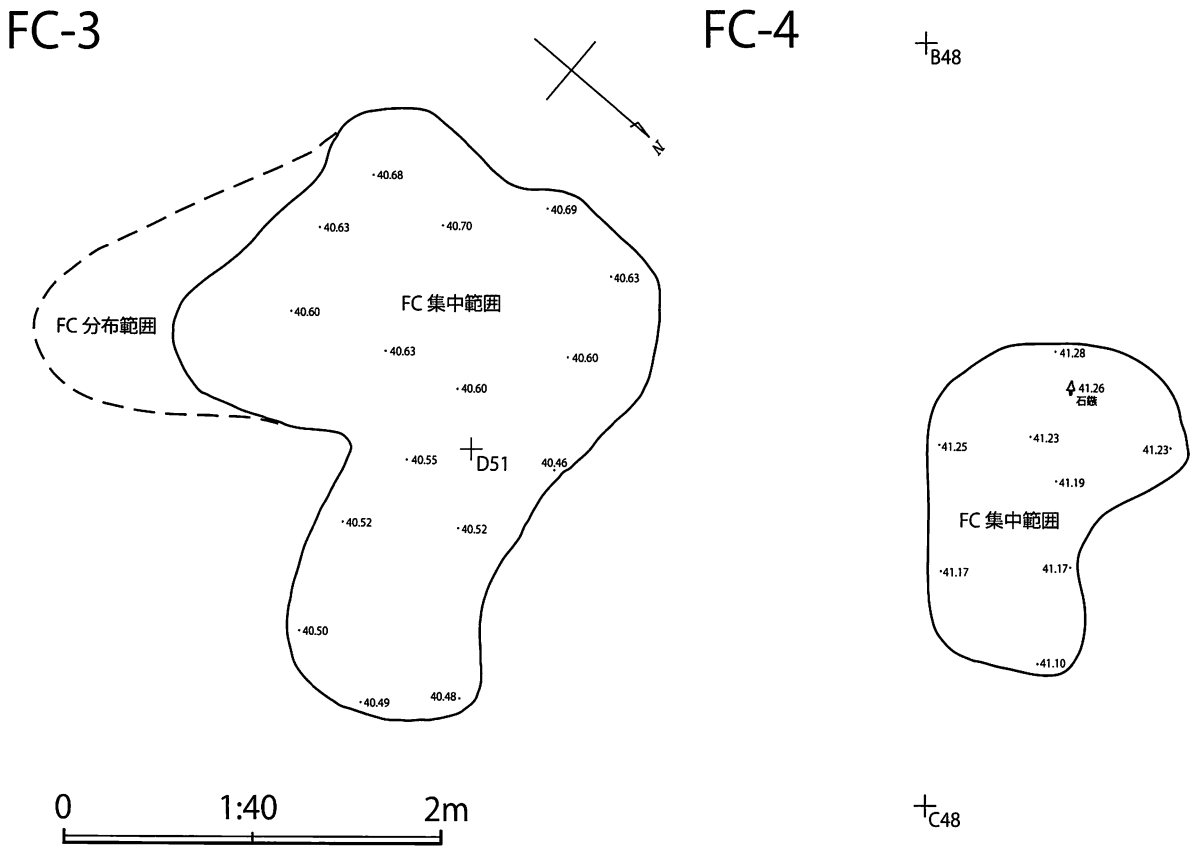
一枚平均0.25g

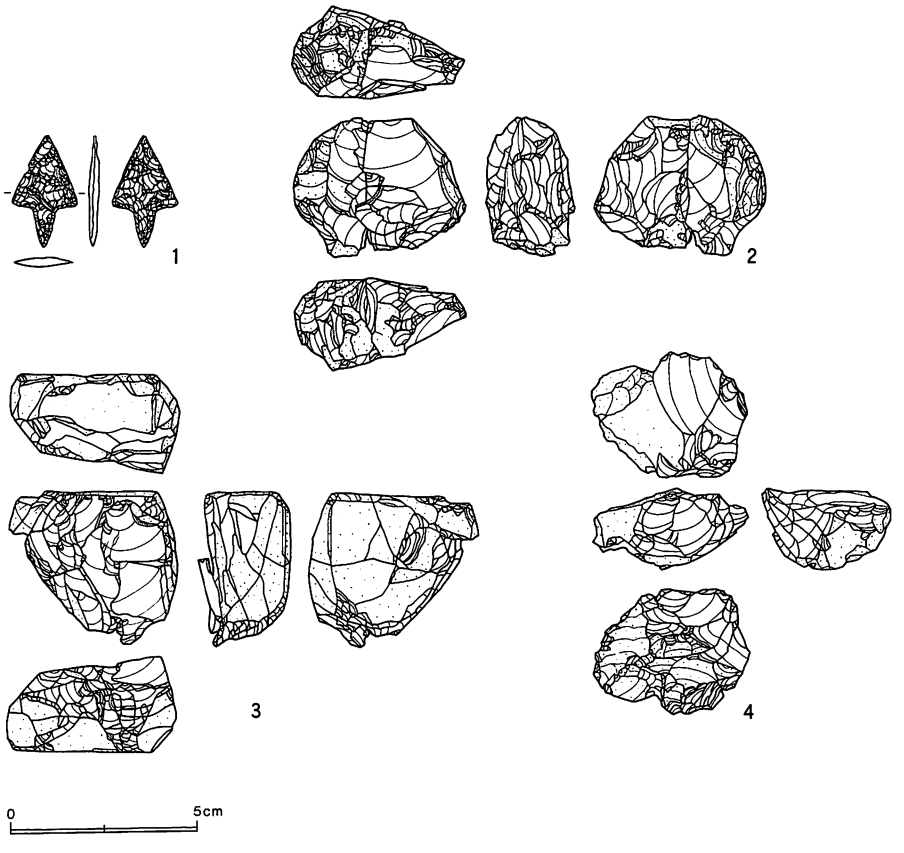
FC-4フレイクチップ関連遺物出土状況個数別内訳(個数)

調査区	採取日と5cm掘り込み回数(例702・1回目一7月2日に5cmの深さで1回掘り込んだ)	頁岩剥片2回目の3点は被熱	黒曜石剥片	黒曜石石核	黒曜石石核	メノウ剥片	合計
B48ab	715・1回目	3	581				584
B48ab	716・2回目	12	1117	1	6	2	1138
B48ab FC-5NO.10から	717・3回目		5				5
FC-4/B48ab合計		15	1703	1	6	2	1727

FC-4遺物(フレイクチップ以外)出土状況重量別内訳

調査区	採取日と5cm掘り込み回数(例702・1回目一7月2日に5cmの深さで1回掘り込んだ)	洗浄サンプル総重量(kg)	洗浄サンプル総体積(ℓ)	土器(g)(個)	炭化材(種子・殻)(g)	炭化材(幹・枝)(g)	炭化材合計
B48ab	715(1回目)	0.52	0.5		0.12	0.02	0.14
B48ab	716(2回目)	3	2.5	10	2.44		2.44
B48ab FC-5NO.10から	717(3回目)						
FC-4/B48ab合計		3.52	3.0	10.00	2.56	0.02	2.58





図Ⅳ－53　FC－３・４と出土の遺物

FC－5（図Ⅳ－54、表1、Ⅳ－4、図版28・50）

位　置　OZ49・50　の範囲で2か所に分かれる　　**立　地**　標高41.0～41.5m付近の緩斜面

規　模　5.86×2.40m　　内訳　：　OZ49；2.80×2.20m・OZ50；1.18×0.64m

骨含土（OZ49）；1.60×0.86m（全体の規模から外した）

特　徴　包含層調査中、Ⅳ層を5㎝の深さで1回掘り下げた段階で、黒曜石のフレイクチップが集中していた。土中から黒曜石をより分けながら掘りさげる事が困難な大きさのものが多かった部分について集中範囲として、土ごと取り上げて洗った。おおよそ2か所にまとまる。遺物出土量はグリッド別に示した。OZ49区は5㎝の深さで2回掘りさげた段階まで遺物が出土した（1回目の段階でこの調査区内のFC－5関連遺物の9割程度出土）。OZ50区は1回掘りさげた段階まで遺物を含んでいた。同一面の所産と判断し、現地ではFC－5としてまとまりで捉えた。

FC－5を構成する遺物は黒曜石の剥片が主体である。石器も含めた石材別の出土量は黒曜石で617点（100.54g）である。頁岩は26点（1.65g）、赤色珪化岩は1点（0.13g）である。総点数が644点（102.32g）と当調査区における他の剥片集中の中で最も多い出土量である。石鏃・両極技法を示す石核1点やそれに関連したUフレイク2点の出土といった、一個体の重量が0.5g以上のものを含むにもかかわらず一点あたりの重量平均が0.15gである。楔形石器1点、石核2点、異形石器（両面調整体）1点と、両極打法による石器製作を行っていた可能性があるが、総点数が少ない。FC－2～5の分布域が、ごくゆるい沢地形に沿っているため、出土位置について、埋没による上下移動のみならず水の影響による平面的移動も考慮すべきと考える。

大半（土壌の量は7.64kg）についてはフローテーション法で洗浄したため、炭化材0.28g、ウルシ属の炭化種子完形1点（0.01g）といった遺存体も検出した。またこの結果土器は砕片で4点出土した。砕片が多かったが後期前葉と判断した。

骨　含　土　包含層調査中、Ⅳ層を5㎝の深さで2回掘り下げた段階で、破砕された骨片が面的に広がっている状況を確認した。土中から骨片を完璧により分けながら掘りさげる事が困難であったため、分布範囲として、土ごと取り上げて洗った。目に見えて拾える骨片は自然乾燥後、取り上げた。微量分布としたのは、視覚的に骨片の存在が確認できた範囲である。その範囲内で特に破線で示した「比較的集中」の範囲については視覚的によりまとまっていた場所である。5㎝ずつ掘り下げたが、1回目でほぼ回収でき、2回掘り下げた段階においては微量確認できた。土壌についてはフローテーション法で処理した。土壌の量は49.5kgに及んだ。骨片が213点（11.57g）、クルミの殻0.09g、炭化材23.72gといった遺存体も検出した。骨は同定の結果、イノシシが4点（中手又は中足骨遠位端1点・中節骨近位端1点・中節骨1点・基節骨近位端1点）、イノシシまたはシカの種子骨1点、同定不可の哺乳類（イノシシ又はシカか）2点、陸獣骨片が167点、不明骨片が39点（魚骨なし）それぞれ確認されている。

またフローテーションの結果、頁岩剥片105点（2.92g）、黒曜石剥片21点（0.13g）、メノウ剥片10点（1.27g）を検出した。頁岩の個数が他の剥片集中並に多いが、重量からわかるようにごく微細なものの集合である。

他に、土器は砕片で69点出土した。砕片が多かったが後期前葉と判断した。一部には大津式とわかる磨消縄文の段階のものと思われる破片があった。OZ49区の包含層調査において、骨含土中から骨と同じ状況で出土した土器があった。これが図Ⅴ－1－6－14（OZ49・18）である。無紋地に沈線文を描くもので大津式の古い段階の可能性がある。表面は黒く発色する。また同一面と考えられる骨含土周辺の土器についても後期前葉のものであった。またフローテーションによって得られた炭化種実

表Ⅳ－4　FC－5遺物観察表

FC-5フレイクチップ関連遺物出土状況重量別内訳(g)

調査区	採取日と5cm掘り込み回数(例702・1回目→7月2日に5cmの深さで1回掘り込んだ)	頁岩剥片重量	赤色珪化岩剥片重量	黒曜石剥片重量	黒曜石異形石器重量	黒曜石石鏃重量	黒曜石くさび形石器重量	黒曜石石核重量	合計
0Z49bcd	716・1回目	1.65	0.13	78.2	3.09		7.64		90.71
0Z49bc　ベルト部	818・2回目			3.22				7.17	10.39
FC-5/0Z49bcd合計		1.65	0.13	81.42	3.09		7.64	7.17	101.10
OZ－50　bc	725・1回目			0.55		0.67			1.22
FC-5合計		1.65	0.13	81.97	3.09	0.67	7.64	7	102.32

一枚平均0.15g

FC-5フレイクチップ関連遺物出土状況個数別内訳(個数)

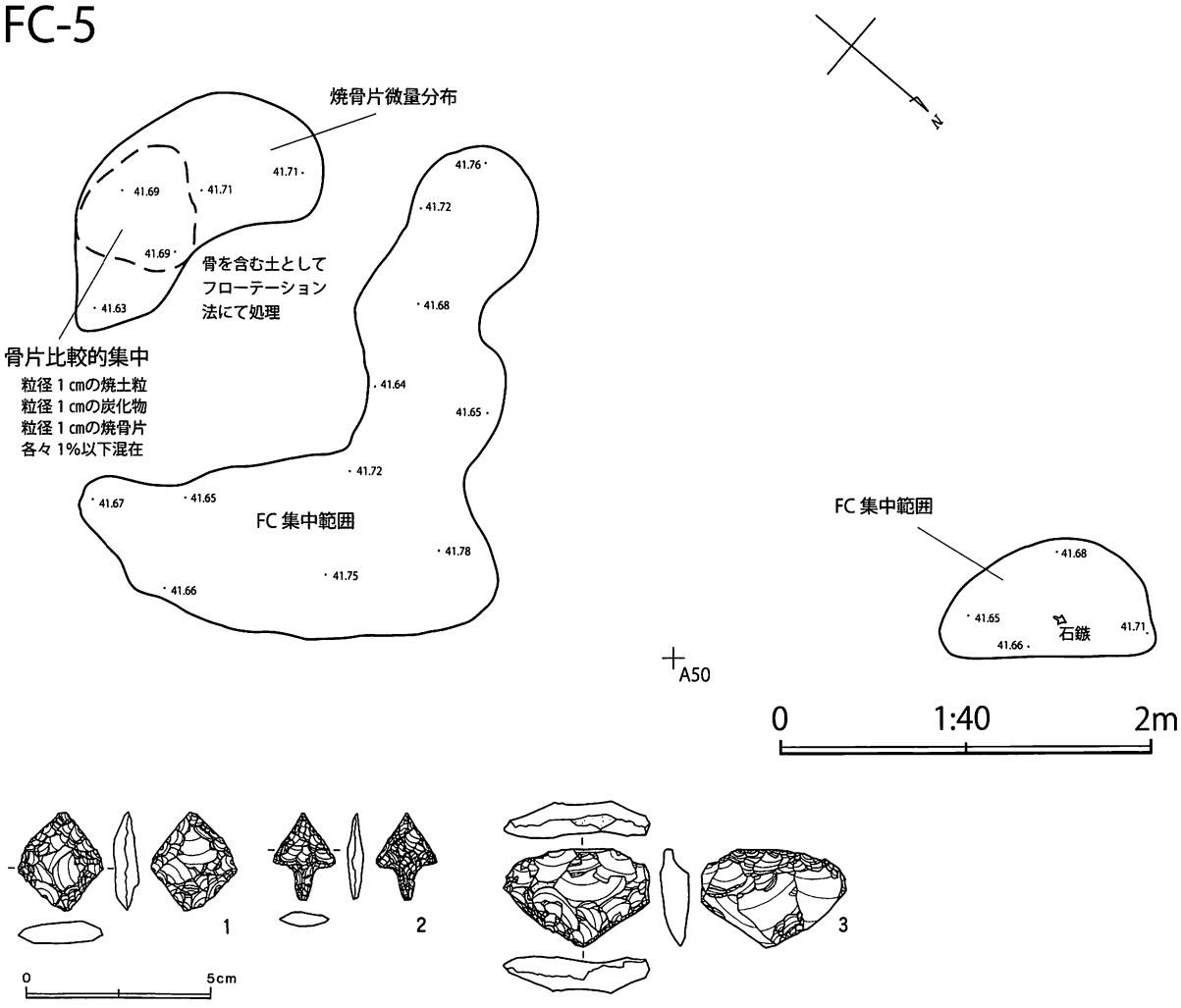
調査区	採取日と5cm掘り込み回数(例702・1回目→7月2日に5cmの深さで1回掘り込んだ)	頁岩剥片	赤色珪化岩剥片	黒曜石剥片	黒曜石異形石器	黒曜石石鏃	黒曜石くさび形石器	黒曜石石核	合計
0Z49bcd	716・1回目	26	1	607	1		1		636
0Z49bc　ベルト部	818・2回目			2				2	4
FC-5/0Z49bcd合計		26	1	609	1		1	2	640
OZ－50　bc	725・1回目			3		1			4
FC-5合計		26	1	612	1	1	1	2	644

FC-5遺物(フレイクチップ以外)出土状況重量別内訳

調査区	採取日と5cm掘り込み回数(例702・1回目→7月2日に5cmの深さで1回掘り込んだ)	洗浄サンプル総重量(kg)	洗浄サンプル総体積(ℓ)	土器(個数)	炭化材(軽)(g)	炭化種子(g)	炭化種子(右記の個数)
0Z49bcd	716・1回目	7.64	8.5	4	0.28	0.01	1
0Z49bc　ベルト部	818・2回目						
FC-5/0Z49bcd合計		7.64	8.5	4	0.28	0.01	1
OZ－50　bc	725・1回目						
FC-5合計		7.64	8.5	4	0.28	0.01	1

骨含土フローテーション結果(FC-5に関連)

調査区と種別	採取日(8～11・39・40)807(28)808	洗浄サンプル総重量(kg)	洗浄サンプル総体積(ℓ)	土器(個数)	頁岩剥片(個数)	頁岩剥片重量(g)	黒曜石剥片(個数)	黒曜石剥片重量(g)	メノウ剥片(個数)	メノウ剥片重量(g)	骨片(個数)	骨片(g)	炭化材(軽)(g)	炭化材(重)(g)	炭化材合計(g)	クルミ(g)	備考
0Z49骨含土	807(1回目)・808(2回目)の合計・・垂直分布を反映していなかったため合計した	49.5	57	69	105	2.92	21	0.13	10	1.27	213	11.57	16	8	23.72	0.09	クルミは全て年代測定



図Ⅳ－54　FC－５と出土の遺物

（クルミ）について放射性炭素年代測定（AMSによる）を行ったところ3526±24yr.B.P（PLD12082）の測定値が得られた。

時　期　フローテーション成果から縄文時代後期前葉の時期またはそれ以降の可能性がある。骨含土もFC－５によく類似した出土状況であった。ただし調査状況とフローテーション成果から縄文時代後期前葉でも、特に大津式の時期またはそれ以降の可能性がある。またこれは放射性炭素年代測定によって得られた結果と矛盾しない。ただし、付記すると、周辺の包含層出土土器に関して、後期中葉のものが散見される場所でもある。（大泰司）

遺　物　石器：１・２は、黒曜石製石鏃。１は、菱形を呈する。石鏃未成品かと考えられるが、あるいは異形石器とした方がよいのかもしれない。２は、有茎平基。先端部は正三角形に近い。入念な調整剥離で精緻に作られている。３は、黒曜石製楔形石器。不整な三角形を呈するが、各辺からの打撃で階段状剥離が見られる。一部調整剥離も見られることから、両極剥離後、石鏃などに整形しようとしていたのかもしれない。（福井）

小括に代えて― FC－２～FC－５までの接合結果 ―

A地区包含層出土黒曜石とFC－２～５までの資料について接合を試みた。いずれも赤井川産と思われる、小顆粒が平行線状に並ぶもので、拳の半分以下の円礫～亜円礫～亜角礫を母岩としている。以下接合結果を示す。

・FC－５とFC－３と接合１点。剥片剥離による。
・FC－５の中での接合１点。剥片剥離による。
・FC－５とFC－２（A49区bc）と接合１点。FC－２の中で折れ接合したものが剥片剥離による接合。
・FC－２（A49区bc）の中での接合１点。折れ接合。
・FC－２（B50区ab）の中での接合２点。折れ接合。
・FC－２（B50区ab）とFC－４との接合２点。２点とも剥片剥離によるもの。
・FC－４の中での接合11点。両極技法に起因すると思われる資料が６点。剥片剥離接合が５点。
・FC－４とA46区との接合。両極技法に起因すると思われる資料。

上記の結果が出た。これらを理解するため、対比が必要となった。そこでA地区において、特徴的な石材である、メノウ・赤色珪化岩・珪化岩の接合を試みた。赤色珪岩についてはFC－２～５と同様の出土状況であり、時期は同一時期の可能性を持つ。

メノウ：調整面を確保後、すえて120度の角度で打ち割った可能性がある。OZ49区とA47区で剥片剥離、B47区とB48区で剥片剥離、OZ48区とA48区、B48区で石核が折れ接合した。

赤色珪化岩：器種としては石鏃の出土がある。同一母岩の可能性がある接合資料は５点あり、うち４点は剥離痕か折損か判別がつかなかった。これは両極技法の結果によるものと考える。接合資料はOZ48区を中心に分布する。OZ48区の中に２点、OZ48とOZ49区の接合が１点、OZ47とOZ48区の接合が２点、という内訳である。残りのOZ47～49間で接合した資料は両極技法の後、剥片剥離を行っているものと考える。これについては掌に持ったまま岩に叩きつけたような印象を受けたが、両極技法と解釈した。その内容はOZ47区とOZ48区で両極技法による資料の接合が１点あり、これに対してOZ48とOZ49区間で剥片剥離接合したものが４点、接合したものである。

珪化岩：未接合資料中にはパンチ痕が明瞭に残るものが目立つ。打面の転移が見られる資料が多い。22点接合し、剥片剥離による接合が主体である。C38区・D40・41区を中心に分布する。B・C38区間で接合したものは１点、C38区内で接合したもの９点、C38区・D40・41区間で接合したもの１点、C38区・F38区間で接合したもの１点、C39・D41区間で接合したもの１点、D40区内で接合したもの２点、D40・41区間で接合したもの６点、F39区内で接合したもの１点である。

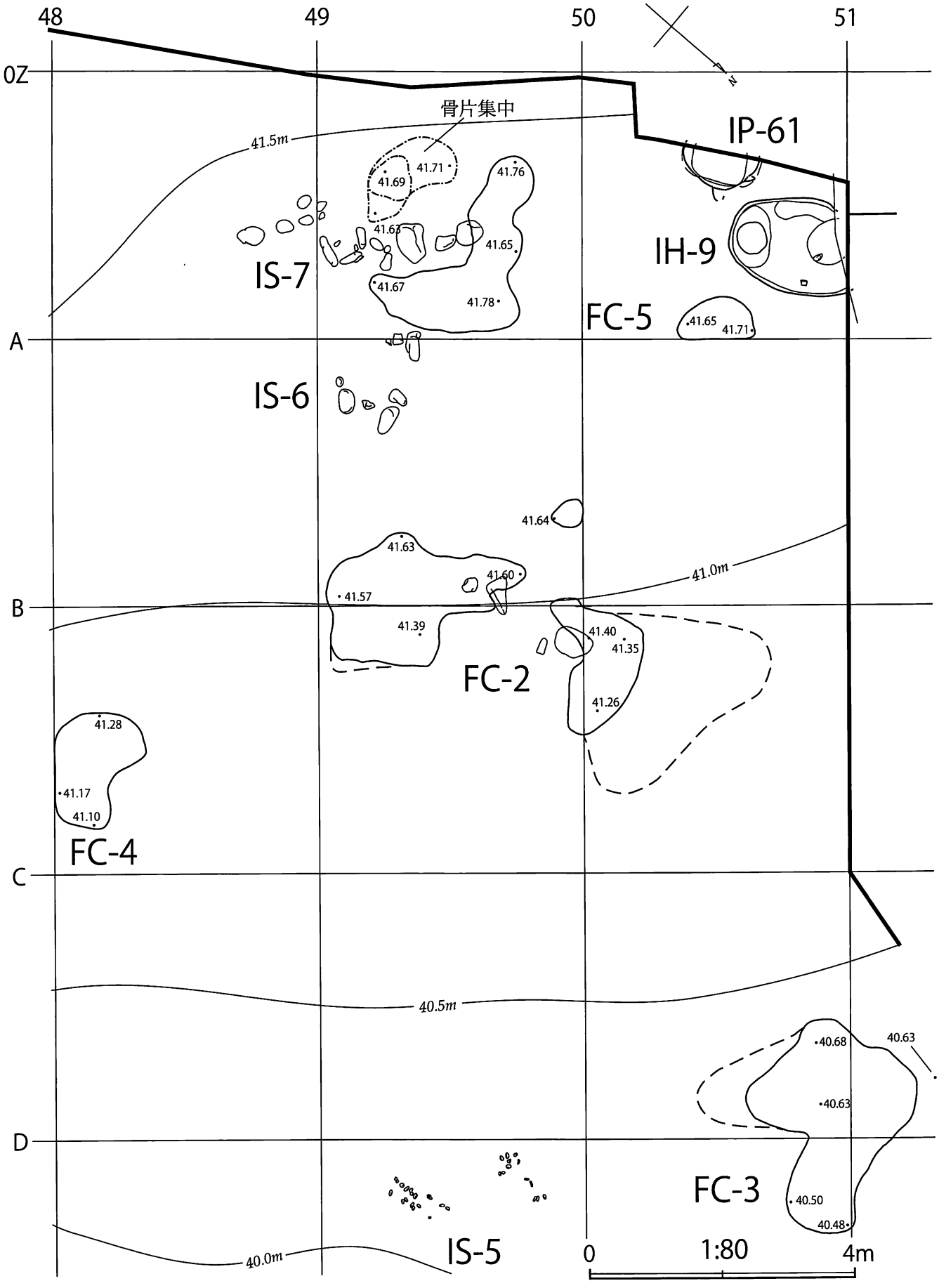
若干の考察：赤色珪化岩が丁度黒曜石と同じ大きさの母岩を材料にしており、この大きさで剥片石器素材と成りうる岩石については、両極技法により石鏃を作出するようである。自然・人為の差異は不明だが、同一母岩と考えられる石材のちらばる状況を見るならば、剥片石器素材となるメノウ・珪化岩と比べ、黒曜石が特別違った距離で接合された訳では無い事が分かる。黒曜石の接合状況は、両極技法に起因する石核を多く産出したFC－４において顕著であった。　（大泰司）

表Ⅳ－5　石器接合表

石器接合関係、(7)はフローテーション結果から抽出
A地区の剥片・剥片石器(包含層出土・FC-2～5そして骨片集中から出土)を接合、比較検討した
素材としては黒曜石が主体であった
FC-5周辺に赤色珪化岩のフレイクチップが集中
メノウ素材については産地がそばにあると考えられた

接合認識	石質	分類・器種	調査区	遺構		接合関係			備考
1	黒曜石	両面調整石器	N74-39		剥離				実測遺物・白滝産赤色
		Rフレイク	O78-18						
2	メノウ	Rフレイク	A47-2		剥離				
		フレイク	OZ49-6						
3	メノウ	フレイク	B47-9		剥離				小さい方
		フレイク	B48-21						大きい方
4	メノウ	石核	B48-29		折れ				
		石核	OZ48-18						
		フレイク	A48-42						
5	赤色珪岩	フレイク	OZ48-14		剥離・折れ				両極技法に関連か
		フレイク	OZ49-44						
6	赤色珪岩	フレイク	OZ47-16？		剥離・折れ				両極技法に関連か
		フレイク	OZ48-19						
7	赤色珪岩	フレイク	OZ48-14		剥離・折れ				両極技法に関連か
		フレイク	OZ48-42						
8	赤色珪岩	フレイク	OZ48-14		剥離・折れ				両極技法に関連か
		フレイク	OZ47-3						
9	赤色珪岩	フレイク	OZ48-14		剥離・折れ				両極技法に関連か
		フレイク	OZ48-7						
10	赤色珪岩	フレイク	OZ47-16		剥離・折れ				両極技法に関連か
		フレイク	OZ48-14			剥離			
		フレイク	OZ48-14		剥離		剥離		
		フレイク	OZ49-52			剥離			
		フレイク	OZ48-7						
11	珪化岩	石核	C38-2		剥離				
		フレイク	B38-1						
12	珪化岩	石核	C38-2		剥離				
		フレイク	C38-2			剥離			
		フレイク	C38-2						
13	珪化岩	石核	C38-2		剥離				
		フレイク	C38-2						
14	珪化岩	フレイク	D40-2		剥離				
		フレイク	D40-2				剥離		
		フレイク	D40-2			剥離			
		フレイク	D41-6		剥離				
		フレイク	D40-2						
15	珪化岩	フレイク	C38-2		剥離				
		フレイク	C38-2						
16	珪化岩	フレイク	C38-2		剥離				
		フレイク	F39-5						
17	珪化岩	フレイク	D41-6		剥離				
		フレイク	C39-3						
18	珪化岩	フレイク	C38-2		剥離				
		フレイク	C38-2						
19	珪化岩	フレイク	D41-6			剥離			
		フレイク	D40-2		折れ				
		フレイク	D40-2			剥離			
		フレイク	D40-2						
20	珪化岩	フレイク	C38-2		折れ				
		フレイク	C38-2			折れ			
		フレイク	C38-2		剥離				
		フレイク	C38-2						
21	珪化岩	フレイク	D40-2		折れ				
		フレイク	D41-5			剥離	剥離	剥離	
		フレイク	D41-6						
		フレイク	D40-2						
		フレイク	D40-2						
		フレイク	D40-2						
22	珪化岩	石核	C38-2		剥離				
		フレイク	C38-2						
23	珪化岩	フレイク	D41-6		剥離				
		フレイク	D40-2						
24	珪化岩	フレイク	D40-2		剥離				
		フレイク	D40-2						
25	珪化岩	フレイク	D40-2		折れ				
		フレイク	D40-2			剥離			
		フレイク	D40-2				剥離		
		フレイク	D40-2						
26	珪化岩	フレイク	C38-2		剥離				
		フレイク	C38-2						
27	珪化岩	フレイク	C38-2		剥離	剥離			
		フレイク	C38-2						
		フレイク	C38-2				剥離		
		フレイク	C38-2						

接合認識	石質	分類・器種	調査区	遺構	接合関係			備考
28	珪化岩	フレイク	F39-5					
		フレイク	F39-5		剥離	剥離		
		フレイク	F39-5					
29	珪化岩	フレイク	D41-6		折れ			
		フレイク	D40-2			折れ	剥離	
		フレイク	D41-6					
		フレイク	D40-2					
30	珪化岩	フレイク	C38-2		剥離			
		フレイク	C38-2					
31	珪化岩	フレイク	D41-6		折れ			
		フレイク	D40-2			剥離		
		フレイク	C38-2		剥離・折れ			
		フレイク	D41-6					
32	珪化岩	フレイク	D41-6		折れ			
		フレイク	D41-6			剥離		
		フレイク	D40-2					
33	黒曜石	フレイク	B48ab	FC-4-5	剥離	剥離・折れ		
		フレイク	B48ab	FC-4-5				
		フレイク	B48ab	FC-4-5			折れ	
		フレイク	B48ab	FC-4-5				剥離・折れ
		フレイク	B48ab	FC-4-5				
34	黒曜石	フレイク	B50ab	FC-2-12	剥離			
		フレイク	B50b	FC-2-9				
35	黒曜石	フレイク	B48ab	FC-4-5				折れ
		フレイク	B48ab	FC-4-5				
		フレイク	B48ab	FC-4-5		剥離	剥離	
		フレイク	B48ab	FC-4-5	剥離			
		フレイク	B48ab	FC-4-5				
36	黒曜石	フレイク	A49bc	FC-2-1	折れ			
		フレイク	A49bc	FC-2-2				
37	黒曜石	フレイク	B48ab	FC-4-4				両極技法に関連 図Ⅳ－53－2
		石核	B48ab	FC-4-4	剥離・折れ	剥離		
		石核	B48ab	FC-4-4				
38	黒曜石	石核	B48ab	FC-4-5	剥離・折れ（略）			両極技法に関連 図Ⅳ－53－4
		フレイク	B48ab	FC-4-5				
		フレイク	B48ab	FC-4-5				
		フレイク	B48ab	FC-4-5				
		フレイク	A46-1					
		フレイク	B48ab	FC-4-5				
		フレイク	B48ab	FC-4-78(フ)				
39	黒曜石	フレイク	B48ab	FC-4-5	剥離（略）			打面の転移もあるが、両極技法に関連 図Ⅳ－53－3
		フレイク	B48ab	FC-4-5				
		フレイク	B48ab	FC-4-5				
		フレイク	B48ab	FC-4-5				
		フレイク	B48ab	FC-4-5				
		フレイク	B48ab	FC-4-5				
		フレイク	B48ab	FC-4-6				
40	黒曜石	フレイク	B48ab	FC-4-1	剥離			
		フレイク	B48ab	FC-4-5				
41	黒曜石	フレイク	OZ49bc	FC-5-5	剥離			
		フレイク	OZ49bc	FC-5-5				
42	黒曜石	フレイク	B48ab	FC-4-5	剥離			
		フレイク	B48ab	FC-4-5				
43	黒曜石	フレイク	B48ab	FC-4-4		剥離		両極技法に関連
		フレイク	B48ab	FC-4-4	剥離			
		フレイク	B48ab	FC-4-4				
44	黒曜石	フレイク	C51b	FC-3-6	剥離			
		フレイク	OZ49bc	FC-5-4				
45	黒曜石	フレイク	B50ab	FC-2-12	剥離			
		フレイク	B48ab	FC-4-5				
46	黒曜石	フレイク	B50ab	FC-2-12	折れ			
		フレイク	B50ab	FC-2-21～23(フ)				
47	黒曜石	フレイク	B48ab	FC-4-5	折れ			
		フレイク	B48ab	FC-4-5				
48	黒曜石	フレイク	B48ab	FC-4-1	剥離・折れ			両極技法に関連か
		フレイク	B48ab	FC-4-79(フ)				
49	黒曜石	フレイク	OZ49bc	FC-5-5		剥離		両極技法に関連
		フレイク	A49bc	FC-2-1	折れ			
		フレイク	A49bc	FC-2-1				
50	黒曜石	フレイク	B48ab	FC-4-5	折れ			両極技法に関連
		フレイク	B48ab	FC-4-78(フ)		剥離		
		フレイク	B50ab	FC-2-12			剥離	
		フレイク	B48ab	FC-4-5-1				
51	黒曜石	フレイク	B48ab	FC-4-1	剥離			
		フレイク	B48ab	FC-4-5				
52	黒曜石	フレイク	B48ab	FC-4-79(フ)	剥離・折れ			両極技法に関連
		フレイク	B48ab	FC-4-5-1		剥離・折れ		
		フレイク	B48ab	FC-4-5-4	剥離・折れ			
		フレイク	B48ab	FC-4-5-1				



図Ⅳ－55　IS－５～７、FC－２～５の位置

6　焼　土

IF－1（図Ⅳ－56、表1、図版23・51）

位　置　I・J31　　**立　地**　標高35.0～35.5m付近の緩斜面　　**規　模**　0.74×0.54×0.14m

特　徴　I31区のⅣ層中位において橙色土の分布を検出した。橙色土は検出面より下にいくにつれて広がっており、4cm下げた段階で最大となる。断面は凸レンズ状をしていた。この状況から、焼成を受けた面は検出面よりやや下の可能性もある。平面形は不整な楕円形をしていた。断面では2層とした黒褐色の根によるものと想定される入り込みが所々観察できたが、平面観でははっきりとした境界はなかった。焼土の下の土層断面が乱れており、自然の攪乱による凹みに酸化した鉄分やマンガンがたまった結果の土色変化とも考えたが、橙色が明瞭であるため記録した。採取した橙色土をフローテーション法によって処理した結果、炭化したオニグルミ破片2点と炭化材を回収できたため焼土の可能性があると判断するに至った。IF－1検出面と同レベルで後期前葉の土器が出土しているが胴下部の小破片（縄文と無紋部の境目）であり、型式判断までは至らなかった。またJ31区にⅣ群a類土器の84点のまとまり（遺物番号10）があり、IF－1検出面より上のレベルに位置していた（うち70点は図Ⅴ－1－16－71）。

時　期　不明である。周辺の出土遺物は中期前半Ⅲ群a類土器が1点出土した以外はほとんどが後期前葉Ⅳ群a類土器である。しかし隣接するJ30区から北海道式石冠の出土などもあり、根拠とするには至らなかった。（大泰司）

遺　物　**土器**：1は縄文の施されたⅣ群a類の胴部破片。（遠藤）

IF－2（図Ⅳ－56、表1、図版23）

位　置　N・O75　　**立　地**　標高41.8m前後の緩斜面　　**規　模**　0.62×0.58/0.10m

特　徴　O75区周辺において、攪乱層を除去していたところ、明瞭な焼土が検出された。やや不明瞭な褐色土の落ち込みを伴うように観察されたことから、土坑を想定して焼土を超える範囲にトレンチを設定して掘り下げた。その結果、落ち込みはⅤ層で、Ⅴ層が明瞭に焼成する断面を確認した。焼成面が遺物出土層位よりやや下であることに加え、周囲でSP－2～6が検出されたことから、これらを柱穴とした住居に伴う焼土であった可能性もある。

時　期　不明であるが、周囲の遺物出土状況から、縄文時代後期前葉もしくは中期前半のものとみられる。（立田）

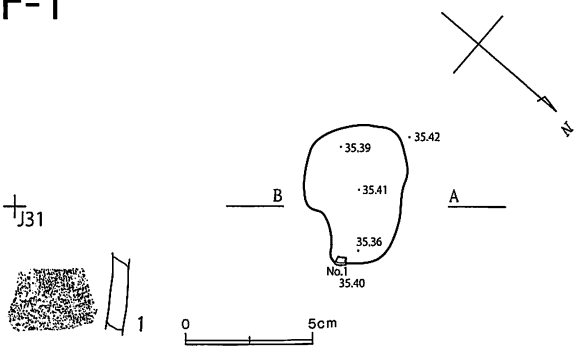
IF－3（図Ⅳ－56、表1、図版23）

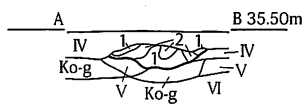
位　置　K73　　**立　地**　標高43.0m前後の沢に面した斜面　　**規　模**　0.94×0.32/0.06m

特　徴　Ⅳ層を調査中に検出された、明瞭な焼土である。焼土を残して周囲をⅤ層まで掘り下げ、下位に遺構がないことを確認したのち、記録を作成した。

時　期　不明であるが、検出された層位から、縄文時代後期以降である可能性が高い。（立田）

IF-1





IF-1 土層

木根攪乱IV層を主体とする（濁川ローム粒径３～５cmのブロック状に１%混じる）

1 7.5YR6/8 橙色土　IV層が焼けたものか　やや粘質を帯びる

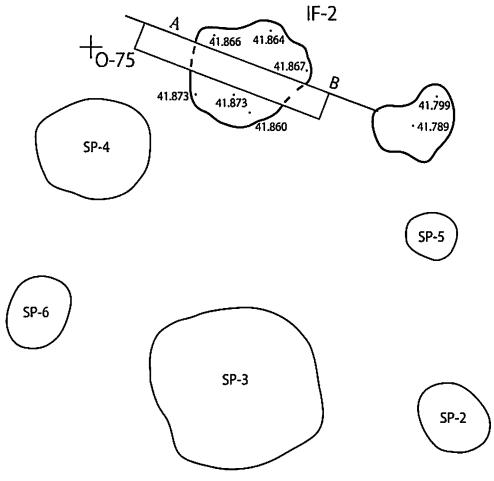
2 2.5YR3/2　黒褐色土　しまりなし

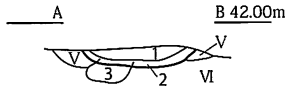
IV層 7.5YR2/2　褐色土　粒径 2cm のパミス混じる

V層 7.5YR5/8　明褐色土

Ko-g 5YR4/8　赤褐色土　　酸化した鉄分多く混じる

IF-2





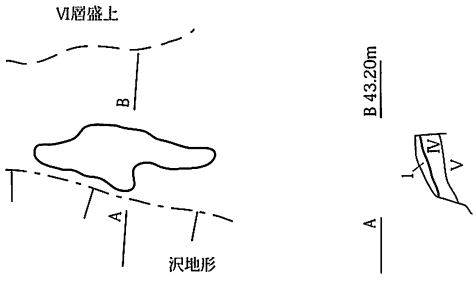
IF-2 土層

1　5YR5/8　明赤褐色土　粘性なし　しまりあり
　骨片、炭化物若干混じる。

2　7.5YR4/3　褐色土　粘性なし　しまりあり
　硬い　パミス若干混じる。

3　10YR4/2　灰黄褐色土　粘性なし　しまりあり
　炭化物少量混じる。

IF-3



IF-3 土層

1　5YR5/8　明赤褐色土　やや粘性あり
　しまりなし　上面に炭化材、層界漸変

L74

0　1:40　2m

図Ⅳ－56　IF－１～３と出土の遺物

7　集　石

IS－4（図Ⅳ－57、表1、図版28・51）

位　置　O78　　**立　地**　標高42.4m付近の緩斜面　　**規　模**　0.67×0.65m

特　徴　Ⅳ層下半を掘り下げていると、計7点の礫からなる方形の石囲い炉を検出した。石囲いの内側には明瞭な焼土は認められなかったが、炭化材片が散在していた。礫は安山岩で被熱しており、大きさは35～45cm大のものと、20cm前後のものであった。7点の礫のうち、北側の1点、西側の2点が台石の転用であった。この石囲い炉について、住居の炉跡の可能性を考えて、周囲を精査したが、西側に大きな風倒木痕があり、確認出来なかった。隣接して、縄文時代後期前葉の土器が一個体分出土した。

時　期　周囲の出土遺物から、縄文時代後期前葉の時期と考えられる。　（福井）

遺　物　土器：いずれもⅣ群a類土器である。1は口縁部から胴部までの2分の1ほどが残存する。周辺の包含層（O78区）出土の破片と接合した。口縁は大きく波打ち、4か所に緩やかな波頂部がありこの部分をわずか肥厚させ指頭でくぼませている。口唇直下から口唇上内面にかけて、ヘラ状工具で横位に調整がされ平滑になっている。口縁部の比較的広い範囲が無文で、胴部に太いLR原体による斜行、横走縄文が施されている。胎土に白色の細粒岩片が多量に混じる。2a・bは同一個体。O78区出土の破片が接合している。2bは石囲い炉の横から出土した。口縁部の複数か所に小さな2山で一対の波頂部がある。口唇直下のごく狭い範囲が無文で、胴部上半には太いL原体による横走縄文が施されている。施文後ヘラ状具で調整している。下半部は無文であろう。胎土に2mm前後の小砂利が混じる。3、4はいずれも底部の破片。　（遠藤）

IS－5（図Ⅳ－58、表1・Ⅳ－6、図版28・51）

位　置　D49　　**立　地**　標高40.5～41.0m付近の緩斜面

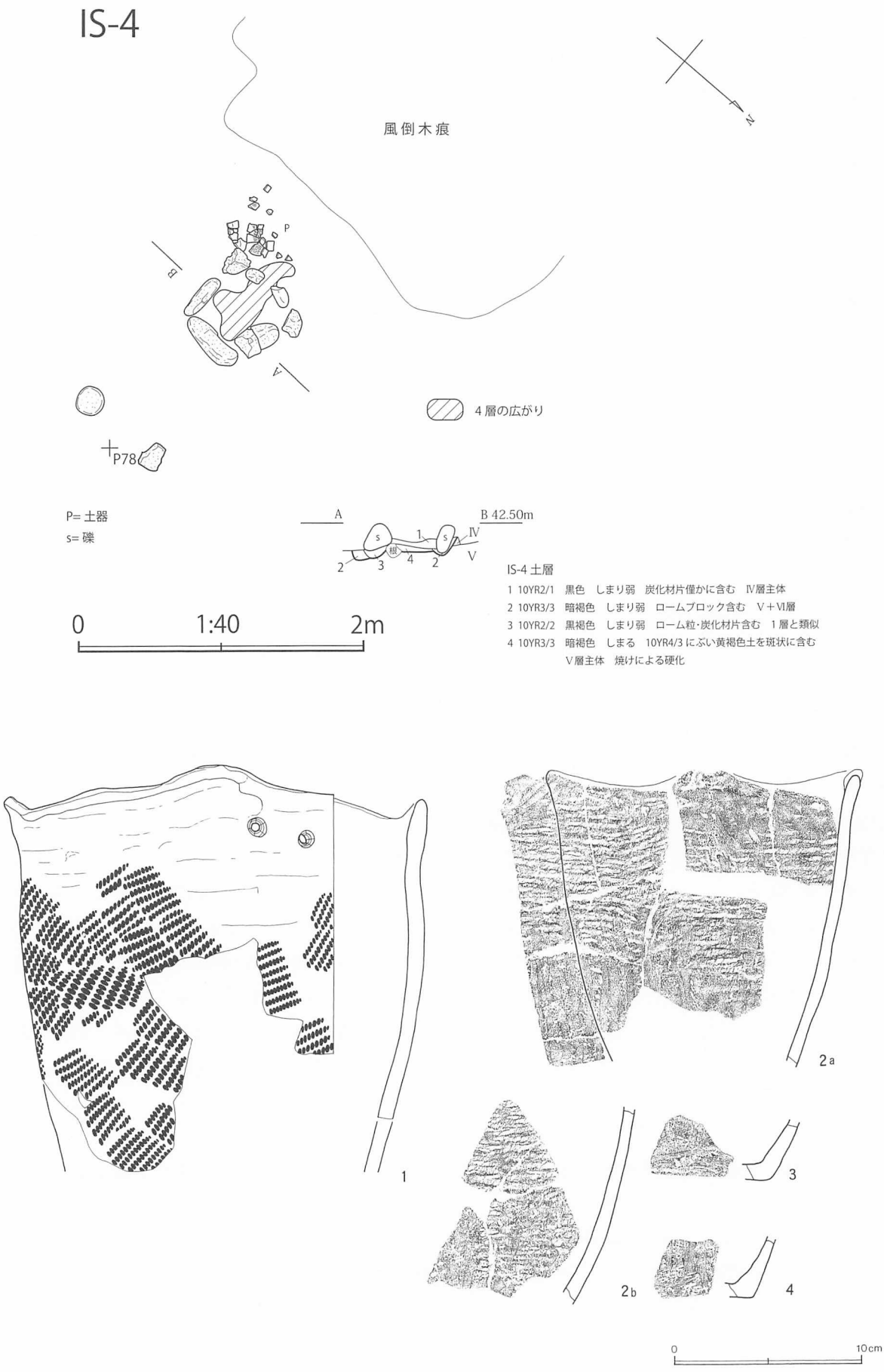
規　模　2.40×1.00×0.26m（全体）　0.96×0.28×0.26m（1～19）　0.94×0.34×0.28m（20～32）

特　徴　表土除去後、包含層を面的に5cm掘り下げたところ、長軸が10cmに満たない小型で棒状に近い長楕円礫がまとまって出土した。さらに5cm掘りさげると分布が顕著となった。錘の集中出土のような状況を想定して記録した。この規格の礫は遺物が比較的集中していた0Y～G43～52区について数点のまとまりが認められた。しかし顕著な集中として捉えられたのはこのIS－5のみであった。分布は大きく二つのまとまりに分かれる。1～19（数字は遺物番号。図Ⅳ－58遺構図参照）と20～32である。不整な分布であるが、いずれもおおよそ南－北方向に1m弱の長軸を持ち、幅が30cm前後の幅を持つ。垂直分布はいずれも26cm程だが、これは埋没中に諸影響を受けることから意義付けは難しかった。

1・2・11・15・25は土器である。いずれも後期前葉Ⅳ群a類土器である。1は無紋地に幅広の沈線によって磨消縄文が施されている。大津式と考える。H46区から出土した2点と接合している。2・11・15・25は縄文地文のみあるいは胴下半部の無紋の小破片であり、型式名まではわからない。11と15は接合した。

分析の結果、長楕円礫を標準とすると21～27については不整な形状のものおよび土器が混じっている。そのため20～32の集中の南側半分についての意義が判然としなくなった。1～19については土器片が混じっているものの大きな意義の変更は考えられなかった。

礫選択の際の標準規格を求める試みの為、遺物を観察した。そして、礫破片（22）、折損（3・24）、長軸6cmに満たない小礫（27）、不整な形状の礫（21・22・25・26）を除いて視覚的に長楕円礫と認知できるものを計測、平均値を出した。結果、重さ106.0g、長軸長77.2mm、幅41.3mm、厚さ22.7mmという平均値が得られた。ちなみにすべての礫の平均値を出したところ、重さ101.4g、長軸長71.4mm、幅



図Ⅳ－57 IS－4と出土の遺物

40.9㎜、厚さ21.5㎜であった。重さと長軸長以外はさほど変わらない。値を比べてみると抽出前でも抽出後でも重さのばらつきが激しい。また長軸長に変化があるのは折損品および小型礫を含んでいるかいないかの違いであろう。

石質については安山岩が27点中16点である。細かい内訳としては安山岩のうち角閃石安山岩としたものが２点（26と30)、輝石安山岩としたものが３点（17・19・31)、細別しなかったものが17点（４・５・６・７・８・９・10・12・13・14・16・18・20・21・23・28・32）である。凝灰岩が２点(24・29)、泥岩２点（３・27)、無斑晶質玄武岩１点（22）となった。このうち凝灰岩の24、角閃石安山岩の26、安山岩の21は礫選択の際の標準規格を求める試みの際はじいたものである。安山岩に礫選択時の要素がある可能性があった。そこで試みに細別しなかった安山岩、角閃石安山岩、輝石安山岩のうち先にはじいたものをはずして、さらに作為的な平均値を求めてみたところ107.3ｇ・長軸長76.9㎜・幅41.6㎜・厚さ22.6㎜であった。重量について、標準的な規格を求めようとすればするほど重くなるのは長軸の規格がそろうためであろう。値でみるとやはりばらつきが大きい。おおよそ「長軸長×幅×厚さ」が「7.5×4×2.5㎝前後」の石で、100ｇ前後の重さがあれば用が足りた可能性がある。以上の計測結果によるとむしろ礫選択の際には重さより大きさ（形）のほうに意味があったと考える。用途は不明である。

時　期　出土状況から、縄文時代後期前葉と思われる。　（大泰司）

遺　物　土器：いずれもⅣ群a類である。１（遺物番号１）は無文地に沈線で「乙字文」が描かれている。大津式に相当する。２（遺物番号11と15が接合）と３（遺物番号25）は同一個体であろう。LR原体による縄文が浅く施文されている。　（遠藤）

IS－６（図Ⅳ－59・61、表１、Ⅳ－７、図版28・29・51・110）

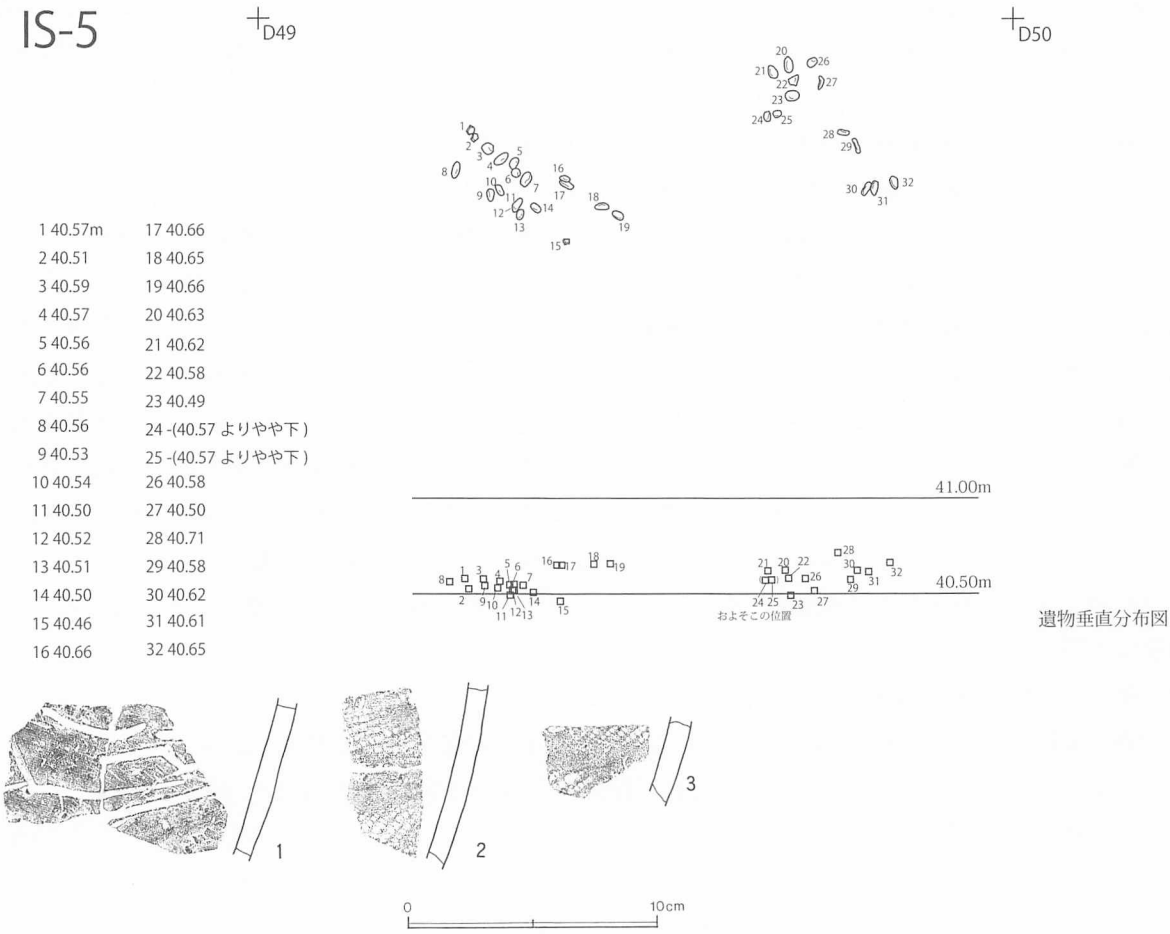
位　置　A49　　**立　地**　標高41.0～41.5ｍ付近の緩斜面　　**規　模**　1.62×1.10ｍ

特　徴　表土除去後、OZ～B48・49区において大型の礫が目立って出土した（図Ⅳ－59)。包含層を５㎝ずつ面的に掘り下げたところ、一見「弧」を描く配列を想定した。IS－６はこのような人頭大以上の大型礫による配列を想定して、遺構番号をつけた。

しかし周囲を面的に掘り下げていくうちに、それぞれの標高およびⅣ層中での位置がまちまちなことが判明した。また、この緩斜面について包含層を全面的に掘り下げた結果、Ⅵ層より下位の礫層中に含まれる大型礫が、Ⅵ層中に散見的に上がっている状況を確認した。これは自然の営力によるものであると判断した。そこで、OZ～B48・49区の礫すべてを配石と判断することは不可能となった。そこで比較的まとまっておりⅣ層中の位置もほぼ同一と考えられたA49区の礫をIS－６として記録した。人為的な作為があるかどうかは不明であるが、周辺のⅣ群a類土器（土器集中８）と黒曜石フレイクチップの出土状況（FC－５）から、これらと同時期に存在した可能性が高いとしたものである。石の配置からは定型的な配列を指摘することは難しい。

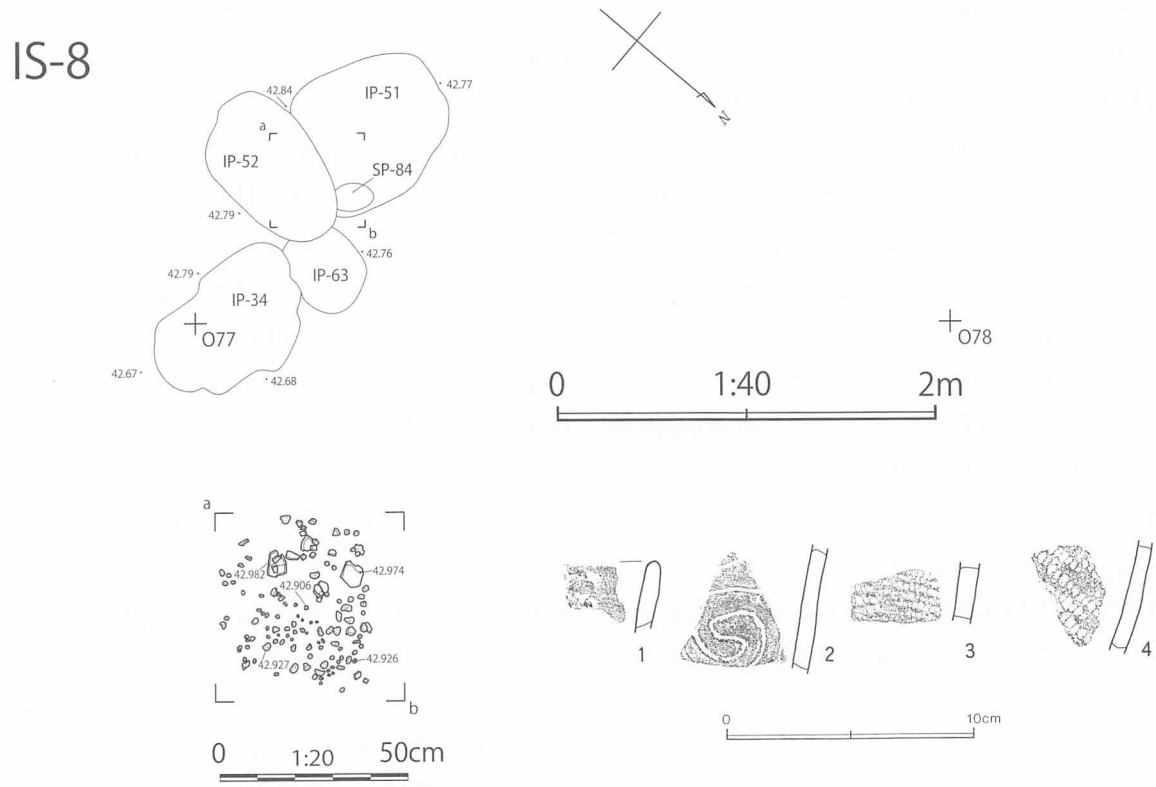
礫が設置されたとしたら、Ⅳ層中位から上位にかけての頃である。標高的には丁度礫４の中腹あたりにFC－５が分布している。

周辺出土の土器を観察したところ、涌元式併行と考えられる土器、トリサキ式土器、大津式土器、白坂３式土器、手稲式土器が観察できた。後期前葉から中葉にかけて連綿と人の営みが続いていた可能性が高い。トリサキ式については破砕片が目立ち、大津式そして手稲式と型式が新しくなるにつれて視覚的に破片の破砕度合いが顕著になっていく。そのため、後期前葉の古い段階の配石が大津式・白坂３式段階で乱され、かつ手稲式段階でもさらに乱された可能性などを模索した。しかし、OZ～



1 40.57m	17 40.66
2 40.51	18 40.65
3 40.59	19 40.66
4 40.57	20 40.63
5 40.56	21 40.62
6 40.56	22 40.58
7 40.55	23 40.49
8 40.56	24 -(40.57 よりやや下)
9 40.53	25 -(40.57 よりやや下)
10 40.54	26 40.58
11 40.50	27 40.50
12 40.52	28 40.71
13 40.51	29 40.58
14 40.50	30 40.62
15 40.46	31 40.61
16 40.66	32 40.65

遺物垂直分布図



図Ⅳ－58　IS－５・８と出土の遺物

表Ⅳ－6　IS－5遺物観察表

No.1・2・11・15・25は土器

No.	遺物名	分類	層位	点数	重さ	長さ	幅	厚さ	材質	備考
No.3	礫	礫	Ⅳ	1	34.2	(46.9)	53.8	13.7	泥岩	長軸折損
No.4	礫	礫	Ⅳ	1	158.8	83.2	39.2	34.2	安山岩	長楕円礫
No.5	礫	礫	Ⅳ	1	89.9	66.6	37.7	25.0	安山岩	長楕円礫
No.6	礫	礫	Ⅳ	1	103.2	64.7	37.4	29.6	安山岩	長楕円礫
No.7	礫	礫	Ⅳ	1	140.9	76.4	41.0	31.0	安山岩	長楕円礫
No.8	礫	礫	Ⅳ	1	127.3	80.8	39.9	29.4	安山岩	長楕円礫
No.9	礫	礫	Ⅳ	1	95.9	75.6	38.7	20.8	安山岩	長楕円礫
No.10	礫	礫	Ⅳ	1	68.1	77.0	32.5	22.7	安山岩	長楕円礫
No.12	礫	礫	Ⅳ	1	107.7	70.2	47.1	20.8	安山岩	長楕円礫
No.13	礫	礫	Ⅳ	1	103.8	78.9	42.6	19.7	安山岩	長楕円礫
No.14	礫	礫	Ⅳ	1	155.9	70.6	41.4	34.9	安山岩	長楕円礫
No.16	礫	礫	Ⅳ	1	86.6	74.0	38.4	20.1	安山岩	長楕円礫
No.17	礫	礫	Ⅳ	1	116.4	80.0	47.2	20.3	輝石安山岩	長楕円礫
No.18	礫	礫	Ⅳ	1	129.6	80.2	44.7	24.6	安山岩	長楕円礫
No.19	礫	礫	Ⅳ	1	85.8	67.5	34.5	29.4	輝石安山岩	長楕円礫
No.20	礫	礫	Ⅳ	1	169.9	89.6	39.9	31.8	安山岩	長楕円礫
No.21	礫	礫	Ⅳ	1	107.1	64.3	60.4	20.5	安山岩	扁平な不整形の礫
No.22	礫	礫片	Ⅳ	1	42.0	56.1	45.8	23.0	無斑晶質玄武岩	視覚的に違和感鋭利感あり
No.23	礫	礫	Ⅳ	1	145.0	78.5	62.3	18.7	安山岩	扁平楕円礫
No.24	礫	礫	Ⅳ	1	24.4	(43.6)	(42.1)	(17.5)	凝灰岩	三方向折損形状不明
No.26	礫	礫	Ⅳ	1	187.0	69.8	69.7	42.1	角閃石安山岩	視覚的に違和感角張りすぎ
No.27	礫	礫	Ⅳ	1	18.8	51.5	29.5	9.1	泥岩	視覚的に違和感小さすぎ
No.28	礫	礫	Ⅳ	1	92.8	66.7	39.1	24.7	安山岩	長楕円礫
No.29	礫	礫	Ⅳ	1	42.3	90.0	28.7	26.2	凝灰岩	長楕円礫
No.30	礫	礫	Ⅳ	1	125.6	71.3	42.3	28.6	角閃石安山岩	長楕円礫
No.31	礫	礫	Ⅳ	1	67.6	73.2	37.9	20.4	輝石安山岩	長楕円礫
No.32	礫	礫	Ⅳ	1	52.2	71.1	29.8	20.7	安山岩	長楕円礫

作為なしの平均値（最上表参照）

重さ	長さ	幅	厚さ
101.4	71.4	40.9	21.5

折損したり明らかに形状が異なる礫を抜いた平均値No.3（折損）・21・22・24・26・27（長楕円礫以外）を抜いた

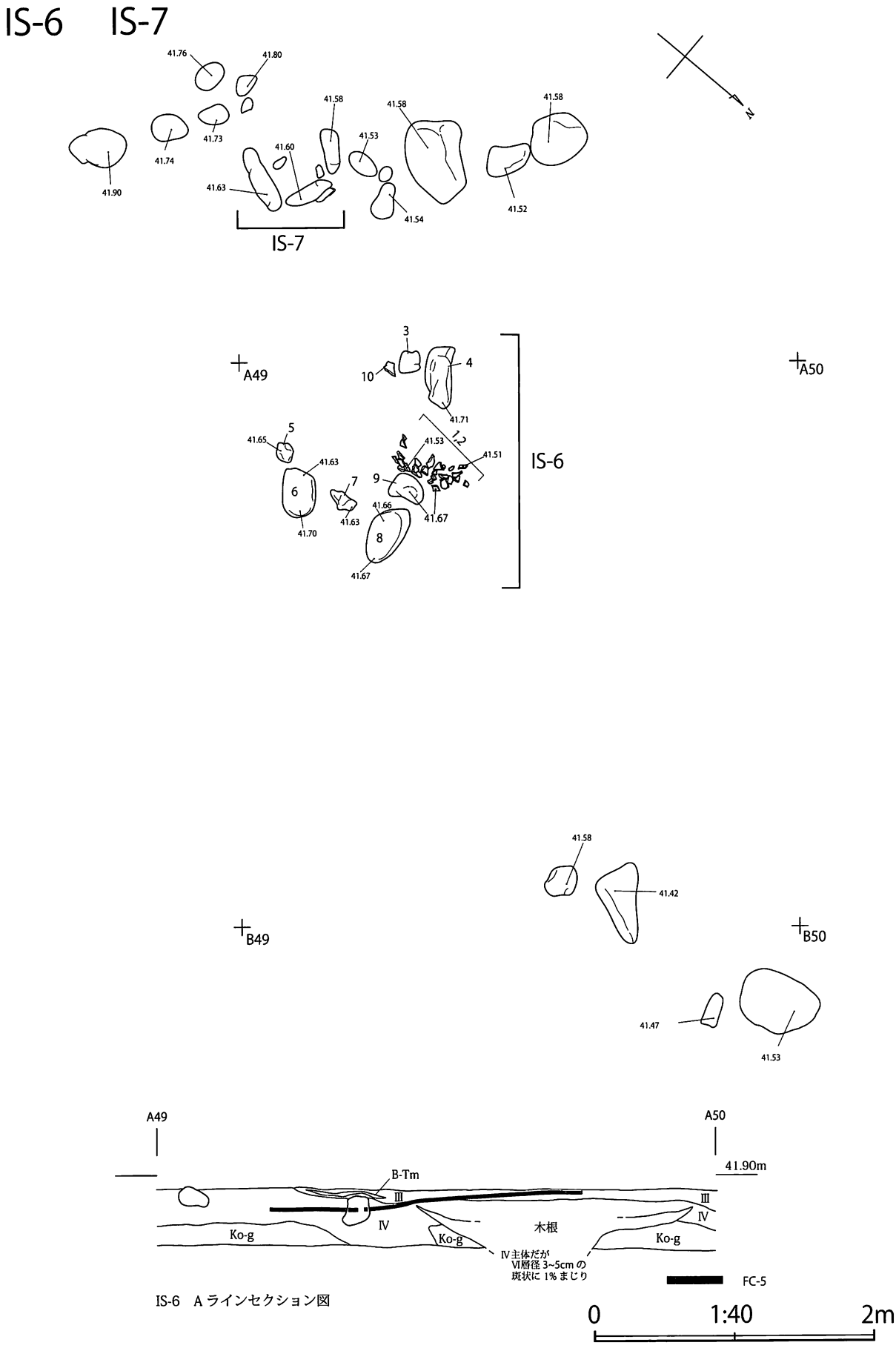
重さ	長さ	幅	厚さ
106.0	77.2	41.3	22.7

長さ×幅×厚さはそれぞれ平均値に近い大きさである。しかし、重さはそれぞれまちまちである

上記のものから更に安山岩・輝石安山岩・角閃石安山岩のみで平均値をとってみた

重さ	長さ	幅	厚さ
107.3	76.9	41.6	22.6

材質	内訳（No.）
安山岩	4・5・6・7・8・9・10・12・13・14・16・18・20・21・23・28・32
無斑晶質玄武岩	22
角閃石安山岩	26・30
泥岩	3・27
輝石安山岩	17・19・31
凝灰岩	24・29


IS-6 IS-7
41.76
41.80
41.58
41.58
41.58
41.73
41.74
41.53
41.60
41.90
41.63
41.54
41.52
IS-7
N
A49
A50
3
10
4
41.71
5
41.65
41.53
1.2
41.51
41.63
IS-6
6
7
9
41.66
41.63
41.67
41.70
8
41.67
41.58
41.42
B49
B50
41.47
41.53
A49
A50
41.90m
B-Tm
Ⅲ
Ⅲ
Ⅳ
Ⅳ
木根
Ko-g
Ko-g
Ko-g
Ⅳ主体だが
Ⅵ層径 3~5cm の
斑状に 1% まじり
FC-5
IS-6 A ラインセクション図
0
1:40
2m

図Ⅳ－59 IS－6・7（1）

B48・49区について配石設置に伴う造成跡、削平痕について明瞭な根拠はなかった。ただし隣のOZ50区で検出されたIH－９が構築された段階で、人為的な整地か、強い水の作用によるような自然の作為かは不明であるが、一度周辺が削平された可能性があった。IS－７については「コ」の字型が明瞭で、中央に骨片混じりの土が顕著であったため石囲い炉として別にした。三次郎川右岸遺跡（北埋調報233）で石組が上下に切り合っている例があったため周辺を注意して精査したが、石の配列および抜き取り痕からは、そのような状況を裏付ける証拠はなかった。

長軸長46cm（25.5kg）の不整な安山岩礫No.４と、割れた輝石安山岩製石皿No.３（2.2kg、割面が最大幅で16cm）が並ぶ。角閃石安山岩である長軸長46cm（12kg）のNo.９と28cm（17kg）のNo.8、そして33cmの安山岩No.６（14kg）がおおむねL字型を呈する。No.5とNo.７については重さ１kgに満たない軽石と凝灰岩である。

No.４とNo.９の間に無数の土器片と礫片が散在していた。現地で土器をNo.１、礫片をNo.２として取り上げた。礫の方に幾分土器が混在してしまった。

No.１として取り上げた土器破片の内訳を羅列する。大津式～白坂３式頃の磨消縄文のある破片１点（図Ⅳ－61－２）。トリサキ式に特徴的な８の字状の貼付文を持つ口縁部破片１点が、A47区出土の２点、A48区出土の５点と接合した（図Ⅳ－61－４）。無紋地に沈線文を持つトリサキ式前後と思われる小型土器の破片３点。網代底を持ち、大津～白坂３式の磨消縄文を持つ大型の個体にありがちな無紋の胴下半部で網代底の破片が８点あり、A47区出土の８点、A49区出土の５点と接合した（図Ⅳ－61－１）。接合しなかったものには、斜行縄文のみの破片および無紋地に沈線を持つ破片があり、沈線文のものはトリサキ式又は大津式のうちで古段階のものが顕著であった。またNo.１のうち３点とNo.２に混在していた破片１点とNo.10の大型土器片は接合し、結果、緩く外反する口縁を持つ無紋地の土器であった。またNo.２に混在していたもののうち１点はIH－９、IP－61出土土器と接合した。涌元式と思われる蛇行沈線を持つ土器である（図Ⅳ－15－１）。人為的に配された石であるならば、縄文時代後期前葉の頃と考える。

礫の集中と土器の集中が混在していたNo.１とNo.２であるが、礫としてとりあげた132点のうち110点は同一母岩と考えられる凝灰岩の礫片である。これはⅥ層にもみられる岩石である。割面のリングが周回しており、打点が確認できないことから自然に破砕されたものであると判断した。132点のうち凝灰岩以外の内訳は安山岩が３点、角閃石安山岩の礫・礫片が10点、泥岩礫片が１点、軽石礫が１点、輝石安山岩の礫・礫片が２点である。いずれも握拳に満たないものでほとんどが砕片である。いずれももともとⅥ層中に含まれていた可能性がある。

ただし安山岩のうち１点は重量132.2ｇ、長軸・幅・厚さが89.8×45.6×25.6cmの規格であった。これはIS－５の計測結果から、この種類の集石に対して選択される可能性がある。

時　期　遺物出土状況から、縄文時代後期前葉の遺構という可能性を持つ。　（大泰司）

遺　物　土器：いずれもⅣ群a類土器。１は底径が16.5cmの大型の深鉢形土器。周辺の包含層（OZ49、A47～49区）から出土した破片が接合した。無文部はヘラ状工具で研磨調整されている。底面中央、径10cm内外の範囲に「網代痕」が認められ、この部分で円形に割れていた（図版110）。「網代」は横が幅４mm、厚み１mmほどの平たい材料で、ほぼ等間隔に10～12本ほど、また縦の材料は幅が横のものよりも太く、平らなもので、１本・１本・２本・１本・１本の順であり、やや間隔があく。胎土に小砂利が混じる。大津式に相当する。２は胴部の破片１点を除き、大部分の破片は周辺部の包含層（A47～50区）から出土したものである。口縁はごく緩やかな波状を呈すもので、口唇上にも施文がある。胴部上半でわずかに膨らむ器形である。頸部に沈線で区画された無文帯があり、口縁部では施文後に集合

表Ⅳ－7　IS－6遺物観察表

土器

番号	遺物名	材質	点数	備　　考
No.1	土器	Ⅳ群a類	42	土器と礫片のまとまりのうち土器をNo.1として取り上げた 上記のうち、型式の判別がつく破片の内訳（～はおおよそ）涌元1式×2、トリサキ式×1、トリサキ式前後か×1、トリサキ式～大津式の古手×4、大津式～白坂3式×9
No.2	土器	Ⅳ群a類	4	土器と礫片のまとまりのうち礫をNo.2として取り上げた。その中に混在
No.10	土器	Ⅳ群a類	1	

剥片・礫石器

番号	遺物名	材質	点数	備考・重量（それぞれ参照）最大長×幅×厚さ（cm）
No.2	フレイク	頁岩	2	土器と礫片のまとまりのうち礫をNo.2として取り上げた。その中に混在7.4g
No.3	石皿片	輝石安山岩	1	2.2Kg　16×10×7cm（割面幅が最大長）

礫・礫片

番号	遺物名	材質	点数			備考・重量（それぞれ参照）最大長×幅×厚さ（cm）	
No.2	礫	安山岩	2	2	132	1点は132.2g　89.8×45.6×25.6	土器と礫片のまとまりのうち礫をNo.2として取り上げた。
	礫	角閃石安山岩	2	10			
	礫片		4				
	礫片		4				
	礫片	泥岩	4	4			
	礫	軽石	3	3			
	礫	輝石安山岩	1	2			
	礫片		1				
	礫片	安山岩	1	1			
	礫片	凝灰岩	110	110		割面のリングが一周しており、打点がないため自然にわれたものと判断した	
No.4	礫	安山岩	1			25.5Kg　46×23×17cm	
No.5	礫	軽石	1			0.4Kg　12.5×11×7cm	
No.6	礫	安山岩	1			14Kg　33×24×11cm	
No.7	礫	凝灰岩	1			0.9Kg　23×11×7cm	
No.8	礫	角閃石安山岩	1			17Kg　28×20×15cm	
No.9	礫	角閃石安山岩	1			12Kg　46×26×13cm	

表Ⅳ－8　IS－7遺物観察表

番号	層位	遺物名	分類	材質	点数	重量（各の単位）長軸長×幅×厚	備考	変更履歴
No.1	フク土1	土器	Ⅳ群a類	土器	1	—	—	
No.2	フク土1	礫石器	たたき石	輝石安山岩	1	312.6g　10.6×6.5×3.6cm		
No.3	フク土1	礫	礫	角閃石安山岩	1	134.8g　6.5×5×2.9cm		
No.4	フク土1	礫	礫	角閃石安山岩	1	243g　7×7×4cm		
No.5	フク土3	礫	礫	安山岩	1	10Kg　30×22×9cm	短軸に対して上から10cmが赤色化　境界が薄く黒色化	
No.6	フク土3	礫石器	台石	角閃石安山岩	1	9.3Kg　33×27×9cm	長軸に対して上から8cmが赤色化　被熱か	（旧）台石
No.7 被熱	フク土3	礫石器	台石	角閃石安山岩	1	14Kg　43×21×10cm	短軸に対して上から10cmが赤色化　境界が明瞭に黒色化　被熱か　典型的炉石	（旧）台石
No.8	フク土3	礫	礫	角閃石安山岩	1	0.5Kg　13×10×2.5cm		

No.5～7について構築された順番は明瞭ではない。ただしNo.6が最後（ほぼ同時だが、それをNo.3・4・8で支えている）

沈線で鋸歯状・山形の文様が描かれる。胴部は下端を沈線で区画した中に磨消縄文により渦巻文様が描かれている。あらかじめ設けた無文帯に縄文を充填する手法なので、条の方向が一定しない。胎土に小砂利が混入する。白坂３式に相当するもの。３は口縁がわずかに波打ち、頸部でくびれる器形である。先端がササラ状の工具での調整痕が観察できる。大津式に伴う無文土器であろう。４は口縁にごく低い方形の突起があるもので、口縁部に２条扁平な貼付帯を巡らせ、突起部では粘土紐を円形に交差させ、突起部を指頭でくぼませている。縄文は粘土を貼りつけた後にRL原体による縄文を疎らに施文している。口唇上から内面にかけて平滑に調整されている。大津式の古段階のものと見られる。５は無文地に半截竹管状施文具での沈線文がある。６は口縁部。緩やかな波頂部であろう。７・８は無文の部分。９は無文地に先端のとがった工具により沈線が施されるが、一周するものではない。10は斜行縄文が帯状に施されている。薄手で、焼成がよい。11は底部。（遠藤）

IS－７（図Ⅳ－59～61、表１、Ⅳ－８、図版29・51）

位　置　OZ49（微妙にOZ48にかかる）　　**立　地**　標高41.0～41.5ｍ付近の緩斜面

規　模　黒色土の入り込み部分1.1×0.8×0.3ｍ　　石組み部分　0.74×0.54×0.3ｍ

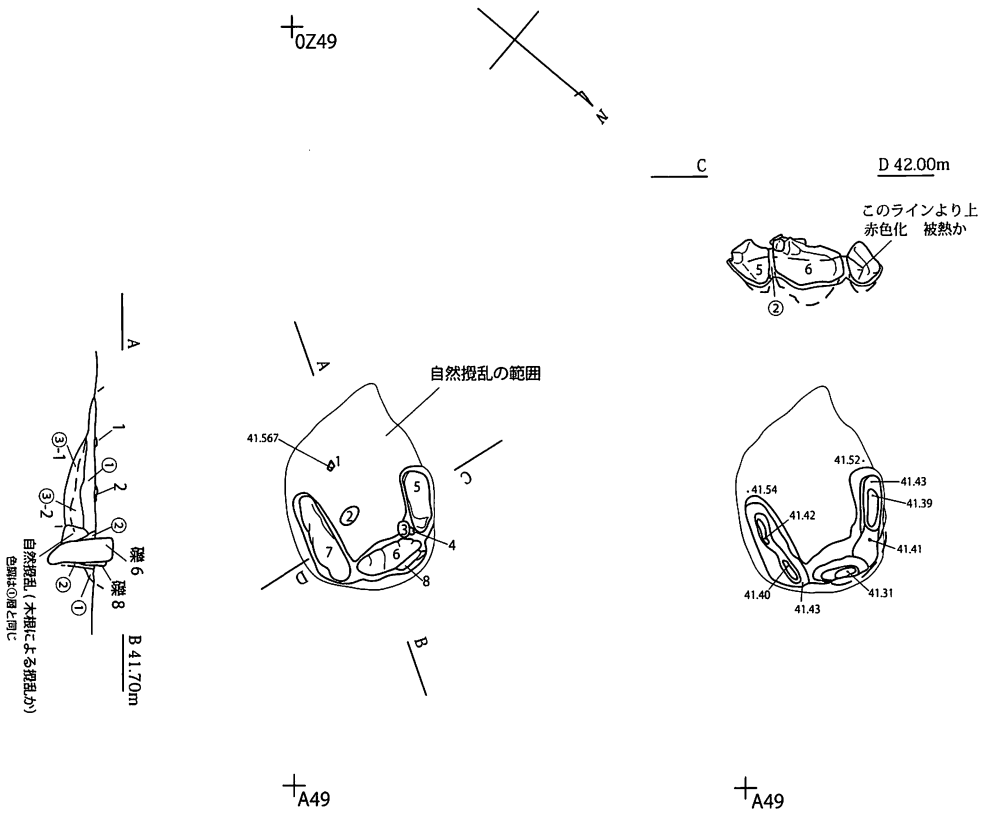
特　徴　表土除去後、OZ～B48・49区において大型の礫が目立って出土した（図Ⅳ－59）。しかし周囲を面的に掘り下げていくうちに、それぞれの標高およびⅣ層中での位置がまちまちなことが判明した。また、この緩斜面について包含層を全面的に掘り下げた結果、Ⅵ層より下位の礫層中に含まれる大型礫が、Ⅵ層中に散見的に上がっている状況を確認した。これは自然の営力によるものであると判断した。そこで、OZ～B48・49区の礫すべてを配石と判断することは不可能となった。そこで比較的まとまっている礫群のなかで「コ」の字型の配列が明らかで、中央に骨片混じりの土が顕著であったものを石囲い炉と判断し、IS－７とした。

「コ」の字型の礫配列は黒色土の入り込みの中から検出した。OZ～A49ラインに黒色土の一部がかかっていた。先に掘り下げてあったOZ48区側を掘りさげたところ断面から風倒木を思わせる攪乱の状況が観察され、黒色土はその一部を構成するものと想定された。断面および調査範囲境界の壁面からは掘り込みは観察できずまたOZ48側からは柱穴と判断できるものは検出されなかった。次に、自然の営為らしきその黒色土を半截したところ細かい骨片を多量に含む赤褐色土３層と礫が埋め込まれている土層２層を観察した。赤褐色土は上半のほうが明るい。赤褐色土は焼土と判断し、サンプルを取り、フローテーション法で処理した。結果として骨片・炭化材・オニグルミ片44点・ミズキ破片１点等を検出したが、骨片は細かかったためか予想外に回収できなかった。同定の結果不明とされた骨片が８点出土している。この時得られたクルミ片について放射性炭素年代測定（AMSによる）を行ったところ3590±24yr.B.P.（PLD12079）の測定値が得られた。

断面から、礫の掘りかたについては、検出面とほぼ同じ面から掘りこまれたものと考える。また、礫に残された被熱の痕跡のラインと検出面がほぼ合致していた。すると１層の位置づけが難しくなる。これは１層と同一色の根によるⅣ層主体の攪乱が入り込んだためである。１層がもともとの風倒木の土層でそこを掘りこんで、石囲い炉を作ったものか、炉の凹みに廃絶後１層がたまったものか判然としない。おそらく両方の土層が該当し、攪乱ゆえに分層できなかったものと判断した。

大型の礫№５・６・７によって構成されるこの炉は風倒木痕跡に無駄ない大きさで穴を掘り、そこに№５・６・７を埋め込んだと考える。順番としてはほぼ同時だが、№６が最後であり、№３・４・８を配したものと考える。№５は10kgの安山岩。角礫で、長軸長30cmである。№６・７は角閃石安山岩である。№６は9.3kgで長軸長33cm。№７は14kgで長軸長43cm。№５・７は長軸が地面に水平になる

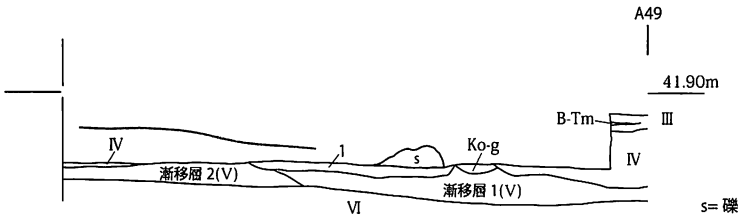
IS-7



IS-7 土層

① 10YR1.7/1 黒色土 セクションAの1層と同じ Ⅳ層が風倒木痕跡に入り込む 粒径1.5cmのパミス1%混じる
② 10YR2/1 黒色土 しまりなし 粒径1mの黒色土Ⅳc層15%混じる
③-1 5YR5/6 明赤褐色土 骨片が顕著にある（1%） 漸移層Ⅴ層が主体 パミス等は目立たない ややしまる
③-2 5YR4/8 赤褐色土 骨片が不明瞭だがややある 漸移層Ⅴ層が主体 パミス等は目立たない ややしまる
Ⅴ層相当 漸移層1 褐色土 10YR4/6

IS-7 抜き取り痕平面図



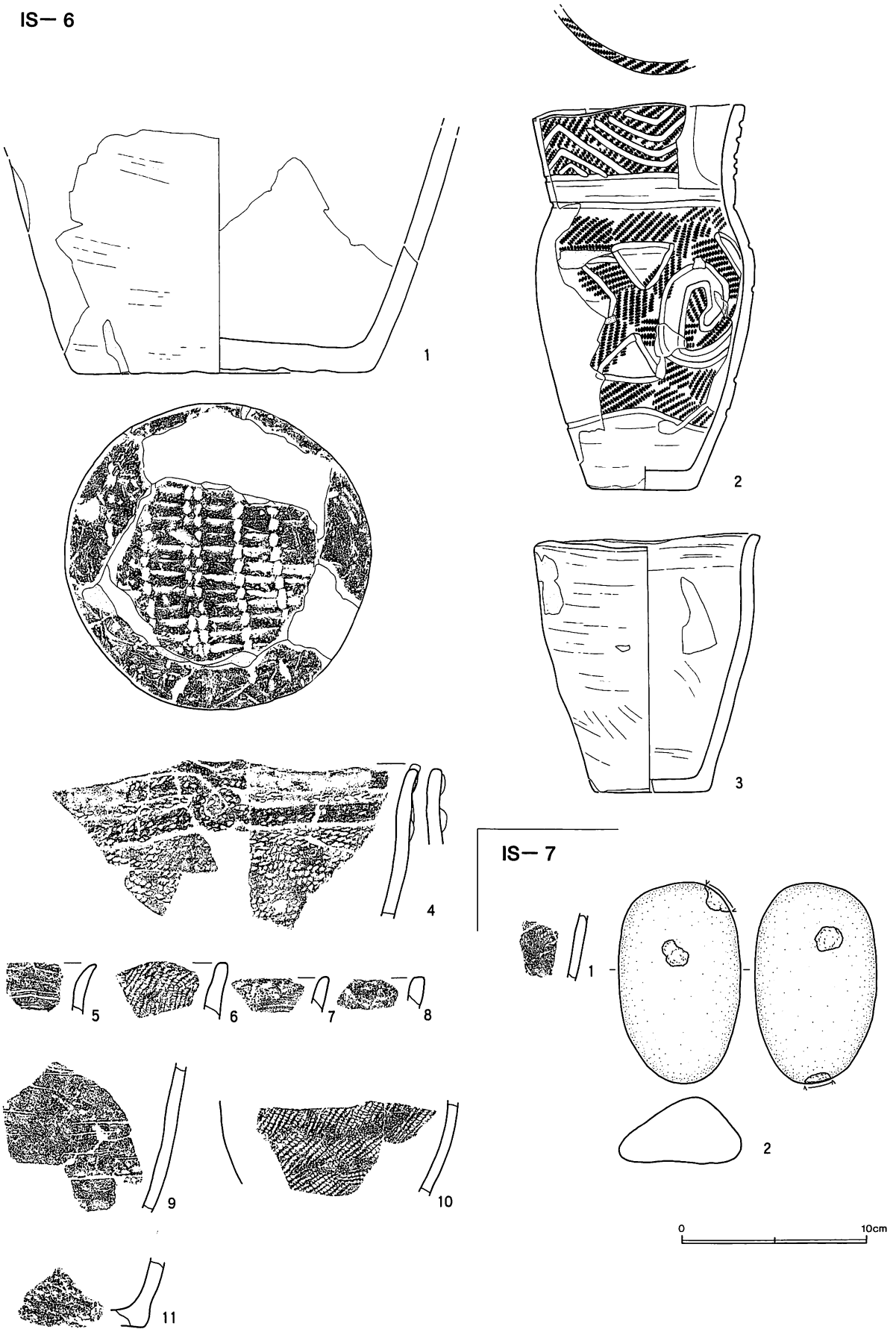
(0Z)~A 49 ラインメインセクション

FC−5にて「骨含土」とした部分の上面

IS-7 土層
セクションA
木根撹乱Ⅳ層を主体とする（濁川ローム粒径3～5cmのブロック状に1%混じる）
1 10YR1.7/1 黒色土 Ⅳ層が風倒木痕跡に入り込む粒径1.5cmのパミス1%混じる
漸移層1
漸移層2 10YR4/6 粒径3cmの斑状をしたⅣ層黒色土15%混じる
このエリアについてはⅣ層も漸移層も粒径3cmのパミス20%混じる
Ⅳ層 10YR1.7/1 黒色土
（一部Ⅳ層 10YR2/1 黒色土）
Ko-g 橙色土 7.5YR6/8

0　1:40　2m

図Ⅳ−60 IS−7（2）



図Ⅳ－61　IS－6・7出土の遺物

ように埋め込まれており、上から10cmが赤色化し、その一部は薄く破砕する。赤色部の境界は黒ずんでおり、No.7の方がより顕著である。No.6は楕円礫の一端が欠けており、その欠けた側が上になって埋められていた。上から8cmが赤色化する。いずれも赤色化している部分とそうではない部分の境界はある程度水平な線として把握できる。

No.3・4は300gに満たない、長軸7cm以下の小礫で、空間を埋めるように置かれている。No.8は500g、長軸13cmの板状礫でNo.6を固定する際込められたものかNo.6に密着していた。

OZ29区についても面的に下げたが柱穴は確認できなかった。上屋構造はあったとしても、痕跡の残らない簡単なものであったと考える。

No.1は縄文時代後期前葉の土器で、No.2はIS－7の検出面より出土したたたき石である。おそらくいずれも炉の廃絶後に流入したものであろう。1は周辺の土器と接合しなかった。

時　期　出土遺物および周辺の遺物出土状況から、縄文時代後期前葉のものと考える。またこれは放射性炭素年代測定の結果と矛盾しない。（大泰司）

遺　物　土器：1はⅣ群a類。横走する縄文が観察されるが、施文後のなで調整により文様が消えている。（遠藤）

石器：2は、たたき石である。扁平礫の両面、端部に弱い敲打痕がみられるものである。輝石安山岩製。（立田）

IS－8（図Ⅳ－58、表1、図版30・51）

位　置　N77　　**立　地**　標高42.8m付近の緩斜面　　**規　模**　0.43×0.40m

特　徴　Ⅳ層下半を掘り下げていると、計414点の小礫が円形にまとまるものを検出した。土坑上位に位置するものと考えたが、下位で検出したIP－51・52ともそのプランをまたぐ位置にIS－8が存在し、土坑との関係は不明である。隣接して、縄文時代後期前葉の土器が出土した。

時　期　周囲の出土遺物から、縄文時代後期前葉の時期と考えられる。（福井）

遺　物　土器：1は無文の口縁部。2は無文地に沈線で渦巻文様が描かれている。3は横走する縄文のもの。4はLR原体を縦位に施文している。いずれもⅣ群a類土器。（遠藤）

Ⅴ　包含層出土の遺物

包含層からは土器40,965点、石器等4,778点、石製品11点、土製品11点が出土した。これまでの調査によって得られた資料を含めその内訳は、表Ⅰ－２～４に示した。

１　土器等（図Ⅴ－１－１～49、表Ⅴ－１、表６～18、図版52～101・110）

縄文時代中期（Ⅲ群）、後期（Ⅳ群）、晩期（Ⅴ群）、続縄文時代（Ⅵ群）のものがある。縄文時代後期前葉（Ⅳ群a類）のものが最も多く38,527点で全体の９割以上を占める。ついで縄文時代中期前半期のⅢ群a類（1,102点）があり、ほかに中期後半期Ⅲ群b類（142点）、後期中葉Ⅳ群b類（487点）、続縄文時代前半Ⅵ群a類（599点）がある。また、晩期中葉Ⅴ群b類（108点）のものがわずかにある。なお、土器集中１～16については現場段階で遺構に準じて取り上げ、台帳登載しているが、周辺部の包含層との接合関係が多くあることから、本章で扱うこととした。掲載遺物一覧表では、「土器集中」の遺物番号を付しているが、それぞれの遺物番号の土器が出土した包含層と対照できるように、備考欄に次のように注記した（例：「土器集中６－15（遺物番号）」の土器→遺15：OZ49）。また、遺物点数および該当する包含層については一覧を表に示した（表Ⅴ－１）。遺物分布図（図Ⅴ－１－１・33・34）についても同様に包含層に含めている。

土器の説明に当たっては、便宜的に過年度調査範囲を挟んで南東側（25～68ライン間）をA地区、北西側（62～81ライン間）をB地区とし、それぞれ地区ごとに分け、復元土器、破片資料（拓本土器）の順に記載する。ただし、Ⅳ群b類、Ⅵ群a類については復元土器と拓本土器を同一図版にしてある。また、Ⅴ群b類土器は出土数が少ないことからA・B地区をまとめ、土製品、ミニチュア土器等についてもB地区の最後にまとめて掲載してある。胎土、器面調整および土器の色調等については、特に目についた点を記している。

遺物出土状況等（図Ⅴ－１－１－33・34・46～49）

A地区：①OZ～I・38～52ライン間の調査区南西側および②H～W・26～34ライン間の調査区南東端のほぼ２か所に集中している。また③58～68ライン間にもわずかなまとまりが認められる。②地区を除きK・Lラインよりも北東側では遺物の出土が極端に少なくなる。①地区は、住居跡は１軒であるが、集石、フレイク集中等の遺構がある地点である。Ⅲ群a類土器は中期前半の住居である可能性が高いIH－10周辺の②地区に比較的まとまっている。Ⅳ群b類土器は①地区においてⅣ群a類土器と混在して

表Ⅴ－１　土器集中出土土器遺物点数

土器集中	分類			計	出土位置
	Ⅳa	Ⅳb	Ⅵ		
4			106	106	M54
5	135			135	A41, B41
6	660			660	A47・48, B47～49
7	44			44	OZ44
8	275			275	OZ48
9	180	92		272	A50
10		74		74	D36
11	154			154	OY46・47
12	10			10	C35
13	11		328	339	N28
14	168			168	T27
1	66			66	P77
2	95			95	P77
3	28			28	O76
15	64			64	Z79
合計	1,890	166	434	2,490	

※土器集中４～14はA地区、土器集中１～３・15はB地区

出土する。Ⅵ群土器はほぼ3か所にまとまりがあり、土器の特徴から地点により時間差のあることがわかる。

B地区：①水場遺構周辺および後期の住居跡・土坑のあるJ～Q・70～80ライン間と、②IH－6のある周辺部W～Zライン間に集中する。斜面上側では遺物はほとんど出土しない。またⅢ群a類土器は水場遺構周辺からまとまって出土している。一個体分の晩期の土器が小さな沢地形（図Ⅳ－2）の周辺部（A・B63区）から出土している。

なお、個体識別のため包含層から出土した口縁部総数を大まかな文様に分けて計数した。この結果、口縁部数は掲載した遺物も含め2,378点（同一個体のものは1点）であった。識別の誤りを2割程度として、少なくとも2,000個体近くの土器があることになる。おもな内訳は無文地591点、縄文地495点、折り返し口縁あるいは貼付帯のあるもの661点、無文地に沈線文のものが360点、縄文地に沈線文のあるもの55点、縄線文のあるもの51点などである。

（1）A地区出土の土器（図Ⅴ－1－2～32、表6～12、図版52～87）

Ⅲ群a類土器（図Ⅴ－1－2・3－1～22、表6・7、図版52・53）

円筒土器上層式、サイベ沢Ⅶ式、見晴町式に相当するものがある。

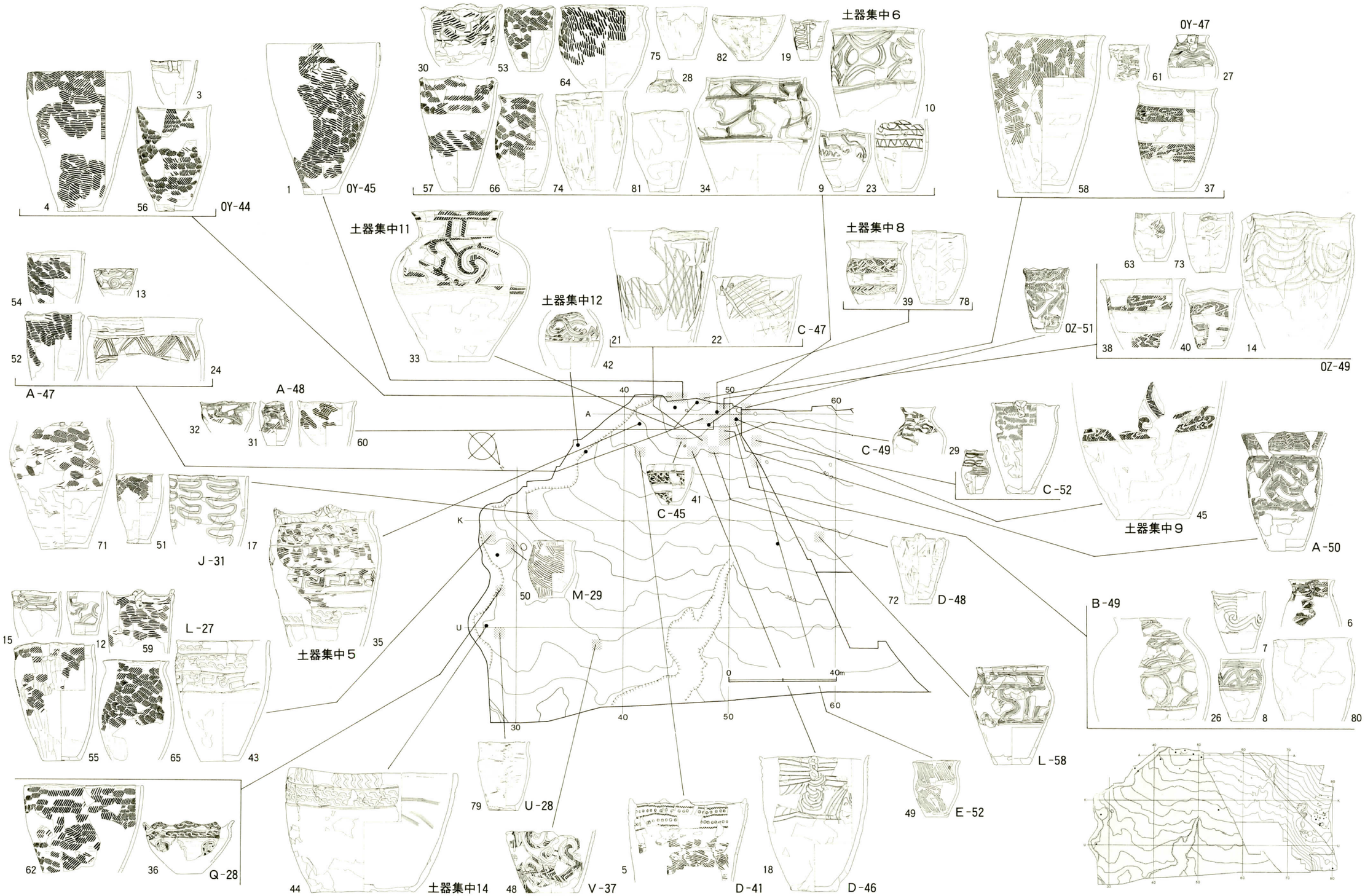
1種：円筒上層b式に相当するもの（1、5）

1は調査区南東端、W32区から出土した小型土器。全体の3分の1ほどが残存する。口唇断面形は切り出し形で棒状工具での方形の刺突文がある。無文地に胴部上半と下半に比較的幅のあるヘラ状工具と半截竹管状施文具の2種類を使用し、連続する弧状文様と平行線文様があるが、パターンは一定していない。器面の刺突列は上下に2段あり、楔形のものと口唇の刺突と同じ形状ものがある。器面の沈線文の原体を使用したものであろう。5はN29区から出土したもので、色調は4に似る。貼付帯と馬蹄形圧痕文での文様がある。1、5はいずれも胎土に海綿状骨針が混入する。

2種：サイベ沢Ⅶ式・見晴町式およびこれに並行する土器群（2～4、6～22）

2は調査区南東側、住居跡IH－10の周辺部O・P31区から出土した。口縁の一部と胴部～底部の破片を、器形を想定して復元したものである。口唇は磨かれ角形を呈する。口縁部はやや外反し3か所ないしは4か所に突起部を持つ。突起の形状は楕円の漏斗状で、肥厚させた山形突起の片側に指頭を押付け形成されたとみられる。下部には短い粘土紐の貼り付けが剥がれた痕がある。器面には結束のある羽状縄文が施されており、部分的に原体の上下を入れ替えている。施文後器面を指でなで調整しているので凹凸があり文様が消えている。3は口縁の3か所に山形突起部を有し、底部から直線的に立ち上がる器形である。底部は欠損している。口唇を肥厚させこの部分に竹管状工具で溝状の沈線を加え、突起部では強く押付けることで円形文が形成されている。体部にはLR原体による斜行縄文が施され、口縁から胴上半部では横走気味となっている。内面はよく磨かれ平滑で、ヘラ状施文具での調整痕が観察できる。4は40mほど離れて出土した（N28区とU32区）破片が接合されたものである。口径は30cmを超え、厚さが11mmほどある大型の土器である。色調はにぶい橙色で、内外面の凹凸が著しい。内面は磨かれてはいるが、調整の際につけられた指頭の窪みやヘラ状工具での痕跡が残る。平縁で太いRL原体による斜行縄文が施されているが、部分的に施文方向を変えている。口唇部には縄の押捺により刻み目が加えられている。

6～13は突起部のある口縁部破片である。6は台形状の突起があり、RL原体による縄文地に貼付帯での文様がある。7、8は突起部中央に円形の貫通孔があり、沈線による文様がある。7は大型土器とみられ、突起部の両側を指で挟んで窪ませている。8は台形状の突起の上面と側面に施文がある。



図Ⅴ－１－１　Ⅳ群ａ類土器の分布（Ａ地区）

9 a・bは同一個体の破片。器面には 0 段多条の斜行縄文が施されている。突起部はU字状で棒状工具での刻み目がある。胎土に海綿状骨針が混じる。10は無文地のもので、 2 に類する突起部があり、摘まみ出して形成された張り出しがある。11には円形の貼付帯が、12はRL原体による縄文があるもので、綾絡文が加えられている。口唇部には縄による刻みがある。13は斜行縄文が施されているもので、見晴町式であろう。14a・bは同一個体の破片。ニシンタイプの魚骨回転文が地文としてみとめられ、口縁部に沈線による文様がある。サイベ沢Ⅶb式相当である。

15～18は斜行縄文を主にした地文だけのもので、口唇に縄による刻みがある。16は精製された胎土のもので、中期の土器がややまとまって出土したA地区南東端から出土した。 0 段多条の細い原体による結束のある羽状縄文が施されている。19～22は口唇に沈線が加えられるものである。 3 と同様、 2 種のなかで最も新しい段階に位置付けられるものである。19は横走縄文が、21、22は体部に沈線による文様がある。

Ⅳ群a類土器（図Ⅴ－１－４～27－１～187、表８・９、図版54～82・110）

後期前葉のもので天祐寺式、涌元式、トリサキ式、大津式、白坂 3 式に相当するものがある。大津式、白坂 3 式の細分にあたっては、木古内町新道 4 遺跡の盛土出土の資料（北埋調報52）を参考にした（盛土１～５類）。地文だけのもの、無文のものについては、細分し難いものがあることからまとめて報告している。その上で胎土、調整、焼成を観察し、器形等の特徴は同時期の北斗市矢不来 2 遺跡の資料（北埋調報37）、松前町大津遺跡の大津 7 群土器（松前町教委1974）、八雲町浜松 5 遺跡 8 号住居址出土の一括資料（八雲町教委1995）などを参考に分類を検討した。

a－１類：天祐寺式、涌元式に相当するもの

①貼付帯による文様が施されるもの（１～４、88～91）

1 は口縁部から底部までの 3 分の 1 が残存する。折返し口縁のもので、口縁部の比較的広い範囲を無文にし、幅の広い扁平な貼付帯を一条巡らせている。縦に 2 条の貼付帯で区画後、 0 段多条のLR原体による縄文を貼付帯上から施文している。施文方向を変えることで斜行、横走気味となっている。胎土に白色岩片が混じる。 2 、 3 は器高20cmに満たない小型のものである。 2 はRL原体による縄文を体部では縦方向に、折返し口縁部と貼付帯上は横方向に施文後、指頭でなぞることで無文帯を形成している。角形の口唇上にも施文がある。 3 は無文のもの。口縁は部分的に折り返され、口唇上には縄文が施されている。縦方向の 2 ないし 3 か所に 1 に類する短い貼付帯があるが、施文後の調整により貼付帯がつぶれている。 2 と 3 は焼成が似ており、胎土には白色岩片が多く混入する。 4 a・bは縄文のみが施されるもの。口縁部と底部の大きく 2 つに接合できた破片を図上で復元した。器形大きさ、縄文の原体、施文の仕方、胎土、器面調整が図Ⅴ－１－４－１に共通すること、また同じ調査区（OY44・45区）から出土した点も踏まえ、貼付帯は無いが本類に含めた。口唇への施文は無い。

88～90は 2 条の貼付帯がめぐるものである。88、89は胴部と貼付帯上で縄文の施文方向を変えている。89は縦に短い貼付帯がある。90a・bは同一個体。体部には細い沈線による斜格子目の文様がある。91は口唇に沿って 1 条やや厚みのある貼付帯が施され、この部分にも施文がある。体部の縄文はRL原体を縦・横方向に施文し羽状を構成している。

②縄線文による文様のもの（５、92、93）

5 は破片が広範囲（D41、H44、G・H50区）から出土した。大きく 3 つの部位に接合できたものを、器形を想定し復元した。 4 か所に山形の突起部を有し、口唇調整の結果とも見られるが、不規則に波打つ部分がある。大きさに比べて薄手の土器で、焼成がよい。体部はLR原体による横走気味の縄文で、

口縁部の幅広い無文帯に縄線文を3条施し、中空の施文具による円形刺突文が2列施されている。92、93は縄文地に口縁部に沿って施文がある。93は横走縄文のもので，短い縄線文が2条縦に加えられている。

③無文地に沈線で文様が描かれるもの（94、95、100～102）

94a・bは同一個体。調査区南東端L27区から出土した。半截竹管状施文具で曲線的文表を描き、円形刺突文をその上下に沿わせている。内面はよく磨かれている。95は口唇にも施文があるもので、曲線文様の間に棒状工具での刺突文がある。100、102は半截竹管状工具により崩れた蛇行あるいは垂下する文様が描かれている。102は、97に類する胎土である。101a～cは同一個体。突起部に棒状工具での刻みがある。口縁部に1条沈線が引かれ、胴部には弧線の文様が展開するものとみられる。

④縄文地に沈線により文様が施されるもの（6、96、97）

6は壷形土器である。胎土は5に似る。細いLR原体による縄文を浅く施し、半截竹管状施文具の腹面を使用し、崩れた曲線的文様が描かれている。頚部は方形文様を横位に連続させ、胴部も類似あるいは弧線を繋ぐ文様であろう。残存する部分では、口縁部の3か所から、中空施文具による円形刺突文を垂下させている。96、97は垂下する蛇行文様が描かれている。97a・bは横走縄文地のもので同一個体。口縁部でやや括れる器形で、口径30cmを超える大型土器である。

⑤オオバコのとうの回転文を地文として沈線で文様が描かれるもの（98・99）

98a～cはJ27区出土のもの。折り返し口縁で、器面にはやや幅広のヘラ状施文具で円形や弧線文が描かれているが全体の文様構成は知られない。99は胴部の破片。半截竹管状施文具での、98に類する文様がある。

a－2類：大津式に相当するもの。新道4遺跡の盛土1類～4類に相当するものである（7～187）

1種：新道4遺跡盛土1類に相当するもの（7～29、103～132）

八雲町浜松5遺跡8号住居出土の資料の一部に相当する資料である。無文地のものと縄文地のものがある。文様帯を区画し、2条ないしは3条一組の沈線文で渦巻状文様、入組文、弧線を繋ぐ文様、蛇行する垂下文様、斜格子目等の直線的文様を描くものである。高さ15～20cmの小型のものから、30cmほどになるものがある。平縁のものと複数か所に波頂部を持つものがあり、波頂部に棒状工具や指頭で刻みや窪みを付けるもの、また波頂部から粘土紐を縦に円形に捻りながら貼り付けるものがある。

①無文地に沈線で文様が描かれるもの（7～28、103～122）

7～9は大きさ、器形、胎土、焼成、器面調整が共通する。出土した地点も4、5m四方の範囲である。口縁部と胴下半部に2条の沈線を施文して文様帯を区画した中に、2条一単位の沈線で文様が描かれるものである。7は4か所に波頂部があり、渦巻文様が描かれている。8は平縁のもの。半截竹管状施文具でやや硬化した流水文があり、二重に文様を入り組ませている。9は土器集中6として取り上げた土器片と周辺の包含層出土のものが接合した。1および2にくらべ胴部がやや膨らむ器形で、3か所にごく小さな山形の波頂部がある。文様帯を区画する上下の平行沈線文を屈曲する沈線で繋ぐもので、さらに蛇行する沈線文が一周する。

10は土器集中6と土器集中11出土の破片および広範囲におよび包含層（OY44・46・47、OZ46～48、B47、E41、F42区）から出土した破片が接合したものである。胴下半部から底部は欠損している。口縁部のわずかな括れは、口唇調整の際に形成されたものである。器面には縦方向の削り調整が明瞭に観察される。口縁部2条、胴部3条で区画された中に、上下の沈線文から3条一単位の沈線文で相対する半円状文様があり、また横方向においても、弧線を繋ぐことで同様の文様がある。11は頚部で括れ大きく外反する器形である。先端がササラ状のヘラあるいはやや厚みのある施文具により口縁部に3条の沈線を施し、上下を繋いでいるが文様に規則性はない。薄手で胎土に海綿状骨針が混入する。

12は調査区南東端のJ30区から出土した。10に類する文様のもので、コップ状の器形である。13は渦巻文と半円状の弧線を繋ぐ文様がある。胎土に黒色雲母の混入が顕著である。

14は 6 ないし 7 か所に緩やかな波頂部があり、口縁部で括れ胴部がやや膨らむ器形である。棒状工具での大柄な渦巻文様がある。口縁部で横方向、胴部では縦方向の器面調整痕が顕著に残る。胎土に白色岩片が多く混入する。15は遺物集中地区から離れた調査区南東端L27区から出土したものである。口唇断面は尖り気味で口縁部は緩やかに波打つ。半截竹管状施文具で方形の連続文とそれを上下で繋ぐ文様がある。16は頚部でくびれるもので11に似る器形である。 2 か所に波頂部がありこの部分に刻みが加えられている。大柄な格子文を弧線で繋いでいる。17は調査区南東端のI・J30～31区周辺から出土したもの。大きく二つに接合できたものである。口唇断面は角形で、器面には半截竹管状施文具で蛇行・垂下する文様が描かれている。18は全体の 3 分の 2 ほどが残存する。口縁部の 4 か所に低い山形の波頂部があり、この部分に粘土紐を捻り貼り付けることで 8 の字状の連続する円形文がつけられている。この貼付文を繋ぐように複数の平行沈線が、また下位では多重の弧線と斜めの沈線文を交互に配している。内面は底部付近までヘラ状工具での調整痕がある。胎土に海綿状骨針が混入する。19は土器集中 6 出土の破片と周辺の包含層の破片が接合したもの。 4 か所ある波頂部から先の細い施文具で縦の沈線を複数施し区画、その間に垂下する文様が描かれる。20は胴下半部に、竹管状施文具の背面で流水的文様が描かれている。盛土 1 類よりも新しい（盛土 2 類）可能性がある。

21～25は直線的な文様が特徴である。21は底部から直線的に立ち上がる器形で、口縁部では指 2 本分ほどの幅で折り返されている。残存部は 1 か所であるが、複数箇所に低い山形の波頂部があるとみられる。器面はよく磨かれ平滑で、縦の沈線文が意識して施されるもので、これに斜めの線を加えている。古い段階の可能性がある。22は 4 か所に厚みを持たせた波頂部があり、幅広いヘラ状施文具と細い施文具の 2 種類を使用した斜格子目文様がある。左下がりの文様を意識しており、右下がりの沈線は部分的施文である。胎土に黒雲母の混入が顕著で、また内外面の凹凸が著しい。23は土器集中 6 と周辺部の包含層（A47・48区）出土の破片が接合した。胴上半部でやや膨らみのある寸胴な器形である。胎土に白色岩片が目立つ。平行沈線を複数施し、山形や弧線で繋いでいる。24は口縁部～胴部上半の一部が残存する、器高が30㎝を越えると推定される大型土器。平縁で頚部がやや括れる器形である。幅広のヘラ状施文具で括れ下端と胴上半部に粗く 2 条の沈線を施し区画した中に、鋸歯状文様が描かれている。器形の特徴から新しい段階（盛土 2 類）の可能性もある。25は底部がやや張り出す器形で、平行沈線施文後磨きがかけられている。

26～28は壷形土器。26は大きく 2 つに接合できたものである。胴部上半で比較的大きく膨らみ、口縁の外反が強い器形で、口縁部の括れの対になる 2 か所に焼成前に孔が穿たれている。この貫通孔を中心に沈線文が配されている。胴部文様帯は 3 条一単位の沈線文で 2 つに区画され、連続する弧線文や円形文が描かれそれぞれが繋がれている。精製された胎土で、焼成がよく色調は明黄褐色を呈する。27は26に類する器形である。 2 か所に粘土紐による円形連続文があり、この部分にわずかな高まりがある。口唇部ではこの文様を中心に棒状工具による斜めの刻みがあり、また口縁部には 3 条一単位の沈線が弧状に配されている。胴部には 5 条一組の沈線文で、上下から相対する弧状の文様が連続して描かれている。焼成がよく内外面ともに丁寧に磨かれている。28は口唇部分が粘土の接合箇所で剥離している。残存部分が少なく文様の全体は明らかではないが、太い沈線で 4 か所に円形に近い文様が配されている。薄手で色調はにぶい橙色を呈する。

103～122は破片資料である。103、104は渦巻状、105～107は 2 、 3 条一組の沈線での方形文様、弧線を繋ぐ文様が描かれている。105a・bは壷形にちかい器形で胴部上半がやや張り出す。107a・bはL27区出土のもの。棒状工具での施文があり、精製された胎土で色調は明黄褐色である。108～113は波頂部に粘

土紐による連続した円形の貼り付けがある。2条一組の沈線文での渦巻き文様（109）や直線的文様（108、111～113）、弧線を繋ぐもの（110）がある。108a・bは薄手の大型土器。包含層と一部土器集中6出土の破片が接合された。全体の文様構成は知られないが、台形状の突起があり、棒状施文具による深い沈線文で何段かにわたって区画した中に矩形の文様が描かれている。109a・bは胴部が張り出す器形である。A地区南西側の遺物集中地区からやや離れた、I27区から出土した。口唇の内側に細長く粘土を折り返し、波頂部には刻みが加えられている。胴下半部は無文で、口頸部には方形あるいは上下の沈線文と弧線で繋ぐ文様がある。胴部文様は縦に連続する渦巻き文（109a）とその間に直線的文様がある（109b）。施文具は棒状工具と半截竹管状の2種類が使用されている。胎土に黒雲母の混入が顕著である。110は横方向の削り調整跡が顕著である。111～113は同一個体。台形状の突起が間隔をあけずに複数箇所あると見られ、円形貼付文は指頭でくぼみが付けられている。109に類した文様構成である。

114、115は垂下する蛇行沈線文が施されている。114は口縁が内湾するもので浅鉢形土器であろう。115は折り返し口縁部に、横長の方形文様がある。焼成がよく、胎土が緻密で内外面共によく磨かれている。

116～122は直線的文様のもので、116、117、120、121は平行沈線文が施されている。116は数か所に半円形状の波頂部があり、沈線文は部分的に途切れる。117は土器集中6のもの。118は斜格子目の文様がある。119a～cは同一個体。口唇断面は角形（119b）で口唇直下は幅の狭い無文帯である。胴部には3条一組の沈線文での大柄な交差する文様がある。土器集中11と周辺の包含層から出土したものである。120は口縁に沿って2条施文されている。胎土は粗く、海綿状骨針が混じる。121はやや肥厚させた山型突起部の頂部に指頭でくぼみが加えられている。

②縄文地に沈線で文様が描かれるもの（29、123～132）

縄文は浅く疎らに施されるものが多く、原体を斜位に回転させ横走気味の縄文となるものが多い。全体の様相がわかるものでは、口唇直下は無文が多く、胴部下半は無文となる。

29は壷形土器、単節の縄文が浅く疎らに施文され、先端がササラ状となった半截の施文具で、縦に垂下する蛇行文様と曲線文が描かれている。

123～127は上下の沈線文を弧線で繋ぐ文様がある。123、125は2条一組の沈線文のものでいずれ緩やかなは波頂部があり、地文は無節である。124、126は円形の貼付文がある。124は胎土に海綿状骨針が混入する。128aは、地の縄文が疎らでほとんど無文（128b）に近いといってよい。突起部を肥厚させ、棒状工具で刺突を加えている。沈線の施文は粗い。129は方形の文様を弧線で繋ぐもので波頂部に刻みがある。130は太い沈線が一条引かれるもので、低い突起部は指頭でくぼませている。

131、132は壷形土器。131は非常に細いLR原体による縄文が地文である。頸部と胴下半部を区画し、複数単位の相対する三角形の文様が描かれている。薄手で焼成がよく、胎土はにぶい橙色を呈する。132a～cは同一個体。把手を有する壷形土器の口縁部である。貼付帯がめぐるもので、太い原体による左下がりの縄文が施文されている。頸部の無文部には弧線を繋ぐ文様が、体部には直線的文様がある。次段階、盛土2類の可能性もある。

2種：新道4遺跡盛土2類に相当するもの（30～36、133～135、148）

深鉢、浅鉢、鉢、壷形土器がある。深鉢土器では口縁部で括れて外反し胴部で張り出す傾向がある。波状口縁のものには波頂部を中心に内外面に細い粘土紐で弧状の文様を描くものがある。突起部には指頭で押捺するものがある。太い沈線で文様を描くもの、櫛歯状施文具で文様を描き縁取るものがある。文様は頸部と胴下半部を沈線で区画した中に乙字文、雷文、縦に蛇行する文様、流水文等が施される。これらの文様は5類までみとめられる。

30は土器集中 6 と周辺の包含層出土の破片が接合した。口縁部の 4 か所に緩やかな波頂部があり、この部分をわずかに肥厚させ指頭で 3 か所に窪みを加えている。上面観は方形である。文様帯は胴上半部で、太いLR原体による斜行・横走気味の縄文地に先の尖った棒状工具による 2 条一組の沈線で曲線的文様が描かれている。31は小型の土器。小波状口縁になるとみられる。口唇上にも施文がある。LR原体での縄文が浅く施文され、 2 条一組の沈線文で曲線的文様が描かれている。32は現存する 2 か所に30に類する高まりがあり、くぼみが付けられている。ややいびつな器形で、太い原体による右下がりの縄文が浅く疎らに施されており、櫛歯状工具で流水文様を描き細い沈線で縁取りしている。

33は土器集中 6 ・11の破片13点と、広範囲の包含層（OY47、C50、D・F51区）出土破片が接合したもの。全体の 2 分の一程が残存するが、口縁部と底部は直接には接合されない。胴半ばで張り出す器形の壷形土器。全体の文様は知られないが、磨消縄文と円形刺突文が特徴的である。器面をよく研磨調整した後施文が行われている。口唇直下と頚部および胴部下半の最も張り出す部分にあらかじめ縄文を帯状に施し、さらに頚部の 4 か所では同様に帯状に縦方向に施文している。太い 2 条の沈線を施文後、頚部では 4 か所に縦の沈線を施し中央帯の縄文を磨り消している。胴部では 2 条一組の沈線で渦巻状文様や上下と繋なぐ文様を描き、 2 条の沈線間に縄文を充填し、文様の屈曲部分に中空の施文具による円形刺突文を加えている。胎土に海綿状骨針が混入する。34は包含層出土の破片と土器集中 6 の破片が接合したもの。底部は欠損しているが全体の 3 分の 2 が復元できた。最大径が胴部上半にある深鉢形である。あらかじめ器面を調整し、口唇直下、頚部、胴下半部に沈線を巡らせ文様帯を区画した中に、幅の広い櫛歯状施文具を使い矩形や三角形の入れ子状の文様を描いている。その後沈線で縁取りをしている。35は土器集中 5 と30mほど離れたA・B47、B49・50区出土の破片が接合した。底部は欠損しているが 5 分の 4 ほどが残存する。口縁部の波頂部の 4 か所で内外面に粘土紐を貼付している。一部ではこの部分にも施文がある。口縁部の狭い範囲には指頭での調整跡がよく観察できる。細いLR原体による縄文地に横走沈線での区画があり、乙字文と雷文が交互に描かれている。一つ置きに無文帯を形成する意識があったとみられるが、部分的に磨り消されているだけである。胎土に海綿状骨針が混入する。36は口縁部の 3 分の 1 ほど残存するもので、浅鉢である。A地区の遺物集中箇所から離れた調査区南東端から出土した。 6 か所ないし 7 か所に山形の突起部を持つもので、この部分に貼付文があり部分的に沈線で縁取られている。縄文帯には乙字文、無文部分には上下から配される文様がある。

133a～cは同一個体の破片。口縁部にやや幅広い無文帯があるもので、横走気味の縄文地に大柄な雷文、乙字文が施されている。胎土に白色岩片が混入する。134は頚部の括れが強いもので、櫛歯状工具で文様施文後、沈線での縁取りがなされている。135は突起部に貼付文がある。色調は黒褐色で焼成がよい。148は胴部～底部の破片。櫛歯状施文具での文様を太い沈線で縁取っている。

3 種：新道 4 遺跡盛土 4 類に相当するもの（37～48、136～147）

口縁部に一条の沈線文を施し無文帯を形成するものが多い。口縁部の幅は前段階よりも広く、文様帯が多段化する傾向がある。波状口縁のものではその内外面に沈線で弧状の文様を描くものがある。無文のものに加え縄文を施し、沈線で雷文、乙字文、流水文を描くものがある。

37～40、43、45～48は深鉢形土器。37～39、41は遺物集中区から出土したもので、いずれも無文部を挟んで多段の文様帯がある。縄文部分の空間に小さな「く」の字の文様が描かれる。40は緩やかな波状口縁で、太い沈線で縁取りされた中に磨消縄文で方形の文様がある。小さな「く」の字や、「,」状の文様を処々に配している。43は調査区南東端J36・37区周辺から出土した。全体の 5 分の 3 ほどが残存する。無文地のもので、口縁部にも部分的に施文がある。45は土器集中 9 から出土した。胴下半

～底部にかけてのもので底径が18cmほど、器高が40～50cm程になると予想される大型深鉢土器。底部付近の広い範囲が無文で内外面ともによく磨かれている。体部の文様は磨消縄文による大柄な文様がある。底部に浅く「網代痕」が観察される。図のほぼ縦方向は幅 6 mmほどの平らで両端に少し突起部のある素材でやや間隔をあけて 1 本ずつ、横方向は幅 2 、 3 mmのわずかに厚みのある素材で、 1 ～1.5 cmほどの間隔で 1 本と 2 本が交互に観察できる。胎土に海綿状骨針が混入する。

41は小型の鉢。44は調査区南東端、T27区で検出された土器集中14のもの。口径が40cm近い鉢形土器。破片は細かく割れていたが、全体の 3 分の 2 ほどが残存する。色調は全体が灰褐色で焼成がよく、内面はヘラ状工具での調整痕が底部付近まである。底径は25cmで全面に「網代痕」がある（図版110）。図のほぼ縦方向は、幅 3 mmほどのやや厚みのある素材（繊維が観察できる）で 5 ～ 7 mm程度の間隔をあけて 1 本ずつを 4 列、 2 本並列の一列の繰り返しとなっている。また図横方向はほぼ同じ幅の素材で縦方向と同じ程度の間隔とみられるが、下に潜っている側なので明瞭ではない。胎土に白色岩片がまじる。42は土器集中12のもの。色調は黄橙色で口縁部と底部を欠損する。胴が丸みを帯びる壺形土器である。底部付近は無文で、体部には縄文施文後に太い沈線で相対する「スパナ状」の文様を 3 か所に配し、上下に三角形文様を入り組ませている（拓影図）。この文様は大津式に特徴的な「カニのはさみ状」文様に通じるものかもしれない。沈線が太いこともあり、盛土 2 類くらいに位置付けられる可能性がある。

46～48は底部付近の破片。46は沈線文様がある。47は45に類する流水文様がある。48は深鉢であろう。底部まで文様があるもので、磨消縄文で大柄な入組文が描かれる。

136～139は文様帯が多段のもの。140～144は口唇断面が角形でこの部分にも施文があり、縄文地に沈線で鋸歯状文、円弧文がある。140は調査区南東側U26・27・28区周辺から出土した。141は波状口縁の内外面に部分的に施文される。これらは盛土 4 類の内の新しい段階である。144は鉢形土器の可能性がある。

146は壺形土器の口縁部である。無文で、対になる 2 か所の内外面に縄文を施文し、沈線で文様を施している。147a～cは同一個体の破片。胴部で張り出し（147a・b）、底部から直線的に立ち上がる器形とみられるが（147c）、全体の様相は不明である。無文地に沈線で入り組み状の文様がつけられている。古い段階の可能性がある。

4 種：新道 4 遺跡盛土 5 類に相当するもの。白坂 3 式に相当する（145）

145は波状口縁になるもので、口唇に施文がある。口縁部に無文帯が形成されている。

5 種：十腰内Ⅱ式の一部に相当するもの（149）

149はOZ49区から出土した。搬入品とみなされる土器片である。色調は黒褐色、焼成が非常によく、胎土は緻密で、内外面ともによく磨かれている。わずかに内湾する器形で、文様は沈線での区画に縄文を施すもので、口縁部では粘土を盛り上げ指頭でなぞり貼り付け状にしている。

地文のみのもの、無文のもの

①撚糸文のもの（49、50、176～177）

器形のわかるものは 2 個体で、ほぼ同じ大きさでいずれも最大径が胴部にあり口縁部でくびれる。49は破片が広範囲に散在していた（E51・52、F52、J49・51、K52区）。最大で30 mほど離れて出土した破片が接合している。全体の半分ほどしか残っていないが、複数か所で緩やかな波状となる。R原体による絡条体を主に縦方向に回転施文している。内面はよく磨かれ、胎土に白色岩片がまじる。50は底部が接地面でややくびれる。口唇直下を無文としているがその際の指頭圧痕が明瞭に残る。R原体の右巻きの撚糸文で、底部では縦に転がしている。176a・bと177は同一個体である。R原体右巻きで間延びした節が観察できる。色調は黄褐色でほかの土器と比べて、比重が軽い。胎土に白色岩片が混じる。大津式より古い段階かとみられる。

②縄文のみのもの（51～57、59～71、150～175、178、179）

横走気味の縄文のもの（51～55、57、59～61、63）もの、斜行縄文が施されているもの（56、62、65、66）、縦行縄文もの（61）がある。平縁のものと緩やかな波状や小さな波頂部をもつもの（52、57、59）がある。胴下半部を無文に調整しているものが多い。地の縄文は単節縄文のものではLR原体（51～55、57、59、62、65～67、71）が多く、RL原体（56、64、68～70）は少ない。無節のもの（60、61、63）もある。折り返し口縁のものや口唇直下の狭い範囲を無文とするものがある。15cmに満たない小型のものと20～30cmにおさまるもの、30cmを超える大型のものがある。

51は底部が張り出す器形である。縄文施文後、器面をなで調整しているので疎らとなっている。52、54、55、59は折り返し口縁のものである。55がやや大きめであるがほぼ同じ大きさで、土器の厚み、色調、胎土が共通する。残存する部分から推定するといずれもやや寸胴の器形になるのであろう。52は3か所に波頂部がある。55と59は調査区南東端のL27・28区出土のもの。55は破片は相当数あり半数ほどが接合できた。ごくわずかに波打ち、やや幅広い折り返し口縁である。縄文施文後に幅5、6mmのヘラ状施文具で口縁から底部まで縦方向に調整している。59は薄手で折り返し部分が幅広いもの。4か所に突起部を設けこの部分に粘土紐による貼付文がある。

53は土器集中6と周辺部の包含層から出土した破片が接合した。6か所に山形の波頂部がある。薄手で焼成がよく、口唇は平滑に調整されている。56は器面に凹凸がある。57は土器集中6と周辺部の包含層出土の破片が上下2つに接合されたもので、直接は接合していない。底部からまっすぐと立ち上がる器形で、口縁の4か所ないし5か所に緩やかな波頂部があり、この部分に棒状施文具で刻みがある。部分的に口縁が折り返されている。胎土に白色鉱物の混入が顕著である。60は緩やかな波状を呈する。

61、63は小型であるが厚手のもの。61は口唇断面が尖り気味のもの。胴部上半で張り出す器形である。65、66と類する器形であろう。62は口唇が平滑に調整され、断面は角形である。

64～66は胴部で張り出し、頚部がくびれる点に共通性がある。64は土器集中6として取り上げたものであるが、20mほど離れた包含層（F52区）のものが接合した。底部で欠損している以外は残存している。鉢形に近い器形である。口縁部は粘土のはみだしがあり、器面は粘土の輪積みの位置がわかるほど段状の凹凸となっている。内面はヘラ状工具での横方向の調整が観察できる。0段多条の太い原体である。65と66は底径に比べ高さのある細形の壷に類する器形である。

71は調査区南東端I29～31、J31区付近から出土した。現存する高さ40cmの大型土器。大きさに比べて薄手のもので色調は明褐色である。頸部から上が欠損するが、全体の3分の1ほどが残存する。胴部でやや張り出す器形で胴下半部はよく磨かれている。底部付近は指頭で調整した結果であろう、やや括れている。また底部内面には指頭の痕が無数にあり凹凸が著しい。縄文の施文は浅く疎らで、頚部に粘土のボタン状貼り付けが部分的に残っている。胎土に白色岩片が混じる。

67～70は底部。67は土器集中7と周辺の包含層出土の破片が接合した。わずかにあげ底ぎみである。70は高台部分である。

150～164、166、170は横走気味の縄文が施されている。155が無節L原体のほかはいずれもLR原体による縄文である。縄文の施文は概して疎らである。折り返し口縁のもの（150～152）がある。全体のわかるものでは小突起部をもつもの（152、153、159、162、170）、緩やかな波状口縁（154～158）のものがある。胎土は砂粒が多いもの、鉱物が目立つものなどがある。151は太い原体を使用している。152の突起部は、この部分を肥厚させ、指で摘み上げることにより形成されている。153はほぼ全面に施文がある。口縁部でややくびれる器形である。口唇部をごくわずかに盛り上げ、この部分を棒状工具で斜めに刻んでいる。155は施文後に器面がなで調整されている。156は口縁部が不規則に波打つも

ので、口唇直下の狭い範囲が無文である。157は口唇を平滑に調整しているもので、施文後にヘラ状工具で縦方向に調整している。胎土がほかのものと比べ精製されている。158は比較的大きくくびれる器形である。159は突起部に棒状工具でくぼみが付けられている。161と162は同一個体である。調査区南東端のJ27、K26・28区周辺部から出土した。口唇直下は無文で口唇上と内面にも施文がある。部分的に肥厚させた突起部があるが欠損している（162）。胎土に白色岩片が混じる。色調は黄褐色である。後期のものと判断したが中期の可能性もある。164も同様、口唇に施文がある。

165、168、169は縦行気味の縄文が施されている。165はLRL原体による複節のもので焼成が良い。168はRLR原体、169はLR原体である。167a～c、171は斜行縄文が施されている。167は口唇に施文がある。太いRL原体による縄文で直線的な器形である。胎土に白色岩片が混じる。171は波状口縁。細い原体による縄文がある。

172a・bは無節（L原体）の縄文が粗く施されている。回転方向が不規則で重複する部分が多い。小さな突起部があり、この部分に指頭でくぼみを付けている。内面はよく調整されているがヘラ状工具での横方向の調整痕が残る。胎土に白色岩片が多量に混入する。173、174a・bは底部・胴部の破片。

175、178、179は縄文が施されているものであるが、施文後部分的あるいはほぼ全面を磨り消した結果、無文に近い様相となるものである。175は部分的に折り返し口縁で、わずかに縄文が観察できる。178は口径がおそらく50㎝を超すであろう。破片が広範囲から出土している。口唇断面はやや尖り気味で、L原体による無節の縄文が疎らにある。ナデ調整が観察できるが、器面調整というよりも縄文を消す意図があるとみられる。179は口唇断面がやや角形に近いが、178と同一個体であろう。ほとんど縄文が消えている。いずれも胎土に海綿状骨針が混入する。

③オオバコのとうの回転文のもの（58）

58は器高39㎝、Ⅳ群a土器のなかでも大型である。全体の3分の2ほどが復元できた。口唇は平滑に調整され口縁部でやや外反する器形である。無文部および内面はよく磨かれている。

④無文のもの（72～87、180～187）

突起部があるもの（72、73、84）、平縁（74～80）、緩やかな波頂部があるもの（81）がある。深鉢形のほかに浅鉢（82）、深めの皿状のもの（83）がある。器面の調整はヘラ状工具等で主に縦方向になされ、よく磨かれているものが多い。底部内面に指頭の跡が無数に残るものがある（77～79）。

72は口縁部の3か所に、指頭でくぼみが付けられた半円形状の突起部がある。器面は凹凸が著しく、縦方向にささら状工具での調整痕が残る。内面に輪積みの跡が明瞭に観察でき、幅10～15㎜ほどの粘土紐を10数段積み上げている。73は折り返し口縁のもので、円形の貼付文が剥落した痕跡がある。74、75、81、82は土器集中6出土のものと周辺の包含層（OZ47・48、A47・48区）出土のものが接合した。82を除き胎土に白色の鉱物が多量に混じる。74は口縁部に粘土紐2条を貼り付けている。頸部でややくびれる器形である。75は口縁部を2段に折り返している。内外面ともに平滑に調整されている。76は薄手で小型のもの。器面の凹凸が著しい。77は底部がやや張り出す器形である。78は土器集中8のもの。胴部がやや張り出す器形で、緩やかな波状口縁の可能性がある。79～81は胴部が張り出し頸部でくびれる器形である。80の胎土は74などと共通する。81は3か所に波頂部がある。部分的に口唇を平滑にしている。

82は口径が底径の2.5倍以上ある浅鉢形土器。ほぼ全体の破片が揃っていた。上面観は歪な円形である。磨きがかけられてはいるが部分的に削りの痕跡が残る。色調は明黄褐色である。83は調査区南東端R29区から出土した小型土器。胎土に白色岩片が混じる。84は薄手の土器。2か所に小さな突起部をつくり、指頭でつぶして平滑にしている。85～87は胴部から底部にかけてのもの。86は器面に1㎜ほどのごく小さな「孔」が無数にある。胎土に混入していた砂粒やごく小さな小砂利が調整の際抜けた

跡であろう。ヘラ状工具での調整痕がある。焼成がよく色調は淡黄色である。87は土器集中８と周辺の包含層（OZ47～49区）出土の破片が接合したもの。86同様の「孔」があり、86よりも小砂利の混入が顕著である。上げ底気味で、底部周辺には調整の際付けられた指頭による連続したくぼみが認められる。

180、182、183、186、187は波状口縁、180、181、184～186は折り返し口縁のもの。181は折り返しを繰り返しながら粘土を積み上げて行った結果であろう、その部分が文様のように筋状に観察される。182、183は同一個体である。櫛歯状工具での調整痕がある。187は３つの部分に接合できたものを、図上で復元した。86と胎土、焼成、調整が共通する。これら無文のものは大部分が大津式に伴うものであろう。

Ⅳ群b類土器（図Ⅴ－１－28～30－１～16、表10、図版83～85）

土器集中を含め487点出土した。Ⅳ群a類土器の分布とほぼ重なるほか、H38区から２個体分（手稲式）の破片が出土している。ウサクマイC式、手稲式に相当するものがある。

１種　ウサクマイC式に相当するもの（１～５）

一般的に口縁部に平行して１条沈線が引かれる特徴があり、口唇断面は角形で施文がある。

１は口縁部に複数の平行沈線文が施されている。LR原体による縄文地に乙字文が描かれている。頚部の無文部と胴下半はよく磨かれている。胎土に小砂利が混じる。２は薄手で焼成の良い小型の土器。口縁部が直線的に開く器形で７か所に波頂部がある。口縁部文様帯はLR原体による縄文地に弧線文様が連続して描かれている。体部の文様は磨消縄文で大柄な入組文が描かれている。３、４は土器集中９として取り上げたのもの。３は細いLR原体による斜行縄文が施されている。文様はないが、口唇の断面および施文、器形、胎土、焼成が２に共通することから、ウサクマイC式に相当するもの判断される。５は高さ12cmの小型土器。底部の接地面でやや張り出し、直線的に立ち上がる器形である。４か所に内傾する突起部がある。RLR原体と見られる細い原体による縄文が疎らに施されている。文様は先の尖った工具による細い沈線文で口縁部では波頂部を中心に６条、胴部下半にも平行線を６条施し、その間も連続する弧線で埋めている。やや異質の感はあるが、突起部の内傾する様相は手稲式と共通することから、ウサクマイC式の中でも新しい段階のものと考えられる。

２種　手稲式に相当するもの（６～16）

いずれも焼成が良好で、内外面ともに器面調整はよい。胎土は緻密で14、15を除き胎土に海綿状骨針が混入する。鉢形（６）と深鉢形（７～11）があり、平縁（６）と波状口縁（７～12）がある。口縁部は無文で、縄文地に平行沈線文を弧線で縦に繋ぐ文様のもの（６）、部分的に平行沈線文を省略し横に長いS字文様を連続して描くもの（８、９、11～13）や磨消縄文による文様のもの（10、14）がある。地の縄文は13a・bがRL原体、そのほかはLR原体である。

６は土器集中10出土のものである。底部は欠損するが全体の５分の４ほどが残存する。平行沈線文を２条ずつ繋ぐ弧線がある。補修孔が横一列に５個あり、さらに下方にも２個認められる。７と10はH38、I38区から出土した。口径に較べ胴部が細く、筒状を呈するもので、ほぼ同じ器形である。７は胴下半部から欠損しているが、それ以外はほぼ残っている。５か所に波頂部がある。縄文帯が４段あり、口縁部では波頂部の形に添って山形の沈線文を、２、３段目では２条並列する沈線文を斜めに不規則な間隔で加えている。10は全体の５分の４程が復元できた。４か所に波頂部があり、口縁部と胴部半ばの縄文帯で区画された中に曲線の沈線文による磨消縄文がある。８、９は同一個体。口径は20～25cm程である。12は平行沈線文を２条一組の短い線で繋いでいる。色調が橙色を呈する。14は磨消

縄文であろう。15、16は狭い間隔で沈線文が施されている。

Ⅴ群b類土器（図Ⅴ－１－31－１～７、表11、図版85）

１～６はX48区から出土した。48点はすべて同一個体である。周辺部にはほかにⅣ群土器がわずかにある。薄手で、色調がにぶい橙色を呈する壷形土器の破片である。胴部で強く張りだす器形であろう。肩部には、やや太目の沈線文を２条めぐらせ、頸部の無文部に棒状工具での刺突列がある（２～５）。口縁部には突起部があるとみられ（１）、体部にはLR原体による斜行縄文が施されている。胎土に黒色雲母の混入が顕著である。大洞C_1式に相当する。７はB地区の西側端の小さな沢地形の周辺部（A・B63区）から出土した。大きく３つに復元できたものを器形を想定し復元したもので、全体の２分の１ほどが残存する。鉢形土器で器面には細いLR原体による縦行縄文が施されている。口縁部に山形の突起部と２個一対の小さな半円形のB状突起が交互にあり、さらに山形突起の両側にも小突起がある。口縁内側には太い沈線が１条施され、山形突起部では三角に入り組んでいる。肩部には沈線を施文する前に突起が付けられ、工具で刻むことで２個一対となっている。大洞C_2式に相当する。

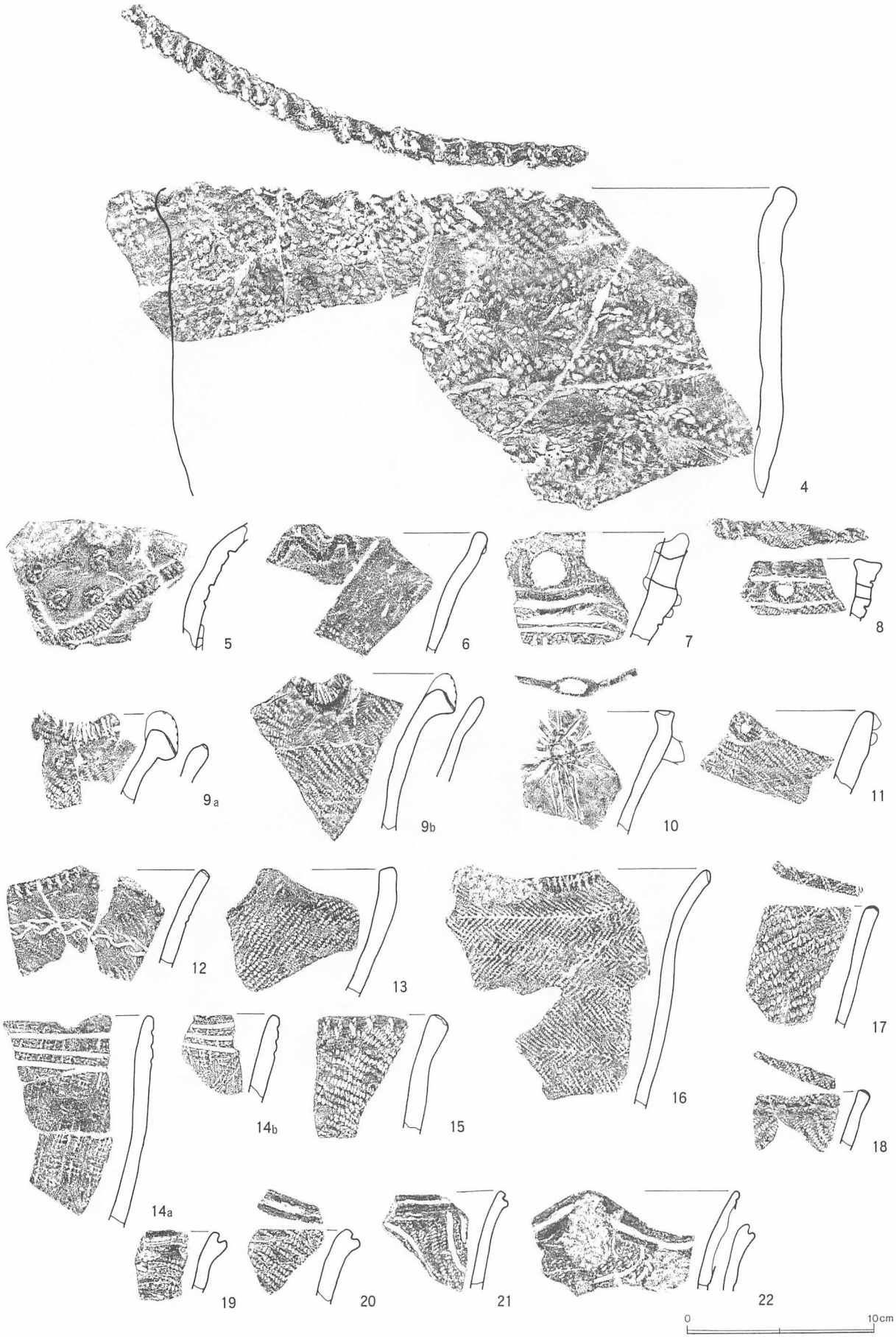
Ⅵ群a類土器（図Ⅴ－１－32－１～６、表12、図版85～87）

恵山式に相当するものである。ほぼ３か所にまとまって出土している（図Ⅴ－１－49）。甕と壷形土器（３）があり、底部はごく低い高台の付く上げ底である。縄文施文後に軽く磨きがかけられ、条が消えていたり節がつぶれている。口唇角にはやや幅のある棒状工具や先端の細い工具等で刻みが加えられる。縄文の原体は２がLR原体でそのほかはRL原体である。

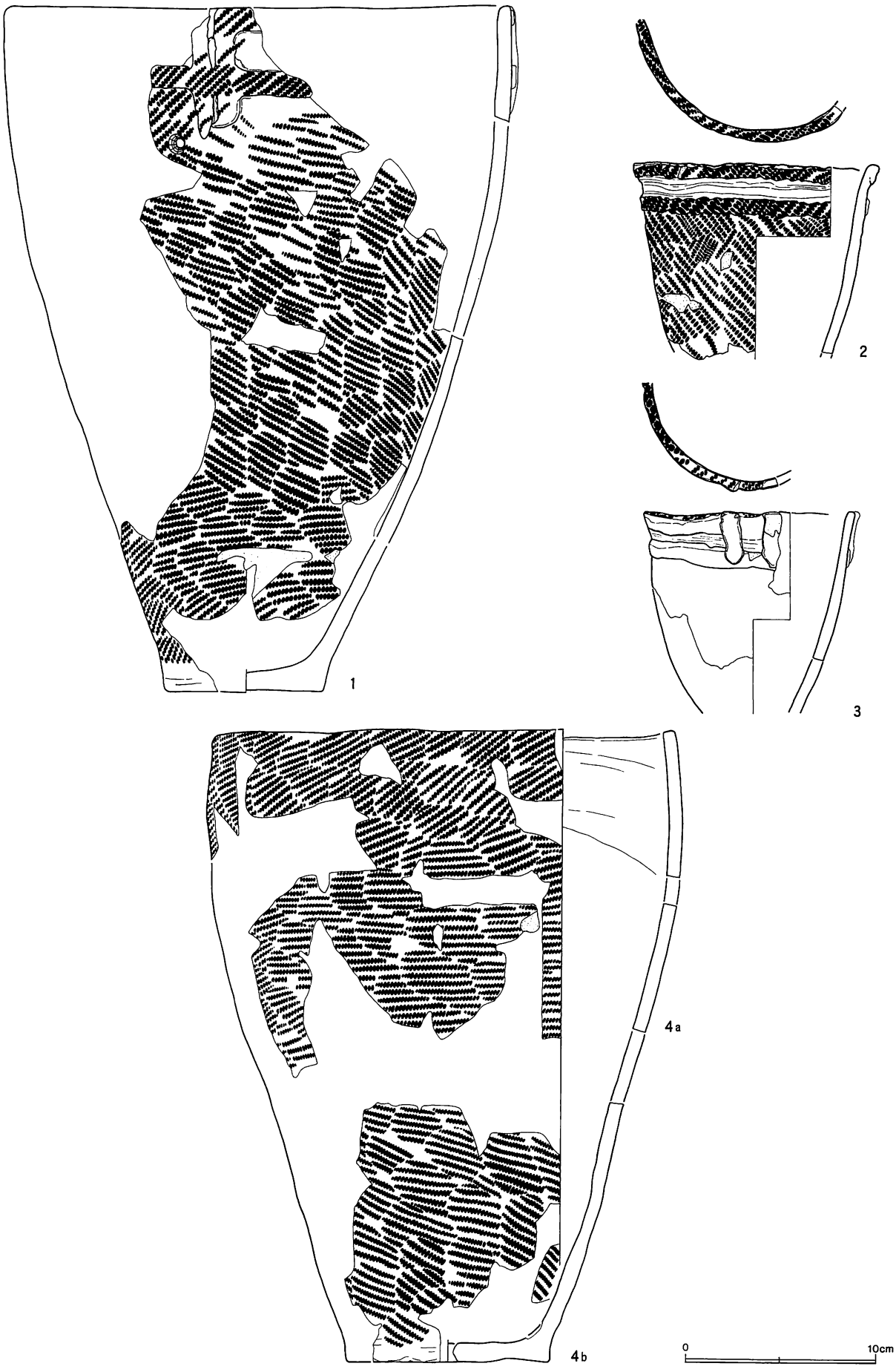
１～３は七飯町大中山13遺跡A地区出土資料（北埋調報111　pp32図１－１～６）に相当するもの。これらは４～６に先行する資料である。１と３は調査区東端の土器集中13と周辺部の包含層N28区出土の破片が接合された。１は大きく３つの部位に接合されたものと文様のある破片を、器形等を想定して復元した。肩の張りが弱く頸部が直立気味で口縁部が外反する器形のもので、頸部に無文帯を有する。口縁はごく緩やかな波状で、４ないし５か所に小さな粘土帯を内外面に貼り付け弧線文で囲み、棒状工具で刻みを加えている。体部では縦行縄文が、口縁部には斜行縄文が施されているが、後者では施文方向を変えている。頸部無文帯の上下には平行沈線文と波状の沈線文が施されている。胎土に黒雲母の混入が顕著である。３は口縁から胴部上半部の３分の１ほどが残存する。体部には縦行縄文が、頸部には帯状に施文がある。口縁に１条沈線文が引かれ、口唇角にはやや幅のある工具での刻みが付けられている。２は遺物集中区とOZ44区から出土した破片が接合した小型の土器。全体の４分の３ほどが残存する。胴部がやや張り出し口縁部が外反する。縦行縄文地に頸部と口縁部に平行沈の線文と小波状の沈線文が引かれている。

４～６は大中山５遺跡出土資料（七飯町教委1983）に相当する段階のものである。４と５は同一個体の破片。口縁部が外反する器形で大きさは６とほぼ同じであろう。口縁部と体部には細いRL原体による縦行縄文が、頸部では帯状に施文されている。棒状工具での刻みがある。６は土器集中４（M54区）として取り上げたもので、破片はL54、N53・54区など周辺部の５、６ｍ四方から出土している。全体の３分の２ほどが残存する。胴部が張りだし口縁部が外反する。口縁部と体部の張り出し部分よりも下半には縦行縄文が施される。頸部から胴上半部には沈線文で区画された中に横走する縄文が施され、その中央部には沈線で縁取りされた帯状縄文によって波状となる文様が施されている。波状文に対応する無文部分には横に短い線を加えている。口唇の刻みは指頭によるものとみられ、爪の跡がある。（遠藤）

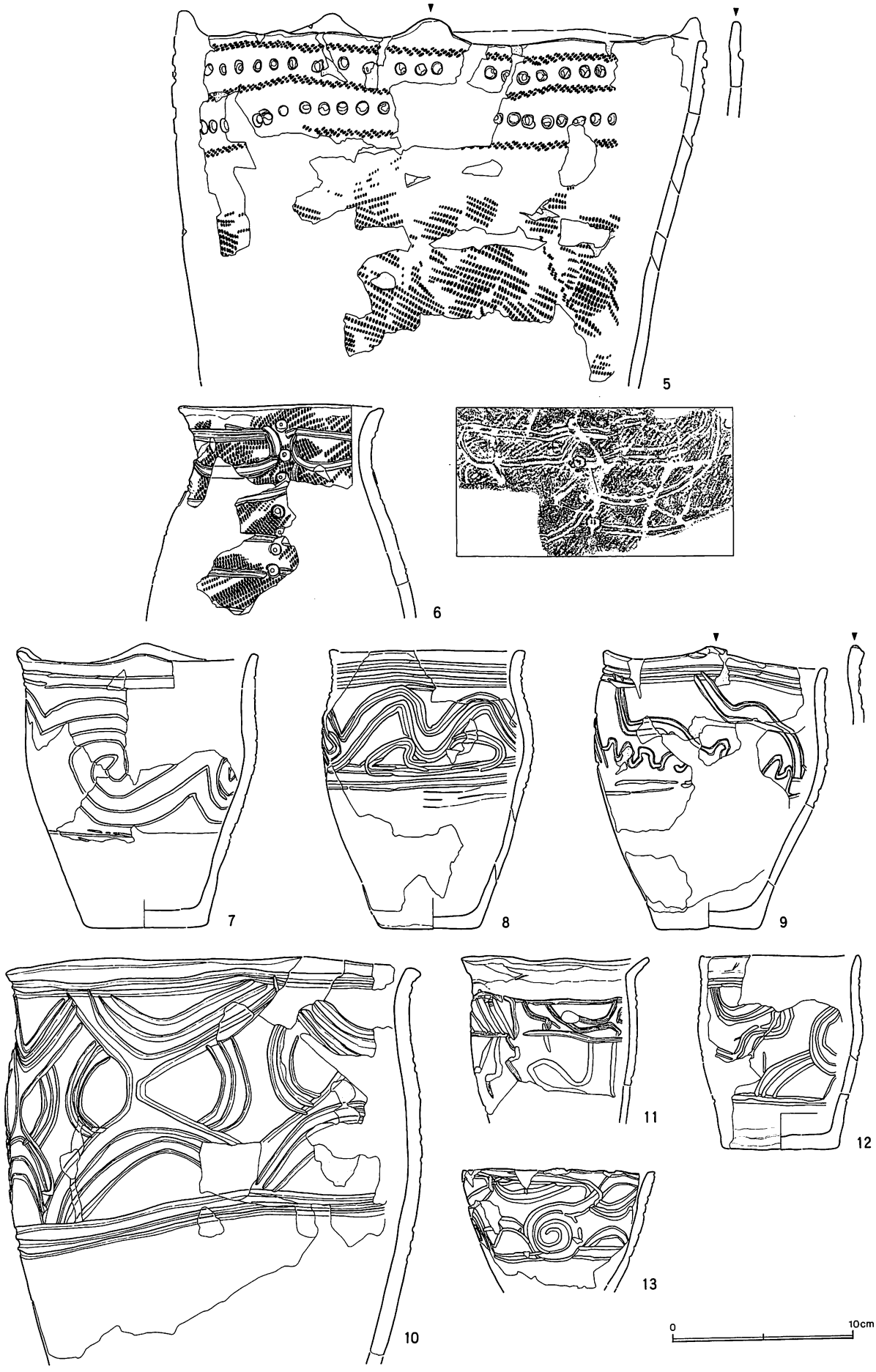
図Ⅴ－１－２　包含層出土のⅢ群ａ類土器（１）



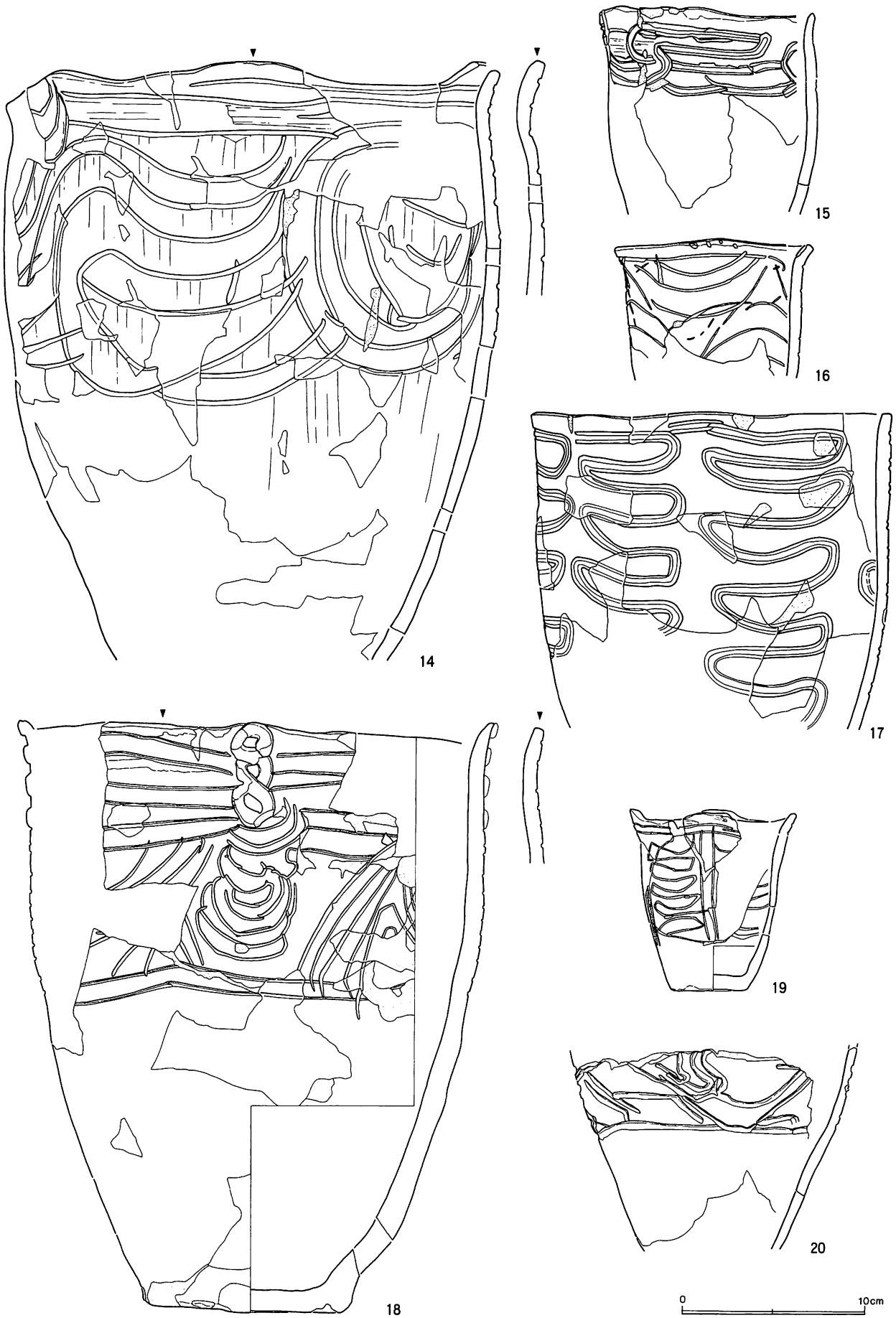
図Ⅴ－１－３　包含層出土のⅢ群ａ類土器（２）



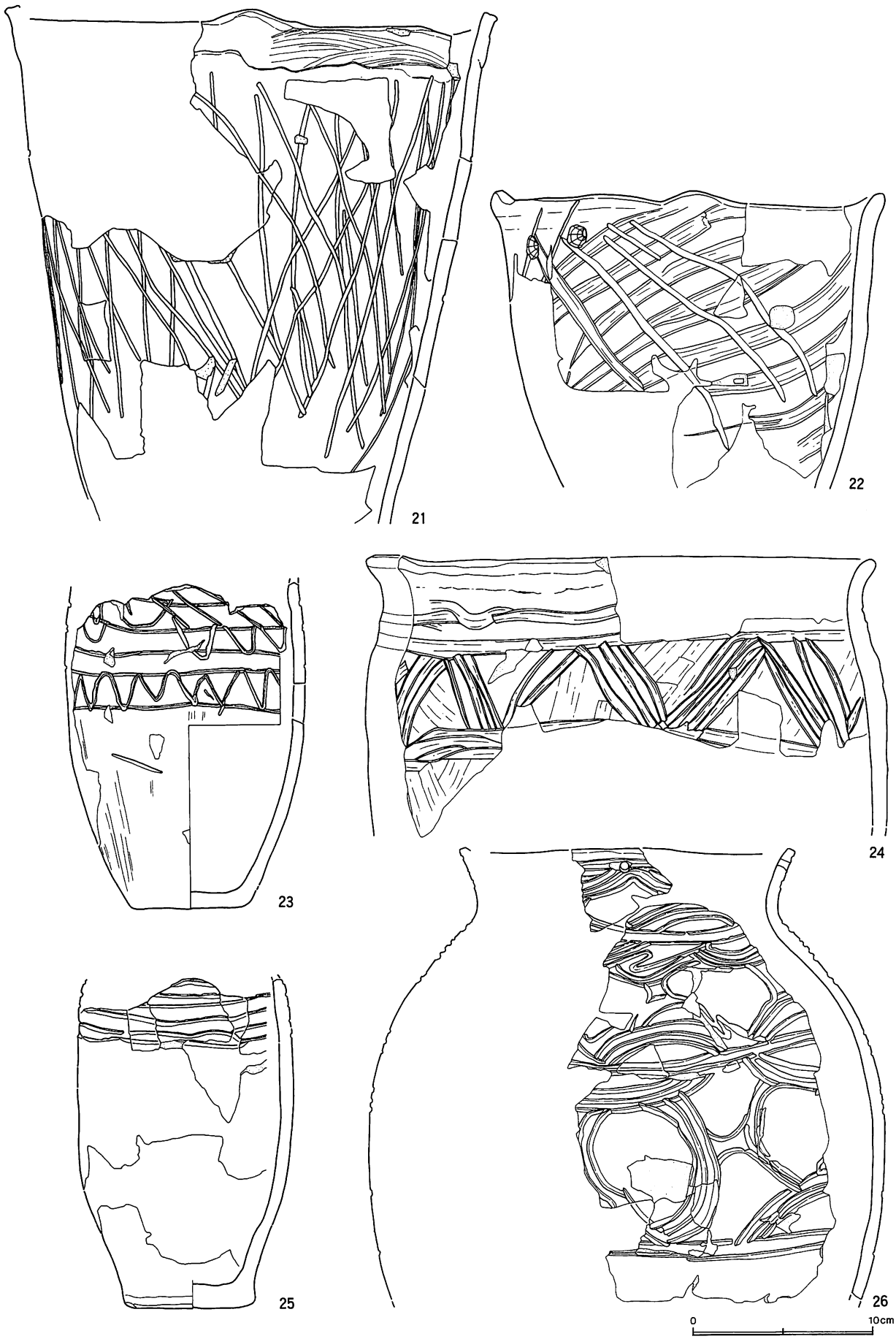
図Ⅴ－１－４　包含層出土のⅣ群ａ類土器（１）



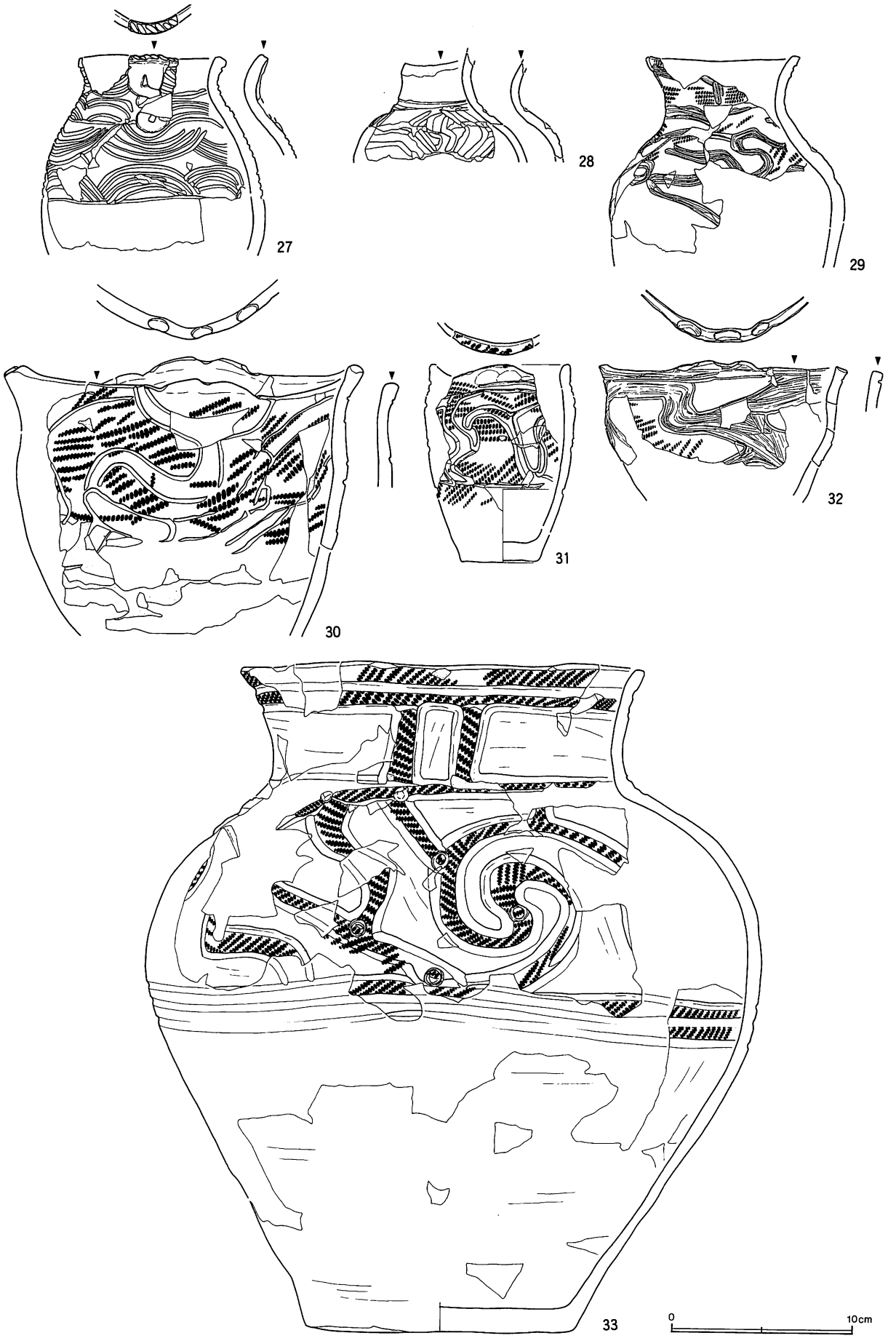
図Ⅴ－１－５　包含層出土のⅣ群ａ類土器（２）



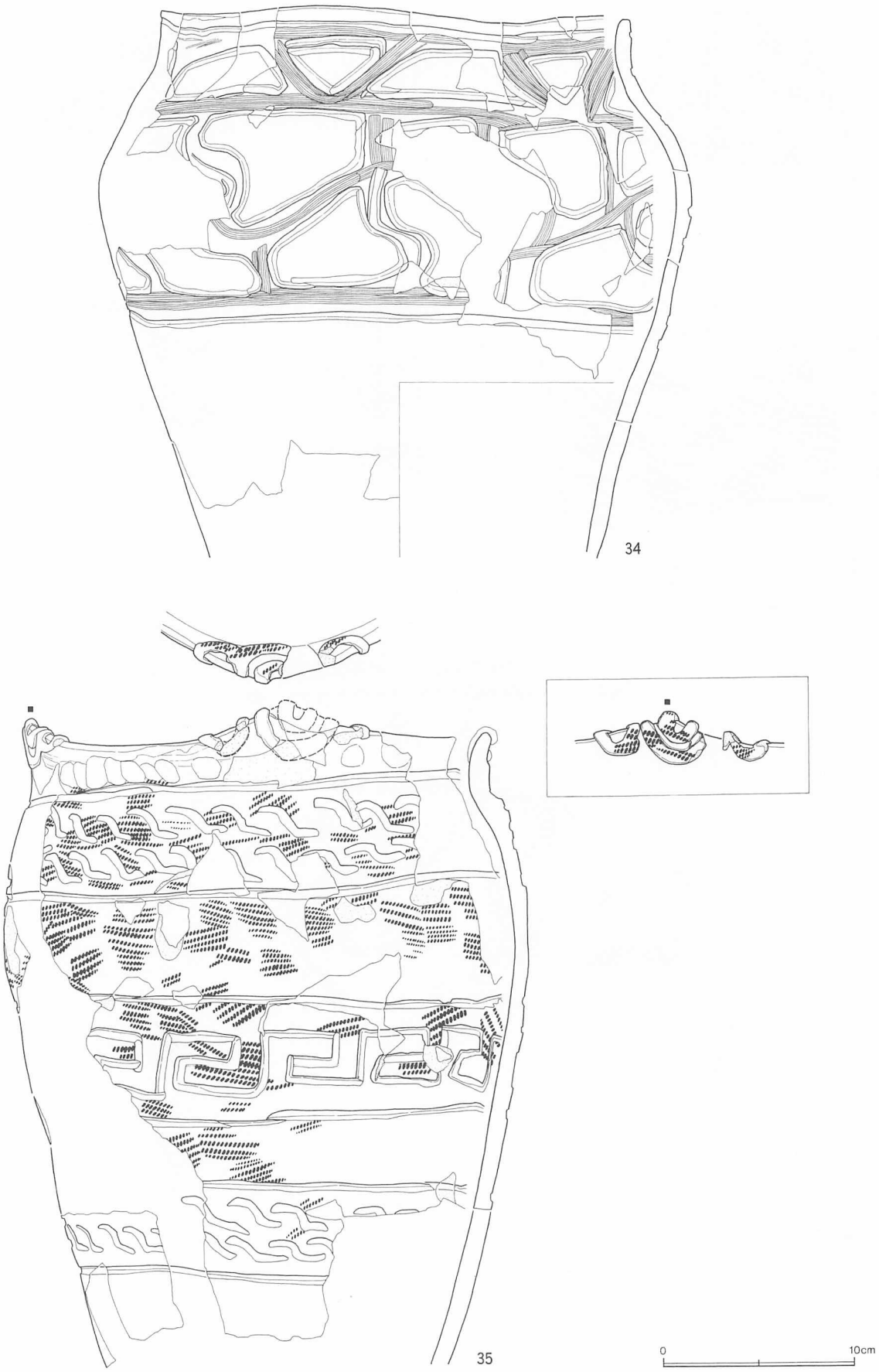
図Ⅴ－１－６　包含層出土のⅣ群ａ類土器（３）



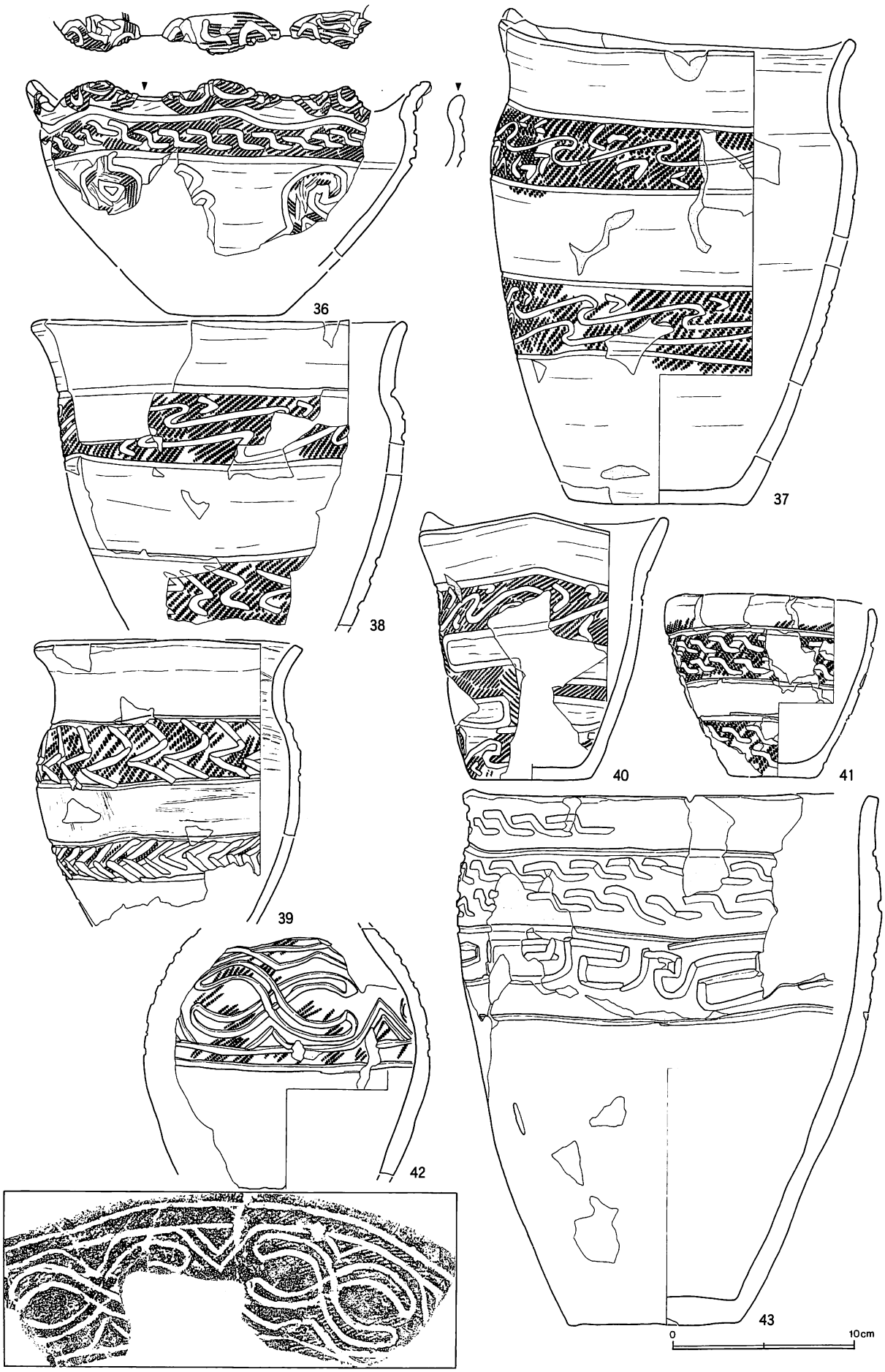
図Ⅴ－１－７　包含層出土のⅣ群ａ類土器（４）



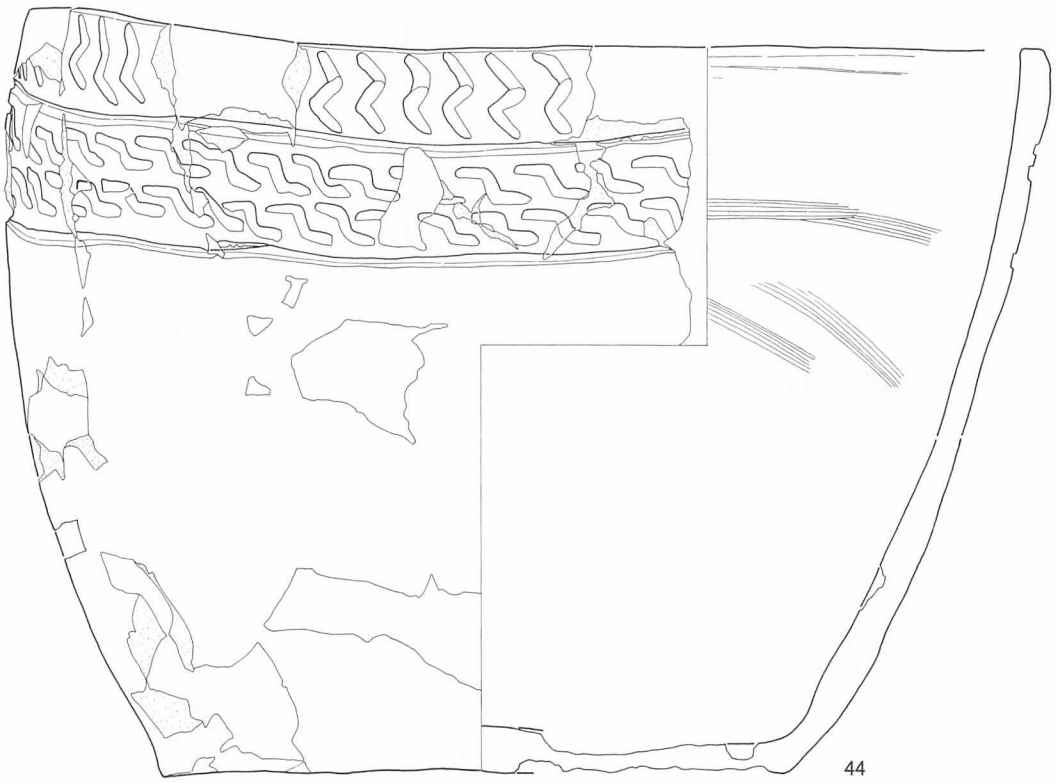
図Ⅴ－１－８　包含層出土のⅣ群ａ類土器（５）



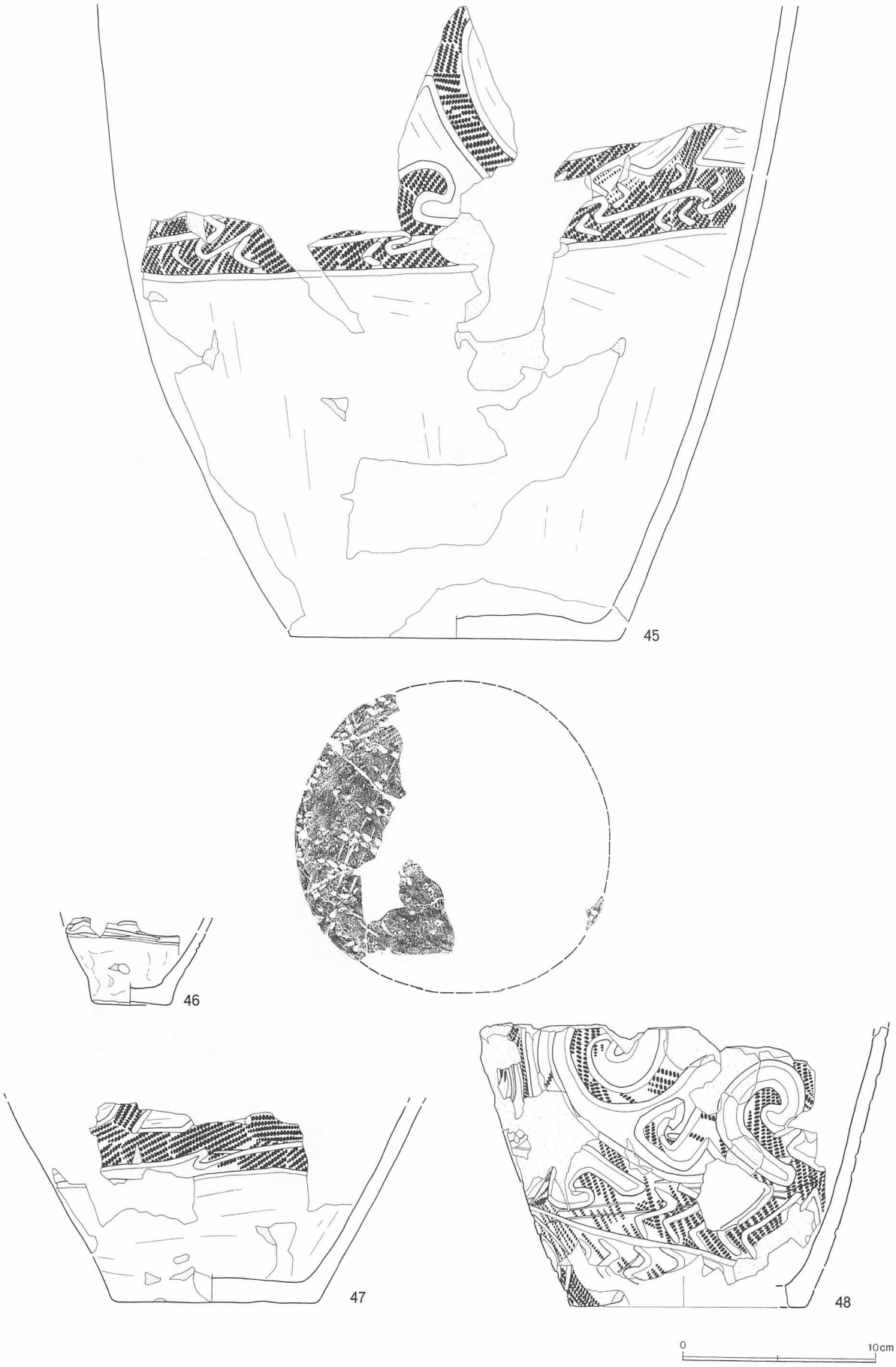
図Ⅴ－１－９　包含層出土のⅣ群ａ類土器（６）



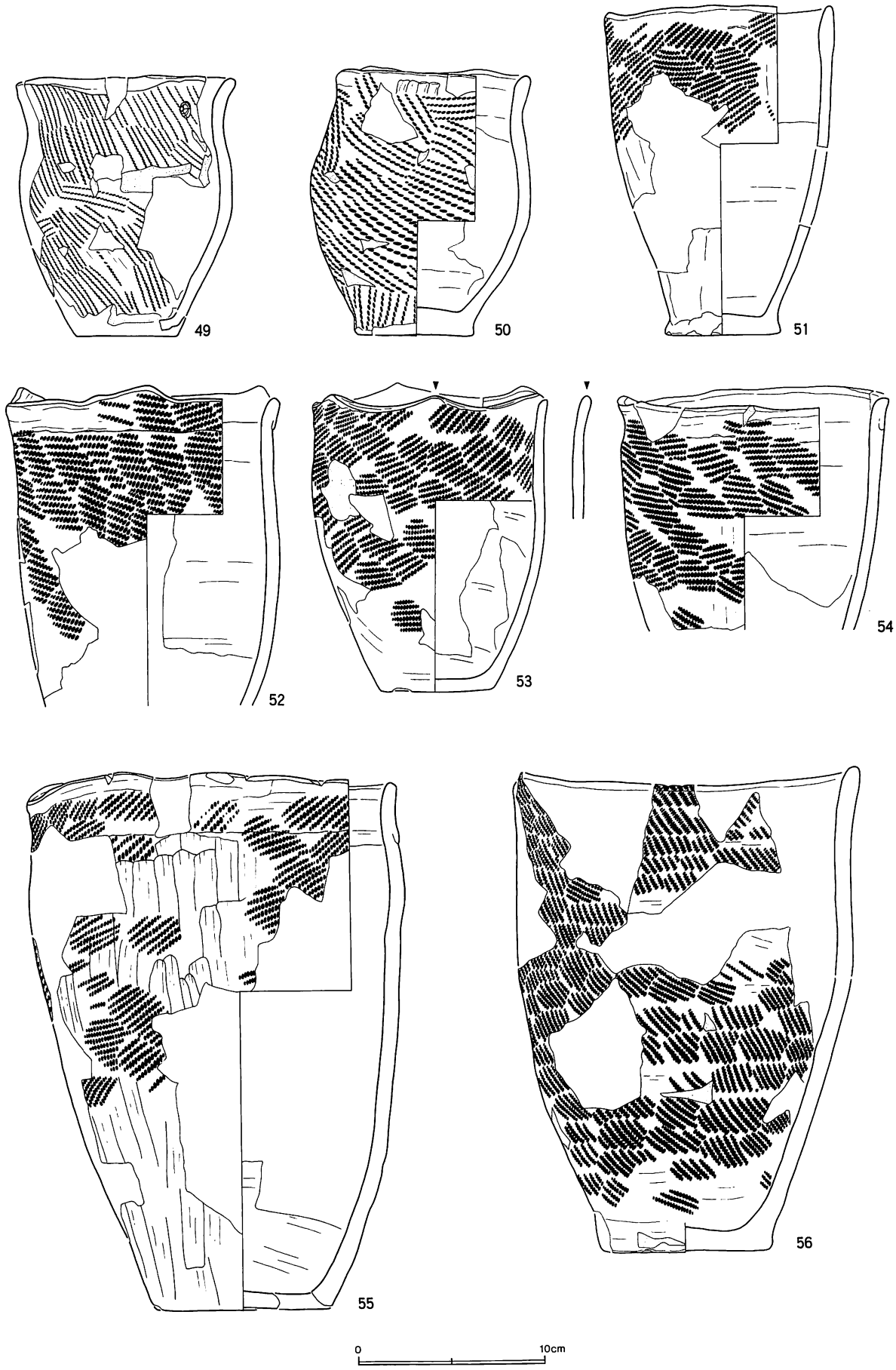
図V－1－10　包含層出土のⅣ群a類土器（7）



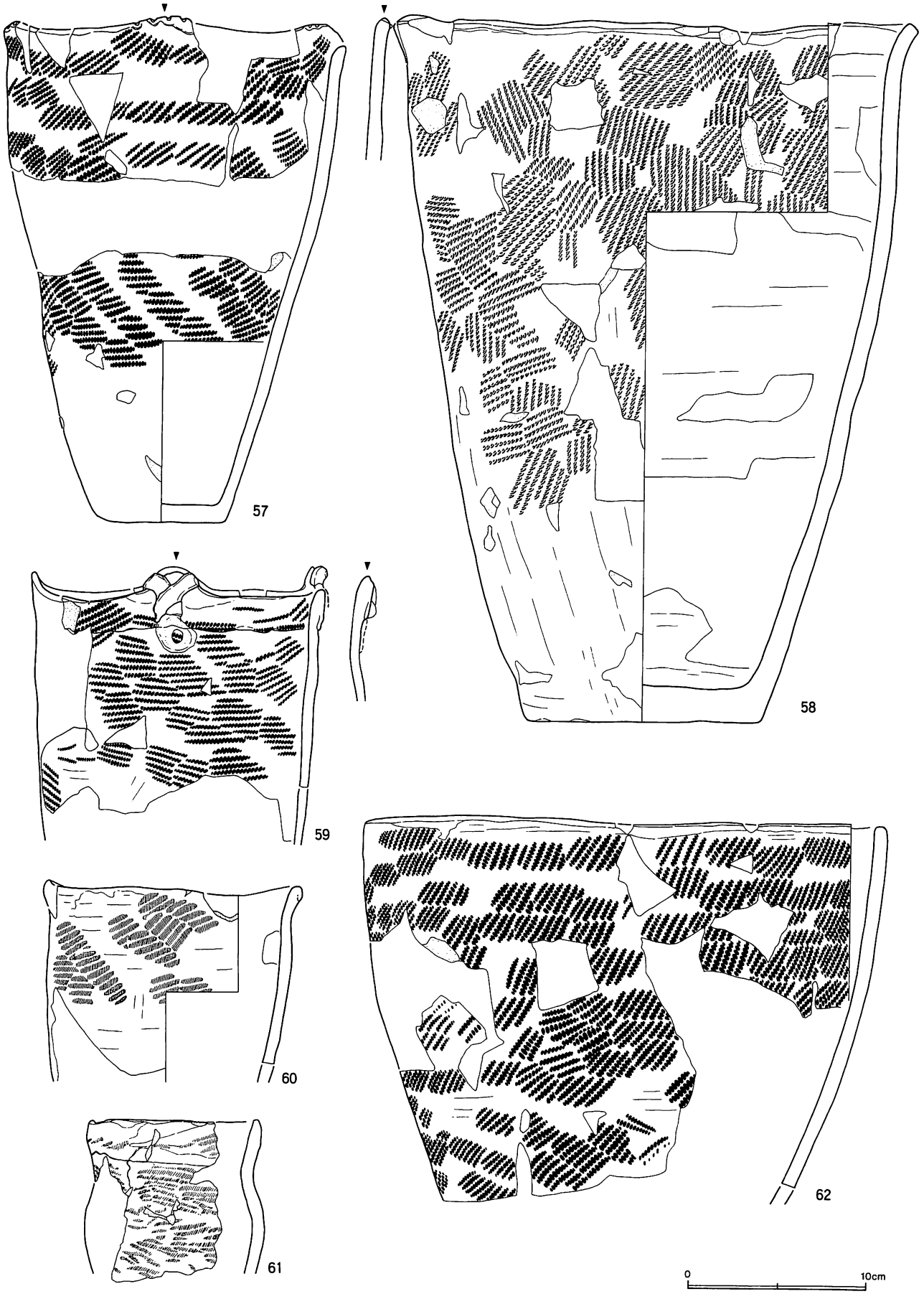
図Ⅴ－１－11　包含層出土のⅣ群ａ類土器（８）



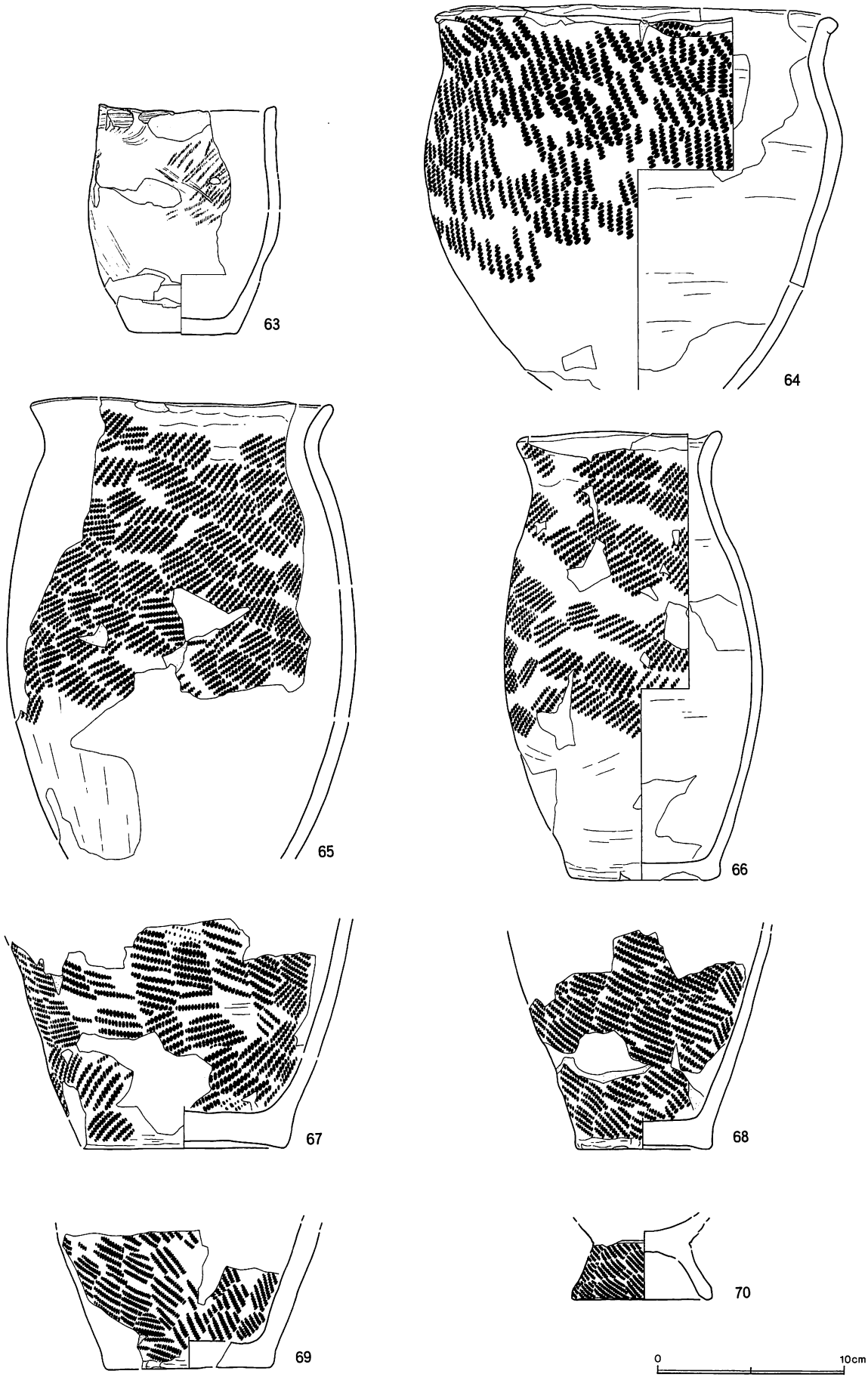
図Ⅴ－１－12　包含層出土のⅣ群ａ類土器（９）



図Ⅴ－１－13　包含層出土のⅣ群ａ類土器（10）

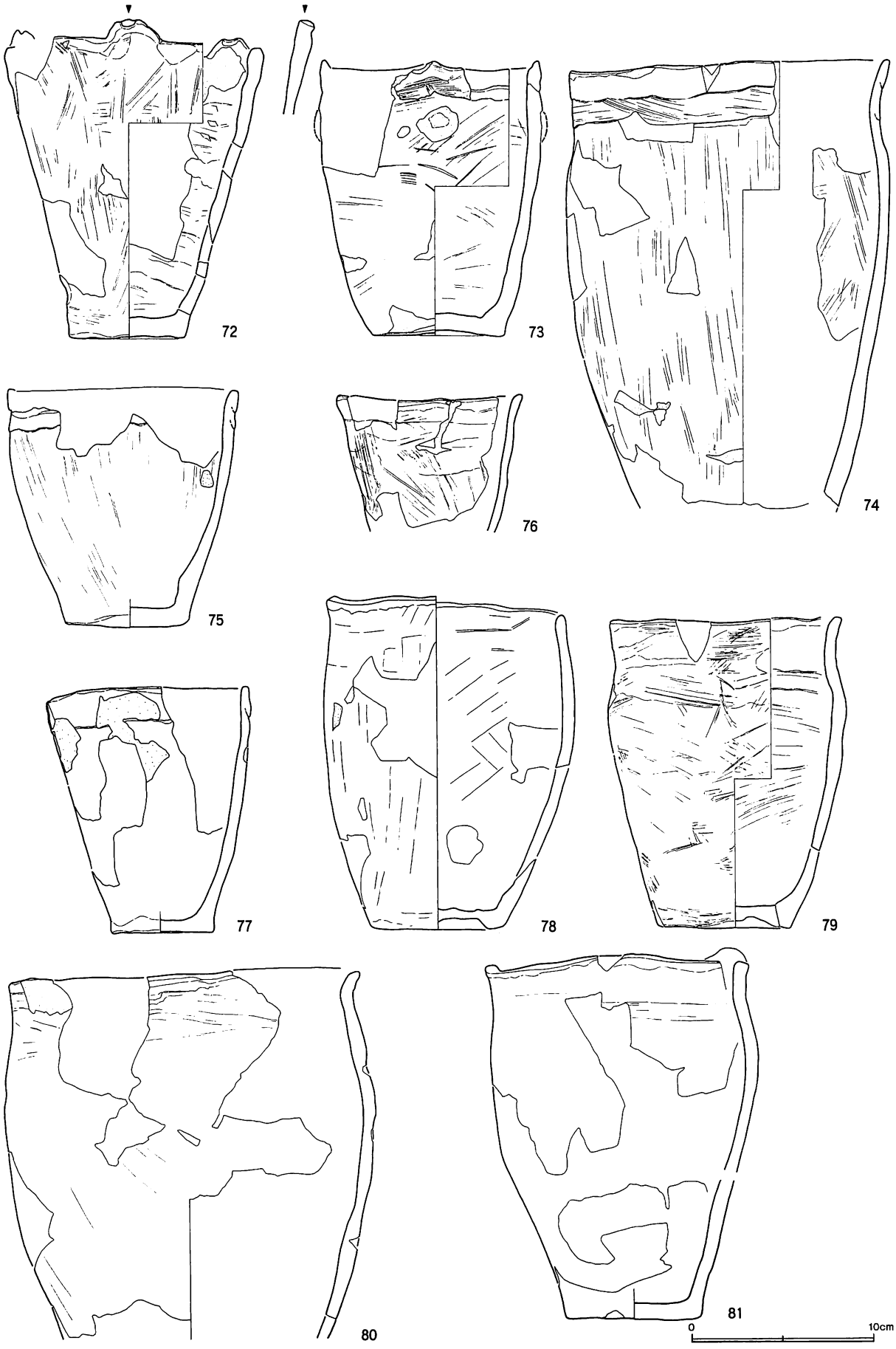


図V－1－14　包含層出土のⅣ群a類土器（11）



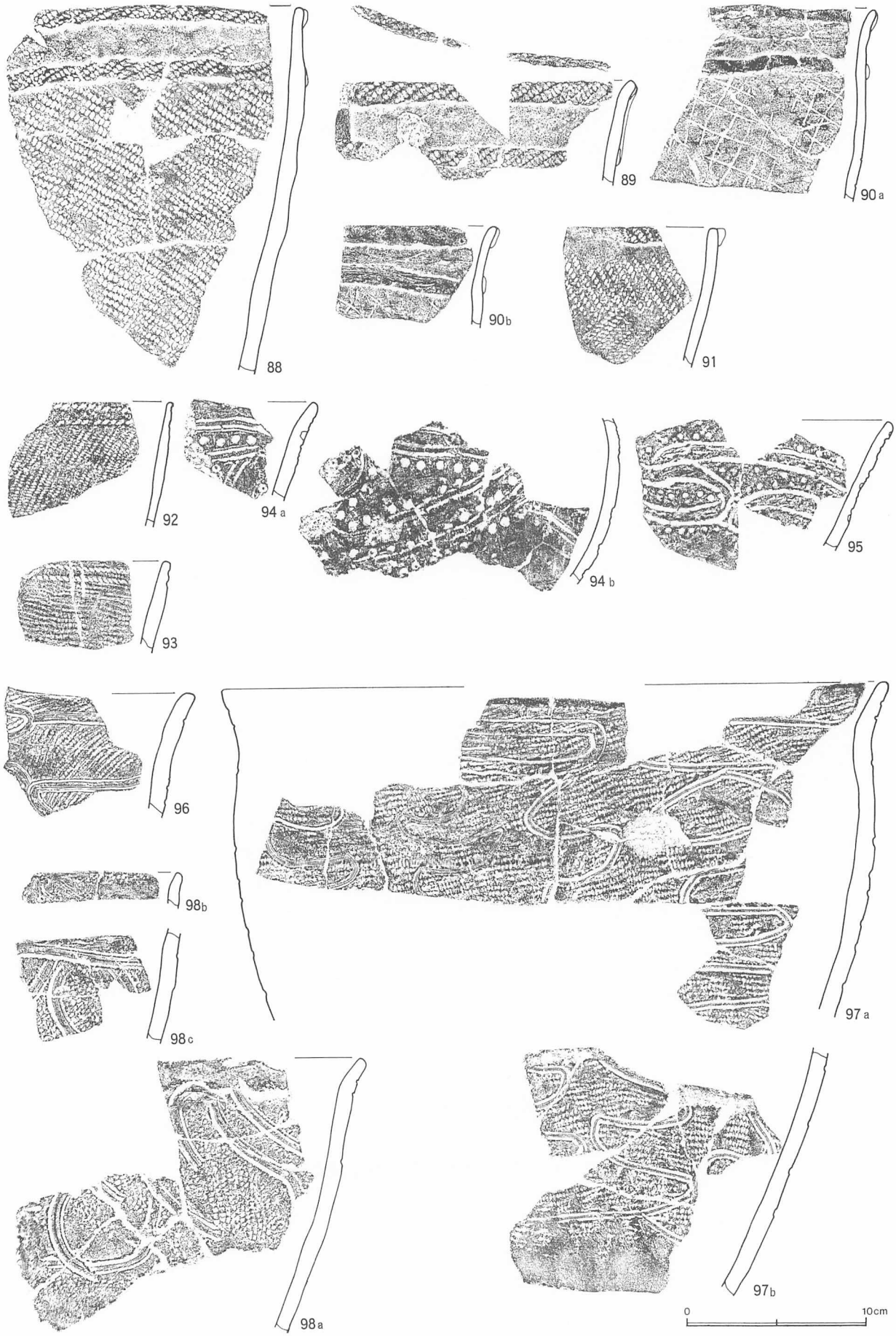
図Ⅴ－１－15　包含層出土のⅣ群ａ類土器（12）

図V－1－16　包含層出土のⅣ群a類土器（13）



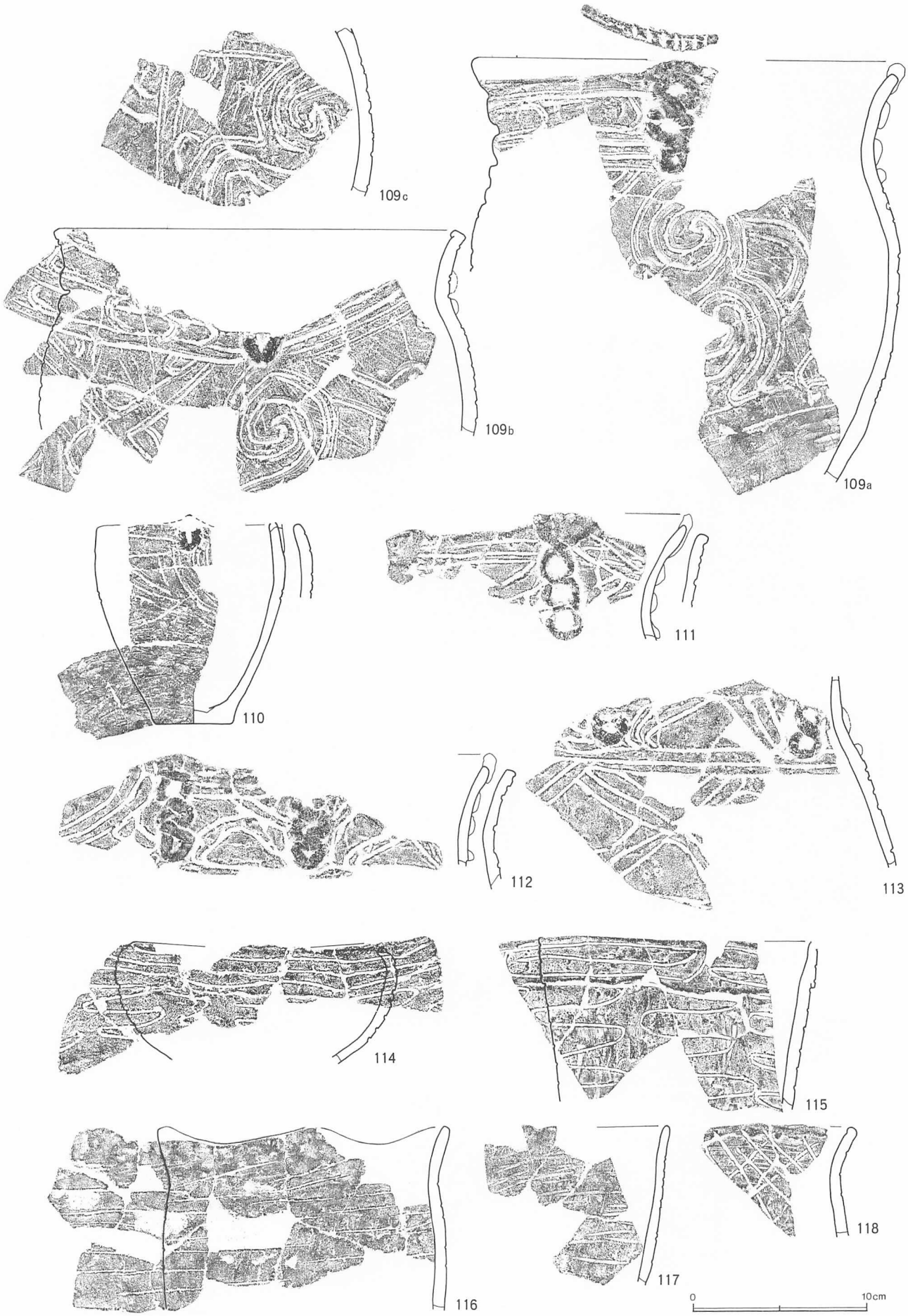
図Ⅴ－１－17　包含層出土のⅣ群ａ類土器（14）

図Ⅴ－１－18　包含層出土のⅣ群ａ類土器（15）



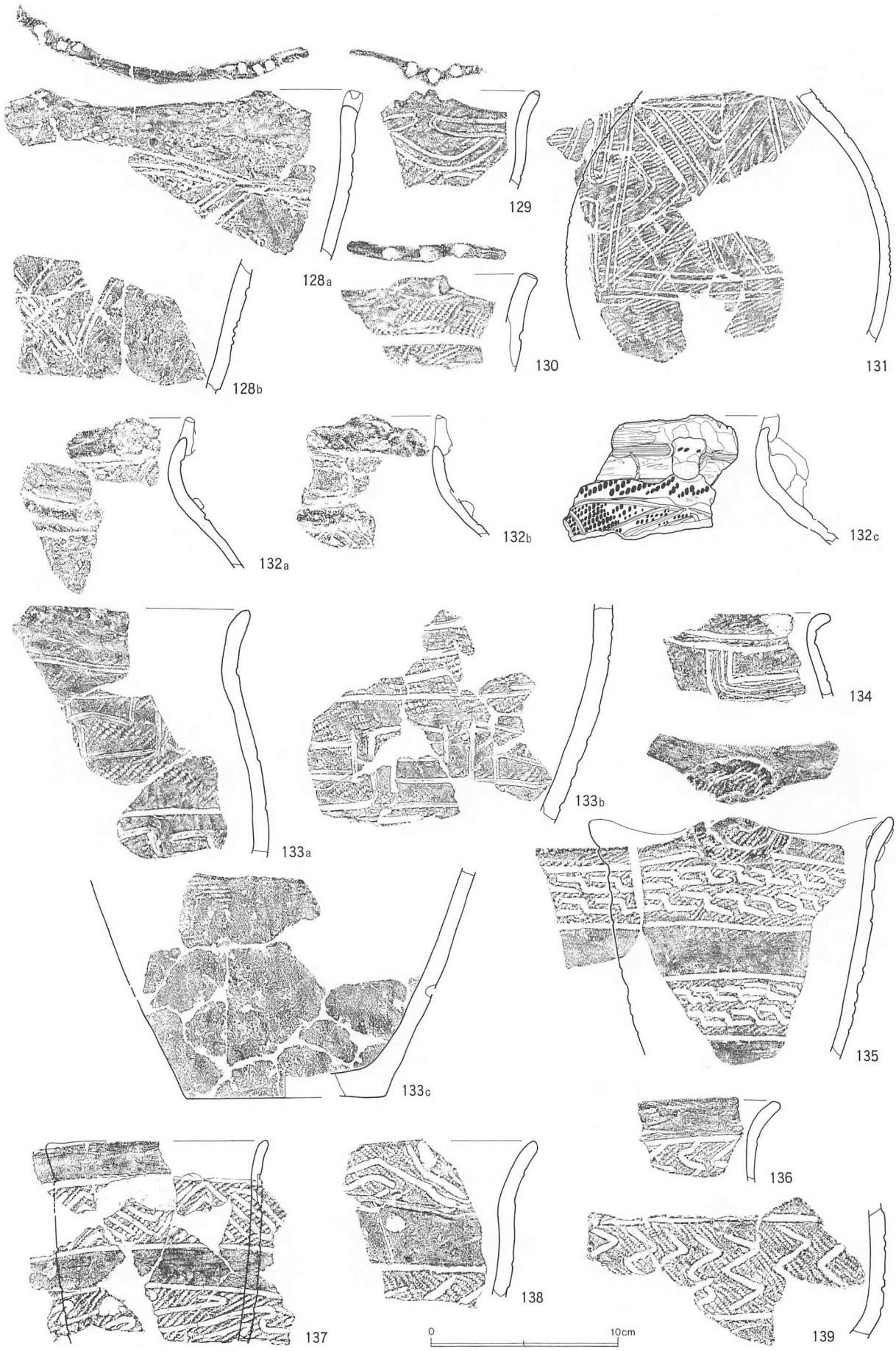
図Ⅴ－１－19　包含層出土のⅣ群ａ類土器（16）

図Ⅴ－１－20　包含層出土のⅣ群ａ類土器（17）

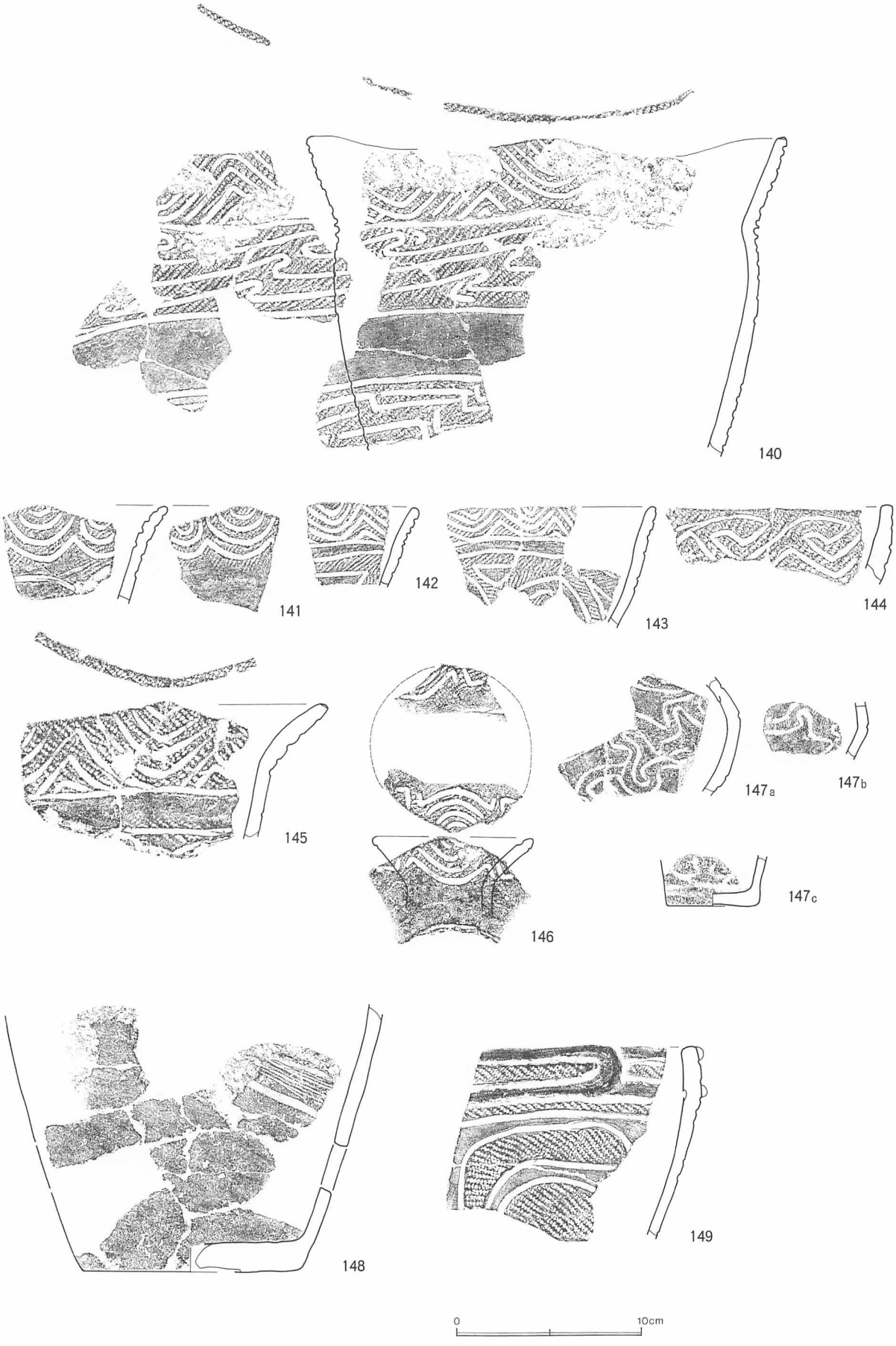


図Ⅴ－１－21　包含層出土のⅣ群ａ類土器（18）

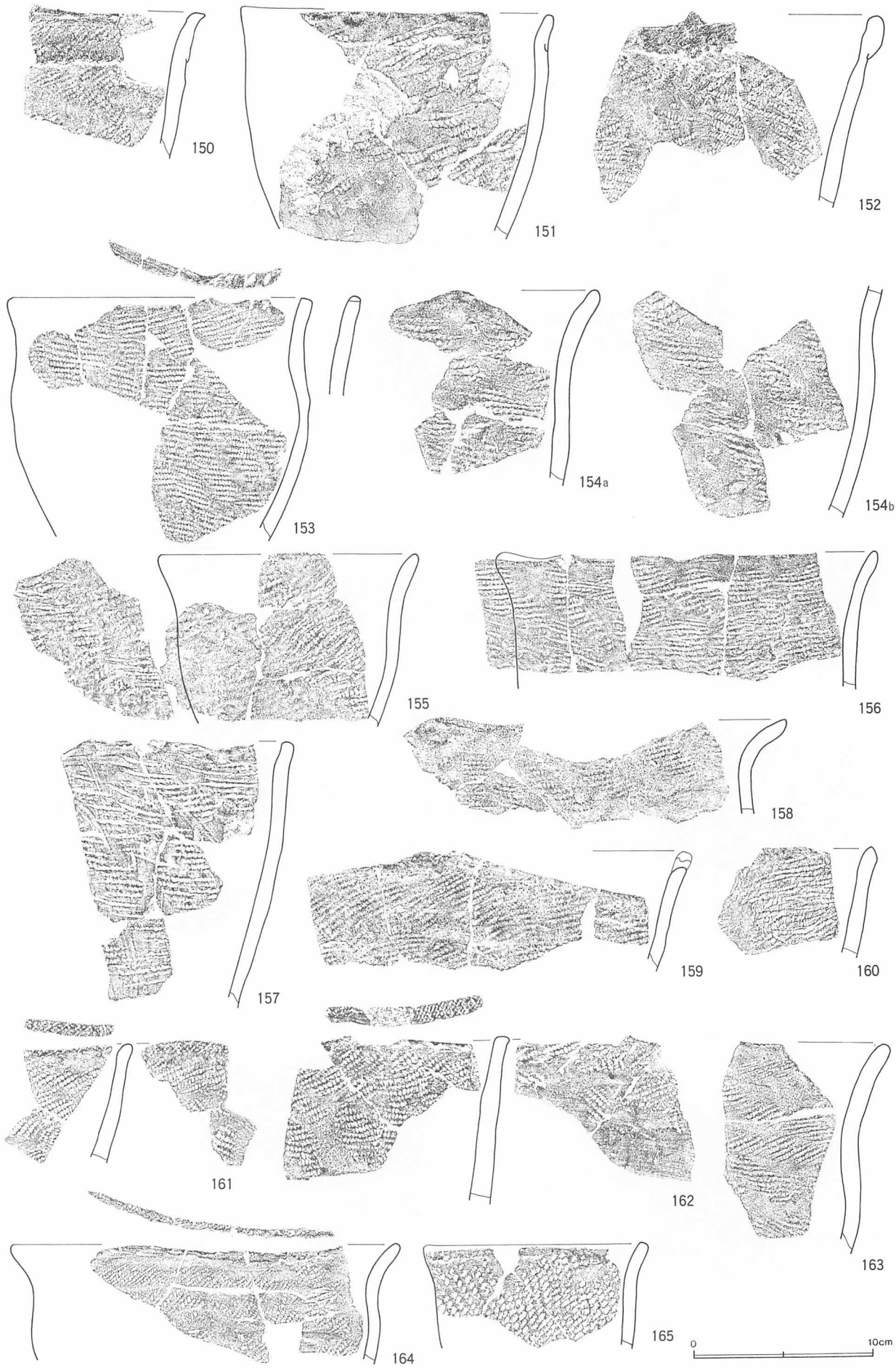
図Ⅴ－１－22　包含層出土のⅣ群ａ類土器（19）



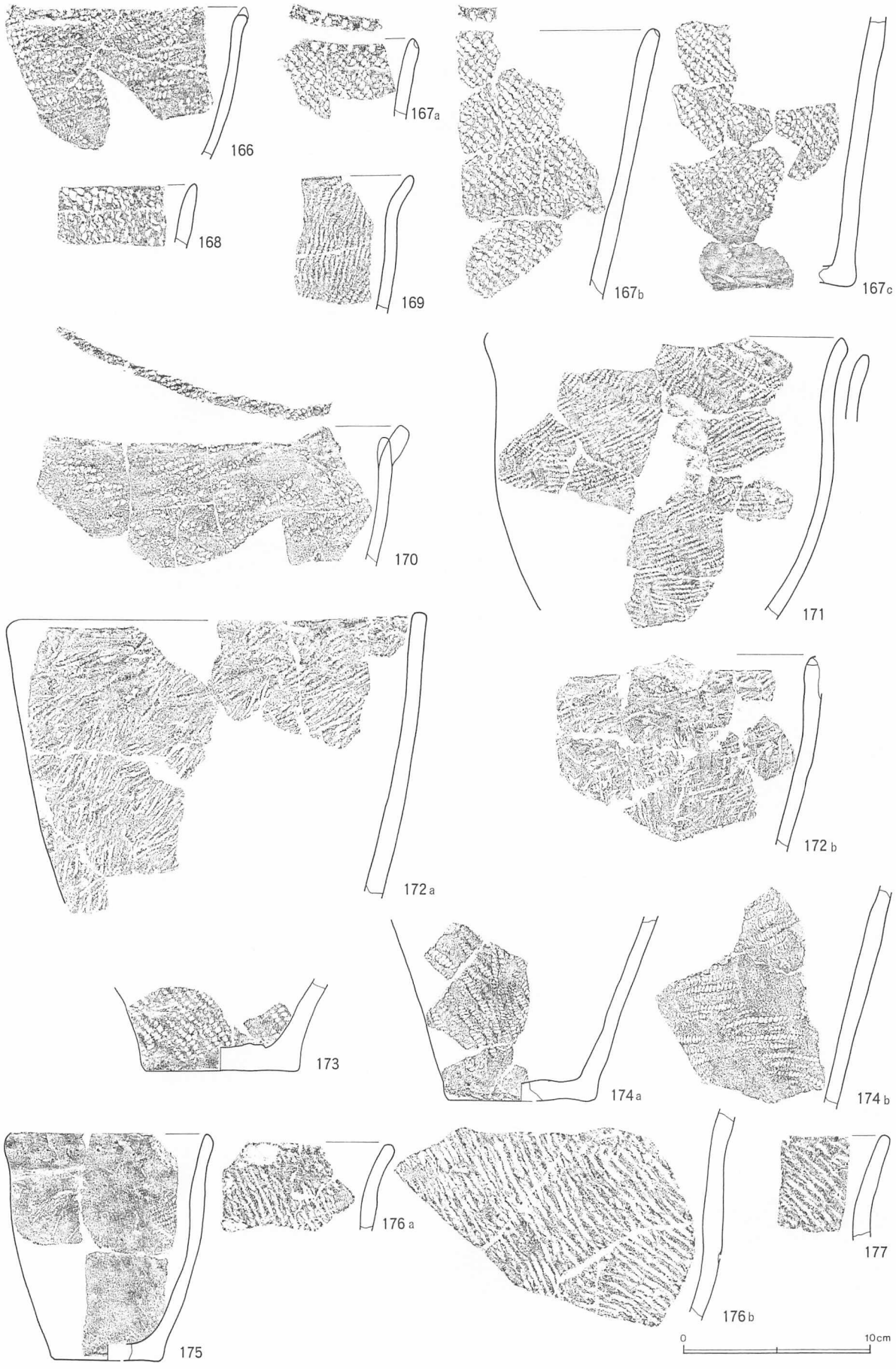
図Ⅴ－１－23　包含層出土のⅣ群ａ類土器（20）



図Ⅴ－１－24　包含層出土のⅣ群ａ類土器（21）

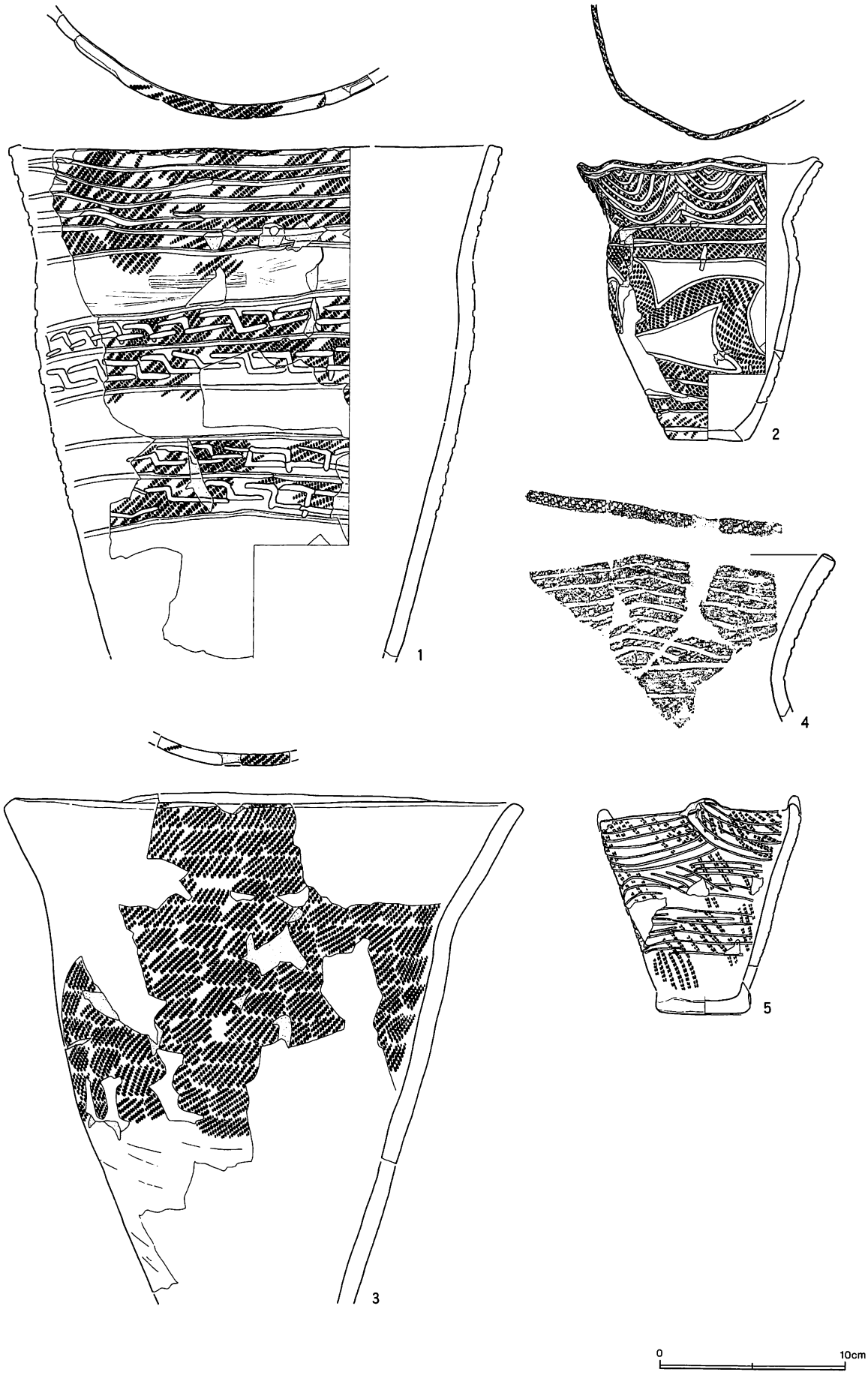


図Ⅴ－１－25　包含層出土のⅣ群ａ類土器（22）

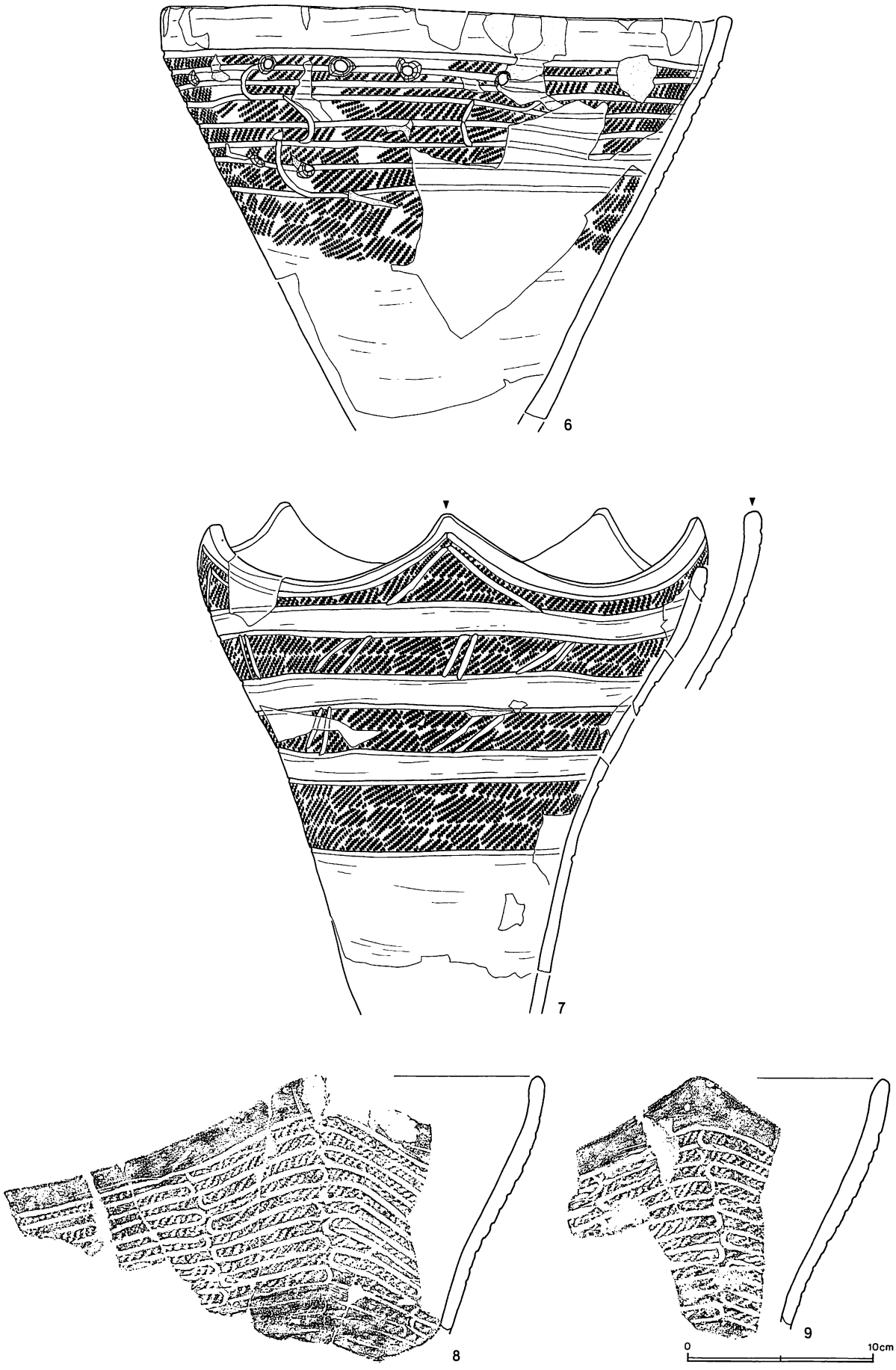


図Ⅴ－１－26　包含層出土のⅣ群ａ類土器（23）

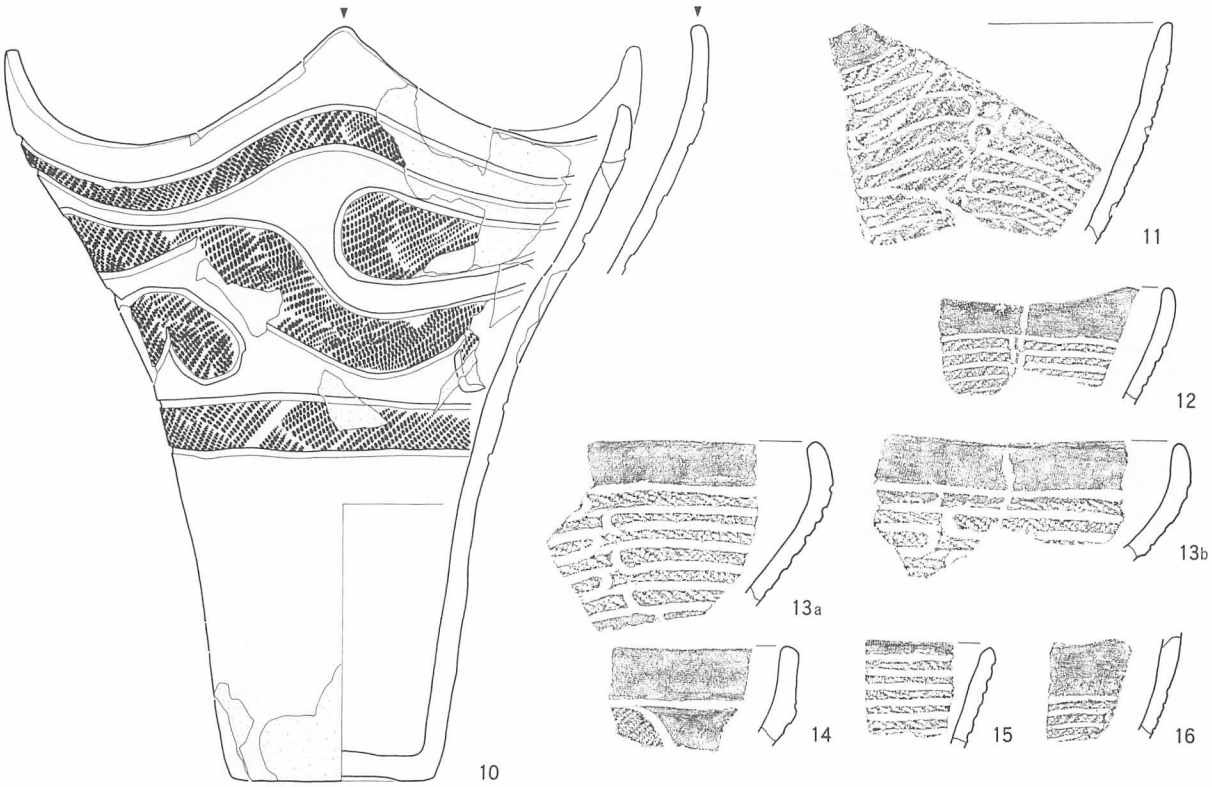
図Ⅴ－１－27　包含層出土のⅣ群ａ類土器（24）



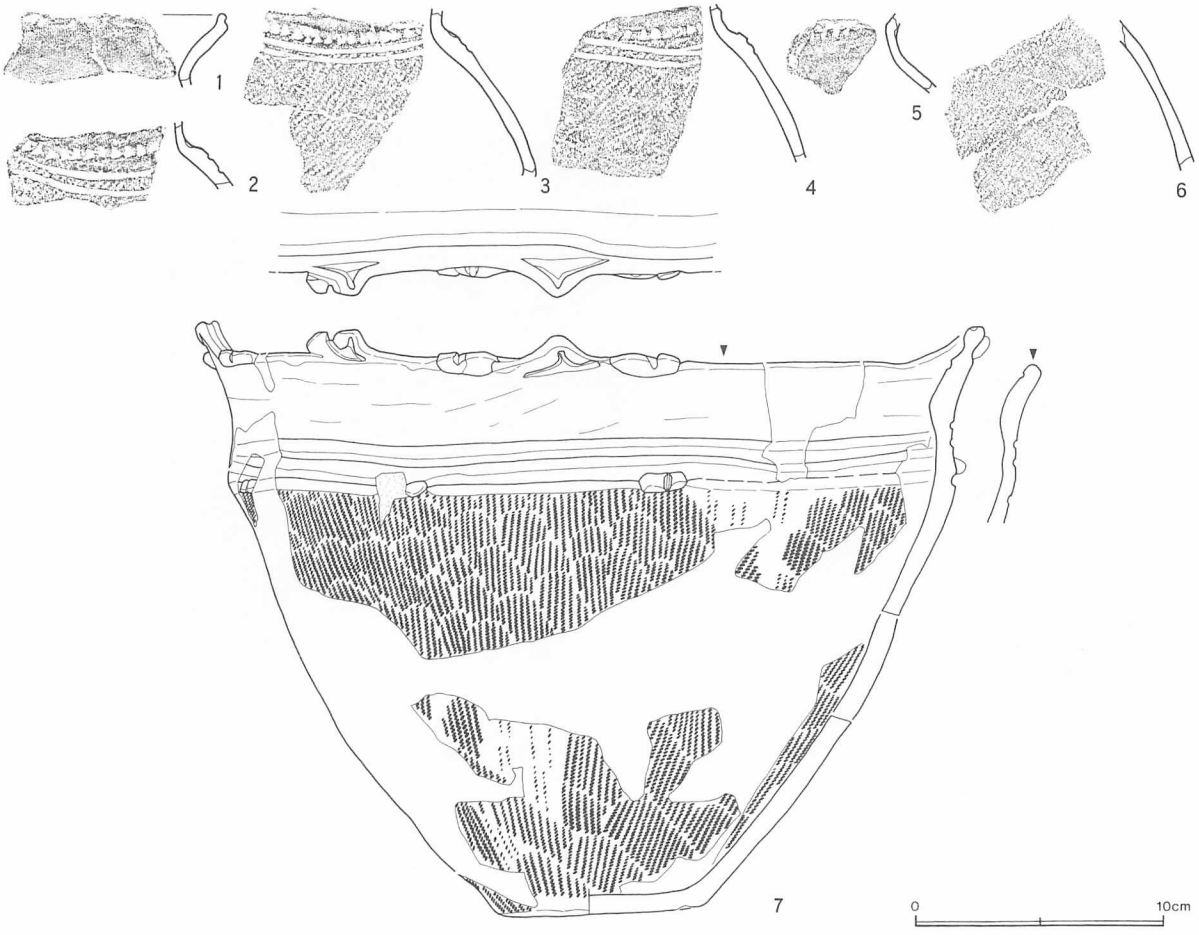
図Ⅴ－１－28　包含層出土のⅣ群ｂ類土器（１）



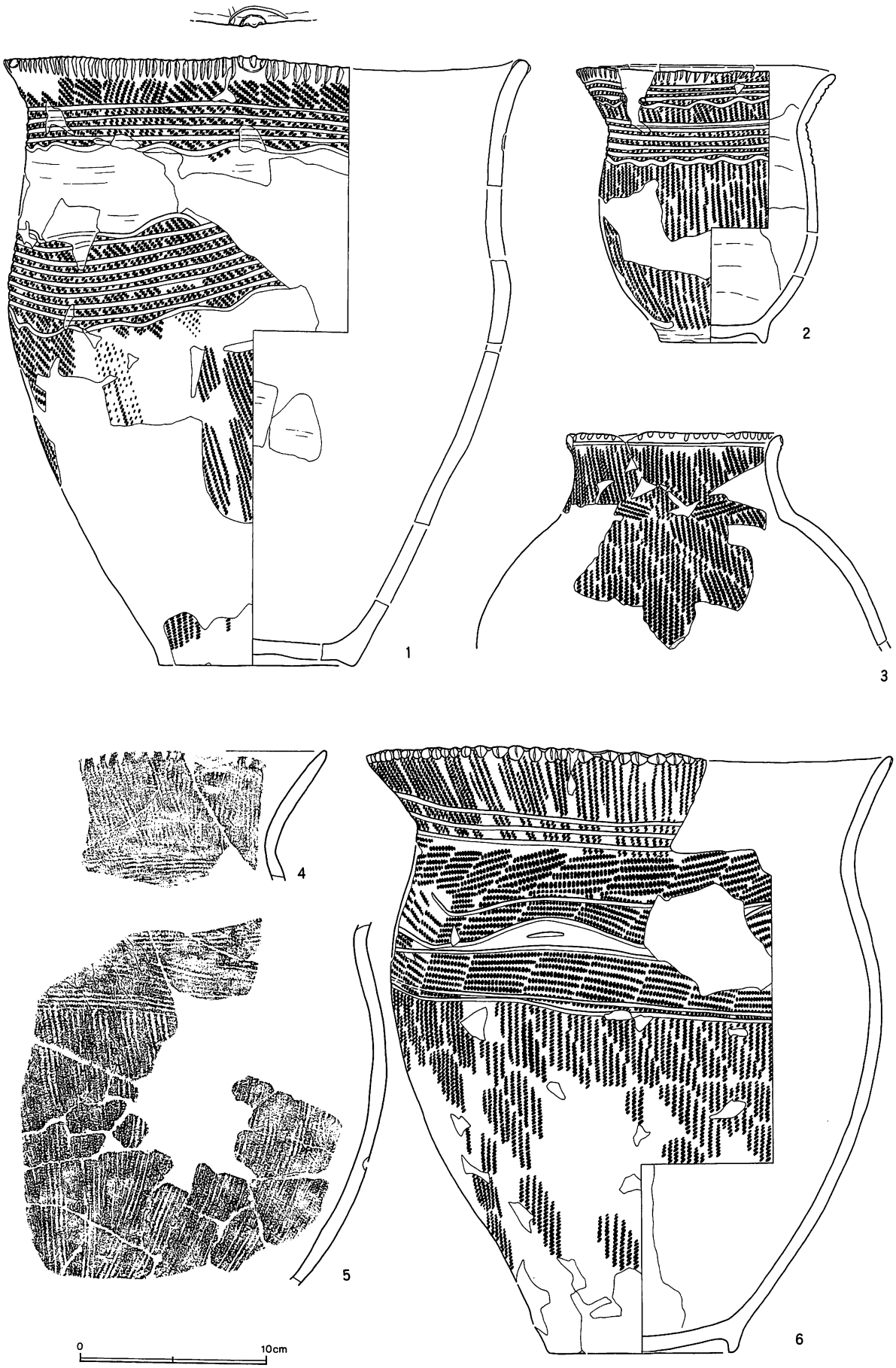
図Ⅴ－１－29　包含層出土のⅣ群ｂ類土器（２）



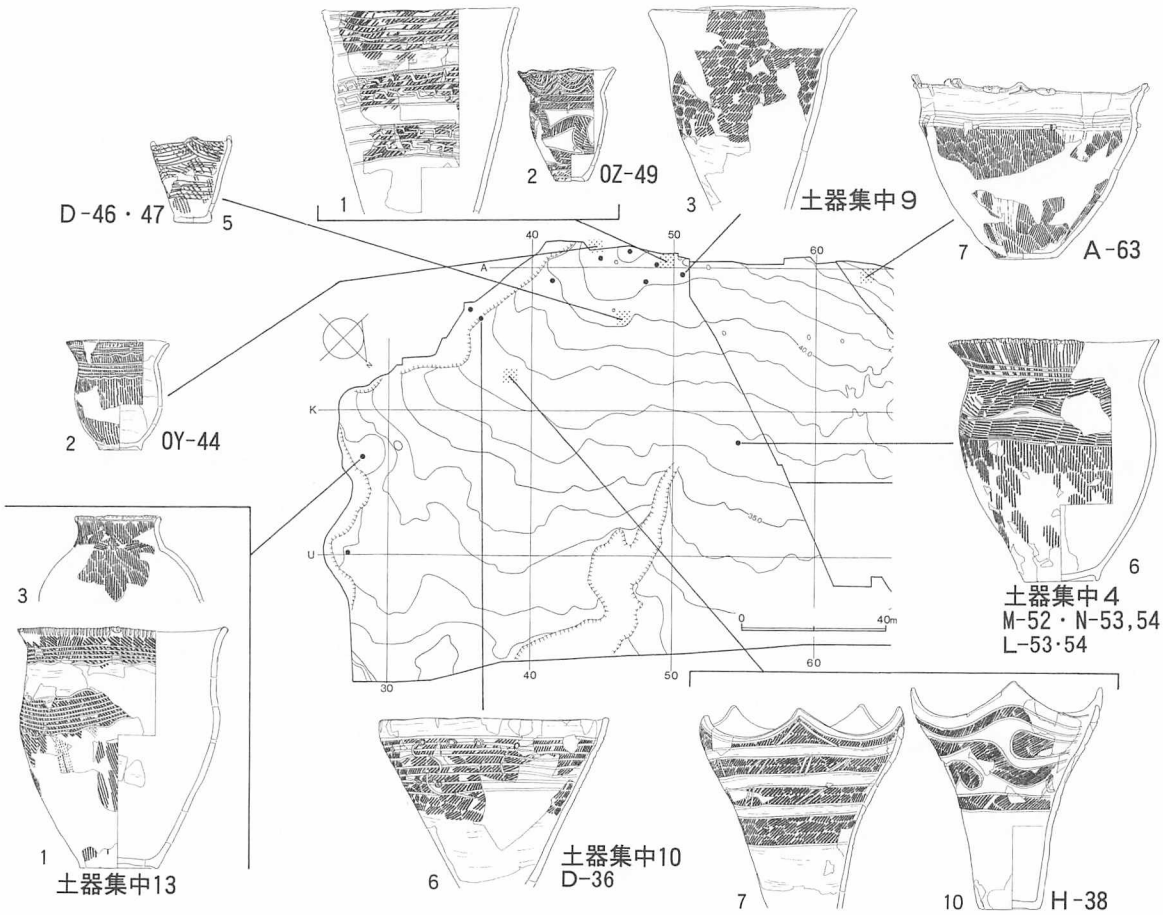
図Ⅴ－１－30　包含層出土のⅣ群ｂ類土器（３）



図Ⅴ－１－31　包含層出土のⅤ群ｂ類土器



図Ⅴ－１－32　包含層出土のⅥ群ａ類土器



図Ⅴ－１－33　Ⅳ群ｂ類・Ⅴ群ｂ類・Ⅵ群ａ類土器の分布（Ａ地区）

（２）Ｂ地区出土の土器と土製品等（図Ⅴ－１－１～45、表14～１、図版87～102）

Ⅲ群a類土器（図Ⅴ－１－１～３、図Ⅴ－１－39－25～33、表14、図版87・91）

サイベ沢Ⅶ式、見晴町式に相当するものがある。３と32を除き、水場遺構１の周辺部（N73・74区）から出土している。

１は全体の口縁部から胴上半部の２分の１が残存する。現存する突起は粘土紐で縁取りのある２個一対の山形のものであるが、残るもう一方の突起は細い粘土紐を２条内外面にめぐらせただけのもので形状が異なることから、２種二対の突起部の可能性がある。RL原体による縄文のもので口唇部にも施文がある。胎土に小砂利が多く、径５㎜ほどのものもある。

２は大きく口縁部と底部の２つに接合されたもので、器形を想定して復元した。器高が30㎝ほどになるとみられる。表面の粘土の剥離が著しい。底部付近を除きほぼ全面にRL原体による斜行縄文が施されている。口縁の形状は知られないが、口唇断面は切り出し形でこの部分に棒状工具による刻みが加えられている。３は底部でごくわずかにくびれる器形で、口縁部の４か所に山形の突起部がある。全体の２分の１ほどが残存する。口縁部を折り返し肥厚させ、口唇にくぼみをつけるように指頭で調整し磨きをかけ無文としている。器面には太いLR原体による斜行縄文が口縁部～胴部上半に、ほかでは横走気味の縄文となっている。１、３がサイベ沢Ⅶ式の新しい段階あるいは見晴町式に相当するもので、２がサイベ沢Ⅶ式に相当するものである。

25、27、29は水場遺構１調査の際に設定したトレンチから出土したものである。いずれも、器面に水洗作業でも落ちないほど硬化した鉄分が付着していた。25は０段多条のLR原体のもので、口唇角に縄による刻みが加えられている。胎土に白色岩片が混入する。26は０段多条のRL原体のもの。縦行気味になる部分がある。27は山形の突起部で口唇に縄の圧痕がある。28は口縁部に粘土を貼り付けこの部分

に深く棒状工具で沈線を引くもので小さな粘土を縦に２条貼付し刻みを加えている。29は折り返し気味の口縁で、断面形が切り出し形を呈するもので、この部分に刻みがある。30は太い工具での施文がある。

31～33は沈線による文様がある。口唇を肥厚させこの部分を無文とし沈線文を加え、突起部下で深く押し付け円形の文様を描いている。31は、突起部は欠損しているが、突起下では渦巻きを描いている。文様は半截竹管状施文具で、口縁に平行に２条、体部では曲線的文様を描くものとみられる。33は胎土が緻密で、焼成がよく色調はにぶい橙色である。竹管状工具の背面で弧状の文様が描かれる。

Ⅲ群b類土器（図Ⅴ－39－34～39、表15、図版92）

大安在B式に相当するものである。B地区の北東端X・Y77～79区からの出土が目立つ。34、35は同一個体の破片。口縁部は折り返し気味で磨きがかけられ無文となっている。胴部がわずかに張り出す器形のもので、縦に２条と張り出しの部分に１条、貼付帯を施している。貼付帯上と口唇直下にはそれぞれ太いRL原体の押捺がある。胴部には横方向からの刺突が３列施されている。36、37も同様の貼付帯がある。38は口縁部と胴部に扁平な貼付帯があるもので、これらを繋ぐように馬蹄形や円形の貼り付けがある。貼付帯上は幅４、５㎜の角形の施文具で刺突文が加えられている。胴部にはRL原体による斜行縄文が施されている。器面の凹凸が著しい。39は貼付帯上を連続して指頭でくぼませているもので、左右に沈線文が配されている。

Ⅳ群a類土器（図Ⅴ－35～38－４～24、図Ⅴ－１－39～45－40～150、表16・17、図版87～100）

後期前葉のもので天祐寺式、涌元式、大津式に相当するものがある。

a－１類：天祐寺式、涌元式に相当するもの（４～24、40～150）

①主に貼付帯による文様が施されるもの（４～６、40～65）

口縁の無文部分に平行に１条、２条ないしは３条貼付帯が施されるものがあり、貼付帯間を繋ぐように縦に短く２条貼り付けるものに加え、やや長めの貼付帯が施されるものもある。縄文の原体は掲載した資料で見る限り大部分がLR原体で、０段多条のものもある。施文は体部では斜めや縦方向に、貼付帯上では横方向に回転施文される。平縁とごく小さな突起をもつものがある。口縁部は基本的には無文であるが、貼付帯への施文の際に縄文が残されるものもある。口唇断面は角形で、この部分に施文されるものが多い。器壁は大きさの大小にかかわらず、概して薄手である。

４～６は口縁の無文部分に平行に２条ないし３条、扁平な貼付帯が施されるものである。縄文の原体はいずれもLRで、５、６は０段多条である。４は胴部下半は欠損しているが全体の３分の１程が残存する。口縁部では粘土の折り返しの跡が顕著に観察できる。口縁部の４か所に、縦に２条やや厚みのある並列した貼付帯がある。胴部には太い原体による横走縄文が施されている。器壁は薄いが凹凸が著しい。５はB地区の北東端で検出された土器集中15と周辺部の包含層（Y78・79、Z79区）出土の破片が接合したもの。口縁部から胴部上半部の２分の１が残存する。口唇直下に１条とさらに下位に２条並列して貼付され、縦方向のものはやや長めに施文され、この部分がごく小さな突起を形成している。６は胴部下半で欠損するが、全体の２分の１が残存する。口縁部に小さな突起部があるもので、口唇上にも施文がある。縄文施文後になで調整している。胎土に砂粒が多く、内面の凹凸が著しい。

40～43は口唇直下の無文部に貼付帯が１条巡るもので、口唇上に施文がある。40、41、43がRL、42がLR原体である。40は貼付帯上に縄文原体を押捺している。41、43はやや幅の狭い厚みのある貼付帯が施されている。41は指で摘まみ口唇を尖り気味に調整している。43は指頭の調整で凹凸がある。色調はにぶい橙色で、胎土に海綿状骨針が混入する。

44～52は２条、３条（52）の貼付帯が巡るものである。縄文はすべてLR原体である。44は太い原体のもの。47は内面に先端がササラ状の工具での調整痕が明瞭に残る。50は貼付帯の間隔から３条施されている可能性がある。

53～65は縦に貼付帯が加えられているものである、53は小さな突起部が形成されており、貼付帯の側面に縄を押捺している。54a～dは同一個体の破片である。口径20～25cm前後、底径14cm、底部がごくわずかにはみ出す器形である。縄文は０段多条のRL原体のもので、体部では縦行気味である。

55～58は小さな突起部がある。55は土器集中15として取り上げたものである。口縁部に平行して３条と縦に長めの貼付帯があり、上位２条のものは突起下で交差させている。全体の様相は知られないが、縦の貼付帯は突起間にも複数条施されているようである。56は縦の貼付帯が内面にも及んでいる。59～65は同一個体の破片である。口径10～15cm、底径８cm内外、厚さ４mmほどで焼成がよく胎土は緻密である。山形の突起部のあるもので（59）、貼付帯は口縁部に２条のほか突起左右から馬蹄形状（59）あるいは山形に（60、63）配されている。

②縄線文による文様が施されているもの（66～77）

体部の縄文はLRが多く、原体を縦に回転施文しているものと、斜めに施文し横走縄文となるものがある。縄線文は地の縄文部分に施されるほか、無文部に施されるものがある（74）。円形刺突文を加えるもの（66～69）、沈線での文様が描かれるものがある（76）。口唇断面は角形に調整されるものがあり、この部分に施文がある（70～72、76）。

66～69は円形刺突文が加えられている。66～68は土器の色調は浅黄色である。66と67は同一個体。０段多条のLR縄文を縦方向に施文しているもので、口縁部に２条縄を押捺し、その間に中空の施文具による円形刺突文が施されている。口唇断面形は尖り気味で、指でつまんで調整したとみられ内面に指頭の跡が複数観察できる。胎土に白色岩片が混入する。

70は口唇に斜めに浅くヘラ状工具での施文がある。71は縄文原体の施文方向を変えている。72は縦行縄文のもので、やや間隔をあけ施文している。74は口縁部を無文とするもので、縄線文はこの部分に施こされる。73はごく薄手のもの。75は厚手で胴部がやや張り出す器形で、太い原体による横走縄文が施されている。76は薄手で小型のもの。器面に凹凸はあるが焼成は良い。横走縄文地に先端の尖った細い工具で口縁に平行して数条と二重の円形、半円形を描く文様が連続して配されている。77a～cは同一個体。LRL原体による複節のものである。

a－２類：大津式に相当するもの。新道４遺跡の盛土１類・２類に相当するもの

１種：新道４遺跡盛土１類に相当するもの（７～13、80～91、93～110）

①無文地に沈線で文様が描かれるもの（７～10、12、80～91、93～110）

７は大きく２つに接合されたもので、文様を想定して復元した。胴部下半部は欠損するが全体の２分の１残存する。指幅２本分ほどを折り返した平縁のもので、棒状工具による沈線文が口縁部に２条あり、上下を繋ぐことで横長の方形文様となる部分がある。体部の４か所に、大柄な多重の円形文様が上下にあるとみられ、それぞれを直線や弧線でつないでいる。８はヘラ状施文具で、９は半截竹管状施文具での垂下する蛇行沈線文が施されている。これらは近接した包含層（O76、P76・77区）から出土した。底部は欠損しているがほぼ同じ大きさのものである。８は折り返し口縁で、４か所に緩やかな波頂部がある。胎土に白色岩片がまじる。10は４か所に緩やかな波頂部のある折り返し口縁のもので、口縁の無文部をよく磨いている。棒状施文具による斜格子目の文様が描かれている。12は小型土器の底部破片。全体の様相は知られないが弧状文様が観察できる。

80～91、93～110は破片資料。80は山形突起部に指で摘まみあげることにより形成された鍔状の張り

出しを有するもので、この部分から細い施文具を使い、方形の文様を左右に配している。81a・bは同一個体の破片。全体の様相は知られないが、IH－５出土の資料（図Ⅳ－４－１）に共通する文様構成のものであろう。折り返し口縁で、山形の波頂部が４か所にあるとみられ、この部分に円形の文様を描き、横長の方形区画文を配している。体部は円形文下を中心に、弧線を連続させる文様であろう。沈線で縁取られた内側をナデ調整することで半肉彫り的な文様になっている。盛土１類よりも古い段階、トリサキ式に相当するものかもしれない。

82～90は主に弧線を連続してつなげる文様がある。口縁部に平行して２条ないし３条施されるもの（83～89）があり、体部の沈線も２、３条一対である。83は折り返し口縁で、口縁部に施された沈線文を短い弧線で繋いでいる。84、85は同一個体の破片。86は口縁直下がわずかに外反する。87の施文具はごく細い棒状工具である。90は焼成前に孔が穿たれている。

91、101は垂下する蛇行沈線文が施されている。93a～eは同一個体の破片。大型の土器で、口縁（93a・d）から底部（93b）まで破片は多数あったが全体を復元できなかった。口径は20㎝前後、底径10㎝で、口縁部に山形の突起部があり、粘土紐で「８」の字状の文様が描かれている。胴部には３条、４条（あるいは２条を重ねているのかもしれない）で一単位の沈線による大柄な渦巻き状の文様（93a・b）がある。胎土に小砂利が多いためか、調整の際にこれらが抜け落ちた「孔」が無数に観察される。焼成がよく色調は明赤褐色である。94と95は、全体の文様構成は知られないが口縁部に横長で方形に配された文様がある。96～98は突起部に粘土紐による「８」の字状の文様がある。96は突起上を指頭でくぼめている。98は粘土紐上に施文がある。

100、102～108は直線的文様が描かれている。100の胴部文様の一部は曲線的である。口縁部に４条ひかれた沈線文は縦の蛇行線でつながれている。105～107は格子あるいは、斜格子目状の文様がある。106は細い工具でごく浅く施文されている。108は緩やかな波状口縁のもので、折り返され無文となっている。

109、110a～cは壺形土器の破片。109は口縁に２条粘土紐を貼り付けた上で、指でなぞり薄く調整し、連続して孔を穿っている。色調は鈍い橙色。110a～110cは大型土器である。水場遺構出土のもの（図Ⅳ－47－50）と同一個体の可能性がある。口縁部（100a・b）はごく一部しかないので、形態がわからないが、体部には縦方向に２条１単位の沈線を施し器面を区画し、同じく沈線文で、底部付近まで蛇行する文様が描かれるものである。沈線で縁取られた内側をナデ調整することで半肉彫り的な文様になっている。焼成がよく、色調は淡黄色である。

②縄文地に沈線で文様が描かれるもの（11、13、78、79、92）

11は底部を欠損するが、全体の３分の１ほどが残存する。口縁部直下の狭い範囲を無文とし、体部にはLR原体による縦行縄文が施されている。口縁部の３条の平行沈線文は、１条ずつではなく、一筆書きで横に細長く方形状に描かれている。13は口縁部と胴部の一部の破片を欠くが、ほぼ完形に復元できたものである。不規則に波打つ口縁で、０段多条のLR原体による縄文を口縁部では帯状に３列施し、また胴部も、部分的に斜め方向に帯状となっている。棒状施文具を用い、３条一組の沈線文で上下を区画した中に斜めに交差する文様が３か所に描かれる。無文部では縦方向に削り調整痕が観察できる。

78と79は同一個体である。山形の突起部に粘土を鍔状に貼り付けている。体部にはLR原体による縄文が施され、１条の沈線文がひかれている。より古い段階の可能性もあるが、とりあえずここに入れておく。92は波状口縁のもので細い沈線文で蛇行する文様がある。

２種：新道４遺跡盛土２類に相当するもの（14）

14は、破片が広範囲から出土し接合された（L72、M74、N76・77、O76、P77区）。口縁部から胴部までの２分の１ほどが残存する。胴部が張り出し口縁部がわずかにくびれ直立する器形で、４か所に山形の波頂部

がある。残存する2個の突起部のうちの1つには、細い貼付帯が内外面に弧状に施され、沈線文での縁取りがなされている。胴部の文様帯は上下に2段に区画されている。文様は櫛歯状施文具での大柄な台形や矩形文様を、太い沈線で縁取る手法で描かれている。器面に炭化物が多量に付着している。

地文のみのもの、無文のもの

① 縄文のもの、縄文の施された胴部・底部（15～16、19、21、23、24、111～136、139～144）

15は破片が150点以上あり、大きく上下2つに接合されたものを器形を想定し復元した。器高40㎝前後、口縁部がやや外反する器形である。4か所ないし5か所に山形の波頂部がある。口縁を折り返しやや幅広く無文とし、体部にはLR原体による横走縄文を底部付近まで施した後なで調整している。胎土に砂粒が多く混じる。16は破片が広範囲に散在していた。大きく2つの部位に接合された破片と口縁部等の破片を器形を想定し復元した。口縁部で外反する器形で、5か所に波頂部がある。口径は30㎝内外である。折り返し口縁でやや広い範囲を無文としている。体部には太いLRL原体による横走縄文が施されている。大きさに比べ器壁が薄く焼成がよい。19は口縁部から底部までの3分の2が残存する。全体に大きく波打つ口縁部で、4か所ある波頂部は指頭でくぼみを付けることで形成されている。内外面ともによく磨かれており、上半部にL原体による斜行縄文が疎らに施され、部分的に縦方向に回転施文され羽状となっている。21、23、24は口縁部の様相は不明であるが縄文が施されている底部である。21と24はいずれもLRL原体によるもの。これら縄文の施された資料は15、16が天祐寺式、涌元式に伴うもの、19が大津式のうちでも古段階のものと考えられる。

111～136、139～144は口縁、胴部、底部の破片資料である。口縁の形態のわかるものでは平縁（115、117～119、121、128、129）、波状口縁（113、114、116、122、120、124～127、130～137）、突起部のあるもの（135、139）がある。器面には原体を縦～斜め方向に回転施文することで横走あるいは斜行になる縄文が施されるものが多い。縦行縄文（111、125、136）のものもある。縄文の原体は大半がLRで、RL原体（117）は少ない。無節（L原体）のもの（119、135）、複節（LRL原体）のもの（127）もある。0段多条の原体がある。器形のわかるものでは直線的に立ち上がるものと、頚部でくびれるものがある。

111～127、129は折り返し口縁のものでその部分を無文とするのが一般的である。115は口唇上に施文がある。116は太い原体により、器面に粗く施文されている。117は貼付帯様の貼り付けがある。118は口縁部に広く無文帯がある。器内外面の凹凸が著しく、胎土に白色の岩片が多量に混入する。119は胎土に海綿状骨針が混入する。120は無文部に櫛歯状工具での調整痕がある。121は口径が30㎝を超える大型の土器。胎土、色調が118と共通する。横位に施文した斜行縄文である。123は口唇上にも施文がある。126は縄文施文後、内外面をなで調整されたことで縄文が消えている。123、127は折り返し部分に施文があるが偶発的なものであろう。130は、口唇断面が切り出し形を呈するもので、この部分にも施文がある。131、135は頚部がくびれ胴部で張り出す器形である。135は半円形状の突起部があり、棒状工具で刻みが加えられている。136は指頭で押捺することで形成された小波状口縁のもの。139は壷形土器の口縁部の可能性がある。口縁部の突起部には内外面に粘土紐の貼り付けがある。LR原体による縄文が疎らに施されている。

140a・bは付加条の原体による縄文が施されている胴部の破片である。141は施文方向を変えることで羽状を構成する文様が施されている。胎土に海綿状骨針が混じる。142はRLR原体による縦行気味の縄文が施されている。胎土に径3、4㎜の小砂利の混入が目立つ。144は底部がややはみ出すもので、細いLRL原体による縦行気味の縄文が施されている。これら縄文の施された資料のうち111～127のような折り返し口縁の顕著なものは天祐寺式、涌元式にともなう可能性が高い。ほかは大津式であろう。

②オオバコのとうの回転文のもの（137）：緩やかな波状口縁のもので、縦行縄文のような効果をもつものである。涌元式頃のものであろうか。

③撚糸文のもの（138）：網目状の撚糸文が施されている。口唇外側角に部分的に刻みが加えられている。大津式であろう。

④無文のもの（17、18、20、145～150）

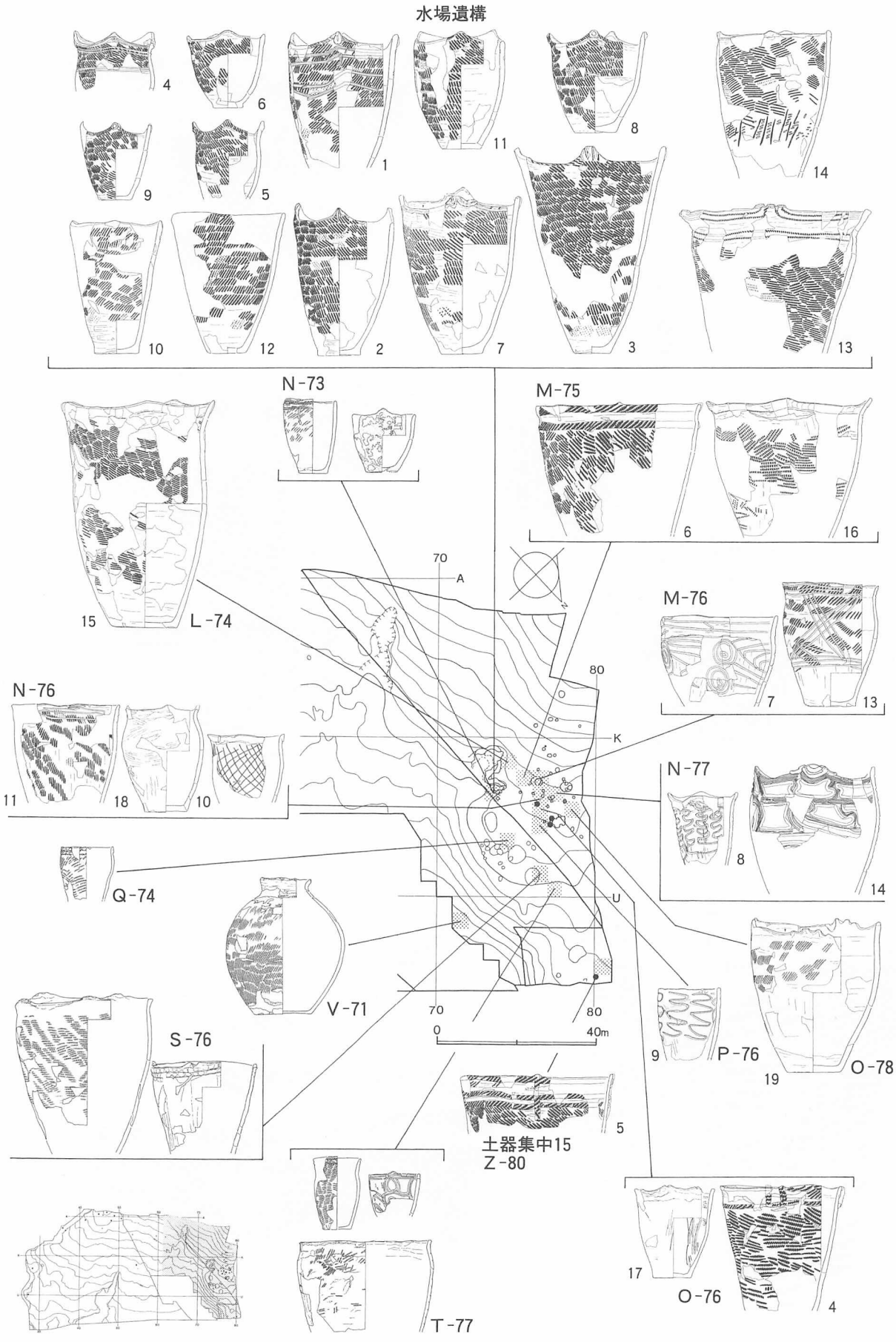
17は土器集中3として取り上げたもの。口縁部の7か所ないしは8か所に山形の突起部があるもので、頂部は棒状工具で刻まれ二股となっている。内面には、幅5㎜ほどのヘラ状施文具での調整痕が明瞭に観察される。18は胴部上半で張り出し、口縁部が外反する器形のもの。全体の4分の3が残存する。口縁の4か所に山形の突起部がある。口唇の調整や胎土、焼成は17と共通する。20、22は無文の底部。22は細い沈線文かとみられる線があるが不明瞭である。17、18は大津式に伴うものである。

145、147は折り返し口縁のもので、145は焼成がよく、色調は明黄褐色で内外面ともによく磨かれている。148はコップ形のもので、ごく小さな突起部がある。胎土に海綿状骨が混じる。150a・bは同一個体の破片。胴部の屈曲部かと思われるが、全体の器形は不明である。焼成のよいもので、胎土、色調は18の無文土器と共通する。145が古い段階の可能性があるがほかは大津式に伴うものであろう。

ミニチュア土器・赤彩土器・土製品等（図Ⅴ－1－45－151～175、表18、口絵4、図版101）

151～155はミニチュア土器である。高さ10㎝に満たない掌に納まるほどの大きさのものである。A地区ではミニチュア土器の破片が20個体以上あった。151は無節の縄文を思わせるような斜め方向の調整痕がある。口縁部には、残存部では1か所にごく細い粘土を円形に貼り付けその上をくぼませている。152は4か所に山形の波頂部がありこの部分に指頭で窪みを加えている。文様は口縁と胴部にある平行沈線を弧線で繋ぐものである。154は無文のもの。炭化物と見られるものが付着していることから煮炊きに使用された可能性がある。155はミニチュアとして扱ったが、丸底で安定する形状ではない。土製品、玩具のようなものであろうか。156は赤彩の「切断壷形土器」である。焼成前に土器を上下に切り離している特異な土器である。B地区東北側のY80区から、上体（a）と下体（b）が接合した状態で出土した（図版31）。口頸部が欠損しているが、高さは5㎝に満たない胴の張った器形である。無文で、底面を含め全面に赤色顔料が塗られていたのであろう。上体に2か所、胴部（下体）では2か所、後者ではやや高さの異なる位置に突起があり、いずれもごく小さな穿孔がある。この突起は土器を接合・固定する際の紐通し用のものとみられる。157は土器の底部破片である。外側に張り出しのあるもので、この部分に上位から斜め下方に孔が穿たれている。現存するのは1か所であるが、このような張り出しは複数か所にあるものとみられる。この孔については土器を水平に吊るすための紐を通す孔との見方がある。158～166は赤彩土器の破片である。いずれも小片であるが壷形土器とみられる。158は胴部片。器内面は灰褐色であるが、器面が黒褐色を呈し、光が反射するほど磨かれている。胎土が緻密で焼成の良い精製土器である。研磨によって黒光りしたものなのかは判然としない。黒色の付着物があり、その上に赤色顔料が塗られているのが観察できる。黒漆の上に赤色漆が重ねられている可能性がある。ヘラ状施文具によるごく浅い沈線で曲線的な文様が描かれている。159～162は同一個体の破片。頸部に1条太い沈線文がある（159）。166は2条一対の細い沈線での文様がある。大津式に相当するものであろう。

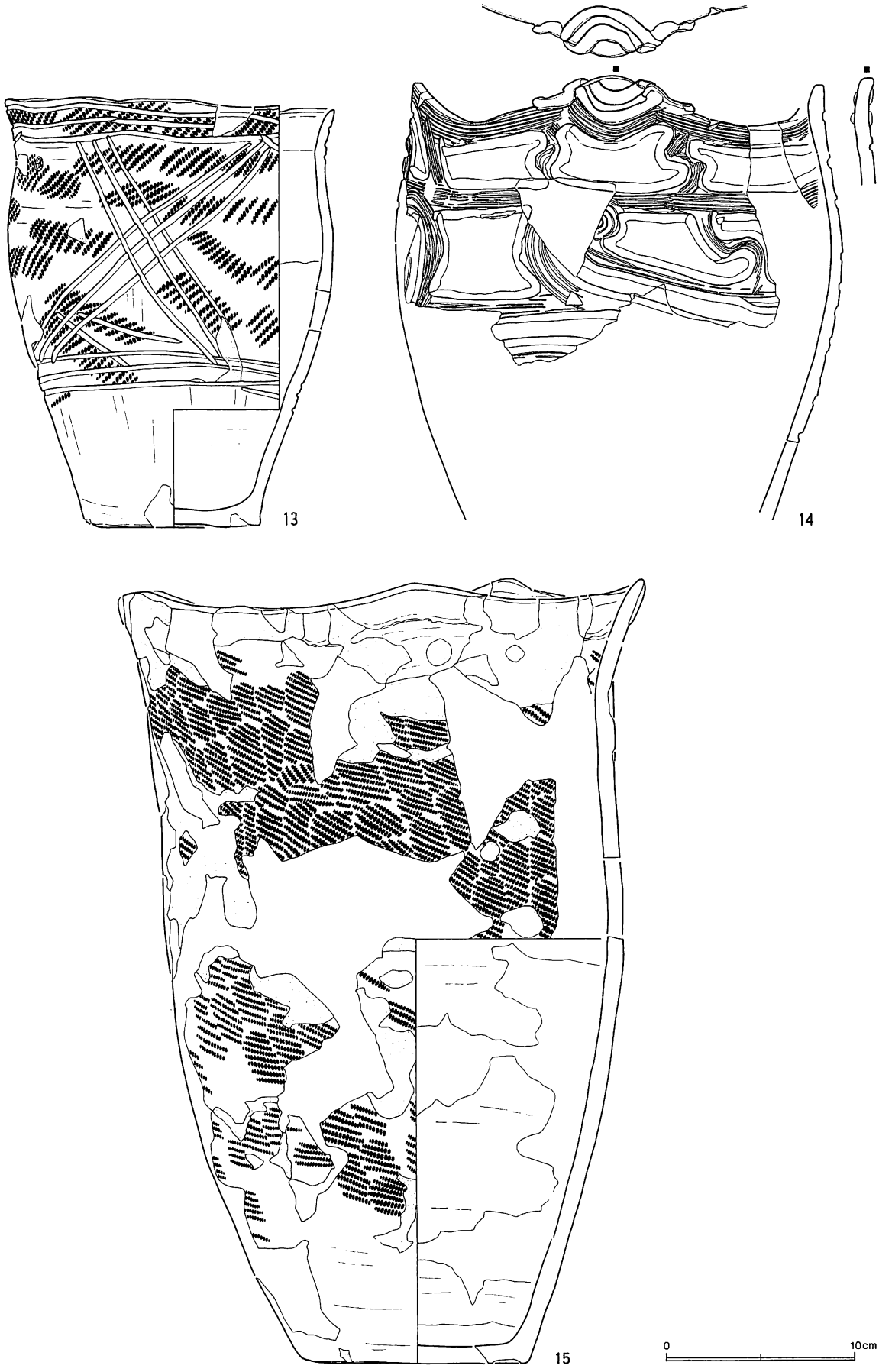
167～169は鐸形土製品である。167はミニチュアの土器（図Ⅳ－1－45－153）に似るが、図上部を下に据え置くと不安定で器としては安定しない。「紐」に相当する部分の形状が異なり、穿孔はないが鐸形土製品に類するものとみなしておく。168は細い原体による縄文地に沈線文、磨消縄文による文様がある。169は先の尖った施文具による刺突文が「紐」の部分から放射状に配されている。170はキノコに似せたものであろうか。キノコ形とすれば、嵩の半分と軸の部分が根元で折れている状態である。171～174はⅣ群a類の土器片を利用した円盤状土製品。171と174は未成品。174は四角く打ち欠き、裏面に穿孔途中の孔がある。175は側面がよく研磨されている。（遠藤）



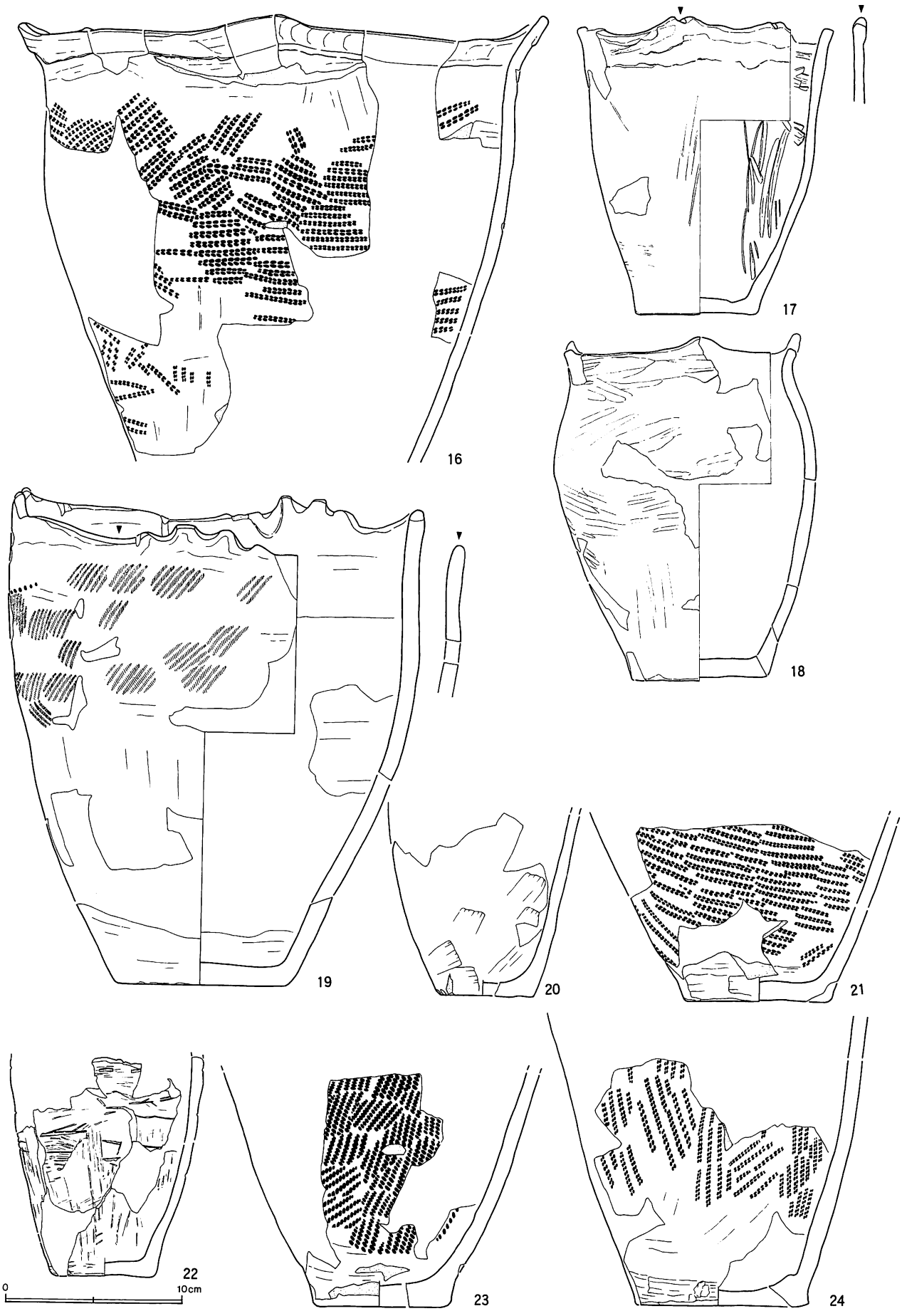
図Ⅴ－１－34　水場遺構の土器とⅣ群ａ類土器の分布（Ｂ地区）

図Ⅴ－１－35　包含層出土のⅢ群ａ類土器（１）・Ⅳ群ａ類土器（１）

図Ⅴ－１－36　包含層出土のⅣ群ａ類土器（２）

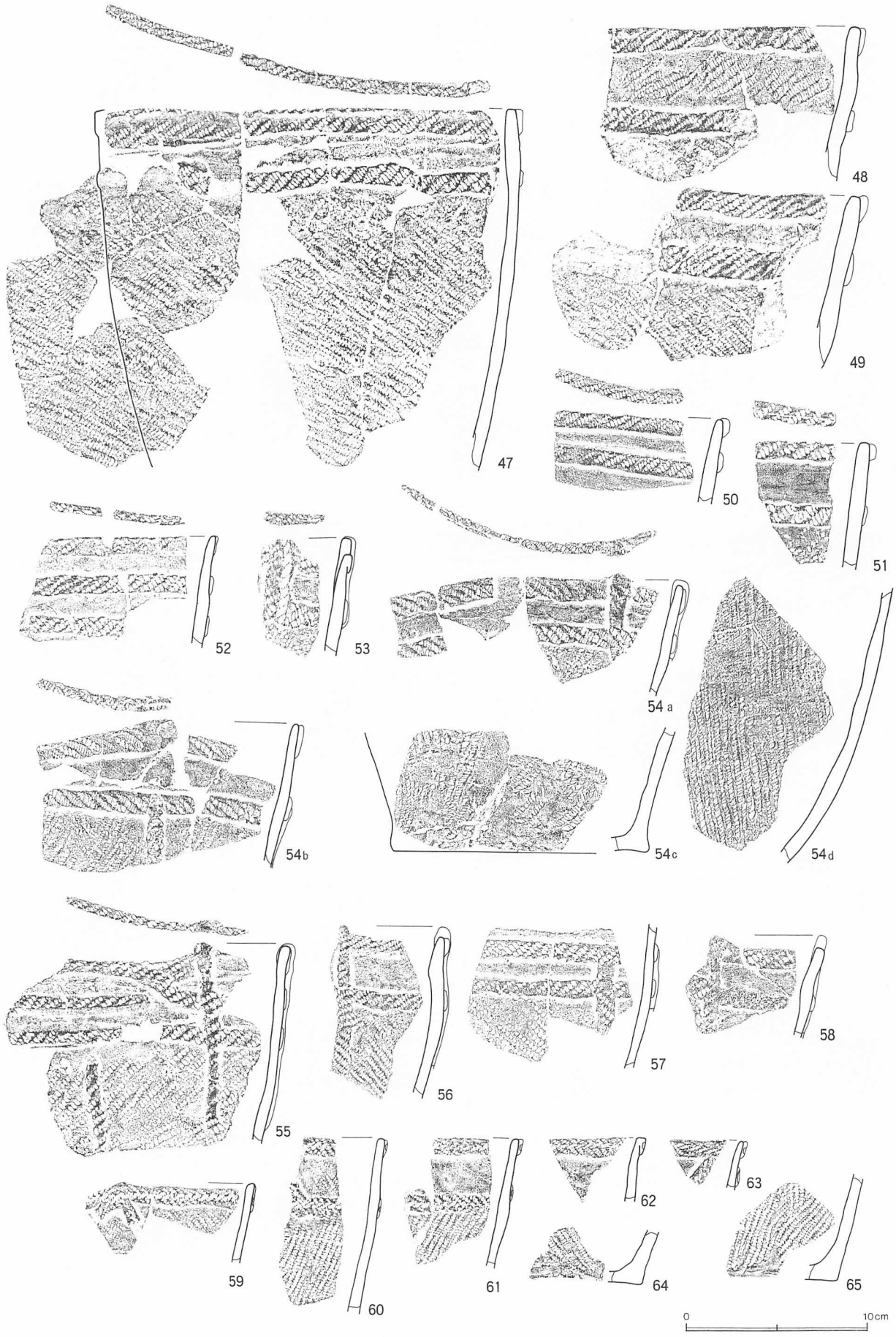


図Ⅴ－１－37　包含層出土のⅣ群ａ類土器（３）



図Ⅴ－１－38　包含層出土のⅣ群ａ類土器（４）

図Ⅴ－１－39　包含層出土のⅢ群ａ類土器（２）・Ⅲ群ｂ類土器・Ⅳ群ａ類土器（５）

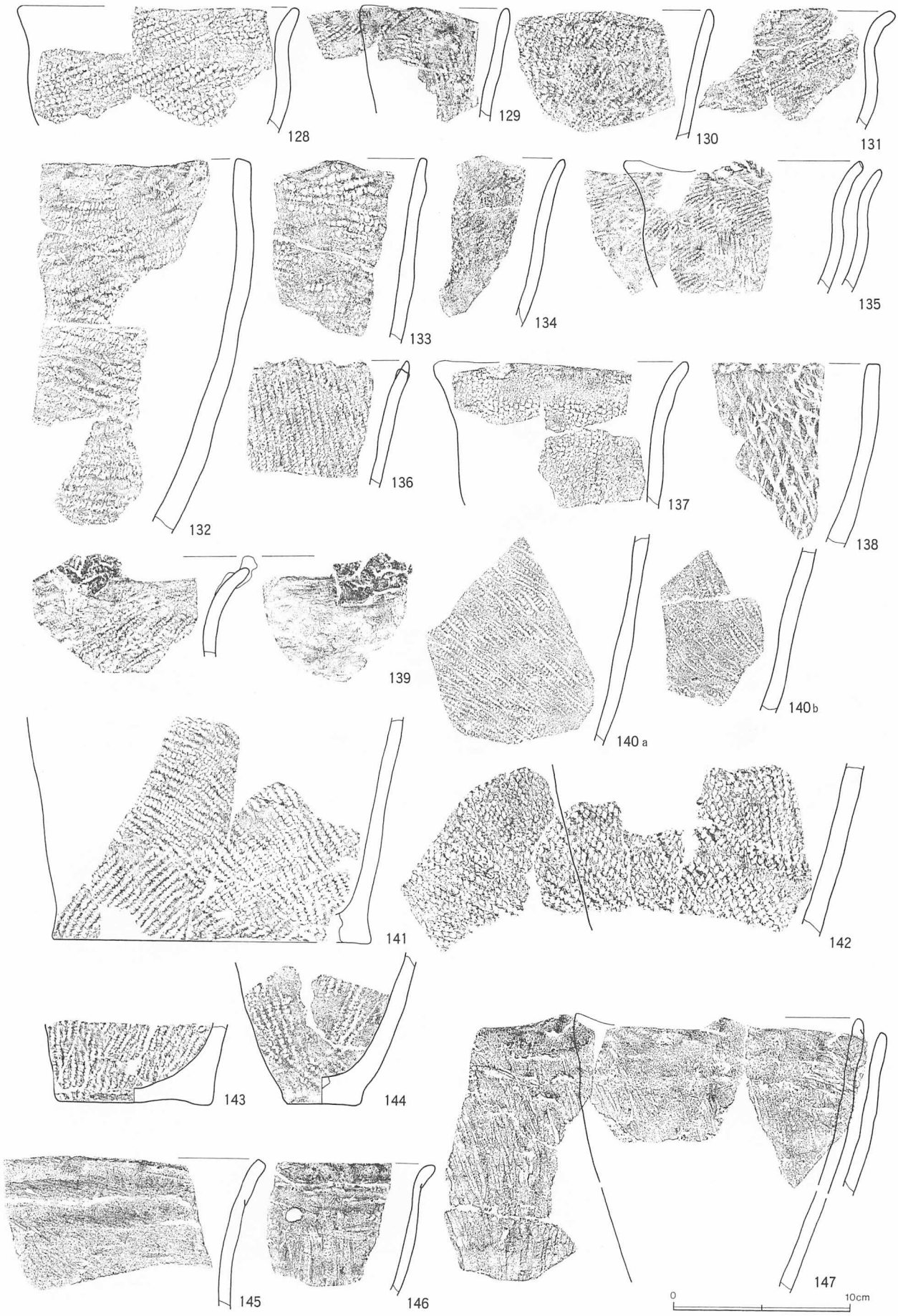


図Ⅴ－１－40　包含層出土のⅣ群ａ類土器（６）

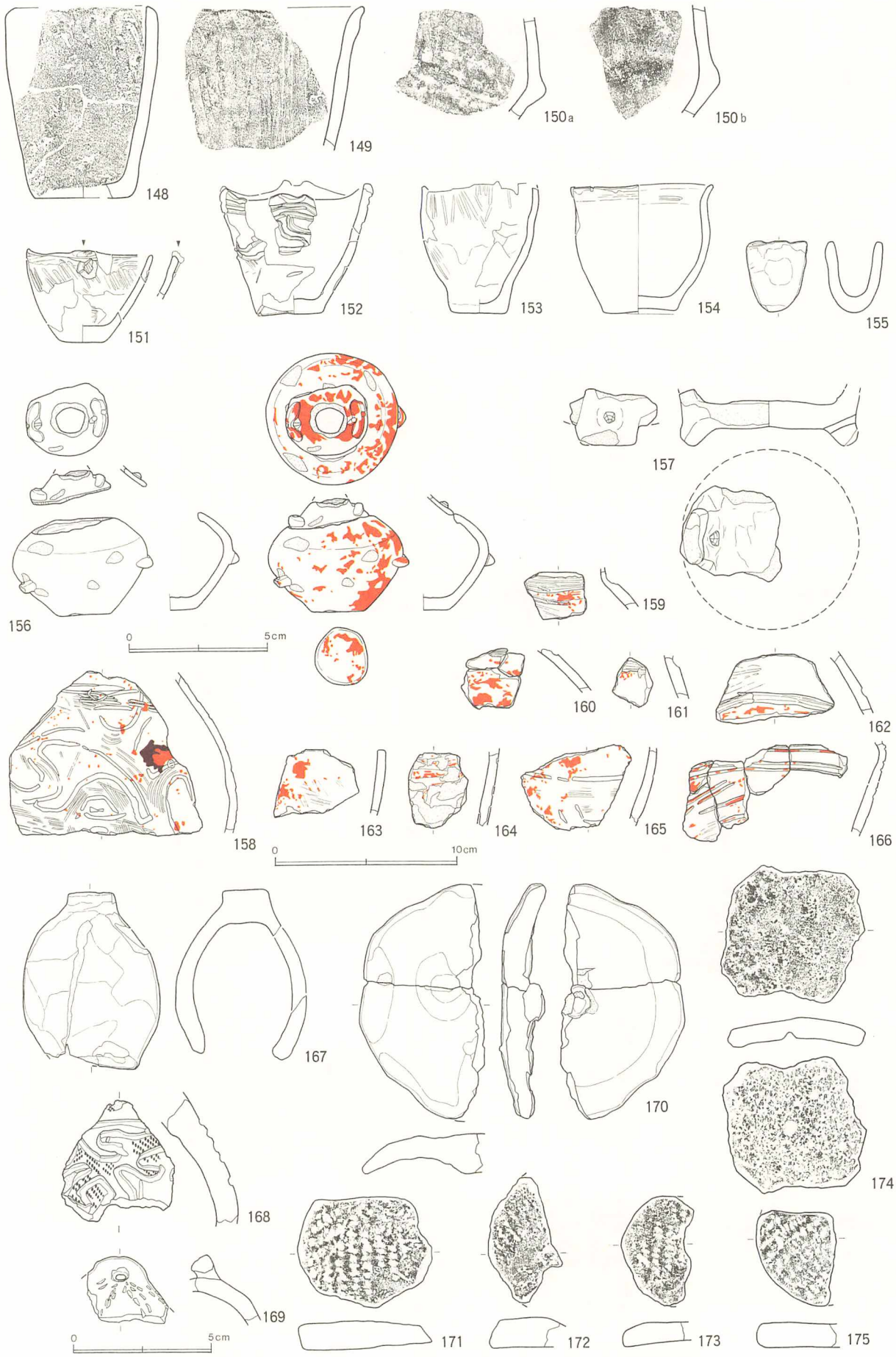
図Ⅴ－１－41　包含層出土のⅣ群ａ類土器（７）

図Ⅴ－１－42　包含層出土のⅣ群ａ類土器（８）

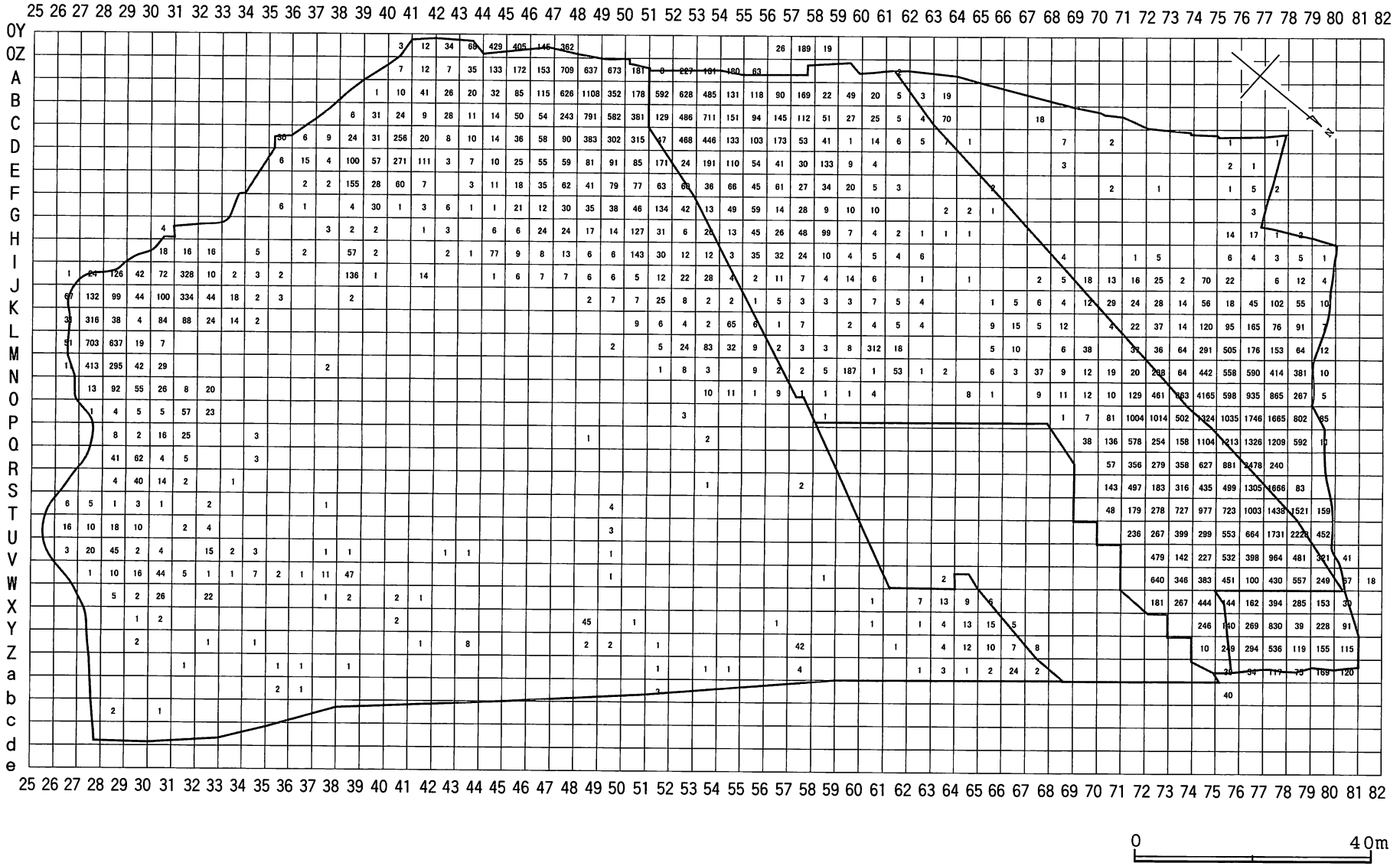
図Ⅴ－１－43　包含層出土のⅣ群ａ類土器（９）



図Ⅴ－１－44　包含層出土のⅣ群ａ類土器（10）

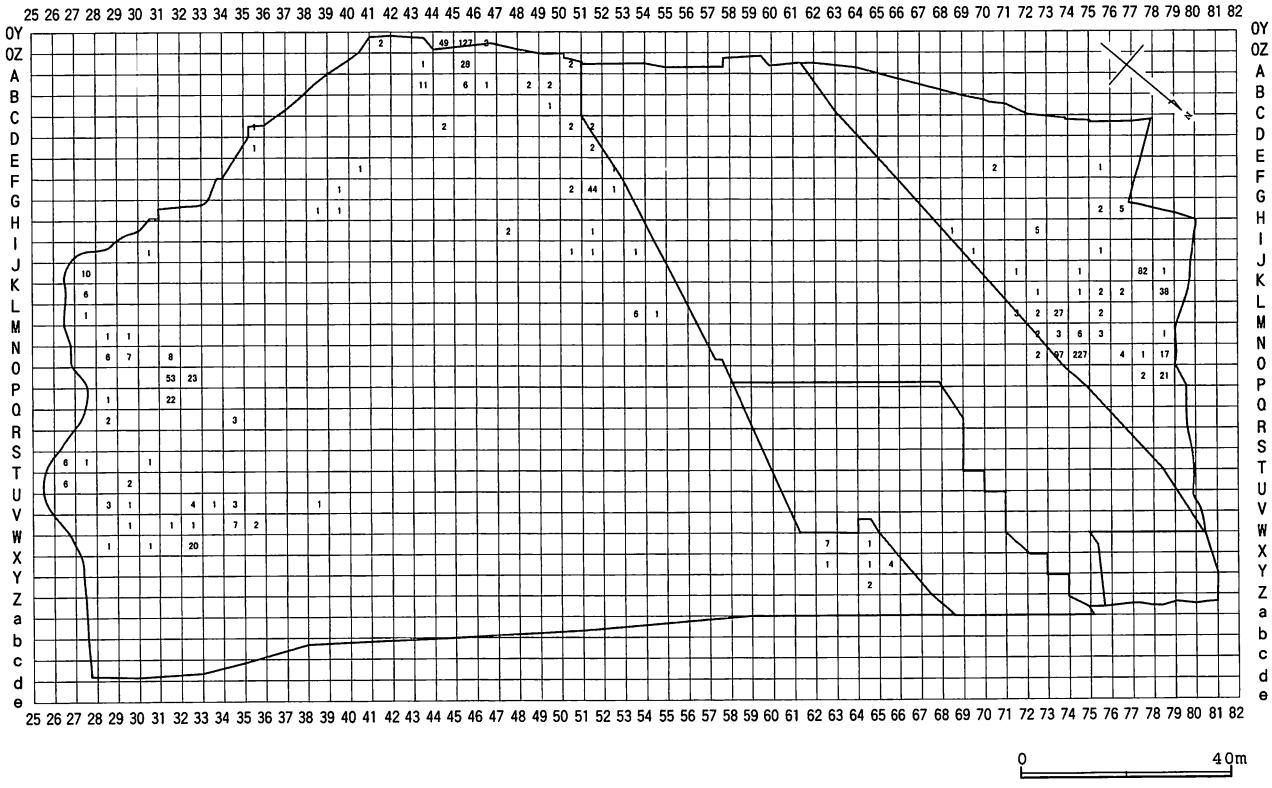


図Ⅴ－１－45　包含層出土のⅣ群ａ類土器（11）・ミニチュア土器・赤彩土器・土製品等

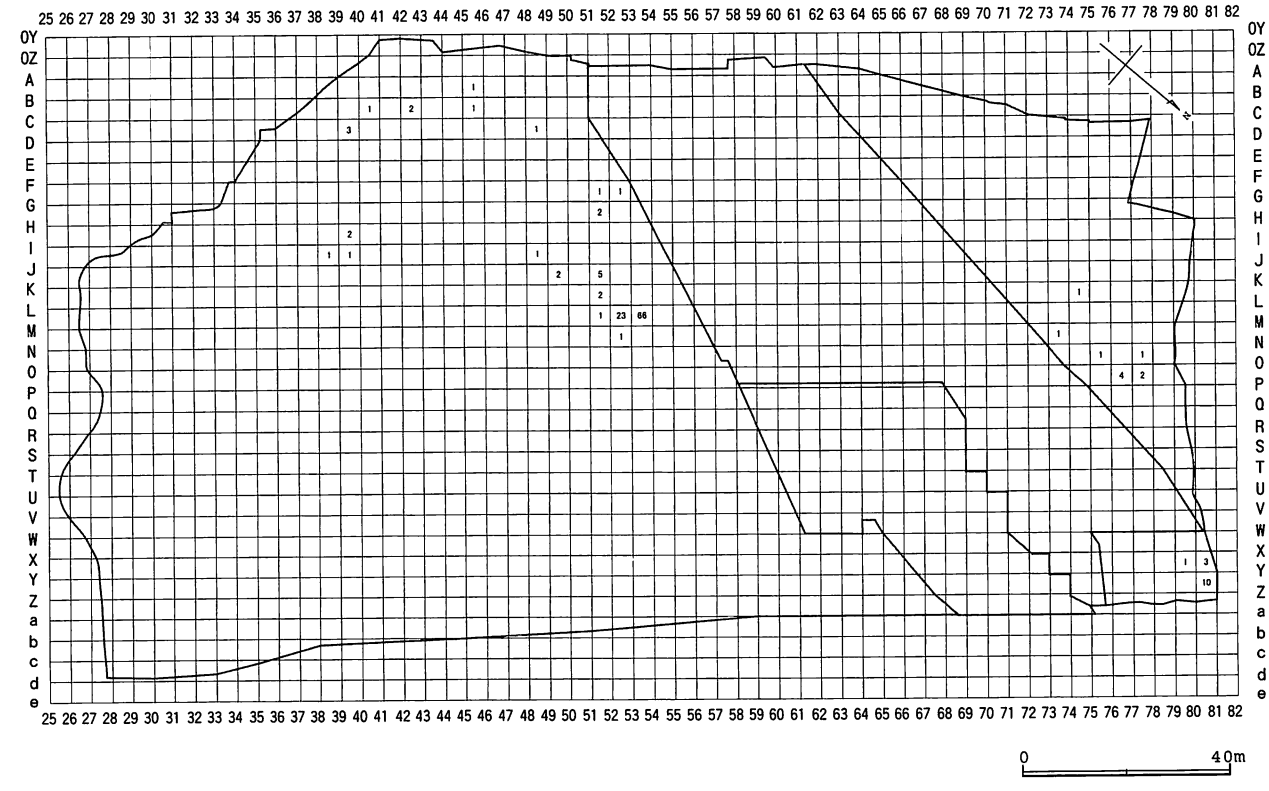


図Ⅴ－１－46　包含層出土土器の分布（１）

Ⅲ群a類

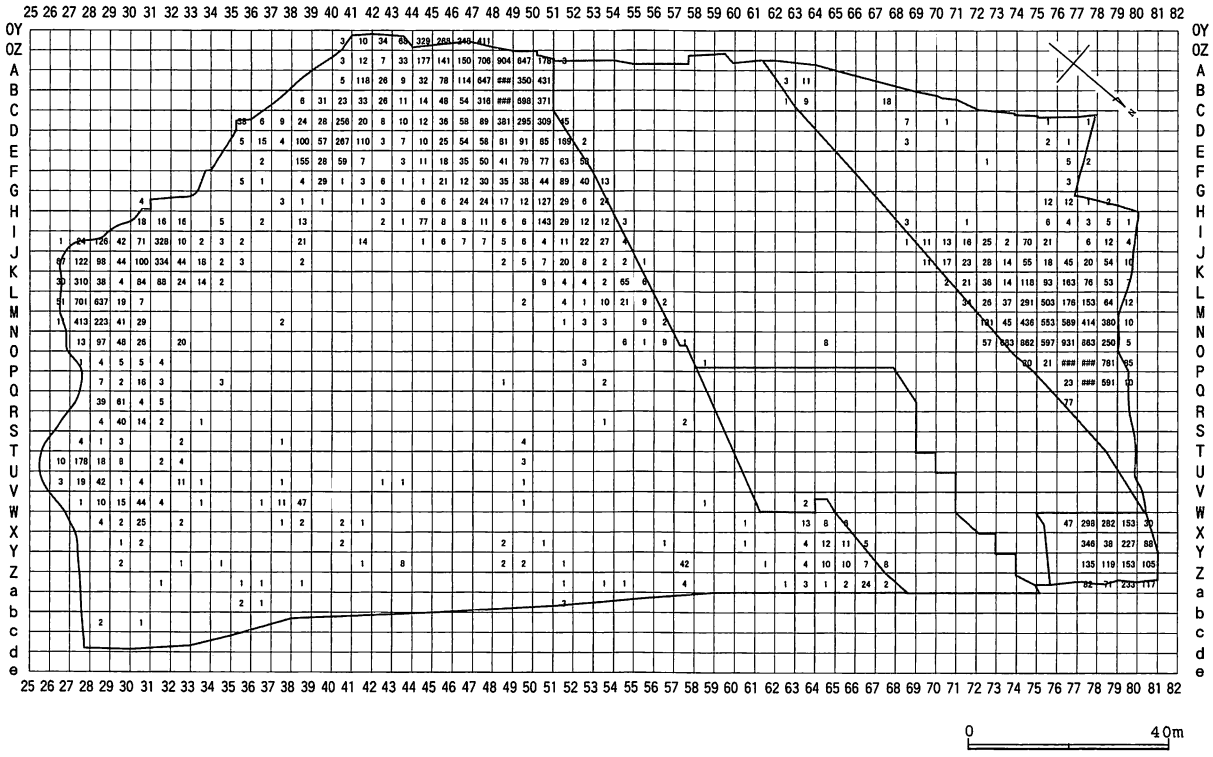


Ⅲ群b類

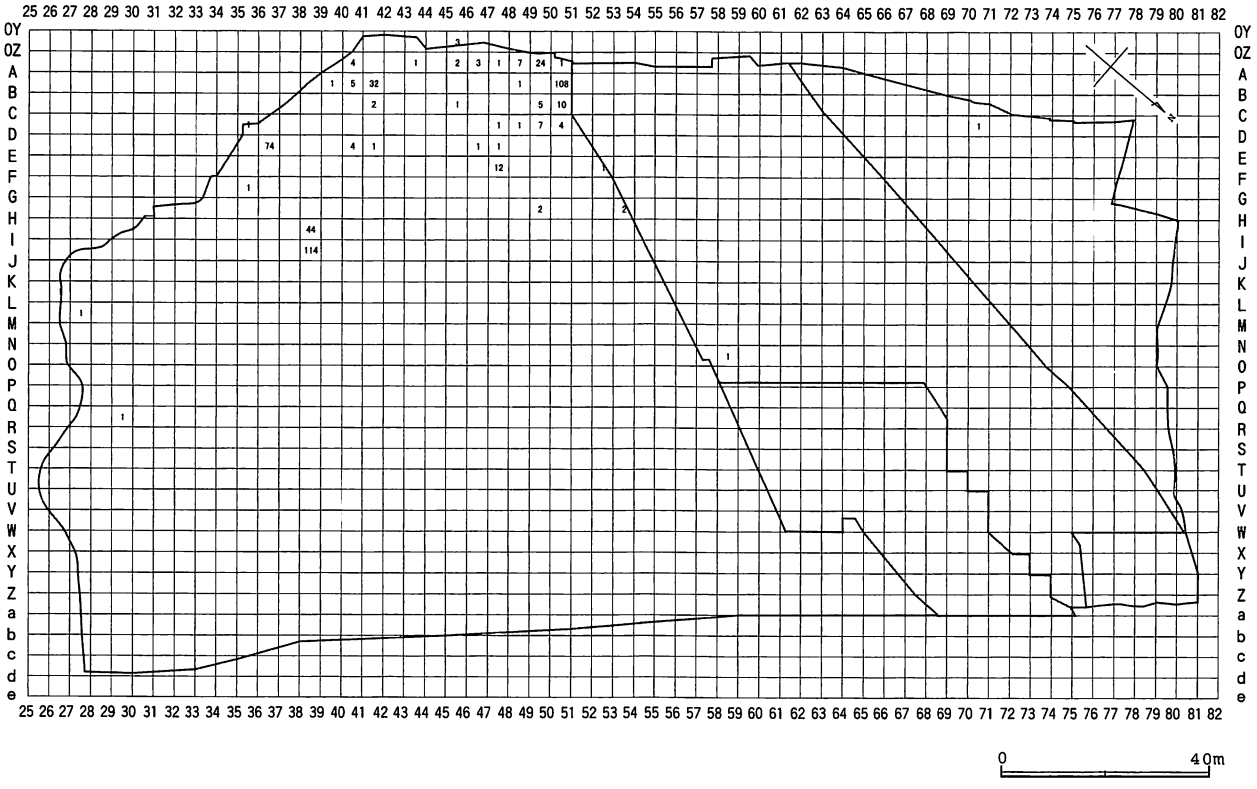


図Ⅴ－１－47　包含層出土土器の分布（２）Ⅲ群ａ類・Ⅲ群ｂ類

Ⅳ群a類

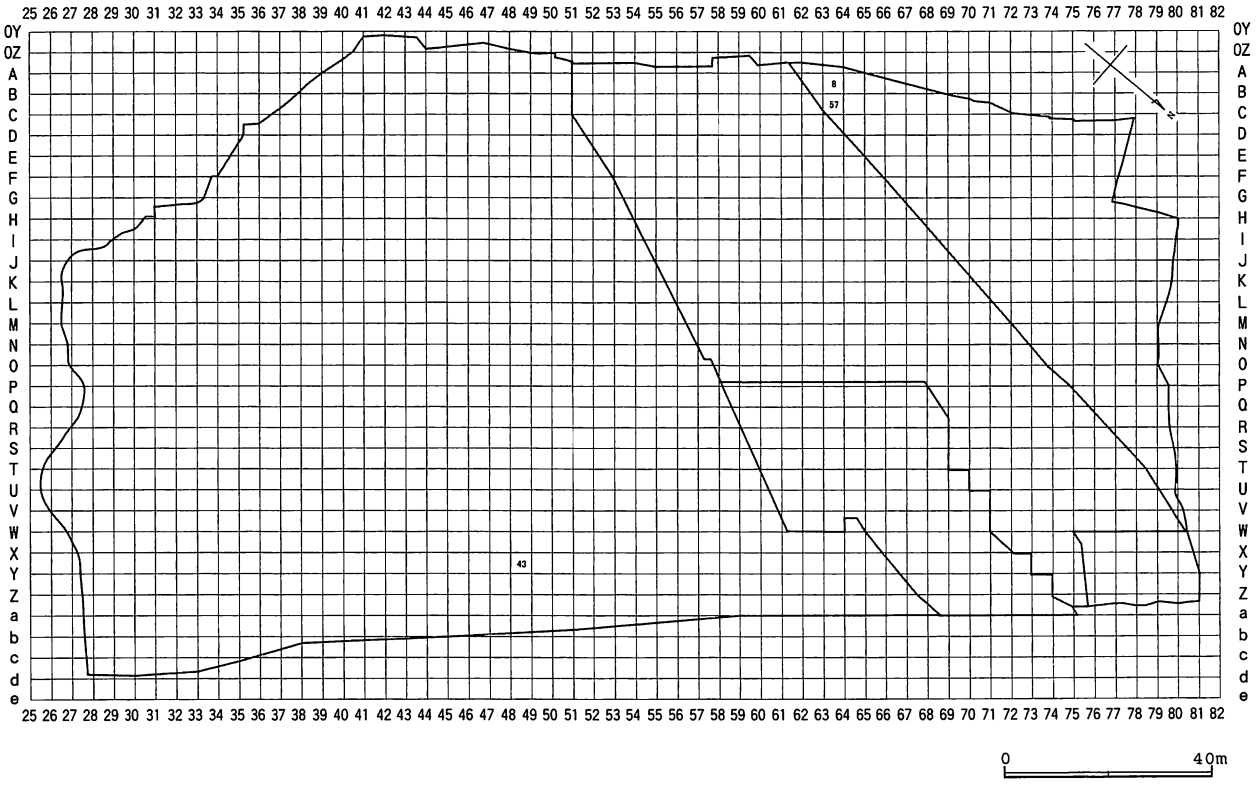


Ⅳ群b類

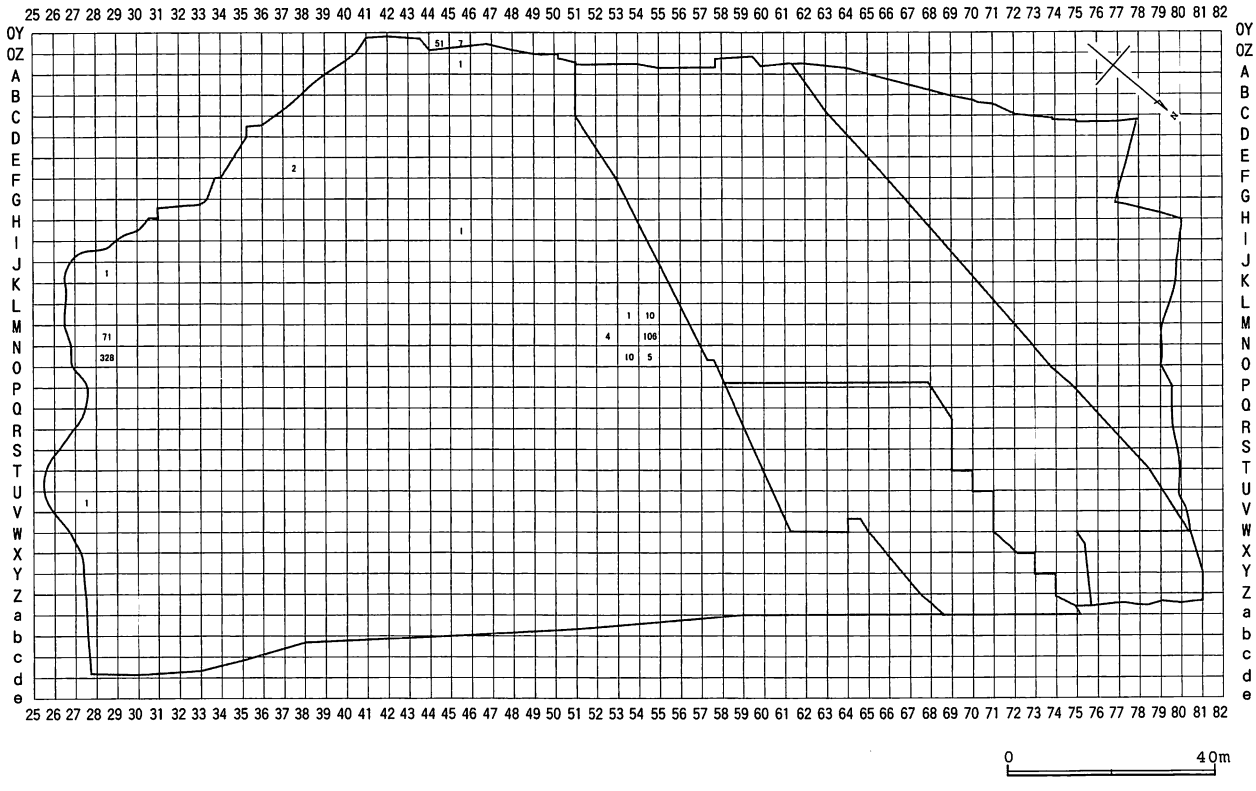


図Ⅴ－１－48　包含層出土土器の分布（３）Ⅳ群ａ類・Ⅳ群ｂ類

Ⅴ群b類



Ⅵ群a類



図Ⅴ－１－49　包含層出土土器の分布（４）Ⅴ群ｂ類・Ⅵ群ａ類

2．石器

（1）剥片石器・剥片

包含層からは3,416点の剥片石器および剥片が出土し、その内96点を図示した。図示遺物の選択にあたっては、全点分類・細別・計測した上で、器種細別の特徴を代表するものの抽出に努めた。図示した遺物は剥片を除く625点の剥片石器全体の約15％である。

剥片石器の内訳は、Rフレイク175点が最も多く、石核127点、Uフレイク108点、スクレイパー96点、石鏃80点と続く。ほかは、つまみ付ナイフが10点、石錐が 9 点あり、石槍又はナイフ、篦状石器、楔形石器、両面調整石器、異形石器は数点である。

剥片石器の重量を見ると、石核7.29kg、Rフレイク3.87kg、スクレイパー3.28kg、Uフレイク2.20kg、両面調整石器0.19kg、つまみ付きナイフ0.12kg、石鏃0.13kg、篦状石器0.07kg、楔形石器0.06kg、石錐・ナイフ0.05kgとなる。

剥片石器の石材は、頁岩が485点と多く、次いでメノウ68点、黒曜石29点、珪化岩27点、デイサイト12点。重量でも、頁岩が10.23kgと圧倒的で、メノウ4.18kg、デイサイト1.78kg、珪化岩0.74kg、黒曜石0.23kgと続く。頁岩、メノウ、デイサイト、そして珪化岩は、いずれも近隣の産地から採取されたものと考えられる。なお、ここでデイサイトとしたものは無斑晶の火成岩で、玄武岩、安山岩の可能性をもつ。また珪化岩は、チャートとよく誤認されるものである（森町教委2006）。黒曜石は、白滝産も含まれるが、赤井川産が多いようである。

剥片石器、剥片の分布の濃淡を見ると、調査区北西側、南西側、南東側、北東側の大きく 4 か所に分かれる。北西側は遺構が集中する地点、南西側は調査区外に遺構が集中するとみられる地点、南東側、北東側は沢の肩部にあたる。なかでも分布が濃いのが、北西側と南西側。石鏃、スクレイパー、Rフレイク、Uフレイクは、他の剥片石器・剥片の分布と同様の傾向を示す。一方、石核については、他の剥片石器・剥片の分布に類似するものの、より出土有無が明瞭な分布となっている。この分布の差は、道具として利用されるものと、その場に放棄されるものとによる違いと考えられる。

出土層位をみると、ほとんどが黒色土Ⅳ層の下半に包含されていた。出土層位と土器の出土点数、遺構の分布状態から判断すると、大半は縄文時代中期中葉～後期前葉の石器と考えられる。

石鏃（図Ⅴ－２－１－１～22、表19、図版102）

総数80点出土し、22点図示した。細別では、有茎鏃が65点と大半を占め、無茎鏃は 3 点。ほかに未成品としたものが 7 点ある。有茎鏃は、平基37点、凸基15点、凹基 4 点、尖基 9 点となり、無茎鏃は、平基三角形 3 点、平基柳葉形 2 点、凹基 1 点となる。

石材別では頁岩が58点と最も多く、黒曜石14点、赤色珪化岩 1 点、珪化岩 2 点、メノウ 1 点。分布は、調査区北西側遺構集中区に多く、ついで南西側にややまとまる。

①有茎平基：１～11が該当する。石質は、黒曜石 1 点（２）、メノウ 1 点（１）、珪化岩 2 点、赤色珪化岩 1 点、メノウ質頁岩（11）のほかは、頁岩。

体部が二等辺三角形で、側辺が直線的か、緩やかに外湾するものが大半である。体部の長幅比を見ると、a.「１:1.24以下」の１・２、b.「１:1.25～１:1.74」の３、c.「１:1.75～１:2.24」の４～８、d.「１:2.25～１:3.25」の９・10、e.「１:3.25以上」の11に分けられる。この長幅比は、体部長の長さに比例しており、幅は1.4～1.5cmに集中する。最も多いのが長幅比bで11点、次が長幅比cで 8 点、そして長幅比aおよびdが各 2 点、長幅比eが 1 点となる。体部長の短いものは側辺が直線的で、体部長の長いものは側辺が緩やかに外湾している。

このうち、アスファルトが10点（３～８、11）に付着していた（白図に黒塗りで示した）。いずれも茎部から体部のかえしがある部分に限られ、矢柄への装着が根バサミではなく、管に挿入する方法であったことが推定される。これらは「完成品」とみられ、その大きさは、長さ2.40～3.64㎝、幅1.20～1.55㎝、厚さ0.30～0.62㎝。平均値は、長さ3.15㎝、幅1.35㎝、厚さ0.45㎝。中央値は、長さ3.24㎝、幅1.40㎝、厚さ0.43㎝。アスファルト付着品の各値の範囲は狭く、長幅比は、1.34となる１点を除き、1.75以上の長幅比c～eとなる。ただし、７のように剥離が粗く、平面・側面とも対称性がないものも、アスファルトが付着しており、必ずしも形態だけでは判断できないようである。

アスファルト付着が見られないものの大きさは、長さ2.08～4.70㎝、幅1.09～2.07㎝、および2.41㎝、厚さ0.29～0.65㎝。平均値は、長さ3.24㎝、幅1.50㎝、厚さ0.42㎝。中央値は、長さ2.98㎝、幅1.45㎝、厚さ0.39㎝。図示していないが、茎部が突起様で0.5㎝と短く、残存長2.75㎝、幅2.41㎝の例が１点含まれる。

２や９のようにかえし付近が突出するものもある。２は、黒曜石製で、先端が細く、体部中央で幅を広げ、かえし部で中軸に平行するように辺を屈曲する。９は、頁岩製で、体部中央に浅い抉りを入れることで、かえし部分が突出する。２・９と同形態のものは各１例出土している。２の例は縄文時代後期後半の可能性が高い。

②有茎凹基：12・13が該当する。13が黒曜石製で、ほかは頁岩製。かえしの下辺から明確に抉りが入れられることによって分類した。いずれも入念な作りで、長さ３～3.5㎝前後、体部長2.1～2.95㎝、幅1.51～1.99㎝、厚さ0.31～0.47㎝、体部長幅比1.51～1.99と大きさもまとまりがある。

ただ、細かな形態で二種に分かれる。ひとつは、かえしが先鋭なもの（12）。もう一つは、かえしの先端がΣ形になるように調整するもの（13）。各形態とも別に各１点ある。後者は、濁川左岸遺跡B地区の報告で、「特殊なかえしを持つもの」とされた。

③有茎凸基：14・15が該当する。黒曜石製２点、赤色珪化岩製１点のほかは、図示したものも含め頁岩製。平基との分類基準は、かえし部の屈曲が両側とも90°を超えるものとしたが、必ずしも明確ではない。

14が、今回有茎凸基と分類したものの典型に近い。長さ１㎝前後、幅1.5㎝前後、厚さ0.5㎝前後、体部長幅比1.76～2.23となるもので、図示したものも含め２点ある。これとは別に形態はほとんど変わらずに、より小型の長さ３㎝前後、幅1.4㎝前後、厚さ0.4㎝前後、体部長幅比1.5前後のものが２点ある。

15は、アスファルトが付着しており、有茎凸基ではこれだけである。付着は、茎部から体部のかえしがある部分に限られる。体部長幅比は1.83と典型であるが、長さ2.59㎝、幅0.95㎝と小型で、側面の対称性もない。

④尖基：16～18が該当する。黒曜石製２点、デイサイト製１点のほかは、図示したものも含め頁岩製。長幅比により、幅が狭いのものと、幅が広いものに細分される。16・17は、幅が狭いもので、図示していないものも含め、大きさは長さ2.9～3.3㎝前後、幅1.01～1.37㎝、厚さ0.31～0.47㎝、長幅比は2.37～3.36とまとまりがよい。いずれも不明瞭な茎部を作り出すが、尖基とした。18は、唯一の幅が広いもので、長幅比は1.75。

⑤無茎平基：19～21が該当する。頁岩製が１点あるほかは、図示したものも含め黒曜石製。形態により、三角形と、柳葉形がある。

三角形は、さらに長さ３㎝前後、幅２㎝前後、長幅比1.5前後と、長さ２㎝前後、幅１㎝前後、長幅比2.5前後に分かれる。大きなものが20で、N56区から出土している。両極剥離による薄手の剥片を素材に、背面を中心に調整剥離を行う。腹面は先端と基部の調整のほかは、左側辺の調整のみなされる。

小さなものは、K73区、W32区から各１点出土している。19は、背面に一部角礫面を残すも、それ以外は入念な調整剥離がなされる。特に腹面では左側縁から平行剥離されている。

柳葉形は、OZ45区、I27区から各１点出土している。21は、微細な球顆が入る黒曜石製。Ⅴ層から出土したもので、縄文時代早期の所産とみられる。両面を入念な平行剥離で調整している。図示していないもう１点は、頁岩製で、未成品である。厚みがあり、調整も粗い小型品。

⑥無茎凹基：22が該当する。球顆が多く入る黒曜石製で、J27区から出土している。素材の影響で階段状剥離を起こしており、厚みがある。

このほか未成品としたものが８点ある。そのうち、0.8～1.0cmほどの厚みのある剥片を両面調整するも、先端を先鋭化させずに放棄したとみられるものが２点ある。また、素材剥片の剥離軸と、木葉形ないし菱形の器体軸とが斜交するものが１点ある。後者の調整剥離は、縁辺で終わっており、折損や調整剥離の見通しから、中途で放棄されたものとみられる。

石槍（図Ⅴ－２－１－23、表19　図版102）

総数１点出土し、図示した。23は、メノウ製の木葉形。背面に円礫面を残す横長剥片を素材にする。主な調整剥離は、縁辺に限られる。

石錐（図Ⅴ－２－１－24～26、表19、図版102）

総数９点出土し、３点図示した。細別では剥片の一端に機能部を作出するものが３点、両面調整による棒状品が３点。石材は、メノウ製１点のほかは頁岩製。

24は、剥片の一端に機能部を作出するもの。素材剥片の剥離軸と、器体軸とが斜交する。素材剥片が先鋭になった部分で、一面一辺に調整剥離を施し、機能部としている。つまみにあたる部分では、機能部とは調整剥離する辺を入れ替えて、縁辺を調整している。機能部断面は丸みのある三角形に調整される。

25・26は棒状品。25は、器体中央で両側が膨らみ、そこから機能部にかけて入念に両面調整する。機能部断面はレンズ状を呈する。26は機能部を折損しているが、折断面を見ると丸みのある三角形に調整している。

つまみ付きナイフ（図Ⅴ－２－１－27～31、表19、図版102）

総数10点出土し、５点図示した。細別では、縦型８点、横型２点がある。石材はすべて頁岩製。

①縦型（27～30）：27は、つまみ部を欠損するが、素材背面に角礫面を残し、右縁辺を刃潰し調整する。素材腹面は全面に調整剥離を施すが、左辺に比べ右辺の調整は粗い。左辺の刃部角は30°。これは、縄文時代早期後半のつまみ付ナイフの特徴を示すものである。

28は素材縦長剥片末端につまみ部をあてる。つまみ部と体部とを分ける抉りは明瞭であるが、両者の幅は変わらない。刃部調整剥離は背面に限られる。右辺の刃部角は55°、左辺の刃部角は65°で、腹面中央右半に使用痕とみられる光沢がある。これと似る破片がほかに１点ある。

29も28同様のつまみ部を持つが、抉りは不明瞭である。また、打面側につまみ部をおき、剥離も腹面に限定している。右辺は使用による微細剥離、左辺は刃潰し調整と見られる。左辺末端側には、素材に先行する剥離面による湾入があるが、背面側に微細剥離が見られ、凹形刃部であったと考えられる。

30は、縦長ではあるものの、幅広で寸詰まり。つまみ部は明瞭に作り出される。調整剥離は背面に

限られ、右辺刃部角が30°、左辺刃部角が60°。右辺の末端を折損するが、末端に刃部角45°ほどの凹形刃部をもつ。
②横型（31）：横長剥片を素材にする小型のもの。つまみ部は棒状で長い。体部の調整は縁辺に限られるが、両面を調整している。末端の刃部角は40°。

図示したもの以外には、不明瞭なつまみ部をもち、右辺は刃潰し調整、左辺に微細剥離ないし調整剥離が見られる小型品２点、やや明瞭なつまみ部を持つも、ねじれた器体の左辺に刃部角45°で背面に調整剥離を施すもの１点がある。

ナイフ（図Ⅴ－２－２－32・33、表19、図版102）

総数２点出土し、ともに図示した。32は褐色珪化岩製で、平面・側面とも強い対称性を持つ。基部側両面に角礫面が残ることから、扁平な角礫を原材としたとみられる。最初に敲打によるとみられる剥離で両面全面を調整し、押圧剥離により縁辺を調整している。両辺の調整も細かに見ると精粗があり、階段状剥離がある辺を、主たる刃部にしていたものと思われる。

33は、メノウ製で、素材剥片の剥離軸と、器体軸とが斜交する。打面には原石面が残る。両面調整するも、体部中央には先行した剥離面が残る。平面、右側辺はやや対称性を持つが、左側辺ではねじれる。左側辺先端側を主たる刃部にしていたと思われる。

篦状石器（図Ⅴ－２－２－34～36、表19、図版102）

総数３点出土し、図示した。細別では凸形２点、撥形１点がある。
①撥形（34）：角礫面の打面を持つ珪化岩製縦長剥片を素材とする。末端辺と左右辺下部の背面末端側を覆うように調整剥離する。それ以外の右辺は両面の縁辺を調整し、左辺は背面を主に調整する。
②凸形（35・36）：35は頁岩製で、縦長剥片を素材にしている。柄部は折損している。末端辺の調整は、背面では散漫な調整、腹面では平行剥離がなされる。末端片の調整剥離の稜線はいずれも摩耗し、光沢を持つ。36は黒曜石製で、両面を調整する。末端辺の一面では、使用によるとみられる微細剥離、摩耗が観察される。摩耗は、左右縁辺に及んでいる。段を境に柄部と刃部に分けられるが、刃部は被熱により光沢を失っている（スクリーントーンで示した範囲）。柄に装着された状態で、火を受けたものと考えられる。使用痕も含め、この石器の使用状態を示す貴重な例である。

スクレイパー（図Ⅴ－２－２－37～42、図Ⅴ－２－３－43～50、図Ⅴ－２－４－51～62、図Ⅴ－２－５－63～66、表19、図版103・104）

総数96点出土し、30点図示した。細別ではサイドスクレイパー80点、抉入石器３点、破片10点である。サイドスクレイパーは、刃部が外湾するもの37点、直線的なもの29点、内湾するもの２点、その他９点に分けられる。

刃部に使用痕とみられる光沢が観察されるものが28点ある（ドットのスクリーントーンで示した。濃いスクリーントーンは明瞭な光沢、薄いスクリーントーンは鈍い光沢を表現している）。内訳は、右辺に見られるもの12点、左辺に見られるもの12点、左右両辺に見られるもの１点、末端辺に見られるもの１点。刃部の形態では、直線的なもの13点、外湾するもの10点で、内湾するもの・破片が各２点。

石材はメノウ８点（46・58）、デイサイト１点（45・57）、珪化岩２点、赤色珪化岩１点のほかは、頁岩製。
①刃部が外湾するもの（37～46）

a）右辺背面を調整するもの（37・38）。右辺刃部角は、37で60°、38で40°。2点とも使用痕とみられる光沢がある。腹面では、右側に広くかつ明瞭な光沢、左側縁辺に鈍い光沢が観察される。一方、左辺は、先行する剥離面ないし自然礫面により75°（37）、85°（38）の角度を持つ。37は、打面側も調整剥離を行うことで、器体の平面的対称性を作り出している。38は刃部再生のために右辺両面を交互剥離している。あるいはこの刃部再生以前は調整剥離されない状態であったかもしれない。なお、左辺末端側～末端辺左側にかけて微細剥離が認められる。

b）左辺を調整するもの（39）。左側腹面中央を中心に光沢が観察される。右辺には微細剥離がある。

c）背面の左右両辺に調整剥離を施すもの（40～42）。40・41は左右両側に光沢が見られる。ただし、腹面を見ると右側でより顕著である。40の左辺は急斜度で鋸歯状の二次加工。41の腹面左右両辺には不連続な剥離が見られる。42は、右辺は背面、左辺は両面を調整剥離する。左辺の打面側にはアスファルト様の付着物がある。

d）腹面に調整剥離を施して刃部とするもの（43～46）。43は、左辺腹面に急斜度の調整剥離がなされるが、光沢は右側にみられる。右辺では、両面に調整剥離がなされるが、腹面では背面の調整を切るように調整剥離がなされる。当初は右辺を刃部としていたものを、刃潰しして、左辺へ刃部を変更したものとみられる。44は右側、46は左側に光沢がみられる。背面には不連続な剥離がみられる。45は末端辺に調整剥離が施されるもの。

②刃部が直線的なもの（47～58）

a）背面の一辺に調整剥離を施すもの（47～50）。47・48は、右辺を調整するもので、右側の背腹両面に光沢が見られる。48では、特に腹面で著しく、最も光沢の強い部分は、触感が滑らかで、磨き込まれた様になっている。左辺は素材縁辺を潰すような調整がなされる。49・50は左辺を調整するもので、左側の背腹両面に光沢が見られる。50は打面側両面にも光沢がある。右辺については、49は先行する剥離面と腹面とでほぼ直角の角度となり、50は縁を潰すような調整がなされている。

b）背面の左右両側辺に調整剥離を施すもの（51・52）。左右両側に光沢が見られる。ただし、52は左側腹面がより顕著である。右辺腹面には散漫な剥離が見られる。

c）腹面に調整剥離を施して刃部とするもの（53～58）。53・56は右側に光沢が観察される。調整剥離は腹面に明瞭であるが、背面を見ると腹面に先行した調整剥離の痕跡を見ることが出来る。刃部再生の際に、背面調整から腹面調整に変更したものの可能性が高い。左辺はいずれも縁を潰すように調整されている。54は、左側に光沢が観察される。右辺には微細剥離が認められる。55は、腹面左側辺を平行剥離により刃部とするもの。背面には大きく円礫面が残る。57は、全辺に調整剥離を施す。主たる刃部は右辺で、左辺では階段状剥離が顕著だったり、調整が背面にもなされたりしている。58は、素材末端に調整剥離を施す。腹面に鈍い光沢がみられる。背面にも調整が見られるが、刃部再生に伴うものと考える。

③刃部が内湾するもの（59～61）：59・60は、右辺に調整剥離がなされる。左辺は刃潰し調整がされ、59では両面から粗く調整し、60では丁寧な両面調整後、折断している。なお、60の右側腹面中央付近には光沢が見られる。61は打面側を折損している。左右両辺背面を丁寧に調整剥離する。右辺を内湾させ、左辺を外湾させ、末端は先鋭にする。つまみ付ナイフの破損品の可能性もある。腹面には広く光沢が見られる。

④刃部が急斜度のもの（62・63）：63は菱形を呈する縦長剥片を素材とし、末端側両辺に調整剥離がなされる。調整は、右辺がやや丁寧で、左辺は粗い。刃部角は両側とも70°ほどである。62も同様なものであるが、小型で、調整も精緻。刃部角は、左側が70°、右側が60°。

⑤抉入石器（64・65）：64の抉りは深く、大きく１回の剥離で抉りとし、内部の陰瘤痕を調整して刃部としたようであるが、最終的に中央部で階段状剥離が進行してしまったために、廃棄されたとみられる。一方、65の抉りは浅く、素材の形状を利用したものと考えられる。抉りの内部は、連続的な調整剥離がなされる。素材末端辺にも調整剥離が施されることから、サイドスクレーパーとしても機能したのであろう。左辺は刃潰しされている。
⑥破片（66）：左右両辺に刃部調整がなされるが、右辺はやや粗く、左辺は精緻である。光沢は腹面の左右両側に観察されるが、左側に顕著。両側縁の突出した部分は摩耗している。

両面調整石器（図Ⅴ－２－５－67～70、表19、図版104）

総数５点出土し、４点図示した。材質は、頁岩製２点、黒曜石製、メノウ製、デイサイト製各１点。いずれも粗く両面調整をしたもので、先鋭にしたり、刃部を形成したりしていない。未成品の可能性も高い。図示していない１点は、石鏃の未成品とみられるもの。

67の石材は、いわゆる花十勝で、白滝産黒曜石とみられる。横長剥片を素材にしたとみられ、中途で折損している。調整は、両面に及ぶが、両面とも一面の片辺をやや丁寧に調整し、もう一辺は粗い調整で、反対面の丁寧な調整に切られる。この調整の状況からすると、石槍かナイフを製作する意図であったが、折損した段階で放棄されたものと推測される。なお、素材主剥離面が残存する図左面には、丁寧な調整を切る複数の剥離が見られ、O78区から出土したRフレイクが接合した。Rフレイクも整形途上で放棄されているが、おそらく石鏃の未成品とみられる。つまり放棄後、この両面調整石器は、石核とされたものと考えられる。

68・69は、細長い形態で、左右両辺両面を粗く調整している。68は縦長剥片、69は横長剥片を素材にしている。70は、幅広の形態で、両面を覆うように調整する。

楔形石器（図Ⅴ－２－５－71・72、表19、図版104・105）

総数６点出土し、２点図示した。細別では剥片素材で対向する二側縁に剥離が見られるものが３点、剥片素材で対向する四側縁に剥離の見られるものが１点ある。石材では頁岩・メノウが各２点。

71・72は対向する二側縁に剥離が見られるもの。71は横長で、敲打により３点に割れて出土したものを接合したものである。72は典型的な例で、一面に同心円状に発達したリングを残す剥離面がある。

Rフレイク（図Ⅴ－２－６－73～83、Ⅴ－２－７－84、表19、図版105）

総数175点出土し、12点図示した。石材では頁岩が144点、メノウ20点、黒曜石２点、デイサイト・珪化岩各３点。

73～76は、石器の未成品とみられるもの。73・74は、紡錘形の縦長剥片の打面～側辺背面に調整剥離を加え、打面側では腹面にもなされる。調整は、刃部形成というより、整形のためとみられる。一端には、調整されない辺があり、そこを刃部とした可能性も考えられる。

75は、小型で厚みのある剥片の左側辺腹面に不連続な平坦剥離がみられる。背面にも調整がみられる。左側辺打面側には潰れがみられることから、剥離の進行しない楔形石器かもしれない。76は、薄手の剥片を折断により形態を整え、縁辺に調整剥離を加えたもの。

77～80・82・83は、不連続な調整と使用痕とみられる光沢が観察されるもの。77は、右側に光沢が見られる。打面側および左右両辺の両面と、末端辺の腹面に調整がなされる。右辺腹面にはやや連続的な調整がなされるが、刃部形成には至っていない。光沢の存在と、右辺腹面に先行する背面の不連

続調整の存在から、当初はスクレイパーとして機能していたとみられる。それが再加工時、調整に失敗し、放棄したのであろう。78・79も右側に光沢が見られる。不連続調整が、右辺両面になされる。82は、左側に光沢が見られるが、調整は行われていない。右辺を粗い剥離で調整している。80は末端辺に、83は左辺に、各々不連続な剥離と光沢が見られる。

81・84は、不連続な調整がみられるもの。81は、石核の調整で得られた厚手の剥片。その一端にノッチ状の浅い剥離があり、その内部には微細な潰れが観察される。84は、大型の剥片素材で、剥離軸に対し、斜めに長軸をもつ。その左右両辺打面側に抉りがあり、縁辺に不連続な剥離がなされる。

Uフレイク（図Ⅴ－２－７－85～55、表19、図版105・106）

総数108点出土し、４点図示した。石材では頁岩が84点、メノウ14点、珪化岩２点、黒曜石２点、デイサイト２点。

85・86は、頁岩製縦長剥片に微細剥離が見られ、使用痕と推測される光沢が観察されるもの。いずれも光沢は両面に及ぶ。

87は、デイサイト製縦長剥片に微細剥離が見られるもの。円礫を輪切りにするように剥離された剥片で、微細剥離が見られる左辺以外は礫面が残る。

88は、メノウ製剥片に微細剥離が見られるもの。この剥片の素材になっているメノウは緻密で、複数枚の石器素材となり得る剥片が得られたと推定される。しかしながら、これと同質のものは検出できていない。

剥片

総数2,792点出土した。今回図示したものはない。石材別では頁岩が1,610点、9,244ｇ、メノウ337点、4607ｇ、珪化岩493点、549ｇ、赤色珪化岩108点、165ｇ、褐色珪化岩３点、99ｇ、黒曜石192点、107ｇ、デイサイト29点、823ｇ、珪質岩９点、152ｇ。このうち、黒曜石以外は近隣から採取されたものと考えられる。

１点あたりの重量を、重量/点数で割り出すと、デイサイト約28ｇ、珪質岩約17ｇ、メノウ約14ｇ、頁岩約３ｇ、珪化岩約1.3ｇ、黒曜石約0.3ｇとなる。

石核（図Ⅴ－２－８－89～94、表19、図版106）

総数127点出土し、６点図示した。細別では、打面と作業面を頻繁に入れ替えるもので、最終形態がサイコロ状を呈するもの52点、扁平な剥片などの一面ないし、二面を作業面としてほぼ固定し、最終形態が盤状をなすもの34点、両極剥離によるもの15点、その他26点に分けられる。石材では頁岩が92点、メノウ19点、珪化岩８点、黒曜石３点、デイサイト２点。

石材別にみると、頁岩はサイコロ状47点、盤状25点、両極剥離７点であるのに対し、メノウはサイコロ状１点、盤状３点、両極３点と各剥離法に大差はなくなる。さらに、黒曜石は両極剥離に限られ、供給された原石の大きさが小型であったことが想定される。

89・90は黒曜石製で、両極剥離によるもの。いずれも亜角礫を素材に、打面調整無しに打割を行っている。

91～94は頁岩製。91は、打面と作業面を数回入れ替えながら剥片剥離を行ったため、残核はサイコロ状を呈する。92は、亜円礫の、恐らく半割剥片を素材に、作業面を主剥離面にほぼ固定している。打面は、その周縁の礫面としており、残核は盤状を呈する。剥離作業では、長さ２㎝弱、幅2.5㎝前後

で末端が蝶番状になる剥片が三枚以上得られている。93は、剥片を素材に、腹面を主たる作業面とした、盤状の残核。94は、縦長剥片の背腹両面で剥片剥離を行っている。剥離後、素材剥片左辺に刃潰し様の調整が行われる。素材剥片右辺は散漫な剥離が見られる未調整縁辺であることから、刃器として利用された可能性がある。

異形石器（図Ⅴ－２－７－95、表19、図版106）

総数１点出土し、図示した。95は頁岩製で、横長剥片を素材とする。横長剥片末端辺の形状を利用し、縁辺を調整することで整形している。調整は粗く、突出部もその基部を調整することで作出するにすぎない。

三角形石製品（図Ⅴ－２－７－96、表19、図版106）

総数１点出土し、図示した。96は軟質の凝灰質頁岩製、背面に円礫面を残す。三方からの急斜度剥離で三角形に整形している。（福井）

（２）石斧

石斧（図Ⅴ－２－９－97～102、表19、図版107）

石斧はその残存状態によって４つに分類した。全体の２分の１以上残存しているとみられるものを石斧、２分の１以下４分の１以上のものを石斧片、４分の１以下のものを石斧破片、部位のわからないものを石斧細片とした。石斧は28点、石斧片が９点、破片13点、細片12点が出土している。

石斧は６点図化した。全て片刃である。97、98は偏刃を呈するもの。全面が丁寧に研磨される。99～101は概ね円刃を呈するもの。全面が研磨されるが、剥離面が残る部分がある。102は１点のみ出土した石のみである。研磨と敲打により短冊形に整形されるが、刃部は作出されていない。石材は97、99が緑色片岩、98は緑色泥岩、100、102は片岩、101は藍閃石片岩とみられるものである。

（３）礫石器

包含層から出土した礫石器の総点数は、礫、礫片を除き、504点である。このうち破片を含めて最も点数の多いものはたたき石で196点ある。ついで扁平打製石器が72点、台石が42点、石皿が35点、北海道式石冠が24点となっている。礫・礫片は記録を作成して廃棄したものも含めると、7,467点となっている。

たたき石（図Ⅴ－２－10－103～122、表19、図版107・108）

たたき石は196点出土した。これらを７種類に分け記載する。

103は概ね棒状を呈する礫の先端を敲打しているものである。９点出土し、１点を図化した。

104～106は握飯状の歪な礫を用い、やや尖る一端を主として敲打するものである。25点出土し、うち３点を図化した。全て正面右上突出部にもやや弱い敲打痕がある。

107～109は概ね棒状の礫を用い、両端を敲打するものである。３点出土し、３点を図化した。107、108は敲打により使用部周辺が剥離している。109は左側縁上方に擦痕があり、すり石と複合するものである。

110～117は拳大の扁平な礫を用い、表裏に敲打痕がみられるものである。21点出土し、３点を図化した。110、111は敲打痕が直線状に並ぶが、素材礫の長軸に対してわずかに右にずれている。112はや

や厚手の素材礫を用い、表裏面に加え周縁も敲打されているもの。

113～115は棒状の礫を用い、２か所以上の敲打痕があるものである。19点出土し、３点を図化した。113、115は敲打痕が明瞭にくぼんでいるもの。114は礫の平坦な部分に、２か所の弱い敲打痕がみられるもの。

116、117は三角形を呈する扁平な礫を用い、表裏面、また一端に敲打がみられるものである。３点出土し、うち２点を図化した。116は右側縁に剥離を伴う敲打痕がある。

118～120は、無斑晶質玄武岩とみられる素材礫を用い、周縁が敲打されるものである。８点出土し、うち３点を図化した。118は塊状で小さなもの。119、120は扁平礫の周縁が部分的に敲打されるもの。

121、122は上記外から選んだものである。121はいびつな礫の端部に敲打痕があるもの。122は細粒な花崗閃緑岩の扁平礫を用い、端部に敲打痕のあるもの。これに類似するものが他に２点出土している。

これら以外のものは、礫の一部に微細な敲打痕がみられるものや、敲打しているかどうかかなり疑わしいが、形状からたたき石としたものである。

すり石（図Ⅴ－２－11－123、表19、図版108）

６点出土している。全て扁平な礫の側縁を擦ったものである。うち１点を図化した。123は扁平礫の側縁に擦痕があるもの。使用面はやや丸みを帯びている。

扁平打製石器（図Ⅴ－２－11・12－124～134、表19、図版108）

扁平打製石器は、破片も含めて72点出土している。周縁を打ち欠いて半円状に整形し、長辺を擦った狭義の扁平打製石器のほか、打ち欠きが全周の一部にとどまるもの、すり面を持たないものも含めた。扁平礫を用いたすり石、加工痕のある礫と分類上重複するが、すり石とは扁平礫を用い、磨り面が直線的であること、加工痕のある礫とは、扁平礫の長軸両端の加工痕の存在をその区別の目印とした。狭義の扁平打製石器とは呼べないものではあるが、円筒土器上層b式～見晴町式の土器が出土する遺跡においては、これらを含めて扁平打製石器として扱うことが多く（例えば北埋調報87・112・166）その例に従う。以下加工の様子から区分し述べる。

124～128は周縁が打ち欠きにより整形される狭義のもの。24点出土し、２点図化した。124は正面中央の素材面にやや弱い敲打痕がある。125は擦痕がなく、剥離のみのものである。128は両端が直線的で、側面観が長方形を呈するもの。

129～134は、礫があまり加工されないものである。37点出土し、３点図化した。129は打ち欠きが全周せず、一部に原石面が残るものである。130は使用面の幅が狭いもの。131は破片であるが、土器集中７（図Ⅴ－１－15－67）に伴い出土している。132は半割礫を用いているものである。この加工の例は37点中１点出土している。花崗閃緑岩製の礫を半割し、半割面に幅広のすり面がみられる。133、134は打ち欠きのみのものである。

このほかはほぼ破片で出土し、図化していないが、礫を打ち欠いた剥片様の素材を用いたものが３点、出土し、残る２点は破片で全体の形状が不明のものである。

北海道式石冠（図Ⅴ－２－12－135～137、Ⅴ－２－13－138～140、表19、図版109）

北海道式石冠は、幅広の使用面があり、把握に適した把手を敲打、剥離により作出するという、小島の分類に従った（小島　1999）。24点出土している。うち６点を図化した。

135～138は正面観が概ね半円形を呈するもの。15点出土している。135、136は幅広のすり面がある、高橋のいうⅧ類にあたる（高橋1971）ものである。137は半円の頂部にも敲打による溝が付けられている。138は左側縁に素材礫の平坦面をそのまま残し、使用面は擦らずに敲打痕が認められるものである。

139、140は典型的ではないもの。３点出土している。139は把手部分に最大幅があるもの、140は把手をめぐらせたのみのもの。大きさからミニチュアとみられる。

砥石（図Ⅴ－２－13－141・142、表19、図版109）

９点が出土している。石皿もすり面のみられる礫石器であるが、砥石は概ね２kg以下のもので、溶結凝灰岩、多孔質の火成岩、凝灰岩、細粒の砂岩を用い、すり面が比較的多いものとした。同一個体とみられるが、多数の破片からなるものは、接合しなくても１点とみなしている。

出土した９点のうち、２点を図化した。141は軽石製のもの。扁平な礫の一面を使用面としている。軽石製のものはこのほか１点出土し、いずれも素材礫の一部に擦痕のあるものである。142は凝灰岩製。薄手の礫を用い、一面を使用面とするものである。使用の結果、素材礫の厚さに達して廃棄されたものとみられる。

加工痕のある礫（図Ⅴ－２－13－143、表19、図版109）

破片も含めて20点が出土している。そのうち１点を図化した。143は礫の一端を不規則な打ち欠きにより刃部状の突出部を作り出しているもので、扁平打製石器に比し素材礫にやや厚みがあり、加工がほぼ一方向に限られる点で異なっている。この特徴を持つものは20点のうちの13点を占めていることに加え住居跡IH－７からも１点出土しており（図Ⅳ－12－20）、本遺跡において特徴的な形態であるといえる。

上記以外の加工痕のある礫は、形状から扁平打製石器の未製品の可能性のあるものが１点ある。その他は意図の不明瞭な加工のみられる、凝灰岩、無斑晶質玄武岩である。

石皿・台石（図Ⅴ－２－13－144、145、Ⅴ－２－14－146、147、Ⅴ－２－15－148、表19、図版109・110）

石皿・台石は、破片も含め、77点が出土している。内訳は石皿12点、石皿片21点、台石24点、台石片とみられるものが18点、複合したものが２点出土している。これらのうち、よく使用されているものを選んで図化した。144、145は石皿。144は角閃石安山岩製。節理部分で割れた礫を用い、一面をよく使用するものである。使用面は平滑で、中央に向かって少しくぼんでいる。145は板状の砂岩を用いて一面を使用するものである。使用面は極めて平滑である。146～148は台石。146は扁平な礫を素材とするもの。一面全面に敲打痕がある。輝石安山岩製。147は鏡餅状の輝石安山岩を用い、一面に敲打痕のあるものである。敲打部分は平坦である。148は、多孔質の安山岩を用い、両面中央に敲打痕があり、くぼんでいる。正面右辺の先端部に打ち欠きがみられる。台石としたが、石製品であるかもしれない。

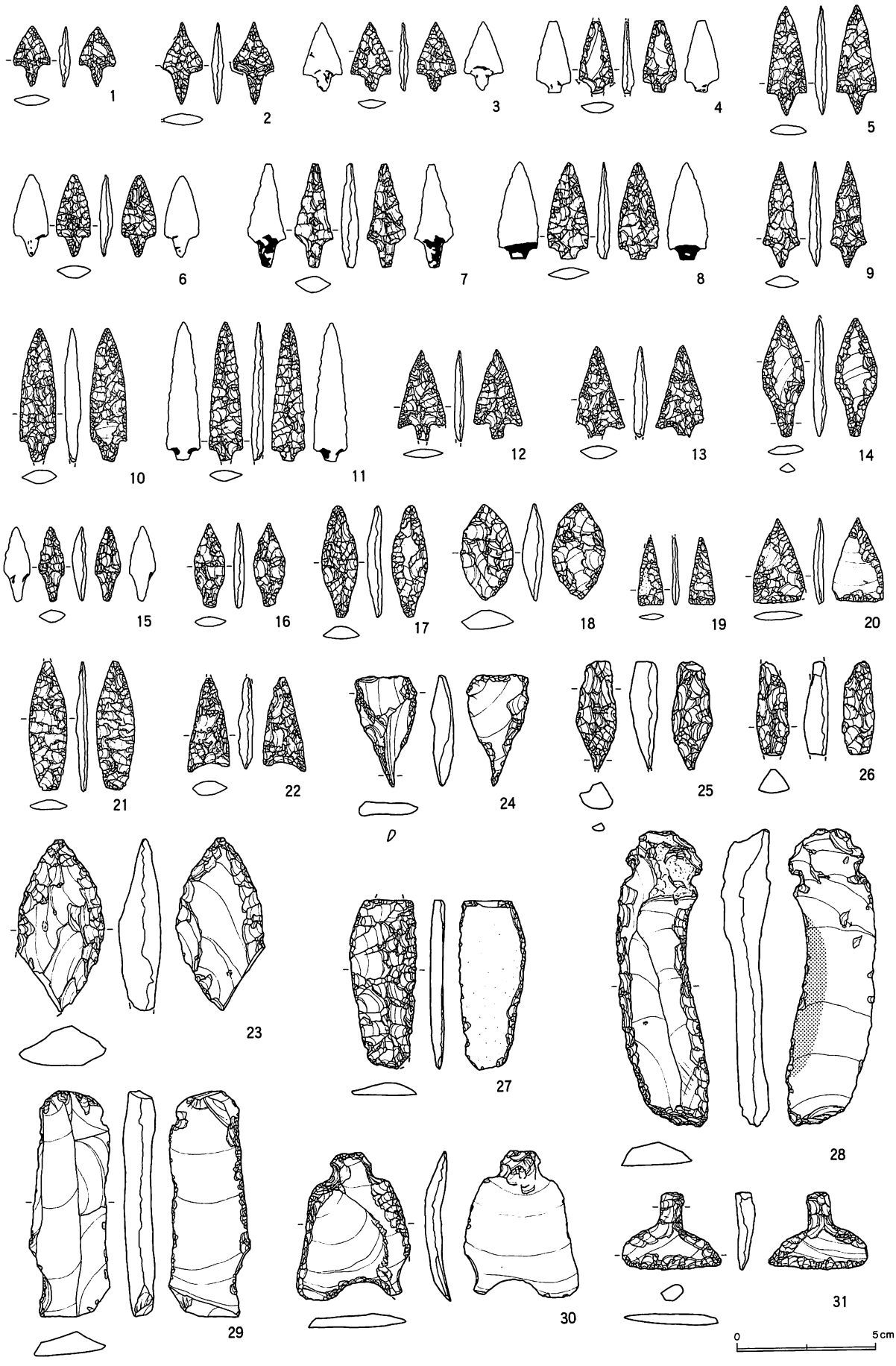
礫・礫片（図Ⅶ－３、表Ⅶ－１）

包含層から礫・礫片が合計7,467点出土している。このうち、遺跡内に持ち込まれた可能性があるが、使用痕が認められず、かつ有意に集められたものでもないと判断した6,598点については、岩質、重さを記録して廃棄した。廃棄した礫の種類と重量は表Ⅶ－１、図Ⅶ－３のとおりである。

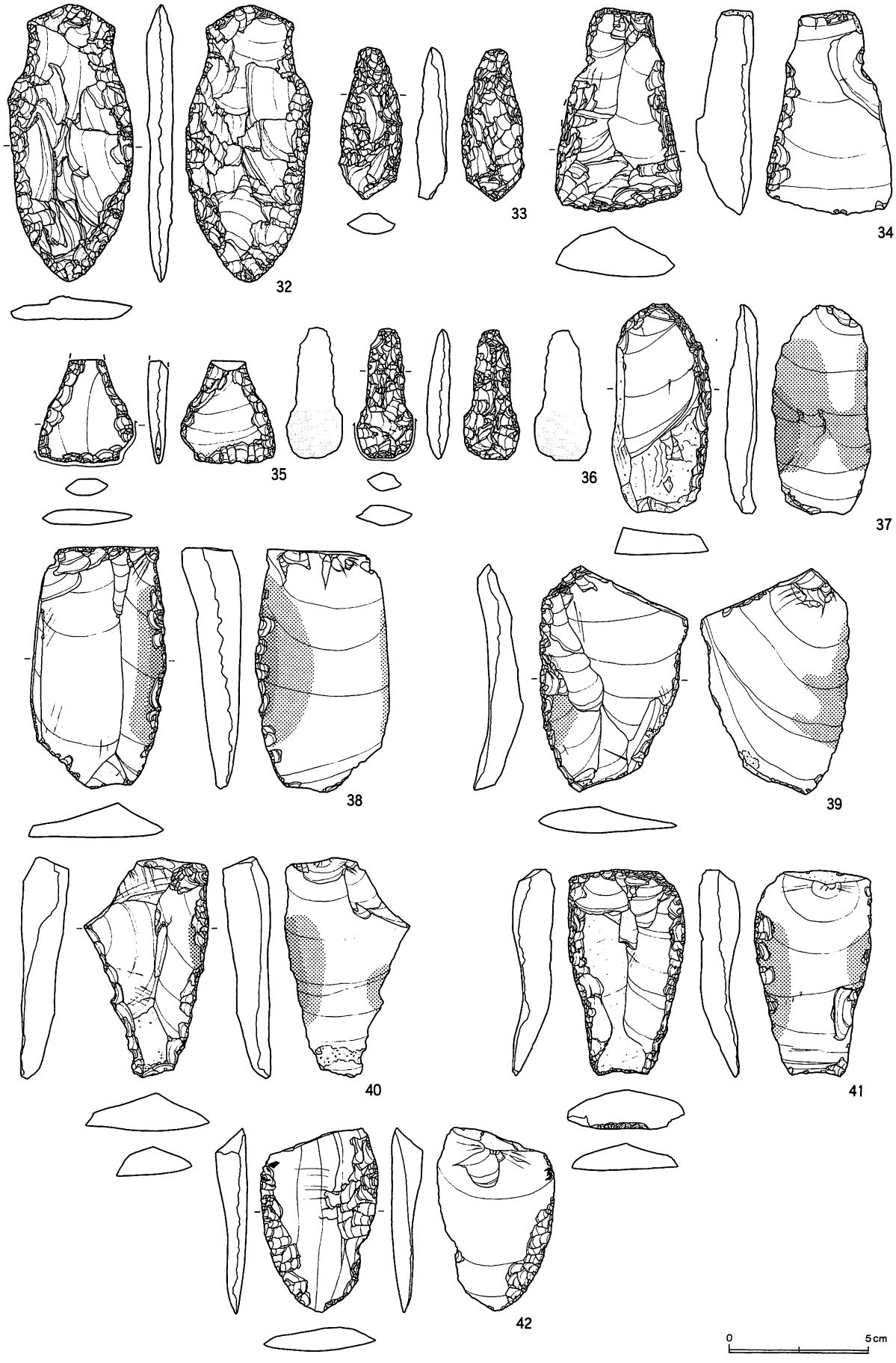
3　石製品（図Ⅴ－2－15－149～151、表19、図版110）

石製品は11点出土し、内訳は有孔自然石 8 点、軽石製石製品 2 点、石製品の破片とみられるものが 1 点である。149は泥岩の有孔自然石。150、151は軽石製石製品。150は垂飾状に加工されるもの。151は素材の一部を抉るように加工し、抉り部分に対し直交して穿孔されるもの。

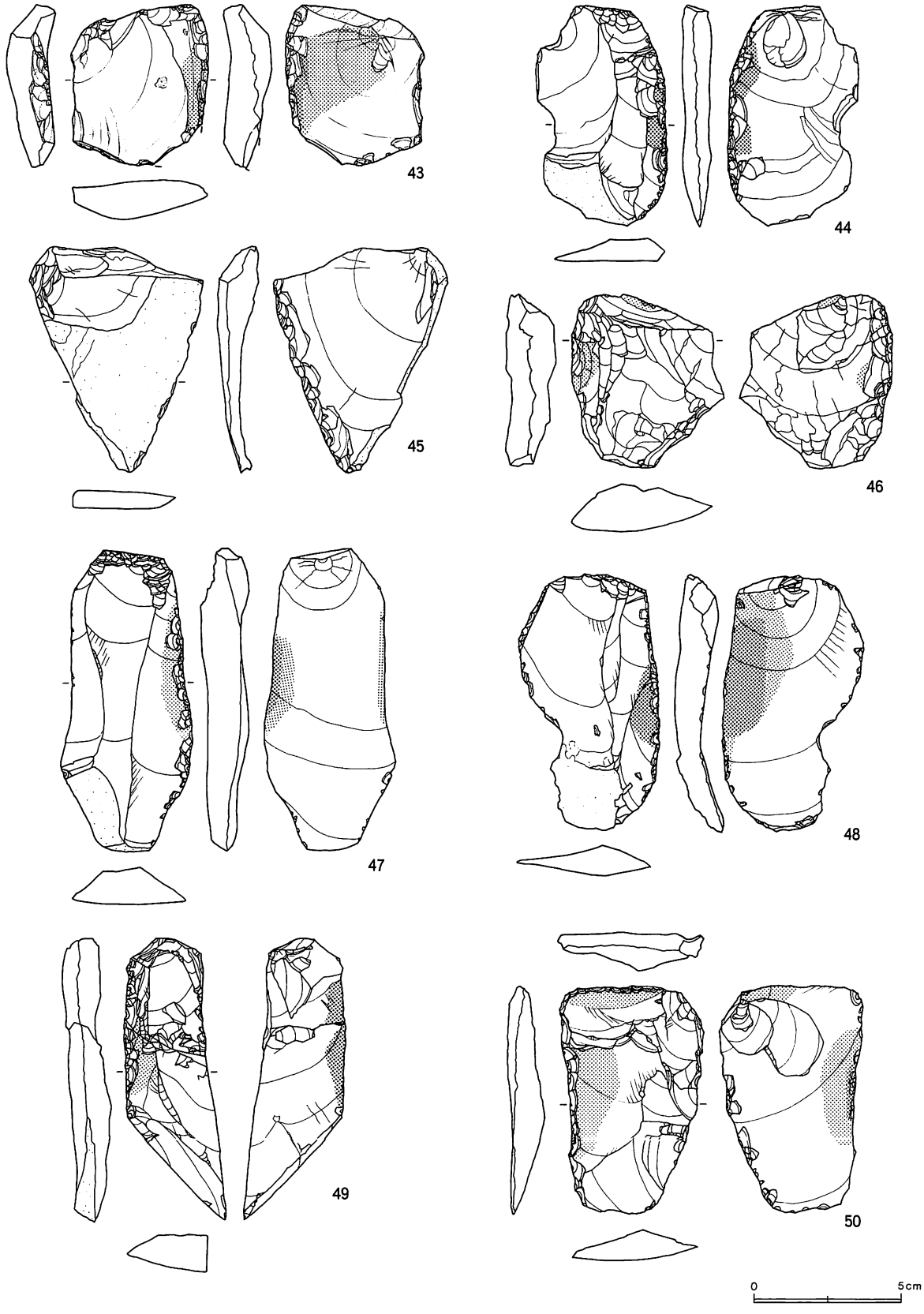
（立田）



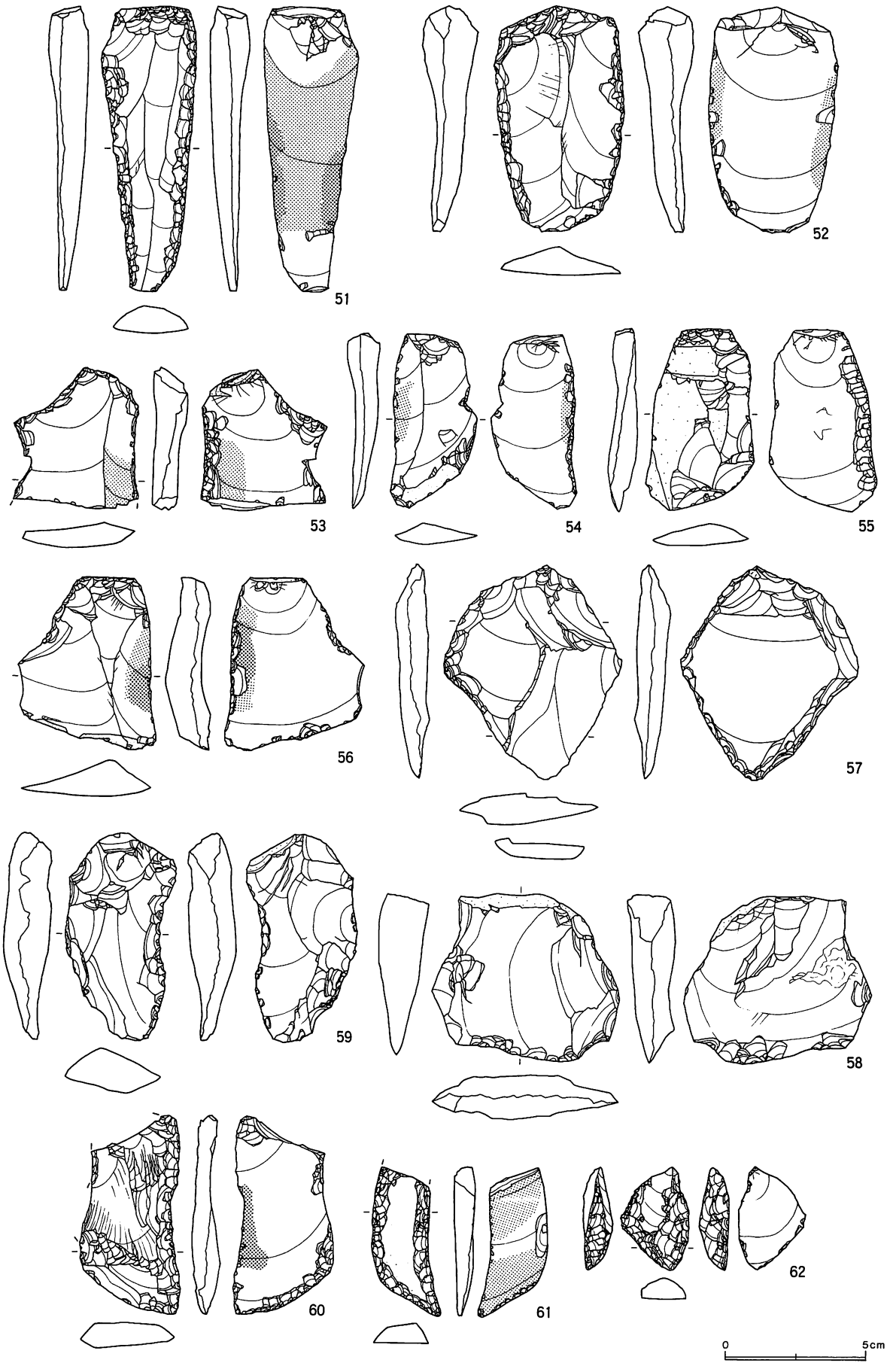
図Ⅴ－２－１　包含層出土の石器（１）



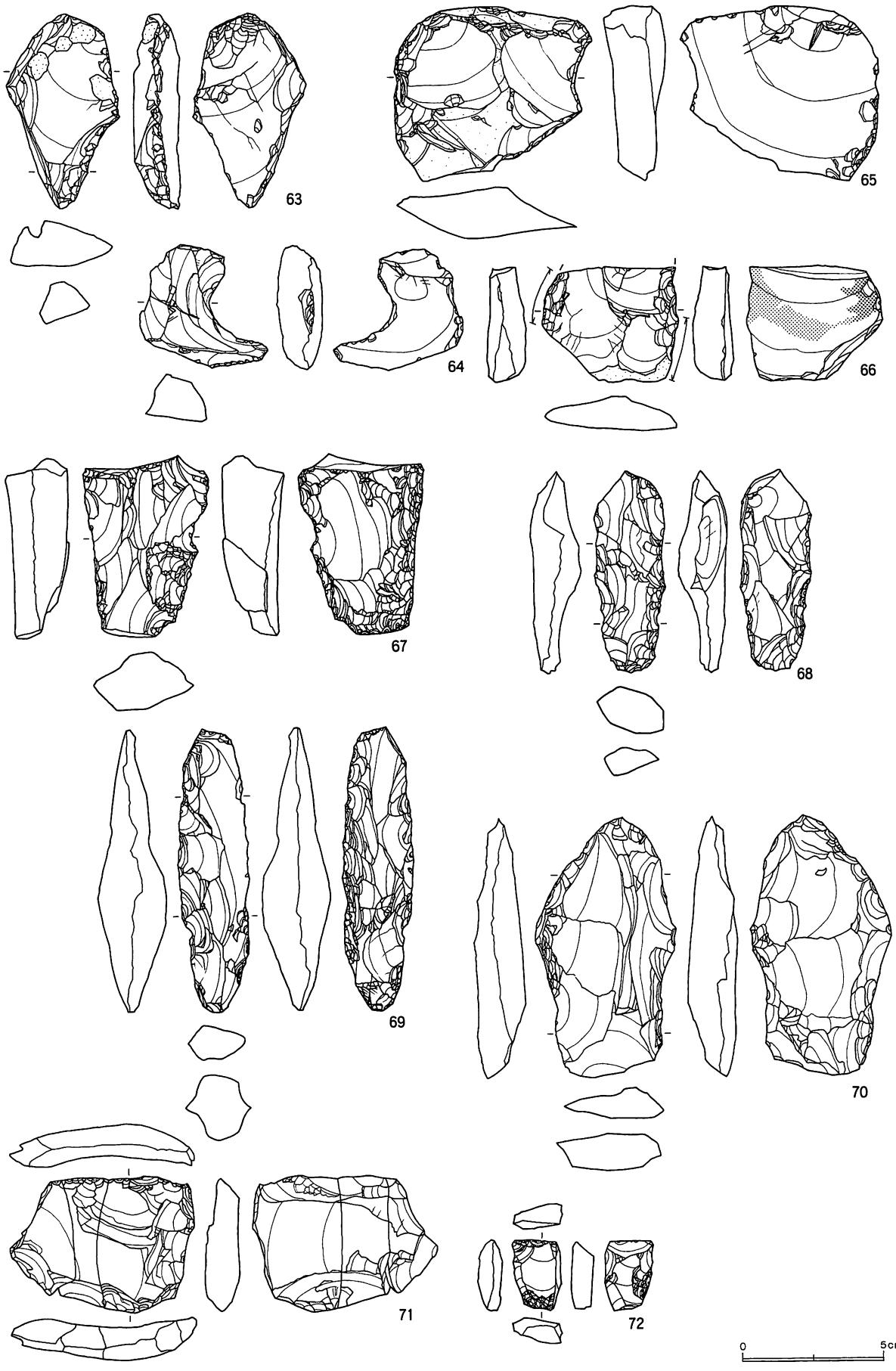
図Ⅴ－２－２　包含層出土の石器（２）



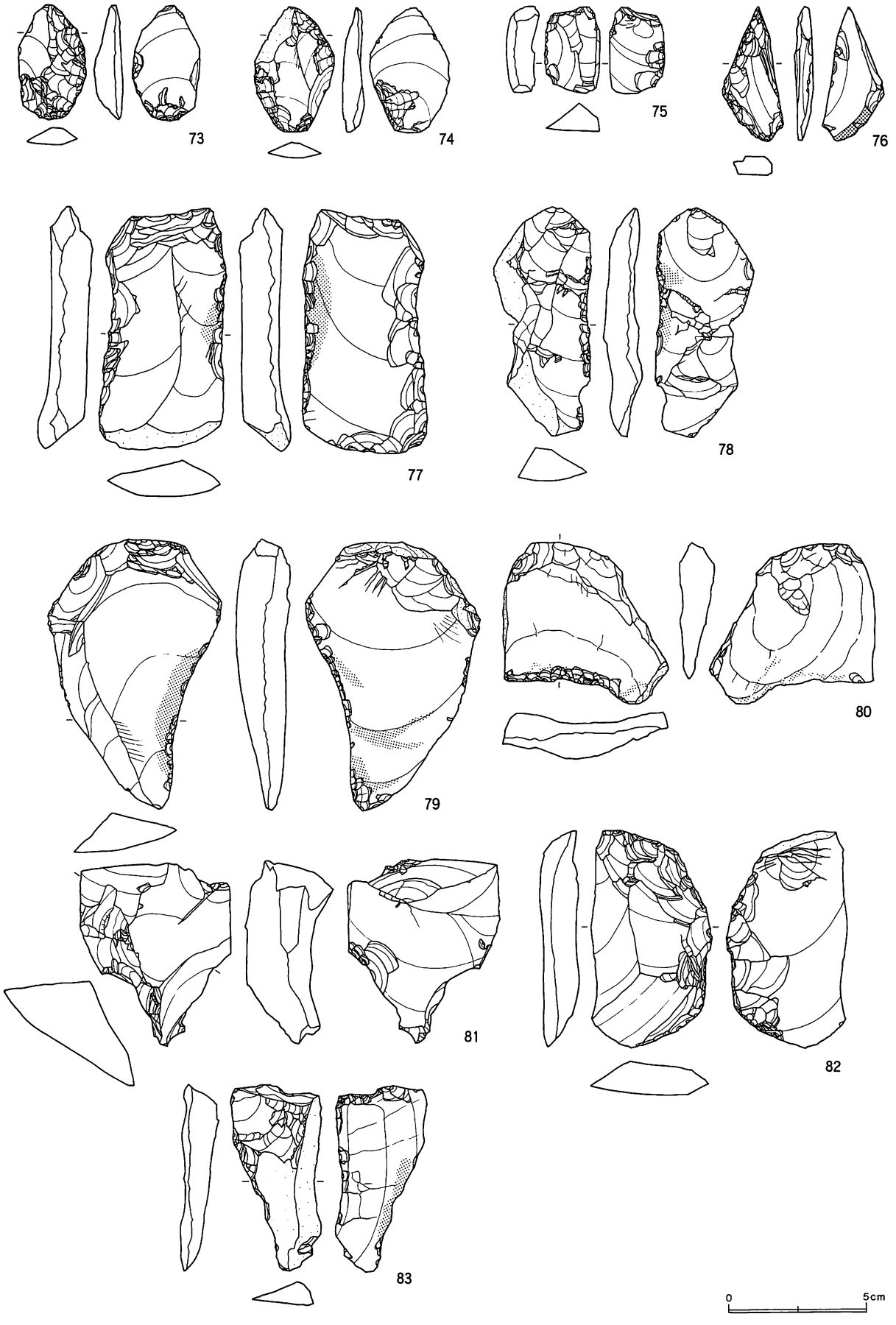
図Ⅴ－２－３　包含層出土の石器（３）



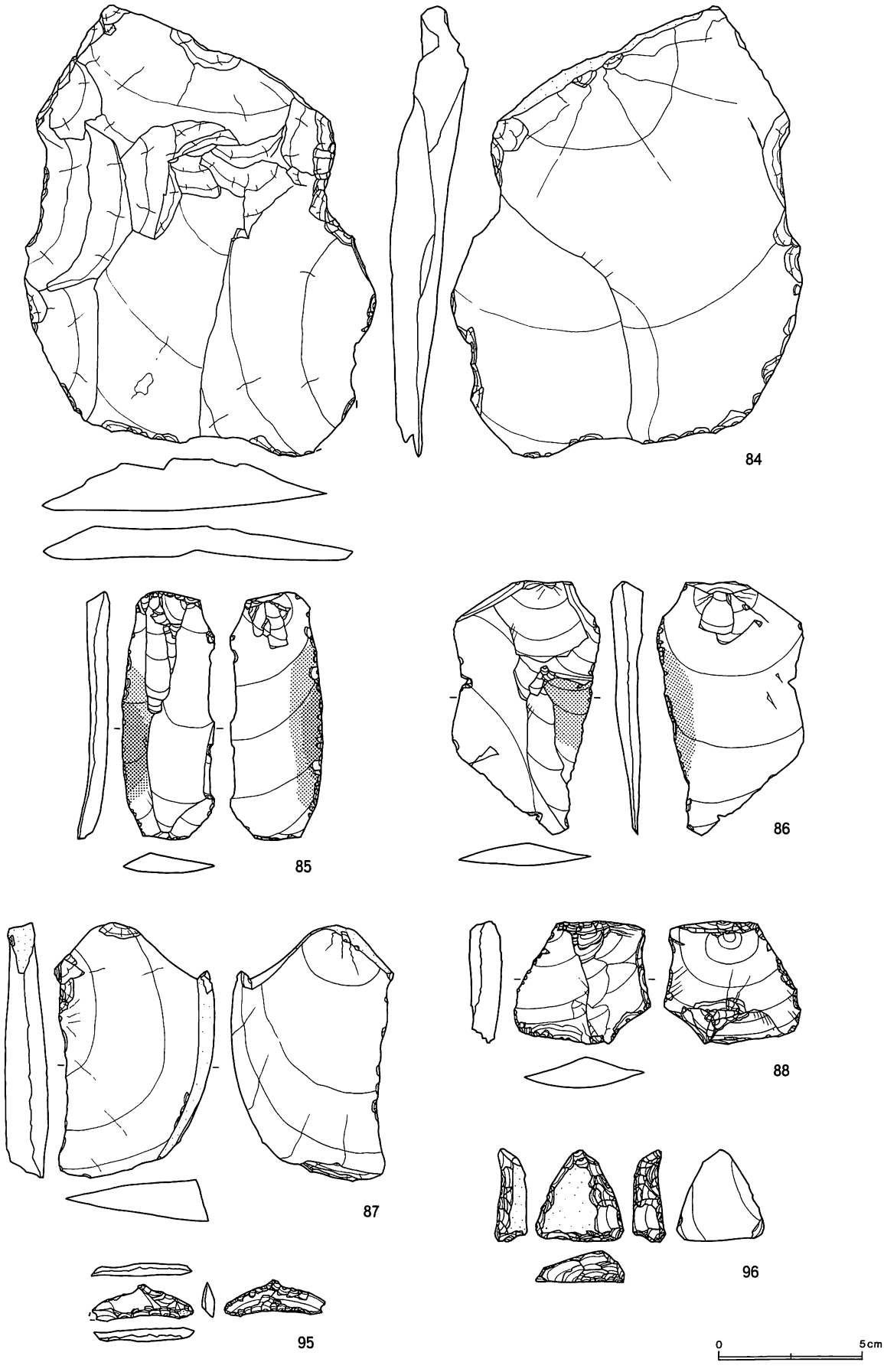
図Ⅴ－２－４　包含層出土の石器（４）



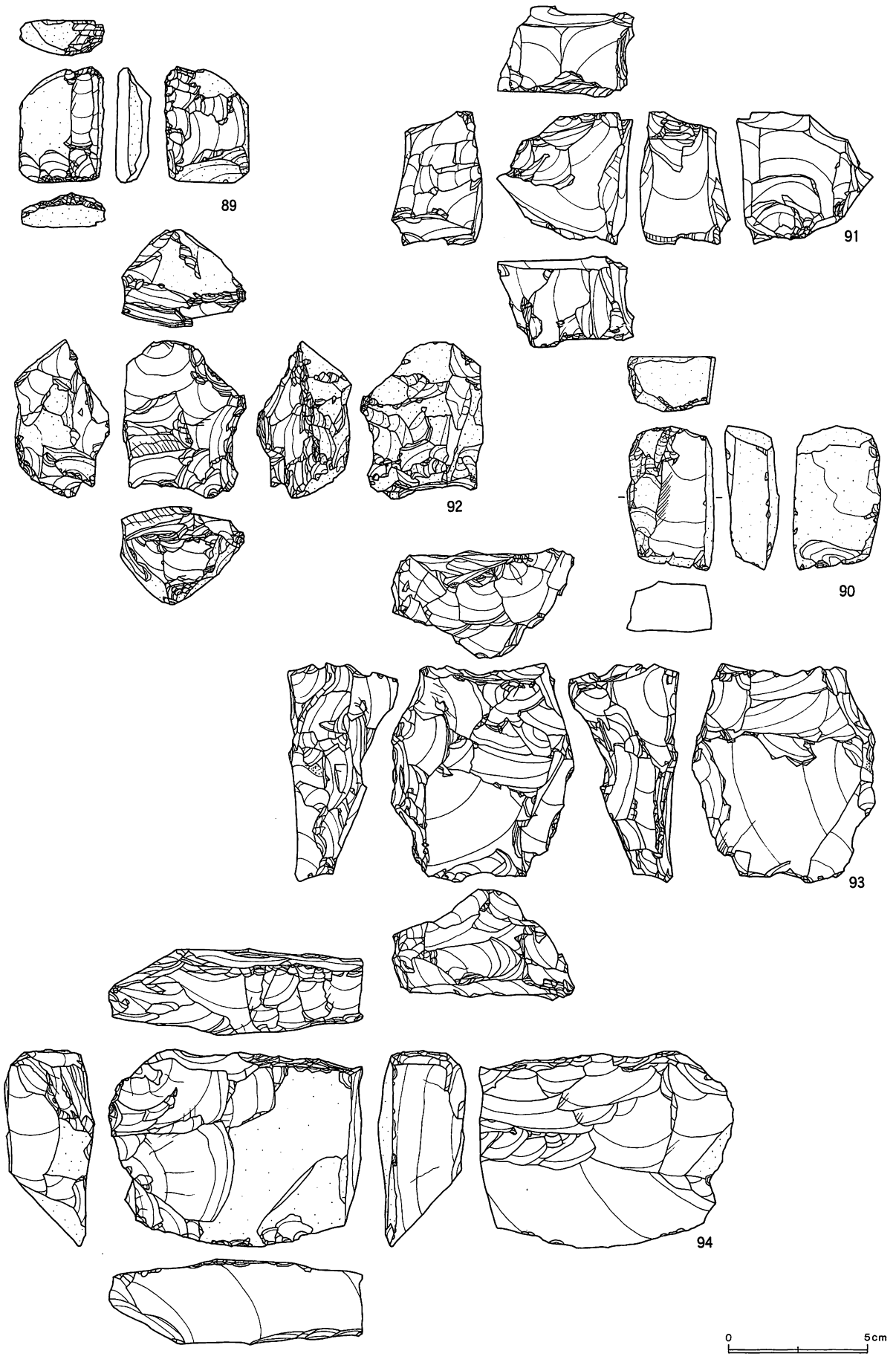
図Ⅴ－２－５　包含層出土の石器（５）



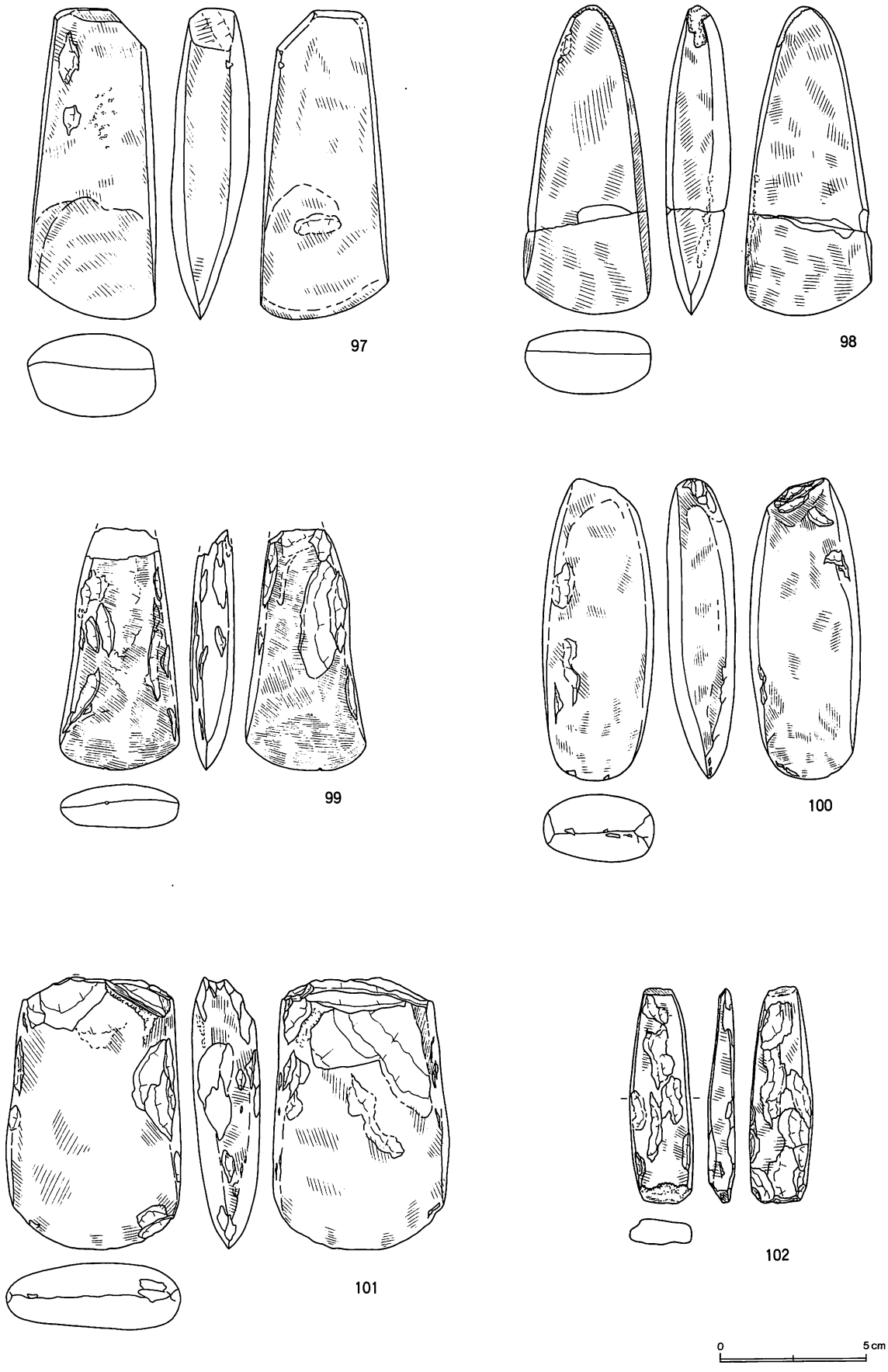
図Ⅴ－２－６　包含層出土の石器（６）



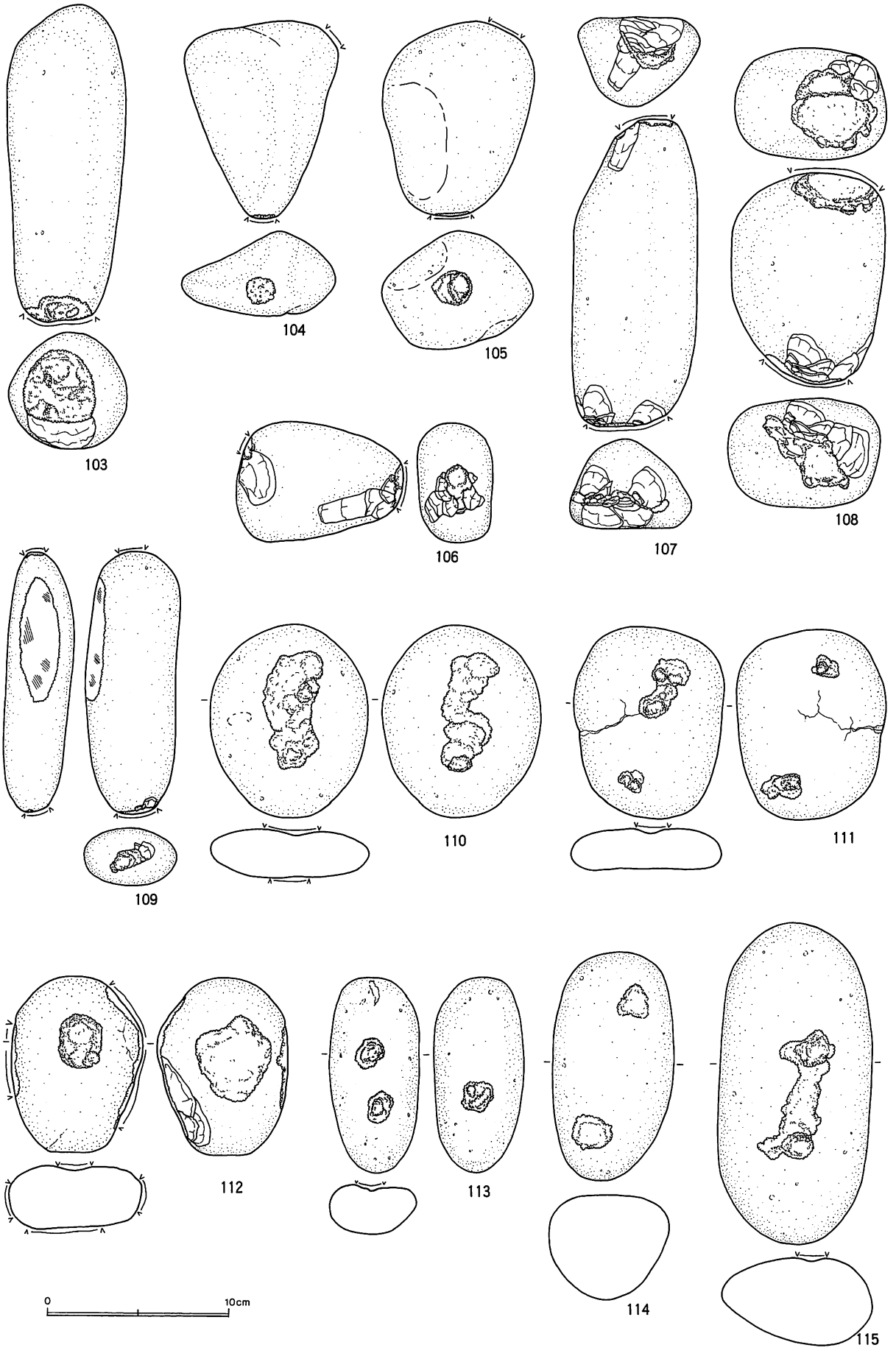
図Ⅴ－２－７　包含層出土の石器（７）



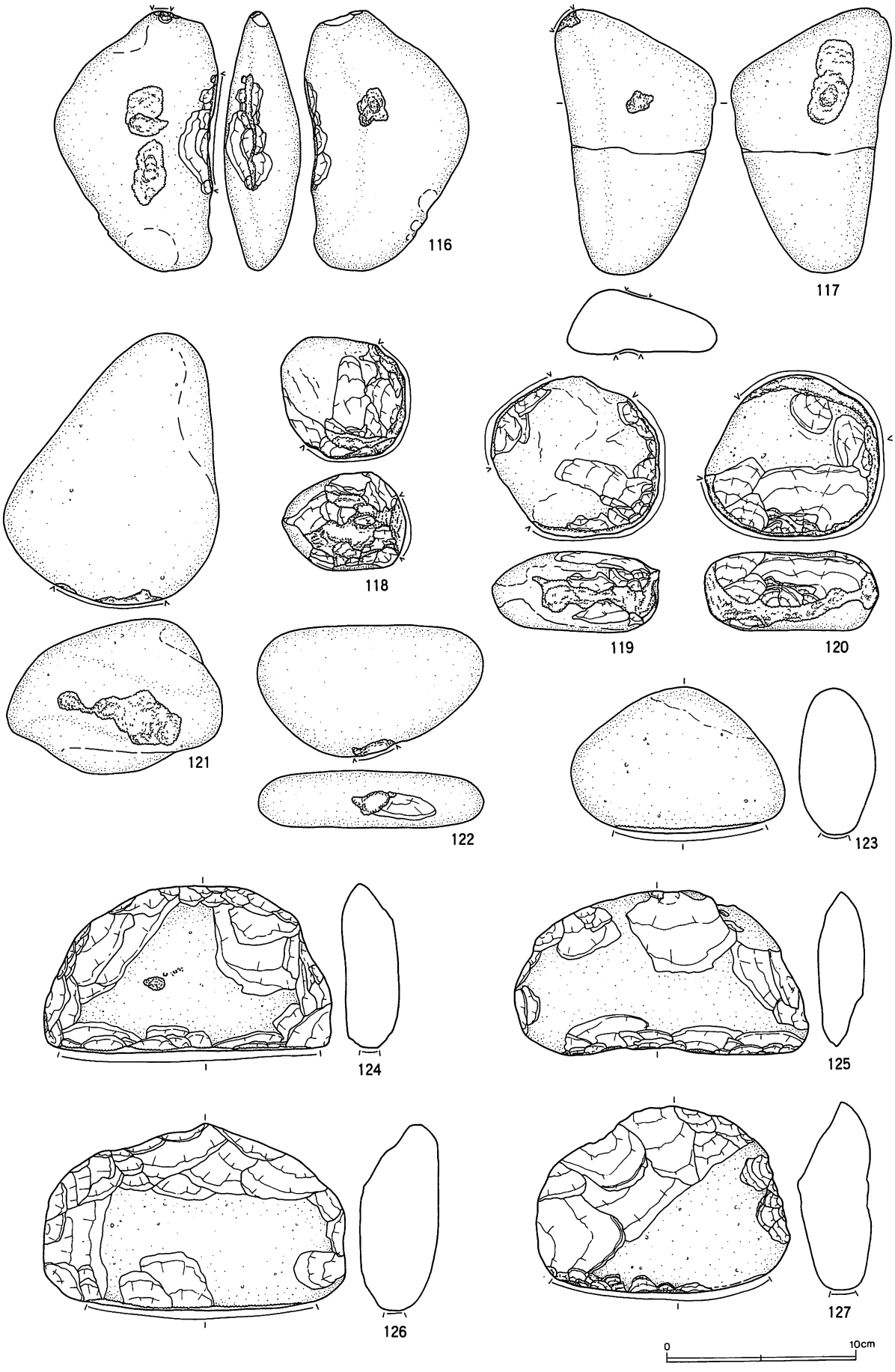
図Ⅴ－２－８　包含層出土の石器（８）



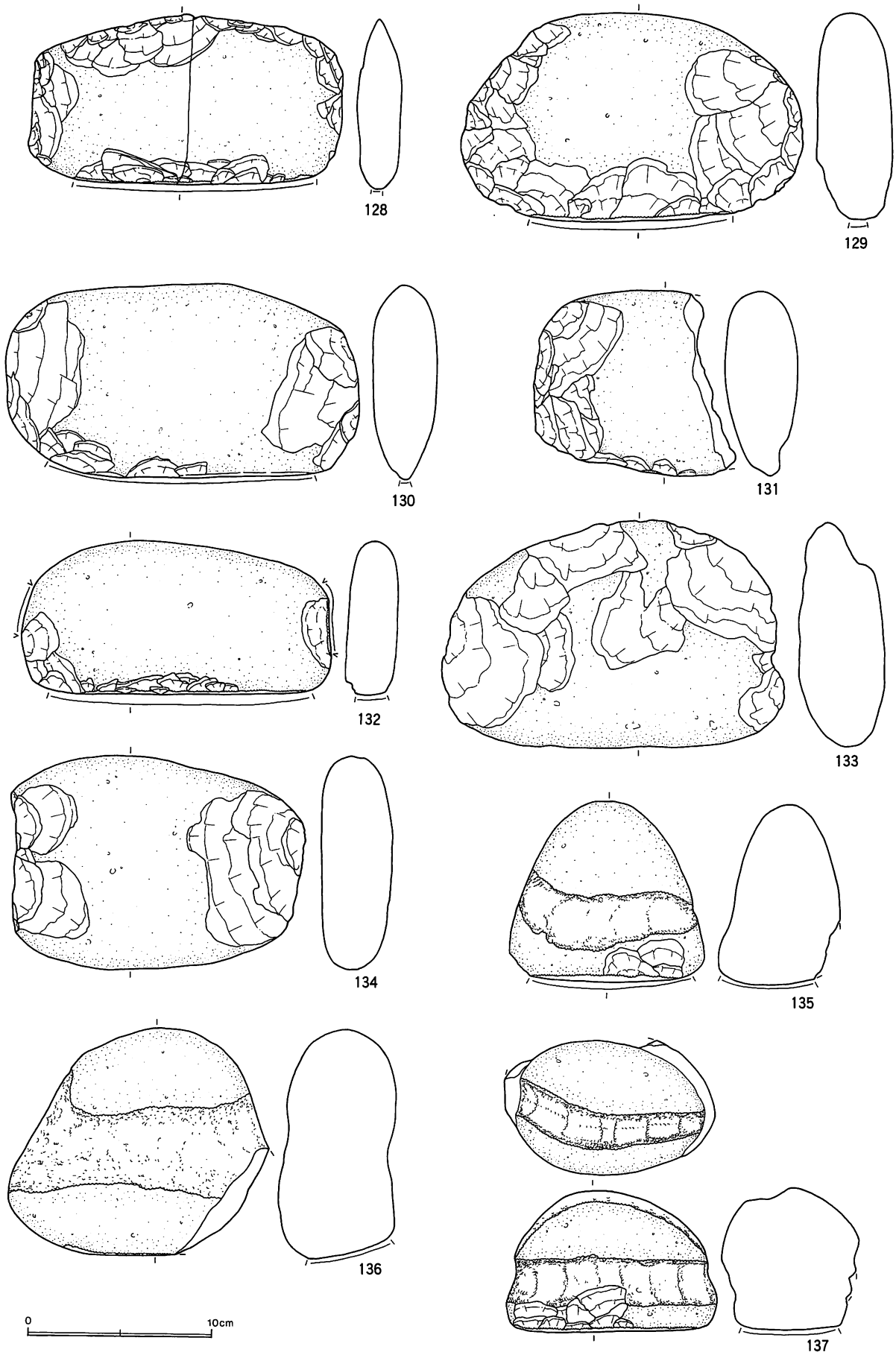
図Ⅴ－２－９　包含層出土の石器（９）



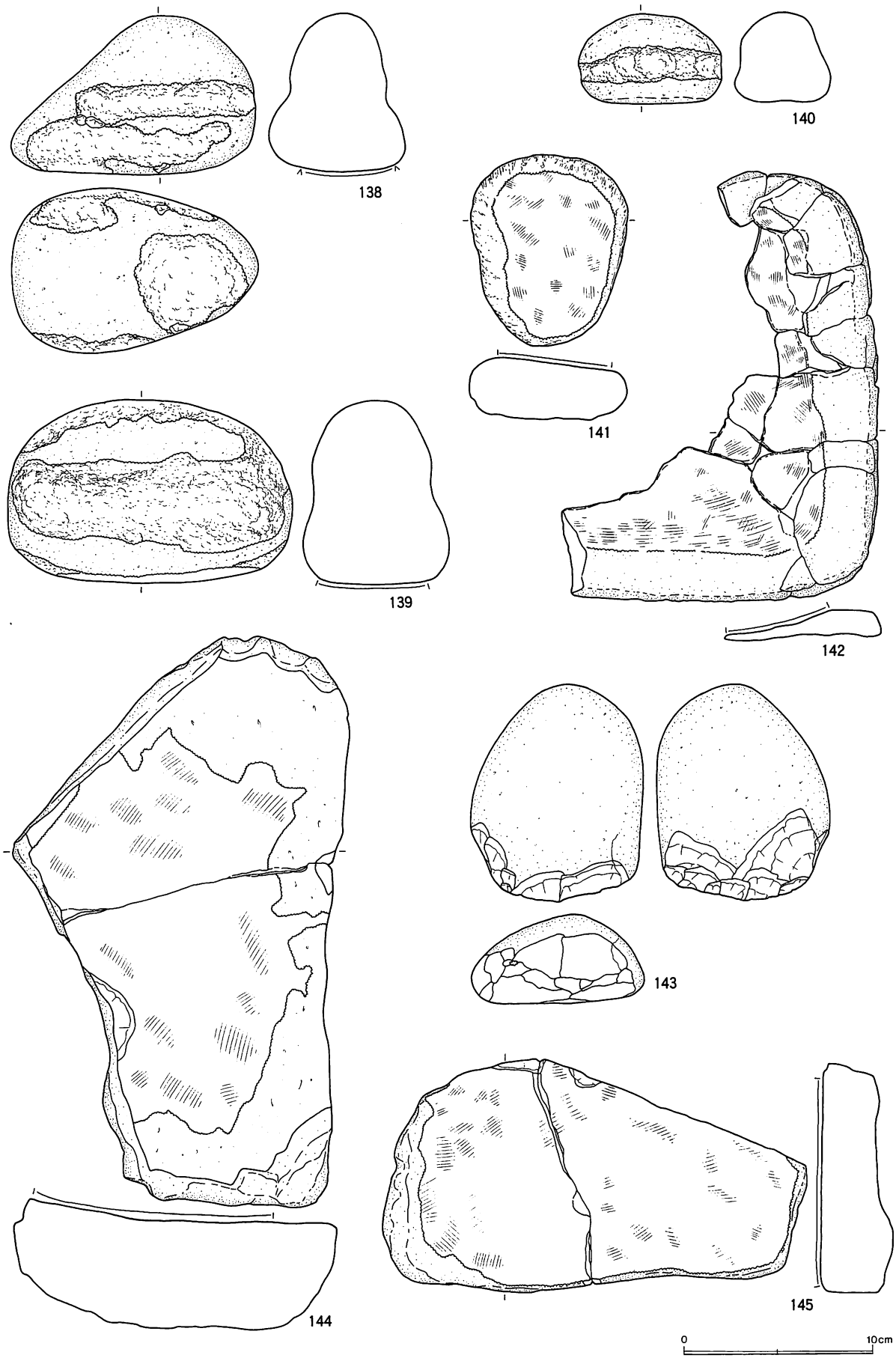
図V－2－10　包含層出土の石器（10）



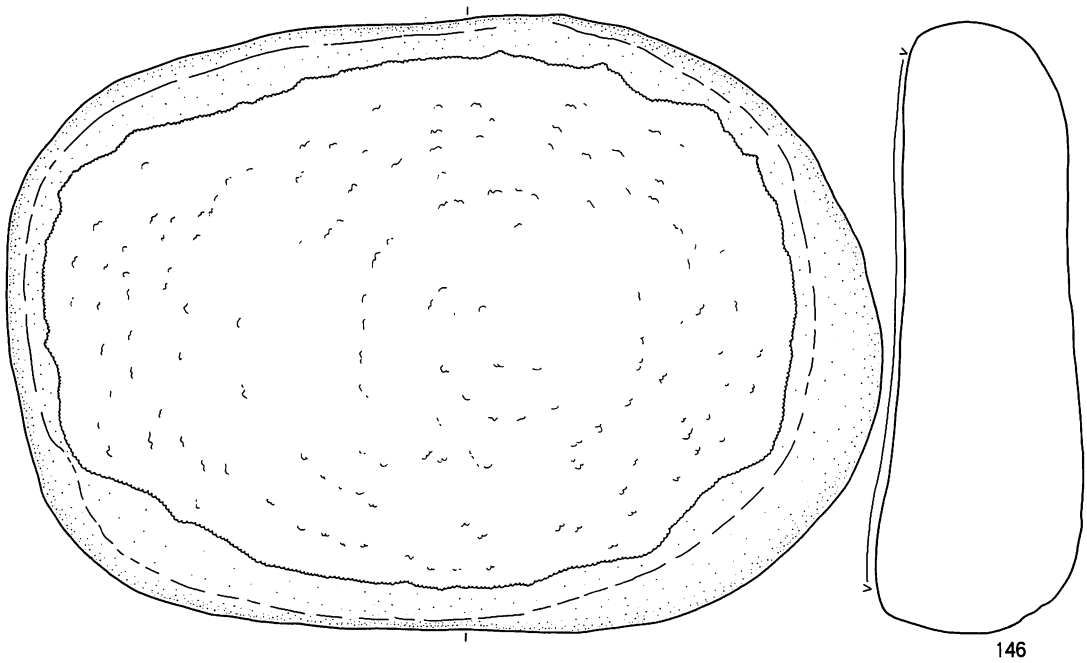
図Ⅴ－２－11　包含層出土の石器（11）

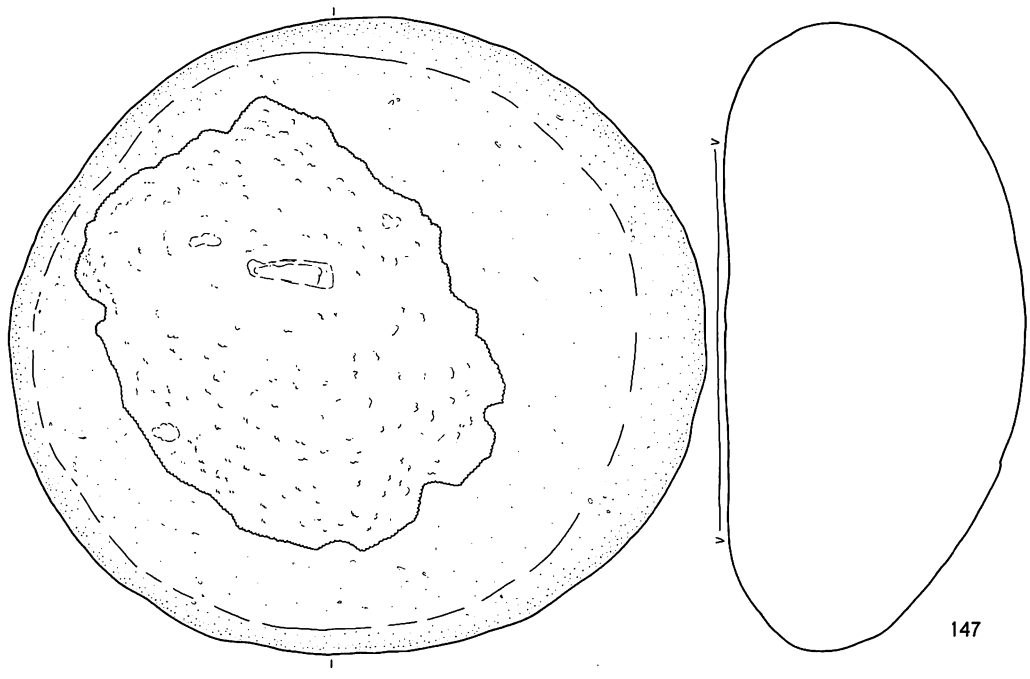


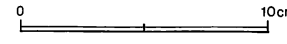
図V－2－12　包含層出土の石器（12）



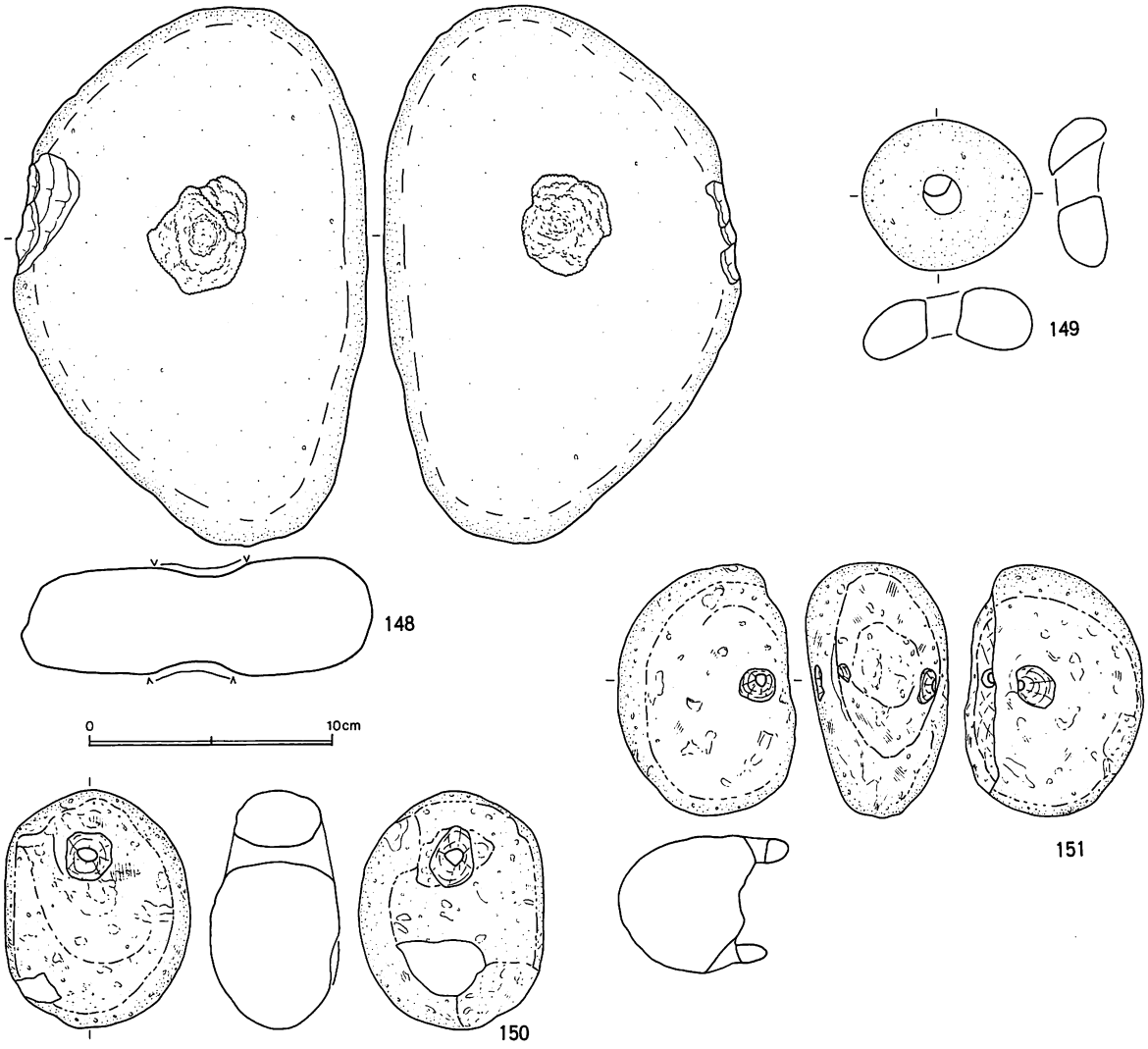
図Ⅴ－２－13　包含層出土の石器（13）



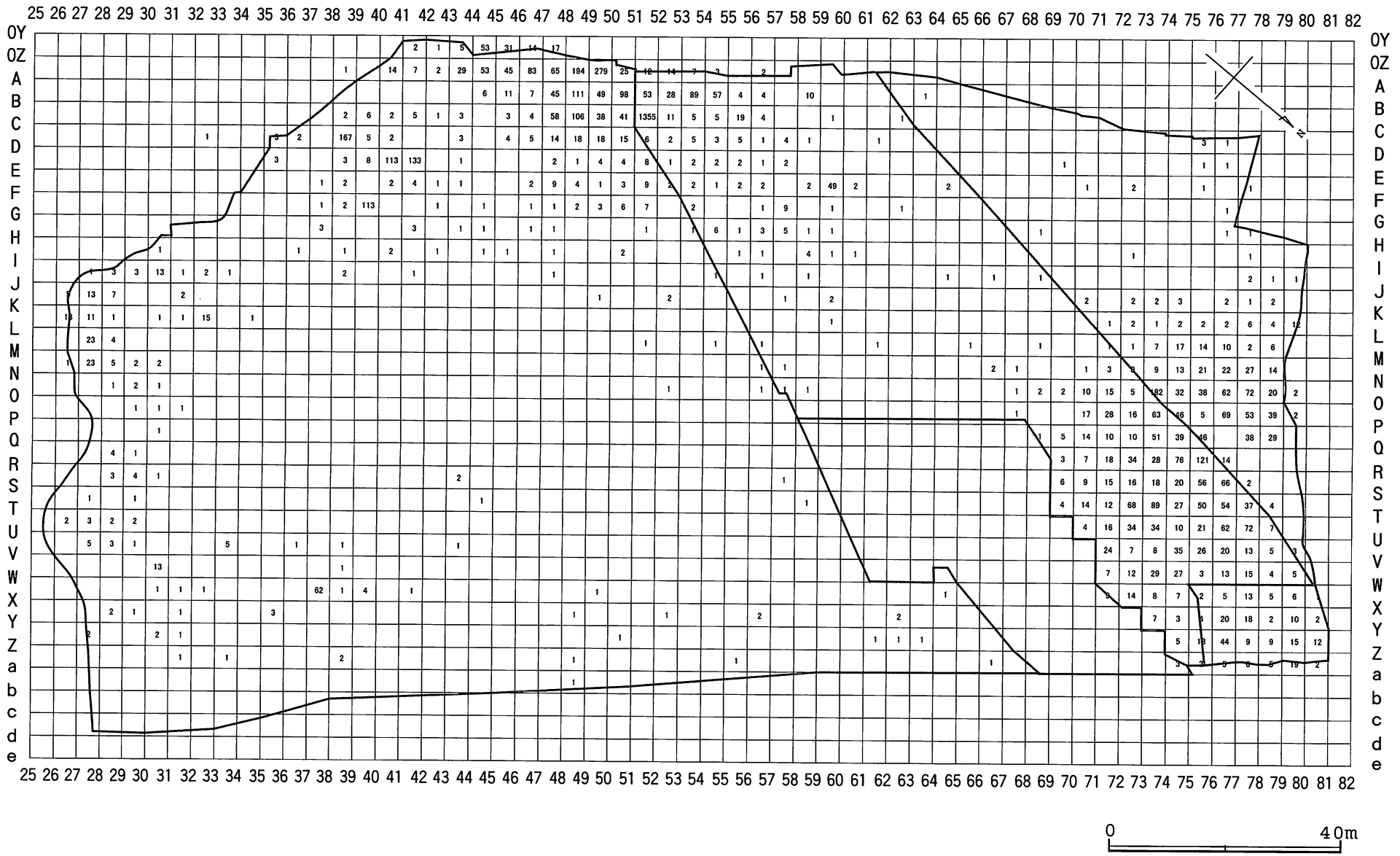




図V－2－14　包含層出土の石器（14）

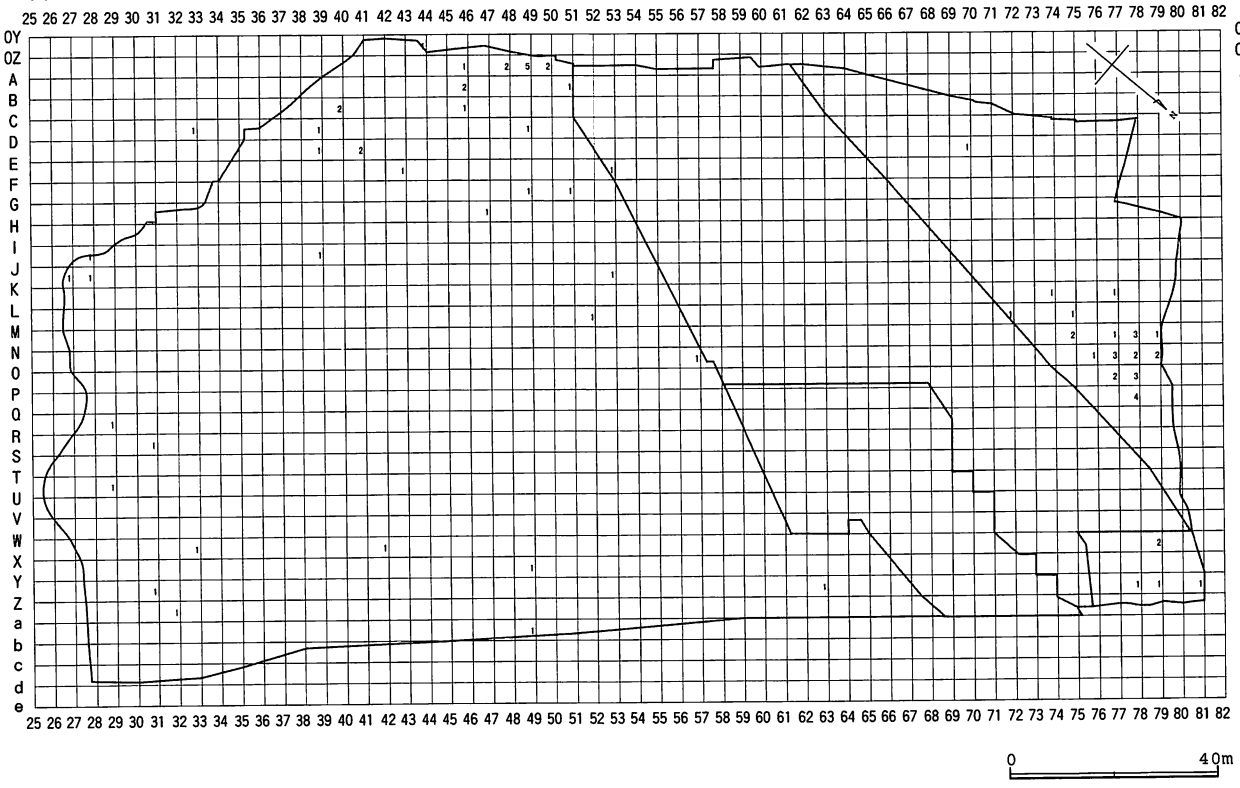


図Ⅴ－２－15　包含層出土の石器等（15）

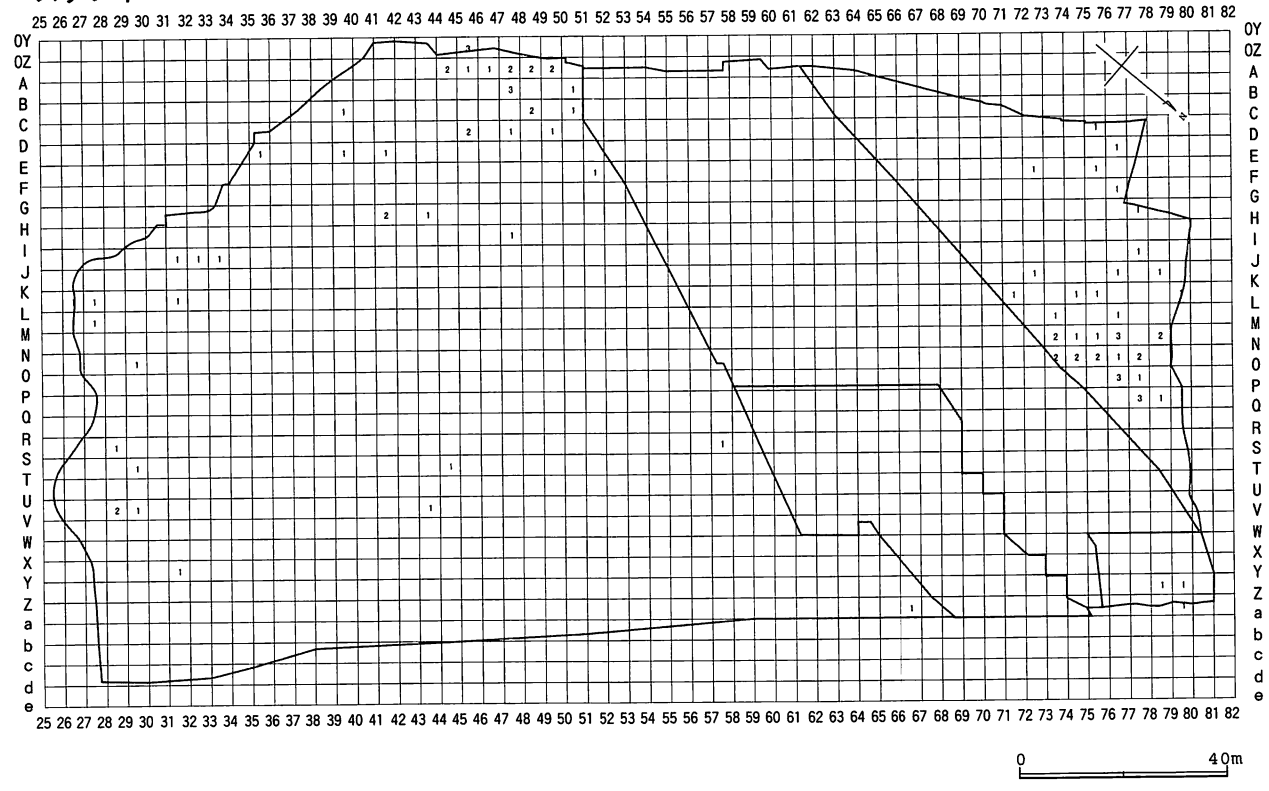


図Ⅴ－２－16　包含層出土石器分布（１）剥片石器・剥片過年度調査分合算

石鏃

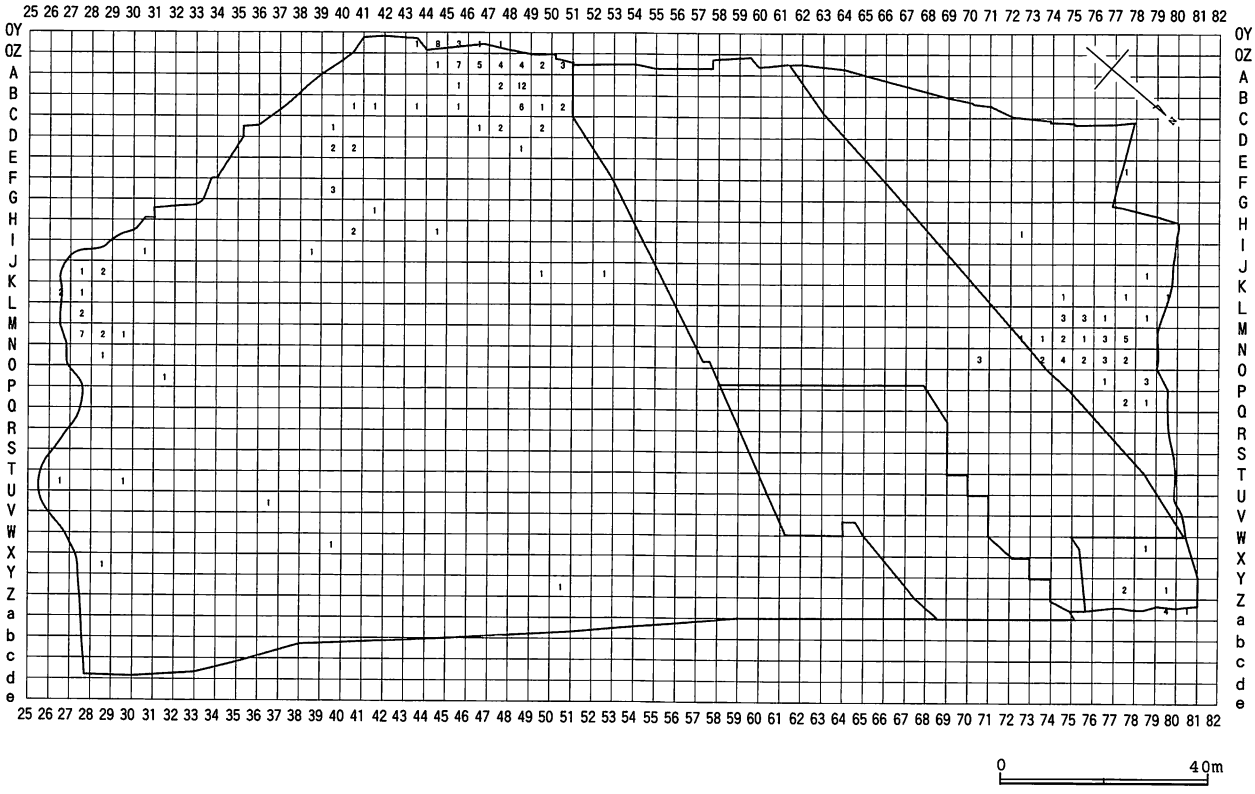


スクレイパー

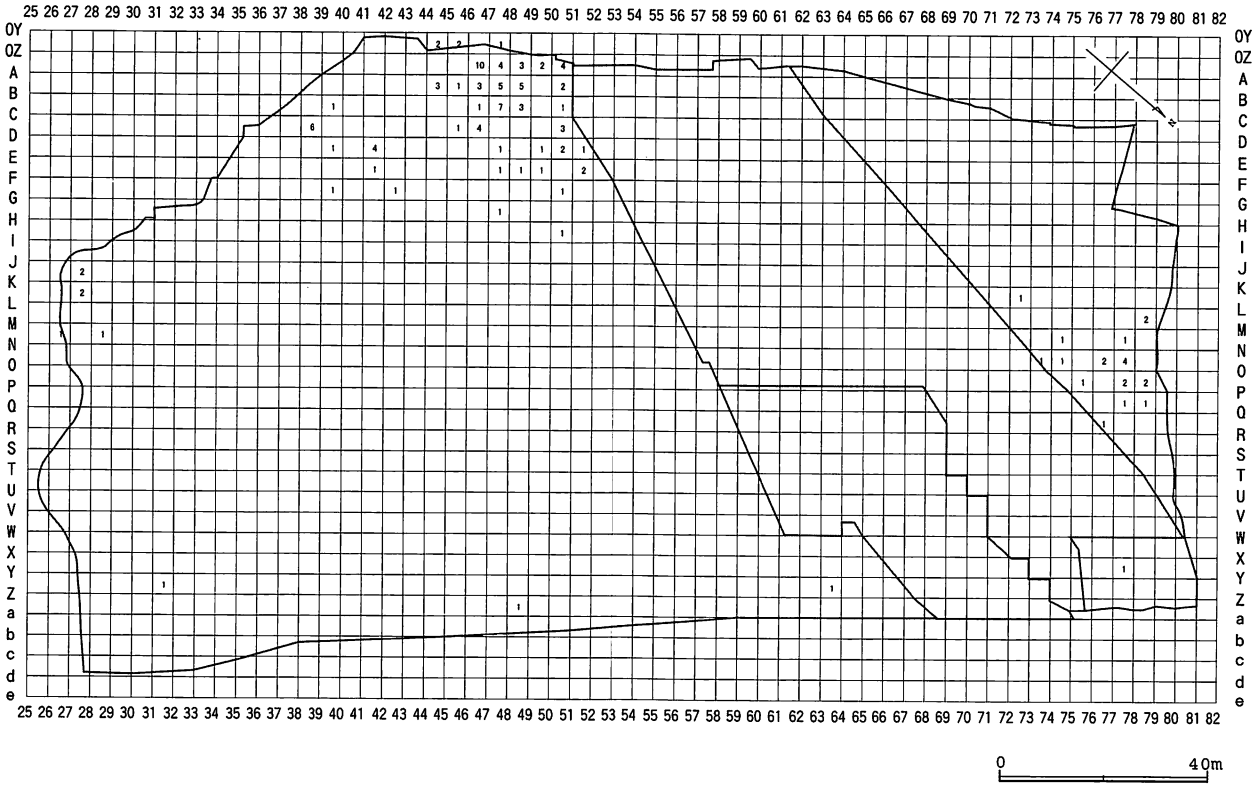


図Ⅴ－２－17　包含層出土石器分布（２）石鏃・スクレイパー

Rフレイク



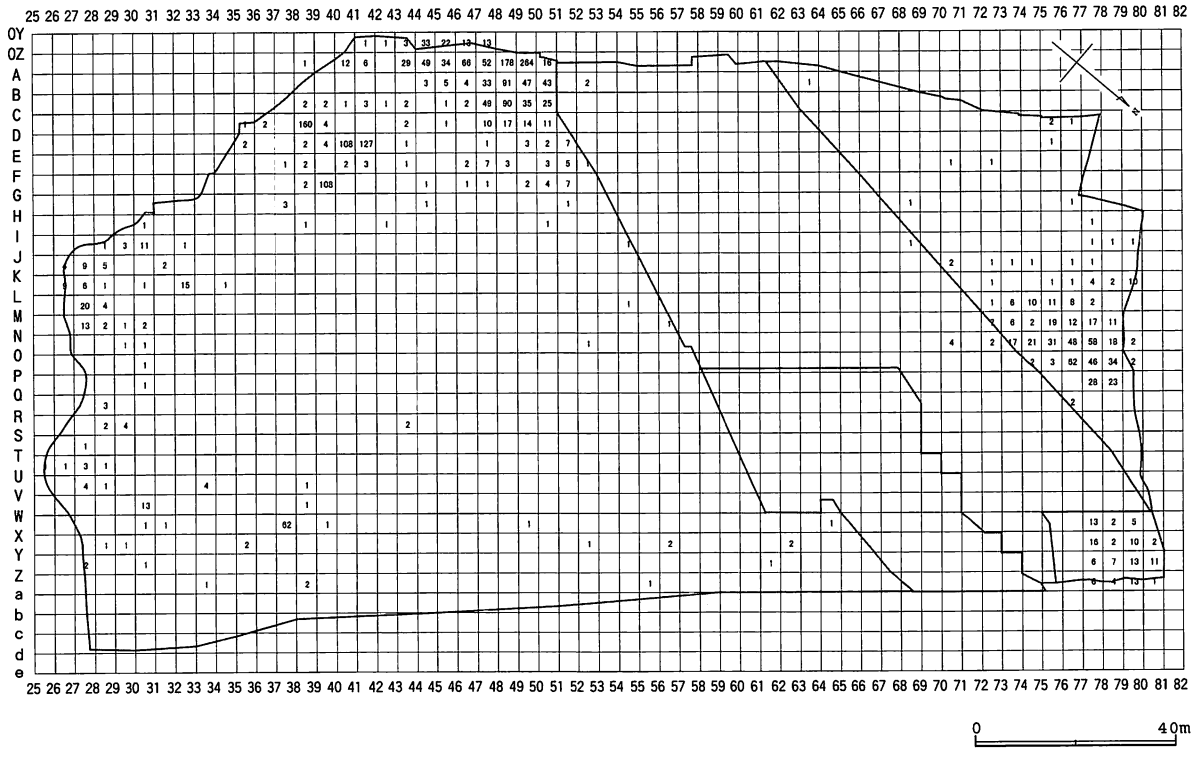
石核



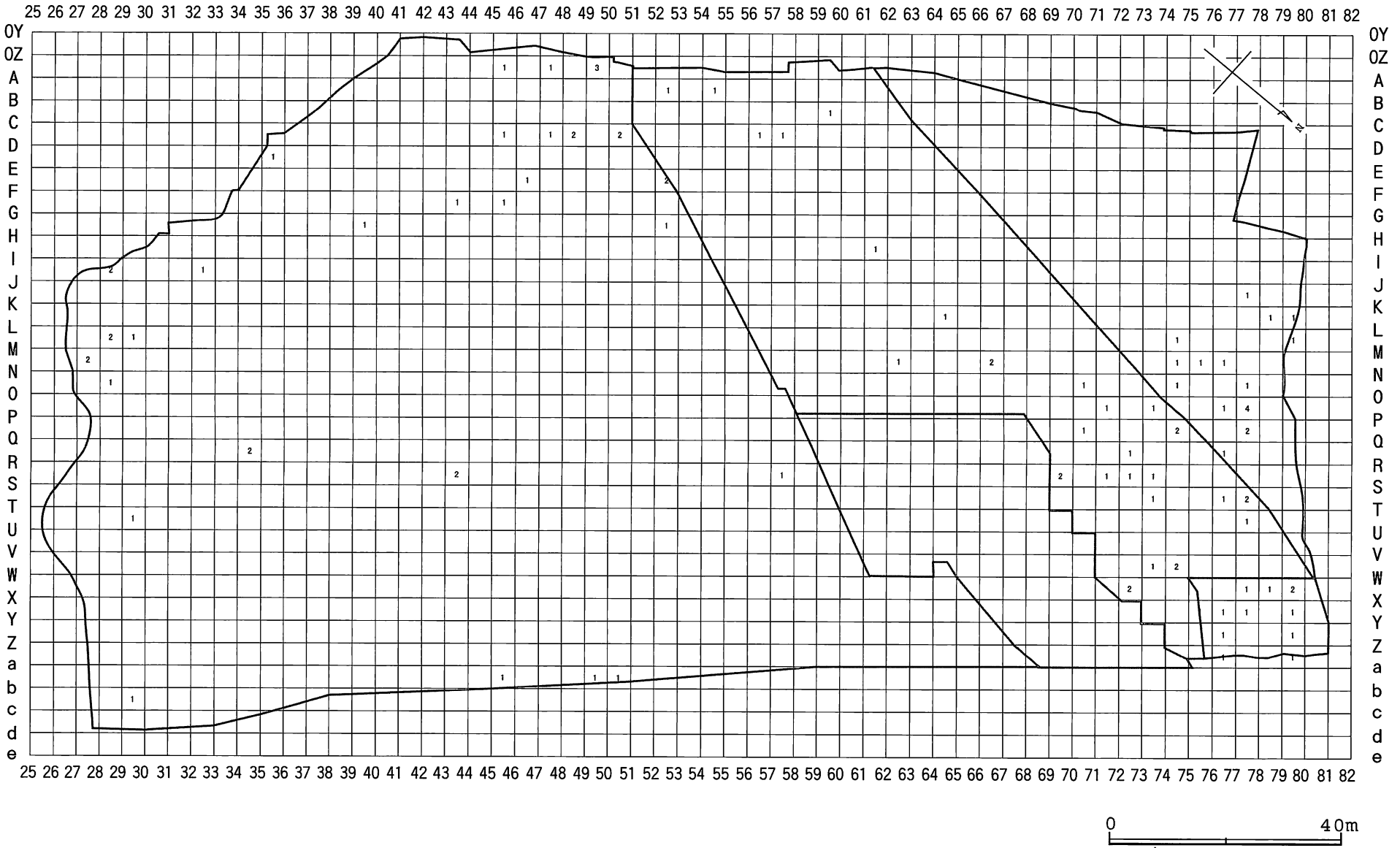
図Ⅴ－２－18　包含層出土石器分布（３）Rフレイク・石核

Uフレイク

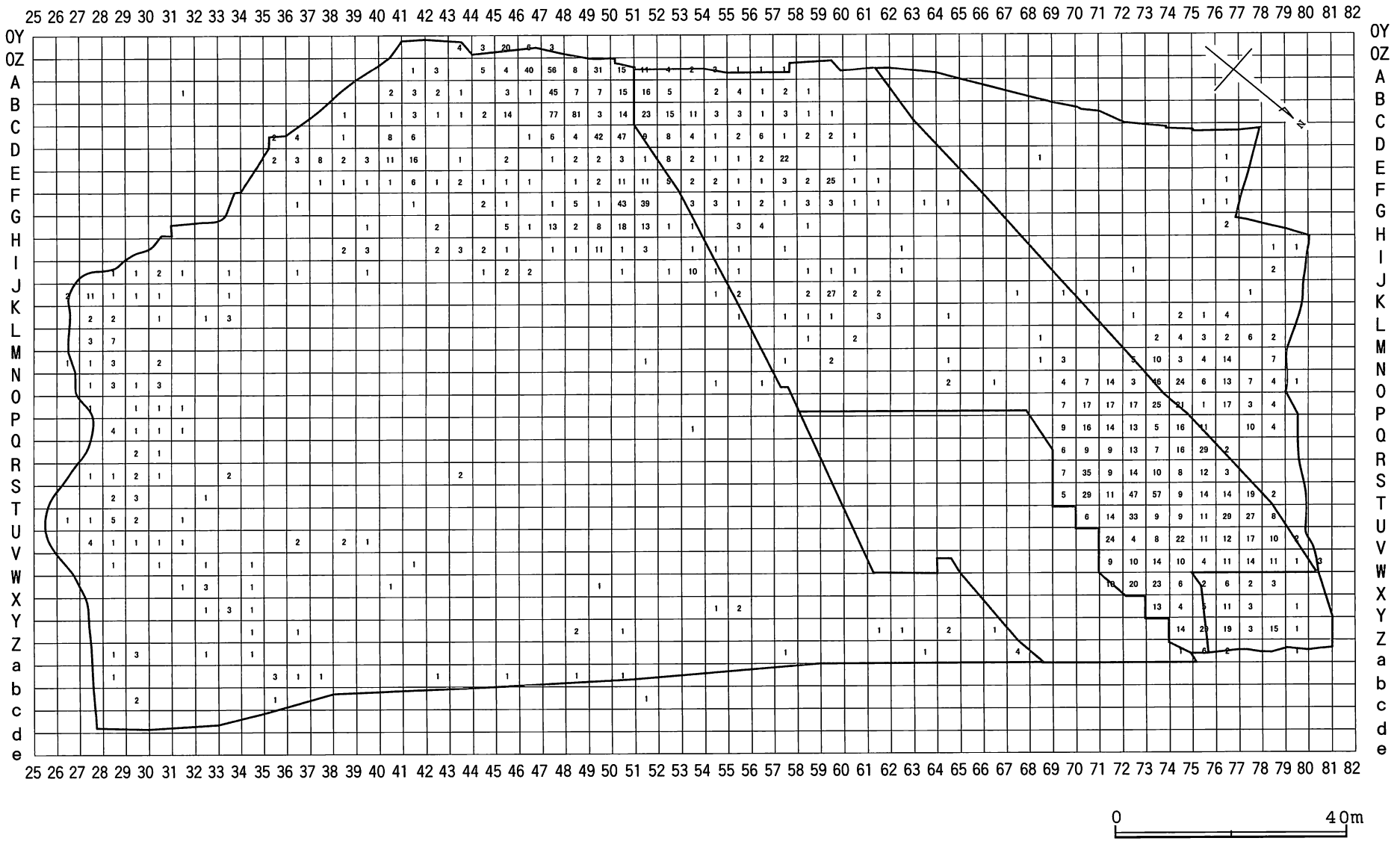
フレイク



図Ⅴ－２－19　包含層出土石器分布（４）Uフレイク・剥片

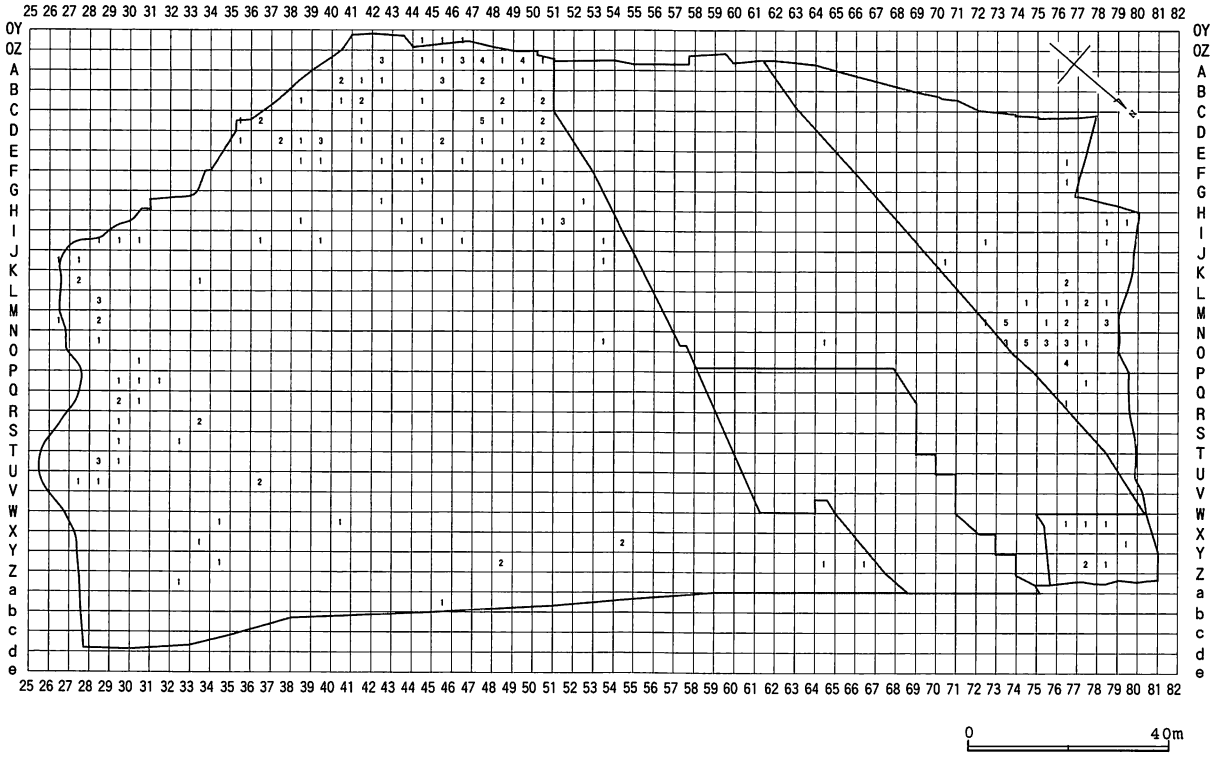


図Ⅴ－２－20　包含層出土石器分布（５）石斧・石斧片過年度調査分合算

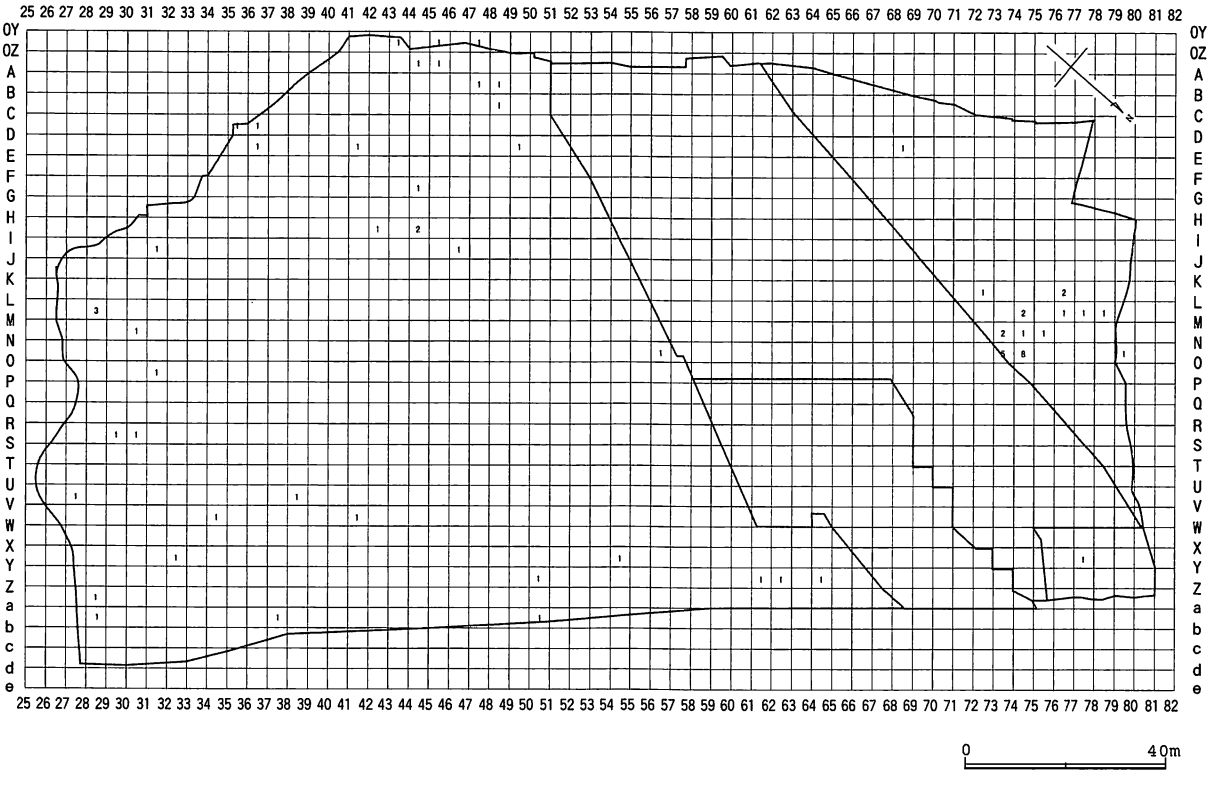


図Ⅴ－２－21　包含層出土石器分布（６）礫石器・礫過年度調査分合算

たたき石

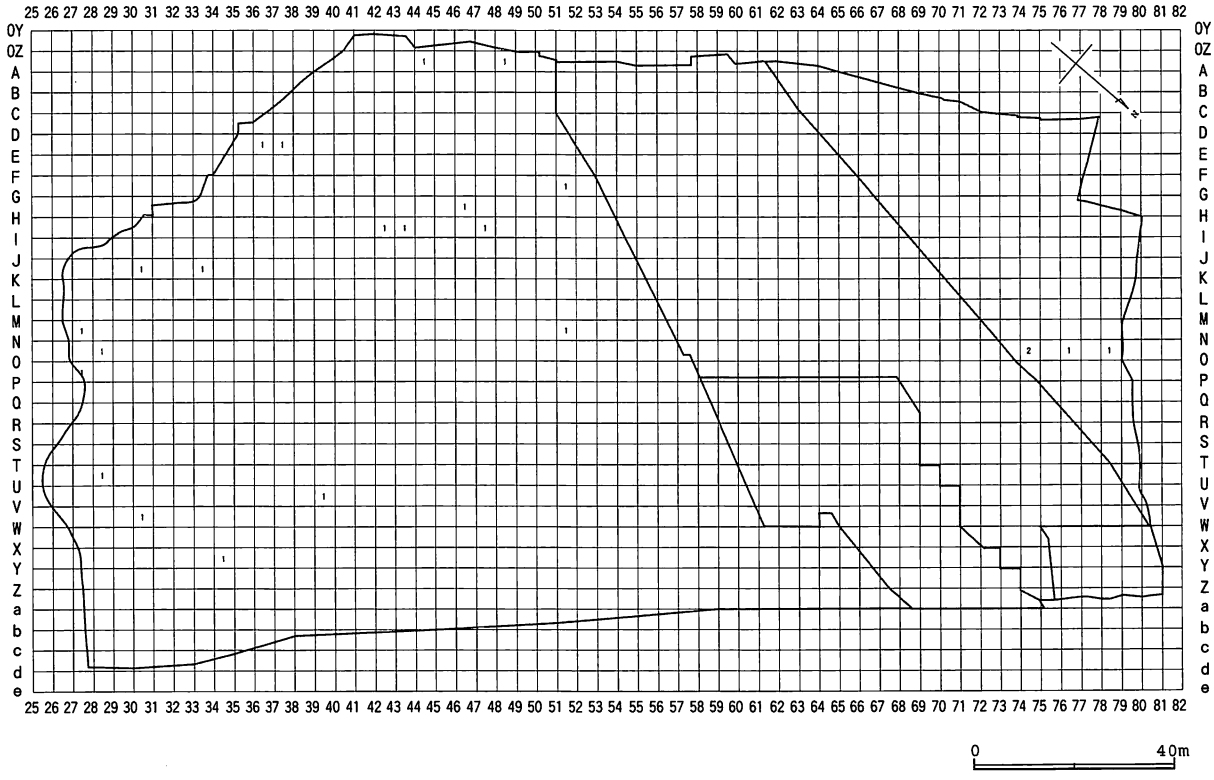


扁平打製石器

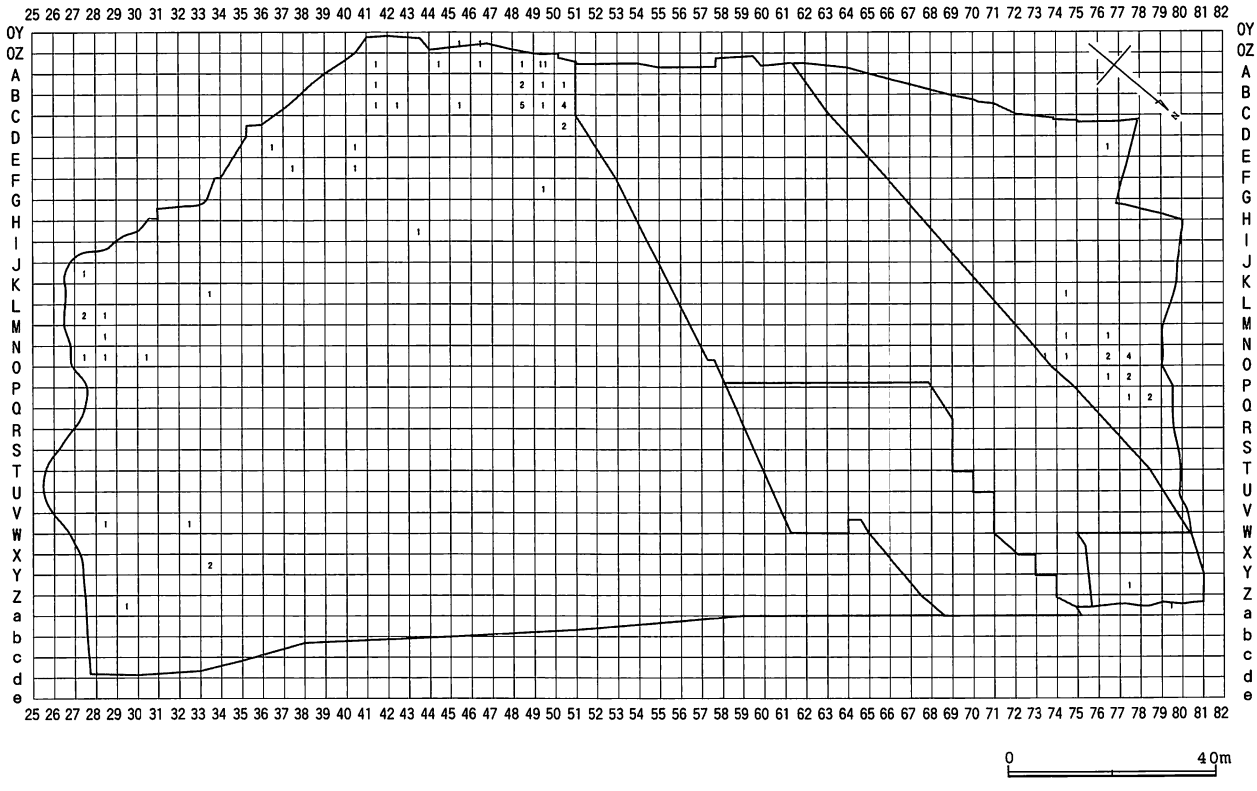


図Ⅴ－２－22　包含層出土石器分布（７）たたき石・扁平打製石器

北海道式石冠



石皿・台石



図Ⅴ－２－23　包含層出土石器分布（８）北海道式石冠・石皿・台石

Ⅵ　自然科学的分析

1　放射性炭素年代測定

パレオ・ラボAMS年代測定グループ
伊藤茂・丹生越子・廣田正史・瀬谷薫・小林紘一
Zaur Lomtatidze・Ineza Jorjoliani・中村賢太郎

1．はじめに

北海道森町石倉町に位置する石倉１遺跡より検出された試料について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。

2．試料と方法

測定試料の情報、調製データは表Ⅵ－１－１のとおりである。

試料は縄文時代の竪穴住居跡、屋外石囲炉、土坑、包含層から得られた炭化材５点と炭化クルミ２点、計７点である。

試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトAMS：NEC製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた^{14}C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、^{14}C年代、暦年代を算出した。

表Ⅵ－１－１　測定試料及び処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-12076	遺構：竪穴住居跡IH-6 層位：炉跡HF-1 試料No.：IS-1	試料の種類：炭化材 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N,水酸化ナトリウム:1N,塩酸:1.2N) サルフィックス
PLD-12077	遺構：竪穴住居跡IH-7 層位：炉跡HF-1 試料No.：IS-2	試料の種類：炭化材 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N,水酸化ナトリウム:1N,塩酸:1.2N) サルフィックス
PLD-12735	遺構：竪穴住居跡IH-8 層位：炉跡HF-1 試料No.：IS-3	試料の種類：炭化材 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N,水酸化ナトリウム:1N,塩酸:1.2N) サルフィックス
PLD-12079	遺構：屋外石囲炉IS-7 層位：覆土 試料No.：IS-4	試料の種類：炭化種実(クルミ) 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N,水酸化ナトリウム:1N,塩酸:1.2N) サルフィックス
PLD-12080	遺構：土坑IP-51 層位：覆土 試料No.：IS-5	試料の種類：炭化材 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N,水酸化ナトリウム:0.2N,塩酸:1.2N) サルフィックス
PLD-12081	遺構：土坑IP-56 層位：覆土 試料No.：IS-6	試料の種類：炭化材 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N,水酸化ナトリウム:1N,塩酸:1.2N) サルフィックス
PLD-12082	遺構：包含層 グリッド：0Z49 層位：Ⅳ層 試料No.：IS-7	試料の種類：炭化種実(クルミ) 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N,水酸化ナトリウム:1N,塩酸:1.2N) サルフィックス

3．結果

表Ⅵ－１－２に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（$\delta^{13}C$）、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値、慣用に従って年代値、誤差を丸めて表示した^{14}C年代、^{14}C年代を暦年代に較正した年代範囲を、図Ⅵ－１－１に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は年代値、誤差を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。^{14}C年代（yrBP）の算出には、^{14}Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した^{14}C年代誤差（±１σ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の^{14}C年代がその^{14}C年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示すものである。

なお、暦年較正の詳細は以下の通りである。

暦年較正

暦年較正とは、大気中の^{14}C濃度が一定で半減期が5568年として算出された^{14}C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の^{14}C濃度の変動、及び半減期の違い（^{14}Cの半減期5730±40年）を較正することで、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C年代の暦年較正にはOxCal4.0（較正曲線データ：INTCAL04）を使用した。なお、１σ暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された^{14}C年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に２σ暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は^{14}C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。それぞれの暦年代範囲のうち、その確率が最も高い年代範囲については、表中に下線で示してある。

表Ⅵ－１－２　放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}C$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP±1σ)	^{14}C 年代 (yrBP±1σ)	^{14}C年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲
PLD-12076 試料No.：IS-1	-27.25±0.19	3636±28	3635±30	2032BC(68.2%)1954BC	2131BC(12.1%)2086BC 2050BC(83.3%)1915BC
PLD-12077 試料No.：IS-2	-28.26±0.14	3693±24	3695±25	2133BC(45.7%)2081BC 2061BC(22.5%)2035BC	2193BC(2.7%)2179BC 2144BC(90.7%)2021BC 1993BC(2.0%)1982BC
PLD-12735 試料No.：IS-3	-25.25±0.12	622±19	620±20	1300AD(29.4%)1320AD 1350AD(26.1%)1369AD 1381AD(12.7%)1391AD	1293AD(38.1%)1329AD 1340AD(57.3%)1396AD
PLD-12079 試料No.：IS-4	-27.18±0.19	3590±24	3590±25	1973BC(68.2%)1902BC	2023BC(14.3%)1991BC 1984BC(81.1%)1887BC
PLD-12080 試料No.：IS-5	-27.01±0.14	4339±26	4340±25	3010BC(25.9%)2980BC 2957BC(3.2%)2952BC 2941BC(39.1%)2904BC	3020BC(95.4%)2899BC
PLD-12081 試料No.：IS-6	-28.24±0.17	3757±26	3755±25	2266BC(2.2%)2261BC 2206BC(66.0%)2136BC	2282BC(10.2%)2248BC 2231BC(72.8%)2126BC 2090BC(12.4%)2044BC
PLD-12082 試料No.：IS-7	-26.33±0.22	3526±24	3525±25	1904BC(23.8%)1872BC 1845BC(25.1%)1813BC 1803BC(19.3%)1777BC	1930BC(95.4%)1769BC

4．考察

試料について、同位体分別効果の補正及び暦年較正を行った。以下、２σ暦年代範囲（確率95.4%）に着目して、小林謙一による縄文土器編年と暦年較正結果との対応関係（小林，2008）や北海道埋蔵文化財センターによる^{14}C年代の集成（㈶北海道埋蔵文化財センター編，2004）を参照し、今回の測定結果と考古学の編年との対応関係を整理する。

土坑IP－51の炭化材（IS－５、PLD－12080）は3020－2899calBCの範囲を示し、縄文時代中期後半に相当する。

土坑IP－56の炭化材（IS－６、PLD－12081）は2282～2044calBC、竪穴住居跡IH－７の炭化材（IS－２、PLD－12077）は2193～1982calBC、竪穴住居跡IH－６の炭化材（IS－１、PLD－12076）は2131～1915calBC、屋外石囲炉IS－７の炭化クルミ（IS－４、PLD－12079）は2023～1887calBC、包含層OZ49区Ⅳ層の炭化クルミ（IS－７、PLD－12082）は1930－1769calBCの範囲を示し、縄文時代後期前葉～中葉に相当する。

竪穴住居跡IH－８の炭化材（IS－３、PLD－12078）は1293～1396calADの範囲を示し、アイヌ文化期に相当する。ただし、発掘調査ではIH－８から縄文時代の遺物が出土しており、発掘調査所見に基づくIH－８の時期と年代測定結果が整合しない。IH－８の上位にアイヌ文化期の遺構遺物は確認されておらず、上層からの移動や混入は考えにくく、IH－８出土炭化材の由来は検討課題である。

参考文献

Bronk Ramsey, C.（1995） Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy: The OxCal Program. Radiocarbon, 37, 425－430.

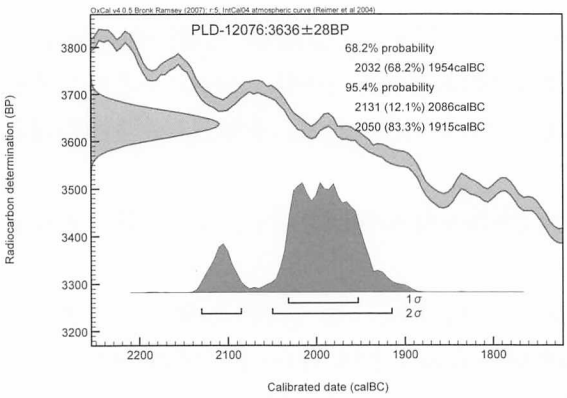
Bronk Ramsey, C.（2001） Development of the Radiocarbon Program OxCal. Radiocarbon, 43, 355－363.

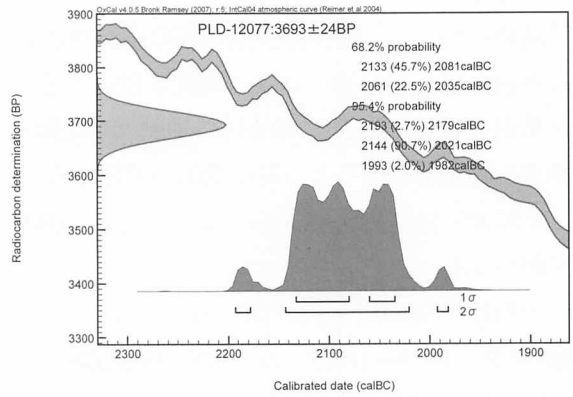
小林謙一（2008）縄文時代の暦年代．縄文時代の考古学２ 歴史のものさし，257－269，同成社．

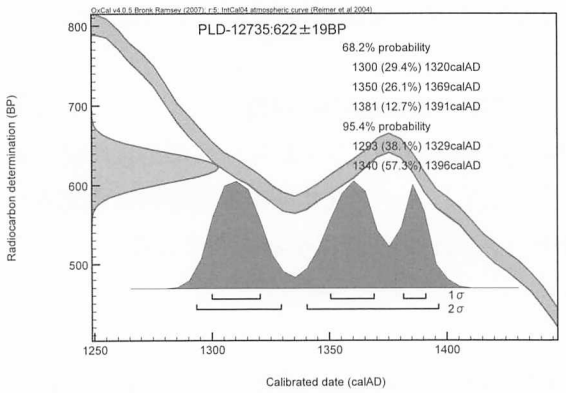
中村俊夫（2000） 放射性炭素年代測定法の基礎．日本先史時代の^{14}C年代．３－20.

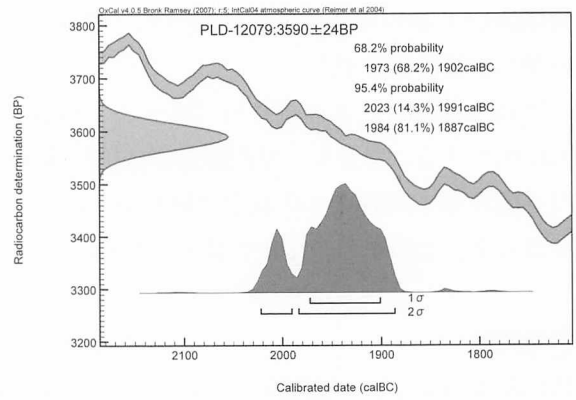
Reimer, P.J., Baillie, M.G.L., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Bertrand, C.J.H., Blackwell, P.G., Buck, C.E., Burr, G.S., Cutler, K.B., Damon, P.E., Edwards, R.L., Fairbanks, R.G., Friedrich, M., Guilderson, T.P., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kromer, B., McCormac, G., Manning, S., Bronk Ramsey, C., Reimer, R.W., Remmele, S., Southon, J.R., Stuiver, M., Talamo, S., Taylor, F.W., van der Plicht, J. and Weyhenmeyer, C.E.（2004） IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0 －26 cal kyr BP. Radiocarbon, 46, 1029－1058.

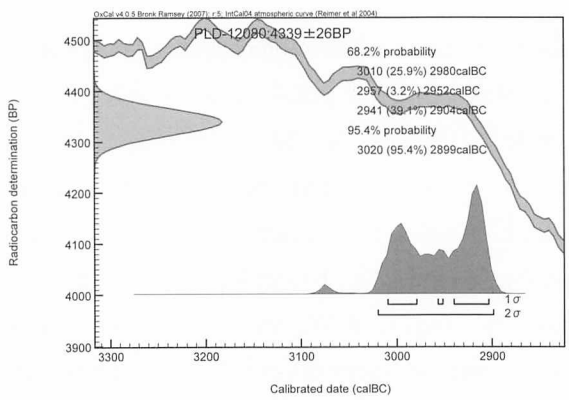
㈶北海道埋蔵文化財センター編（2004）^{14}C年代測定一覧．遺跡が語る北海道の歴史，221－230.

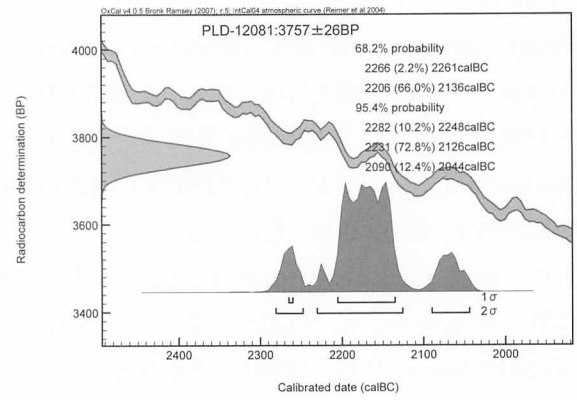

OxCal v4.0.5 Bronk Ramsey (2007); r:5; IntCal04 atmospheric curve (Reimer et al 2004)
PLD-12076:3636±28BP
68.2% probability
2032 (68.2%) 1954calBC
95.4% probability
2131 (12.1%) 2086calBC
2050 (83.3%) 1915calBC
Radiocarbon determination (BP)
Calibrated date (calBC)

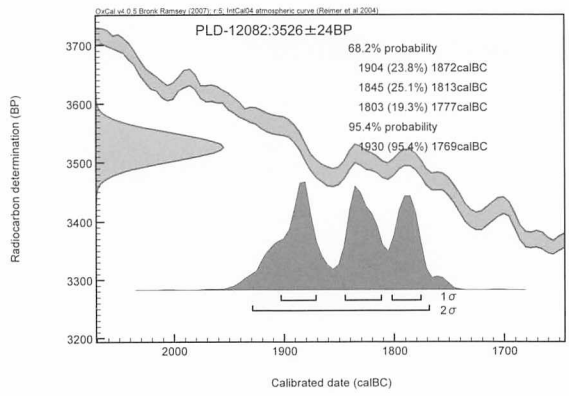

OxCal v4.0.5 Bronk Ramsey (2007); r:5; IntCal04 atmospheric curve (Reimer et al 2004)
PLD-12077:3693±24BP
68.2% probability
2133 (45.7%) 2081calBC
2061 (22.5%) 2035calBC
95.4% probability
2193 (2.7%) 2179calBC
2144 (90.7%) 2021calBC
1993 (2.0%) 1982calBC
Radiocarbon determination (BP)
Calibrated date (calBC)


OxCal v4.0.5 Bronk Ramsey (2007); r:5; IntCal04 atmospheric curve (Reimer et al 2004)
PLD-12735:622±19BP
68.2% probability
1300 (29.4%) 1320calAD
1350 (26.1%) 1369calAD
1381 (12.7%) 1391calAD
95.4% probability
1293 (38.1%) 1329calAD
1340 (57.3%) 1396calAD
Radiocarbon determination (BP)
Calibrated date (calAD)


OxCal v4.0.5 Bronk Ramsey (2007); r:5; IntCal04 atmospheric curve (Reimer et al 2004)
PLD-12079:3590±24BP
68.2% probability
1973 (68.2%) 1902calBC
95.4% probability
2023 (14.3%) 1991calBC
1984 (81.1%) 1887calBC
Radiocarbon determination (BP)
Calibrated date (calBC)


OxCal v4.0.5 Bronk Ramsey (2007); r:5; IntCal04 atmospheric curve (Reimer et al 2004)
PLD-12080:4339±26BP
68.2% probability
3010 (25.9%) 2980calBC
2957 (3.2%) 2952calBC
2941 (39.1%) 2904calBC
95.4% probability
3020 (95.4%) 2899calBC
Radiocarbon determination (BP)
Calibrated date (calBC)


OxCal v4.0.5 Bronk Ramsey (2007); r:5; IntCal04 atmospheric curve (Reimer et al 2004)
PLD-12081:3757±26BP
68.2% probability
2266 (2.2%) 2261calBC
2206 (66.0%) 2136calBC
95.4% probability
2282 (10.2%) 2248calBC
2231 (72.8%) 2126calBC
2090 (12.4%) 2044calBC
Radiocarbon determination (BP)
Calibrated date (calBC)


OxCal v4.0.5 Bronk Ramsey (2007); r:5; IntCal04 atmospheric curve (Reimer et al 2004)
PLD-12082:3526±24BP
68.2% probability
1904 (23.8%) 1872calBC
1845 (25.1%) 1813calBC
1803 (19.3%) 1777calBC
95.4% probability
1930 (95.4%) 1769calBC
Radiocarbon determination (BP)
Calibrated date (calBC)

図Ⅵ－１－１　暦年較正結果

2　石倉１遺跡出土の炭化種実

佐々木由香・バンダリ スダルシャン（パレオ・ラボ）

１．はじめに

石倉１遺跡は茅部郡森町に位置し、現海岸線から約700mの段丘上（標高30～50m）に立地する。遺跡内からは縄文時代の水場遺構や竪穴住居跡、土坑、集石・配石遺構、フレイク集中、土器集中などが検出された。ここでは縄文時代後期前葉、後期前葉以降、不明（中期前半または後期前葉？）の遺構から得られた炭化種実の同定を行い、当時の植生や食用とされた種実に関する情報を得る。

２．試料と方法

試料は１試料あたり１点から複数の炭化種実を含む水洗選別済みの28試料である。細かい炭化種実については分類されていた。試料の内訳を遺構番号と試料数で示すと、黒曜石の剥片で構成されるフレイク集中である縄文時代後期前葉以降のFC－２が14試料（うちⅣ層上位が１試料、Ⅳ層上面が10試料、Ⅳ層が３試料）と、縄文時代後期前葉以降のFC－３が６試料（うちⅣ層上位が４試料、Ⅳ層が２試料）、縄文時代後期前葉以降のFC－５が１試料、縄文時代後期前葉の集石遺構のIS－３が１試料と、縄文時代後期前葉のIS－７が２試料（うち１～３層が１試料、１層とその下位層が１試料）、縄文時代後期前葉の竪穴住居跡であるIH－８（採取位置IH－８－C）が１試料と、縄文時代後期前葉の竪穴住居跡IH－９の炉跡HF－１が２試料、時期不明（縄文時代中期前半または後期前葉？）の焼土IF－１が１試料である。

堆積物の採取から洗浄までの作業は㈶北海道埋蔵文化財センターによって行われた。洗浄前の土壌量は表Ⅵ－２－１に示した。水洗は最小0.425㎜の篩を用いて行われた。炭化種実の抽出・同定・計数は肉眼および実体顕微鏡下で行った。計数の方法は完形または一部が破損しても１個体とみなせるものは完形として数え、１個体に満たないものは破片とした。試料は㈶北海道埋蔵文化財センターに保管されている。

表Ⅵ－２－１　試料一覧

No.	グリッド	遺構名	時期	層位	洗浄前の土壌量 重量・(kg)	洗浄前の土壌量 体積・(l)
1～3		FC2	後期前葉以降	Ⅳ層上面	19	26.5
6		IH8-C	後期前葉		11	13
7		IS7		1～3層	8.5	9.5
16		IH9HF 1			8	8
17					3	3
18・19		IS3			4	4
20		IS7		1層とその下位層	7.5	8.5
21～23	B50ab	FC2	後期前葉以降	Ⅳ層	11	13
24	I31	IF1	不明・縄文時代中期前半又は後期前葉?		3	3
29	B49ad	FC2	後期前葉以降	Ⅳ層上位	5	6
44	A49bc			Ⅳ層上面	5.5	6
47				Ⅳ層上面	7.5	9
48				Ⅳ層上面	8	9
49				Ⅳ層上面	6	8
50				Ⅳ層上面	8	10
54				Ⅳ層上面	8	9.5
55				Ⅳ層上面	7	8
56				Ⅳ層	3.5	4
58				Ⅳ層上面	3	3
59				Ⅳ層	7.5	8.5
60				Ⅳ層上面	6.5	8
69	C50bc	FC3		Ⅳ層	7	8
70				Ⅳ層	6.5	8
73	D51a			Ⅳ層上位	7.5	8
75	C51b			Ⅳ層上位	8.5	9
76				Ⅳ層上位	8	9.5
77	D51a			Ⅳ層上位	6.5	6.5
81	OZ49bc	FC5		Ⅳ層上位	6.5	7.5

３．結果

同定した結果、木本植物では広葉樹のオニグルミ炭化核と、ウルシ属炭化内果皮、キハダ炭化種子、トチノキ？炭化子葉、ブドウ属炭化種子、ミズキ炭化核の６分類群が見いだされた。このほかに、科以下の同定ができなかった１点を不明炭化種実とし、微細な破片であるため同定不能な一群を同定不能種実とした。植物以外には子嚢菌が少量得られた。

以下に遺構別の種実出土傾向を記載する。

FC－２（14試料（Ⅳ層上位１試料・Ⅳ層上面10試料・Ⅳ層３試料））：オニグルミ破片が33点得られた。いずれの破片も小さい。キハダ完形３点破片３点と、トチノキ？破片１点、ブドウ属破片３点、ミズキ完形３点破片１点、子嚢菌６点、同定不能３点が得られた。

FC－３（６試料（Ⅳ層上位４試料・Ⅳ層２試料））：キハダ完形８点破片２点と、子嚢菌完形６点破片２点、不明種実完形１点得られた。

FC－５（Ⅳ層上位１試料）：ウルシ属完形が１点得られた。

IS－３（１試料）：オニグルミ破片が５点得られた。いずれの破片も小さい。

IS－７（２試料（１～３層１試料、１層とその下位層１試料））：オニグルミ破片が44点得られた。いずれの破片も小さい。ミズキ破片が１点得られた。

IH－８－C（１試料）：同定不能種実が３点得られた。

IH－９HF－１（２試料）：オニグルミ破片が99点得られた。いずれの破片も小さい。

IF－１（１試料）：オニグルミ破片が２点得られた。いずれの破片も小さい。

表Ⅵ－２－２　石倉１遺跡から出土した炭化種実

		試料番号	No.1-3	No.6	No.7	No.16	No.17	No.18-19	No.20	No.21-23	No.24	No.29
			FC2	IH8-C	IS7	IH9HF1	IH9HF1	IS3	IS7	FC2	IF1	FC2
									1層とその下位層	B50ab	131	B49ab
分類群	Taxa	部位/層位	Ⅳ層上面		1～3層					Ⅳ層		Ⅳ層上位
オニグルミ	*Juglans ailanthofolia* Carr.	炭化核			(4)	(57)	(42)	(5)	(40)	(1)	(2)	(3)
キハダ	*Phellodendron amurense* Rupr.	炭化種子	2							(3)		
ミズキ	*Cornus controversa* Hemsley	炭化核	1 (1)						(1)			
子嚢菌	*Ascomycotina*											
不明	Unknown	炭化種実										
同定不能	Unidentified	炭化種実		(3)								

		試料番号	No.44	No.47	No.48	No.49	No.50	No.54	No.55	No.56	No.58	No.59
			FC2									
			A49bc									
分類群	Taxa	部位/層位				Ⅳ層上面				Ⅳ層	Ⅳ層上面	Ⅳ層
オニグルミ	*Juglans ailanthofolia* Carr.	炭化核	(8)	(1)			(3)	(2)	(10)			
トチノキ	*Aesculus turbinata* Blume	炭化種子		(1)								
ブドウ属	*Vitis* spp.	炭化種子						(3)				
ミズキ	*Cornus controversa* Hemsley	炭化核				1	1					
子嚢菌	*Ascomycotina*								1	1	1	3
同定不能	Unidentified	炭化種実			(1)		(1)				(1)	

		試料番号	No.60	No. 69	No.70	No.73	No.75	No.76	No.77	No. 81
			FC2			FC3				FC5
			A49bc	C50bc		D50d	C51b		D51d	0Z49bc
分類群	Taxa	部位/層位	Ⅳ層上面	Ⅳ層			Ⅳ層上位			Ⅳ層上位
オニグルミ	*Juglans ailanthofolia* Carr.	炭化核	(5)							
ウルシ属	*Rhus* sp.	炭化果実								1
キハダ	*Phellodendron amurense* Rupr.	炭化種子	1	(2)		1		4	3	
子嚢菌	*Ascomycotina*			1	(2)		2	1	2	
不明	Unknown	炭化種実						1		

以下に主要な種実遺体の記載を行う。

（１）オニグルミ　*Juglans ailanthifolia* Carr.　炭化核　クルミ科

破片のみの出土であるが、完形ならば側面観は広卵形。壁は緻密で硬く、ときどき空隙がある。表面に縦方向の縫合線があり、浅い溝と凹凸が不規則に入る。割れている破断面は角が尖るものが多い。微細な破片はオニグルミ以外のクルミ属の可能性もある。破片からは人為的な打撃痕による割れか動物の食害痕による割れか判断できなかったが、動物によると思われる破片はなかった。残存長12.0㎜、残存幅9.0m。

（２）ウルシ属　*Toxicodendron*　炭化内果皮　ウルシ科

上面観は中央がやや膨らむ扁平、側面観は中央がややくびれた広楕円形で、片方が膨れる三角形状になる。やや光沢があり、ざらついた質感がある。表面には微細な網目模様がある。壁は軟質。全体形は青森県三内丸山遺跡（吉川，2005）などで報告されたウルシに似るが、表面および断面構造の詳細な検討を行えなかったので、ウルシ属の同定に留めた。長さ3.0㎜、幅2.1㎜、厚さ1.8㎜。

（３）キハダ　*Phellodendron amurense* Rupr.　炭化種子　ミカン科

上面観は両凸レンズ形、側面観は偏楕円形。表面にはやや大きく高さはほとんどない網目模様がある。壁はやや薄いが硬い。長さ5.1㎜、幅2.8㎜。

（4）トチノキ？　*Aesculus turbinata* Blume　炭化子葉　トチノキ科

子葉は、表面に不規則な凹凸があり、クリよりも不定多角形に割れやすい。また破片の表面には不規則な凹凸があり、内部に放射状の割れが入ることが多いが、出土した個体はほとんど表面が残存していないことと、割れの方向も明確でなかったため、？を付した。残存長11.4㎜、幅9.0㎜。

（5）ブドウ属　*Vitis* spp.　炭化種子　ブドウ科

いずれも破片であり、背面しか残存していない。完形ならば上面観は楕円形、側面観は先端が尖る卵形。背面の中央もしくは基部寄りに匙状の着点があり、腹面には縦方向の 2 本の深い溝がある。壁は薄く硬い。残存長4.0㎜、幅3.8㎜。

（6）ミズキ　*Cornus controversa* Hemsley　炭化核　ミズキ科

楕円形～ゆがんだ球形、上端がやや尖る。基部に裂けたような大きな着点がある。壁は厚い。縦にやや流れるような深い溝と隆起が走る。長さ2.8㎜、幅3.1㎜。

（7）子嚢菌　*Ascomycotina*　炭化子嚢

楕円形～ゆがんだ円形で、表面微細な皺状の文様がある。内部は無構造。長さ2.1㎜、幅1.6㎜。

（8）不明　Unknown　炭化種実

楕円形で、上面観は一端が閉じる倒卵形、側面観はゆがんだ楕円形。表面は平滑。着点や表面構造が観察できなかったので、科以下の同定ができなかった。

4．考察

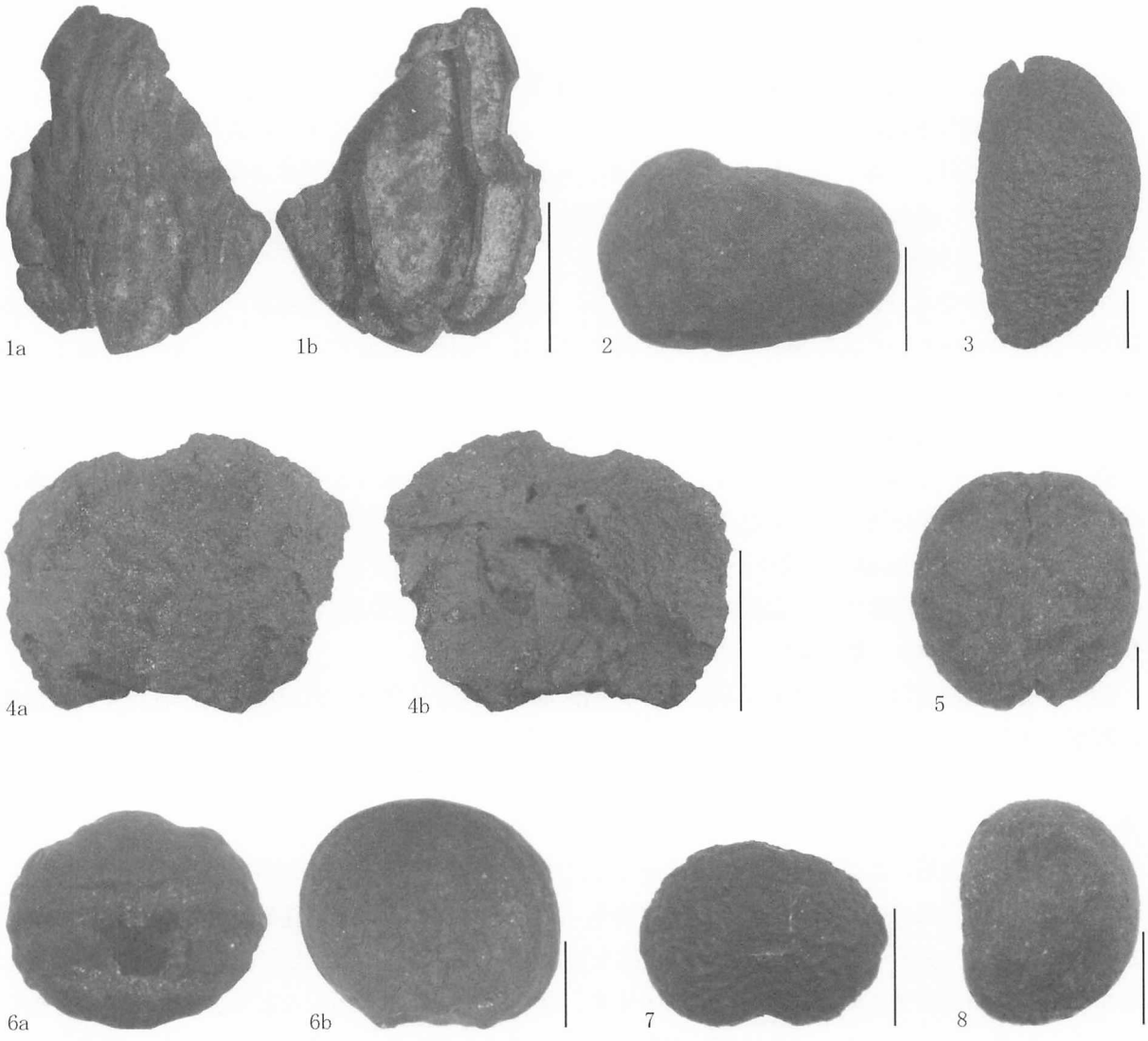
縄文時代後期前葉および前葉以降の遺構からは、オニグルミが多く、これらにキハダと、ブドウ属、ミズキといった食用可能な種実が伴うものが多かった。オニグルミは主に住居跡と集石などから出土した。微細な破片が多く、最も多数の破片が出土したIH－ 9 でも完形個体数に換算すると 1 個前後と思われる。核の微細破片のみが出土することから、住居跡や集石遺構周辺などで加工した残渣を燃やしたことが考えられる。キハダの果実は甘酸っぱく、アイヌが近年まで食用としていた。青森県八戸市の潟野遺跡では前期初頭の住居跡からキハダ炭化種子が出土しており、利用された可能性が指摘されている（吉川，2007）。トチノキ？の出土部位は子葉であり、加工・調理時の残滓が炭化したと考えられる。ウルシ属は炭化していることから、何らかの用途で利用された可能性が高い。本遺跡のウルシ属は 1 点のみの出土であったため、走査電子顕微鏡での観察ができなかったが、今後種レベルの検討が必要になろう。ウルシは現在のところ縄文時代前期初頭から晩期の青森～北海道道南部を中心した地域で炭化した内果皮が出土しており、これらの地域で共通した利用法があったことが推定される。

利用されたあるいは利用の可能性がある種実がフレイク集中から多数出土する要因については、堆積状況の検討や周辺の堆積物との比較が必要であるが、特定の種実が産出しない状況や炭化していることから、利用後の種実をフレイク集中に廃棄したことが考えられる。

引用文献

吉川純子（2005）三内丸山遺跡第683号住居跡より出土した炭化種実．青森県教育委員会編「三内丸山遺跡29」：195－199．青森県教育委員会．

吉川純子（2007）八戸市潟野遺跡縄文時代より出土した炭化種実．青森県埋蔵文化財調査センター編「潟野遺跡」：163－165．青森県教育委員会．



スケール 1・4:5mm、2・3・5-8:1mm

図版Ⅵ－２－１　石倉１遺跡から出土した炭化種実

１.オニグルミ炭化核（No.16、IH９HF１）、２.ウルシ属炭化内果皮（No.81、０Z49bc、FC５Ⅳ層上位）、３.キハダ炭化種子（No.60、A49bc、FC２、Ⅳ層）、４.トチノキ?炭化子葉（No.47、A49bc、FC２、Ⅳ層上位）、５.ブドウ属炭化種子（No.54、A49bc、FC２、Ⅳ層上位）、６.ミズキ炭化核（No.50、A49bc、FC２、Ⅳ層上位）、７.子嚢菌（No.75、C51b、FC３、Ⅳ層上位）、８.不明炭化種実（No.76、C51b、FC３、Ⅳ層上位）

3　石倉１遺跡出土の動物遺体

中村賢太郎（パレオ・ラボ）

１．はじめに

石倉１遺跡は茅部郡森町に位置し、現海岸線から約700mの段丘上（標高30～50m）に立地する。遺跡内からは縄文時代の水場遺構や竪穴住居跡、土坑、集石・配石遺構、フレイク集中、土器集中などが検出された。ここでは縄文時代後期前葉の遺構および包含層から採集された動物遺体の同定結果を報告する。なお、同定および解析には、早稲田大学樋泉岳二氏に協力をお願いし、原稿として結果を頂いた。

２．試料と方法

試料は、縄文時代後期前葉の竪穴住居跡、フレイク集中、集石遺構、包含層から検出された動物遺体である。試料には現場採集試料（発掘現場で目視確認され、手で拾い上げられたもの：試料番号39・40）と水洗選別試料（堆積物の水洗選別によって回収されたもの：試料番号39・40以外）がある。現場採集試料は包含層（OZ49区、Ⅳ層）から、水洗選別試料は竪穴住居跡IH－７・IH－８・IH－９、集石遺構IS－７、フレイク集中FC－２および包含層（OZ49区、Ⅳ層）から採集されたものである。水洗選別作業は㈶北海道埋蔵文化財センターにより行われ、用いられた篩のメッシュサイズは１㎜である。

同定は現生標本との比較により行った。

３．結果と考察

石倉１遺跡出土の動物遺体

樋泉　岳二

同定結果を表Ⅵ－３－１に示す。魚類・哺乳類の骨が多く、他に鳥骨が１点みられた。試料の大半は小破片と化しており、詳細な分類群を特定できた試料は少ないが、魚類ではガンギエイ属・ニシン科・サケ属・タイ科・カレイ科、哺乳類ではイノシシが同定された。貝類は確認されなかった。以下、遺構別に試料の内容を述べる。

竪穴住居跡IH－８からは最も多くの試料が検出された。骨片数の合計は390点（すべて水洗選別試料）で、魚類ではサケ属椎骨破片７点、タイ科歯５点、ガンギエイ属歯・ニシン科尾椎・カレイ科顎骨破片が各１点のほか、真骨類椎骨破片18点が確認された。IH－８－B試料番号68のタイ科臼歯は、楕円形を呈し、中央に弱い突起をもつことから、マダイ亜科（マダイまたはチダイ）の可能性がある。また、中型の鳥類の指骨１点が確認されたが、詳細な同定は困難であった。そのほか、詳細不明の小骨片が多数得られており、その多くは魚骨と見られるが、獣骨と思われるものも混じる。

その他の遺構では、竪穴住居跡IH－７・IH－９、集石遺構IS－７およびフレイク集中FC－２において、同定困難な小骨片が若干検出されたのみであった。

包含層では、Ⅳ層OZ49区から206点（現地採集資料174点、水洗選別資料32点）の骨片が採集されている。イノシシ４点（中手骨または中足骨、基節骨、中節骨）が同定された。未癒合の中節骨近位端が見られたため、イノシシは若獣を含むと考えられる。そのほか、イノシシまたはシカと思われる種子骨が１点確認された。ほかに詳細不明の骨片が多数あるが、それらのほとんどは哺乳類（獣骨）と思われるもので、確実に哺乳類以外と判断される資料は確認されなかった。

以上の結果から、縄文時代後期前葉の石倉１遺跡においては、サケ属、タイ科（マダイ亜科を含

む？)、ガンギエイ属、ニシン科、カレイ科などの魚類、およびイノシシが利用されていたことが確認された。魚類のうちサケ属は遡河性、他は海生で、ガンギエイ属・カレイ科は沿岸砂泥底域に棲む底魚、タイ科は沿岸性、ニシン科は表層回遊魚である。このことから、本遺跡では沿岸域から河川での漁労活動が行われていたことが推定される。イノシシは現在の北海道には自生していないことから、これまでにも指摘されてきたとおり、本州から人間によって持ち込まれた可能性が考えられる。

今回検出された試料のほとんどは灰色または白色と化しており、強い火熱を受けたと考えられる。ただしタイ科の歯の中には、焼けておらず、髄質が溶解してエナメル質のみが残されている試料が認められた。このことから、本遺跡の形成当時にはより多くの動物遺体が埋蔵されていたが、そのほとんどは溶解消失して、溶解しにくい焼骨やエナメル質のみが残存したものと推定される。

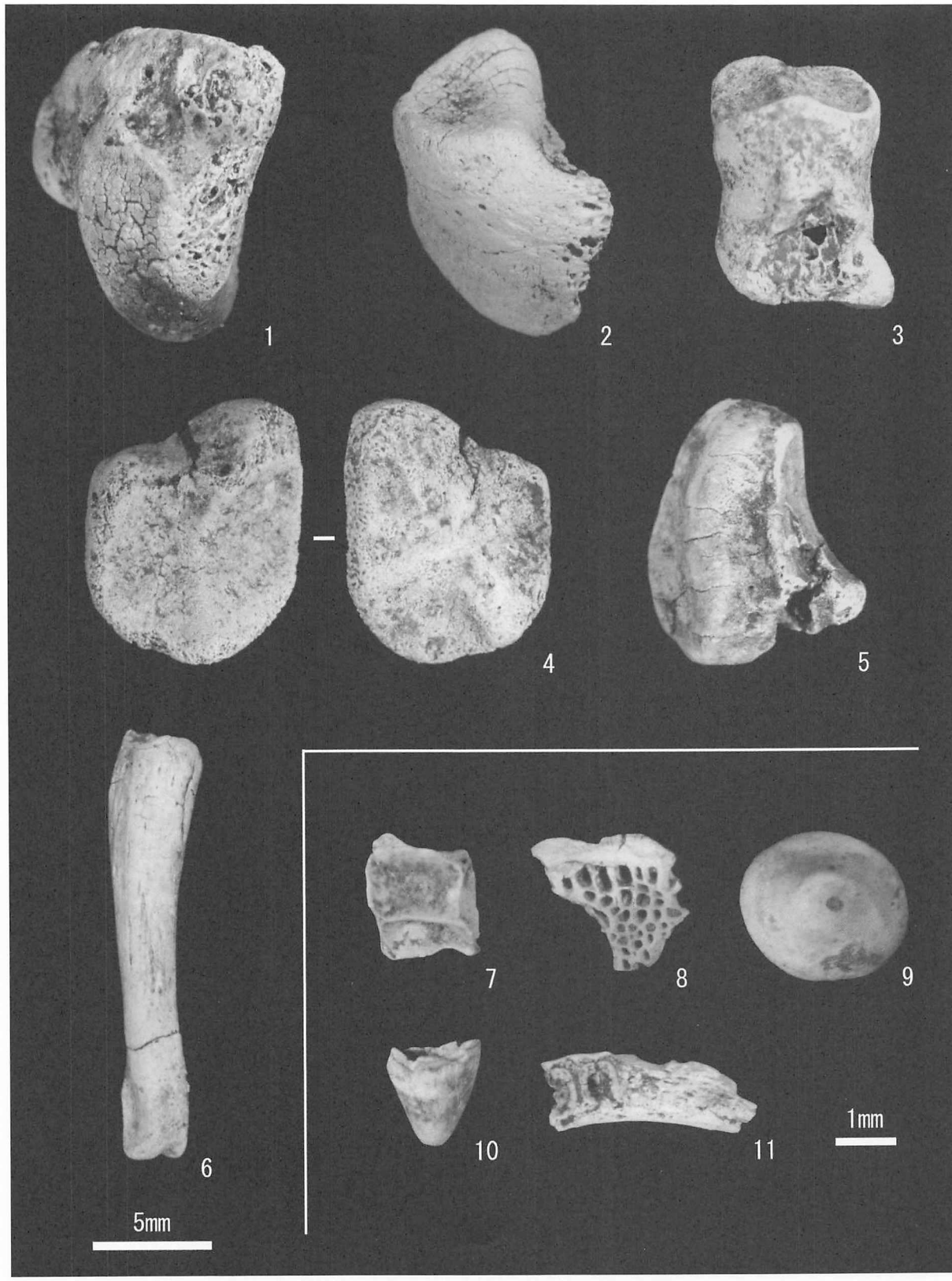
焼骨が人間によって意図的に焼かれたものかどうかは、試料の観察のみでは判断がむずかしい。ただし、① 骨片はIH－8とⅣ層OZ49区から集中して検出されているのに対して、他の遺構ではごく少なく、分布の偏りが著しいこと、② IH－8では魚骨、Ⅳ層OZ4区ではイノシシを含む獣骨が主体で、内容に明確な違いがみられること、③ イノシシは本州からの持ち込みの可能性があること、などを考慮すれば、意図的に焼かれたものである可能性も十分に考えられる。この点については、今後出土状況などとの比較検討を進めれば、さらに踏み込んだ解釈が可能となるかもしれない。

4．まとめ

石倉1遺跡の縄文時代後期前葉の遺構・包含層から検出された動物遺体を同定した結果、魚類・鳥類・哺乳類が確認された。試料のほとんどは竪穴住居跡IH－8および包含層のⅣ層OZ49区から集中的に検出されたものである。竪穴住居跡IH－8ではガンギエイ属・ニシン科・サケ属・タイ科・カレイ科を含む魚骨が主体であり、沿岸域から河川での漁労活動が行われていたことが推定された。包含層のⅣ層OZ49区ではイノシシを含む獣骨が主体であった。イノシシは本州から人間によって持ち込まれた可能性がある。試料のほとんどは焼骨であり、このことから本遺跡の形成当時はより多くの動物遺体が埋蔵されていたが、以後に溶解消失した可能性が高い。焼骨が人間によって意図的に焼かれたものかどうかは判然としないが、分布の偏りが著しいこと、IH－8と包含層（Ⅳ層OZ49区）とで内容に明確な違いがみられること、イノシシは本州からの持ち込みの可能性があることから、意図的に焼かれたものである可能性も考慮する必要がある。

表Ⅵ－３－１　石倉１遺跡出土動物遺体の同定結果

遺構	試料番号	層準	調査区	採集法	分類群	部位	残存状態	左右	数	焼	備考
IH7	4	HF1	-	水洗	同定不可(哺乳類)	不明	破片	-	2	焼	
IH8	26･27	HF1	-	水洗	タイ科？	犬歯		?	1	焼	
					サケ属	椎骨	破片	-	1	焼	
					同定不可(魚類)	椎骨	破片	-	6	焼	
					ガンギエイ属	歯		-	1	非焼	
					同定不可(魚類･哺乳類)	不明	破片	-	93	焼	ほとんどは魚骨
	15･26･27	覆土およびHF1	-	水洗	同定不可(鳥類)	指骨	完存	?	1	焼	中型鳥類
	13	覆土	-	水洗	タイ科	臼歯	エナメル質のみ	?	1	非焼	
					同定不可(魚類)	椎骨	破片	-	1	非焼	サケではない
					同定不可(魚類)	椎骨	破片	-	2	焼	サケではない
					カレイ科	前上顎骨/歯骨	破片	?	1	焼	
					サケ属？	椎骨	破片	-	1	焼	
					同定不可(魚類･哺乳類)	不明	破片	-	60	焼	
	15	覆土	-	水洗	同定不可(魚類)	椎骨	破片	-	1	焼	
					タイ科？	犬歯		?	1	焼	
					サケ属	椎骨	破片	-	5	焼	
					同定不可(魚類)	椎骨	破片	-	7	焼	
					ニシン科	尾椎	椎体	-	1	焼	
					同定不可(魚類･哺乳類)	不明	破片	-	137	焼	
IH8-A	14	覆土	-	水洗	同定不可	不明	破片	-	3	焼	
IH8-B	68	覆土	-	水洗	タイ科	臼歯	エナメル質のみ	?	1	焼	マダイ亜科？
					同定不可	不明	破片	-	16	焼	
IH8-C	6	覆土	-	水洗	同定不可(魚類･哺乳類)	不明	破片	-	25	焼	
IH8HP3	12	覆土	-	水洗	タイ科	臼歯	エナメル質のみ	?	1	非焼	
					同定不可(魚類)	椎骨	破片	-	1	焼	
					同定不可(魚類･哺乳類)	不明	破片	-	22	焼	
IH9	16	HF1	-	水洗	同定不可	不明	破片	-	3	焼	
	17	HF1	-	水洗	同定不可	不明	破片	-	8	焼	
IS7	7	1～3層	-	水洗	同定不可	不明	破片	-	1	焼	
	20	1層とその下位層	-	水洗	同定不可	不明	破片	-	7	焼	
FC2	56	Ⅳ層	A49bc	水洗	同定不可(哺乳類)	不明	破片	-	2	焼	
包含層	8～11	Ⅳ層	OZ49	水洗	同定不可(哺乳類)	不明	破片	-	25	焼	
	28	Ⅳ層	OZ49	水洗	同定不可(哺乳類)	不明	破片	-	7	焼	
[FC-5にて骨含土とした場所]	39･40	Ⅳ層	OZ49	現場採集	イノシシ	中節骨	近位端	?	1	焼	未癒合骨端のみ(若獣)
					イノシシ	中節骨	ほぼ完存	?	1	焼	
					イノシシ	基節骨	近位端	?	1	焼	
					イノシシ	中手/中足骨	遠位端	?	1	焼	
					イノシシ/シカ	種子骨	完存	?	1	焼	
					同定不可(哺乳類)	不明	破片	?	2	焼	イノシシまたはシカ？
					同定不可(哺乳類)	不明	破片	-	167	焼	魚骨なし



図版Ⅵ－３－１　石倉１遺跡出土動物遺体

1．イノシシ中手／中足骨遠位端（試料番号39·40）　2．イノシシ基節骨近位端（39·40）
3．イノシシ中節骨（39·40）　4．イノシシ中節骨近位端（39·40）　5．イノシシ／シカ種子骨（39·40）
6．鳥類指骨（15·26·27）　7．ニシン科尾椎（15）　8．サケ属椎骨破片（26·27）
9．タイ科臼歯（13）　10．タイ科?犬歯（26·27）　11．カレイ科前上顎骨／歯骨（13）

Ⅶ　小括

1　石倉１遺跡の水場遺構について

水場遺構については、堅果類などのアク抜きのための水さらし場について呼ぶ見解（渡辺2000）と、河川や湧水など水がある場所に残されたもの全般について呼ぶ見解がある（佐々木2000）。本遺跡で報告した水場遺構１は、後者の見解に立って記載したものである。大島（2000）は、北海道の水場遺構には、本州的な堅果類の処理加工に関わる作業は想定しにくく、北黄金貝塚や忍路土場遺跡の例から、生業の場であると共に祭祀的な色彩が強いと述べている。

石倉１遺跡の水場遺構１は、①基底面に縄文時代中期中葉のまとまりのある状態の土器が複数出土し、②中位は、グライ化した土壌が堆積し、中期中葉の土器片と共に、すり石類（北海道式石冠、扁平打製石器等）、石皿・台石類が遺棄・廃棄されていた。さらに、ここには後期前葉の土器も含まれる。③上位は、黒色土が堆積し、縄文時代中期中葉と後期前葉の土器が多量に含まれていた。

その変遷をかいつまんで説明すると、①縄文時代中期中葉段階で水場として利用され、②祭祀を含む道具の遺棄・廃棄の場となり、③縄文時代後期前葉段階でも廃棄の場とされたことになる。水場として利用された当初は、ある程度の水流があったとみられ、その底面には砂利が堆積していた。しかし、水流が衰えると周囲の斜面の土壌が崩落して埋没したとみられる。調査後も、水分の滲出で水場斜面が緩み、崩落して埋まってしまった。そのようにある程度埋没した凹みの状態から、黒色土が堆積し始め、完全に埋没したと考えられる。

類似した埋積状態を示すものは、函館市中野B遺跡（福井1999:445）の調査でも確認している。集落に近接した小規模な湧水が日常的に利用され、水流が衰えれば捨て場になったものと推定される。（福井）

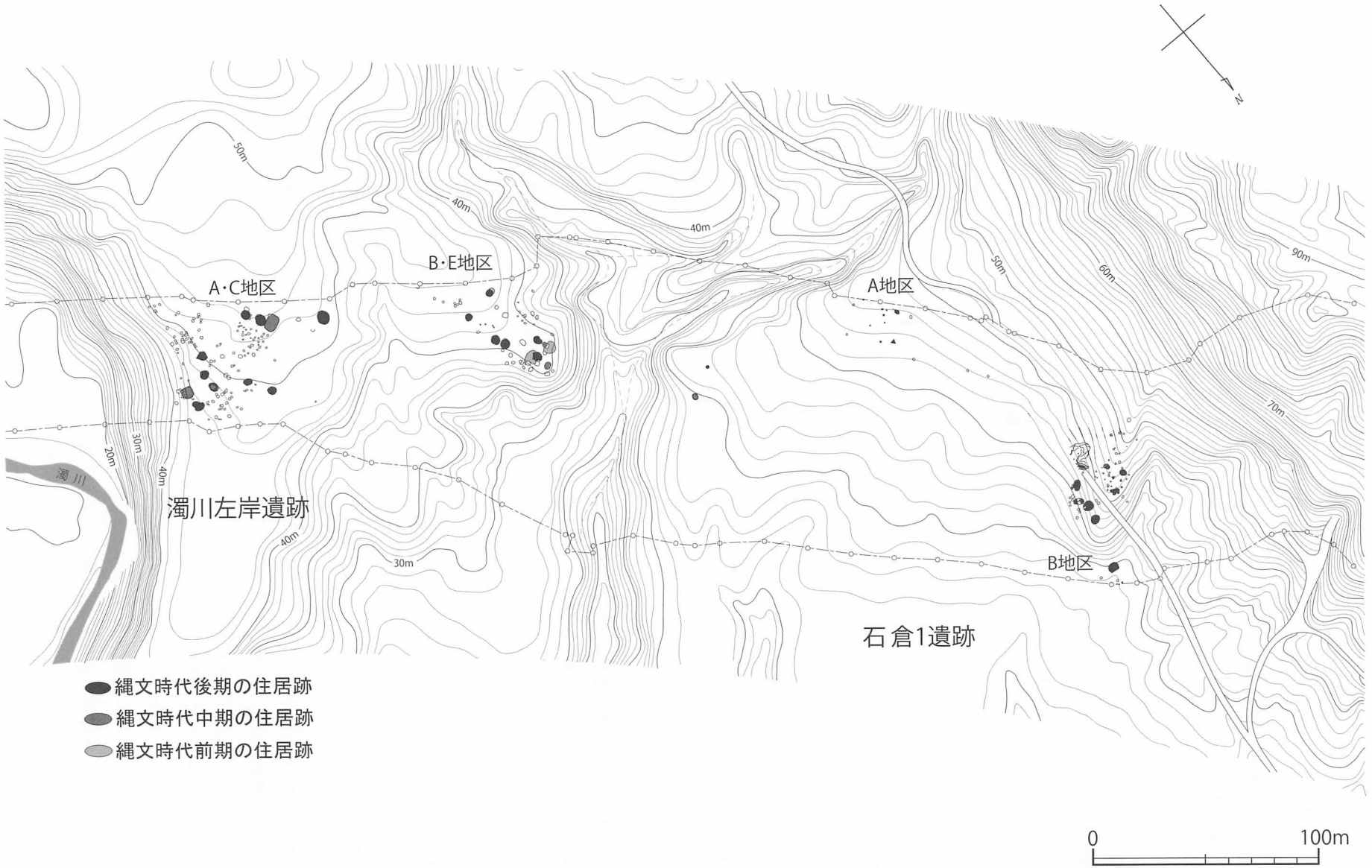
2　石倉１遺跡と濁川左岸遺跡における遺跡の形成

両遺跡は、無名の沢を挟んで隣接する。遺構は、濁川左岸遺跡A・C地区、B・E地区、石倉１遺跡B地区に集中する（図Ⅶ－１）。遺構集中区は、濁川左岸の河岸段丘上、小河川の沢頭に沿うように形成されている。両遺跡の北西側は丘陵斜面、南東側は河川となっており、両側へのこれ以上の遺跡の広がりはないと思われる。南西側、北東側へは広がるとみられ、沢頭の関係からすると100ｍ前後広がる程度と推測できる。なお、石倉１遺跡A地区南西側には遺物集中が認められ、調査区外（図Ⅶ－１で「A地区」の文字がある部分）に遺構集中区が存在するとみられる。

両遺跡を一つのまとまりとして捉えて、遺構数の変化を見ると、前期末葉に住居３軒、土坑、中期中葉に住居７軒、土坑、後期前葉で住居跡23軒、土坑、石囲炉、小ピットとなる。

前期、中期の集落は、１か所に２軒で１組の住居跡が残されている。２軒１組の住居群は、前期では濁川左岸遺跡B地区１か所、中期では濁川左岸遺跡A・B・C地区の各１か所に残る。中期中葉の様相を示す例として、濁川左岸遺跡B地区が挙げられる。ここでは、２軒の住居跡周辺に、土坑10基が住居を囲むように分布している。この土坑は、規模・埋積土の様子などから土坑墓とみなせる。

後期の集落は、１か所に６軒以上の住居跡が残っている。この住居群は、石倉１遺跡B地区、濁川左岸遺跡A・C地区、B・E地区の３か所に残る。この様相は、各地点での集落の存続期間が一定程度長かったためと考えられる。住居跡は、掘り込みが明瞭なものは少ないが、石囲炉と一対の配石をもつところに特徴がある。また、土坑や小ピットも多い。土坑の分布には、特に規則性を見いだせないが、小ピットは住居に取り囲まれた範囲の内部に集中する。この時期の竪穴住居は、掘り込みが浅いこと



図Ⅶ－１　石倉１遺跡と濁川左岸遺跡検出遺構分布

から、生活面で検出できなかった住居の柱穴と考えることも出来る。また、掘立柱建物跡の柱穴の可能性があるが、配列を把握できていない。

このように、石倉１遺跡と濁川左岸遺跡は、ほぼ同時期に似たような遺構群が形成されていることから、ひとまとまりの遺跡と考えることが出来る。（福井）

３　石倉１遺跡出土の剥片石器

（１）アスファルト付着石器

アスファルトの明瞭な付着は、包含層出土の石鏃10点、Rフレイク１点にみられた。石鏃の付着率は80点中の12.5％である。いずれも茎部から体部のかえしがある部分に限られ、矢柄への装着が根バサミではなく、管に挿入する方法であったことが推定される。これらは「完成品」とみられるが、剥離が粗く、平面・側面とも対称性がないものにも、アスファルトが付着しており、必ずしも形態だけでは判断できないようである。

近隣の遺跡では、森町濁川左岸遺跡、石倉３遺跡、鷲の木遺跡、鷲の木４遺跡、鷲の木７遺跡、倉知川右岸遺跡、栗ヶ丘１遺跡、上台１遺跡、上台２遺跡、森川３遺跡、森川４遺跡、御幸町遺跡、オニウシ遺跡、尾白内２遺跡、八雲町山崎４遺跡、栄浜１遺跡、浜松２遺跡、野田生４遺跡、野田生２遺跡、野田生１遺跡、コタン温泉遺跡、浜松２遺跡、浜松５遺跡でアスファルト付着遺物が確認されている。

アスファルトは地表に漏れ出した原油中の揮発成分が失われて残った不揮発性の物質であるため、油田地域で産出するものである。北海道においても渡島半島の木古内・森・八雲、日高～石狩～羽幌～天北にかけて油田や油徴地が知られる。森町域では、鷲の木と濁川盆地に油徴地が知られる。濁川盆地については、賽の河原と呼ばれるいわゆる地獄谷で、鷲の木については桂川の中流でそれぞれ石油の湧出が報告されている。ほかに近隣においてアスファルトが採取された可能性が高いのは八雲町山越の油徴地である。ここでは、明治６～８年に道内の地質調査を行ったお雇い外国人ライマンがアスファルト1.5トンを確認している。また近接する野田生１遺跡の石器のアスファルト付着率は高率で、秋田県や新潟県の油田に近い遺跡のものと遜色ない付着率である。

石倉１遺跡出土石鏃のアスファルト付着率も、道内の例から見ると高率である。付着率10％を超える遺跡は、北海道では渡島半島に限られており、このような実情から判断すると、渡島半島では地元のアスファルトが流通していたものと考えられる（福井2010）。

（２）使用痕のある石器

アスファルト付着以外の石器使用痕としては、光沢、摩耗が目視できた。

光沢は、つまみ付きナイフ１点、スクレイパー28点、Rフレイク８点、Uフレイク６点に観察された。スクレイパー全点96点の29％を占める。光沢は長軸辺の一辺に見られ、刃部形態は、直線的なもの、外湾するものがほとんどである。Rフレイク、Uフレイクに光沢が見られる例も、縦長剥片の長軸辺で、その辺の直線的な部分に確認できる。

同様な例は、八雲町野田生４遺跡（坂本2002:109）で詳細に検討され、ほかに山崎４遺跡（北埋調報162）、山越２遺跡（北埋調報163）、野田生１遺跡（北埋調報183）、野田生２遺跡（立田2002）、森町倉知川右岸遺跡（北埋調報196）でも報告されている。野田生４遺跡の検討では、イネ科植物の刈り取り作業が推定されている。

摩耗は、篦状石器２点、スクレイパー１点で観察された。篦状石器の摩耗は、末端辺から左右縁辺に及んでいる。２点の篦状石器は凸形を呈し、段を境に柄部と刃部に分けられる。その内黒曜石製１

点が、被熱により刃部側の光沢を失っていた。これは柄に装着された状態で、火を受けたものと考えられる。

（3）剥片石器の石材

剥片石器の石材については、頁岩、メノウ、黒曜石、珪化岩、デイサイトなどと特定した。ここでデイサイトとしたものは無斑晶の火成岩で、安山岩、玄武岩の範中に入るかもしれない。また、珪化岩は、よくチャートと誤認されるもの。赤色チャートに似るものを赤色珪化岩、黄褐色を呈するものは褐色珪化岩とした。

剥片石器の石材別点数では、頁岩が521点（75.8%）、メノウ72点（10.5%）、黒曜石49点（7.1%）、珪化岩19点（2.8%）、デイサイト12点（1.7%）などであった。また重量では、頁岩11,320ｇ（60.4%）、メノウ4,320ｇ（23.1%）、デイサイト1,778ｇ（9.5%）、珪化岩614ｇ（3.3%）、黒曜石353ｇ（1.9%）などであった。

剥片の石材別点数では、頁岩が1,668点（47.2%）、黒曜石859点（24.3%）、珪化岩493点（14.0%）、メノウ349点（9.9%）、赤色珪化岩111点（3.1%）などであった。また重量では、頁岩9,632ｇ（56.4%）、メノウ4,895ｇ（28.6%）、デイサイト828ｇ（4.8%）、珪化岩548ｇ（3.2%）、黒曜石544ｇ（3.2%）、赤色珪化岩166ｇ（1.0%）などであった。

以上を大きく見ると、石倉１遺跡の利用石材の割合は、頁岩が主体で６割程度、メノウが２～３割であることが重量で分かる。しかし、点数を見ると、剥片石器では頁岩だけで７割以上となる。一方、剥片では頁岩は５割弱となり、黒曜石、珪化岩の割合が増加している。

１点あたりの重量を、重量/点数で割り出すと、剥片・剥片石器全体では8.5ｇとなる。石材ごとでは、デイサイト約62ｇ、珪質岩約19ｇ、メノウ約22ｇ、頁岩約10ｇ、珪化岩約2.3ｇ、黒曜石約1.0ｇとなる。この数字は、石材供給と、剥離頻度の両者が複合された結果とみられる。石材供給に対し剥離頻度の低いデイサイト、珪質岩、メノウ、石材供給も豊富だが剥離頻度も高い頁岩、珪化岩、石材供給は少ないが剥離頻度は高い黒曜石に大別される。ただし、原石の大きさも考慮すると、黒曜石の剥離頻度は珪化岩と同程度かもしれない。

メノウは、遺跡から近位の海岸で現在でも転石として採集可能である。遺跡に最も近い海岸は、濁川河口付近で、その北西側の海岸では最大30㎝代の礫を採集できる。メノウ礫は、周囲の岩体が浸食された状態となっている。石質の良否という観点では、亀裂や晶洞などが含まれるものから、緻密なものまで認められる。また、同海岸では黒色頁岩や安山岩も採集できる。メノウは、濁川より南東の蛯谷川（森町1960:34）、大工川（谷島2003:17）でも採集できる。濁川河口では白色～透明なメノウが大半であるが、大工川では赤味を持つものが多い。石倉１遺跡出土メノウ剥片は、白色～透明なものが大半である。したがって、産地の中でも、もっとも近在の濁川周辺で採取したものと考えられる。

黒曜石は、赤井川産の小型の亜角礫を持ち込んで、両極技法によって剥離している。したがって、剥片は大半が砕片で、石器素材になりうるものは少なく、両極技法に伴う薄手の剥片、石器刃部形成に関わる剥片が少量ずつ含まれる。（福井）

4　石倉１遺跡出土の礫・礫石器とその石材について

遺跡から出土する石の材質について記載することはかなり難しいことである。しかるべき専門家に頼めばよいことではあるが、礫・礫石器が多く出土する北海道南西部地域にあって、調査から報告までの期間内に出土する全ての石について鑑定を依頼することは現実的ではない。

そこで石材についてできる限り情報が多い形で記載するために、遺跡から出土する石が周囲で採取可能であるのかどうか、またそれがどのような石であるのかを伝えることを念頭にし、整理作業を行なった。

その作業内容、決定した岩石名とその説明を以下順に記すことにする。

（１）発掘時の礫・礫石器の選別

(a) 一次・二次整理

本遺跡での礫・礫石器の扱いについては、Ⅱ章整理の方法、また、Ⅳ章包含層出土石器の項においてすでに述べてある。ここでは整理作業全体を概観しつつ、やや詳細に記す。

遺跡からは多くの礫が出土しているが、人為的な遺物としたものはかなり限られたものである。遺物としたものも、さらに保管にいたるものと、重量と石質を記録して廃棄したものに分けられる。これら分類作業は以下のように行なった。

調査中に出土した礫は、取り上げ時に各調査員が人為的な遺物かどうか判断した。その判断基準は、基盤であるⅥ層中の礫ではないもので、かつ形態から礫石器を想定させる礫である。

水洗して乾燥させた後、詳細な観察を経て礫石器あるいは礫・礫片に分類した。礫石器はこの時点で遺物として整理、保管の対象とした。礫・礫片と分類したもののうち、遺構から出土したものはすべて遺物として扱った。包含層から出土したものについては、被熱するものや、周囲に同様な大きさの礫が集中しているなど有意とみられる点が認められないものについて、重さを量って廃棄した。この廃棄に際し、ハンマーを用いて石を割り、20倍ルーペを用いて鉱物、組織を観察し、石質を判断した。これらをサンプルとして保管し、後の鑑定作業の根拠とした。

(b) 野外・室内での補助作業

こうしてできたサンプルの比較対照とする資料を得るため、遺跡の周辺にあたる八雲町南部から森町北部までの代表的な河川において、形態、石質から礫石器石材となりそうな石を採取した。河川は北から、遊楽部川、野田追川、落部川、濁川、桂川、鳥崎川の６河川である。さらに、遺跡周辺の地質図幅、『濁川』『駒ケ岳』『森町の地質』を参照し、観察結果とあわせ、最も適切とみられる岩種名を決定している。

（２）岩石種解説

本報告で使用した岩石名は、これらの作業を並行しつつ行った結果決定したものである。以下に判断した数が多かったもの、また特徴のあるものについて写真とともに説明する。

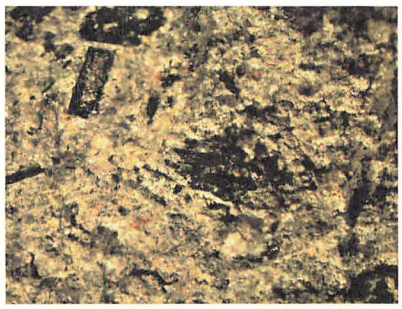
(a) 角閃石安山岩・輝石安山岩・安山岩（写真Ⅶ－２－１～７）

本遺跡において安山岩類としたものは、輝石や角閃石、長石の斑晶鉱物を含み、灰黄色～暗灰色の石基があるもののうち、角閃石、輝石の有色鉱物の割合が見た目で20～30％程度のものである。

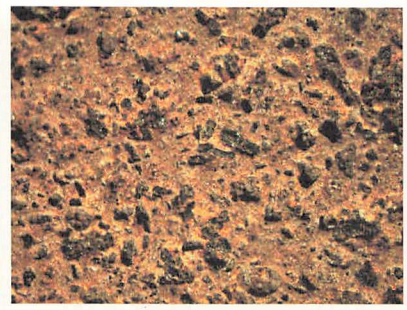
さらに自形～半自形として確認できる有色の斑晶鉱物がある場合、鉱物名を付して「角閃石安山岩」、「輝石安山岩」、どちらかはっきりしないものを「安山岩」とした。

角閃石安山岩：２種類ある。①いわゆる石倉層（濁川カルデラ起源軽石流堆積物）に含まれるもので、黒く明瞭に輝く新鮮な角閃石の自形の結晶を伴うものである。色調は明灰色～灰白色で、流理構造が認められるもの、やや軽石質のものなど多様な様相をみせている（写真１）。②角閃石の斑晶がや

図版－２

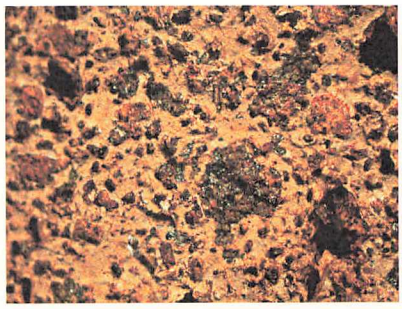


1　角閃石安山岩
石倉漁港（濁川河口採集）

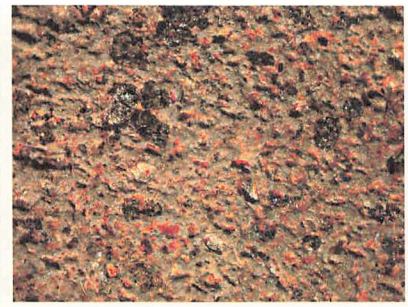


2　角閃石安山岩
扁平打製石器（図Ⅳ－49－66）

3　角閃石安山岩
北海道式石冠（図Ⅴ－２－12－135）

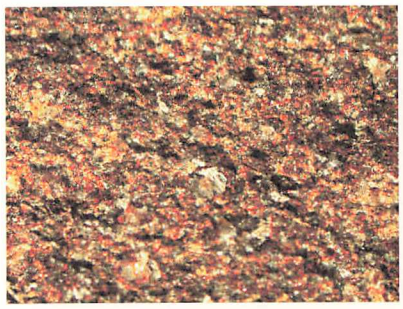


4　輝石安山岩
たたき石（図Ⅴ－２－10－113）

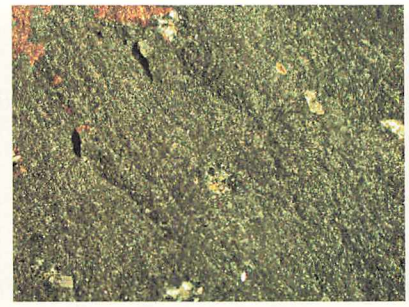


5　輝石安山岩
石倉漁港（濁川河口採集）

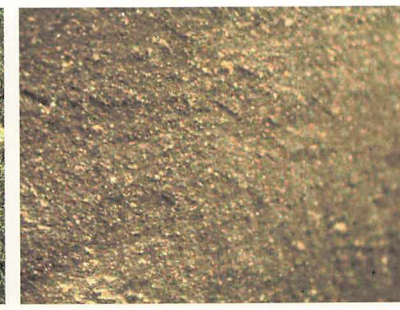
6　安山岩
北海道式石冠（図Ⅴ－２－13－138）



7　安山岩
石倉漁港（濁川河口採集）

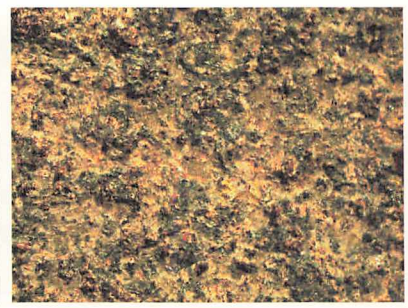


8　無斑晶質玄武岩
原石（C－50－18）



9　無斑晶質玄武岩
たたき石（図Ⅴ－２－11－118）

10　無斑晶質玄武岩？
桂川河口採集



11　花崗閃緑岩
扁平打製石器（図Ⅴ－２－12－132）

12　花崗閃緑岩
遊楽部川河口採集

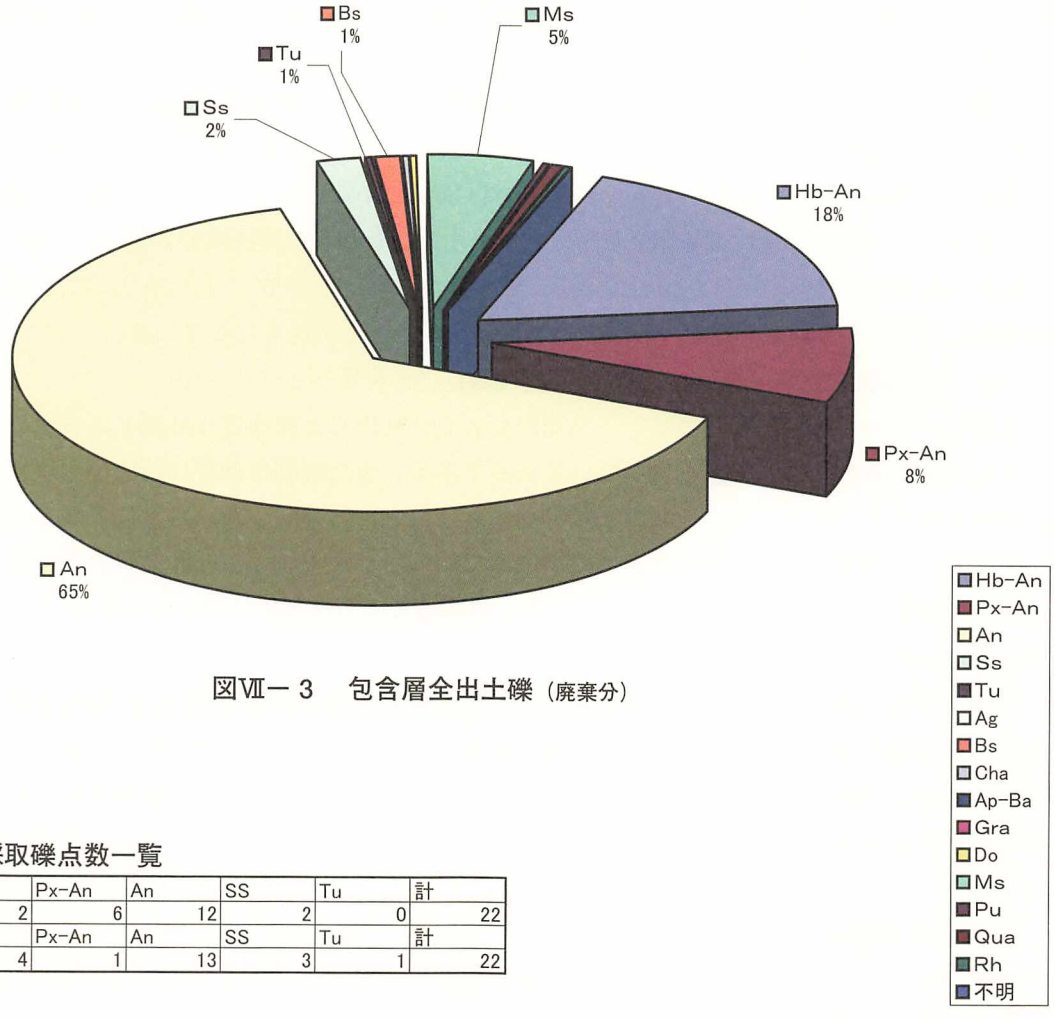
撮影機材：顕微鏡＝ニコン・ＳＭＺ1000、カメラ＝ニコン・Ｃｏｏｌｐｉｘ９９５
倍率10倍にて撮影した

図Ⅶ－２　岩石写真

表Ⅶ－１　包含層出土礫石材別重量一覧（廃棄分）

石材名	角閃石安山岩 Hb-An	輝石安山岩 Px-An	安山岩 An	砂岩 Ss	凝灰岩 Tu	めのう Ag	玄武岩 Bs	チャート Cha	無斑晶質玄武岩 Ap-Ba	花崗閃緑岩 Gra	粗粒玄武岩 Do	泥岩 Ms	軽石 Pu	珪岩 Qua	流紋岩 Rh	不明	合計
個数	1174	513	4262	128	33	2	73	1	14	3	2	324	17	25	24	3	6598
重量	828.70	853.40	1535.81	57.50	2.30	0.20	46.90	0.40	40.30	0.30	6.60	27.40	2.90	2.90	66.80	12.60	1802.91
1点あたり重量(Kg)	0.705877	1.663548	0.36035	0.449219	0.069697	0.1	0.642466	0.4	2.878571	0.1	3.3	0.084568	0.170588	0.116	2.783333	4.2	0.273251

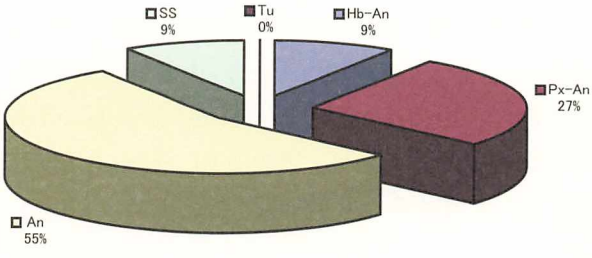
0.1Kg以下切り上げにて算出



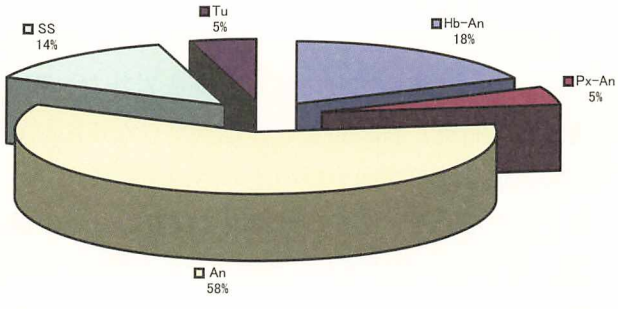
図Ⅶ－３　包含層全出土礫（廃棄分）

表Ⅶ－２　採取礫点数一覧

石材略称	Hb-An	Px-An	An	SS	Tu	計
Ⅵc～e層	2	6	12	2	0	22
石材略称	Hb-An	Px-An	An	SS	Tu	計
濁川河口	4	1	13	3	1	22



図Ⅶ－４　Ⅳｃ～ｅ層採取礫



図Ⅶ－５　濁川河口採取礫

や風化し深緑色で、石基の部分がやや褐色気味の灰色を呈するもの。①よりやや緻密な印象があるものである（写真２、３）。角閃石安山岩は礫としても石器としても多く出土しているが、石器としては、①は主に石皿に多く、②は扁平打製石器、北海道式石冠、たたき石など、小型の礫石器に使用されている。

輝石安山岩：主に２種（写真４、５）がある。①石基は灰黄色を呈し、やや多孔質で、輝石のほか長石の斑晶も認められるもの（写真４）。②は、①に比しやや緻密であるが、石基の状態、確認できる鉱物も同じである（写真５）。これら輝石安山岩は①はたたき石、北海道式石冠など小型の礫石器に、②は石皿など大きな礫石器に利用されている。

地質図によると、黒松内層を形成する狗神岳集塊岩の中に、普通輝石安山岩、紫蘇輝石安山岩が含まれている。遺跡周囲で容易に採取可能であることはこの層を起源とするものの可能性が高い。

安山岩：多様な種類がある。輝石と角閃石は区別がつかないことが多く、不明な場合ここに分類した。また、一次整理に際し石基部分が凝灰質を呈することから、凝灰質砂岩としていた一群があった。しかしその後の検討の結果、安山岩であることがわかった（写真６、７）※１。これらは長石の斑晶を明瞭に観察できる場合が多く、石基の色調は褐色がかった灰色を呈している。

(c) 無斑晶質玄武岩（無斑晶質玄武岩質安山岩）（写真Ⅶ－２－８～10）

本遺跡から出土しているものは、一見泥岩もしくは粘板岩と見間違う外観であるが、ときおり長石とみられる白色の鉱物の斑晶を含んでいるものである。また新鮮な部分は暗灰色を呈するが、風化面は流理構造がみられる。このことから無斑晶に近い火成岩と判断した。さらに外観が近畿から中国・四国地方の石器素材であるサヌカイトに類似している。サヌカイトは非顕晶質古銅輝石安山岩であるが、全岩組成はデイサイト質であることから、当初はこの石をデイサイトとみなしていたが、「無斑晶質玄武岩」とした。※２

なお地質図には本遺跡の基盤となる新第三紀層、狗神岳集塊岩層の中に、灰黒色を呈する凝灰質のガラス質輝石安山岩質集塊岩、という記載がある。この石はおそらく写真10の石とみられる。本遺跡出土のものより緻密堅硬であり、より光沢があるが、鏡下ではよく似た印象があるものである。関連する可能性があるので、参考として掲載しておいた。石器としては、たたき石、原石が多く出土している。

(e) 花崗閃緑岩（写真Ⅶ－２－11、12）

遺跡から出土するものは、白地に鮮やかな緑を配する優美な外観をしており、よく目を引くものである。完晶質で暗緑色の角閃石とみられる鉱物が認められる。石器としてはたたき石、扁平打製石器、加工痕のある礫がある。

地質図幅によると、周囲では八雲町野田追川上流に中新世末期に相当する花崗閃緑岩がみられる。新鮮なものは緻密堅硬であり、深成岩特有の粗粒な鉱物の集合体からできている。大部分が黒雲母、角閃石、石英、斜長石などの鉱物からなる閃緑岩質のもので、中には、黒雲母、石英、斜長石、正長石などからなる花崗岩質のものもみられるという。これに相当するものは、遊楽部川、野田追川で採取することができた。遊楽部川で採取したものが、外観上、本遺跡から出土するものに近い（写真11、12）。花崗閃緑岩はほかに八雲、せたな町境の遊楽部岳にドームが形成されているほか、八雲町立岩の地域に分布しているが、どちらにしても遺跡からやや離れたところから運ばれた可能性が高いものである。

（３）出土礫、採集礫の種類

廃棄した礫の石材別の点数、重量を図、表に示した（図Ⅶ－３、表Ⅶ－１）。さらに参考資料として、調査区内のⅥc～e層の段丘堆積物、遺跡周囲にあたる濁川河口付近の２地点において採集した礫石器に類する礫22点についても同様に示した（表Ⅶ－２、図Ⅶ－４、５）。Ⅵc～e層で得られた礫は輝石安山岩が多い。

以上、石材について述べた。なお全岩化学分析、薄片による鉱物同定は行なっていないため、岩石名称もここでは仮のものであることをお断りしておく。

（４）石倉１遺跡出土礫石器について

本遺跡出土の礫石器のいくつかについて、その特徴と石材との関係について記載する。

(a) たたき石

たたき石は217点出土している。石材は、安山岩が最多で116点（53.5%）、以下に角閃石安山岩（21.7%）、輝石安山岩（9.7%）、無斑晶質玄武岩16点（7.4%）であり、他の石器に比し無斑晶質玄武岩が高率で使われている。

無斑晶質玄武岩製のたたき石16点のうち、９点は拳大～拳よりやや小さい大きさで、円磨した歪な素材を用い、端部周縁を敲打するものである。地区別の内訳はA地区３点、B地区６点である。なかでもA地区から出土するものはやや大きく、扁平な礫を使用するものである。B地区は全て５～８㎝程度の歪な球状を呈する小型のもので、遺構IH－５、SP－69からも各１点出土している（図Ⅳ－６－23、Ⅳ－32－38）。このような小型のものは、出土地点が縄文時代後期前葉の土器の分布域と重なることから、同時期のものである可能性が高い。

(b) 扁平打製石器

扁平打製石器は５形態に分類した。A概ね半円状に打ち欠く狭義のもの、B礫の剥片を素材とするもの、C半割礫素材、D礫をほとんどそのまま使用するもの、E破片で判断不可能のものである。形態と石材との相関関係は認められないが、安山岩、角閃石安山岩が全体の83%を占めており、遺跡周辺で得やすい火成岩を使用する実態がみてとれる。

扁平打製石器について、高橋（1971）はすり面の幅に注目し、高橋Ⅱ類（本遺跡の形態A）：周縁を加工する狭義のものから、高橋Ⅲ類（本遺跡の形態Dの一部）：両端を打ち欠いた単純なものへ変遷したこと、北海道式石冠と供伴する扁平打製石器はすり面の幅が狭くなることを指摘している。またその使用期間については縄文時代後期前葉余市式まで継続するとの見解を示した。濁川左岸遺跡の調査では、縄文時代中期中葉ノダップⅡ式期にいくつかの転用事例があること、また八雲町浜松５遺跡の後期初頭トリサキ式との供伴例などから、縄文時代後期前葉まで使われる可能性が高いことが指摘されている（大泰司2003）。いずれにしても扁平打製石器の使用期間は、いまだ明確ではない。

本遺跡の土器との供伴事例は３点ある。大津式の土器集中に伴い、形態Dの１点が破片として出土している（図Ⅴ－２－12－131）。また、土坑IP－22においてはC・D形態各１点が見晴町式土器とともに一括出土している（図Ⅳ－19－３、４）。包含層の分布状況からは供伴土器型式を指摘できるようなはっきりとした分布の偏りは認められない。

なお、近隣では得られない、花崗閃緑岩製のものが１点出土している（図Ⅴ－２－12－132）。このような石材のものも少数混じることを明記しておく。

(c) 北海道式石冠

北海道式石冠は、29点が出土している。石材のうち最も高い割合であるのは輝石安山岩（11点、37.9%）、ついで角閃石安山岩と安山岩（ 8 点、27.6%）である。安山岩類がほぼ全てを占めるが、特徴としてやや多孔質な輝石安山岩を選択的に使用していたとみられる。

分布状況では、水場遺構から 4 点、やや近接したN74～78区から 4 点出土している。サイベ沢Ⅶ～見晴町式の土器の集中区と重なる傾向はあるが、A地区からも出土している。

また、本遺跡においては「ミニチュア」としたものがこれまでの報告（北埋調報247）に 3 点、今回は 3 点の計 6 点出土している。このうち 4 点は水場遺構とその周囲12m以内に集中しており、水場遺構に関係する遺物と捉えることもできる。図化した 2 点は敲打による「持ち手」も作られるうえ、安山岩を使用しており、大きさが 7 ～ 8 ㎝と小ぶりであるほかは実用と変わらないものである。小型の北海道式石冠がこのように一地点に集中する例はまれである。

(d) 石皿・台石

石皿・台石は遺構出土、破片も含め103点が出土している。石材は安山岩類が突出しており、角閃石安山岩が52点（50.0%）、安山岩が24点（23.3%）、輝石安山岩が15点（14.6%）である。これらはいずれもⅥ層中、濁川河口でみられる石材である。

石皿について一点指摘しておきたい。IP－21出土の石皿（図Ⅳ－18－ 4 ）と水場遺構出土のもの（図Ⅳ－51－75）は、大きさ、形状と使用する部位が共通しているものである。同様なものは七飯町鳴川右岸遺跡（北埋調報112、図Ⅲ－61－76）にもある。いずれも縄文時代中期前半サイベ沢Ⅶ～見晴町式の土器が出土している遺跡であり、当該期の石皿の一形態である可能性がある。

※１　アースサイエンス株式会社、加藤孝幸氏の指摘による。台帳上は訂正してあるが、遺物カードは凝灰質砂岩（T.SS）そのままの場合がある。ここに記し全て訂正しておきたい。

※２　この石（図Ⅶ－２－８）を加藤孝幸氏に見ていただいたところ、以下のようにご教授を受けた。「この石は肉眼鑑定上、無斑晶質玄武岩である。また森町鷲ノ木４遺跡の調査時点では頁岩と誤認していた。さらに、鷲ノ木４遺跡では全岩化学分析を行なっており、SiO_2が55.3～55.8%であるため組成上は玄武岩ではなく安山岩にあたり、また他の一般的な安山岩とも区別する意味で、流理の発達した無斑晶質玄武岩質安山岩とすることが適当である。鷲ノ木４遺跡（森町　2006）の報告中、別冊P40、表Ⅳ－12中のK２－７、717がこれに相当する。」（私信）　（立田）

表Ⅶ－３　石材別礫石器点数一覧

石材（略称）／器種名	メノウ Ag	安山岩 An	無斑晶質玄武岩 Ap-Ba	チャート Ch	花崗閃緑岩 Gra	藍閃石片岩 Gl-Sc	緑色片岩 Gr-Sc	緑色凝灰岩 G-Tu	角閃石安山岩 Hb-An	泥岩 MS	軽石 Pu	輝石安山岩 Px-An	珪岩 Qua	流紋岩 Rh	珪化岩 S. W	片岩 Sc	頁岩 Sh	粘板岩 Sl	砂岩 SS	凝灰岩 Tu	溶結凝灰岩 W. Tu	不明	総計
石斧						2	20	4(2)								3							29(2)
石斧片						1	7	1															9
石斧破片						1	12																13
石斧細片						4	7									1							12
石のみ																1							1
たたき石		111(12)	15(3)		1				44(2)		2(1)	19(2)						1	3	4		4(1)	204(21)
たたき石片		5	1						3			2							2				13
すり石		4(1)										1							2				7(1)
すり石片		1(1)																					1(1)
北海道式石冠		7(1)	1						8(1)			5(1)								1			22(3)
北海道式石冠片		1										6(2)											7(2)
扁平打製石器		46(16)	1(1)		1				17(6)			6(2)							1				72(25)
扁平打製石器片		16(2)	1						6(1)			4		1(1)						1			29(4)
砥石									1		4									3	1		9
加工痕のある礫		12(1)	1		2(2)				2			2							2(1)	2			23(4)
加工痕のある礫片		1																					1
石皿		4(1)	2						12(6)			4(3)											22(10)
石皿・台石									2														2
石皿片		6							10(2)			3(1)								4		1	24(3)
台石		9(3)	1						14(4)			6(2)								1		2	33(9)
台石片		5(1)							14(3)			2							1				22(4)
原石	4(1)		21										1		1		1						28(1)
石製品											2												2
石製品片											1												1
有孔自然石		4							1											3			8
礫（遺構分のみ）		70(70)	2(2)	3(3)					36(36)	6(6)	6(6)	17(17)						1(1)	10(10)	5(5)			156(156)
礫片（遺構分のみ）		11(11)	2(2)						7(7)	1(1)		4(4)								1(1)			26(26)
総計	4(1)	313(120)	48(8)	3(3)	4(2)	8	46	5(2)	177(68)	7(7)	15(7)	81(34)	1	1(1)	1	5	1	2(1)	21(11)	24(6)	1	7(1)	776(272)

（　）は遺構出土点数

5　石倉１遺跡の放射性炭素年代測定について

７点の炭化材、炭化クルミについて放射性炭素年代測定をおこなった。

土坑IP－51は、小型のフラスコ状土坑で、周囲の遺物や、調査区内の他のフラスコ状土坑の出土遺物から縄文時代中期中葉の時期と推定された。そこで、覆土出土の炭化材を測定したところ、4970～4849cal.B.P（PLD－12080）の測定値が得られた。これは、サイベ沢Ⅶ式～見晴町式期に相当し、調査所見と矛盾はない。

土坑IP－56、竪穴住居跡IH－６、IH－７は、いずれも出土遺物から縄文時代後期前葉天祐寺式～涌元式の時期と推定された。各遺構出土の測定値は、IP－56覆土出土炭化材で、4181～4076cal.B.P（PLD12081）、IH－６炉跡出土炭化材で、4000～3865cal.B.P（PLD12076）、IH－７炉跡出土炭化材で4094～3971cal.B.P（PLD12077）であった。測定値は4180～3840 cal.B.Pの幅を持つものの、調査所見と整合的である。

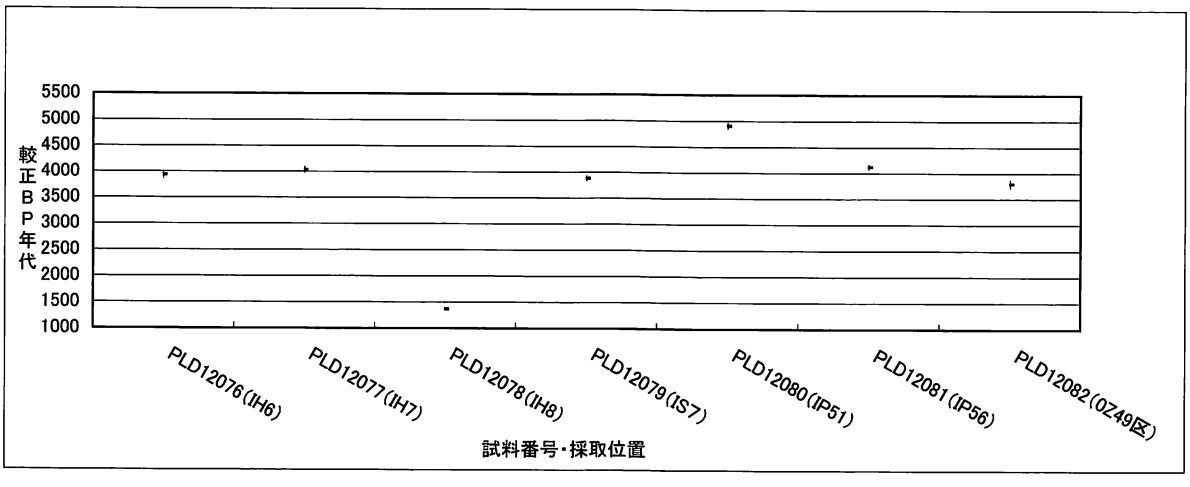
石囲炉IS－７、フレイク集中FC－５骨含土は、出土遺物から判断して縄文時代後期前葉大津式の時期と推定された。測定された年代値は、IS－７出土炭化クルミで、3934～3837cal.B.P（PLD12079）、FC－５骨含土出土炭化クルミで、3880～3719cal.B.P（PLD12082）であった。この年代値は、概ねトリサキ式～大津式の時期を示すと考えられる。

竪穴住居跡IH－８は、出土遺物から縄文時代後期前葉の時期と考えられた。そこで、炉跡出土炭化材を測定したが、610～554cal.B.P（PLD12078）の測定値が測定された。試料は炉跡から直接採取した炭化材であるが、調査所見と測定値は整合的でない。しかも、測定値が示す時期であるアイヌ文化期の遺物も、同地点の上位層で検出しておらず、その由来は不明といわざるを得ない。　（福井）

6　石倉１遺跡出土の植物種実について

浮遊水洗選別を行った土壌の内、竪穴式住居跡IH－８覆土、IH－９、HF－１、石囲い炉IS－３、IS－７、焼土IF－１、フレイク集中FC－２、FC－３、FC－５から採取した土壌において炭化種実が検出された。同定の結果、オニグルミ、キハダ、ミズキ、ブドウ属のほか、トチノキ?の子葉、ウルシ属が確認された。オニグルミ、キハダ、ミズキ、ブドウ属は、多くの遺跡でその出土が報告される。

一方、トチノキは、出土例が少ない。渡島半島では、ほかに縄文時代中期後葉の七飯町上藤城７遺跡、函館市大船C遺跡、続縄文時代の七飯町大中山５遺跡、中世・近世の上ノ国町勝山館跡で出土している（山田・柴内1987）。また、子葉状態で炭化する可能性を持つ調理方法でないせいか、各遺跡での出土点数も少ない。



図Ⅶ－６　石倉１遺跡放射性炭素年代測定値一覧

ウルシ属も、出土例、点数とも多くない。渡島半島では、ほかに縄文時代早期の函館市中野B遺跡、豊崎O遺跡、前期の濁川左岸遺跡、前期・中期の長万部町花岡 2 遺跡、中期の函館市大船C遺跡、北斗市三ツ石 2 遺跡、八雲町山崎 4 遺跡、前期～後期の七飯町鳴川右岸遺跡、森町三次郎川右岸遺跡、後期の函館市臼尻C遺跡、臼尻小学校遺跡、続縄文時代の北斗市茂別遺跡、森町三次郎川右岸遺跡、擦文文化期の松前町札前遺跡で出土している（山田2001）。北海道で類似した形態を持つ種子は、ヤマウルシ、ツタウルシ、ヌルデがあるとされる（椿坂2006）。ただし、これらからウルシ塗りに使用される上質のウルシ液は採取できないとされる。上記の出土例の内、臼尻小学校遺跡からは、ヤマウルシかツタウルシと考えられるウルシ属のほか、ウルシが確認されている（吉川2006）。（福井）

7　石倉 1 遺跡出土の動物遺存体

今回の調査では、竪穴住居跡、フレイク集中、石囲炉、骨片集中（フレイク集中）から焼けた骨片が確認された。焼けて小片であることから、現地で採集したほか、土壌を水洗選別して、回収に努めた。

分析結果は、Ⅶ章に載せた。その中で、イノシシの出土が目を引く。イノシシは、北海道に自然分布しない哺乳類であるので、本州から持ち込まれたものと推定される。北海道におけるイノシシ出土例は、白老町虎杖浜 2 遺跡（高橋・太子2001）で前期中葉円筒下層a式期の例があるとされたほかは、後期中葉以降の時期とされていた。虎杖浜 2 遺跡の出土例は、全て被熱し白色化したもので、橈骨、第三or四中手・中足骨、基節骨の破片となっている。そのような中で、今回は後期前葉大津式期のものが検出された。石倉 1 遺跡の出土例も、全て被熱し白色化したもので、中手・中足骨、中節骨、基節骨で、基節骨が完形のほかは、破片となっていた。後期前葉からイノシシが出土した例として、森町三次郎川右岸遺跡（金子2006）で、涌元式期の被熱した右側下顎骨が出土している。これは、生後 1 歳前後の個体とされる。ほかに、森町鷲ノ木 4 遺跡（高橋2006）では大津式期の幼獣の中節骨が出土している。また、現在整理中であるが、北斗市館野遺跡でも出土している。このように、最近のイノシシの出土例が、貝塚の調査ではなく、焼土などから回収された被熱した骨の分析によって増加していることは重要である。ヒグマも貝塚では出土が少ないが、焼骨としての出土は少なくない。したがって、骨を焼く、もしくは骨が焼けるということが、特定の種への儀礼行為の結果を示しているとも考えられる。

魚類では、タイ科の出土に注目したい。タイ科の中でもマダイ亜科に属するマダイ、チダイの分布は、現在は最北が青森県竜飛岬までで、北海道沿岸に生息しないとされる。縄文時代の噴火湾沿岸での出土例を見ると、前期、後期では出土しているが、晩期以降近世に至る遺跡では出土が確認されない。

噴火湾沿岸遺跡出土動物遺存体の一覧を表Ⅶ－ 1 にしめした。貝塚が残されなかった遺跡と貝塚が残された遺跡で大きく異なるのは、貝類出土の有無である（表では貝類については省いた）。また、貝塚の残されなかった遺跡では、鳥類が種同定にまで至らない。魚類、哺乳類は、貝塚が残された遺跡、貝塚が残されなかった遺跡とで、同定される種の数に差はあるものの、出土傾向はほとんど同じと考えられる。魚類は、ニシン類、サケ・マス類、ヒラメ・カレイ類、カサゴ類、アイナメ類、タラ類、タイ類、サメ類などが各遺跡で検出されている。哺乳類は、エゾシカ、オットセイが多い。

地域は異なるものの、貝塚が検出された釧路町天寧 1 遺跡（福井2008）において、貝塚、盛土遺構から出土した動物遺存体の同定結果を、焼けの有無で比較したことがある。その結果、同一遺跡、同一遺構であっても、その組成に大きな開きがでた。したがって、貝塚が存在しない以上、焼骨の種組成から漁撈や狩猟の盛衰、季節性、活動領域などを推定するには、注意が必要と考えられる。（福井）

表Ⅶ－４　噴火湾沿岸遺跡出土動物遺存体一覧

遺存状況	町名	遺跡名	遺構種別	時期	魚類	ホシザメ	ツノザメ	ネズミザメ類	ホオジロザメ	アオザメ	エイ類	ニシン	ウグイ類	コイ科	サケ・マス類	タイ類	タラ類	アイナメ類	ホッケ類	ブリ	スズキ類	ヒラメ類	カレイ類	カジカ類	カサゴ類	フグ類	イワシ類	ハゼ類	ナガズカ類	カツオ類	マグロ類	サバ	ボラ類	カジキ類	ウミガメ類
焼骨	函館市	八木A遺跡	焼土など	前期中葉～後葉		*			*	*	*											*													
	函館市	ハマナス野遺跡	焼土など	前期	*																														
	八雲町	栄浜1遺跡	焼土など	前期末葉																															*
	森町	森川3遺跡	焼土など	前期末葉	*																														
	森町	濁川左岸遺跡	焼土など	中期前半								*			*	*																			
	森町	濁川左岸遺跡	焼土など	中期中葉								*	*		*	*	*	*	*	*		*	*												
	森町	三次郎川右岸遺跡	焼土など	中期中葉	*																														
	森町	石倉2遺跡	焼土など	中期後半																															
	豊浦町	高岡1遺跡	焼土など	中期後半																															
	八雲町	栄浜1遺跡	焼土など	中期後半	*				*																										
	函館市	臼尻B遺跡	焼土など	中期後半													*					*		*											
	函館市	大船C遺跡	焼土など	中期後半								*			*		*	*													*				
	森町	鷲ノ木遺跡	焼土など	後期初頭								*																							
	森町	石倉1遺跡	焼土など	後期前葉							*	*			*	*							*												
	八雲町	栄浜1遺跡	焼土など	後期前葉					*			*			*													*							
	森町	濁川左岸遺跡	焼土など	後期前葉								*			*	*								*			*								
	森町	三次郎川右岸遺跡	焼土など	後期前葉				*				*						*					*												
	森町	鷲ノ木遺跡	焼土など	後期前葉								*																							
	森町	倉知川右岸遺跡	焼土など	後期前葉								*			*																				
	森町	鷲ノ木4遺跡	焼土など	後期前葉								*			*																				
	森町	鷲ノ木4遺跡	焼土など	後期中葉					*	*		*		*									*												
	森町	鷲ノ木遺跡	焼土など	後期中葉																															
	豊浦町	東雲遺跡	焼土など	後期中葉											*																				
	森町	鷲ノ木遺跡	焼土など	後期								*			*	*																			
	森町	鷲ノ木遺跡	焼土など	後期～晩期																															
	森町	鷲ノ木4遺跡	焼土など	晩期																															
	森町	鷲ノ木遺跡	焼土など	縄文恵山式																															
	森町	尾白内遺跡	焼土など	縄文恵山式											*							*	*												
	森町	鷲ノ木4遺跡	焼土など	縄文恵山式								*			*																				
	森町	三次郎川右岸遺跡	焼土など	縄文恵山式	*																														
	森町	森川3遺跡	焼土など	縄文恵山式	*	*						*	*		*		*	*			*	*	*			*									
	森町	森川3遺跡	焼土など	近世	*							*	*		*		*		*		*	*													
貝塚出土骨	伊達市	北黄金	貝塚	前期							○				+		+			+	○	○	+		○						○				
	八雲町	栄浜1遺跡	貝塚	中期前半	*																														
	八雲町	栄浜1遺跡	貝塚	中期後半																															
	長万部町	静狩遺跡	貝塚	後期前葉																															
	伊達市	ポンマ	貝塚	後期							◎	◎	○		○		+	○	○	+		○	○	+	◎				+		+	◎			
	洞爺湖町	高砂	貝塚	後期							○	◎	+		○	+	◎	+			+	+	◎	+	◎						+				*
	洞爺湖町	入江	貝塚	後期		*	*					◎			*	*				*	◎	○	*		○	*				*	○			+	*
	八雲町	コタン温泉	貝塚	後期							+	◎	◎		○	+	+	◎	+	+	+	+	◎	+	○	+			◎		+	+	+	+	
	伊達市	有珠善光寺2	貝塚	後期後葉～晩期初頭			*			*	○	◎	+		○	+	+	◎	+			+	○	◎	+	+		+			○			+	*
	函館市	美呂泊遺跡	貝塚	続縄文																															
	伊達市	南有珠６	貝塚	続縄文							+	◎	+		○		○		+		+		◎	+	◎						+			+	
	豊浦町	小幌	貝塚	擦文							+								+			+	+	+	+						+			+	

遺存状況	町名	遺跡名	遺構種別	時期	鳥類	アホウドリ類	カモ類	ハクチョウ類	アビ類	ウ類	ウミガラス類	カラス類	ミズナギドリ類	カイツブリ類	カモメ類	ワシ類	ツル類	スズメ類	獣類	ネズミ類	中型獣類	ウサギ	イヌ	カワウソ	テン	エゾオオカミ	キタキツネ	エゾタヌキ	エゾシカ	ヒグマ	イノシシ	海獣類	イルカ類	クジラ類	オットセイ	アシカ	トド	アザラシ類
焼骨	函館市	八木A遺跡	焼土など	前期中葉～後葉																								*	◎			◎			○			*
	函館市	ハマナス野遺跡	焼土など	前期																														*				
	八雲町	栄浜1遺跡	焼土など	前期末葉																																		
	森町	森川3遺跡	焼土など	前期末葉																																		
	森町	濁川左岸遺跡	焼土など	中期前半																	*																	
	森町	濁川左岸遺跡	焼土など	中期中葉	*													*	*																			
	森町	三次郎川右岸遺跡	焼土など	中期中葉																									*									
	森町	石倉2遺跡	焼土など	中期後半																													*					
	豊浦町	高岡1遺跡	焼土など	中期後半															*																			
	八雲町	栄浜1遺跡	焼土など	中期後半	*														*										*			○	○	*	*			
	函館市	臼尻B遺跡	焼土など	中期後半																															*			
	函館市	大船C遺跡	焼土など	中期後半																														*	*			
	森町	鷲ノ木遺跡	焼土など	後期初頭																							*											
	森町	石倉1遺跡	焼土など	後期前葉	*														*												*							
	八雲町	栄浜1遺跡	焼土など	後期前葉	*																																	
	森町	濁川左岸遺跡	焼土など	後期前葉															*																			
	森町	三次郎川右岸遺跡	焼土など	後期前葉	*																								*		*							
	森町	鷲ノ木遺跡	焼土など	後期前葉															*																			
	森町	倉知川右岸遺跡	焼土など	後期前葉	*																																	
	森町	鷲ノ木4遺跡	焼土など	後期前葉																									*		*							
	森町	鷲ノ木4遺跡	焼土など	後期中葉															*	*									*	*								
	森町	鷲ノ木遺跡	焼土など	後期中葉																									*									
	豊浦町	東雲遺跡	焼土など	後期中葉																																		
	森町	鷲ノ木遺跡	焼土など	後期																										*								
	森町	鷲ノ木遺跡	焼土など	後期～晩期																									*		*							
	森町	鷲ノ木4遺跡	焼土など	晩期																		*	*				*	*	*	*		*						
	森町	鷲ノ木遺跡	焼土など	縄文恵山式																			*						*	*	*							
	森町	尾白内遺跡	焼土など	縄文恵山式																									*				*	*				
	森町	鷲ノ木4遺跡	焼土など	縄文恵山式																									*	*	*							
	森町	三次郎川右岸遺跡	焼土など	縄文恵山式																									*									
	森町	森川3遺跡	焼土など	縄文恵山式	*						*							*	*	*							*						*	*					
	森町	森川3遺跡	焼土など	近世	*													*	*		*						*		*				*						
貝塚出土骨	伊達市	北黄金	貝塚	前期																									○				3	+	50	2	1	
	八雲町	栄浜1遺跡	貝塚	中期前半	*																												*	*				
	八雲町	栄浜1遺跡	貝塚	中期後半	*																												*	*	*			
	長万部町	静狩遺跡	貝塚	後期前葉																																		
	伊達市	ポンマ	貝塚	後期																									4				1		8	3	0	
	洞爺湖町	高砂	貝塚	後期			*			*		*	*													*	*		5	*			○	+	10	1	1	
	洞爺湖町	入江	貝塚	後期		*		*		*	*	*	*			*	*			*		*	*	*	*	*	*		49	*	*		13	+	14	2	4	*
	八雲町	コタン温泉	貝塚	後期		◎	○	*	○	*	*	*	*	*	*	*						*	○	*	*		*	*	23	*			6	3	94	4	4	16
	伊達市	有珠善光寺2	貝塚	後期後葉～晩期初頭		*				*	*					*							*	*			*		8	*			+	+	16	0	1	
	函館市	美呂泊遺跡	貝塚	続縄文																																		
	伊達市	南有珠６	貝塚	続縄文																									4				3	1	87	0	1	
	豊浦町	小幌	貝塚	擦文																									+				+		251	0	0	+

＊数字は最小個体数を示す。

8　切断壷形土器について

B地区の包含層（Y80区）から小型の壷形土器が出土した（口絵４、図Ⅴ－１－45－156）。この土器に類するものは主に東北地方北部の縄文時代中期末葉から後期前葉の遺跡から出土し、その特徴から「切断壷形土器」（葛西1974、葛西・小幡2003）、あるいは「切断蓋付土器」（成田1986・1999）等と呼称されている。この土器の最大の特徴は、焼成前つまりは生乾きの段階で文字通り土器を上下に切り離し、二分していることである。さらに使用に際して、上下を接合している点も特徴のひとつである。そして切断される器種は壷形に限られる。

このような特色ある土器は北海道内ではこれまで①函館市戸井貝塚、②函館市浜町A遺跡、③函館市石倉貝塚、④北斗市矢不来２遺跡、⑤森町濁川左岸遺跡A地区の５遺跡から破片資料を含め10個体が出土している。以下、道内での類例を紹介することとする。なお、葛西（2003）の集成・分類を参考に、切り離された上部を「上体」、下部を「下体」と呼称する。

石倉１遺跡出土資料は上体と下体が密着し横倒しの状態で出土した（図版31）。土器内部には土が詰まっていた。現存する部分で高さ3.9㎝、底面はやや歪な円形で径は1.9㎝である。胴部のほぼ中央に最大径があるが（4.6㎝）、これは底面に対し水平ではなく、斜めになっている。口頸部は粘土接合面から欠損している。接合面の径は1.1×0.9㎝である。文様はなく、底面と上体のほぼ全面および下体の５分の１ほどの範囲に赤色顔料が残っている。器面全体に塗布されていたのであろう。表面の化粧粘土が剥落している部分が数か所にあるほかは、平滑に調整されている。内面はヘラ状の工具で調整されその際の凹凸が残る。さらに底面内側は指頭で押し付けたとみられ、粘土が環状に盛り上がっている。内面の調整はやや雑といえよう。胴部上半部で切断している。これは細いひご状工具で連続して刺突することでなされたとみられ、上体と下体それぞれに痕跡がある。上体の平面観は楕円形。長軸方向の２か所にごく細い粘土紐を貼り付け突起を作り、中央部に径１㎜ほど、縫い針が通るほどの円形の孔が穿たれている。下体では胴部の張り出しのやや下方に、上体の斜めの切断に対応するように底面からの高さが異なる位置に突起がある。上体のものよりもわずかに径の大きい孔がある。胎土には海綿状骨針が混入する。周辺部の遺物出土傾向から判断すると、後期初頭天祐寺式に相当する時期のものとみられる。

次に道内での類似例を述べる（縮尺は、３～５が１：４、そのほか１：６）。

①函館市戸井貝塚（戸井町教委1993）：２個体ある（１、２）。１の口頸部は欠損する。胴部の中央よりやや下部で張り出すもので、突起はない。切断面は胴部上方、磨消縄文によりJ字状や波頭状文様がある。中期末葉大木10式併行のもの。２については報告書では明言されていないが、切断壷形土器の可能性が高いものとして取り上げておく。胴部がそろばん玉状に張り出す器形で、高台状の上げ底である。無文地に沈線での渦巻文がある。突起はない。底部側面に溝（２か所か）が切られている。後期前葉涌元式併行のものであろう。

②函館市浜町A遺跡（戸井町教委1990）：３は住居跡HP－１床面から出土したもの。高さ4.5㎝で、ほぼ形を保っている。無文地に沈線による渦巻状文様が施されている。胴部下半部が強く張り出し、高台状の底部があるもので、この付近で切断されている。切断は竹ひご状工具である。上体では頸部下に、下体では底部付近にそれぞれ２か所に突起があり、径1.5㎜の孔が穿たれている。また底面に１条沈線が引かれている。後期前葉涌元式併行のものと推定される。

③函館市石倉貝塚（函館市教委1999）：胴部の破片が２点報告されている（４、５）。切断面の位置がはっきりとしないため全体の様相は知られない。いずれも赤彩で、５は内外面に施されている。４は内面に炭化物が付着するもので、３条一組の沈線による文様がある。後期前葉十腰内１式相当のもの

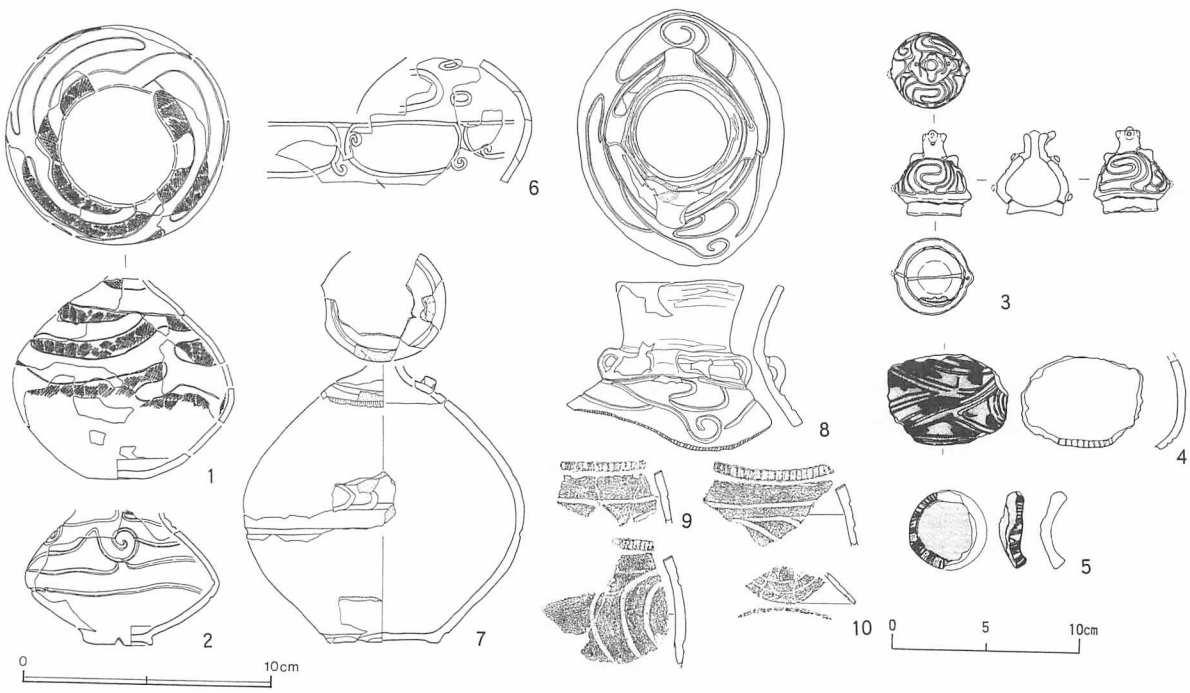
であろう。

④北斗市矢不来２遺跡（北埋調報37）：破片資料のため全体の様相は知られないが図上復元を含め２個体ある（６、７）。いずれも口頸部は欠損する。６は沈線での区画に楕円形文様が配される。底部付近に切断面がある。７は胴部上側に切断面があり、上体では切断面の１か所に抉りがあり、その対になる位置に橋状把っ手がある。いずれも後期前葉涌元式に相当する。

⑤森町濁川左岸遺跡A地区（北埋調報208）：３個体ある（８～10）。８は上体のみが復元できたものである。９（３点）、10は胴部破片である。８は縄文後期前葉の住居跡（H－20）の覆土から出土した。口頸部の径は10.5㎝。赤彩土器とみられる。半肉彫り的沈線による文様のもので４か所に把手があり、また頸部内面にはC字型の張り出しがある。切断面は胴部上半で、草本状のものでなされる。沈線による文様を分断しないよう考慮しているためであろう、切断面は水平ではない。後期前葉涌元式に相当する。

葛西ら（2003）によると、この種の土器は、大きさが最大で32㎝前後、最小で５㎝前後であり、中でも高さ10～15㎝、口径が２～４㎝に収まる細首形が多い。また、切断個所の位置（胴部最大部分の上方・下方）と突起の有無により４種類に細分されている。これによると集成された資料の４割以上が、胴部上方切断で突起を有する石倉１遺跡の類（Ⅰ型A類）である。また、突起に穿たれた孔は、使用に際し、上下を接合する必要性からこの部分に紐を通し縛ったものとみられる。戸井貝塚資料の底部側縁の切り込み（２）、浜町A遺跡資料の底面の沈線（３）などについては、紐を底部から発する時の「引掛り」とみている。さらに、突起の有無に関係なく、接合に際し何らかの膠着剤（アスファルト、漆、松脂など）を使用し「目張り」を施す例がわずかにある（青森市蛍沢遺跡・三内遺跡など）。このほか口頸部欠損（石倉１遺跡や戸井貝塚出土資料など）が、上下合体個体の７割以上に認められることから、事由についての言及はないが、破損が故意になされた可能性が高いことも指摘されている。

このように、土器を切断し、再び接合し使用する意図およびその用途は何であろうか。葛西は再葬土器棺墓との相関関係を示唆しており、成田（1999）もまた埋葬時の容器や副葬品・供献品との関連性を指摘している。いずれにせよ日常性から離れた特殊な容器であることは間違いない。　（遠藤）



図Ⅶ－７　北海道内出土の切断壺形土器

引用参考文献

論文等

阿部明義2004「フローテーションによる微細遺物の採取と分析」『森町石倉２遺跡』㈶北海道埋蔵文化財センター　北埋調報197

安藤重幸1983「ボーリング結果からみた濁川カルデラの構造」『月刊地球』Vol５－２海洋出版株式会社

五十嵐昭明・佐藤浩・井出俊夫・西村進・角清愛1978「北海道茅部郡濁川地熱地域の熱水変質帯」『地質調査報告　日本の地熱地域の熱水変質帯の地質学的研究その１』第259号　地質調査所

石塚友希夫・中村俊夫・奥野充・木村勝彦・金奎漢・金伯禄・森脇広2003「白頭山火山の10世紀における巨大噴火の高精度AMS^{14}C年代測定」『名古屋大学加速器質量分析業務報告書』14

大島直行2000「北海道の水場遺構」『月刊　考古学ジャーナル』№457　ニュー・サイエンス社

大泰司統2003「Ⅵ成果と課題３.石器」『森町濁川左岸遺跡－B地区－』㈶北海道埋蔵文化財センター北埋調報190

大泰司統2004「Ⅵ成果と課題２.土器・土製品」『森町濁川左岸遺跡－A地区』㈶北海道埋蔵文化財センター　北埋調報208

葛西　勵・小幡育恵2003「切断壷形土器（切断土器）の研究」『市史研究あおもり』６

小山正忠・竹原秀雄2004『標準土色帖』26版　日本色研事業株式会社

勝井義雄2007「北海道駒ケ岳」『北海道の活火山』北海道新聞社

金子浩昌2003「濁川左岸遺跡の出土骨」『森町濁川左岸遺跡－B地区－』㈶北海道埋蔵文化財センター　北埋調報190

金子浩昌2006a「森町三次郎川右岸遺跡の動物遺体」『森町三次郎川右岸遺跡』㈶北海道埋蔵文化財センター　北埋調報233

金子浩昌2006b「森川３遺跡出土骨貝類」『森町森川３遺跡（２）』㈶北海道埋蔵文化財センター　北埋調報234

小島朋夏1999「北海道式石冠の分布とその意義」『北海道考古学』第35輯　北海道考古学会

坂本尚史「スクレイパーの形態と機能について」2002『八雲町野田生４遺跡』㈶北海道埋蔵文化財センター　北埋調報171

佐々木由香2000「縄文時代の「水場遺構」に関する基礎的研究」『古代』第108号　早稲田大学考古学会

佐藤孝雄1993「有珠ポンマ遺跡の動物遺体」『ポンマ』伊達市教育委員会

鈴木　信2006「骨同定に関する見解－ヒグマ焼骨とイノシシ焼骨が共伴する意味について」『江別市対雁２遺跡（８）』㈶北海道埋蔵文化財センター　北埋調報231

高橋　理1995a「高岡１遺跡出土の動物遺存体」『豊浦町高岡１遺跡（３）・高岡２遺跡』㈶北海道埋蔵文化財センター　北埋調報106

高橋　理1995b「F－４出土の骨片について」『豊浦町東雲遺跡』㈶北海道埋蔵文化財センター　北埋調報107

高橋　理2006「鷲ノ木４遺跡出土動物」『鷲ノ木４遺跡』森町教育委員会

高橋　理2008「北海道茅部郡森町鷲ノ木遺跡出土動物分析報告」『鷲ノ木遺跡』森町教育委員会

高橋　理・太子夕佳2001「白老町虎杖浜２遺跡出土動物遺存体」『白老町虎杖浜２遺跡』㈶北海道埋蔵文化財センター　北埋調報158

高橋　理・山崎京美2002「八雲町栄浜１遺跡出土動物遺存体」『八雲町栄浜１遺跡』㈶北海道埋蔵文化財センター　北埋調報175

高橋正勝1971「北海道における擦石・石冠について」『北海道の文化』22　北海道文化財保護協会

立田　理2002「刃部に光沢のある石器について」『八雲町野田生２遺跡』㈶北海道埋蔵文化財センター　北埋調報167

谷島由貴2003「遺跡周辺の環境」『森町本茅部１遺跡』㈶北海道埋蔵文化財センター　北埋調報191

椿坂恭代2006「森町三次郎川右岸遺跡から出土した炭化植物」『森町三次郎川右岸遺跡』㈶北海道埋蔵文化財センター　北埋調報233

土居繁雄1960『北海道渡島国森町の地質』北海道立地下資源調査所

中村有吾・平川一臣2004「北海道駒ケ岳起源の広域テフラ、駒ケ岳gテフラの分布と噴出年代」『第四紀研究』43－３

名越幸生1994「濁川カルデラの火砕堆積物」『日本火山学会講演予稿集1994年度秋季大会』

成田滋彦1986「切断蓋付土器考」『弘前大学考古学研究』第３号　弘前大学考古学研究会

成田滋彦1999「異形土器　切断蓋付土器－出土状況と器形を考える－」『研究紀要』第４号　青森県埋蔵文化財センター

西本豊弘1981a「動物遺存体について」『尾白内』森町教育委員会

西本豊弘1983a「動物遺存体」『南有珠６遺跡』札幌医科大学解剖学第二講座

西本豊弘1983b「栄浜１遺跡出土の動物遺存体」『栄浜』八雲町教育委員会

西本豊弘1986「有珠善光寺２遺跡出土動物遺存体」『有珠善光寺２遺跡』伊達市教育委員会

西本豊弘1987「高砂貝塚出土の動物遺体」『高砂貝塚』札幌医科大学解剖学第二講座
西本豊弘1989「動物遺体」『有珠善光寺２遺跡Ⅱ』伊達市教育委員会
西本豊弘1993「八木A遺跡出土の動物遺体」『八木A遺跡・ハマナス野遺跡』南茅部町埋蔵文化財調査団
西本豊弘1999「伊達市北黄金貝塚出土の動物遺体」『国指定史跡北黄金貝塚発掘調査報告書－水場遺構の調査２－』伊達市教育委員会
西本豊弘・新美倫子1992「コタン温泉遺跡出土の動物遺体」『コタン温泉遺跡』八雲町教育委員会
日本ペトロジー学会編2000『土壌調査ハンドブック改訂版』博友社
福井淳一1999「45－30区周辺遺物集中区について」『函館市中野B遺跡』㈶北海道埋蔵文化財センター　北埋調報130
福井淳一2004「土坑覆土中の焼土検出動物遺存体について」『森町倉知川右岸遺跡』㈶北海道埋蔵文化財センター　北埋調報196
福井淳一2008「動物遺存体の出土状況」『釧路町天寧１遺跡』㈶北海道埋蔵文化財センター　北埋調報254
福井淳一2010「北海道における縄文文化～続縄文文化のアスファルト利用について」『池上悟還暦記念論文集』印刷中
北海道火山灰命名委員会編1982『北海道の火山灰』北海道火山灰命名委員会
北海道立地下資源調査所1973『濁川』５万分の１地質図幅説明書
北海道立地下資源調査所1986『駒ケ岳』５万分の１地質図幅説明書
町田　洋・新井房夫2003『新編火山灰アトラス』東京大学出版会
南北海道考古学情報交換会2009『第30回南北海道考古学情報交換会』資料
森町1960『北海道渡島国森町の地質』
森町1980『森町史』
八雲町1974『八雲町の地質』
柳井清治・鴈沢好博・古森康晴1992「最終氷期末期に噴出した濁川テフラの層所と分布」『地質学雑誌』第98巻２号
山崎京美1998「高砂貝塚出土の動物遺存体について」『高砂貝塚』虻田町教育委員会
山田悟郎・柴内佐知子1997「北海道の縄文時代遺跡から出土した堅果類－クリについて－」『北海道開拓記念館研究紀要』第25号　北海道開拓記念館
山田悟郎2001「北海道南部渡島半島の遺跡から出土する植物遺体」『－南北海道考古学情報交換会20周年記念論集－渡島半島の考古学』南北海道考古学情報交換会20周年記念論集作成実行委員会
吉川純子2006「臼尻小学校遺跡から出土した炭化種実」『函館市臼尻小学校遺跡』函館市教育委員会・特定非営利活動法人函館市埋蔵文化財事業団
渡辺　誠2000「水場遺構研究の視点」『月刊　考古学ジャーナル』№457　ニュー・サイエンス社

遺跡調査報告書

㈶北海道埋蔵文化財センター1987a『上磯町矢不来２遺跡』北埋調報37
㈶北海道埋蔵文化財センター1987b『木古内町建川２・新道４遺跡』北埋調報43
㈶北海道埋蔵文化財センター1988『木古内町新道４遺跡』北埋調報52
㈶北海道埋蔵文化財センター1996『七飯町大中山13遺跡（３）』北埋調報111
㈶北海道埋蔵文化財センター1997『七飯町鳴川右岸遺跡・桜町遺跡』北埋調報112
㈶北海道埋蔵文化財センター2001a『白老町虎杖浜２遺跡』北埋調報158
㈶北海道埋蔵文化財センター2001b『八雲町山崎４遺跡』北埋調報162
㈶北海道埋蔵文化財センター2001c『八雲町山越２遺跡』北埋調報163
㈶北海道埋蔵文化財センター2003a『八雲町落部１遺跡』北埋調報181
㈶北海道埋蔵文化財センター2003b『森町本内川右岸遺跡』北埋調報182
㈶北海道埋蔵文化財センター2003c『八雲町野田生１遺跡』北埋調報183
㈶北海道埋蔵文化財センター2003d『森町濁川左岸遺跡－B地区－』北埋調報190
㈶北海道埋蔵文化財センター2003e『森町本茅部１遺跡（２）』北埋調報191
㈶北海道埋蔵文化財センター2004a『森町倉知川右岸遺跡』北埋調報196
㈶北海道埋蔵文化財センター2004b『森町石倉２遺跡』北埋調報197
㈶北海道埋蔵文化財センター2004c『森町本茅部１遺跡（２）』北埋調報199

㈶北海道埋蔵文化財センター2004d『森町石倉３遺跡・石倉５遺跡』北埋調報205
㈶北海道埋蔵文化財センター2004e『森町濁川左岸遺跡ーA地区ー』北埋調報208
㈶北海道埋蔵文化財センター2005a『森町上台２遺跡』北埋調報216
㈶北海道埋蔵文化財センター2005b『森町上台１遺跡』北埋調報217
㈶北海道埋蔵文化財センター2005c『森町森川４遺跡』北埋調報218
㈶北海道埋蔵文化財センター2005d『森町三次郎川左岸遺跡・石倉５遺跡（２）石倉４遺跡』北埋調報219
㈶北海道埋蔵文化財センター2005e『森町森川３遺跡』北埋調報222
㈶北海道埋蔵文化財センター2006a『森町三次郎川右岸遺跡』北埋調報233
㈶北海道埋蔵文化財センター2006b『森町森川３遺跡（２）』北埋調報234
㈶北海道埋蔵文化財センター2007a『森町濁川左岸遺跡（３）ーC～E地区ー』北埋調報246
㈶北海道埋蔵文化財センター2007b『森町石倉１遺跡』北埋調報247
戸井町教育委員会1990『浜町A遺跡』
戸井町教育委員会1993『戸井貝塚Ⅲ』
七飯町教育委員会1983『大中山５遺跡』
函館市教育委員会1999『函館市石倉貝塚』
松前町教育委員会1974『松前町大津遺跡発掘調査報告書』
松前町教育委員会1983『白坂』
南茅部町教育委員会1978『臼尻B遺跡発掘調査概報』
南茅部町教育委員会1979『臼尻B遺跡発掘調査報告』
南茅部町教育委員会1984『ハマナス野遺跡Ⅹ』別冊資料集
森町教育委員会1975『鳥崎遺跡』
森町教育委員会1977『森町オニウシ遺跡発掘調査報告』
森町教育委員会1981『尾白内』
森町教育委員会1982『森川A遺跡』
森町教育委員会1985『御幸町』
森町教育委員会1993『尾白内２』
森町教育委員会1994『御幸町２』
森町教育委員会2004a『栗ヶ丘１遺跡』
森町教育委員会2004b『森川２遺跡』
森町教育委員会2004c『鷲ノ木４遺跡』
森町教育委員会2006a『鷲ノ木４遺跡』
森町教育委員会2006b『鷲ノ木７遺跡』
森町教育委員会2007『森川５遺跡』
森町教育委員会2008a『駒ケ岳１遺跡』森町文化財調査報告書　第13集
森町教育委員会2008b『鷲ノ木遺跡』森町文化財調査報告書　第14集
森町教育委員会2008c『鷲ノ木遺跡』森町文化財調査報告書　第15集
森町教育委員会2008d『町内遺跡発掘調査事業報告書Ⅰ』森町文化財調査報告書　第16集
森町教育委員会2009『町内遺跡発掘調査事業報告書Ⅱ』森町文化財調査報告書　第17集
八雲町教育委員会1995『浜松５遺跡』

表１　検出遺構規模一覧

遺構種別	遺構名	調査区	規模(m) 長軸 確認面	長軸 底面	短軸 確認面	短軸 底面	深さ	時期（縄文時代）	特徴	図番号	図版番号
住居跡	IH5	M・N-77・78	(2.87)	(2.85)	(2.46)	(2.34)	0.24	後期前葉		Ⅳ-3	4・5
	IH5HF1	N-78	(0.47)	—	—	—	—		方形石囲炉の残存		
	IH5HP1	N-77	0.19	—	—	—	0.14				
	IH5HP2	M-78	0.13	—	—	—	0.29				
	IH5HP3	N-78	0.31	—	—	—	0.05				
	IH5HP4	N-78	0.27	—	—	—	0.29		土器片で根固め		
	IH5HP5	N-78	0.21	—	—	—	0.44				
	IH5HP6	M-78	0.23	—	—	—	0.24				
	IH5HP7	N-78	0.31	—	—	—	0.18				
	IH5HP8	N-78	0.37	—	—	—	0.14				
	IH6	X・Y-78・79	4.53	4.23	3.32	3.14	0.12	後期前葉	方形石囲炉と一対の配石	Ⅳ-7	6・7
	IH6HF1	X-78	0.64	—	0.54	—	—		方形石囲炉	Ⅳ-8	
	IH6HP1	X-78	0.33	—	—	—	0.41				
	IH6HP2	Y-78	0.51	—	—	—	0.20				
	IH6HP3	X-78	0.51	—	—	—	0.19				
	IH6HP4	X-79	0.11	—	—	—	0.32				
	IH6HP5	X-79	0.20	—	—	—	0.44				
	IH6HP6	X-79	0.22	—	—	—	0.38				
	IH6HP7	X-79	0.17	—	—	—	0.24				
	IH6HP8	X-78	0.27	—	—	—	0.18				
	IH6HP9	X-78	0.09	—	—	—	0.11				
	IH6HP10	X-79	0.15	—	—	—	0.19				
	IH6HP11	X-78	0.16	—	—	—	0.30				
	IH6HP12	X-78	0.44	—	—	—	0.10				
	IH6HP13	X・Y-78	(0.58)	—	—	—	0.15		配石の堀方		
	IH7	M-76	2.82	2.52	(2.38)	1.54	0.14	後期前葉		Ⅳ-11	8・9
	IH7HF1	M-76	0.52	—	0.46	—	0.06				
	IH7HF2	M-75	0.80	—	0.40	—	0.06				
	IH7HP1	M-76	0.48	—	—	—	0.16				
	IH7HP2	M-76	0.44	—	—	—	0.08				
	IH7HP3	M-76	0.16	—	—	—	0.34				
	IH7HP4	M-76	0.20	—	—	—	0.22				
	IH7HP5	M-76	0.14	—	—	—	0.18				
	IH7HP6	M-76	0.16	—	—	—	0.34				
	IH7HP7	M-76	0.18	—	—	—	0.24				
	IH7HP8	M-75	0.18	—	—	—	0.34				
	IH8	O・P-77・78	(3.32)	(3.24)	2.28	2.18	0.09	後期前葉		Ⅳ-13	9～11
	IH8HF1	P-77	0.73	—	(0.69)	—	—		方形石囲炉の残存		
	IH8HP1	P-77	(0.45)	—	—	—	0.16				
	IH8HP2	P-77	(0.62)	—	—	—	0.10				
	IH8HP3	P-77	0.36	—	—	—	0.12				
	IH8HP4	P-77	0.44	—	—	—	0.12				
	IH8HP5	P-77	0.49	—	—	—	0.04				
	IH8HP6	P-77	0.27	—	—	—	0.27				
	IH8HP7	P-77	0.35	—	—	—	0.15				
	IH9	OZ-50	(1.64)	(1.58)	1.46	1.34	0.12	後期前葉	自然撹乱を人為的に埋め戻した	Ⅳ-15	11・12
	IH9・HF-1	OZ-50	0.5	—	0.36	—	0.05				
	IH10	M-30	2.76	2.18	2.26	1.60	0.64	中期前半?	風倒木により撹乱を受けている	Ⅳ-16	12・13
土坑	IP20	N-75・76	0.72	0.54	(0.63)	0.46	0.35	中期前半	小型フラスコ状土坑	Ⅳ-17	14
	IP21	N-76	0.88	0.77	0.70	0.66	0.27	中期前半			
	IP22	N-76	0.70	0.72	0.60	0.66	0.52	中期前半	小型フラスコ状土坑	Ⅳ-19	
	IP23	H-77	1.84	1.38	1.56	1.28	1.14	中期前半か後期前葉		Ⅳ-17	15
	IP24	N-78	0.80	0.55	(0.60)	0.52	0.16	後期前葉		Ⅳ-20	
	IP25	N-78	1.21	1.11	0.97	0.84	0.25	後期前葉			
	IP26	M-78	(0.81)	0.09	0.66	0.11	0.17	後期前葉			
	IP27	L-77	0.72	0.52	0.66	0.56	0.36	中期前半か後期前葉		Ⅳ-21	16
	IP28	L-77	1.08	0.92	0.86	0.56	0.36	中期前半か後期前葉			
	IP29	L-76	0.66	0.28	0.56	0.32	0.22	中期前半か後期前葉		Ⅳ-20	
	IP30	K-78	0.22	0.17	(0.17)	(0.14)	0.09	中期前半		Ⅳ-21	17
	IP31	M-77	1.04	0.56	0.96	0.48	0.56	中期前半か後期前葉		Ⅳ-22	
	IP32	K-76	0.78	0.56	0.74	0.52	0.46	中期前半か後期前葉			
	IP33	K-76	0.38	0.24	0.30	0.18	0.08	中期前半か後期前葉			
	IP34	N・O-76・77	0.82	0.65	0.66	0.29	0.29	後期前葉			18
	IP35	O-76	(1.17)	1.05	(0.55)	0.43	0.11	中期前半～後期前葉		Ⅳ-23	
	IP36	O-76	0.49	-	0.55	-	0.14	中期前半～後期前葉			
	IP37	M-77	0.78	(0.48)	0.62	(0.40)	0.38	中期前半か後期前葉			18
	IP38	N-75	0.66	0.60	0.60	0.52	0.22	中期前半か後期前葉			
	IP39	J-76	0.94	0.60	0.90	0.62	0.54	中期前半か後期前葉			18・19
	IP40	M-77・78	0.65	0.45	0.55	0.47	0.20	中期前半～後期前葉		Ⅳ-24	19
	IP41	N-78	0.61	0.49	0.53	0.42	0.14	中期前半～後期前葉			
	IP42	Q-79	0.77	0.89	0.59	0.76	0.23	中期前半～後期前葉	小型フラスコ状土坑		19
	IP43	K-77	0.88	0.62	0.72	0.48	0.26	中期前半か後期前葉			19・20
	IP44	K-77	1.18	0.90	0.94	(0.72)	0.46	中期前半か後期前葉		Ⅳ-25	
	IP45	P-77	0.88	0.70	0.75	0.59	0.18	後期前葉			20
	IP46	J-78	0.66	0.56	0.62	0.52	0.20	中期前半か後期前葉			

遺構種別	遺構名	調査区	規模(m) 長軸 確認面	長軸 底面	短軸 確認面	短軸 底面	深さ	時期（縄文時代）	特徴	図番号	図版番号
土坑	IP47	Z-79	1.01	0.54	0.94	0.47	0.66	後期前葉		IV-26	
	IP48	C・D-45	0.86	0.78	0.76	0.66	0.24	不明・中期前半又は後期前葉?	遺物出土なし		
	IP49	Y・Z-77	1.06	0.57	0.95	0.67	0.59	中期前半～後期前葉			21
	IP50	P-78	1.21	1.06	0.78	0.70	0.16	中期前半～後期前葉			
	IP51	N-77	(0.84)	(0.77)	0.75	0.66	0.47	中期前半～後期前葉	小型フラスコ状土坑	IV-27	
	IP52	N-77	(0.87)	(0.79)	0.51	(0.38)	0.16	後期前葉			
	IP53	O-76	0.73	0.52	0.51	0.49	0.10	中期前半～後期前葉			
	IP54	O-76・77	0.62	0.50	0.55	0.44	0.09	後期前葉		IV-27	21
	IP55	O-76	0.91	0.61	0.51	0.33	0.29	後期前葉		IV-28	
	IP56	M-77	0.75	(0.65)	0.57	(0.48)	0.20	後期前葉			22
	IP57	M-76	1.94	1.74	1.54	1.26	0.38	中期前半か		IV-29	
	IP58	M-75	0.50	0.40	(0.24)	(0.20)	0.12	中期前半		IV-28	
	IP59	OZ-45・46	1.00	0.64	0.88	0.54	0.32	不明だが後期前葉か?	複数個の礫がまとまっていた	IV-29	22・23
	IP60	N・O-77・78	0.71	0.63	0.74	0.63	0.17	中期前半～後期前葉			
	IP61	OZ-50	1.14	1.22	(0.58)	(0.46)	0.94	後期前葉	フラスコ状土坑	IV-30	23
	IP62	O-78	(0.82)	(0.65)	0.47	0.41	0.08	中期前半～後期前葉			
	IP63	N-77	(0.46)	0.36	0.36	(0.32)	0.15	中期前半～後期前葉		IV-27	
小ピット	SP1	N-74	0.20	—	—	—	0.22	後期前葉?		IV-31・32・37	
	SP2	O-74	0.40	—	—	—	0.30	後期前葉?			24
	SP3	O-74	0.80	—	—	—	0.46	後期前葉?			24
	SP4	O-74	0.60	—	—	—	0.06	後期前葉?			24
	SP5	O-74	0.26	—	—	—	0.06	後期前葉?			24
	SP6	O-74	0.38	—	—	—	0.36	後期前葉?			24
	SP7	O-76	0.46	—	—	—	0.26	後期前葉		IV-23・31・33・37	
	SP8	O-76	0.32	—	—	—	0.40	後期前葉			
	SP9	O-77	0.44	—	—	—	0.31	後期前葉			
	SP10	O-76	0.19	—	—	—	0.36	後期前葉?			
	SP11	O-77	0.32	—	—	—	0.31	後期前葉?			
	SP12	O-77	0.42	—	—	—	0.33	後期前葉			
	SP13	O-77	0.35	—	—	—	0.61	後期前葉			
	SP14	O-77	0.24	—	—	—	0.24	後期前葉?			
	SP15	O-77	0.23	—	—	—	0.17	後期前葉			
	SP16	O-77・78	0.17	—	—	—	0.16	後期前葉?			
	SP17	O・P-78	0.37	—	—	—	0.15	後期前葉			
	SP18	Y-79	0.47	—	—	—	0.71	後期前葉?		IV-31・34・37	24
	SP19	Y-79	0.24	—	—	—	0.52	後期前葉?			
	SP20	Y-79	0.28	—	—	—	0.40	後期前葉?			
	SP21	Y-80	0.27	—	—	—	0.48	後期前葉			
	SP22	Y-80	0.20	—	—	—	0.35	後期前葉?			
	SP23	N-77	0.22	—	—	—	0.20	後期前葉?		IV-31・35・37	
	SP24	N-77	0.27	—	—	—	0.23	後期前葉?			
	SP25	M-77	0.26	—	—	—	0.39	後期前葉			
	SP26	M-77	0.22	—	—	—	0.23	後期前葉?			
	SP27	M・N-77	0.17	—	—	—	0.30	後期前葉			
	SP28	M・N-77	0.17	—	—	—	0.23	後期前葉?			
	SP30	N-76	0.20	—	—	—	0.41	後期前葉?		IV-31・33・37	
	SP31	N-76	0.48	—	—	—	0.11	後期前葉?			
	SP32	N-76	0.34	—	—	—	0.56	後期前葉?			
	SP33	N-76	0.27	—	—	—	0.32	後期前葉?			
	SP34	X-80	0.27	—	—	—	0.27	後期前葉?		IV-31・34・37	
	SP35	Y-80	0.45	—	—	—	0.58	後期前葉			24
	SP36	Z-80	0.31	—	—	—	0.39	後期前葉			24
	SP37	O・P-77	0.41	—	—	—	0.46	後期前葉		IV-31・36・37	
	SP38	O-77	0.20	—	—	—	0.21	後期前葉		IV-31・33・37	
	SP39	M-78	(0.21)	—	—	—	0.27	後期前葉?		IV-31・32・37	
	SP40	M-77	0.22	—	—	—	0.23	後期前葉?			
	SP41	N-77	0.15	—	—	—	0.23	後期前葉?		IV-31・35・37	
	SP42	N-77	0.14	—	—	—	0.12	後期前葉?			
	SP43	N-78	0.17	—	—	—	0.31	後期前葉?			
	SP44	N-77	0.20	—	—	—	0.25	後期前葉?			
	SP45	N-77	0.19	—	—	—	0.18	後期前葉			
	SP46	N-77	0.25	—	—	—	0.18	後期前葉			
	SP47	N-77	0.26	—	—	—	0.09	後期前葉			
	SP48	O-77	0.36	—	—	—	0.31	後期前葉?		IV-31・33・37	
	SP49	O-77・78	0.24	—	—	—	0.37	後期前葉?			
	SP50	O-77	0.23	—	—	—	0.23	後期前葉?			
	SP51	O-77	0.14	—	—	—	0.17	後期前葉?			
	SP52	O-77	0.13	—	—	—	0.16	後期前葉?			
	SP53	O-77	0.23	—	—	—	0.37	後期前葉?			
	SP54	O-77	0.22	—	—	—	0.39	後期前葉			
	SP55	O-77	0.13	—	—	—	0.11	後期前葉?			
	SP56	O-77	0.14	—	—	—	0.21	後期前葉?			
	SP57	O-77	0.21	—	—	—	0.25	後期前葉			
	SP58	O-77	0.36	—	—	—	0.42	後期前葉?			
	SP59	O-76	0.19	—	—	—	0.19	後期前葉?			
	SP60	O-76	0.16	—	—	—	0.18	後期前葉?			
	SP61	N・O-76	0.23	—	—	—	0.44	後期前葉			
	SP62	O-77	(0.26)	—	—	—	0.36	後期前葉			
	SP63	P・O-77	(0.21)	—	—	—	0.27	後期前葉?			
	SP64	P・O-77	0.31	—	—	—	0.39	後期前葉			
	SP65	P-77	0.25	—	—	—	0.26	後期前葉?			

遺構種別	遺構名	調査区	規模(m) 長軸 確認面	長軸 底面	短軸 確認面	短軸 底面	深さ	時期（縄文時代）	特徴	図番号	図版番号
小ピット	SP66	P-77	0.25	—	—	—	0.51	後期前葉?		Ⅳ-31・36・37	
	SP67	O-76	0.28	—	—	—	0.26	後期前葉?		Ⅳ-31・33・37	
	SP68	O-76	0.20	—	—	—	0.25	後期前葉?			
	SP69	O-76	0.22	—	—	—	0.39	後期前葉			
	SP70	O-76	0.23	—	—	—	0.26	後期前葉			
	SP71	P-78	0.19	—	—	—	0.23	後期前葉?		Ⅳ-31・36・37	
	SP72	L-76	0.18	—	—	—	0.12	後期前葉?		Ⅳ-31・32・37	
	SP73	L-76	0.16	—	—	—	0.19	後期前葉?			
	SP74	N-75	0.18	—	—	—	0.32	後期前葉?			
	SP75	L-76	0.20	—	—	—	0.22	後期前葉?			
	SP76	N・O-76	0.21	—	—	—	0.24	後期前葉?		Ⅳ-31・33	
	SP77	O-76	0.14	—	—	—	0.19	後期前葉?		Ⅳ-31・33	
	SP78	O-76	0.24	—	—	—	0.25	後期前葉?			
	SP79	O-76	0.30	—	—	—	0.32	後期前葉?			
	SP80	O-76	0.26	—	—	—	0.44	後期前葉?			
	SP81	O-76	0.29	—	—	—	0.43	後期前葉?			
	SP82	P-76	0.21	—	—	—	0.27	後期前葉?		Ⅳ-31・36	
	SP83	P-76	0.26	—	—	—	0.29	後期前葉?			
	SP84	N-77	0.21	—	—	—	0.39	後期前葉?		Ⅳ-27・31・35	
	SP85	O-77	0.20	—	—	—	0.33	後期前葉?		Ⅳ-31・37	
	SP86	O-77	0.25	—	—	—	0.23	後期前葉?			
	SP87	O-77	0.27	—	—	—	0.19	後期前葉?			
	SP88	O-76	(0.18)	—	—	—	0.20	後期前葉?		Ⅳ-31・33・37	
	SP89	O-77	(0.19)	—	—	—	0.15	後期前葉?			
	SP90	P-77	(0.25)	—	—	—	0.21	後期前葉?		Ⅳ-31・36	
	SP91	P-78	0.21	—	—	—	0.09	後期前葉?		Ⅳ-31・36・37	
	SP92	P-78	0.27	—	—	—	0.35	後期前葉?			
	SP93	Y-78	0.41	—	—	—	0.28	後期前葉?		Ⅳ-31・34・37	
	SP94	Y・Z-79	0.68	—	—	—	0.22	後期前葉?			
	SP95	Z-79	0.33	—	—	—	0.55	後期前葉?			
	SP96	O-77	0.22	—	—	—	0.39	後期前葉?		Ⅳ-23・31・33	
	SP97	O-76	0.34	—	—	—	0.31	後期前葉?		Ⅳ-31・33	
水場遺構1		M・N-73・74	(3.30)	—	(1.30)	—	—	後期前葉		Ⅳ-40～42	25～27
フレイク集中	FC1	N-78	1.06	—	0.41	—	—	後期前葉		Ⅳ-52	28
	FC2	A・B-49・B-50	6.80	—	4.20	—	約0.20～0.30	後期前葉以降	両極技法関連	Ⅳ-52・55	
	FC2・(A-49)	A-49	0.50	—	0.40	—	約0.20		両極技法関連		
	FC2・(A・B-49)	A・B-49	3.02	—	2.04	—	約0.25		両極技法関連		
	FC2・(A・B-49・B-50)	A・B-49・B-50	3.46	—	2.84	—	約0.30		両極技法関連		
	FC3	C・D-50・51	3.30	—	3.24	—	約0.10	後期前葉以降		Ⅳ-53・55	
	FC4	B-48	1.74	—	1.40	—	約0.15	後期前葉以降			28
	FC5	OZ-49・50	5.86	—	2.40	—	約0.10～0.15	後期前葉以降		Ⅳ-54・55	28
	FC5・(OZ-49)	OZ-49	2.80	—	2.20	—	約0.10				
	FC5・(OZ-50)	OZ-50	1.18	—	0.64	—	約0.15				
	FC5脇の骨片を含む土	OZ-49	1.60	—	0.86	—	約0.10		FC-5より南へ0.46m・FC-5の規模には含まなかった		
焼土	IF 1	I・J-31	0.74	—	0.54	—	0.14	不明・中期前半又は後期前葉?	フローテーションにより、炭化クルミ片と炭化材	Ⅳ-56	23
	IF 2	O-74・75	0.62		0.58		0.10	中期前半か後期前葉			
	IF 3	K-73	0.94		0.32		0.06	後期以降			
集石	IS4	O-78	0.67	—	0.65	—	—	後期前葉		Ⅳ-57	28
	IS5	D-49	2.40	—	1.00	—	0.26	後期前葉	平均値・重さ99.0g・長軸長63.8mm・幅39.1mm・厚さ23.3mm	Ⅳ-58	
	IS5・(No.1～19)	D-49	0.96	—	0.28	—	0.26				
	IS5・(No.20～32)	D-49	0.94	—	0.34	—	0.28				
	IS6	A-49	1.62	—	1.10	—	—	後期前葉?	不整な配列	Ⅳ-59	28・29
	IS7	OZ-48・49	0.74	—	0.54	—	0.3	後期前葉	自然攪乱に設置された石囲炉		29
	IS7（配石を設置した自然攪乱）	OZ-48・49	1.1	—	0.8	—	0.3				
	IS8	N-77	0.43	—	0.40	—	—	後期前葉		Ⅳ-58	30

表２　遺構出土土器等一覧

合計 / 点数		分類				
遺構種別	遺構名	Ⅲ群a類	Ⅲ群b類	Ⅳ群a類	土製品	合計
住居跡	ＩＨ-5			160		160
	ＩＨ-6			119		119
	ＩＨ-7	1		42		43
	ＩＨ-8			83		83
	ＩＨ-9			1		1
計		1	0	405	0	406
土坑	ＩＰ-20	7				7
	ＩＰ-21	46				46
	ＩＰ-22	64				64
	ＩＰ-24			2		2
	ＩＰ-25	11		19		30
	ＩＰ-26			4		4
	ＩＰ-28			1		1
	ＩＰ-30	25				25
	ＩＰ-40			1		1
	ＩＰ-42	1				1
	ＩＰ-45			3	1	4
	ＩＰ-52			11		11
	ＩＰ-54			9		9
	ＩＰ-55			5		5
	ＩＰ-56			12		12
	ＩＰ-57	1		5	1	7
	ＩＰ-61			12		12
計		155	0	84	2	241
水場遺構	1	310	1	391		702
計		310	1	391	0	702
フレイク集中	ＦＣ-1			1		1
計		0	0	1	0	1
焼土	ＩＦ-1			1		1
計		0	0	1	0	1
集石	ＩＳ-4			43		43
	ＩＳ-5			5		5
	ＩＳ-6			47		47
	ＩＳ-7			1		1
	ＩＳ-8			68		68
計		0	0	164	0	164
小柱穴	ＳＰ－3			3		3
	ＳＰ－7			6		6
	ＳＰ－8			5		5
	ＳＰ－9			1		1
	ＳＰ－12			9		9
	ＳＰ－13			1		1
	ＳＰ－15			1		1
	ＳＰ－17			38		38
	ＳＰ－21			1		1
	ＳＰ－25			2		2
	ＳＰ－27			7		7
	ＳＰ－29			4		4
	ＳＰ－35			6		6
	ＳＰ－36			4		4
	ＳＰ－37			2		2
	ＳＰ－38			2		2
	ＳＰ－45			1		1
	ＳＰ－46			1		1
	ＳＰ－47			2		2
	ＳＰ－54			1		1
	ＳＰ－57			4		4
	ＳＰ－61			3		3
	ＳＰ－62			2		2
	ＳＰ－64			2		2
	ＳＰ－69			1		1
	ＳＰ－70			2		2
計		0	0	111	0	111
合計		466	1	1157	2	1626

土器集中１～１５の遺物は包含層に集計してある。

表3　遺構出土石器等一覧

遺構種別	遺構番号	石鏃	石槍	篦状石器	スクレイパー	楔形石器	Rフレイク	Uフレイク	剥片	石核	剥片石器小計	石斧	たたき石	すり石	すり石片	扁平打製石器	扁平打製石器片	北海道式石冠	北海道式石冠片	加工痕ある礫	石皿	石皿片	台石	台石片	台石破片	原石	礫石器小計	礫	礫片	総計
住居跡	IH5				1		1	5	6	2	15		1										1				2	7	1	25
	IH6				2			4	5		11	1	4								2	1		1		1	9	27	6	54
	IH7			1				4			5									1							1	11	3	20
	IH8							1			1		2							1			2				5	1	2	9
	IH9												1														1			1
	IH10				1						1																	1		2
住居跡 小計				1	4		1	14	11	2	33	1	8							2	2	1	3	1		1	18	47	12	111
土坑	IP21								3		3										1						1			4
	IP22								1		1					2											2			3
	IP23				1						1																			1
	IP25								3		3																			3
	IP31															2											2	1		3
	IP39																											5		5
	IP44								1		1											1					1			2
	IP51																											2	1	3
	IP52							1			1																			1
	IP56							1			1																			1
	IP57																											2		2
	IP59																											7		7
	IP61								2		2																	2		4
土坑 小計					1			2	10		13					4					1	1					6	19	1	39
水場遺構1					2		3	8	14	1	28	1	10	1	1	22	3	3	2	2	7		4	2	1		58	17	4	108
フレイク集中	FC1								14	3	17																			17
	FC2	1					3		259	3	266																			266
	FC3		1						174		175																			175
	FC4	1							175	6	182																			182
	FC5	2				1			76	2	81																			81
フレイク集中 小計		4	1			1	3		698	14	721																			721
焼土	IF2																											1		1
集石	IS4																						2				2	6		8
	IS5																											26	1	27
	IS6								2		2											1					1	10	6	19
	IS7												1														1	6		7
	IS8								1		1																	15		16
集石 小計									3		3		1									1	2				4	63	7	77
小柱穴	SP8								2		2																			2
	SP10																												1	1
	SP13												1														1			1
	SP29								1		1																			1
	SP31																											4		4
	SP32																											1		1
	SP34																											1		1
	SP35								2		2																			2
	SP37																											1	1	2
	SP43			1							1																			1
	SP45																											1		1
	SP69												1														1	1		2
小柱穴 小計				1					5		6		2														2	9	2	19
総計		4	1	2	7	1	7	24	741	17	804	2	21	1	1	26	3	3	2	4	10	3	9	3	1	1	88	156	26	1076

表 4　遺構出土掲載土器等一覧

遺構名	図番号	調査区・遺物番号×点数	層位	同一個体未接合	分類	図版番号	備　考
IH-5	図Ⅳ－4－1	IH5・15×1, IH5・16×1, IH5・20×13 IH5・21×4, IP25・1×1	覆土	IH5・17×2, IH5・20×3 IH5・21×2	Ⅳa	図版36	
		M78・4×4, N77・10×1, N77・11×1 N77・12×1, N78・2×5, N78・4×2 N78・8×2, N78・13×2, N78・15×1 P77・22×1　計40	Ⅳ	N78・4×2, P77・11×1 計10			
	図Ⅳ－4－2	Ⓐ IH5・18×6, IH5・19×2 IH5・21×2,　IH5・26×1 Ⓑ IH5・18×10, IH5・19×1 IH5・21×2, N78・8×1 ⒸIH5・18×6, IH5・21×1　計32	Ⅳ	Ⓐ IH5・1×2,IH5・4×8 IH5・20×3 Ⓑ IH5・18×1 IH5・19×1, IH5・21×1 計16	Ⅳa	図版36	Ⓐ胴部～底部 Ⓑ口縁～胴部 Ⓒ口縁
	図Ⅳ－4－3a	IH5・1×2, IH5・7×1, IH5・9×3 IH5・10×7, IH5・11×3, IH5・21×1	覆土		Ⅳa	図版36	HP-6 図No.5　図No.7 図No.8　図No.9
		M78・2×2　計22	Ⅳ				
	図Ⅳ－4－3b	IH5・1×13	覆土		Ⅳa	図版36	HP-6
		N77・23×1　計14	Ⅳ				
	図Ⅳ－4－4	IH5・15×1	覆土		Ⅳa	図版37	図No.12
	図Ⅳ－4－5	IH5・21×1	覆土		Ⅳa	図版37	
	図Ⅳ－4－6	IH5・21×1	覆土		Ⅳa	図版37	
	図Ⅳ－4－7	IH5・21×1	覆土		Ⅳa	図版37	
	図Ⅳ－4－8	IH5・19×1	覆土		Ⅳa	図版37	図No.16
	図Ⅳ－4－9	IH5・1×1	覆土		Ⅳa	図版37	HP-6
	図Ⅳ－4－10	IH5・1×2	覆土		Ⅳa	図版37	HP-6
	図Ⅳ－4－11	IH5・30×1	覆土		Ⅳa	図版37	
	図Ⅳ－4－12	IH5・30×1	覆土		Ⅳa	図版37	
	図Ⅳ－4－13	IH5・8×1	覆土		Ⅳa	図版37	図No.6
	図Ⅳ－4－14	IH5・3×1	覆土		Ⅳa	図版37	図No.1
	図Ⅳ－4－15	IH5・6×1	覆土		Ⅳa	図版37	図No.4
IH-6	図Ⅳ－8－1	IH6・2×1	床面		Ⅳa	図版37	図No.2
		X77・2×1　計2	Ⅳ				
	図Ⅳ－8－2	IH6・3×1	床面		Ⅳa	図版37	図No.3
	図Ⅳ－8－3	IH6・3×2	床面		Ⅳa	図版37	図No.3
	図Ⅳ－8－4	IH6・24×1	Ⅳ		Ⅳa	図版37	
	図Ⅳ－8－5	IH6・50×1	覆土		Ⅳa	図版37	
	図Ⅳ－8－6	IH6・24×1	覆土		Ⅳa	図版37	
	図Ⅳ－8－7	IH6・38×1	覆土		Ⅳa	図版37	
	図Ⅳ－8－8	IH6・34×2	覆土		Ⅳa	図版37	
	図Ⅳ－8－9	IH6・21×1	覆土		Ⅳa	図版37	
	図Ⅳ－8－10	IH6・13×1	覆土		Ⅳa	図版37	
	図Ⅳ－8－11	IH6・13×1, IH6・34×1　計2	覆土		Ⅳa	図版37	
	図Ⅳ－8－12	IH6・6×1, IH6・31×1	覆土		Ⅳa	図版38	
		IH6・34×1　計3					
	図Ⅳ－8－13	IH6・15×1	覆土		Ⅳa	図版37	
	図Ⅳ－8－14	IH6・6×1	覆土		Ⅳa	図版37	
	図Ⅳ－8－15	IH6・21×1	覆土		Ⅳa	図版37	
	図Ⅳ－8－16	IH6・50×1	覆土		Ⅳa	図版38	
	図Ⅳ－8－17	IH6・13×1	覆土		Ⅳa	図版38	
	図Ⅳ－8－18	IH6・38×1	覆土		Ⅳa	図版37	
IH-7	図Ⅳ－12－1	IH7・22×1	床		Ⅳa	図版38	図No.22
	図Ⅳ－12－2	IH7・22×4	床		Ⅳa	図版38	図No.22
	図Ⅳ－12－3	IH7・22×1	床		Ⅳa	図版38	図No.22
	図Ⅳ－12－4	IH7・23×1	床下		Ⅳa	図版38	図No.23
	図Ⅳ－12－5	IH7・22×1	床		Ⅳa	図版38	図No.22
	図Ⅳ－12－6	IH7・22×1	床		Ⅳa	図版38	図No.22
	図Ⅳ－12－7	IH7・31×1	床		Ⅳa	図版38	図No.31
	図Ⅳ－12－8	IH7・12×1	床		Ⅳa	図版38	図No.12
	図Ⅳ－12－9	IH7・30×2	覆土		Ⅳa	図版38	図No.30
	図Ⅳ－12－10	IH7・22×1	床		Ⅳa	図版38	図No.22
	図Ⅳ－12－11	IH7・7×1	焼土上		Ⅳa	図版38	図No.7
	図Ⅳ－12－12	IH7・9×1	覆土		Ⅳa	図版38	図No.9
	図Ⅳ－12－13	IH7・30×3	覆土		Ⅳa	図版38	図No.30
	図Ⅳ－12－14	IH7・33×1	覆土		Ⅳa	図版38	HP-3

遺構名	図番号	調査区・遺物番号×点数	層位	同一個体未接合	分類	図版番号	備　考
IH-8	図Ⅳ－14－1	IH8・13×1	覆土		Ⅳa	図版38	HP-4
	図Ⅳ－14－2	IH8・7×1	覆土		Ⅳa	図版38	
	図Ⅳ－14－3	IH8・1×2	覆土		Ⅳa	図版38	
	図Ⅳ－14－4	IH8・5×1	覆土		Ⅳa	図版38	
	図Ⅳ－14－5	IH8・11×1	覆土		Ⅳa	図版38	HP-2
	図Ⅳ－14－6	IH8・1×2	覆土		Ⅳa	図版38	
	図Ⅳ－14－7	IH8・5×1	覆土		Ⅳa	図版38	
	図Ⅳ－14－8	IH8・1×1	覆土		Ⅳa	図版38	
	図Ⅳ－14－9	IH8・15×1	覆土		Ⅳa	図版38	HP-6
	図Ⅳ－14－10	IH8・9×1	覆土		Ⅳa	図版38	
IH-9	図Ⅳ－15－1	IH9・2×1	覆土4 床下	B49・5×1	Ⅳa	図版38	
		IP61・3×1, IS6・2×1, 0Z50・3×1 0Z50・7×1, 0Z50・9×3,0Z50・10×1 0Z51・1×2, A48・5×2, A48・8×2 A48・10×1, A48・12×1, A49・20×2 B48・12×2, B48・18×1, C50・12×1 計23	Ⅳ				
IP-20	図Ⅳ－18－1	IP20・1×4	覆土2		Ⅲa	図版40	
IP-21	図Ⅳ－18－1	IP21・1×1	覆土1		Ⅲa	図版40	
	図Ⅳ－18－2	IP21・5×1	覆土2		Ⅲa	図版40	図No.3
	図Ⅳ－18－3	IP21・1×1, IP21・3×22　計23	覆土1		Ⅲa	図版40	
IP-22	図Ⅳ－19－1	IP22・3×23, IP22・4×24　計49	覆土1	IP22・3×8, IP22・4×2 計10	Ⅲa	図版40	
	図Ⅳ－19－2	IP22・1×2	覆土1		Ⅲa	図版40	図No.2
IP-24	図Ⅳ－20－1	IP24・1×2	覆土		Ⅳa	図版40	図No.1
IP-25	図Ⅳ－20－1	IP25・5×12	覆土	IP25・5×1	Ⅲa	図版40	
		N78・3×6, N78・4×1, N78・9×3 N78・12×1, N78・17×1　計24	Ⅳ	N77・33×1, N78・3×1 N78・9×2　計7			
	図Ⅳ－20－2	IP25・1×2	覆土		Ⅳa	図版40	図No.1
	図Ⅳ－20－3	IP25・5×1	覆土		Ⅳa	図版40	
	図Ⅳ－20－4	IP25・1×2	覆土		Ⅳa	図版40	図No.1
	図Ⅳ－20－5	IP25・2×1	覆土		Ⅳa	図版40	図No.2
IP-26	図Ⅳ－20－1	IP26・1×3	覆土		Ⅳa	図版40	
IP-28	図Ⅳ－21－1	IP28・1×1	覆土		Ⅳa	図版40	
IP-30	図Ⅳ－21－1	IP30・1×8, IP30・2×15	覆土		Ⅲa	図版40	
		K78・4×1, K78・5×35　計59	Ⅳ				
IP-40	図Ⅳ－24－1	IP40・1×1	Ⅳ		Ⅳa	図版40	
IP-42	図Ⅳ－24－1	IP42・1×1	Ⅳ		Ⅲa	図版40	
IP-45	図Ⅳ－25－1	IP45・1×1	覆土		Ⅳa	図版40	
	図Ⅳ－25－2	IP45・1×1	覆土		Ⅳa	図版40	
	図Ⅳ－25－3	IP45・1×1	覆土			図版40	土製品未成品
IP-52	図Ⅳ－27－1	IP52・1×1	覆土		Ⅳa	図版40	
	図Ⅳ－27－2	IP52・1×1	覆土		Ⅳa	図版40	
	図Ⅳ－27－3	IP52・1×1	覆土		Ⅳa	図版40	
	図Ⅳ－27－4	IP52・1×1	覆土		Ⅳa	図版40	
	図Ⅳ－27－5	IP52・1×1	覆土		Ⅳa	図版40	
IP-54	図Ⅳ－27－1	IP54・1×2	覆土		Ⅳa	図版41	
	図Ⅳ－27－2	IP54・2×1	覆土		Ⅳa	図版41	
	図Ⅳ－27－3	IP54・2×2	覆土		Ⅳa	図版41	
	図Ⅳ－27－4	IP54・2×1	覆土		Ⅳa	図版41	
IP-55	図Ⅳ－28－1	IP55・1×3	覆土		Ⅳa	図版41	
	図Ⅳ－28－2	IP55・1×1	覆土		Ⅳa	図版41	
IP-56	図Ⅳ－28－1	IP56・3×7, IP56・5×1	覆土	IP56・3×1	Ⅳa	図版41	
		M77・18×1, M78・3×2, M78・8×47 計58	Ⅳ	M78・8×20　計21			
	図Ⅳ－28－2	IP56・1×1	覆土		Ⅳa	図版41	
	図Ⅳ－28－3	IP56・3×1	覆土		Ⅳa	図版41	
		M74・11×3, M78・3×2, M78・8×1 計7	Ⅳ				
IP-57	図Ⅳ－29－1	IP57・4×1	覆土6		Ⅲa	図版41	海綿状骨針含む　No.4
	図Ⅳ－29－2	IP57・1×1	覆土6		Ⅳa	図版41	図No.1

遺構名	図番号	調査区・遺物番号×点数	層位	同一個体未接合	分類	図版番号	備　考
IP-57	図Ⅳ－29－3	IP57・2×1	覆土6			図版41	図No.2 土製品未成品
IP-61	図Ⅳ－30－1	IP61・3×1	Ⅳ		Ⅳa	図版41	
	図Ⅳ－30－2	IP61・3×1	Ⅳ		Ⅳa	図版41	
SP-12	図Ⅳ－31－1	SP12・1×6	覆土	SP3・1×1	Ⅳa	図版42	
		土集2・1×3					遺1:P77
		N76・13×1,O76・25×1,O77・6×11 O77・11×1,O77・12×1,O77・13×1 O77・15×1,O77・16×1, O77・22×1 計28	Ⅳ	M77・5×1, O77・22×1 O77・24×1,O77・6×1 O78・27×1　計6			
SP-17	図Ⅳ－31－2	SP17・1×14, SP17・2×21　計35	覆土	SP17・1×1,SP17・2×4	Ⅳa	図版42	
SP-3	図Ⅳ－31－3	SP3・1×1	覆土		Ⅳa	図版42	
SP-7	図Ⅳ－31－4	SP7・1×1	覆土		Ⅳa	図版42	
	図Ⅳ－31－5	SP7・1×3	覆土		Ⅳa	図版42	
SP-8	図Ⅳ－31－6	SP8・1×1	覆土		Ⅳa	図版42	
	図Ⅳ－31－7	SP8・1×1	覆土		Ⅳa	図版42	
SP-9	図Ⅳ－31－8	SP9・1×1	覆土		Ⅳa	図版42	
SP-13	図Ⅳ－31－9	SP13・1×1	覆土		Ⅳa	図版42	
SP-15	図Ⅳ－31－10	SP15・1×1	覆土		Ⅳa	図版42	
SP-21	図Ⅳ－31－11	SP21・1×1	覆土		Ⅳa	図版42	
SP-25	図Ⅳ－31－12	SP25・1×1	覆土		Ⅳa	図版42	
SP-27	図Ⅳ－31－13	SP27・1×1	覆土		Ⅳa	図版42	
	図Ⅳ－31－14	SP27・1×4	覆土		Ⅳa	図版42	
		N77・2×2, N77・6×2, N77・16×5 N77・34×1　計14	Ⅳ				
SP-35	図Ⅳ－31－15	SP35・1×2	覆土		Ⅳa	図版42	
	図Ⅳ－31－16	SP35・1×2	覆土		Ⅳa	図版42	
	図Ⅳ－31－17	SP35・1×1	覆土		Ⅳa	図版42	
SP-37	図Ⅳ－31－18	SP37・3×1	覆土		Ⅳa	図版42	
SP-29	図Ⅳ－31－19	SP29・3×3	覆土		Ⅳa	図版42	
SP-36	図Ⅳ－31－20	SP36・1×2	覆土		Ⅳa	図版42	
	図Ⅳ－31－21	SP36・1×1	覆土		Ⅳa	図版42	
SP-38	図Ⅳ－31－22	SP38・1×1	覆土		Ⅳa	図版42	
SP-45	図Ⅳ－31－23	SP45・1×1	覆土		Ⅳa	図版42	
SP-46	図Ⅳ－31－24	SP46・1×1	覆土		Ⅳa	図版42	
SP-47	図Ⅳ－31－25	SP47・1×1	覆土		Ⅳa	図版42	
SP-57	図Ⅳ－31－26	SP57・1×3	覆土		Ⅳa	図版42	
SP-54	図Ⅳ－31－27	SP54・1×1	覆土		Ⅳa	図版42	
SP-57	図Ⅳ－31－28	SP57・2×1	覆土		Ⅳa	図版42	
SP-61	図Ⅳ－31－29	SP61・1×2	覆土		Ⅳa	図版42	
	図Ⅳ－31－30	SP61・1×1	覆土		Ⅳa	図版42	
SP-62	図Ⅳ－31－31	SP62・1×1	覆土		Ⅳa	図版42	
	図Ⅳ－31－32	SP62・2×1	覆土		Ⅳa	図版42	
		O77・2×1　計2	Ⅳ				
SP-64	図Ⅳ－31－33	SP64・1×1	覆土		Ⅳa	図版42	
	図Ⅳ－31－34	SP64・1×1	覆土		Ⅳa	図版42	
SP-69	図Ⅳ－31－35	SP69・1×1	覆土		Ⅳa	図版42	
SP-70	図Ⅳ－31－36	SP70・1×1	覆土		Ⅳa	図版42	
水場遺構	図Ⅳ－43－1	水場1・39a×1, 水場1・41a×7 水場1・41e×1, 水場1・42a×1	Ⅳ		Ⅲa	図版43	図No.39,41,42
		水場1・44×5, 水場1・52×1 水場1・53×3, 水場1・58×1　計20		水場1・52×1			
	図Ⅳ－43－2	水場1・135×4	Ⅳ		Ⅲa	図版43	図No.87
		L73・1×1,M73・6×1　計6		L72・2×2, M72・3×2 M73・6×3　計7			
	図Ⅳ－43－3	水場1・30a×1, 水場1・37a×7 水場1・40a×4	Ⅳ		Ⅲa	図版44	図No.30・37・40
		水場1・44×1, 水場1・52×4 水場1・53×7, 水場1・58×5 水場1・91×13 N73・20×3 水場1・53×1　計45		水場1・52×2 水場1・58×1 水場1・91×1 N73・20×1　計5 N74・14×14			
	図Ⅳ－43－4	N74・8×21, N74・13×2 N74・14×56, N74・34×2　計82	Ⅳ		Ⅲa	図版43	

遺構名	図番号	調査区・遺物番号×点数	層位	同一個体未接合	分類	図版番号	備　考
水場遺構	図Ⅳ－43－5	水場1・44×7, 水場1・58×1 N72・5×1, N73・20×2　計11	Ⅳ		Ⅲa	図版44	
	図Ⅳ－43－6	水場1・131×1	Ⅳ		Ⅲa	図版44	図No.83
		水場1・44×3, 水場1・52×2 水場1・53×5 N73・4×1, N73・20×4, N74・34×3 計19					
	図Ⅳ－44－7	水場1・37d×5, 水場1・38×1 水場1・39a×1	Ⅳ	水場1・58×2	Ⅲa	図版44	図No.37・38・39
		水場1・44×3, 水場1・47×2 水場1・53×6, 水場1・55×21 水場1・56×1, 水場1・57×4 水場1・58×31 N73・13×1, N73・20×6　計82					
	図Ⅳ－44－8	水場1・42a×1	Ⅳ		Ⅲa	図版44	図No.42
		水場1・52×1,水場1・91×2 N73・1×2, N73・4×2, N73・6×6 N73・12×2, N73・13×1, N73・20×1 N74・4×1, N74・6×2, N74・14×1 計22					
	図Ⅳ－44－9	水場1・44×4, 水場1・52×1 水場1・53×2 N73・12×1, N73・13×2, N73・20×1 N74・22×2, N74・34×2　計15	Ⅳ	N73・21×1	Ⅲa	図版44	
	図Ⅳ－44－10	水場1・39b×1	Ⅳ		Ⅲa	図版45	図No.39
		水場1・44×1, 水場1・52×2 水場1・53×1, 水場1・58×1 N73・21×5　計11					
	図Ⅳ－44－11	水場1・44×1 N73・12×2, N73・20×2,N73・21×1 N74・6×7, N74・14×3, N74・16×6 N74・20×2, N74・34×3　計27	Ⅳ	N74・13×1	Ⅲa	図版45	
	図Ⅳ－44－12	水場1・44×2, 水場1・52×1 N73・11×1, N73・21×5, N74・20×1 N74・34×6　計16	Ⅳ	N74・16×2,N74・21×1 計24	Ⅲa	図版45	
	図Ⅳ－45－13	水場1・41e×2	Ⅳ		Ⅳa	図版45	図No.41
		N73・12×2, N74・5×27,N74・6×30 N74・7×1　計60		N74・5×2, N74・6×6 N74・7×1　計9			
	図Ⅳ－45－14	水場1・42a×15	Ⅳ	水場1・42a×2	Ⅳa	図版45	図No.42
		水場1・46×3, 水場1・47×1　計19					
	図Ⅳ－45－15	水場1・53×2	Ⅳ		Ⅲa	図版46	
		水場1・58×1　計3					
	図Ⅳ－45－16	水場1・35×1	Ⅳ		Ⅲa	図版45	図No.35
	図Ⅳ－46－17	水場1・53×1	Ⅳ		Ⅲa	図版46	
		水場1・130a×3　計4					図No.82
	図Ⅳ－46－18	水場1・116×1	Ⅳ		Ⅲa	図版46	図No.68
	図Ⅳ－46－19	水場1・53×1	Ⅳ		Ⅲa	図版46	
	図Ⅳ－46－20	水場1・130a×1	Ⅳ		Ⅲa	図版46	図No.82
	図Ⅳ－46－21	水場1・44×1	Ⅳ		Ⅲa	図版46	
	図Ⅳ－46－22	水場1・53×1	Ⅳ		Ⅲa	図版46	
	図Ⅳ－46－23	水場1・53×1	Ⅳ		Ⅲa	図版46	
	図Ⅳ－46－24	水場1・44×1	Ⅳ		Ⅲa	図版46	
	図Ⅳ－46－25	水場1・91×1	Ⅳ		Ⅲa	図版46	
	図Ⅳ－46－26	水場1・44×1	Ⅳ		Ⅲa	図版46	
	図Ⅳ－46－27	水場1・53×1	Ⅳ		Ⅲa	図版46	
	図Ⅳ－46－28	水場1・53×1	Ⅳ		Ⅲa	図版46	
	図Ⅳ－46－29	水場1・53×3, 水場1・91×1　計4	Ⅳ		Ⅲa	図版46	
	図Ⅳ－46－30	水場1・104×3	Ⅳ		Ⅲa	図版46	図No.56
	図Ⅳ－46－31a	水場1・53×1, 水場1・54×1　計2	Ⅳ		Ⅲa	図版46	
		水場1・37b×1					図No.37
		水場1・134×1					図No.86
		N73・13×1, N73・20×2　計5					
	図Ⅳ－46－31b	水場1・53×1	Ⅳ		Ⅲa	図版46	

遺構名	図番号	調査区・遺物番号×点数	層位	同一個体未接合	分類	図版番号	備　考
水場遺構	図Ⅳ－46－31c	水場1・91×1 N73・20×1，N73・21×2　計4	Ⅳ		Ⅲa	図版46	
	図Ⅳ－46－32a	水場1・53×1 N73・6×1　計2	Ⅳ		Ⅲa	図版46	
	図Ⅳ－46－32b	水場1・53×1	Ⅳ		Ⅲa	図版46	
	図Ⅳ－46－33	水場1・44×1，水場1・53×1 水場1・54×1，水場1・58×1　計4	Ⅳ		Ⅲa	図版47	
	図Ⅳ－46－34	水場1・106×2	Ⅳ		Ⅲa	図版47	図No.58
		水場1・107×1					
		水場1・109×1					図No.61
		水場1・113a×5					図No.65
		N72・7×1　計10					沢
	図Ⅳ－46－35	水場1・97×1	Ⅳ		Ⅲa	図版47	図No.49
	図Ⅳ－46－36	水場1・40a×1	Ⅳ		Ⅲa	図版46	図No.40
	図Ⅳ－47－37	水場1・45×1	Ⅳ		Ⅲb	図版47	海綿骨針混入
	図Ⅳ－47－38	水場1・49×1 N73・15×1，N73・17×2　計4	Ⅳ		Ⅳa	図版47	
	図Ⅳ－47－39a	水場1・44×2，水場1・48×1 水場1・50×1，水場1・52×1 水場1・53×2，水場1・54×4 水場1・58×3　計14	Ⅳ		Ⅳa	図版47	
	図Ⅳ－47－39b	水場1・53×1，水場1・54×1 水場1・58×2，グリッド不明×1　計5	Ⅳ		Ⅳa	図版47	
	図Ⅳ－47－40	水場1・41c×1	Ⅳ		Ⅳa	図版47	図No.41
		N76・4×1，N77・22×1　計3					
	図Ⅳ－47－41	水場1・58×1	Ⅳ		Ⅳa	図版48	
	図Ⅳ－47－42a	水場1・58×2	Ⅳ		Ⅳa	図版48	
	図Ⅳ－47－42b	水場1・91×1	Ⅳ		Ⅳa	図版48	
	図Ⅳ－47－43	水場1・52×1	Ⅳ		Ⅳa	図版48	
	図Ⅳ－47－44	水場1・39b×1	Ⅳ		Ⅳa	図版48	図No.39
	図Ⅳ－47－45	水場1・58×1	Ⅳ		Ⅳa	図版48	
	図Ⅳ－47－46	水場1・51×1	Ⅳ		Ⅳa	図版48	
	図Ⅳ－47－47	水場1・52×1	Ⅳ		Ⅳa	図版48	
	図Ⅳ－47－48	水場1・56×1	Ⅳ		Ⅳa	図版48	
	図Ⅳ－47－49	水場1・36×1	Ⅳ		Ⅳa	図版48	図No.36
	図Ⅴ－47－50	水場1・37b×1，水場1・41d×1	Ⅳ		Ⅳa	図版48	図No.37，図No.41
		N73・18×3　計5					
	図Ⅳ－47－51	水場1・128×2　計2	Ⅳ		Ⅳa	図版48	図No.80
	図Ⅳ－47－52	水場1・53×1	Ⅳ		Ⅳa	図版48	
	図Ⅳ－47－53	水場1・94×1	Ⅳ		Ⅳa	図版48	図No.46
		M72・3×2　計3			Ⅳa		
	図Ⅳ－47－54	水場1・53×1	Ⅳ		Ⅳa	図版48	
	図Ⅳ－47－55	水場1・44×1，水場1・52×1 水場1・53×1	Ⅳ		Ⅳa	図版48	
		N73・20×1，N73・21×1　計5					
	図Ⅳ－47－56	水場1・41a×2，水場1・41e×1	Ⅳ		Ⅳa	図版48	図No.41
		水場1・51×1，水場1・58×1 N73・21×1　計3					
IF-1	図Ⅳ－56－1	IF1・1×1	覆土		Ⅳa	図版51	図No.1　焼土上
IS-4	図Ⅳ－57－1	IS3・3×18	覆土		Ⅳa	図版51	
		O78・28×5　計23	Ⅳ	O78・18×1，O78・26×1 O78・31×2，P78・10×1 P78・19×2　計7			
	図Ⅳ－57－2a	IS3・3×8	覆土		Ⅳa	図版51	図No.9
		O78・25×1　計9	Ⅳ		Ⅳa		
	図Ⅳ－57－2b	IS3・3×2	覆土		Ⅳa	図版51	図No.9
		O78・15×2　計2	Ⅳ		Ⅳa		石囲い炉・横
	図Ⅳ－57－3	IS3・1×1	覆土		Ⅳa	図版51	
	図Ⅳ－57－4	IS3・3×1	覆土		Ⅳa	図版51	図No.9
IS-5	図Ⅳ－58－1	IS5・1×1	Ⅳ		Ⅳa	図版51	図No.1
		H46・1×2　計3					
	図Ⅳ－58－2	IS5・11×1	Ⅳ		Ⅳa	図版51	図No.11
		IS5・15×1　計2					図No.15

遺構名	図番号	調査区・遺物番号×点数	層位	同一個体未接合	分類	図版番号	備　考
IS-5	図Ⅳ－58－3	IS5・25×1	Ⅳ		Ⅳa	図版51	図No.25
IS-6	図Ⅳ－61－1	IS6・1×8 A47・7×1, A47・21×6, A49・5×1 A49・9×1, A49・12×3, A49・14×1 計21	Ⅳ	A47・15×1,A49・22×1 E44・1×1　計3	Ⅳa	図版51	網代痕
	図Ⅳ－61－2	IS6・1×1 A47・7×2, A47・17×1, A47・19×7 A48・5×2, A49・3×1, A49・7×3 A49・10×1, A50・2×3, A50・3×1 A50・14×1　計23	Ⅳ	A47・19×2, A50・2×1 計3	Ⅳa	図版51	
	図Ⅳ－61－3	IS6・1×3, IS6・2×1, IS6・9×1 0Z49・5×1, 0Z49・13×1 0Z49・20×1, A47・12×1 A47・21×3, A48・6×1, A49・9×1 A49・12×1, A49・14×2, A49・21×1 計19	Ⅳ		Ⅳa	図版51	
	図-Ⅴ61－4	IS6・1×1	Ⅳ		Ⅳa	図版51	図No.1
		A47・17×1, A47・18×1, A48・1×3 A48・14×1, A48・20×1　計8					
	図Ⅳ－61－5	IS6・1×1	Ⅳ		Ⅳa	図版51	図No.1
	図Ⅳ－61－6	IS6・1×1	Ⅳ		Ⅳa	図版51	図No.1
	図Ⅳ－61－7	IS6・1×1	Ⅳ		Ⅳa	図版51	図No.1
	図Ⅳ－61－8	IS6・1×1	Ⅳ		Ⅳa	図版51	図No.1
	図Ⅳ－61－9	IS6・1×3　計3	Ⅳ		Ⅳa	図版51	図No.1
	図Ⅳ－61－10	IS6・1×1	Ⅳ		Ⅳa	図版51	図No.1
		A47・21×1　計2			Ⅳa	図版51	
	図Ⅳ－61－11	IS6・1×1	Ⅳ		Ⅳa	図版51	図No.1
IS-7	図Ⅳ－61－1	IS7・1×1	覆土1		Ⅳa	図版51	図No.1
IS-8	図Ⅳ－58－1	IS8・1×1	Ⅳ		Ⅳa	図版51	小礫集中N-77
	図Ⅳ－58－2	IS8・1×1	Ⅳ		Ⅳa	図版51	小礫集中N-77
	図Ⅳ－58－3	IS8・1×1	Ⅳ		Ⅳa	図版51	小礫集中N-77
	図Ⅳ－58－4	IS8・1×1	Ⅳ		Ⅳa	図版51	小礫集中N-77

※（ ）内のNo.は、図Ⅳ-42で遺物に付している番号に一致する。

表５　遺構出土掲載石器等一覧

遺構名		挿図番号	図版番号	掲載番号	遺物名	層位	遺物番号	材質	細分類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	光沢	備考
IH	5	IV-5	37	16	スクレイパー	フク土	13	頁岩	刃部外湾	7.92	9.85	1.72	125.1		同一母岩
				17	Uフレイク	フク土	25-1	頁岩		5.5	3.35	1.07	15.82		
				18	Rフレイク	フク土	14-4	頁岩		5.38	5.96	1.21	35.23		
				19	Uフレイク	フク土	14-1	頁岩		5.94	6.41	0.87	27.6		
				20	Uフレイク	フク土	14-2	頁岩		4.86	5.63	0.82	27.81		
				21	Uフレイク	フク土	14-3	頁岩		5.5	7.02	1.09	44.05		
				22	石核	フク土	27-1	頁岩	その他	5.16	7.53	2.64	97.16		
		IV-6		23	たたき石	フク土	22	Ap-Ba		65	53	45	234.70		
				24	台石	IV	32	Hb-An		311	271	90	12kg		立石２
	6	IV-9	38	19	石斧	床	1	蛇紋岩		-9.45	3.8	1.57	83.12		
				20	スクレイパー	フク土	11-1	頁岩	抉入	3.3	2.88	1.17	11.85		
				21	Uフレイク	フク土	29	頁岩		5.07	3.76	1.62	17.5		
				22	Uフレイク	フク土	18	流紋岩		4.19	7.13	0.93	23.85		
		IV-10		23	たたき石	床	4	Hb-An		88	74	55	516.00		取上No.4
				24	石皿	炉１	55	Hb-An		503	193	126	19.5kg		被熱　接合
				25	台石	床面撹乱	60	Hb-An		380	265	116	11.0kg		
	7	IV-12	39	15	篦状石器	焼土上	6	珪質岩	撥状	7.41	3.75	1.52	40.49		刃部摩耗
				16	Uフレイク	床	1	頁岩		5.86	3.23	0.56	6.92		
				17	Uフレイク	床	2	頁岩		4.64	2.68	0.79	8.78		
				18	Uフレイク	床	10	頁岩		3.71	5.92	1.36	25.69		
				19	Uフレイク	床	14	頁岩		6.35	3.84	1.36	23.09		
				20	加工痕ある礫	フク土	18	Gra		107	150	72	1700.00		No.18
	8	IV-14		11	Uフレイク	フク土	6	頁岩		4.85	3.18	0.79	9.18		
				12	たたき石	IV	18	An		214	96	57	1620.00		HF-4　接合
				13	たたき石	IV	17	An		110	97	102	1600.00		HF-3　被熱
	10	IV-16	39	1	スクレイパー	フク土1	1	頁岩	刃部外湾	6.91	5.12	0.95	31.34		
IP	21	IV-18	43	4	石皿		6	Hb-An		389	446	101	25.5kg		No.1
	22	IV-19		3	扁平打製石器	フク土2	5	An		75	144	27	405.40		No.4
				4	扁平打製石器	フク土2	6	An		105	170	40	1050.00		No.5
	23	IV-17		1	スクレイパー	フク土	1	頁岩	刃部外湾	7.07	4.28	1.38	44.14	あり	
	31	IV-22		1	扁平打製石器	フク土2	2	An		88	162	27	610.00		No.2
				2	扁平打製石器	フク土1	1	An		107	172	41	1000.00		No.1
	44	IV-25		1	石皿片	フク土2	1	Hb-An		252	262	106	7.0kg		No.1
SP	43	IV-39	42	37	篦状石器	フク土	1	頁岩	撥状	77.13	3.38	1.3	34.34		
	69			38	たたき石	フク土	2	Ap-Ba		65	71	56	389.00		
水場遺構	1	IV-48	49	57	スクレイパー	IV	59	頁岩	刃部外湾	4.29	8.10	0.96	34.98	あり	刃部摩耗
				58	スクレイパー	IV	42c	頁岩	鋸歯状	6.11	4.20	1.61	40.55	あり	腹面打瘤に敲打痕
				59	Rフレイク	IV	83	褐色珪化岩		6.32	7.07	1.59	66.34	あり	
				61	Uフレイク	IV	79	頁岩		6.67	9.31	2.15	89.26		
				60	石核	IV	99	頁岩	サイコロ状	2.93	3.15	1.68	10.99		
				62	磨製石斧	IV	69	緑色泥岩		-5.18	3.71	0.99	35.34		
		IV-49		63	たたき石	IV	1	An		126	64	33	371.80		図No.1　N-73
				64	たたき石	IV	61	An		66	99	24	226.40		
				65	扁平打製石器	IV	110	Px-An		107	186	41	1000.00		図No.62
				66	扁平打製石器	IV	16	Hb-An		83	183	43	1040.00		図No.16
				67	扁平打製石器	IV	29	Hb-An		102	157	37	950.00		図No.29
				68	扁平打製石器	IV	76	Ap-Ba		57	119	35	268.30		
				69	北海道式石冠	IV	3	Hb-An		89	131	55	800.00		図No.3
				70	北海道式石冠片	IV	6+7	Px-An		88	138	52	960.00		図No.6（図No.7と接合）
				71	北海道式石冠	IV	66	An		56	82	48	338.40		
				72	加工痕ある礫	IV	93	Gra		132	73	48	710.00		図No.45
				73	石皿	IV	137	Px-An		352	262	93	11.0kg		図No.89
		IV-50		74	石皿	IV	21	Px-An		410	288	235	30.0kg		図No.21
		IV-51		75	石皿	IV	18	Hb-An		383	444	126	27.5kg		図No.18
FC	2	IV-52	50	1	石鏃	IV上位	5	黒曜石	有茎平基	(1.62)	1.45	0.32	0.56		
				2	石核	IV	3-1	黒曜石	両極	3.74	2.81	1.16	10		
	4	IV-53		1	石鏃	IV上位	2	黒曜石	有茎平基	2.90	1.72	0.27	0.74		
				2	石核	IV上位	4	黒曜石	両極	3.65	4.51	2.22	34.48		剥片接合
				3	石核	IV上位	5-2	黒曜石	盤状	1.84	4.07	1.58	8.99		剥片接合
				4	石核	IV上位	5-3	黒曜石	その他	1.96	3.48	3.17	16.6		剥片接合
	5	IV-54		1	石鏃	IV	1	黒曜石	尖基	2.61	2.26	0.66	3.09		
				2	石鏃	IV	2	黒曜石	有茎平基	2.33	1.64	0.36	0.67		
				3	楔形石器	IV上位	3	黒曜石		3.92	2.59	0.93	7.64		
IS	7	IV-61	51	2	たたき石	フク土1	2	Px-An		106	65	36	312.60		No.2

表6　包含層出土掲載土器一覧（復元土器）Ⅲ群a類　A地区

図番号	調査区・遺物番号×点数	層位	同一個体未接合	図版番号	備　考
図V-1-2-1	W32・2×18	Ⅳ	W32・2×2	図版52	
図V-1-2-2	O31・1×10, O31・3×6, O32・1×7, O32・2×15 P31・1×8, P31・3×2　計48	Ⅳ	O31・1×11, O31・3×5 O32・1×2, O32・2×1 P31・1×4, S26・1×2 T26・1×1, U33・1×1 U34・1×3　計30	図版52	
図V-1-2-3	0Y44・8×1,0Y44・9×1, 0Y44・12×3 0Y44・14×16, 0Y44・21×15, 0Y45・1×5 0Y45・6×1, 0Y45・7×21, 0Y45・8×17 0Y45・9×26, 0Y45・10×2, 0Y45・11×6 0Y45・14×1, 0Y45・15×2, I50・1×1 計118	Ⅳ	0Y44・1×1, 0Y44・12×2 0Y44・14×2, 0Y44・18×1 0Y44・21×2, 0Y45・1×5 0Y45・7×2, 0Y45・8×7 0Y45・9×17, 0Y45・10×4 0Y46・1×1, 0Z46・9×1 0Z50・2×2　計47	図版52	

表7　包含層出土掲載土器一覧（拓本土器）Ⅲ群a類　A地区

図番号	調査区・遺物番号×点数	層位	図版番号	備　考
図V-1-3-4	N28・4×3, N28・8×1, U32・1×2, U32・2×2 計8	Ⅳ	図版53	
図V-1-3-5	N29・4×1, Q28・2×1	Ⅳ	図版52	
図V-1-3-6	N29・2×2	Ⅳ	図版52	
図V-1-3-7	H47・1×1	Ⅳ	図版52	
図V-1-3-8	C35・1×1	Ⅳ	図版52	
図V-1-3-9a	K26・3×1, L27・20×1　計2	Ⅳ	図版52	
図V-1-3-9b	L26・2×3	Ⅳ	図版52	
図V-1-3-10	L27・6×1	Ⅳ	図版52	
図V-1-3-11	0Z45・9×1	Ⅳ	図版52	
図V-1-3-12	W62・1×3	Ⅳ	図版53	
図V-1-3-13	K27・9×1	Ⅳ	図版53	
図V-1-3-14a	W63・2×2, Z63・1×1　計3	Ⅳ	図版53	魚骨回転文（ニシンタイプ）
図V-1-3-14b	X64・1×1	Ⅳ	図版53	魚骨回転文（ニシンタイプ）
図V-1-3-15	Q34・1×1	Ⅳ	図版53	
図V-1-3-16	T26・1×3	Ⅳ	図版53	
図V-1-3-17	U29・1×1	Ⅳ	図版53	
図V-1-3-18	K26・3×2	Ⅳ	図版53	
図V-1-3-19	W30・4×1	Ⅳ	図版53	
図V-1-3-20	W28・1×1	Ⅳ	図版53	
図V-1-3-21	A45・1×1	Ⅳ	図版53	
図V-1-3-22	B40・2×1, B42・1×1　計2	Ⅳ	図版53	

表8　包含層出土掲載土器一覧（復元土器）Ⅳ群a類　A地区

図番号	調査区・遺物番号×点数	層位	同一個体未接合	図版番号	備　考
図V-1-4-1	0Y45・1×18,0Y45・4×1,0Y45・8×14,0Y45・10×3 0Z45・3×5, 0Z45・8×5, 0Z45・10×1　計47	Ⅳ	0Z44・1×1,0Z44・5×1 0Z44・9×1,0Z45・2×2 0Z45・5×1, D49・2×1 F49・3×1　計8	図版53	
図V-1-4-2	0Y42・4×1, 0Y43・1×1, 0Y43・3×3, 0Y43・5×2 計7	Ⅳ		図版54	
図V-1-4-3	0Y44・1×1, 0Y44・3×1, 0Y44・5×6, 0Y44・10×2 0Y44・11×2, 0Y44・17×1, 0Y45・15×1　計14	Ⅳ	0Y44・10×1	図版54	
図V-1-4-4a	0Y45・1×9 0Y45・8×7,0Y45・14×1,0Y45・15×6 0Y46・1×1, 0Y46・4×3, 0Y46・9×1, 0Z45・3×1 0Z46・3×4, 0Z46・7×6　計39	Ⅳ	0Y45・1×18 0Y45・4×1,0Y45・8×9 0Y45・10×4 0Y45・14×2 0Y45・15×1 0Y46・1×3, 0Z45・3×3 0Z46・7×3, 0Z46・9×3 計47	図版54	図上復元
図V-1-4-4b	0Y44・8×2, 0Y45・1×5, 0Y45・8×8, 0Y45・10×2 0Y45・13×2, 0Y45・15×1　計20	Ⅳ		図版54	図上復元
図V-1-5-5	D41・4×1, G50・1×29, G50・2×4, H50・1×43 H50・2×14, H50・3×6　計97	Ⅳ	G50・1×65 G50・2×11, H44・2×4 H50・1×51, H50・2×8 H50・3×10　計149	図版54	
図V-1-5-6	B49・5×11, B49・6×1, B49・7×1, B50・7×3 C50・1×1, C50・8×2, C50・10×1　計20	Ⅳ	B49・5×3, B49・7×2 C49・4×1　計6	図版54	

図番号	調査区・遺物番号×点数	層位	同一個体未接合	図版番号	備　考
図V-1-5-7	B48・3×2, B48・10×4, B48・13×1, B48・14×1 B48・15×2, B48・22×1, B49・5×1, B49・7×1 B49・14×1　計14	Ⅳ	B48・15×1	図版55	
図V-1-5-8	B49・2×1, B49・5×6, B49・11×3, B50・4×1 B50・9×8, B50・14×1, B50・16×1　計21	Ⅳ		図版55	
図V-1-5-9	土集6・15×4	Ⅳ上位		図版55	遺15:B47d
	B47・2×7, B47・3×1, B47・4×1, B47・7×1 B47・8×3, B47・9×1　計18	Ⅳ	A47・14×1, A48・13× 1 B47・3×1　B47・4×6 B47・7×1, C48・4×1 C48・8×1, C48・11×1 計13		
図V-1-5-10	土集6・12×15	Ⅳ上位		図版55	遺12:B47d
	土集11・1×9, 土集11・2×1	Ⅳ			遺1:0Y47b 遺2:0Y46c
	0Y44・7×2, 0Y46・2×1, 0Y46・8×1, 0Y47・2×3 0Y47・11×1,0Y47・13×2,0Z46・1×3,0Z46・7×1 0Z47・5×1, 0Z47・7×1, 0Z47・14×1, 0Z48・3×1 B47・2×1, E41・2×1, F42・2×1　計46	Ⅳ	0Y46・2×1,0Y46・8×1 0Y47・11×1 0Z47・5×1,0Z47・16×1 A47・14×1, A48・5×1 B49・4×1, C49・7×2 C49・12×1, D45・1×1 E49・2×1 F51・未注記×1 G47・1×2,G53・3×1 計17		
図V-1-5-11	F47・2×2, F48・1×6, H45・1×3　計11	Ⅳ	F48・1×2	図版55	
図V-1-5-12	J30・2×5, J30・5×1　計6	Ⅳ		図版55	
図V-1-5-13	A48・8×2, A48・13×1, A48・19×5, A48・21×5 A48・23×1, B47・2×1, C48・9×1　計16	Ⅳ	A48・21×1	図版56	
図V-1-6-14	0Z49・30×5	Ⅳ上位	0Z49・30×2	図版56	
	0Z48・28×67,　0Z49・31×5	Ⅳ中位	0Z48・28×33		
	0Z47・28×1, 0Z48・11×3, 0Z48・12×1 0Z48・13×7,0Z48・22×1,0Z48・24×1,0Z48・29×1 0Z49・11×2,0Z49・16×1,0Z49・18×1,0Z49・24×1 0Z49・26×1, 0Z49・28×2, C48・9×1　計101	Ⅳ	0Y47・2×1 0Z48・11×1 0Z48・13×8 0Z48・21×1 0Z49・5×3,0Z49・13×3 0Z49・24×1 0Z49・28×3 0Z49・29×2 0Z49・31×1,A47・15×1 D47・6×1, E48・2×1 F50・4×1　計63		
図V-1-6-15	L26・1×1, L26・7×1, L27・7×1, L27・12×2 L27・27×1　計6	Ⅳ		図版56	
図V-1-6-16	K27・2×1, L27・10×1, L27・12×3, L27・16×1 L27・22×1　計7	Ⅳ	N27・2×2	図版56	
図V-1-6-17	I30・3×3, I30・4×3, I31・3×4, I31・7×1, J30・2×6 J30・5×8, J31・7×3, K31・1×2, K31・3×1 K31・4×1　計32	Ⅳ	I30・3×1, I30・4×3 I31・3×3, I31・5×1 J29・2×1, J30・4×5 L28・1×1, L28・5×1 計16	図版56	
図V-1-6-18	C46・1×1, C46・4×2, C46・6×1, C46・8×5 C46・9×3, D46・1×27, D46・2×2, D47・5×1 D47・8×2　計44	Ⅳ	0Z47・5×1 0Z47・7×1, A45・3×1 A48・4×1, A48・8×2 A48・11×1,A48・13×2 A48・24×1, C49・6×1 D50・4×1, F52・3×1 計13	図版56	
図V-1-6-19	土集6・5×1, 土集6・6×1	Ⅳ上位		図版57	遺5:B48b 遺6:A48b
	0Z50・3×3, 0Z50・7×1, 0Z50・8×1, 0Z50・14×1 A48・21×1, A49・9×1, B48・10×1, B48・18×1 計12	Ⅳ			
図V-1-6-20	0Z47・7×2, 0Z47・10×1, 0Z48・22×1, A47・30×1 A48・5×2　A48・6×1, A48・12×1, A48・13×1 A48・21×1　計11	Ⅳ		図版57	
図V-1-7-21	A46・2×1, B45・4×1, B46・1×1, B47・2×5 B47・4×1, B47・11×1, C46・1×3, C46・3×1 C46・4×1, C47・1×1, D44・1×1, D44・2×2 D47・6×1, D48・4×1, E44・1×1, E46・1×1 E46・5×1, E47・1×2, E47・3×3, E47・5×1 E48・1×1, E48・2×1, E49・3×3, F46・1×1 F47・1×1, F48・1×1, G47・1×1, H46・1×1　計40	Ⅳ	B48・5×1, C46・1×1 D48・4×1, E48・1×1 E49・2×1, E52・3×1 計6	図版57	

図番号	調査区・遺物番号×点数	層位	同一個体未接合	図版番号	備　考
図V-1-7-22	B48・3×1, B48・10×2, B48・12×1, C47・1×1 C48・2×2, C48・6×4, C48・8×6, C48・9×1 C48・13×1, C49・4×1, C49・14×1, E45・1×1 計22	Ⅳ	B48・5×5, B48・12×4 B48・17×1, C48・6×1 C48・8×1, C49・7×1 G46・1×2　計15	図版57	
図V-1-7-23	土集6・7×17	Ⅳ上位	土集6・7×3	図版57	遺7:A48b
	A47・9×1, A48・8×2, A48・19×2, A48・12×2 計24	Ⅳ	A47・23×1, B47・10×1 計5		
図V-1-7-24	A47・9×11, A47・13×6, C47・3×1　計18	Ⅳ	A46・3×1, A46・4×1 A46・5×5, A47・9×9 A47・11×1, A47・12×1 計18	図版57	
図V-1-7-25	C48・2×1, C48・4×1, C48・6×3, C48・8×4 C48・9×2, C48・11×5, C48・14×1, C49・4×1 C49・6×1, C49・9×1,D47・2×2, D47・4×1 計23	Ⅳ	C48・4×1	図版58	
図V-1-7-26	B49・2×4, B49・5×6, C49・4×8, C49・6×3 C49・7×6, C49・9×1, C49・10×1, C49・12×5 C49・14×2, C50・8×1, C50・10×1, C50・17×1 計39	Ⅳ		図版58	
図V-1-8-27	0Y46・1×1, 0Y46・8×1, 0Y46・10×1, 0Y47・2×1 0Y47・11×12, 0Y47・13×3　計19	Ⅳ		図版58	
図V-1-8-28	土集6・12×3	Ⅳ上位		図版58	遺12:B47d
	A48・23×1, A48・24×1, B47・6×1, B47・7×1 B47・9×1　計8	Ⅳ	A48・21×2		
図V-1-8-29	C49・4×12, C49・6×5, C49・9×1, C49・10×1 C50・12×2　計21	Ⅳ	C49・4×4, C49・5×2 C49・6×16,C49・13×1 C50・4×1,C50・12×1 計25	図版58	
図V-1-8-30	土集6・10×17	Ⅳ上位		図版58	遺10:B48a
	A48・6×2, A48・8×1, A48・10×1, B48・4×1 B48・5×1, B48・10×8, B48・11×1, B48・12×1 B48・18×1, B50・8×3　計37	Ⅳ	0Y47・12×1 A49・20×1,B48・10×1 B49・5×1,C48・9×1 F51・2×3　計8		
図V-1-8-31	A48・5×2, C48・2×2, C48・6×1, C48・8×1 C48・9×1, D49・10×1　計8	Ⅳ	C48・6×2, C48・8×1 計3	図版59	
図V-1-8-32	A48・8×1, B48・3×8, B48・10×7, B48・12×6 B48・16×1　計23	Ⅳ	B48・4×1, B48・12×2 B50・2×1, B50・7×3 B50・9×1　計8	図版59	
図V-1-8-33	土集6・3×5, 土集6・9×1, 土集6・17×3	Ⅳ上位		図版59	遺3:A47c,遺9:B48a 遺17:B48ad
	土集11・1×5	Ⅳ	土集11・1×4		遺1:0Y47b
	0Y47・2×18,0Y47・13×2,0Y47・7×5,0Y47・11×1 0Z46・3×1, 0Z46・8×1,A48・6×1, A48・11×1 A48・13×9, A48・19×1, A48・21×1, A48・29×1 A49・14×1, B47・2×3, B47・4×4, B47・10×3 B47・11×1, B48・12×5, B48・17×1, B50・9×5 C47・3×1, C47・7×2, C50・10×1, C51・1×1 D50・5×1, D51・2×12, D51・4×12, D51・6×5 D51・7×2, D51・8×2, D52・1×1, E50・1×1 F48・2×1, F51・5×1　計122	Ⅳ	0Y47・7×1,0Y47・8×2 0Z47・17×1 A47・12×1, A48・6×3 A48・8×1, A48・11×6 A48・13×1, A49・4×2 A49・9×3, A49・10×1 A49・12×3, A49・14×1 A49・16×1, A50・4×1 B47・4×2, B48・12×1 B50・7×2, B50・8×1 B50・9×1, B50・11×2 C49・6×1, C49・7×1 C50・10×1, D51・2×5 D51・4×3, D51・6×2 D51・7×2, E47・5×1 F51・5×1, H51・1×1 未注記×1　計60		
図V-1-9-34	土集6・13×4, 土集6・14×22	Ⅳ上位	土集6・13×2 土集6・14×5　計7	図版59	遺13・14:B49a
	A47・19×2, A48・21×1, A48・23×1, A48・24×1 A49・7×1, A49・10×1, A49・18×1, A49・20×1 A49・22×1, B48・5×1, B48・13×2, B48・14×1 B48・15×3, B49・2×1, B49・4×1, B49・5×14 B49・7×11, B49・9×3, B49・11×4, B49・12×2 B49・14×2　計81	Ⅳ	A47・9×1, A47・19×1 A48・13×1, A48・19×2 A48・24×1, A49・7×1 A49・9×2, A49・16×1 A49・18×1, A49・21×1 B48・3×1, B49・5×1, B49・6×1, B49・7×6, B49・9×1, B49・11×1, 計30		
図V-1-9-35	土集5・1×78, 土集5・2×16	Ⅳ	土集5・1×22 土集5・2×3　計25	図版59	遺1:A41b・c 遺2:B41b・c
	A47・24×1, B47・4×1, B49・2×1, B50・7×1 計98				

図番号	調査区・遺物番号×点数	層位	同一個体未接合	図版番号	備　考
図V-1-10-36	Q28・1×1, Q29・4×8　計9	Ⅳ	Q28・1×2, Q28・3×3 Q29・2×1,Q29・4×1　計7	図版59	
図V-1-10-37	0Y47・11×10, 0Y47・12×1, 0Y47・13×19 0Y47・14×19　計49	Ⅳ		図版60	
図V-1-10-38	0Z49・31×2	Ⅳ中位		図版60	
	0Z48・24×1, 0Z49・1×6, 0Z49・5×1, 0Z49・9×1 0Z49・10×5, 0Z49・28×1,0Z50・1×2, 0Z50・3×1 0Z50・13×2, A50・2×1　計23	Ⅳ	0Z50・1×1, 0Z50・6×2 A47・21×1　計4		
図V-1-10-39	土集8・1×14, 土集8・2×15	Ⅳ	土集8・1×1	図版60	遺1・2:0Z48c
	0Z48・3×1, 0Z48・5×2, 0Z48・11×3 0Z49・13×1　計36		0Z49・13×2　計3		
図V-1-10-40	0Z49・1×3, 0Z49・8×3, 0Z49・11×1,0Z49・23×1 0Z50・3×3　計11	Ⅳ		図版60	
図V-1-10-41	C45・1×14, C45・2×1　計15	Ⅳ		図版60	
図V-1-10-42	土集12・1×10　計10	Ⅳ		図版60	遺1:C35
図V-1-10-43	J26・1×1, J26・2×2, J26・3×4, J26・4×3 J27・1×1, J27・3×2, L27・7×3, L27・9×1 M26・1×2, M27・3×3, M27・12×1, M28・12×11 計34	Ⅳ	J26・1×2, J26・2×1 J26・4×2, L27・19×1 M27・12×1,M28・12×2 N27・2×1, N28・2×2 計12	図版61	
図V-1-11-44	土集14・3a×38	Ⅳ上位	土集14・3a×10	図版61	遺3a:T27b
	土集14・1×67, 土 集14・2×28　計133	Ⅳ	土集14・1×12 土集14・2×7 土集14・不明×1　計30		遺1・2:T27b
図V-1-12-45	土集9・1×36	Ⅳ上位	土集9・1×18	図版61	遺1:A50c
	0Z49・30×8	Ⅳ上位			
	0Z49・17×6, C49・4×1　計51	Ⅳ			
図V-1-12-46	土集6・15×4	Ⅳ上位		図版61	遺15:B47d
	B47・2×1, B47・4×1　計6	Ⅳ			
図V-1-12-47	W30・1×21, W30・3×3　計24	Ⅳ		図版61	
図V-1-12-48	V37・1×6, V38・1×19, W38・1×1　計26	Ⅳ	U37・1×1, V38・1×2 計3	図版61	
図V-1-13-49	E52・4×1, F51・3×1, G51・2×1, J49・1×2 J51・2×2, K51・1×2, 不明×1　計10	Ⅳ	J51・2×2, J51・3×2 計4	図版62	
図V-1-13-50	M29・2×27	Ⅳ		図版62	
図V-1-13-51	J31・3×1, K30・4×1, K31・2×4, K31・3×3 K31・6×1, K31・7×1, M29・1×1　計12	Ⅳ		図版62	
図V-1-13-52	A47・5×1, A47・8×1, A47・11×1, A47・14×16 計19	Ⅳ	A46・3×2, A47・14×6 計8	図版62	
図V-1-13-53	土集6・6×1	Ⅳ上位		図版62	遺6:A48b
	0Z49・12×1,0Z49・24×1,0Z49・28×4,A47・11×1 A48・10×5, A48・13×1, A48・21×1, A49・4×1 B47・10×3, B48・4×1, B48・5×3, B48・11×1 B48・12×6, B48・14×1　計31	Ⅳ	A49・4×2		
図V-1-13-54	A47・11×1, A47・14×11　計12	Ⅳ		図版62	
図V-1-13-55	L27・24×1, L28・1×6, L28・2×4, L28・6×2 L28・8×8, L28・10×9, L28・12×4, L28・15×8 L28・18×9, L28・20×1　計52	Ⅳ	I29・1×1, J28・2×1 K24・7×1, K30・4×2 K30・3×3, K31・6×1 K32・2×2, K27・1×3 K27・3×2, K27・6×6 K27・7×1, K27・10×3 L27・1×3, L27・3×2 L27・9×1, L28・1×5 L28・2×2, L28・8×2 L28・10×3, L28・15×3 M28・2×1, M28・3×1 M28・15×1 未注記×3　計53	図版63	
図V-1-13-56	0Y45・8×2, 0Z45・4×1, 0Z45・8×21, 0Z45・11×2 A45・4×6　計32	Ⅳ	0Y41・1×1,0Y44・12×1 0Y45・8×4,0Y45・14×1 0Z45・4×1, 0Z45・8×1 A43・2×1, A46・5×1 計11	図版63	
図V-1-14-57	土集6・3×2, 土集6・9×2	Ⅳ上位		図版63	遺3:A47c,遺9:B48a
	土集6・2×30	Ⅳ	土集6・2×1		遺2:A48b
	A47・4×1, A47・5×1, A47・15×1, A47・24×1 A47・25×1, A47・26×6　計45				

図番号	調査区・遺物番号×点数	層位	同一個体未接合	図版番号	備　考
図V-1-14-58	0Z47・3×1, 0Z47・5×5,0Z47・9×8,0Z47・10×18 0Z47・15×1, 0Z47・16×1, 0Z47・19×7 0Z48・25×1, 0Z49・5×1,0Z49・7×1,0Z49・26×1 A47・5×1, A47・9×1, A47・10×23, A47・11×15 A47・12×10,A47・14×1,A47・24×2,A47・26×3 A47・29×3, A47・30×4, A47・31×1, A47・32×2 A48・27×1, A48・28×1, A48・31×4, A48・36×3 計120	Ⅳ	0Y47・9×1, 0Z47・5×3 0Z47・9×1 0Z47・10×2,A47・10×2 A47・11×1, A47・12×4 A47・32×1, A48・27×1 A48・29×1, C41・2×1,C42・1×1 計19	図版63	
図V-1-14-59	L27・17×1, L28・4×2, L28・6×4, L28・8×7 L28・10×2, L28・12×1, L28・15×1 不明未注記×1, M28・5×1　計20	Ⅳ		図版63	
図V-1-14-60	A47・1×1, A47・24×1, A48・14×3, A48・20×1 B48・5×1, B48・11×3, B48・12×2　計12	Ⅳ	A47・4×1, A47・11×1 A47・25×1　計3	図版63	
図V-1-14-61	0Z45・7×1, 0Z46・3×1, 0Z46・9×2, 0Z47・4×1 0Z47・7×1, 0Z47・9×1, 0Z47・15×1,0Z47・22×1 A46・3×1, A48・18×1　計11	Ⅳ	0Y47・3×1,0Z47・9×5 0Z47・10×2 0Z47・24×1 0Z47・26×1, A46・4×1 A47・25×1, A48・4×1 A48・6×1　計14	図版63	
図V-1-14-62	Q28・1×22, Q29・1×12, Q29・2×4, Q29・3×2 計40	Ⅳ	Q28・1×6, Q29・1×19 Q29・2×3, Q29・3×4 計32	図版63	
図V-1-15-63	0Z49・5×4,0Z49・13×4,0Z49・15×2,0Z49・16×4 計14	Ⅳ	0Z47・7×1, 0Z48・19×1, A47・12×3 A48・6×3, A50・2×1, B42・3×1 計10	図版63	
図V-1-15-64	土集6・13×22, 土集6・14×2	Ⅳ上位	土集6・13×4 土集6・14×1	図版63	遺13:14:B49a
	B49・3×1, B49・6×4, B49・7×2, B49・13×1 F52・2×1　計33	Ⅳ	B49・7×2　計7		
図V-1-15-65	L26・1×3, L27・3×4, L27・9×1, L27・11×2 L27・17×3　計13	Ⅳ	L27・17×1	図版64	
図V-1-15-66	土集6・8×102	Ⅳ上位	土集6・8×16	図版65	遺8:B48a
図V-1-15-67	土集7・3×22	Ⅳ上位	土集7・3×1	図版65	遺7:0Z44d
	0Z44・3×1, 0Z44・4×1, 0Z44・7×1, 0Z44・9×1 0Z44・10×1　計27	Ⅳ			
図V-1-15-68	0Y44・1×3, 0Y44・8×2　計5	Ⅳ	0Y44・8×3	図版65	
図V-1-15-69	0Z44・7×2, 0Z44・10×2　計4	Ⅳ	0Z44・3×2, 0Z44・7×1　計3	図版65	
図V-1-15-70	D49・3×2, D49・4×1, D49・8×1　計4	Ⅳ		図版65	
図V-1-16-71	I29・4×1, I31・3×1, I31・4×5, I31・5×2 I31・8×17, I31・9×30, I31・10×3, I31・11×15 I32・2×1, J28・1×1, J31・3×2, J31・4×7 J31・5×1, J31・8×9, J31・9×14, J31・10×59 J31・11×3, J32・2×2, J32・3×1　計174	Ⅳ	G50・1×1, H30・1×1 H30・2×1, H30・3×1 I31・4×6, I31・5×8 I31・8×13, I31・9×20 I31・10×1, I31・11×3 I32・1×1, J31・3×1 J31・4×2, J31・10×11 J31・9×3　計73	図版65	
図V-1-17-72	D48・1×1, D48・6×12, D48・7×4, D48・8×1 D48・9×2, E48・2×1, E49・2×1, E49・9×1 計23	Ⅳ	E47・2×1, E48・2×2 計3	図版66	
図V-1-17-73	0Z49・30×15	Ⅳ上位		図版66	
	0Z49・5×3　計18	Ⅳ			
図V-1-17-74	土集6・3×1, 土集6・5×9, 土集6・6×4	Ⅳ上位		図版66	遺3:A47c, 遺5:B48b, 遺6:A48b
	A48・18×1, B47・4×2, B48・9×1, B48・12×6 C50・10×3, C50・14×1, C50・16×4　計32	Ⅳ	C50・14×5,C50・16×2 計7		
図V-1-17-75	土集6・6×10	Ⅳ上位		図版66	遺6:A48b
	0Z47・16×1, 0Z48・31×1, A48・8×1, A48・9×1 A48・11×3, A48・13×1, A48・21×1　計19	Ⅳ	0Z48・21×1,A46・4×1 A48・13×1　計3		
図V-1-17-76	J31・2×1, J31・4×5, J31・9×1, K31・5×2 K31・7×1　計10	Ⅳ		図版66	
図V-1-17-77	J50・1×1, J50・2×3, J51・4×6, J51・1×1　計11	Ⅳ	H51・1×1	図版66	
図V-1-17-78	土集8・2×1, 土集8・3×6			図版67	遺2・3:0Z48c
	0Z48・5×2,0Z48・13×2,0Z48・19×1,0Z48・21×5 0Z49・5×1, A48・13×1, A48・21×1, D51・4×6 D51・7×1, D51・8×3　計30	Ⅳ			
図V-1-17-79	U28・1×30, U28・3×2　計32	Ⅳ		図版67	
図V-1-17-80	B49・6×2, B49・7×7, B49・14×1, B50・4×1 B50・9×2, B50・12×1, B50・13×1　計15	Ⅳ		図版67	
図V-1-17-81	土集6・14×24	Ⅳ上位	土集6・14×9	図版67	遺14:B49a
	A49・9×1, A49・22×1, B48・5×2, B49・7×21 B49・9×6, B49・12×2, B49・14×1　計57	Ⅳ	B48・12×1, B49・7×3 B49・9×2　計15		

図番号	調査区・遺物番号×点数	層位	同一個体未接合	図版番号	備　考
図V-1-18-82	土集6・16×16	Ⅳ上位	土集6・16×1	図版67	遺16:B48a
	A47・15×1, A47・25×2, A47・28×2, A48・6×1 A48・11×4, A48・13×7, A48・21×3, A48・38×1 B48・12×3, B48・14×1, B48・16×6　計47	Ⅳ			
図V-1-18-83	R29・1×5, R29・2×1　計6	Ⅳ		図版67	
図V-1-18-84	A48・11×2, A48・12×2, A48・13×1, A48・21×3 計8	Ⅳ	A48・11×1	図版68	
図V-1-18-85	I28・2×17, I28・3×1　計18	Ⅳ		図版68	
図V-1-18-86	B40・1×5, B41・1×1, C40・3×1, C40・6×2 C41・3×1, D37・1×1, D40・1×8, D40・4×7 D40・8×26, D41・1×16　計68	Ⅳ	B41・1×1, C40・2×1 D38・1×2, D39・2×1 D39・3×1, D40・1×24 D40・8×2, D41・1×12 D42・1×1　計45	図版68	
図V-1-18-87	土集8・1×2, 土集8・3×112	Ⅳ上位	土集8・3×51	図版68	遺1・3:0Z48c
	0Z47・20×7,0Z48・5×5,0Z48・6×1,0Z48・13×11 0Z48・18×4, 0Z48・19×10, 0Z48・21×7 0Z48・24×2,0Z48・26×1,0Z49・5×1 0Z49・16×1　0Z49・18×1　計165	Ⅳ	0Y46・1×1 0Z47・20×3,0Z48・4×1 0Z48・5×5,0Z48・13×9 0Z48・19×2 0Z48・21×1 0Z48・29×2,0Z49・5×1 0Z49・13×7 0Z49・28×1 A48・11×2　計86		

表 9　包含層出土掲載土器一覧（拓本土器）Ⅳ群a類　A地区

図番号	調査区・遺物番号×点数	層位	図版番号	備　考
図V-1-19-88	0Z47・8×3, 0Z47・9×4　計7	Ⅳ	図版69	
図V-1-19-89	Y57・1×4	Ⅳ	図版68	
図V-1-19-90a	0Y44・2×4, 0Y44・3×1, 0Y44・5×2　計7	Ⅳ	図版68	
図V-1-19-90b	0Y44・10×1	Ⅳ	図版68	
図V-1-19-91	C48・1×1	Ⅳ	図版68	
図V-1-19-92	0Y47・4×1	Ⅳ	図版68	
図V-1-19-93	C49・3×1, D48・3×1　計2	Ⅳ	図版69	
図V-1-19-94a	L27・8×1	Ⅳ	図版69	
図V-1-19-94b	L27・8×1, L27・9×3, L27・12×1, L27・19×1, O29・1×1 計7	Ⅳ	図版69	
図V-1-19-95	0Z49・2×1, 0Z49・23×1　計2	Ⅳ	図版69	
図V-1-19-96	E46・1×1, I50・2×1　計2	Ⅳ		
図V-1-19-97a	0Y47・11×1, 0Z47・3×5, 0Z47・7×2, 0Z50・13×1 A48・12×1, D46・1×1, G46・1×1, G46・2×1 計13	Ⅳ	図版69	
図V-1-19-97b	0Y47・2×1, 0Y47・13×1, 0Z47・7×1, 0Z48・3×1 0Z48・29×1, 0Z50・13×1　計6	Ⅳ	図版69	
図V-1-19-98a	J27・2×7	Ⅳ	図版70	
図V-1-19-98b	J26・5×2	Ⅳ	図版70	
図V-1-19-98c	J26・5×4	Ⅳ	図版70	
図V-1-20-99a	O30・1×1	Ⅳ	図版70	
図V-1-20-99b	P30・1×3, P30・2×1　計4	Ⅳ	図版70	
図V-1-20-99c	P30・2×2	Ⅳ	図版70	
図V-1-20-99d	P30・2×1, P30・3×1　計2	Ⅳ	図版70	
図V-1-20-100	B48・10×1, C50・10×2, G45・1×2, H45・1×1, I45・1×1 計7	Ⅳ	図版70	
図V-1-20-101a	K26・1×1, K26・2×1, K27・11×1　計3	Ⅳ	図版70	
図V-1-20-101b	K26・2×1	Ⅳ	図版70	
図V-1-20-101c	K26・1×2	Ⅳ	図版70	
図V-1-20-102a	C48・2×1, C48・11×2, C48・8×2, C48・13×3, C50・17×1 計9	Ⅳ	図版70	
図V-1-20-102b	B50・7×1, C48・2×1, C48・9×1, E49・3×1計4	Ⅳ	図版70	
図V-1-20-102c	B48・5×1, B48・10×5, C48・6×1, C48・8×3, C48・9×1 計11	Ⅳ	図版70	
図V-1-20-103	I28・2×8	Ⅳ	図版71	
図V-1-20-104	G46・2×2, G47・1×1　計3	Ⅳ	図版71	
図V-1-20-105a	土集11・2×2	Ⅳ	図版71	遺2:0Y46c
	0Y44・7×1, D44・1×1　計4			
図V-1-20-105b	0Z46・1×1	Ⅳ	図版71	
図V-1-20-106	J30・2×1	Ⅳ	図版71	
図V-1-20-107a	K27・1×1, L27・12×3　計4	Ⅳ	図版71	

図番号	調査区・遺物番号×点数	層位	図版番号	備　考
図V-1-20-107b	L27・12×3	Ⅳ	図版71	
図V-1-20-107c	L27・12×4, L27・21×1　計5	Ⅳ	図版71	
図V-1-20-108a	土集6・3×2, 土集6・6×3, 土集6・15×2	Ⅳ上位	図版71	遺3:A47c, 遺6:A48b 遺15:B47d
	A48・8×1, A48・19×2, A48・21×5, A48・24×1, B47・2×1 B47・3×1, B47・5×1, B47・7×1, B47・8×1　計21	Ⅳ		
図V-1-20-108b	土集6・19×6	Ⅳ上位	図版71	遺19:A48b
	A48・12×2　計8	Ⅳ		
図V-1-21-109a	C36・2×1, L27・7×2, L27・16×1, L27・23×1, M27・7×1 M28・7×1, M28・12×1　計8	Ⅳ	図版72	
図V-1-21-109b	I27・1×2, L27・5×1, L28・5×2, L28・9×1, L28・11×1 M27・7×2, M28・14×1	Ⅳ	図版72	
	L27・26×1　計11			
図V-1-21-109c	I27・1×1, I27・2×1, I28・2×2, I28・3×1　計5	Ⅳ	図版72	
図V-1-21-110	I30・3×2, I30・4×4　計6	Ⅳ	図版72	
図V-1-21-111	B47・4×1, B48・8×2, B48・10×2　計5	Ⅳ	図版72	
図V-1-21-112	B47・4×2, B47・10×1, B48・8×2, B48・10×5 B48・12×6　計16	Ⅳ	図版72	
図V-1-21-113	土集6・9×2	Ⅳ上位	図版72	遺9:B48a(A47,48)
	B47・2×3, B48・2×1, B48・10×1　計7	Ⅳ		
図V-1-21-114	L28・9×2, M28・2×4, M28・14×1　計7	Ⅳ	図版73	
図V-1-21-115	L27・13×9	Ⅳ	図版73	
図V-1-21-116	0Z48・11×1, A48・2×1, A48・4×1, A48・5×4, A48・6×3 A48・8×2, A48・37×2, B48・3×1　計15	Ⅳ	図版73	
図V-1-21-117	土集6・9×5	Ⅳ上位	図版73	遺6:B48a(A47,48)
図V-1-21-118	K27・2×3	Ⅳ	図版73	
図V-1-22-119a	土集11・1×1, 土集11・2×15 0Y46・10×2, 0Y47・2×1　計19	Ⅳ	図版73	遺1:0Y47b, 遺2:0Y46c
図V-1-22-119b	土集11・2×2	Ⅳ	図版73	遺2:0Y46c
図V-1-22-119c	土集11・1×4, 土集11・2×5	Ⅳ	図版74	遺1:0Y47b, 遺2:0Y46c
	0Y45・15×1, 0Y46・1×1, 0Y46・10×1　計12			
図V-1-22-120	A46・4×1, B42・3×1, B45・1×6, B45・3×1, B46・6×1 B49・7×1, D44・1×1　計12	Ⅳ	図版74	
図V-1-22-121	C37・1×1, D40・1×1　計2	Ⅳ	図版74	
図V-1-22-122	A48・19×1, 48・23×1, A48・24×1　計3	Ⅳ	図版74	
図V-1-22-123	B48・3×3, B48・5×1, B48・10×2, B48・12×1, C48・2×1 C48・8×1　計9	Ⅳ	図版74	
図V-1-22-124	B50・7×4, B50・8×4,B50・9×3, B50・10×2, B50・11×1 B50・13×1, C49・4×1, C50・16×1, D49・8×1, D50・1×1 D50・3×1, D50・4×2　計22	Ⅳ	図版75	
図V-1-22-125	0Z44・6×2, 0Z48・3×1, B47・2×1, B47・4×1, B47・7×1 B48・3×1　計7	Ⅳ	図版74	
図V-1-22-126	0Z47・17×1, B49・5×2, B49・8×1　計4	Ⅳ	図版74	
図V-1-22-127	A47・19×1, A49・7×3　計4	Ⅳ	図版74	
図V-1-23-128a	D38・2×2	Ⅳ	図版75	D38b
	E38・1×2　計4			
図V-1-23-128b	D38・2×3	Ⅳ	図版75	D38b
	E38・1×1, E38・2×1　計5			
図V-1-23-129	0Z48・11×1	Ⅳ	図版75	
図V-1-23-130	0Z48・11×1	Ⅳ	図版75	
図V-1-23-131	土集6・4×1	Ⅳ上位	図版75	遺4:A47c
	A47・23×1,A48・13×1,A48・14×1,A48・19×3,A48・20×2 B48・3×1, B48・10×1, C48・2×1　計12	Ⅳ		
図V-1-23-132a	C49・4×2, C49・5×1　計3	Ⅳ	図版76	
図V-1-23-132b	C49・9×1, C49・12×1, C50・11×1　計3	Ⅳ	図版76	
図V-1-23-132c	C49・4×1, C49・6×1　計2	Ⅳ	図版76	
図V-1-23-133a	土集9・2×1	Ⅳ上位	図版76	遺2:A50d
	0Z50・3×1, A48・5×1　計3	Ⅳ		
図V-1-23-133b	土集9・1×3	Ⅳ上位	図版76	遺1:A50c
	0Z50・3×2, A50・2×5, A50・3×1　計11	Ⅳ		
図V-1-23-133c	土集9・1×11	Ⅳ上位	図版76	遺1:A50c
	A50・3×1　計12	Ⅳ		
図V-1-23-134	L27・7×1	Ⅳ	図版76	
図V-1-23-135	0Z50・13×2, B50・7×1　計3	Ⅳ	図版76	

図番号	調査区・遺物番号×点数	層位	図版番号	備　考
図V-1-23-136	C49・4×1	Ⅳ	図版77	
図V-1-23-137	0Z49・1×8, 0Z49・5×5, 0Z49・8×1 計14	Ⅳ	図版77	
図V-1-23-138	0Z50・7×1, 0Z50・13×2 計3	Ⅳ	図版77	
図V-1-23-139	0Z50・3×2, 0Z50・13×1, A50・2×1 計4	Ⅳ	図版78	
図V-1-24-140	T27・2×1, T28・2×2, U26・1×1, U27・1×8 計12	Ⅳ	図版77	
図V-1-24-141	C48・2×1	Ⅳ	図版76	
図V-1-24-142	A50・2×1	Ⅳ	図版76	
図V-1-24-143	A49・22×1, C49・4×1, D49・7×1 計3	Ⅳ	図版76	
図V-1-24-144	C50・1×1, E50・6×1 計2	Ⅳ	図版77	
図V-1-24-145	0Z50・3×4	Ⅳ	図版77	
図V-1-24-146	0Y44・4×1	Ⅳ	図版77	
図V-1-24-147a	0Z48・10×1, 0Z48・16×1, 0Z48・22×1 計3	Ⅳ	図版77	
図V-1-24-147b	0Z48・10×1	Ⅳ	図版77	
図V-1-24-147c	0Z48・13×1, 0Z49・1×1, 0Z49・16×1 計3	Ⅳ	図版77	
図V-1-24-148	C40・1×10, C40・2×3 計13	Ⅳ	図版77	
図V-1-24-149	0Z49・1×2, 0Z49・5×2 計4	Ⅳ	図版78	
図V-1-25-150	0Z47・15×2	Ⅳ	図版78	
図V-1-25-151	0Z46・2×2, 0Z46・3×1, A47・11×1 計4	Ⅳ	図版78	
図V-1-25-152	0Y44・1×1, 0Y44・18×1, 0Y44・23×1, 0Z44・7×1 計4	Ⅳ	図版78	
図V-1-25-153	C50・3×1, C50・13×2, C50・16×2, D50・3×1, D50・4×1 D50・7×2 計9	Ⅳ	図版78	
図V-1-25-154a	0Z49・25×2, 0Z49・27×2 計4	Ⅳ	図版78	
図V-1-25-154b	0Z49・9×2	Ⅳ	図版78	骨検出面
	0Z49・24×1, 0Z49・25×1 計4			
図V-1-25-155	A47・5×4 , A47・26×2 計6	Ⅳ	図版78	
図V-1-25-156	B48・4×3, H53・1×1, I53・2×1 計5	Ⅳ	図版79	
図V-1-25-157	D48・5×1, D48・8×1, D49・8×1, D49・10×2 計5	Ⅳ	図版79	
図V-1-25-158	0Z48・12×1, 0Z48・18×1, B47・9×1, D48・5×1 計4	Ⅳ	図版79	
図V-1-25-159	J31・6×1, J31・8×2, J32・1×1 計4	Ⅳ	図版79	
図V-1-25-160	D50・5×1	Ⅳ	図版79	
図V-1-25-161	K27・12×1, K28・1×1 計2	Ⅳ	図版79	
図V-1-25-162	J27・2×1, J26・2×1, L28・2×1 計3	Ⅳ	図版79	
図V-1-25-163	C48・3×1, C49・15×1 計2	Ⅳ	図版79	
図V-1-25-164	0Y46・8×1, 0Y46・9×2, 0Z45・3×2, 0Z45・8 計6	Ⅳ	図版79	
図V-1-25-165	B49・3×1, B49・6×2 計3	Ⅳ	図版79	
図V-1-26-166	C48・3×2, C49・5×1, F51・2×2 計5	Ⅳ	図版80	
図V-1-26-167a	F51・1×2	Ⅳ	図版80	
図V-1-26-167b	F51・2×5, F51・不明×2 計7	Ⅳ	図版80	
図V-1-26-167c	F51・1×2, F51・2×2, F51・6×2, F51・8×1 計7	Ⅳ	図版80	
図V-1-26-168	0Z48・23×1	Ⅳ	図版80	
図V-1-26-169	A48・20×1, A48・28×1 計2	Ⅳ	図版80	
図V-1-26-170	C48・8×1, D47・2×3, E50・2×2, F48・1×1 計7	Ⅳ	図版80	
図V-1-26-171	A47・20×1, A48・4×3, A48・6×1, A48・21×1, A49・4×2 A49・8×1, A49・11×1, A49・22×1, B49・9×1 計12	Ⅳ	図版80	
図V-1-26-172a	D40・1×1, E36・1×1, E39・1×2, E39・2×1, F39・1×5 計10	Ⅳ	図版80	
図V-1-26-172b	D40・1×1, D40・5×2	Ⅳ	図版80	
	D40・9×4 計7			D40・bc
図V-1-26-173	0Y44・13×3, 0Y44・18×1 計4	Ⅳ	図版81	
図V-1-26-174a	0Y44・8×1, 0Y44・18×3 計4	Ⅳ	図版81	
図V-1-26-174b	0Y44・8×1, 0Y44・18×1 計2	Ⅳ	図版81	
図V-1-26-175	0Z49・13×1, 0Z50・1×2, 0Z50・7×1, 0Z50・8×1 計5	Ⅳ	図版81	
図V-1-26-176a	H38・3×4	Ⅳ	図版81	
図V-1-26-176b	H38・3×5	Ⅳ	図版81	
図V-1-26-177	H38・3×1	Ⅳ	図版81	
図V-1-27-178	0Z43・3×1,A47・11×5,A47・12×7,A47・25×1, B47・10× B49・6×1 C49・6×1, C49・13×1, E47・2×1, E48・2×1 E49・1×1 E49・4×1, F49・1×1 計24	Ⅳ	図版81	
図V-1-27-179	B49・4×2, B49・7×2, B50・3×1, B50・9× 計8	Ⅳ	図版82	

図番号	調査区・遺物番号×点数	層位	図版番号	備　考
図Ⅴ-1-27-180	B47・1×1	Ⅳ	図版82	
図Ⅴ-1-27-181	0Y42・3×1, 0Z43・2×2, 0Z43・3×1, A43・2×計5	Ⅳ	図版82	
図Ⅴ-1-27-182	C46・3×2, C46・6×2, C47・2×1　計5	Ⅳ	図版82	
図Ⅴ-1-27-183	A48・6×3, A48・10×1, A48・11×2, A48・13×1, B48・5×1 計8	Ⅳ	図版82	
図Ⅴ-1-27-184	0Y44・3×2, 0Y44・5×2　計4	Ⅳ	図版82	
図Ⅴ-1-27-185	F51・1×3, F51・7×1, F51・8×3　計7	Ⅳ	図版82	
図Ⅴ-1-27-186	0Z49・30×2	Ⅳ上位	図版82	
	0Z49・31×1　計3	Ⅳ中位	図版82	
図Ⅴ-1-27-187	D40・1×10, D40・4×5, D41・1×13, D41・4×1, E39・3×1 F39・2×2, H50・3×1　計33	Ⅳ	図版83	

表 10　包含層出土掲載土器一覧　Ⅳ群ｂ類　A地区

図番号	調査区・遺物番号×点数	層位	同一個体未接合	図版番号	備　考
図Ⅴ-1-28-1	0Z49・1×4, 0Z49・5×2, 0Z49・11×3, 0Z49・19×4 0Z49・25×1, A47・19×4, A48・5×4, A48・6×1 A48・12×1, A49・3×1, A50・2×8, A50・3×3 A50・4×1, B50・7×5, B50・14×5　計47	Ⅳ	0Z49・5×1, 0Z49・11×2 0Z49・20×1, A48・6×2 A50・2×1, A50・3×1 計8	図版83	
図Ⅴ-1-28-2	0Z49・8×1, 0Z49・11×1, 0Z49・23×4, B49・5×5 B50・2×2, B50・7×2, C49・4×1, C49・7×6 C50・8×3　計25	Ⅳ	A50・2×2, B50・12×1 計3	図版83	
図Ⅴ-1-28-3	土集9・1×2, 土集9・2×63	Ⅳ上位	土集9・1×1 土集9・2×21	図版83	遺1:A50c 遺2:A50d
	0Z50・6×1, E52・4×1　計67	Ⅳ	未注記×1　計23		
図Ⅴ-1-28-4	土集9・2×5	Ⅳ上位		図版83	遺2:A50d
図Ⅴ-1-28-5	D46・1×1, D47・8×1, E47・1×1, E47・4×1 E47・5×10, F35・1×1　計15	Ⅳ		図版84	
図Ⅴ-1-29-6	土集10・1×71	Ⅳ	土集10・1×1	図版84	遺1:D-36
図Ⅴ-1-29-7	H38・2×37, I38・1×19　計56	Ⅳ		図版84	
図Ⅴ-1-29-8	A41・2×8, A41・4×4　計12	Ⅳ		図版84	
図Ⅴ-1-29-9	0Z40・2×4, D41・3×1　計5	Ⅳ		図版84	
図Ⅴ-1-30-10	H38・2×2, I38・1×33　計35	Ⅳ	H38・1×1, H38・2×1 I38・1×7　計9	図版84	
図Ⅴ-1-30-11	A40・1×4	Ⅳ		図版85	
図Ⅴ-1-30-12	0Y45・5×1, 0Z46・5×1　計2	Ⅳ		図版85	
図Ⅴ-1-30-13a	D40・7×1	Ⅳ		図版85	
図Ⅴ-1-30-13b	D40・3×1, D40・7×1　計2	Ⅳ		図版85	
図Ⅴ-1-30-14	B41・2×1	Ⅳ		図版85	
図Ⅴ-1-30-15	0Z47・11×1	Ⅳ		図版85	
図Ⅴ-1-30-16	0Y45・6×1	Ⅳ		図版85	

表 11　包含層出土掲載土器一覧　Ⅴ群ｂ類

図番号	調査区・遺物番号×点数	層位	同一個体未接合	図版番号	備　考
図Ⅴ-1-31-1	X48・1×2	Ⅳ		図版85	同一個体　A地区
図Ⅴ-1-31-2	X48・1×2	Ⅳ		図版85	〃　A地区
図Ⅴ-1-31-3	X48・1×4	Ⅳ		図版85	〃　A地区
図Ⅴ-1-31-4	X48・1×1	Ⅳ		図版85	〃　A地区
図Ⅴ-1-31-5	X48・1×1	Ⅳ		図版85	〃　A地区
図Ⅴ-1-31-6	X48・1×3	Ⅳ		図版85	〃　A地区
図Ⅴ-1-31-7	A63・2×5, B63・2×28, B63・3×6 B63・6×5　計44	Ⅳ	A63・2×3, B63・2×15 B63・3×5　計23	図版85	B地区

表 12　包含層出土掲載土器一覧　Ⅵ群a類　A地区

図番号	調査区・遺物番号×点数	層位	同一個体未接合	図版番号	備　考
図Ⅴ-1-32-1	土集13・2×46	Ⅳ	土集13・2×46	図版86	遺2:N28a
	M28・6×1, M28・9×4, M28・10×3 M28・13×2　計56				
図Ⅴ-1-32-2	0Y44・5×1, 0Y44・6×10, 0Y44・24×1 0Y45・2×7, 0Z45・6×1　計20	Ⅳ		図版87	

図番号	調査区・遺物番号×点数	層位	同一個体未接合	図版番号	備　考
図V-1-32-3	土集13・2×22	Ⅳ	土集13・2×221 E37・1×2　計223	図版86	遺2:N28a
図V-1-32-4	0Y44・22×3	Ⅳ		図版86	
図V-1-32-5	0Y44・22×23	Ⅳ		図版86	
図V-1-32-6	土集4・1×20, 土集4・2×8, 土集4・3×60 L53・3×1, L54・3×8, M52・1×3 N53・1×8, N54・1×4　計112	Ⅳ	土集4・1×5 土集4・3×5 L54・3×2,M52・1×1 M53・1×1, N53・1×2 N54・1×1, U27・3×1 計18	図版87	遺1・2・3:M54d

表 13　包含層出土掲載土器一覧（復元土器）Ⅲ群a類　B地区

図番号	調査区・遺物番号×点数	層位	同一個体未接合	図版番号	備　考
図V-1-35-1	N74・15×7, N74・16×3, N74・34×1　計11	Ⅳ	N74・6×1	図版87	
図V-1-35-2	N73・20×1, N73・21×3, N74・14×4 N74・16×9, N74・21×5, N74・22×1 N74・27×9, N74・31×3, N74・33×1 N74・34×10　計46	Ⅳ	N73・21×1, N74・27×3 計4	図版87	
図V-1-35-3	J77・1×3, J77・5×2, J77・6×50　計55	Ⅳ	J77・6×14	図版87	

表 14　包含層出土掲載土器一覧（拓本土器）Ⅲ群a類　B地区

図番号	調査区・遺物番号×点数	層位	図版番号	備　考
図V-1-39-25	L73・2×1 L73・5×3, L73・6×1　計5	Ⅳ	図版91	沢トレンチ 沢トレンチ
図V-1-39-26	N74・16×4	Ⅳ	図版91	
図V-1-39-27	L73・1×1	Ⅳ	図版91	沢トレンチ
図V-1-39-28	N76・14×1	Ⅳ	図版91	
図V-1-39-29	L73・1×3	Ⅳ	図版91	沢トレンチ
図V-1-39-30	N73・13×1	Ⅳ	図版91	
図V-1-39-31	Z79・2×1, Z79・6×1, W79・7×1　計3	Ⅳ	図版92	
図V-1-39-32	K74・12×1	Ⅳ	図版92	
図V-1-39-33	N73・2×2	Ⅳ	図版92	

表 15　包含層出土掲載土器一覧（拓本土器）Ⅲ群ｂ類　B地区

図番号	調査区・遺物番号×点数	層位	図版番号	備　考
図V-1-39-34	X80・2×1, X80・8×1, Y80・1×3　計5	Ⅳ	図版92	
図V-1-39-35	Y80・1×2, Y80・8×1　計3	Ⅳ	図版92	
図V-1-39-36	Y77・3×1	Ⅳ	図版92	
図V-1-39-37	X79・1×1	Ⅳ	図版92	
図V-1-39-38	M73・3×1, N75・7×1　計2	Ⅳ	図版92	
図V-1-39-39	N77・20×1	Ⅳ	図版92	

表 16　包含層出土掲載土器一覧（復元土器）Ⅳ群a類　B地区

図番号	調査区・遺物番号×点数	層位	同一個体未接合	図版番号	備　考
図V-1-35-4	O76・16×2, O76・38×24, O76・41×40　計66	Ⅳ	O76・14×2, O76・38×1 O76・41×2　計5	図版87	
図V-1-35-5	土集15・1×22 Y79・5×4, Y79・6×3, Z78・5×1, Z78・6×3 Z79・9×3, Z79・12×3　計39	Ⅳ Ⅳ	Z78・7×1, Z79・5×2 計3	図版87	遺1:Z79
図V-1-36-6	M75・6×15, M75・9×30, M75・10×3 M76・10×1　M77・3×1　計50	Ⅳ	M75・9×5, M75・10×1 計6	図版88	
図V-1-36-7	M76・14×2, M76・23×1, M78・10×1 N76・11×2, N76・18×1, N77・4×1, N77・10×2 N77・18×1, N77・30×1, N78・2×5, N78・8×1 O78・17×1　計19	Ⅳ		図版88	
図V-1-36-8	N76・18×1, O76・3×4, O76・12×1, O76・20×3 P77・23×1　計10	Ⅳ		図版88	
図V-1-36-9	P76・27×1, P78・27×14, P78・11×3, P78・9×2 計20	Ⅳ		図版88	

図番号	調査区・遺物番号×点数	層位	同一個体未接合	図版番号	備　考
図V-1-36-10	M76・14×1, M76・15×3　計4	Ⅳ	M76・14×3, M76・17×2 N76・11×2 N76・18×1 N76・24×1　計9	図版88	
図V-1-36-11	N76・5×2, N76・6×4, O76・3×1, O76・4×1 O76・12×3, O76・13×4, O76・22×1 O76・26×2　計18	Ⅳ	O76・3×1, O76・4×1 O76・12×1　計3	図版88	
図V-1-36-12	O76・25×5, O76・27×2　計7	Ⅳ		図版89	
図V-1-37-13	M76・3×1, N77・30×1, N77・33×3, N77・35×9 O76・3×3, O76・5×1, O76・12×10, O76・13×1 O76・14×1, O76・20×1, O76・25×20 O76・26×1, O76・42×1　計53	Ⅳ		図版89	
図V-1-37-14	L72・2×1, M74・5×1, M76・14×1, N75・26×1 N76・5×6, N76・8×1, N76・11×2, N76・22×1 N77・23×3, N77・25×1, O76・3×6, O76・12×3 O76・28×1, P77・28×1　計29	Ⅳ	O76・12×1	図版89	
図V-1-37-15	L74・4×6, L74・5×6, L74・13×5, L74・17×4 L74・18×1, L75・3×1, L75・4×15, L75・5×18 L75・10×23, L75・11×28, L75・15×4 L75・18×1　L76・3×1　計113	Ⅳ	L74・4×1, L74・5×2, L75・2×1, L75・4×4 L75・5×2, L75・10×6 L75・11×2, L75・15×1 L75・16×1　計20	図版89	
図V-1-38-16	M75・21×1, N74・3×1, N74・20×5, N75・1×1 N75・9×1, N75・12×1, N75・13×1, N75・17×5 N75・22×1, N76・4×2, N76・6×3, N76・10×2 N76・12×1, N76・13×1, N76・17×1, N76・21×1 N76・23×2, O76・11×1, O76・13×1　計32	Ⅳ	N75・13×1, O76・2×1 O76・13×1　計3	図版89	
図V-1-38-17	O78・15×39	Ⅳ	O78・15×15	図版90	
図V-1-38-18	土集3・1×16	Ⅳ		図版90	遺1:O76
図V-1-38-19	N76・3×1, N76・6×1, N76・7×19, N76・13×8 計29	Ⅳ		図版90	
図V-1-38-20	L77・4×1, L77・5×1, L77・6×3, L77・8×2 L77・11×2　計9	Ⅳ	X77・5×1 X79・6×2　計3	図版90	
図V-1-38-21	W77・4×1, W77・5×6, W78・6×1　計8	Ⅳ		図版90	
図V-1-38-22	O76・3×1, O76・5×1, O76・12×1, O76・14×11 計14	Ⅳ	O76・3×1, O76・5×1, O76・12×1, O76・14×9　計12	図版90	
図V-1-38-23	M77・6×3, M77・7×3, M77・14×17, M77・15×1 N77・6×1　計25	Ⅳ	M77・6×2, M77・14×2 N77・24×1　計5	図版91	
図V-1-38-24	M77・2×1, M77・6×1, M77・7×1, M77・13×4 M77・14×3, N77・15×4, N77・17×2 N77・33×1　O76・13×1　計18	Ⅳ	M76・12×1, N77・24×2 N77・28×1　計4	図版91	

表 17　包含層出土掲載土器一覧（拓本土器）Ⅳ群a類　B地区

図番号	調査区・遺物番号×点数	層位	図版番号	備　考
図V-1-39-40	W79・7×1, Z79・2×1, Z79・6×1　計3	Ⅳ	図版92	
図V-1-39-41	X79・3×1	Ⅳ	図版92	
図V-1-39-42	Z77・11×1	Ⅳ	図版92	
図V-1-39-43	N74・24×1	Ⅳ	図版92	
図V-1-39-44	O77・5×2, O77・12×1　計3	Ⅳ	図版92	
図V-1-39-45	Y79・5×1	Ⅳ	図版92	
図V-1-39-46	O76・37×1	Ⅳ	図版92	
図V-1-40-47	X77・9×20	Ⅳ	図版93	
図V-1-40-48	X79・2×1, X79・3×1　計2	Ⅳ	図版92	
図V-1-40-49	W77・3×1, W77・4×2　計3	Ⅳ	図版93	
図V-1-40-50	L76・2×1	Ⅳ	図版92	
図V-1-40-51	I75・1×1	Ⅳ	図版92	
図V-1-40-52	Z80・9×2	Ⅳ	図版92	
図V-1-40-53	N76・2×1	Ⅳ	図版93	
図V-1-40-54a	W77・3×2, W77・10×1　計3	Ⅳ	図版93	
図V-1-40-54b	W77・6×1, W78・3×3, W78・4×2　計6	Ⅳ	図版93	
図V-1-40-54c	W78・5×2, W78・6×1　計3	Ⅳ	図版93	
図V-1-40-54d	W78・5×2	Ⅳ	図版93	
図V-1-40-55	土集15・1×7	Ⅳ	図版93	遺1:Z79
図V-1-40-56	X79・3×1, X80・4×1　計2	Ⅳ	図版94	
図V-1-40-57	X77・1×2	Ⅳ	図版94	
図V-1-40-58	W77・1×1, W77・3×1　計2	Ⅳ	図版94	

図番号	調査区・遺物番号×点数	層位	図版番号	備　考
図V-1-40-59	Y79・3×1, Y80・1×1　計2	Ⅳ	図版94	
図V-1-40-60	Y77・5×1, Y80・1×1　計2	Ⅳ	図版94	
図V-1-40-61	Y79・7×1, Y80・1×2　計3	Ⅳ	図版94	
図V-1-40-62	Y80・1×1	Ⅳ	図版94	
図V-1-40-63	W79・8×1	Ⅳ	図版94	
図V-1-40-64	Z79・6×1	Ⅳ	図版94	
図V-1-40-65	Y79・6×1, Y80・6×1　計2	Ⅳ	図版94	
図V-1-41-66	L77・1×2	Ⅳ	図版94	
図V-1-41-67	L77・1×2, L77・4×1　計3	Ⅳ	図版94	
図V-1-41-68	O76・8×1	Ⅳ	図版94	
図V-1-41-69	L74・10×1	Ⅳ	図版94	
図V-1-41-70	O76・8×1	Ⅳ	図版94	
図V-1-41-71	L71・2×1, L71・5×1　計2	Ⅳ	図版94	
図V-1-41-72	J78・1×1	Ⅳ	図版94	
図V-1-41-73	O76・33×1	Ⅳ	図版94	
図V-1-41-74	M76・17×1, N76・12×1, N76・20×1　計3	Ⅳ	図版94	
図V-1-41-75	I74・5×1, J74・2×1　計2	Ⅳ	図版94	
図V-1-41-76	M78・2×2	Ⅳ	図版94	
図V-1-41-77a	Z77・2×1, Z77・9×1　計2	Ⅳ	図版94	
図V-1-41-77b	Z77・8×1, Z77・10×1　計2	Ⅳ	図版94	
図V-1-41-77c	Z77・2×1	Ⅳ	図版94	
図V-1-41-78	P77・14×1	Ⅳ	図版94	
図V-1-41-79	O77・10×1	Ⅳ	図版94	
図V-1-41-80	W77・7×1	Ⅳ	図版94	
図V-1-41-81a	M74・5×1, N75・19×1　計2	Ⅳ	図版94	
図V-1-41-81b	N73・18×1	Ⅳ	図版94	
図V-1-41-82	Z66・1×1	Ⅳ	図版94	
図V-1-41-83	N78・2×3	Ⅳ	図版94	
図V-1-41-84	W78・2×2	Ⅳ	図版94	
図V-1-41-85	Y80・7×1	Ⅳ	図版95	
図V-1-41-86	P78・9×1	Ⅳ	図版95	
図V-1-41-87	L75・14×1	Ⅳ	図版95	
図V-1-41-88	O77・22×1, P78・9×2, P78・11×1　計4	Ⅳ	図版95	
図V-1-41-89	L77・3×3	Ⅳ	図版95	
図V-1-41-90	M74・10×1	Ⅳ	図版95	
図V-1-41 91	N77・10×1	Ⅳ	図版95	
図V-1-41-92	O77・22×2	Ⅳ	図版95	
図V-1-41-93a	O77・6×1, O77・11×2, O77・31×1, O77・33×1 計5	Ⅳ	図版95	
図V-1-41-93b	O76・14×3, O76・22×1, O77・13×3　計7	Ⅳ	図版95	
図V-1-41-93c	O76・3×2, O76・12×4, O76・14×2, O76・20×1 O76・22×1, O76・25×1, O77・13×1　計12	Ⅳ	図版95	
図V-1-42-93d	O76・12×13, O76・14×2, O76・25×1, O76・28×2 計18	Ⅳ	図版96	
図V-1-42-93e	N76・11×1, O76・12×2, O76・13×1, O76・14×1 O77・22×2　計7	Ⅳ	図版96	
図V-1-42-94	O74・1×1	Ⅳ	図版95	
図V-1-42-95	K75・5×1	Ⅳ	図版95	
図V-1-42-96	L74・9×1, L74・14×1　計2	Ⅳ	図版95	
図V-1-42-97	L73・3×1	Ⅳ	図版95	沢トレンチ
図V-1-42-98	P77・14×1	Ⅳ	図版95	
図V-1-42-99	M78・2×1	Ⅳ	図版95	
図V-1-42-100	O77・28×1	Ⅳ	図版95	
図V-1-42-101	N76・18×1, O76・3×1, O76・12×2, O76・14×1 計5	Ⅳ	図版95	
図V-1-42-102	M74・5×1	Ⅳ	図版95	
図V-1-42-103	M77・5×2	Ⅳ	図版95	
図V-1-42-104	O77・22×2, O77・25×1　計3	Ⅳ	図版95	
図V-1-42-105	M76・7×1, M76・14×1　計2	Ⅳ	図版96	
図V-1-42-106	O77・22×2, O77・28×4, O77・30×1　計7	Ⅳ	図版96	

図番号	調査区・遺物番号×点数	層位	図版番号	備　考
図V-1-42-107a	P78・9×2, P78・27×4, P78・28×1　計7	Ⅳ	図版96	
図V-1-42-107b	P78・1×1	Ⅳ	図版96	
図V-1-42-108	O77・38×1	Ⅳ	図版96	
図V-1-42-109	L75・2×1	Ⅳ	図版96	
図V-1-42-110a	M74・13×1	Ⅳ	図版97	
図V-1-42-110b	N73・10×1	Ⅳ	図版97	
図V-1-42-110c	M74・13×1, N73・18×1, N74・12×1, N75・4×1, N75・6×1 N76・18×5, N76・22×8　計18	Ⅳ	図版97	
図V-1-43-111	N76・10×1	Ⅳ	図版96	
図V-1-43-112	N74・3×1	Ⅳ	図版96	
図V-1-43-113	L76・3×1	Ⅳ	図版96	
図V-1-43-114	W77・9×2	Ⅳ	図版96	
図V-1-43-115	Y78・1×11, Y78・4×1　計12	Ⅳ	図版97	
図V-1-43-116	M78・3×1, M78・7×9, M78・8×6　計16	Ⅳ	図版97	
図V-1-43-117	N74・9×3, N74・14×3　計6	Ⅳ	図版98	
図V-1-43-118	N73・20×2, N73・21×2, N74・6×1, N74・34×1 計6	Ⅳ	図版98	
図V-1-43-119	N74・9×1	Ⅳ	図版97	
図V-1-43-120	O77・23×1	Ⅳ	図版98	
図V-1-43-121	Z77・4×6, Z77・5×7　計13	Ⅳ	図版98	
図V-1-43-122	O76・24×3, O76・25×1, O76・26×1, O76・27×2 計7	Ⅳ	図版98	
図V-1-43-123	J74・1×1	Ⅳ	図版98	
図V-1-43-124	O78・16×1	Ⅳ	図版98	
図V-1-43-125	N73・15×1	Ⅳ	図版98	
図V-1-43-126	O76・13×1	Ⅳ	図版98	
図V-1-43-127	O76・2×1, O76・4×1　計2	Ⅳ	図版98	
図V-1-44-128	N77・24×2, N77・31×1　計3	Ⅳ	図版99	
図V-1-44-129	N76・23×3	Ⅳ	図版99	
図V-1-44-130	N73・20×1	Ⅳ	図版99	
図V-1-44-131	O77・12×1, O77・29×1, O77・30×1　計3	Ⅳ	図版99	
図V-1-44-132	P77・17×5	Ⅳ	図版99	
図V-1-44-133	O76・13×2	Ⅳ	図版99	
図V-1-44-134	O77・29×2	Ⅳ	図版99	
図V-1-44-135	N77・24×2, O77・1×1　計3	Ⅳ	図版99	
図V-1-44-136	M77・6×1	Ⅳ	図版99	
図V-1-44-137	O77・12×1, O77・18×1, O78・11×1　計3	Ⅳ	図版99	オオバコのとうの回転文
図V-1-44-138	O76・10×1, O76・22×1　計2	Ⅳ	図版99	
図V-1-44-139	P77・4×1	Ⅳ	図版99	
図V-1-44-140a	N74・26×1	Ⅳ	図版99	
図V-1-44-140b	N74・26×1, N74・34×1　計2	Ⅳ	図版99	
図V-1-44-141	P77・21×6	Ⅳ	図版100	
図V-1-44-142	O76・7×4, O77・14×1　計5	Ⅳ	図版100	
図V-1-44-143	N73・11×1, N73・12×4　計5	Ⅳ	図版99	
図V-1-44-144	M78・3×1, M78・8×1　計2	Ⅳ	図版100	
図V-1-44-145	N78・11×1	Ⅳ	図版100	
図V-1-44-146	M78・7×1	Ⅳ	図版100	
図V-1-44-147	M76・15×1, M76・17×1, M76・20×3　計5	Ⅳ	図版100	
図V-1-45-148	O76・14×3	Ⅳ	図版100	
図V-1-45-149	O77・30×1	Ⅳ	図版100	
図V-1-45-150a	Y80・8×1	Ⅳ	図版100	
図V-1-45-150b	Y79・7×1	Ⅳ	図版100	

表18　包含層出土掲載土器一覧（拓本土器）・ミニチュア・赤彩土器・土製品等

図番号	調査区・遺物番号×点数	層位	図版番号	備　考
図V-1-45-151	A48・13×1,B48・5×5,B48・12×1,C48・4×1,C48・8×2 C48・11×2　C49・5×1　計13	Ⅳ	図版101	ミニチュア土器　A地区
図V-1-45-152	A46・2×2, A46・3×3, A46・4×5, A46・21×1, A46・27×2 計13	Ⅳ	図版101	〃　A地区
図V-1-45-153	B48・12×8, B48・17×1, B48・19×2　計11	Ⅳ	図版101	〃　A地区
図V-1-45-154	O77・19×9	Ⅳ	図版101	〃　B地区
図V-1-45-155	M27・2×1	Ⅳ	図版101	〃　A地区
図V-1-45-156	Y80・12×1	Ⅳ	図版101	赤彩切断壷形土器　B地区
図V-1-45-157	O76・22×1	Ⅳ	図版101	Ⅳ群a類土器有孔底部 B地区
図V-1-45-158	C47・6×1	Ⅳ	口絵4	赤彩土器　A地区
図V-1-45-159	Z78・4×1	Ⅳ	口絵4	〃　B地区
図V-1-45-160	X77・1×3	Ⅳ	口絵4	〃　B地区
図V-1-45-161	Z79・8×1	Ⅳ	口絵4	〃　B地区
図V-1-45-162	Z79・8×1	Ⅳ	口絵4	〃　B地区
図V-1-45-163	W79・4×1	Ⅳ	口絵4	〃　B地区
図V-1-45-164	O77・21×1	Ⅳ	口絵4	〃　B地区
図V-1-45-165	C47・3×1	Ⅳ	口絵4	〃　A地区
図V-1-45-166	N75・22×2, P78・5×2, P78・23×1　計5	Ⅳ	口絵4	〃　B地区
図V-1-45-167	0Z48・19×1, 0Z49・9×1, 0Z49・22×1　計3	Ⅳ	図版101	鐸形土製品　A地区
図V-1-45-168	0Z49・21×1, 0Z49・23×1　計2	Ⅳ	口絵4	〃　A地区
図V-1-45-169	P78・20×1	Ⅳ	口絵4	〃　B地区
図V-1-45-170	M75・3×1	Ⅳ	口絵4	キノコ形の土製品　B地区
図V-1-45-171	0Z48・12×1	Ⅳ	口絵4	円盤状土製品　A地区
図V-1-45-172	0Z47・20×1	Ⅳ	口絵4	〃　A地区
図V-1-45-173	0Z47・9×1	Ⅳ	口絵4	〃　A地区
図V-1-45-174	M75・12×1	Ⅳ	口絵4	〃　B地区
図V-1-45-175	M76・17×1	Ⅳ	口絵4	〃　B地区

表19　包含層出土掲載石器等一覧

遺物名	掲載番号	発掘区		層位	遺物番号	材質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	アスファルト付着	被熱	光沢	備考(細分類)
石鏃	1	M	77	Ⅳ	7	メノウ	2.08	1.29	0.37	0.64				有茎平基
	2	I	38	Ⅳ	1	黒曜石	2.86	1.44	0.39	0.84				有茎平基
	3	L	74	Ⅳ	8	頁岩	2.40	1.40	0.30	0.72	あり			有茎平基
	4	A	45	Ⅳ	1	頁岩	(2.53)	1.21	0.41	1.05	あり			有茎平基
	5	K	76	Ⅳ	3	頁岩	3.83	1.40	0.42	1.6	あり			有茎平基
	6	O	77	Ⅳ	23	頁岩	2.87	1.24	0.46	1.27	あり			有茎平基
	7	Y	80	Ⅳ	1	頁岩	3.64	1.40	0.62	1.99	あり			有茎平基
	8	P	77	Ⅳ	14	頁岩	3.38	1.44	0.43	1.8	あり			有茎平基
	9	Z	31	Ⅳ	1	頁岩	3.73	1.28	0.42	1.35				有茎平基
	10	L	71	Ⅳ	1	頁岩	4.70	1.27	0.51	3.16				有茎平基
	11	Y	78	Ⅳ	1	頁岩	(4.87)	1.20	0.40	2.07	あり			有茎平基
	12	E	52	Ⅳ	5	頁岩	3.19	1.71	0.31	1.12				有茎凹基
	13	J	52	Ⅳ	3	黒曜石	(3.23)	(1.67)	0.43	1.64				有茎凹基
	14	a	48		17	頁岩	4.18	1.49	0.43	2.13				有茎凸基
	15	N	78	Ⅳ	9	頁岩	2.59	0.95	0.48	0.94	あり			有茎凸基
	16	T	28	Ⅳ	8	頁岩	2.93	1.14	0.35	1				尖基
	17	L	51	Ⅳ	2	頁岩	3.92	1.30	0.47	2.23				尖基
	18	0Z	48	Ⅳ	40	頁岩	3.33	1.90	0.74	3.77				尖基幅広
	19	W	32	Ⅳ	1	黒曜石	2.36	0.93	0.22	0.42				無茎平基三角形
	20	N	56	Ⅳ	1	黒曜石	2.95	(1.85)	0.27	1.42				無茎平基三角形
	21	I	27	Ⅴ	1	黒曜石	4.55	1.36	0.37	1.92				無茎平基柳葉形
	22	J	27	Ⅳ	4	黒曜石	3.30	1.52	0.55	1.99				無茎凹基
石槍	23	N	76	Ⅳ	25	メノウ	(6.10)	3.11	1.48	23.53				未成品
石錐	24	P	78	Ⅳ	14	頁岩	3.90	2.24	0.79	2.81				剥片の一端
	25	O	77	Ⅳ	13	頁岩	(3.80)	1.43	0.95	2.58				棒状
	26	0Z	48	Ⅳ	30	頁岩	(3.31)	1.17	0.84	3.35				棒状
つまみ付ナイフ	27	Z	78	Ⅳ	2	頁岩	(6.02)	2.38	0.39	8.08				縦型
	28	H	36	Ⅳ	2	頁岩	10.55	3.05	1.30	40.16			あり	縦型
	29	M	27	Ⅳ	6	頁岩	8.10	2.98	1.04	25.73		被熱		縦型
	30	W	39	Ⅳ	2	頁岩	5.22	3.93	0.58	11.6				縦型
	31	Z	79	Ⅳ	1	頁岩	2.72	3.52	0.71	3.27				横型
ナイフ	32	B	41	Ⅳ	1	褐色珪化岩	9.79	4.48	0.86	40.12				
	33	N	77	Ⅳ	11	メノウ	5.36	2.35	1.31	12.29				未成品
篦状石器	34	N	76	Ⅳ	8	珪化岩	7.11	4.47	1.78	51.34				撥型
	35	A	47	Ⅳ	32	頁岩	(3.69)	3.26	0.65	8.19			あり	凸型
	36	A	47	Ⅳ	26	黒曜石	4.60	1.98	0.80	5.79				凸型
スクレイパー	37	F	76	Ⅳ	1	頁岩	7.37	3.40	0.97	31.79			あり	刃部外湾
	38	H	47	Ⅳ	1	頁岩	8.54	4.73	1.64	57.39			あり	刃部外湾
	39	B	39	Ⅳ	2	頁岩	6.79	7.12	0.90	41.74			あり	刃部外湾
	40	G	77	Ⅳ	1	頁岩	7.77	4.89	1.53	40.51			あり	刃部外湾
	41	K	71	Ⅳ	1	頁岩	7.34	4.12	1.36	41.59	あり		あり	刃部外湾
	42	L	27	Ⅳ	2	頁岩	6.29	4.49	0.97	26.12				刃部外湾
	43	N	74	Ⅳ	2	頁岩	5.14	4.67	1.57	34.75			あり	刃部外湾
	44	E	72	Ⅳ	1	頁岩	7.21	4.46	0.99	30.41			あり	刃部外湾
	45	G	43	Ⅳ	1	デイサイト	7.72	6.35	1.13	45.8				刃部外湾
	46	S	44	Ⅳ	2	メノウ	5.19	6.00	1.63	44.28			あり	刃部外湾
	47	K	74	Ⅳ	6	頁岩	9.93	4.66	1.24	60.29			あり	刃部直線
	48	J	76	Ⅳ	2	頁岩	8.18	5.61	0.93	38.06			あり	刃部直線
	49	G	41	Ⅳ	4	頁岩	8.75	6.06	1.34	38.78			あり	刃部直線
	50	K	79	Ⅳ	1	頁岩	6.92	7.62	0.95	41.43			あり	刃部直線
	51	M	76	Ⅳ	9	頁岩	10.03	3.35	1.34	40.26			あり	刃部直線
	52	M	75	Ⅳ	1	頁岩	7.92	4.46	1.70	51.51			あり	刃部直線
	53	D	35	Ⅳ	1	頁岩	(5.50)	5.00	1.11	19.58			あり	刃部直線
	54	M	74	Ⅳ	5	頁岩	6.16	3.11	1.04	11.74			あり	刃部直線
	55	S	29	Ⅳ	1	頁岩	6.30	3.80	0.74	21.63				刃部直線
	56	E	75	Ⅳ	1	頁岩	6.01	5.27	1.28	34.05			あり	刃部直線
	57	X	31	Ⅳ	1	デイサイト	7.43	6.19	1.06	45.44				刃部直線
	58	J	78	Ⅳ	2	メノウ	5.84	7.23	1.66	64.06			あり	刃部直線
	59	K	31	Ⅳ	2	頁岩	6.26	5.24	1.51	37.17				刃部内湾
	60	L	73	Ⅳ	1	頁岩	6.05	5.94	0.76	19.64			あり	刃部内湾
	61	C	75	Ⅳ	3	頁岩	(4.40)	3.36	0.70	8.27			あり	刃部内湾
	62	R	28	Ⅳ	2	頁岩	2.86	2.67	0.95	7.48				刃部急斜度
	63	0Z	44	Ⅳ	10	メノウ質頁岩	6.28	4.23	1.35	36.7				刃部急斜度
	64	N	29	Ⅳ	7	頁岩	4.72	4.20	1.58	18.57				抉入
	65	M	76	Ⅳ	3	頁岩	5.92	7.40	2.01	82.15				抉入
	66	K	27	Ⅳ	3	頁岩	(4.07)	4.81	1.33	28.01			あり	破片
両面調整石器	67	N	74	Ⅳ	39	黒曜石	(6.36)	4.44	2.15	50.08				
	68	N	77	Ⅳ	22	メノウ	6.94	2.48	1.63	28.22				細長
	69	O	76	Ⅳ	17	頁岩	9.81	2.48	2.34	41.06				細長
	70	J	73	Ⅳ	1	デイサイト	9.13	4.88	1.50	69.2				幅広
楔形石器	71	B	47	Ⅳ	7-1	頁岩	4.81	3.36	1.09	24.4				
	72	B	49	Ⅳ	12	メノウ	2.40	1.73	0.70	3.84				
Rフレイク	73	F	39	Ⅳ	1	頁岩	4.06	2.44	0.95	8.22				未成品
	74	L	27	Ⅳ	5	頁岩	4.47	2.88	0.76	8.97				未成品
	75	K	26	Ⅳ	2	頁岩	3.13	2.14	1.04	7.54				未成品
	76	U	36	Ⅳ	1	頁岩	1.97	4.70	0.54	5.14				未成品
	77	J	78	Ⅳ	1	珪化岩	8.66	4.51	1.59	65.4			あり	
	78	K	74	Ⅳ	5	頁岩	8.15	3.45	1.29	29.2			あり	
	79	T	29	Ⅳ	3	頁岩	9.69	6.30	1.84	83.08			あり	

遺物名	掲載番号	発掘区		層位	遺物番号	材質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	アスファルト付着	被熱	光沢	備考(細分類)
Rフレイク	80	M	77	Ⅳ	9	メノウ	5.65	6.72	1.31	39.78			あり	
	81	0Y	44	Ⅳ	10	頁岩	(6.68)	5.45	2.64	64.49				
	82	N	73	Ⅳ	18-1	頁岩	7.78	4.34	1.32	51.1			あり	
	83	M	29	Ⅳ	1	メノウ	6.66	3.25	1.19	19.42			あり	
	84	Z	79	Ⅳ	6	デイサイト	13.38	14.14	1.52	388.8				
Uフレイク	85	0Z	50	Ⅳ	14	頁岩	8.35	3.53	0.61	21.24			あり	
	86	F	49	Ⅳ	4	頁岩	8.75	5.06	0.94	30.1			あり	
	87	S	58	Ⅳ	2	デイサイト	8.83	5.69	1.47	81.22				
	88	N	74	Ⅳ	19	メノウ	4.27	4.66	1.11	18.28				
石核	89	0Z	48	Ⅳ	12	黒曜石	4.07	2.95	1.13	17.4				両極
	90	A	50	Ⅳ	9	黒曜石	4.89	3.07	1.69	39.21				両極
	91	B	47	Ⅳ	1	頁岩	4.97	5.10	2.80	81.99				サイコロ状
	92	B	48	Ⅳ	30	頁岩	5.86	5.10	3.48	76.37				盤状
	93	B	46	Ⅳ	3	頁岩	7.57	6.52	3.54	114.3				盤状
	94	Z	48	Ⅳ	1	頁岩	7.32	9.11	3.26	207.4				その他
異形石器	95	Q	29	Ⅳ	6	頁岩	1.26	(3.47)	0.41	1.52				
三角石製品	96	E	52	Ⅳ	4	頁岩	3.16	2.99	0.98	3.28				
石斧	97	I	28	Ⅳ	1	Gr-Sc	105	43	28	203.00				
	98	Q	34	Ⅳ	1	G-Tu	105	44	22	153.80				
	99	P	77	Ⅳ	18	Gr-Sc	82	41	15	76.85				
	100	C	45	Ⅳ	3	Sc	101	38	23	162.30				
	101	D	35	Ⅳ	5	Gl-Sc	93	60	23	228.90				
石のみ	102	I	28	Ⅳ	8	Sc	74	22	9	25.45				
たたき石	103	L	28	Ⅳ	16	Hb-An	169	64	62	920.00				
	104	X	55	Ⅳ	1	An	106	83	46	423.00				
	105	H	78	Ⅳ	1	Ap-Ba	104	81	63	720.00				
	106	M	73	Ⅳ	10	An	90	64	41	363.00				
	107	D	45	Ⅳ	1	Hb-An	165	66	48	770.00				
	108	Y	48	Ⅳ	1	Ap-Ba	113	82	64	900.00				
	109	M	78	Ⅳ	2	An	140	51	31	387.20				
	110	0Y	44	Ⅳ	23	An	103	85	27	309.20				
	111	0Z	42	Ⅳ	3	An	102	81	23	284.40				
	112	0Z	47	Ⅳ	17	An	95	71	34	330.20				
	113	A	45	Ⅳ	10	Px-An	105	48	27	176.20				
	114	B	41	Ⅳ	9	Hb-An	123	65	56	610.00				
	115	I	39	Ⅳ	1	An	173	84	48	730.00				
	116	T	28	Ⅳ	9	Hb-An	137	87	40	481.80				
	117	A	40	Ⅳ	2	An	140	85	34	445.40				
	118	N	76	Ⅳ	26	Ap-Ba	65	64	52	312.80				
	119	L	28	Ⅳ	12	Ap-Ba	85	89	43	440.60				
	120	D	38	Ⅳ	2	Ap-Ba	85	92	42	453.00				
	121	0Z	46	Ⅳ	11	An	142	114	81	167.00				
	122	N	74	Ⅳ	29	Gra	69	119	31	385.40				
すり石	123	U	38	Ⅳ	2	An	77	113	40	431.00				
扁平打製石器	124	M	30	Ⅳ	5	An	88	158	31	595.60				
	125	N	74	Ⅳ	32	SS	86	155	25	469.00				
	126	L	77	Ⅳ	2	Hb-An	99	160	42	885.00				
	127	U	38	Ⅳ	3	An	100	135	39	551.20				
	128	Y	62	Ⅳ	2	An	90	166	23	525.60				
		Y	61	Ⅳ	4									
	129	N	79	Ⅳ	2	An	110	182	40	1050.00				
	130	C	35	Ⅳ	3	Hb-An	103	189	35	1040.00				
	131	0Z	44	Ⅳ上位		An	98	108	33	500.80				土器集中7No.2
	132	L	28	Ⅳ	17	Gra	81	165	28	680.00				
	133	0Z	45	Ⅳ	3	Px-An	121	182	46	1070.00				
	134	Y	50	Ⅳ	2	An	113	157	38	850.00				
北海道式石冠	135	M	27	Ⅳ	16	Hb-An	96	104	65	710.00				
	136	D	37	Ⅳ	9	Hb-An	122	138	63	1140.00				
	137	H	43	Ⅳ	1	An	75	112	73	860.00				
	138	G	46	Ⅳ	3	An	84	130	73	1000.00				
	139	N	76	Ⅳ	28	Px-An	96	151	77	1620.00				
	140	N	74	Ⅳ	20	An	47	75	51	212.40				
砥石	141	A	48	Ⅳ	21	Pu	101	89	33	90.40				
	142	0Z	48	Ⅳ中位	44	Tu	227	168	15	318.80				
加工痕のある礫	143	Y	79	Ⅳ	3	An	114	92	47	620.00				
石皿	144	C	50	Ⅳ	20	Hb-An	301	178	62	4090.00				
	145	0Z	49	Ⅳ	55	Tu	225	123	38	1390.00				
		B	48	Ⅳ	62									
台石	146	0Z	49	Ⅳ	45	Hb-An	275	251	120	16.5kg				
	147	L	28	Ⅳ	18	Px-An	346	244	82	10.5kg				
	148	0Z	49	Ⅳ	53	Px-An	216	144	47	1450.00				
虫喰い石	149	B	45	Ⅳ	8	An	40	46	17	36.82				
有孔石製品	150	H	42	Ⅳ	3	Pu	64	50	34	41.58				
	151	D	73	Ⅳ	1	Pu	68	48	37	53.58				

報 告 書 抄 録

ふ り が な	もりまち　いしくらいちいせき（に）
書　　名	森町　石倉１遺跡（2）
副 書 名 巻　　次	北海道縦貫自動車道（七飯～長万部）埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第266集
編 著 者 名	遠藤香澄　中山昭大　福井淳一　立田　理　大泰司　統
編 集 機 関	財団法人　北海道埋蔵文化財センター
所　在　地	〒069－0832　江別市西野幌685番地１
発 行 年 月 日	2010年３月26日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
いしくらいちいせき 石倉１遺跡	ほっかいどうかやべぐん 北海道茅部郡 もりまちあざいしくらちょう 森町字石倉町 ばんち 397番地２ほか	01345	B-14-36	43° 0′ 6″	142° 25′ 3″	20080507 ～ 20081024	15,543㎡	道路建設に伴う事前調査

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
石倉１遺跡	遺　物 包含地	縄文時代中期 縄文時代後期	住居跡　1 土坑　4 住居跡　5 土坑　40 集石　5 剥片集中　5 焼土　1 水場遺構　1 小ピット　87	縄文土器　41,990点 （円筒上層b式、サイベ沢Ⅶ式、天祐寺式、涌元式、トリサキ式、大津式、白坂３式、ウサクマイC式、手稲式、大洞C_1式、大洞C_2式） 続縄文土器（恵山式）　599点 石器等　5,876点 石鏃、石槍、つまみ付きナイフ、スクレイパー、扁平打製石器、たたき石、すり石、台石・石皿、土・石製品	

要　約

遺跡は、森町の市街地北西約６㎞、濁川左岸の標高30～50mの斜面と、これに連続する台地に立地する。現海岸線から700mほどの距離である。縄文時代後期前葉を中心とする遺構と遺物が検出された。後期前葉の住居跡４軒は石囲い炉あるいは配石を伴う。土坑は中期後半期のものが４基ほどあるほかは、後期前葉のものである。小型フラスコ状土坑（中期前半期）は墓の可能性がある。また壁に柱穴のある大型フラスコ状土坑は貯蔵穴の可能性がある。水場遺構は中期後半期と後期前葉に利用されたもので、小さな沢地形の底面に礫石器や土器が廃棄されていた。

遺物は９割が後期前葉のものである。特徴的遺物には赤彩土器の破片、赤彩切断壷形土器、鐸形土製品がある。石器では、基部にアスファルトが付着している石鏃の比率が高いのが注目される。

㈶北海道埋蔵文化財センター調査報告書　第266集

森町（もりまち）　石倉（いしくら）１遺跡（２）

―北海道縦貫自動車道（七飯～長万部）埋蔵文化財発掘調査報告書―

平成22年３月26日発行

編集・発行　財団法人　北海道埋蔵文化財センター
〒069-0832　江別市西野幌685番地－１
TEL（011）386-3231　FAX（011）386-3238
[E-mail] mail@domaibun.or.jp
[URL] http://www.domaibun.or.jp

印　　刷　札幌大同印刷株式会社
〒004-0003　札幌市厚別区厚別東３条２丁目１－１
TEL（011）897-9711㈹　FAX（011）897-9715